# 鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書　10

平成５年度発掘調査報告
（第３分冊）

平成６年３月

鎌倉市教育委員会

# 総 目 次

（第１分冊）


序文……I

例言……II

平成５年度の概観……III

１．公方屋敷跡……1

第一章　調査地点の位置と歴史的環境……6

第二章　調査の概要……9

第三章　検出された遺構と遺物……14

第１節　遺構……14

第２節　遺物……32

第四章　まとめ……77

〈附篇〉　公方屋敷の花粉化石……78

２．永福寺跡……103

第１章　遺跡の位置と歴史的環境……109

第２章　調査の経過と概要……110

第１節　調査の経過……110

第２節　層序……111

第３章　検出した遺構と遺物……112

第１節　１面の遺構と遺物……112

第２節　２面の遺構と遺物……117

第３節　３面の遺構と遺物……119

第４章　まとめ……122

附編１．井戸内堆積物の花粉化石及び樹種同定……143

附編２．鎌倉永福寺跡（二階堂地区）出土の動物遺体

―井戸址出土の動物遺体について―……153

3．大倉幕府周辺遺跡群 ……199
第一章　調査地点と周辺の遺跡 ……203
第二章　調査の経過と概要 ……204
第三章　本調査での成果 ……210
第１節　二面検出の遺構と遺物 ……210
第２節　三面検出の遺構と遺物 ……224
第四章　調査のまとめ ……230

**（第２分冊）**

4．北条政村屋敷跡……1
第一章　調査地の位置と環境……5
第二章　調査の経過と堆積土層……8
I　調査の経過……8
II　堆積土層……9
III　試掘調査……10
第三章　遺構と遺物……12
I　１面の遺構……12
II　２面の遺構……17
III　第３層出土遺物……26
IV　第４層の遺構……28
第四章　まとめと考察……34
I　遺跡の年代と性格……34
II　道路について……34
III　問題点……36
（附論）　市内遺跡発掘調査事業に係る花粉分析業務……37
5．長谷小路周辺遺跡……59
第一章　調査地点の概観……63
第二章　調査の概要……69
第三章　検出遺構と出土遺物……71

第1節　中世……71
第2節　中世以前……87
第四章　まとめ……90
6．長谷観音堂周辺遺跡……107
第一章　遺跡の位置と歴史的環境……111
第二章　調査の経過と堆積土層……114
第三章　検出された遺構と出土した遺物……117
第1節　中世の遺構と出土遺物……117
第2節　中世以前の遺構と出土遺物……130
第3節　本地点における火山灰質堆積物について……137
第四章　まとめと考察……141
7．妙本寺遺跡……163
第1章　遺跡の位置と歴史的環境……167
第2章　調査の経過と検出した遺構……167
第3章　出土遺物……170
第4章　まとめ……173
8．天神山下城……179
第1章　遺跡の立地及び周辺の遺跡……183
第2章　トレンチ調査……184
・まとめ……184
9．若宮大路周辺遺跡群……189
第一章　遺跡の位置と歴史的環境……193
第二章　調査の概要……194
第1節　調査区の設定……194
第2節　堆積土層と生活面……194
第三章　検出遺構……196
第1節　第一面検出遺構……196
第2節　第二面検出遺構……198
第3節　第三・四面検出遺構……200

第四章　出土遺物 ……201
第五章　調査のまとめ ……211
10. 笹目遺跡 ……223
第1章　遺跡の位置と歴史的環境 ……227
第2章　調査の経過と検出した遺構 ……228
第3章　出土遺物 ……230

**（第3分冊）**

11. 若宮大路周辺遺跡群……1
第一章　遺跡の位置と歴史的環境……11
第二章　調査の経緯……14
第三章　検出した遺構・遺物……20
第四章　まとめ ……221

# 若宮大路周辺遺跡群（No.242）

小町一丁目325番イ外地点

# 例　言

1．　本報は、鎌倉市小町一丁目325番イ外地点における住居併用共同住宅建設に伴う発掘調査のうち、国庫補助事業にかかる分についての報告である。但し、遺跡の重要性に鑑み、分別しがたい遺構については、民間調査分（若宮大路周辺遺跡群発掘調査団：田代郁夫団長）をも含めて掲載した。

2．　発掘調査は1993年11月２日から1994年３月31日にかけて、鎌倉市教育委員会が実施した。

3．　発掘調査体制は以下の通りである。

調査担当者　田代郁夫・原　広志

調　査　員　継　実・佐藤仁彦・小林重子・山田健二・熊谷洋一・浜野洋一・佐々木靖・須佐直子・橋場君男・梅木信之・遠藤雅一・松山敬一朗・新山久美子・土屋浩美・丸井宏子・早野慈子・田代幸子・小林信樹・岩崎卓治・本田　礼・嘉代和夫

調査協力者　石渡辰男・狩野徳恵知・高橋健一郎・箕田孝善・御園生正民・増田保・渡辺王夫・橋本勝正・青木綾子・穐山千恵子・荒井ソノ・池谷ツル・石井ちず子・蒲谷由利子・川名由子・河盛ミサエ・成田サキ・成田初枝・安田ヒデ

協力機関　㈱鎌倉市シルバー人材センター・㈱不動建設

4．　本報の執筆は、第三章C、Dの出土遺物及びE、Fを小林重子が、その他を佐藤が行い、これを佐藤が編集した。また、遺物実測・トレース・図版作成には、原・佐藤・小林・須佐・橋場があたり、及川加代子・太田美知子・兼行佐枝・根本志保・汐見一夫・水上浩一の協力を得た。

5．　遺物実測図の内、かわらけの法量は個別直下に記した。略号は、A…口径、B…底径、C…器高である。

6．　本報掲載写真は、遺構を各調査員が、遺物を佐藤が撮影し、空撮は㈱サンシャイン工業の気球撮影による。

7．　発掘調査中・本報作成段階において次の方々から多大なる御教示・御指導を賜った。記して深謝の意を表する（敬称略）。

飯村　均・伊藤正義・鈴木　亘・関口欣也・玉井哲雄・堀内明博・松尾剛次・水野正好・吉岡康暢・大三輪龍彦・大河内　勉・河野眞知郎・菊川英政・菊川　泉・木村美代治・斉木秀雄・汐見一夫・清水業想・宗臺秀明・宗臺富貴子・瀬田哲夫・田代郁夫・手塚直樹・福田　誠・馬淵和雄・宮田　真・松尾宣方・玉林美男・永井正憲・小林康幸

8．　本発掘調査における出土遺物・図面等の資料は、鎌倉市教育委員会が保管している。

# 目　次

例言……2
目次……3

# 本文目次

第一章　遺跡の位置と歴史的環境……11
第二章　調査の経緯……14
第三章　検出した遺構・遺物……20
A）方形竪穴建築址……20
B）掘立柱建物址……114
C）道路……121
D）溝……125
E）井戸……157
F）土壙……176
G）特殊遺構……200
H）柱穴……210
I）地山落ち込み……210
J）遺構外出土遺物……217
第四章　まとめ……221

# 挿 図 目 次


図1　遺跡周辺図……12
図2　グリッド配置図……14
図3　調査区位置図……折込……15・16
図4　遺構全測図……折込……17・18
図5　建物1a・1b……21
図6　建物1a出土遺物……23
図7　建物1b出土遺物(1)……26
図8　建物1b出土遺物(2)……27
図9　建物1c……29
図10　建物1c出土遺物……31
図11　建物1d……34
図12　建物1d出土遺物(1)……36
図13　建物1d出土遺物(2)……37
図14　建物1d出土遺物(3)……38
図15　建物2・5……40
図16　建物2出土遺物……42
図17　建物5出土遺物(1)……45
図18　建物5出土遺物(2)……46
図19　建物8a・8b……48
図20　建物8a出土遺物……50
図21　建物8b出土遺物……52
図22　建物9……54
図23　建物9出土遺物(1)……56
図24　建物9出土遺物(2)……57
図25　建物9出土遺物(3)……59
図26　建物9出土遺物(4)……61
図27　建物9出土遺物(5)……62
図28　建物9出土遺物(6)……63
図29　建物10主屋部・木樋検出状況……66
図30　建物10主屋部及び構造模式図……68
図31　建物10部材取りはずし状況……69
図32　G3セクションベルト土層図……70
図33　建物10木樋……71
図34　建物10木樋掘り方……72
図35　建物10出土遺物(1)……74
図36　建物10出土遺物(2)……75
図37　建物10出土遺物(3)……77
図38　建物10出土遺物(4)……78
図39　建物11……80
図40　建物11出土遺物……82
図41　建物12……84
図42　建物12出土遺物……85
図43　建物13・14……86
図44　建物13出土遺物……87
図45　建物17……88
図46　建物17出土遺物……88
図47　建物18・19……89
図48　建物18出土遺物……89
図49　建物19出土遺物……90
図50　建物20……91
図51　建物20出土遺物……92
図52　建物21……93
図53　建物21出土遺物(1)……95
図54　建物21出土遺物(2)……96
図55　建物23・24・28……97
図56　建物23・24出土遺物……98
図57　建物25a……99
図58　建物25a出土遺物……101
図59　建物25b……103
図60　建物25b出土遺物……104
図61　建物27出土遺物……106
図62　建物28出土遺物……107
図63　建物29・30・31……108
図64　建物29・30出土遺物(1)……109

図65　建物29・30出土遺物(2) ……110
図66　建物32 ……111
図67　建物32出土遺物 ……112
図68　堀立柱建物1 ……114
図69　道路1上層……折込……115・116
図70　道路1下層……折込……117・118
図71　柱穴列……折込……119・120
図72　道路1上層・同側溝1出土遺物 …122
図73　道路1側溝2・同下層出土遺物 …124
図74　溝3 ……125
図75　溝3出土遺物 ……126
図76　切石列1 ……127
図77　切石列1出土遺物 ……128
図78　切石2・土丹列1、2・溝5
……折込……129・130
図79　切石2出土遺物(1) ……131
図80　切石列2(2)・土丹列1、2出土遺物
……132
図81　溝5出土遺物(1) ……135
図82　溝5出土遺物(2) ……136
図83　溝6・7……折込……139・140
図84　溝6出土遺物 ……141
図85　溝7出土遺物(1) ……142
図86　溝7出土遺物(2) ……144
図87　溝7出土遺物(3) ……145
図88　溝8・9・10……折込……147・148
図89　溝8・9・10出土遺物(1) ……150
図90　溝8・9・10出土遺物(2) ……151
図91　溝8・9・10出土遺物(3) ……152
図92　井戸1・3・6……折込……155・156
図93　井戸1出土遺物 ……157
図94　井戸2 ……158
図95　井戸2出土遺物 ……159
図96　井戸3出土遺物 ……161
図97　井戸4 ……162
図98　井戸4出土遺物 ……163
図99　井戸5・9 ……164
図100 井戸5出土遺物 ……165
図101 井戸7 ……166
図102 井戸7出土遺物 ……167
図103 井戸8 ……167
図104 井戸8出土遺物 ……168
図105 井戸9出土遺物 ……169
図106 井戸10 ……170
図107 井戸10出土遺物 ……171
図108 井戸11 ……171
図109 井戸11出土遺物 ……172
図110 井戸状遺構 ……173
図111 井戸状遺構出土遺物 ……174
図112 土壙1・3・4・6・7・9 ……177
図113 土壙10・11・12・13・15 ……178
図114 土壙16・18・20・22・23・24・25・26
……179
図115 土壙29・30 ……180
図116 土壙31・34・35・36 ……181
図117 土壙38・39・40 ……182
図118 土壙41・43・45・46 ……183
図119 土壙47・48・49 ……184
図120 土壙53・56・58・60・61 ……185
図121 土壙62・63 ……186
図122 埋甕土壙・集石土壙 ……187
図123 土壙出土遺物(1) ……188
図124 土壙出土遺物(2) ……190
図125 土壙出土遺物(3) ……192
図126 土壙出土遺物(4) ……194
図127 土壙出土遺物(5) ……196
図128 土壙出土遺物(6) ……197
図129 土壙出土遺物(7) ……198

図130 合わせ口かわらけ出土状況 ……200
図131 出土かわらけ ……200
図132 かわらけ溜まり1 ……200
図133 かわらけ溜まり1出土遺物 ……201
図134 かわらけ溜まり2 ……202
図135 かわらけ溜まり2出土遺物 ……203
図136 かわらけ溜まり3 ……204
図137 かわらけ溜まり3出土遺物(1) ……205
図138 かわらけ溜まり3出土遺物(2) ……206
図139 壷理納遺構 ……207
図140 出土壷とその納入品 ……208
図141 柱穴・地山落ち込み…折込…211・212
図142 G4トレンチ土層図 ……213
図143 G4トレンチ上層出土遺物 ……214
図144 G4トレンチ下層出土遺物 ……215
図145 遺構外出土遺物(1) ……218
図146 遺構外出土遺物(2) ……219
図147 建物配置概念図(1) ……222
—「木組み」方形竪穴—
図148 建物配置概念図(2) ……223
—「石組み」方形竪穴—

# 写 真 図 版 目 次


PL. 1　A．空撮遠景(上が北)　B．空撮近景(右が北)

PL. 2　A．西側調査区全景(左が北)　B．東側調査区全景(左が北)

PL. 3　A．建物1a(東から)　B．建物1a遠景(東から)

C．建物1b(南東から)

PL. 4　A．建物1a東西コーナー(北東から)　B．建物1bかわらけ出土状況(南から)

C．建物1b床面ピット(東から)　D．建物1b石敷状況(西から)

E．建物1b南壁裏込土層断面(東から)

PL. 5　A．建物1c(東から)　B．建物1d(東から)

PL. 6　A．建物1d主屋部西辺上(南から)　B．建物1d覆土土層断面

C．建物1d東壁裏込土層断面　D．建物1d鋤出土状況

E．建物1d樹皮出土状況

PL. 7　A．建物2(西から)　B．建物2覆土土層断面

PL. 8　A．建物8a(東から)　B．建物8a西辺地覆石列(南から)

C．建物8a下土丹集石状況(東から)

PL. 9　A．建物8b(東から)　B．建物8b覆土断面(東から)

PL.10　A．建物9(北から)　B．建物9南壁羽目板正面

C．建物9南西隅土台組み状況　D．建物9東辺土台下の礎板

PL.11　A．建物9東辺土台・根太接続状況　B．同・西辺土台・根太接続状況(北から)

C．同・根太中央部接続状況(西から)　D．同・床面　鋤・錐　出土状況

PL.12　A．建物10(右)・21(東から)　B．建物10(西から)

PL.13　A．建物10覆土土層断面(南から)　B．同・南壁切石倒覆状況

C．同・北東隅切石乱積状況(北西から)

PL.14　A．建物10北壁正面(南から)　B．同・北辺部材検出状況(東から)

C．同・部材部分(南東から)　D．同・東壁正面部分(西から)

PL.15　A．建物10南西隅部分(北東から)　B．同・西辺土台と根太(南から)

C．同・南壁部分(南から)　D．同・南東隅土台組み状況(南から)

PL.16　A．建物10北西隅掘り方(北東から)　B．同・南壁裏込土層断面(東から)

C．同・敷石面検出状況(西から)　D．同・東辺地覆石(南から)

PL.17　A．建物10中央礎石(東から)　B．同・張り出し部(南から)

C．同・土台上かわらけ出土状況(南から)　D．同・覆土下層遺物出土状況

PL.18　A．G－3セクション土層断面(北から)　B．建物10敷石断ち割り状況(西から)

C．建物10敷石下土層断面　D．建物29・30

E．建物30

PL.19　A．建物10と木樋(空撮)　B．建物10と木樋(東から)

PL.20　A．建物10木樋(東から)　B．建物10東壁付近(西から)

C．同・木樋出口部分(東から)　D．同・木樋取り付き部(西から)

PL.21　A．建物11(西から)　B．同・南壁中央部分(北東から)

C．同・南辺土台と礎石(北から)　D．同・南西隅土台と礎石(東から)

PL.22　A．建物12(南から)　B．同・羽目板検出状況(東から)

C．建物13・14(西から)

PL.23　A．建物17(南から)　B．建物18(東から)

C．建物18覆土堆積状況(北から)

PL.24　A．建物20・21(西から)　B．建物20北壁切石倒覆状況(西から)

C．建物20東壁正面(西から)

PL.25　A．建物21(西から)　B．同・中央礎石

PL.26　A．建物25a(西から)　B．建物25a(南から)

PL.27　A．建物25a覆土土層断面(東から)　B．同・部分(東から)

C．同・南壁(北西から)　D．同・北壁(東西から)

PL.28　A．建物25a根太(西から)　B．同・東壁部分(西から)

C．同・大引・根太接続部分　D．同・床面刀子柄出土状況

PL.29　A．建物25b・28・32(東から)　B．同・冠水状況(東から)

PL.30　A．建物25b竹樋(西から)　B．同・入水口(西から)

C．建物25b竹樋(北から)

PL.31　A．道路上層(東から)　B．道路下層(西から)

C．道路横断土層

PL.32　A．東側調査区北壁土層　B．東側調査区北壁土層　全景

C．道路北端部分(東から)

PL.33　A．切石列1(東から)　B．切石列2土丹列1・2(西から)

C．切石列1(南から)

PL.34　A．溝5東端(東から)　B．溝5側板部分(北から)

C．溝7(北から)

PL.35　A．溝7部分(東から)　B．溝7部分(北から)

C．溝7覆土断面(南から)

PL.36　A．溝9(南から)　B．溝9(北から)

C．溝8部材(西から)

PL.37　A．溝10(北から)　B．同・部分(東から)

C．同・北端部分(東から)　D．溝８～10(南から)
PL.38　A．井戸１(西から)　B．同・土層断面(東から)
C．井戸２・３、土壙29(西から)
PL.39　A．井戸４・９・５(西から)　B．井戸７(西から)
C．井戸10(南から)
PL.40　A．井戸11(北から)　B．同・部分(西から)
C．同・部分(西から)
PL.41　A．土壙３(南から)　B．土壙29土層断面
C．土壙53(左)・58(西から)　D．埋甕土壙
PL.42　A．かわらけ溜り１(北から)　B．かわらけ溜り２(北から)
C．かわらけ溜り３(東から)
PL.43　A．合わせ口かわらけ　B．壺埋納遺構
C．壺埋納遺構
PL.44　A．G－４トレンチ土層堆積(南から)　B．道路上層差銭出土状況
C．井戸７将棋駒出土状況　D．井戸10曲物出土状況
PL.45　A．建物２硯出土状況　B．建物９鞴出土状況
C．建物25ｂ漆製品出土状況　D．建物25ｂ漆器出土状況
E．溝９漆器出土状況
PL.46　建物１ａ・１ｂ出土遺物
PL.47　建物１ｃ・１ｄ出土遺物
PL.48　建物２・５出土遺物
PL.49　建物８ａ・８ｂ出土遺物
PL.50　建物９出土遺物
PL.51　建物10覆土・石敷面上・土台直上出土遺物
PL.52　建物10木樋下・建物11出土遺物
PL.53　建物12・17・18・19出土遺物
PL.54　建物20出土壁土・建物21出土遺物
PL.55　建物23・24・25ａ出土遺物
PL.56　建物25ｂ・27出土遺物
PL.57　建物29・29～30・28・32出土遺物
PL.58　道路１上層、道路１下層１・２、同側溝出土遺物
PL.59　切石列１・２、土丹列１・２出土遺物
PL.60　溝３・５・６出土遺物
PL.61　溝７上層・下層出土遺物

PL.62　溝9・10・8～10出土遺物
PL.63　井戸1・2・3出土遺物
PL.64　井戸4・5・7・9出土遺物
PL.65　井戸8・10　井戸状遺構出土遺物
PL.66　井戸11出土遺物
PL.67　土壙1・61　埋甕土壙出土遺物
PL.68　かわらけ溜り1・2出土遺物
PL.69　かわらけ溜り3出土遺物
PL.70　壷埋納遺構、G－4トレンチ下層、合わせロかわらけ、遺構外出土遺物

# 第一章　遺跡の位置と歴史的環境

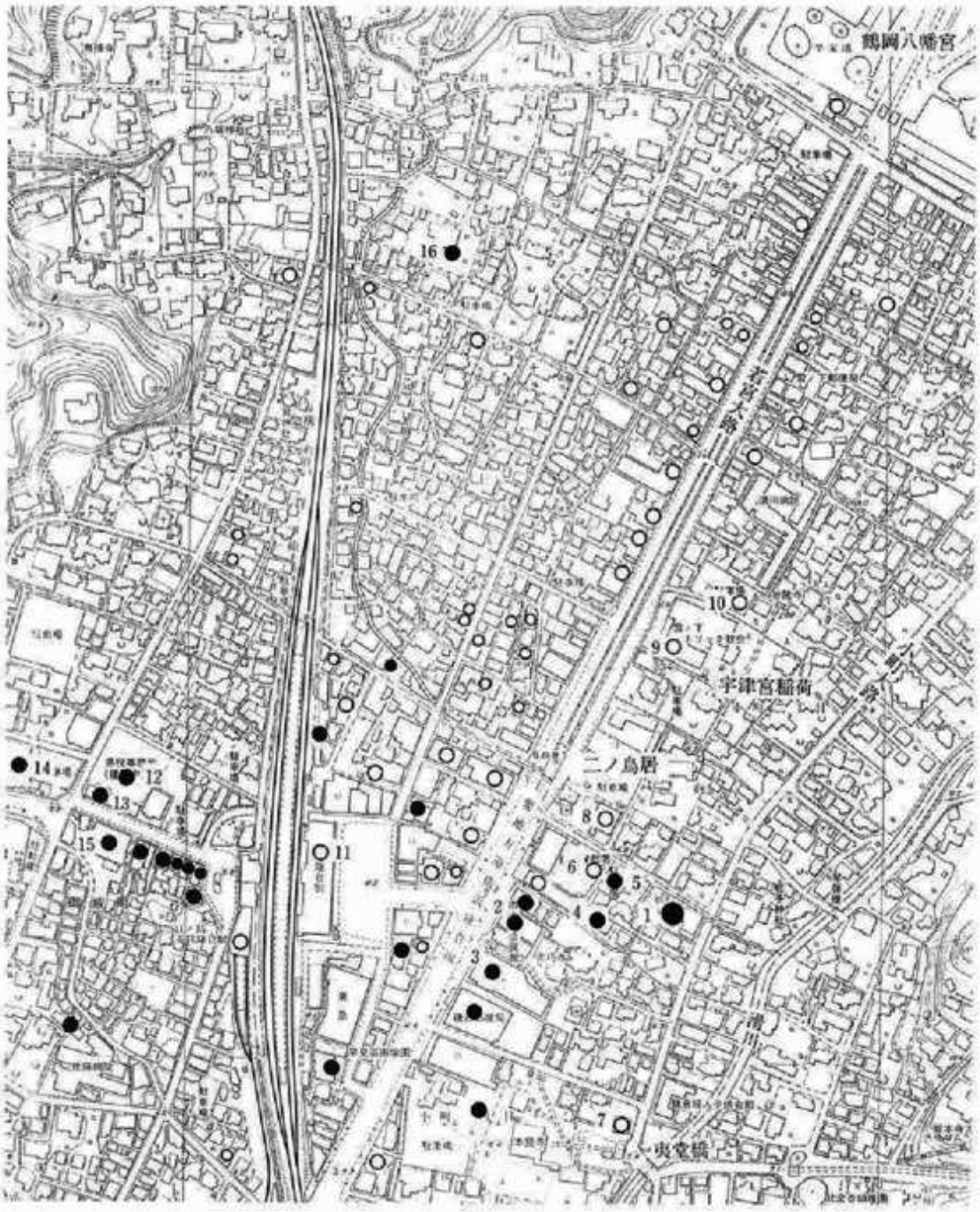
若宮大路周辺遺跡群とは、若宮大路を中軸として東は滑川、西は今小路、北は鶴岡八幡宮社頭、南は国道134号線（大町大路）に囲まれた広範な遺跡の総称であって、これまでにも多くの発掘調査が行われているが、その性格は一様でない。その中にあって、本調査地点は鎌倉駅の東方約250m、若宮大路二ノ鳥居の南で鎌倉警察署脇の道を東に入り、小町大路に突き当たるT字路の南西角に位置している。地番は鎌倉市小町一丁目325番イ外に当たる。現地表面の海抜は約7.8mであり、若宮大路付近（同6.5m前後）から東に向かって高くなっている。中世基盤層とされている黒褐色粘質土の上面レベルで比較しても、100m西の地点２で6.1m、本地点で6.6～6.7mであり、滑川右岸に形成された微高地端部の一角を占めていることがわかる。

この付近の小字名「小町口」は『吾妻鏡』等の文献にも見られ、「中の下馬橋」付近で若宮大路から小町大路の方へ抜ける路の入り口あたりの呼称として登場する。また、それによれば、「小町口」には13世紀中葉に藤内定員の屋敷があったようである。従来、当該地を今の警察署から郵便局のあたりに比定している（阿部正道・安田三郎「中世鎌倉歴史地図」『月刊鎌倉市民』110　鎌倉市民社1969. 3など）が、これまでのところ明らかになってはいない。

小町の名は、経済統制の為に箇所を限って町屋免許を与えた、建長三（1251）年と文永二（1265）年の２回の鎌倉幕府追加法（『吾妻鏡』建長３年12月３日条・文永２年３月５日条）に登場することでも有名である。免許は小町のほか、大町・米町（穀町）・亀谷辻・和賀江・大倉辻・気和飛坂（化粧坂）山上・魚町・武蔵大路下・須地賀江橋（筋違橋）などに与えられ、そこでは日常的に商取引が行われていたのであろう。本地点のすぐ東を南北に走る小町大路は、これら「町屋」の多くを連結し、鶴岡八幡宮付近の政治中枢から貿易港和賀江島へと至る経済的動脈である。また、滑川も往時は舟運に重要な役割を果していたと考えられる（夷堂橋付近に船着き場があり、荷揚げが行われていたという伝承もある）。中世都市鎌倉を支える２本の経済要路が交差するこの付近一帯が、一大商業地区として人や物資が盛んに往来・集散し、鎌倉中で最も繁華な場所であったことは推測に難くない。

そうした都市鎌倉の経済的側面については、史料が乏しいこともあって、これまであまり具体的な像を結ぶには至っていない。しかし最近、中世以来連綿と続く鎌倉祇園会を支える町衆の姿に注目し、「鎌倉」以後も小町大路沿道の商人・職人の活躍は簡単には衰えていないとする研究成果も発表されている（藤木久志「中世鎌倉の祇園会と町衆―どっこい鎌倉は生きていた」『神奈川地域史研究会会誌』14　1993・松尾剛次『中世都市鎌倉の風景』吉川弘文館　1993など）。

周辺の発掘調査はこれまで多数行われているが、その殆どは幕府（御所）や北条得宗・有力御家人の屋敷が軒を連ねていたと考えられる若宮大路の両脇に集中している。一方、小町大路に面した部分には殆ど調査の手が及んでおらず、具体的な様相は全くと言っていいほど解っていない。その




1．本調査地点
2．小町1-309-5地点（松風堂ビル）
3．（推定）幕内定員邸跡（新中央公民館）
4．スポーツクラブ用地
5．駐輪場（小町サイクルパーク）
6．警察署駐車場
7．本覚寺夜堂
8．小町2-345-2地点（雪ノ下教会）
9．宇津宮辻子幕府跡（雪ノ下カトリック教会）
10．〃　（ユニオン駐車場）
11．蔵屋敷遺跡
12．千葉施東遺跡
13．御成町228-2地点
14．千葉地遺跡
15．諏訪東遺跡
16．雪ノ下1-210他地点
黒塗メリは方形竪穴検出地点

**図1　遺跡周辺図**

中にあって、1988年、横大路から南に150mほど下がった小町大路西沿い（菊川英政「北条泰時・時頼邸跡　雪ノ下一丁目432番２地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書５　昭和63年度発掘調査報告』鎌倉市教育委員会　1989）で行われた調査で、現在の小町大路にほぼ平行する形で13世紀後半から14世紀後半の木組の溝が検出されたのは希少な成果である。この溝は若宮大路の側溝と同じような構造を持つと考えられており、往時の小町大路が相当の規模を持つ道路であったことを窺わせる。しかし、現在の小町大路は若宮大路に平行しない上、途中で屈曲しており、これがどの程度中世の道筋を踏襲しているのか不明である。

以下、本地点に近接した箇所を中心にその幾つかの概要を述べる。地点３では、12世紀末から17世紀前半頃までの遺物が出土しているが、その中心は13世紀後半から15世紀にかけてであり、検出遺構の主体は方形竪穴（６基）と井戸（８基）である。また、15世紀から17世紀にかけて営まれた土壙墓が11基検出されている（斉木秀雄他『(推定) 藤内定員邸跡遺跡―鎌倉市新中央公民館用地内遺跡の発掘調査報告書―』鎌倉市教育委員会　1985)。地点２でも様相は類似している。遺跡は13世紀初頭から16世紀前半頃の時間的幅をもつが、中心は14世紀から15世紀初頭であり、遺構の主体は方形竪穴（９基）と井戸（７基）である（斉木『小町１丁目309番５地点発掘調査報告―松風堂ビル建設に伴う中世遺跡（推定藤内定員邸跡）の発掘調査報告書―』（推定）藤内定員邸跡発掘調査団　1983)。一方、これらの地点から現在の若宮大路に直交する道路を隔てた北側の地点７では様相がかなり異なる。近現代の削平の影響もあるが、13世紀代の遺構・遺物を中心とし、その主体は掘立柱建物（４棟）である（馬淵和雄『小町二丁目345番―２地点遺跡　雪ノ下教会改築に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』小町二丁目345番―２地点遺跡発掘調査団　1985)。

概して、若宮大路を南北の軸線とした時、本地点より南側で検出される遺構は、方形竪穴がその主体を占め、井戸・土壙・溝などがそれに付随する。それらはおよそ14世紀に属し、それ以前の遺構は掘立柱建物の存在が推定されているが、井戸など深い遺構以外は方形竪穴などに撹乱されており、詳細は明らかになっていない。これに対して、本地点より北側では方形竪穴は殆ど検出されず、一貫して掘立柱建物が専らとなるようである。そうした場の「境界線」は概ね現在の若宮大路二ノ鳥居を通る東西ラインと見ることができる。中世都市鎌倉を象徴する遺構とも言える方形竪穴は、このラインより南、主に海岸の砂丘地帯を中心に濃密に分布し、これまでの調査で767基検出されている（汐見一夫「方形竪穴建築址再考」第１回中世都市研究・討論会レジュメ『都市内の収納・貯蔵』―方形竪穴建築址の性格と分布を含めて―　中世都市研究同人会　1993.12.12)。このラインより北側でも地点14（馬淵「若宮大路周辺遺跡群　雪ノ下一丁目210番他地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書６　平成元年度発掘調査報告』鎌倉市教育委員会　1990）などで方形竪穴の検出例はあるが、割合として非常に少ない。鎌倉の都市構造を解明する上で注目されているところである。

# 第二章　調査の経緯

発掘調査は1992年11月２日に開始された。同年７月に鎌倉市教育委員会文化財保護課の手で行われた試掘調査の結果に基づき、現地表下80cm内外まで堆積していた近現代の撹乱・客土層を重機により除去し、以下を人力によって掘削した。調査面積は約400㎡であるが、残土処理の関係上、便宜的に調査区を東西に分割し、西側の調査を先行して1993年１月末迄、ついで東側に移行し同年３月31日をもって全区の調査を終了した。

調査に当たっては、調査区内を４ｍグリッドに区画した(図２)。鎌倉市内遺跡の場合、文化財独自の測量基準点が設置されていないため、各調査地点がその都度別個にグリッドを設定しており、全体を統一的に把握する上で大きな障害となっている。そこで当面の便宜上、同時点で調査が行われていた宇津宮辻子幕府跡（小町二丁目354番２地点・雪ノ下カトリック教会用地、図１地点９）と同一軸のグリッドを導入した。即ち、鶴岡八幡宮社頭から同二ノ鳥居までの間の若宮大路段葛中軸線を南北軸とし、その基準点を二ノ鳥居礎石北辺中央に置いたものである（地点４、６、９、10でも同一軸線を用いたグリッドを導入している)。従ってその方位は、Mg.N－34°－Eとなる。更に、このグリッドと鎌倉市道路管理課が設置した鎌倉市４級基準点との位置関係を明らかにすることに

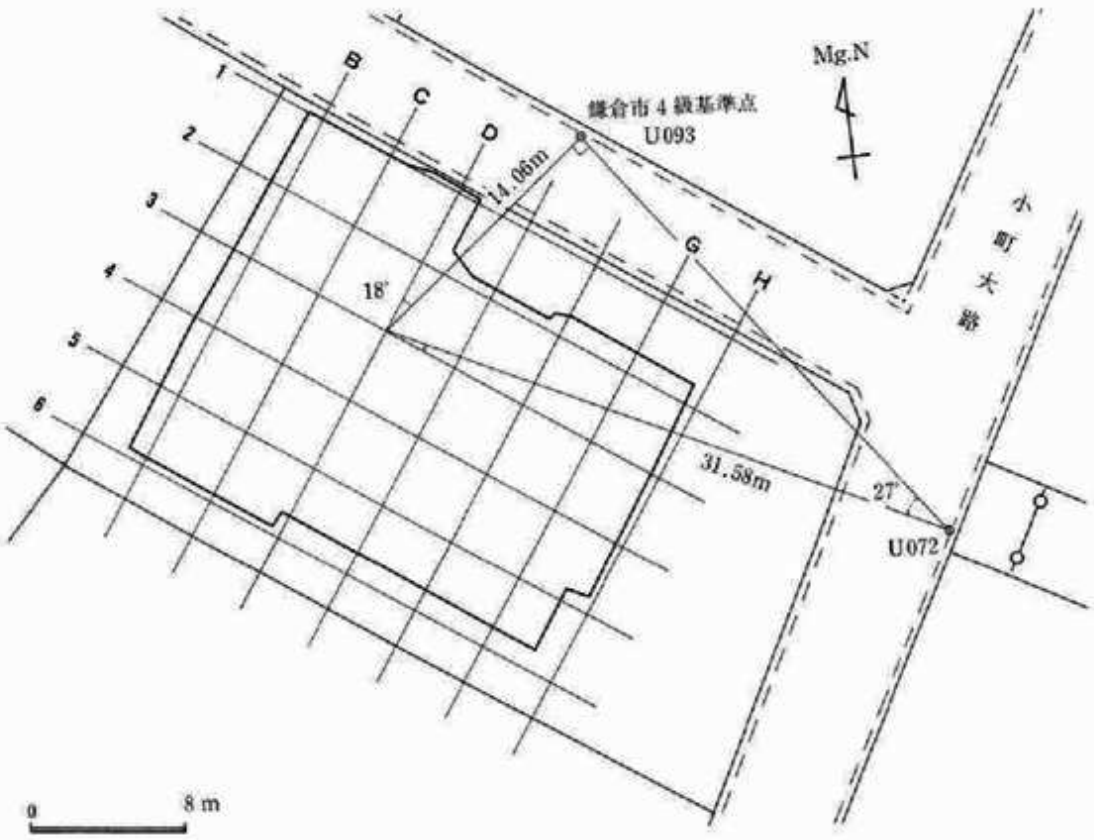



**図２　グリッド配置図**

図3　調査区位置図

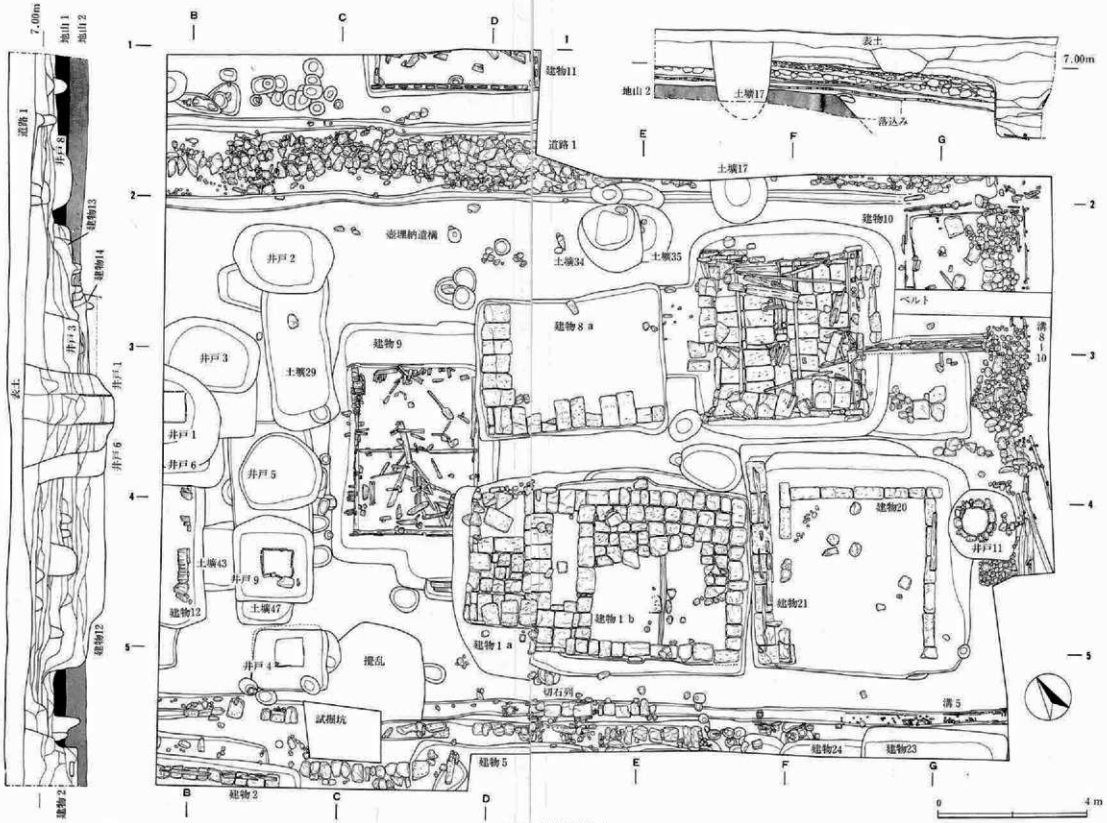

7.00m
地山1
地山2
道路1
井戸8
建物13
建物14
井戸3
井戸1
表土
井戸6
建物12
建物2
B
C
D
1
2
3
4
5
建物11
井戸2
廃棄土遺構
井戸3
土壙29
建物9
井戸1
井戸6
井戸5
土壙43
井戸9
土壙47
建物12
井戸4
攪乱
試掘坑
建物5
建物2
表土
地山2
土壙17
落込み
E
F
G
土壙17
土壙34
土壙35
建物10
ベルト
建物8a
溝8-10
建物1b
建物1a
建物20
井戸11
建物21
切石列
溝5
建物24
建物23
0
4m

図4　遺構全測図

よって、遺跡のより正確な位置をつかむことにした。各4級基準点の国土座標は、U072（X軸－75899.841、Y軸－25122.664）、U093（X軸－75880.158、Y軸－25142.287）である。グリッドは南北方向に西からアルファベットを、東西方向に北から算用数字を付し、各区画の名称は北西隅の交点を与えた。また、報文中の方位の呼称は、特に断りのない限りこのグリッドに合わせ、北東方向を北としている。以上の結果、本調査地点のグリッド交点D－3は、二ノ鳥居礎石北辺中央より南へ68.0m、東へ122.0mの位置に当たることが判った（図3）。

調査区内の堆積土層（図4参照）は、明瞭な地業面がなく、また調査範囲の殆どを占める方形竪穴や井戸による撹乱が著しかった。従って、生活面の把握は著しく困難であり、上層で確認できた遺構の幾つかを調査した後、中世基盤層である黒褐色粘質土の上面（図4土層図中「地山1」。尚、以下便宜上「地山1」、「地山2」の呼称を用いる。「地山2」は黄褐色砂層もしくはその還元層を指す。）まで掘り下げなければ確認できなかった遺構が多い。

そのためもあって、以下の報文においては、遺構を種類毎にまとめ、時期差のあるものを別にせず調査時に付した遺構番号の順で記述している。本来、整理作業の過程でそうしたものを弁別すべきであるが、諸般の事情により詳細な分析を加えることができず、基本的なデータの一部を公表するに止まったことを御容赦願いたい。

# 第三章　検出した遺構と遺物

本調査で検出した遺構は中世に属するものが大半を占める。中世遺構の内訳は、方形竪穴建築址29棟、掘立柱建物址１棟、道路１条、溝７条、井戸址10基、土壙約70基、柱穴約200口、特殊遺構として合わせ口かわらけ１、壺埋納遺構１基、かわらけ溜まり３カ所などである。その他、東に向かって傾斜する地山の落込みを確認した。また近世に属するものとして、井戸址１基、土壙数基を検出している。中世以前の遺構は検出していないが、遺物は古墳時代中期の高坏脚など数点が出土している。後世の客土により混入したものであろう。遺物は、コンテナ約150箱ほどである。内容的には市内中心部の他の調査地点と同様で、かわらけが最も多く、常滑・渥美・瀬戸など国内諸窯の製品、貿易陶磁、金属製品、石製品、骨角製品、漆製品、木製品などが出土している。

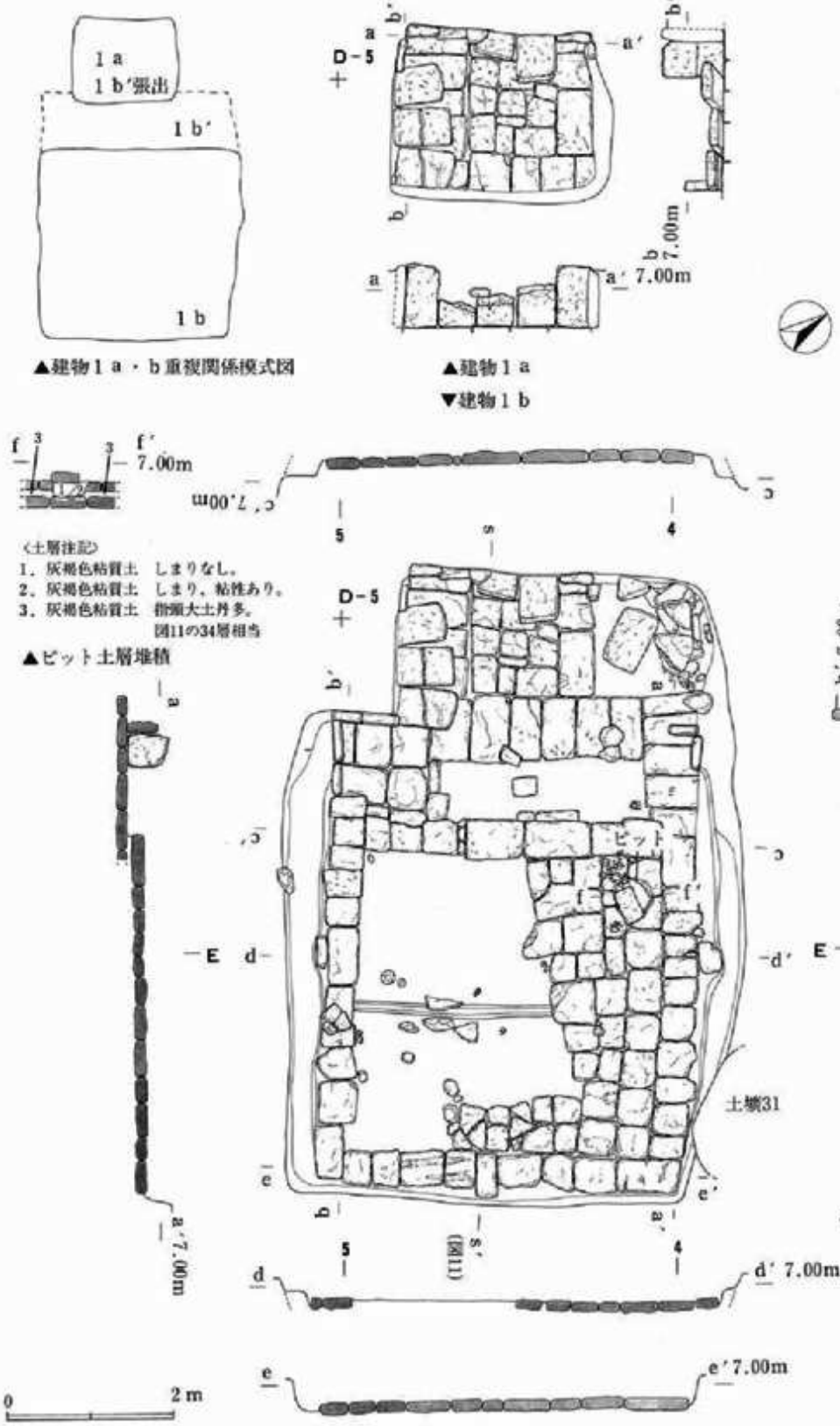
本報ではこれらの遺構・遺物を出来る限り広範に載せるよう心がけたが、紙数・整理日程などの都合で多く割愛せざるを得なかった。これらの総括は正式報告書に委ねることとする。

## A）方形竪穴建築址

以下、検出された方形竪穴建築址（以下〝方形竪穴〟）について個別に記述するが、各建物の項の冒頭に基本的なデータを箇条列挙している。若干の注を加えるならば、**グリッド**は、建物の主要な部分が占める範囲を示した。**確認標高**は、建物プランの確認された最高レベルを表す。尚、建物と認定される以前に上層で何らかの形で把えられたものについてはその値を示した。**長軸方位**は、張り出し部がある場合それを含めた全体形で判断し、磁北を基準とした。**床面**とは、石敷きの場合は敷石上面を意味し、それ以外の場合は特に断りのない限り掘り方底面を指す。それは、建築構造とその廃棄の経緯により、正確な意味での「床面」を検出することが殆ど不可能だからである。また、石敷きの場合の地覆石芯々計測値は、建物使用当時の実際の床面規模を推測する上での参考値として見て頂きたい。これについては、本遺跡建物10の遺存状況が参考となった。**床面深さ**は確認標高からの数値である。**掘方規模**は、上場における数値を示している。

**建物１ａ（図５）**

グリッド　C・D－4
確認標高　7.34m
平面形状　長方形
長軸方位　N－37°－E
床面規模　石敷き面　NS…2.40m　EW…1.90m　4.56㎡
　　地覆石芯々　NS…2.15m　EW…1.75m　3.76㎡




▲建物1 a・b重複関係模式図

▲建物1 a

▼建物1 b

▲ピット土層堆積

図5　建物1 a・1 b

床面深さ　0.74m　　標高　6.60m

［検出状況］　表土除去後精査を始めたところ、ほどなく壁石の頭の列とその内側の褐色土のごく小さな方形プランを確認した。その規模は、東西２ｍ×南北2.5m程である。その約１ｍ東には、上層に破砕した土丹塊を充填した建物１ｂのプランが並ぶ。後に、両者は構造上密接な関連があると判明するわけであるが、この段階では、両プランは一見明確に峻別でき、別個に機能した建物であると判断したのである。当初、プラン通りに掘り下げていったわけだが、次第に壁石の遺存していない部分の立ち上がりが不明瞭になってきた。特にはっきりしなかった北壁については床石を探りながら広げたため、結局前段階の建物１ｃの掘り方の一部を掘り上げてしまった。

［構造］　建物１ａは、床全面に鎌倉石切石を敷き並べた方形竪穴である。切石は概ね平面長方形の板状で、長さ80cm、幅40～50cm、厚さ12～15cmほどである。床面中央のみサイズが小さいが、これは石を外から順に内側へと敷いていったことを示唆するものであろう。西・南両壁にも切石を立てて用いており、その半分は内側に倒れ込んだ状態で検出された。北壁西隅にも石が立てられていたが、他の石に比べかなり小さく粗雑な作りで、色も白っぽく石質もやや異なるものであった。以上の他、建物の構造材と思われるものは検出されていない。

［特記事項］　本建物址については、後述する建物１ｂ及びその前段階の建物１ｃの２時期にわたって使用された、張り出し施設である可能性が高い（詳しくは、建物１ｂ・１ｃの項で言及する）。

しかし、確認されたプランが独立的であること、東壁の立ち上がりがしっかりしていること（図11参照）、建物１ｂが多量の土丹塊を埋土に含んでおり、本址の埋土とは明らかに異なることなどから、本址と建物１ｂとは、少なくとも廃棄・埋没に時間差があると言える。

本建物址は、土層断面から見るならば、建物１ｂが機能していた時期のある段階で、なんらかの事由で個別独立した建物として改変されたと考えることができよう。しかし、規模が小さすぎる点はいかにも不合理であり、逆に、建物１ｂが張り出し部分を廃棄し、主屋部のみで機能し続けたものと見るほうが自然かもしれない。

**建物１ａ出土遺物（図６）**

図６－１～17が建物覆土から、18～24が掘り方の裏込め土から出土したものである。いずれも使用状態を示すような出土状況は見られなかった。

１～８はかわらけ。総てロクロ（回転台）成形である。１～５は小皿、６は中皿、７・８は大皿。小皿、中皿は概ね器高が高く底径は小さめで、器壁が薄く丸みをもつ。それに比して大皿はやや厚手の作りとなる。

９は青磁碗底部1/2片。胎土は緻密だがやや軟らかい感じの淡茶灰色土。釉は厚く褐緑色を呈する。復元高台径5.6cm。内底に花文が捺されているが殆ど見えない。

10～13は常滑窯の製品。

10はこね鉢。外面は縦位ヘラなで。外底面は砂目底である。胎土は石粒を多く含んだ粗土。焼成が甘く、色調は表面が淡赤灰色、胎芯が淡茶白色を呈する。よく使用されており内面の摩滅が著し

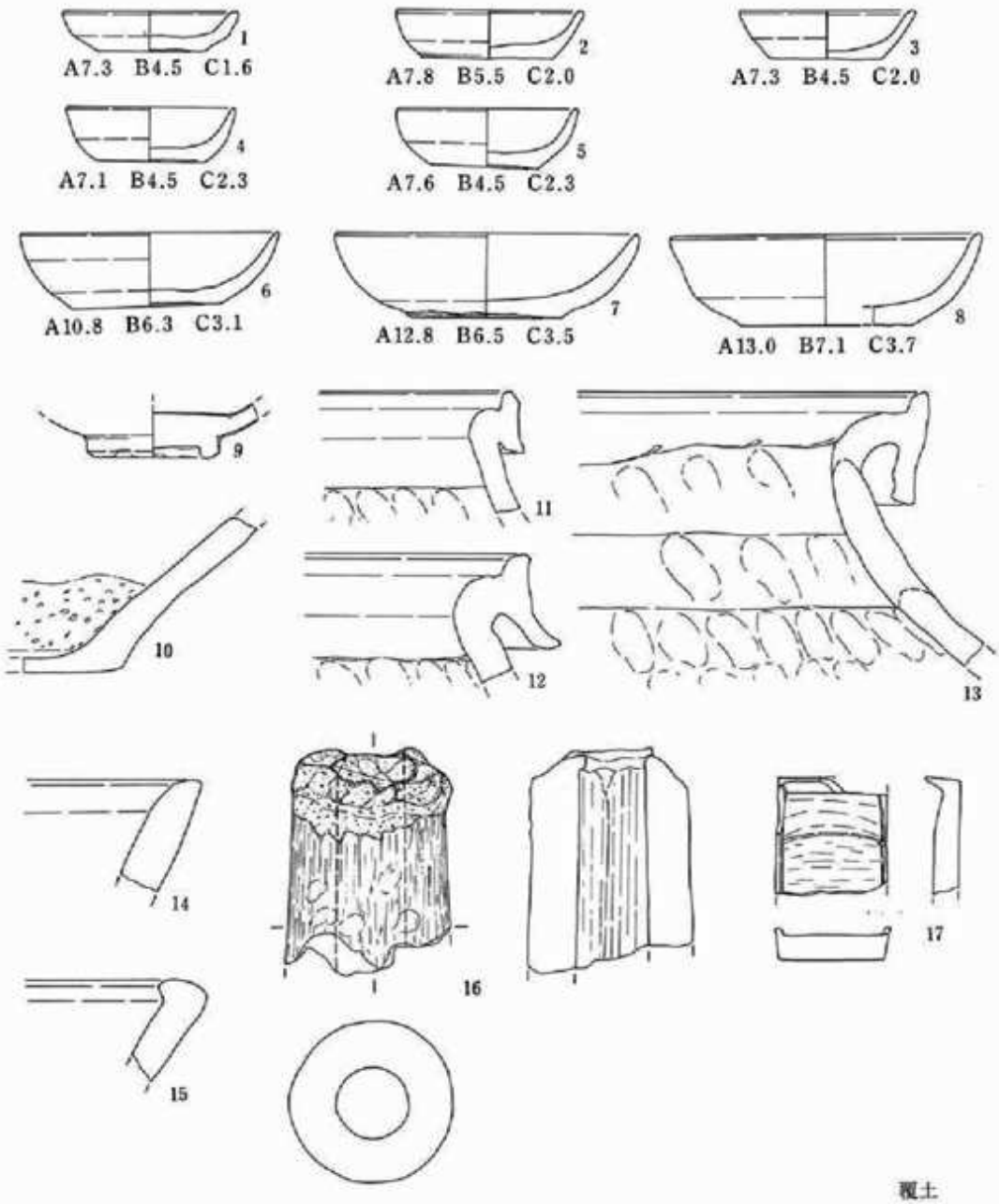

1
A7.3 B4.5 C1.6
2
A7.8 B5.5 C2.0
3
A7.3 B4.5 C2.0
4
A7.1 B4.5 C2.3
5
A7.6 B4.5 C2.3
6
A10.8 B6.3 C3.1
7
A12.8 B6.5 C3.5
8
A13.0 B7.1 C3.7
9
10
11
12
13
14
15
16
17
覆土
掘り方
18
A5.2 B4.4 C0.9
19
A7.6 B4.8 C1.7
20
A7.7 B5.7 C1.8
21
A7.3 B4.5 C2.3
22
A13.2 B9.0 C3.4
23
A13.3 B8.1 C3.4
24
A12.9 B7.7 C3.8

**図6　建物1 a出土遺物**

く、底部が薄くなっている。

11～13は甕口縁部。いずれもいわゆるN字状口縁である。12・13は特に幅広の縁帯が下方に引き出されているが、頸部とは接続しない。胎土はどれも長石を主体とする小石を多く含み、11・13には鉄分もやや多く入る。全体に岩石質に焼き締まっている。

14・15は手焙り。

14は赤色粒を含む瓦質で、表面は灰黒～灰褐色、胎芯は灰白色を呈する。内外面とも縦位ナデ、口縁外側は横ナデ、上端から口縁内側にはヘラ削りが施される。

15は砂粒を含んだ土器質鉢型。口縁は肥厚し、内側に少し張り出す。外面下半は縦位ナデ、上半から内面にかけては横ナデ調整。色調は淡灰黒色を呈する。

16はフイゴの羽口。丸棒に粘土を巻きつけて成形しており、孔内面に樹皮圧痕が見られる。外面は木口や指によるナデ調整。先端に黒灰色の溶着物が厚く付着する。胎土は砂粒・白色粒・白針を含む。外径6.7cm、孔径は3.0cm。

17は砥。赤間石製か。幅4.7cm、高さ1.5cm、陸部厚さ1.0cm。

18～24は裏込め土出土のかわらけ。ロクロ成形。18は内折れ皿のミニタイプ、19～21は小皿、22～24は大皿。21は薄手で丸く深いタイプ。24は器高が高く口縁がやや外反気味になる。他は器高が低くやや厚手である。

**建物１ｂ（図５）**

グリッド　D・E－4

確認標高　7.43m

平面形状　ほぼ正方形

長軸方位　N－53°－W

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 床面規模 | 石敷き面 | NS…4.45m | EW…4.50m | 20.03㎡ |
| | 地覆石芯々 | NS…4.10m | EW…4.05m | 16.60㎡ |
| 床面深さ | 0.61m | 標高　6.82m | | |

［検出状況］　建物１ａの項でも触れたように、本建物址も表土除去直後にプランが確認されていた。その規模は東西5.0m、南北4.5m程である。しかし、それは土丹塊が密に集積されたものであり、とても方形竪穴の埋土とは見なし得なかった。特にプランの北・西辺に沿うように人頭大以上の土丹塊が並べられた様相は、あたかも基壇か何かの地業かと考えられた程である。しかし、プランの南東隅を侵食していた現代撹乱土を除去すると、その下に地覆石の列が顔をのぞかせたため、漸く方形竪穴と判明したのであった。

［構造］　本址は、後述する建物１ｃを埋めて建築された、石敷きの方形竪穴である。四周に一列の鎌倉石切石を地覆石として巡らし、その内部のほぼ北半に切石を敷きつめている。しかし、その範囲は不正形を呈して一様ではない。南半には石は敷かれず、土を入れて踏み固めたようで、中

央南北に一本の根太の痕跡が溝状に走る。根太痕は長さ2.4m、幅15cm、深さ10cm弱である。また、南北両辺の地覆石列の中程外側の丁度対称的な位置に１個だけ小さな石がはみ出して置かれている。その上面レベルは他の石と変わらない。東辺の地覆石も中央の１個だけが向きを異にし、外側にはみ出すようになっている。切石の他に建物の構造材は検出されていない。なお、本建物址は土壙31に切られ、また東辺で建物21を僅かに切っている。

［特記事項］　先に検出していた建物１ａの敷石が東へ伸びることから、本址と建物１ａは本来一体のものであろうという「予断」の下に掘り進められた。しかし、いざ掘り上げてみると１ｂの床面は切石を一段積み増しており、その比高差は約12cmもあったのである。そこであらためて土層（図11）を観察した結果、上段西側の敷石直上の土丹塊が集中している部分に一応建物の西限があるものと見て取れた。これは、当初確認された、土丹の集積によって出現したプランと合致するものである。これによって、少なくとも、本建物址は上段の敷石の範囲で、ほぼ方形のプランをもつ建物として存在したことが明らかとなった。

建物１ｂが本来１ａと一体のものであったという「予断」については、次のような事実がなにがしかを示唆しているように思われる。まず土層堆積を見ると、敷石と同じレベルで西側に広がる面があったようである。また、本址南西角の地覆石が一つ西側にはみ出し、それは後述する建物１ｃの床石から立ち上がる壁石に密着している。もう一方の北西角は切石が抜き取られて明らかにならないが、もし、建物１ｂが当初から建物１ａと隔絶するように構築されたのであれば、このような細部の造作の意味が不明となる。更には、各辺の地覆石列の外側に一つだけはみ出している切石のうち、東辺のそれは辺の丁度中央に位置しているのに、南北両辺の切石は、上段の敷石の範囲で見るならば、西側に偏る。実にそれは、建物１ａを一連の張り出し部とした時の主屋の東西中心線にほぼ乗ってくるのである。

これらの事実から、やはり建物１ａと１ｂは本来一体のものであった可能性があると考える。その関係は図５に模式的に示したが、元々１ａ部分を張り出し部としてもつ建物１ｂ'が存在し、そこからある時点で１ａ部分を廃棄あるいは分離して平面正方形の建物１ｂとして改変されたものと考えられるのである。

敷石面上には数個体の潰れたかわらけが点在していた。建物の構造としては床板の存在が推測されるから、これは建物の廃棄に際し、木製部材を抜き取った後に置かれたものと考えることもできよう。建物北西コーナーの敷石面上には、やや小ぶりな切石が１枚伏せるように置かれており、かわらけは特にその周囲に集中していた。それらを取り上げ、切石を取り除いたところ、敷石を丸く穿ったピットが現れた。上面直径が45cm、深さが17cm程で、やや粗雑な造作だがほぼ円形を呈する。ピットの底面は下層の建物１ｃの床石面である。覆土は灰褐色粘質土で、遺物はかわらけ片の他には出土していない。直上に蓋をするかのように伏せてあった切石は、やはり建物廃棄に際して置かれたものであろう。このピットの機能は不明だが、あるいは竪穴内部に浸出する水を溜めるための集水孔のようなものかもしれない（建物10の項を参照）。

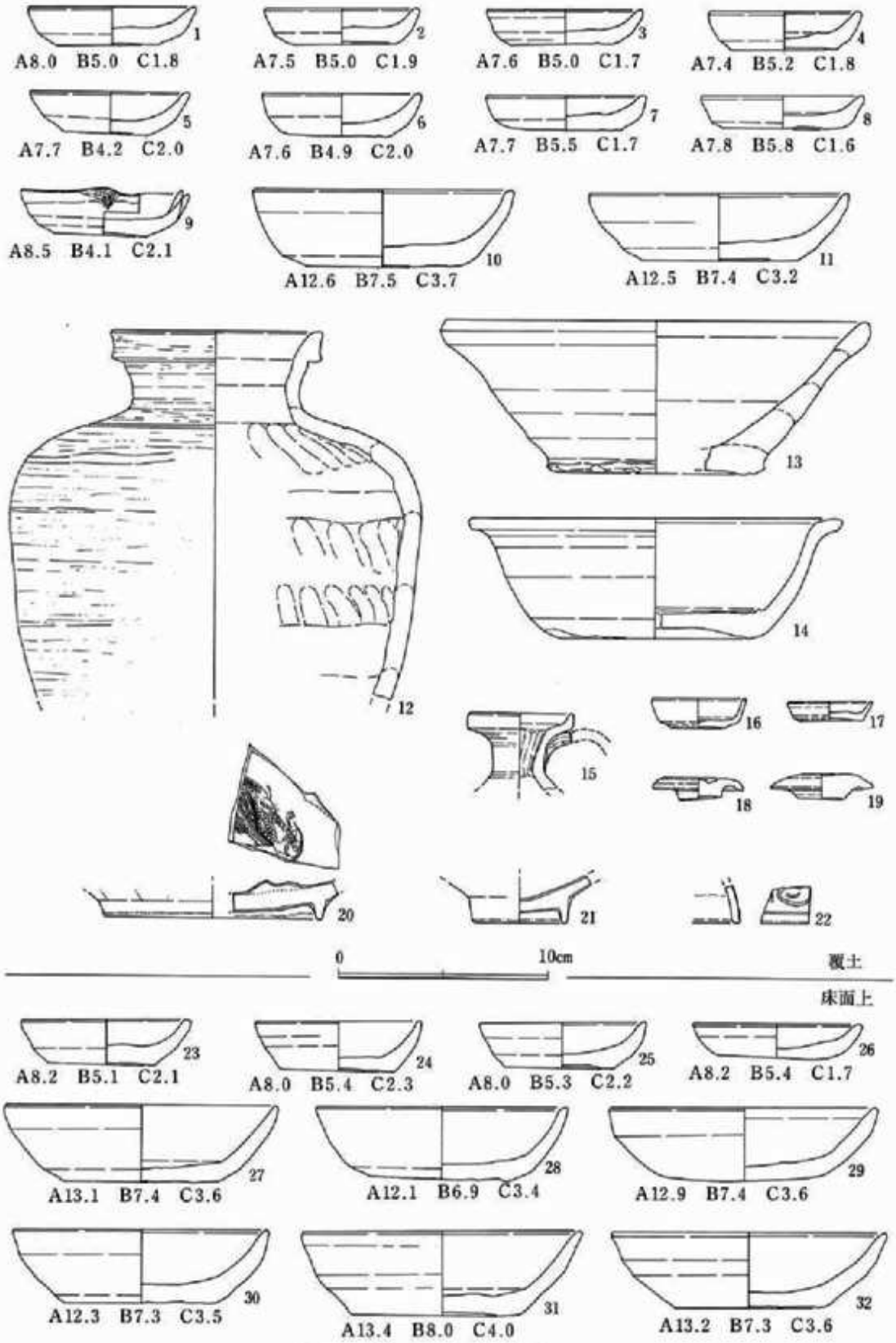



**図7　建物1ｂ出土遺物(1)**

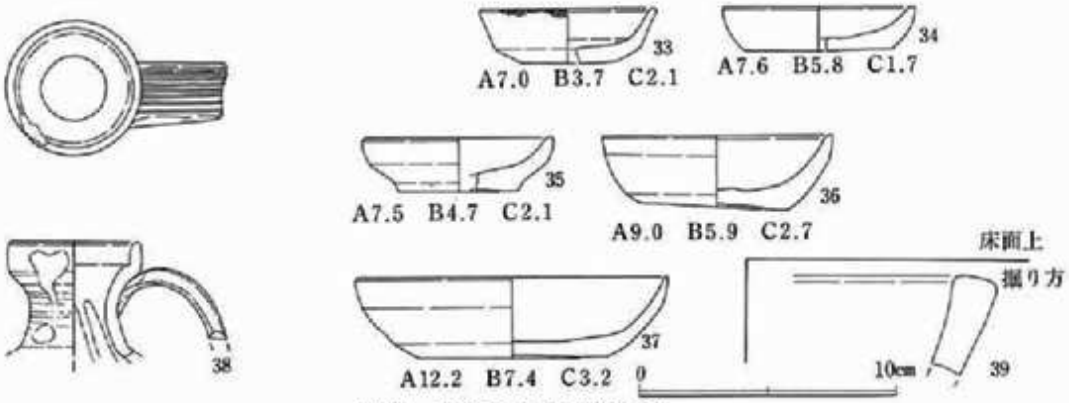



**図8　建物1b出土遺物(2)**

本建物址は鎌倉石切石を多用するが、その構造は一概に整然とした規格に則っているとは見なし難い。一つひとつの切石は規格性に乏しく、本来の形状が割れて損なわれたような小さなものが殆どである。方形竪穴床面における石の敷き方は、まず四周の地覆石を整然と並べて建物の規模を決め、それから内側に敷いていく事例が多い。本遺跡の建物1a・1c・10など、全面石敷きのものは皆そうである。そしてその地覆石には規格に則った石材が使用されている。ところが本址においては、その地覆石さえ規格性を備えない小材が用いられていた。

これは明らかに、他の方形竪穴か何かの部材の転用であろうことを推測させる。また、床面の石敷きの半端な様子からは、さながら、作事中途で石材を切らしてしまったかのような印象を拭えない。本建物址は、その建築にあたって設計が周到でなく、資材調達のための資金も不足であったのかも知れない。

**建物1b出土遺物（図7・8）**

図7－1～22は建物覆土、23～図8－38は床面上、39は掘り方裏込め土から出土したものである。

1～11はかわらけ。すべてロクロ成形である。1～9は小皿、10・11は大皿。小皿は器壁が厚く器高が低い一群である。9は口縁の一箇所を棒状のもので内側に押し歪めている。何かを意図したものかも知れないが不明。

12は常滑窯産の壺。内外面とも横ナデが基調だが、肩部はヘラなで調整され、内面には指頭痕がよく残る。また、肩部に一条の沈線が巡る。口縁部は折り曲げられ頸部に接続している。胎土は小石等が少なく比較的緻密。色調は茶色味を帯びた灰黒色を呈する。口径10.0cm、肩部径29.8cm。

13は山茶碗窯系こね鉢。胎土は小石粒を多く含む灰色粗土。内外面横ナデ調整で内面下半は使用により摩滅している。高台は当初から付けられていなかったものと思われ、外底面は凹凸が激しい。口縁部内側に降灰が淡く掛かっている。口径20.5cm、底径10.4cm、器高7.2cmと、こね鉢としてはかなり小振りな製品である。

14～19は瀬戸窯の製品。14は折縁鉢。同一個体と思われる接合しない2片より合成復元。体部やや丸く、口縁は外方に強く引き出されている。外底は糸切り。釉は灰釉で暗緑色を呈し、底部脇まで掛けられる。胎土は黒色微砂を混じえる灰色土。口径17.0cm、底径9.0cm、器高5.7cm。

15は水注の頸部から口縁部にかけての破片。口縁は外方に折られた後、上方に引き上げられる。頸部に粘土帯貼り付けによる把手の一部が遺存している。胎土はきめ細かく、良く焼き締まり灰白色を呈する。釉は灰釉で透明感のある明緑色を呈する。口径5.2cm。

16・17は入子。ともに胎土精良、焼きは硬く灰色を呈する。内面の一部に降灰が付着。16は外底面ヘラ削り調整され内底面がやや摩耗するが、17は外底糸切りのままで内面も殆ど摩耗していない。16は口径4.5cm、底径2.8cm、器高1.4cm。17は口径4.1cm、底径3.2cm、器高0.9cm。

18・19は合子蓋。ともに胎土に黒色微砂を多く含み、やや黄色味を帯びた灰白色を呈するが、良く焼き締まっている。釉は灰釉で表面にのみ掛けられ、下部突出面には糸切り痕が残る。また18には上面中央部に退化した円形のつまみがある。18の外径は4.9cm、下面径2.2cm、高さ1.3cm。19は外径4.3cm、下面径2.1cm、高さ1.0cm。

20～22は貿易陶磁。

20は青磁龍文盤小片。外面には微かに蓮弁文の一部が見られ、内底に型作りの龍を貼り付ける。遺存部分には龍の手（足）と風になびく髪が表されている。素地は堅緻な灰白色土。釉は半透明な草緑色。畳付部分は露胎で赤茶色を呈する。復元高台径10.4cm。

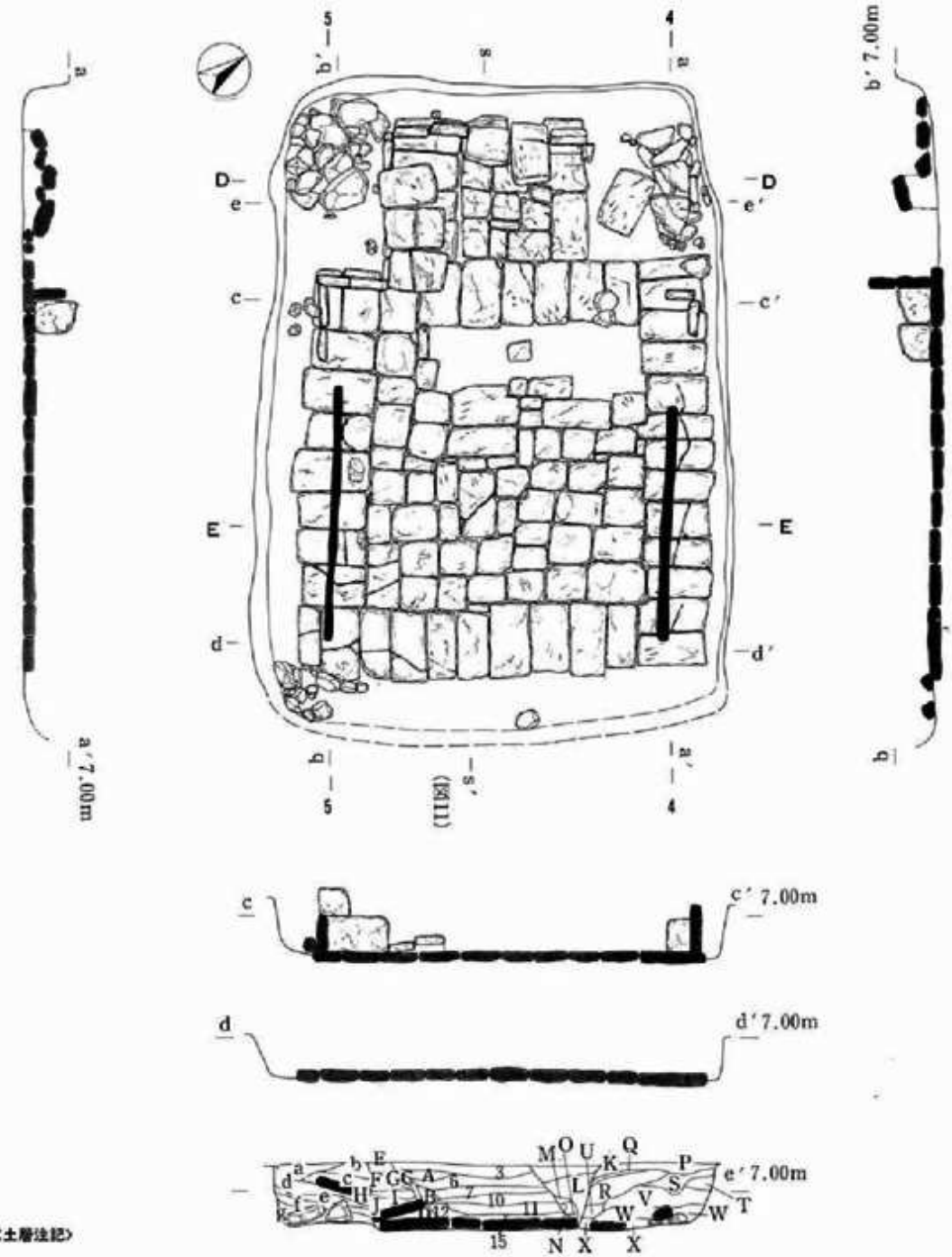
21は青磁碗底部1/2片。素地は夾雑物を含まず非常に堅緻な白色土。釉は淡緑色で釉層厚く不透明。畳付部のみ削り取られている。復元高台径4.4cm。

22は白磁合子蓋小片。外面には型押しにより渦文が施される。素地は夾雑物を含まないがやや軟質の白色土。釉は淡く黄色味がかった白色で半透明。これと類似した意匠の白磁合子身が、道路1下層1より出土している（図73—50）が、釉調などが異なるので別個体と思われる。

23～37は、いずれもロクロ成形のかわらけ。32までは床面敷石直上に張り付くように潰れて出土したものであり、先に述べたように、何らかの意図をもってそこに置かれた可能性がある。33・34は建物1bの西側（図5重複関係模式図中1b'の部分）底面より出土。35～37は敷石面上に穿たれたピットより出土したものである。23～26・33～36は小皿。27～32・37は大皿。小皿は器高がやや高めで厚手のものが多いが、33のように薄手のものも入る。36は口径が9.0cmもあり、中皿と言えなくもないが、全体の様相からすれば小皿の範疇に入るものであろう。大皿は27・29・30・32などのように器壁がやや厚く、体部上半のところに弱い稜をもって口縁が上方にやや屈曲するものが多いようである。

38は瀬戸水注の頸部より上の破片。胎土は夾雑物の少ない精良土で、色調灰白色を呈する。焼成は堅緻。全体に淡緑灰色の釉が掛けられているが、所々にムラがある。頸部が緩やかに外反し、そこから上方に真っすぐ引き上げて口縁部を作り出している。把手は頸部上方に幅2.4cm、厚さ0.6cmの粘土帯を貼り付けており、その外面には条線文が施されている。図7—15よりもやや粗製である。

39は土器質鉢型の手焙り口縁部小片。内外面とも横ナデ調整だが、上端面にはやや細かいミガキが入る。胎土は黒色微砂を多く含み、小石・赤色粒なども混じえる。焼成は良好。色調は表面が茶褐色を、胎芯が赤灰色を呈する。




〈土層注記〉

A．暗茶褐色粘質土　土丹粒多量
B．暗茶褐色粘質土
C．茶褐色斑粘質土　やや砂まじり
D．暗茶褐色粘質土
E．暗茶褐色粘質土　しまり・粘性強
F．土丹層
G．茶褐色粘質土　土丹粒多量、しまりあり
H．暗灰褐色砂質土　土丹粒多量
I．土丹層
J．暗茶褐色砂質土
K．暗茶褐色粘質土
L．黄褐色砂質土　土丹粒多量
M．茶褐色粘質土　しまり、粘性強
N．茶褐色粘質土
O．暗茶褐色粘質土　しまり、粘性強
P．土丹層
Q．茶褐色粘質土　土丹粒多量
R．茶褐色砂質土　土丹粒、炭化物多量
S．茶褐色砂質土
T．暗茶褐色粘質土　土丹多、しまり・粘性強
U．暗灰褐色粘質土　土丹多、しまり・粘性強
V．茶褐色粘質土　土丹粒多量
W．暗灰褐色粘質土　土丹粒多、しまり・粘性強
X．黄褐色砂質土　土丹ブロック多量

a．暗茶褐色粘質土　褐色砂多く混入
b．茶褐色砂質土
c．茶褐色砂質土　土丹粒・角礫やや多
d．土丹層
e．暗茶褐色粘質土　砂やや多く混入
f．茶褐色粘質土
g．黒褐色粘質土

※A～O層は1a環土、それ以外は裏込め土。
※数字は第11図土層注記を参照。

0　2 m

**図9　建物1c**

**建物１ｃ（図９）**

グリッド　D・E－4

確認標高　7.20m

平面形状　主屋部　正方形

張出部　長方形（建物１ａ）

長軸方位　N－55°－W

床面規模　主屋部

| | | | |
|---|---|---|---|
| 石敷き面 | NS…4.80m | EW…4.80m | 23.04㎡ |
| 土台痕芯々 | NS…3.80m | EW…4.00m（地覆石芯々） | 15.20㎡ |

張出部

建物１ａのデータを参照

掘方規模　NS…5.20m　EW…7.20m

床面深さ　0.60m　標高　6.60m

［検出状況］　建物１ｂを掘り進めている段階で、その敷石の下に間層を挟んでもう一枚の石敷き面があることがピンポール探査で判明していた。それは前述のように、建物１ａ部分のレベルで１ｂ主屋の下へと延びている。そこで、１ｂの調査終了後に引き続きその敷石をはがし、やや縮小した範囲でほぼ全面に敷き詰められた建物１ｃの切石を検出したのである。

［構造］　本址は、後述の建物１ｄを埋めて建築された、ほぼ全面石敷きの方形竪穴である。建物１ａを張り出し部としてもつ。主屋部と張り出し部の比高差は無い。主屋部は四周に比較的規格性の高い切石（長さ75～85cm、幅40～50cm、厚さ10～15cm）を長辺を接するようにして並べて地覆石とし、その内側により小さな切石を敷き詰めている。但し、その西側1/4ほどはほぼ長方形の範囲で石が欠失している。主屋部の北西・南西両隅には地覆石上に切石が立ったままの状態で遺存しており、張り出し部へと続く部分のコーナーを形成している。これについては先述のように、上段にあった建物１ｂの敷石と接続していたもので、この立石が１ｃ段階のものなのか、１ｂ建築時に据え直されたものなのかは判然としない。また、建物全体の掘り方の四隅のうち三方に、人頭大以上の土丹塊が集積された状態で検出された。ここは建物使用当時は裏込め土で覆われている部分であり、あるいは建築構造上何らかの意味をもつものとも思われるが不明である。なお、南北両辺の地覆石の上には、東西に約３ｍの長さで細く腐植土が堆積していた（平面図中スクリーントーンの範囲）。おそらくは朽ちた土台の痕跡であろう。

［特記事項］　本建物址の切石は、地覆石の整然とした並びなど、建物１ｂに比較すれば規格性を保っている。しかし、その内側の敷石はやはり転用を思わせる小材が多い。また、１ｂほど広くはないが、主屋西側に切石の検出されない部分がある。即断はできないが、土層や周囲の敷石に乱れた様子があまり窺えないことからすれば、この部分は建物廃棄時に抜き取られたのではなく、建築当初（あるいはその使用途中＝廃棄以前）から切石が敷かれなていなかったものかも知れない。

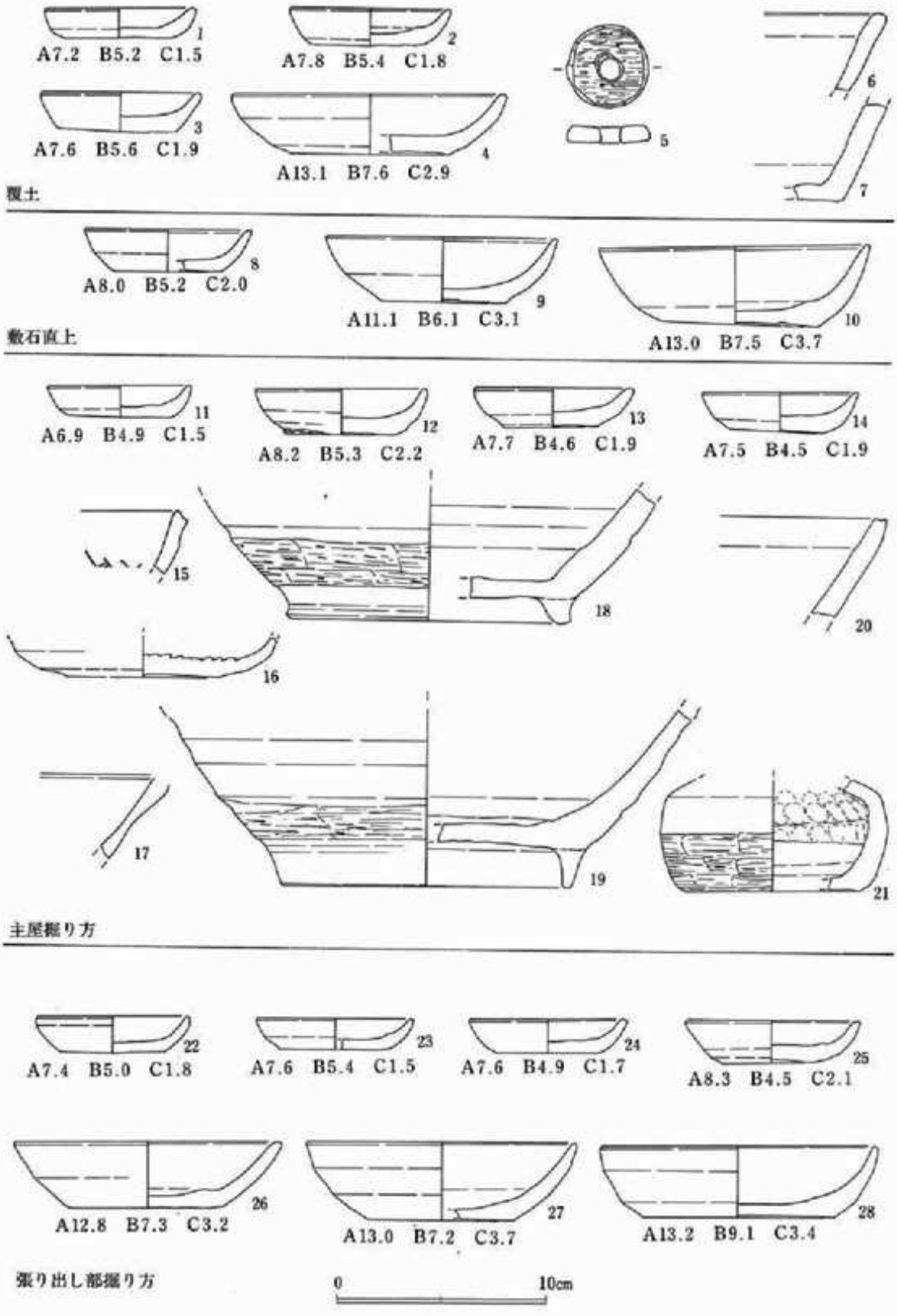



**図10　遺物１ｃ出土遺物**

なお、１ｃは１ｂとのレベル差が少なく、特に東壁の立ち上がりは殆ど削平されていて判らなかったため、東辺地覆石の東側にサブトレンチを設定して掘り方の立ち上がりを確認した。

**建物１ｃ出土遺物（図10）**

図10―１～７は覆土から、８～10は敷石直上から、また、11～21は主屋部の、22～28は張り出し部の各々掘り方裏込め土から出土したものである。但し、先述のように１ｃの石敷き面と１ｂ切石の間層はたかだか15cm内外であり、１～10を二分することにはあまり意味がないかも知れない。

１～４はかわらけ。ロクロ成形。１～３が小皿、４が大皿である。概ね器高が低く、器壁はあまり丸みをもたず外方に開いている。

５は円盤状土製品。かわらけの底部をほぼ正円形に打ち欠き、粗く擦って仕上げている。直径3.9cm、厚さ0.8cm。その中央部には径1.2cmほどの孔が穿たれている。また、両面ともに擦痕が見られる。

６は山茶碗窯系こね鉢口縁部小片。端部はそのままの厚みで丸く収められ、外面には強い横ナデの跡が残る。胎土は小石粒等をあまり多く含まない良土。焼成は甘く、色調灰白色を呈する。

７は瓦質鉢型手焙り底部小片。外面下端は横ナデ、その上は指頭痕を残した不規則なナデ、内面は丁寧なナデで仕上げている。胎土はや粗い砂を含んだ瓦質土。色調は表面が灰黒色、胎芯が灰色を呈する。

８～10はかわらけ。ロクロ成形。それぞれ小皿、中皿、大皿であり、器形はいずれもやや深く、口唇が弱く外反するなど、よく類似する。３者はまとまって出土した訳ではないが、建物の廃棄・埋没に関連して置かれたものかも知れない。

11～14はいずれもロクロ成形のかわらけ小皿。器高が低くやや厚手の一群である。

15・16は共に瀬戸の卸し皿。同一個体ではない。

15は口縁部小片。口唇端が外方にやや引き出され弱い縁帯を形成する。胎土は微砂を含み気孔をもつ灰色土で、焼成は良好。淡灰緑色の釉が内面上部にのみ薄く残る。

16は底部片。外底面は糸切り。胎土は微砂を含むが良土。焼成も良好で、色調灰白色を呈する。内底面付近まで薄い灰緑色の釉が見られ、外面は体部下半から底部にかけては無釉である。底径7.3cm。

17～19は山茶碗窯系こね鉢。

17は口縁部小片。端部は肥厚し丸く収められる。胎土は石粒を多く含んだ粗土。焼成は堅く、色調灰色を呈する。

18・19は体部下半～底部片。18は外面体部下端を一段ヘラケズリし、断面逆台形の高台が丁寧なナデで貼り付けられている。胎土は長石を含むが砂粒は少ない。焼成が甘く、色調は灰白色を呈する。内面に摩滅は殆ど見られない。復元高台径13.6cm。

19も外面下端を一段ヘラケズリするが、高台の断面は強いナデによって細長い逆三角形となる。内底面は粗くなでられ、重ね焼きによる色の変化が見られる。たいどは小石、砂粒、鉄分を多く含

む粗土で、焼成は甘く、色調淡赤灰色を呈する。復元高台径16.8cm。

20・21は常滑窯の製品。

20はこね鉢口縁部小片。内外面とも横ナデ調整で、特に端部付近は強いナデで器壁がややすぼまる形となる。胎土は長石を含み、岩石質。色調茶灰色。

21はいわゆる壺口壺。肩部から底部にかけての破片である。外面下半は横位ヘラケズリ、上半は横ナデ。内面は下半がナデ、上半には細かな指頭痕を多く残す。胎土は砂粒を含むが粘性のある良土。焼成は良好。色調は表面茶灰色、胎芯灰黒色を呈する。復元底径8.4cm、最大径10.8cm。

22～28はかわらけ。総てロクロ成形。22～25が小皿、26～28が大皿である。小皿はいずれも器高が低いが器壁はあまり厚くない。

**建物１ｄ（図11）**

グリッド　D・E－4

確認標高　7.20m

平面形状　主屋部　ほぼ正方形

張出部　長方形？

掘り方　不整長方形

長軸方位　N－59°－W

床面規模　主屋部

| | | | |
|---|---|---|---|
| 石敷き面 | NS…4.50m | EW…4.20m | 18.90㎡ |
| 地覆石芯々 | NS…3.80m | EW…3.90m | 14.82㎡ |

張出部

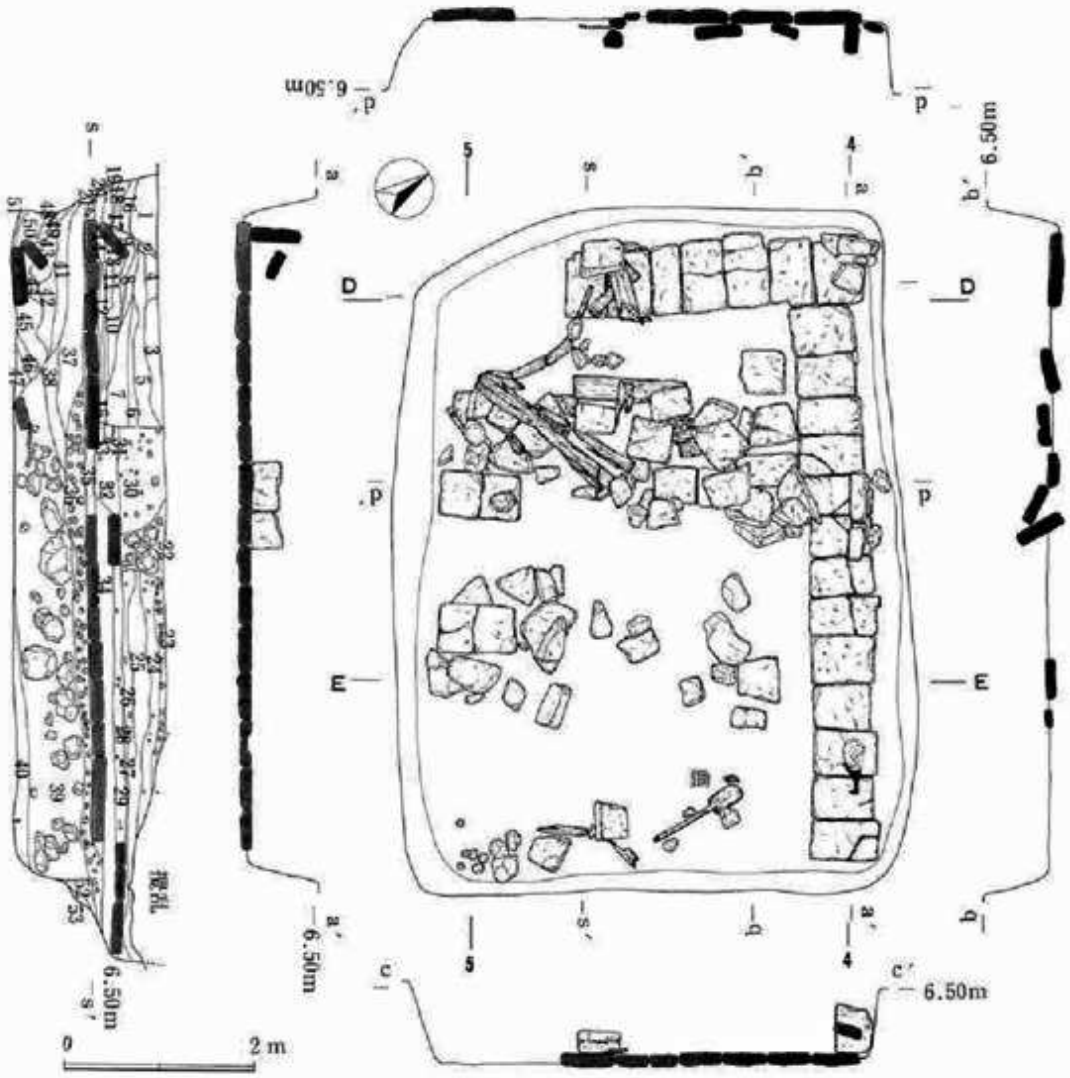
| | | | |
|---|---|---|---|
| 石敷き面 | NS…3.10m | EW…2.30m | 7.13㎡ |
| 地覆石芯々 | NS…2.50m | EW…2.20m | 5.50㎡ |

掘方規模　NS…5.50m　EW…7.15m

床面深さ　1.35m　標高　5.85m

［検出状況］　建物１ｃの東壁立ち上がりを確認するためのサブトレンチ内には、１ｃの敷石の直下に人頭大土丹塊が集積されていた。それまでの調査経緯で、本地点の方形竪穴埋土には、山から切り崩してきたままのような大土丹塊が投げ込まれている例が多いことが判っていたので、いずれこの土丹集積も方形竪穴埋土であろうと推測して掘り下げたところ、１ｃ敷石の約60cm下からやはり切石列＝地覆石が検出されたのである。

［構造］　建物１ｄは、これまで述べてきた１ａ～１ｃに先行して、中世基盤層である黒褐色粘質土及びその下の黄褐色砂層を掘り抜いてこの位置に建築された、最初の石敷き方形竪穴である。当初は平面長方形の建物だと思われた。しかし、掘り方の南西隅が内側に入り込んでおり、また西辺の地覆石列が、掘り方の内向に合わせるようにして止まって南側に延びないこと、また、西側1/3




〈土層注記〉

1. 暗茶褐色粘質土
2. 暗茶褐色粘質土
3. 暗茶褐色粘質土　土丹小塊・かわらけ片・炭化物粒多。しまり無。
4. 茶褐色粘質土
5. 暗茶褐色粘質土　土丹粒・かわらけ片・炭化物多。
6. 暗茶褐色粘質土
7. 暗灰褐色粘質土　土丹小塊・角礫・炭化物。
8. 茶褐色粘質土
9. 茶褐色粘質土　炭化物薄層を挟む。しまり・粘性強。
10. 暗茶褐色粘質土　土丹小塊。
11. 暗灰褐色粘質土　土丹小塊・砂まじり。
12. 暗灰褐色粘質土　炭化物層を挟む。
13. 暗灰褐色粘質土　土丹小塊・かわらけ片・砂混じり。
14. 暗灰褐色粘質土　土丹小塊・炭化物。
15. 暗灰褐色粘土　土丹粒・炭化物。粘性強。環板痕か。
16. 暗黄褐色砂質土　土丹粒多量。
17. 暗黄褐色砂質土　弱粘性あり。
18. 暗褐色砂質土　弱粘性あり。
19. 暗褐色粘質土　土丹粒多く、しまりあり。
20. 暗褐色粘質土　19層に近似。しまり・粘性強。
21. 暗褐色粘質土　拳大土丹塊多し。
22. 茶褐色粘質土　人頭大土丹塊光塊。壁石抜き取り痕か。
23. 茶褐色粘質土　拳大土丹塊・土丹粒・かわらけ粒多し。
24. 茶褐色粘質土　土丹小塊多量。
25. 暗茶褐色粘質土
26. 茶褐色粘質土　土丹小塊多し。
27. 褐色粘土　環板痕か。
28. 褐色粘質土　根石の痕跡。
29. 茶褐色粘質土　土丹小塊多し。しまりあり。
30. 茶褐色粘質土　土丹小塊多量。
31. 茶褐色粘質土　夾雑物なく、きめ細かい。
32. 暗茶褐色粘質土　土丹小塊多く、しまり粘性強。
33. 暗茶褐色粘質土
34. 灰褐色粘質土　土丹小塊多く、しまりあり。
35. 暗茶褐色粘質土　やや砂を混じえ、ボソボソ。
36. 褐色粘質土　拳大土丹塊光塊。
37. 褐色砂質土
38. 茶褐色砂質土　土丹粒・貝粒・炭化物。
39. 褐色砂質土　人頭大以上土丹塊多量。遺物片木片
40. 灰褐色砂質土　かわらけ片、遺物片。炭化物やや多。
41. 灰褐色砂質土　土丹小塊、遺物片、炭化物やや多。
42. 灰褐色砂質土　拳大～人頭大土丹塊、炭化物、貝粒。
43. 黒褐色粘質土　地山（黒褐色土）ブロック主体。しまり無。
44. 灰茶褐色砂質土　土丹小塊、貝粒、炭化物多し。
45. 茶褐色砂質土　土丹粒、貝粒。
46. 黒褐色粘質土　木片、かわらけ粒、炭化物多し。しまりあり。
47. 土丹層　土丹小塊を密に充塡。
48. 黒褐色粘質土　地山ブロック。
49. 黄褐色砂層　地山砂流入。
50. 土丹層　土丹小塊光塊。
51. 暗黄褐色砂層　地山砂に近似。
52. 黄茶褐色砂質土
53. 茶褐色砂質土　土丹粒・かわらけ片・炭化物。

＊3～15……1a埋土　16～21……1a裏込土
23～26……1b埋土　30・31……1b裏込土
32～34……1c埋土
36～47……1d埋土　48～51……1d裏込土

**図11　建物1d**

ほどのところで切石が乱雑に集積されているが、その直下に残りは悪いが南北に走る切石列があることからして、本址は正方形の主屋部とその西側に北辺を合わせた張り出し部が付く複室構造であろうと推測される。

主屋部も張り出し部も、四周に切石（長さ65～80cm、幅40～50cm、厚さ15cm前後）を長辺を接するように並べて地覆石としている。但し、遺存しているのはそれぞれの北辺と張り出し部西辺のみであり、その他は殆ど抜き取られている。その内側には石は敷かれなかったものと思われる。主屋部の西辺はエレベーション図ｄ－ｄ'のラインであり、地覆石の一部が残っているものの、動いてずれてしまったようである。北西隅付近には、北壁を構成する切石が２個、中程から折れながらもほぼ原位置を保って立っている。張り出し部も南辺の地覆石が遺存しない。また、西辺の北西コーナー部分に切石が１個立っており、南西コーナー部分ににも内側に傾いた切石が１個検出されている。切石の集積している中に、構造材の一部と思われる板材が挟まれていたが、遺存状況は悪かった。その他に木製部材は検出されていない。建物１ｄは、床面が現在の湧水レベル（標高5.8～6.0m）とほぼ同じであるため、もし土台などの木製部材がそのまま廃棄されていれば遺存しているはずであり、おそらくそれらは抜き取られて再利用されたものと思われる。

**建物１ｄ出土遺物（図12～14）**

図12－１～図13－38は建物覆土、39・40は床面上、41～50は覆土土丹層（図11土層図36・39層）、図14－51～66は掘り方裏込め土より出土したものである。但し、38までの遺物の中にも土丹層出土のものが含まれており、明確に分けて取り上げられたもののみ別にした。

図12－１～23はかわらけ。１～19がロクロ成形。１～12は小皿、13は内折れの極小タイプ、14は中皿、15～19は大皿である。20～23は手づくね成形の小皿。全体に混乱した様相であるが、１～４や14・16など薄手化した製品が確実に入ってくる。一方、８や10のように底径が大きくて器壁が短く直線的に開くものや、上層建物ではあまり含まれていなかった手づくねなど、古いタイプが混ずるようになるのは、本建物址が地山を掘り抜いて建築された古手の方形竪穴であるためであろう。

24～30は常滑窯の製品。

24は大甕口縁部片。端部を小さく折り返して下方にわずかに引き出し、幅の狭い縁帯を形成している。胎土は長石を主とした小石を含むが比較的密な灰色土。内外面に自然釉が厚く垂れ掛かっている。復元口径31.6cm。25･26も甕口縁部小片。やはり縁帯の幅が狭い一群である。27は甕底部片。外面は板ナデあげ、内面は横位の板ナデで、木口の条線が微かに残る。復元底径12.6cm。28は大甕底部片。全体に焼成時の歪みが著しく、底部から僅かに立ち上がった後、屈曲して外方に開いている。外面には板ナデの痕跡が明瞭に残り、内面には大小の粘土クズがまだらに降り掛かる自然釉によって多数溶着している。また、外底の一部にも大きな粘土塊が付着している。胎土は長石粒、小石を多く含むが焼成は堅く、色調は濃い茶褐色。復元底径20.1cm。29はこね鉢口縁部小片。内外面とも横ナデ調整で、端部は角型に張っている。胎土は小石や砂粒を含み、色調橙色を呈する。30は片口碗片。内外面横ナデで、口縁部は緩やかに内傾する。片口は非常に小さく上方につまみ上げら

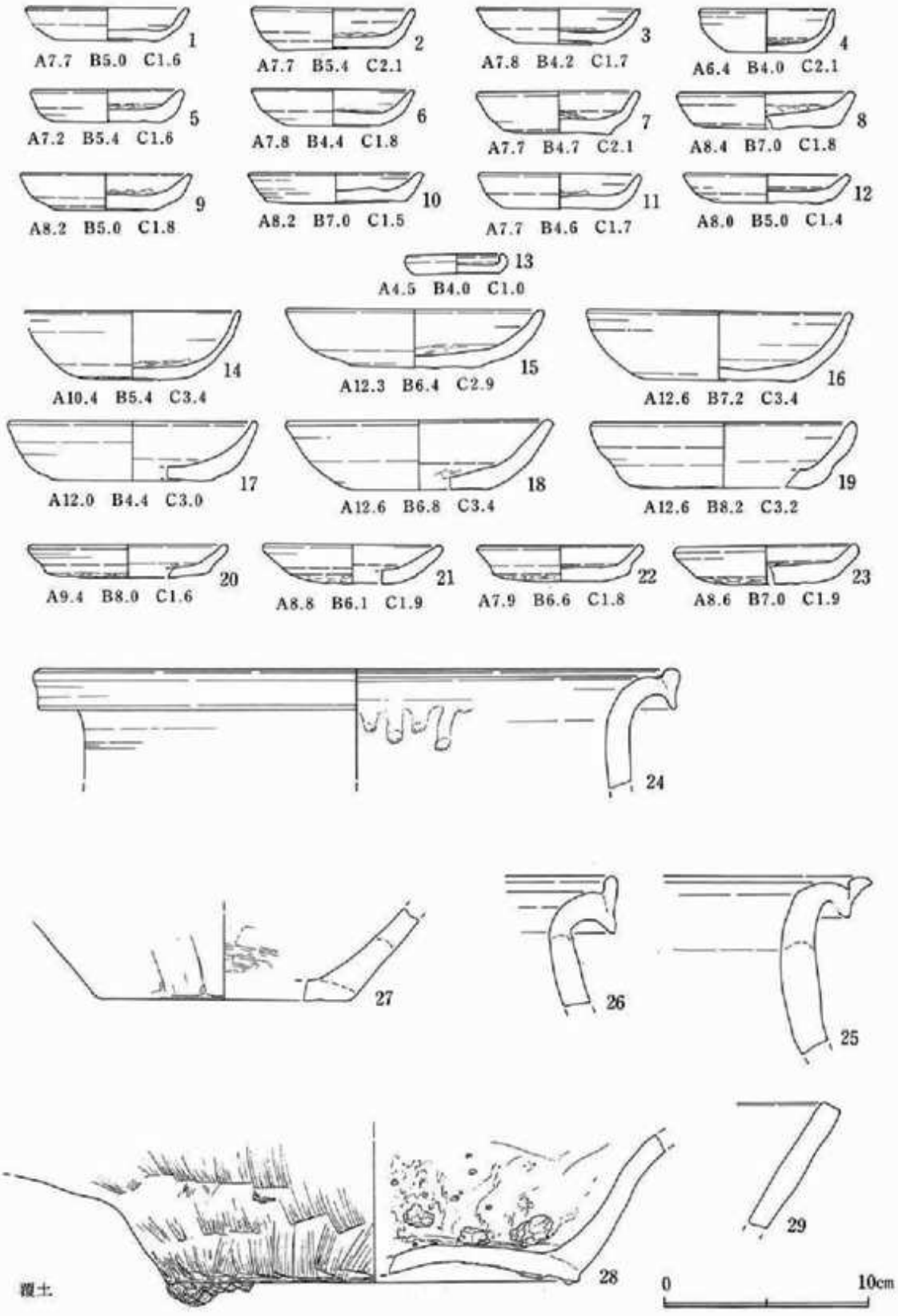



**図12　建物１ｄ出土遺物(1)**

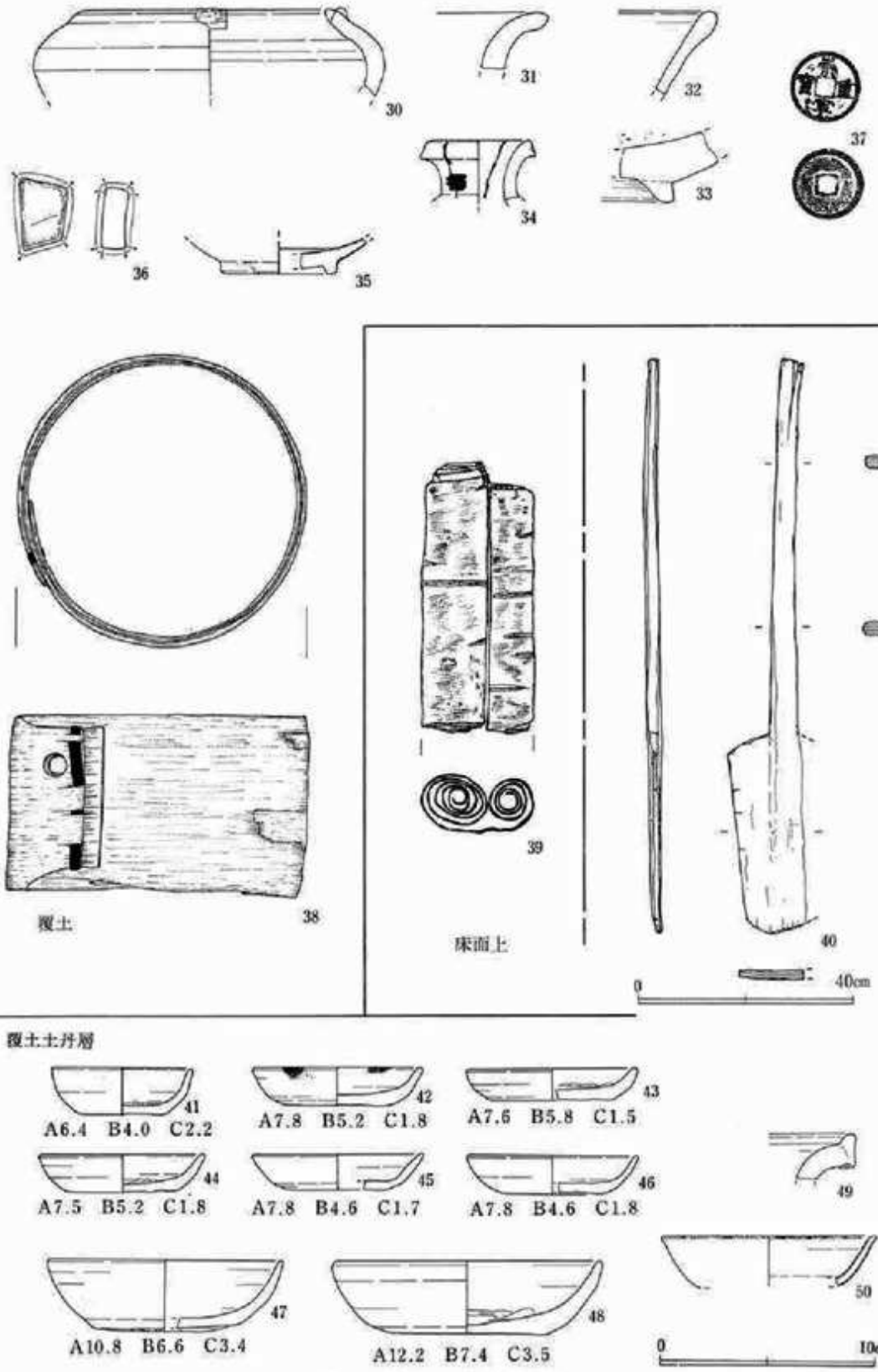



**図13　建物１ｄ出土遺物(2)**

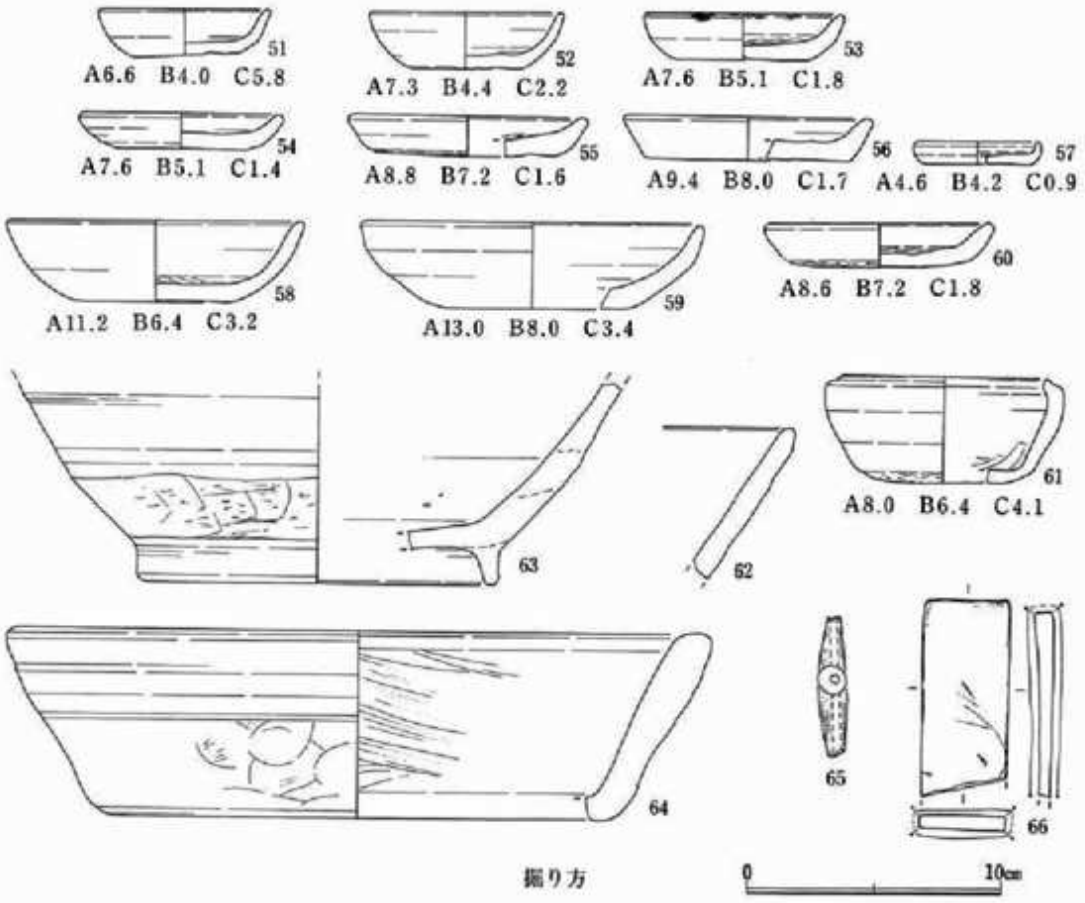



**図14　建物１ｄ出土遺物(3)**

れる形式的なものである。胎土は小石を含み、色調暗褐色。口縁外面に黄緑色の自然釉が淡く掛かっている。復元口径11.0cm、最大胴径16.8cm。

31は渥美窯の甕口縁部小片。内面には灰白色の降灰が厚く掛かり、外面は灰釉が淡くハケ塗りされている。胎土は微砂質の灰褐色土。

32・33は山茶碗窯系こね鉢。

32は端部が肥厚して玉縁状になる。小石や砂粒を多く含み、色調灰褐色。33は底部小片。外面は横位ヘラ削り、内面は横ナデ調整で僅かに摩滅している。高台は潰れて外方に開いている。胎土は微砂質の良土であるが、焼成が甘く灰橙色を呈し軟らかい。渥美系の製品であろうか。

34は瀬戸瓶子頸部。半分に割れたものを漆で継いでおり、下方断面にも漆が付着しているので、胴部と接合したものらしい。また、外面にははみ出した漆とともに木片が付着しているが、あるいはタガのようなものの痕跡であろうか。胎土は精良な灰白色土で焼成良好。内外面とも淡い灰緑色の釉が掛けられる。口径5.4cm。

35は白磁碗底部。小片より復元。内底面に一条の沈線が巡る。素地は夾雑物を殆ど含まない淡灰

白色堅緻土。釉は淡灰青色半透明で、高台脇まで垂れ掛かっている。恐らく口兀の碗であろう。復元高台径5.0cm。

36は転用陶片。常滑こね鉢の破片を利用したものであろう。総ての面が擦られ、角が丸みを帯びている。片面にはこね鉢の時の使用痕も見られる。長さ2.8cm、幅2.0cm、厚さ1.1cmと非常に小さく、あまり見ないタイプである。ものを擦るなどして利用したようには思われない。

37はいわゆる当十銭（一文銭の10倍相当）の崇寧重宝。外径が3.4cmと大きく、厚さも2㎜ほどもある。北宋代の1104年初鋳。本遺跡では、おなじく大型銭の端平通宝も採集されている。このような大型銭貨は、鎌倉のような消費経済都市においてさえこれまでの出土例は僅かに2例しかなく、本遺跡で2点の出土を見たことは特異である。全国的にも博多遺跡群から比較的多数出土している他は非常に少なく、日本国内での流通が疑問視されておりその実態は明らかになっていない[11]。

38は曲物を利用した柄杓と思われるが、孔が一方にしかない。径は13.5cm、深さ8cmほどで、側板は桜と思われる樹皮でとめられている。孔は径1.1cmで、上から2.5cmのところに開く。

39は樹皮。桜であろう。きれいにロール状になっている。幅11cm強。本建物址から他に数点、また、別の遺構からも何点か出土しているが、規格性は見られない。曲物など工芸の原材料となるものであろうか。

40は一木の鋤。床面に貼り付くように出土した。当初は完形であったが、取り上げ後に身部（鋤先部分）三分の一ほどが失われてしまった。身は端部に向けてやや薄く削り込まれるが、鉄製の鋤先を着けるための着装部は作られず、先端に使用痕らしきものも見られない。柄は身からほぼ同じ厚さで真っすぐ伸びる。断面はやや膨らんだ長方形で、角に面取りは施されない。全長105.9cm、身長37.1cm、残存身幅13.5cm、身厚0.6～2.5cm、柄長68.8cm、柄幅3.9～5.3cm、柄厚1.8～2.6cm。板目。建物9の床面からも鋤が出土しているが、これも鋤先着装部がないもので、実用性があるものとは思えない製品である。いずれの出土状況も、建物を廃棄する際に床板など再利用する部材を抜き取った後、その底面に何らかの意味をもって置かれたものと思われる。また、その形状はともに実用性に乏しく、使用された痕跡も殆ど見られない。これらの事実から、この鋤は、建物の廃棄・構築に際しての祭祀もしくは呪術に関わるものではないかと考えたことがある[12]。

41～48は土丹層出土のかわらけ。総てロクロ成形。41～46は小皿、47は中皿、48は大皿。1～23のものと比べてほぼ薄手でまとまっている。

49は常滑甕口縁部小片。これも端部が上下に小さく引き出され、縁帯の幅が狭い。

50は白磁口兀皿体部1/2片。素地は夾雑物を含まず堅緻な白色土。釉はごく淡い灰緑色で半透明。口唇の口兀部分にススが付着している。復元口径9.9cm。

図14—51～61は裏込め出土のかわらけ。59まではロクロ成形、60・61は手づくね成形である。51～56・60が小皿、57は内折れの極小タイプ、58は中皿、59は大皿。覆土同様やや混乱している。61は碗型の異形品。口縁を内側に曲げてその端部を上方に小さくつまみ上げている。

62・63は山茶碗窯系こね鉢。62はほぼ直線的に外傾し、丸く収められる端部に至るまで厚さが変

わらない。63は体部下半が一段の横位ヘラケズリ、上半は横ナデ。内面は使用により若干摩滅している。復元高台径12.6cm。

64は土器質鉢型手焙り。外面中位に一条の沈線が巡り、以下は不定方向の指ナデ、以上から口縁内側にかけては横ナデ、内面は斜位ナデが施される。胎土に小石、砂粒、白針を含み、色調は茶褐色を呈する。復元口径26.0cm、底径19.8cm、器高7.3cm。

65は土錘。長さ5.5cm、径1.0cm。細長い作りである。本遺跡からは他に数片しか出土していない。

66は砥石。黄灰色泥岩製の仕上げ砥である。両面使用。残存長7.4cm、幅3.4cm、厚さ0.6cm。

註(1) 出土例は、山崎水道山戸ケ崎遺跡の崇寧通宝（未報告）及び今小路西遺跡（御成小学校内）の皇宋元宝である。

参考：河野眞知郎「中世鎌倉銭貨考」『創立三十周年記念　鶴見大学文学部論集』1993
桜木晋一「博多遺跡群の出土銭貨(1)(2)」『法哈噠』1・2号　1992・1993　博多遺跡研究会

(2) 佐藤「方形竪穴建築址から出土した鋤2本」『鎌倉考古』No.26　1993　鎌倉考古学研究所

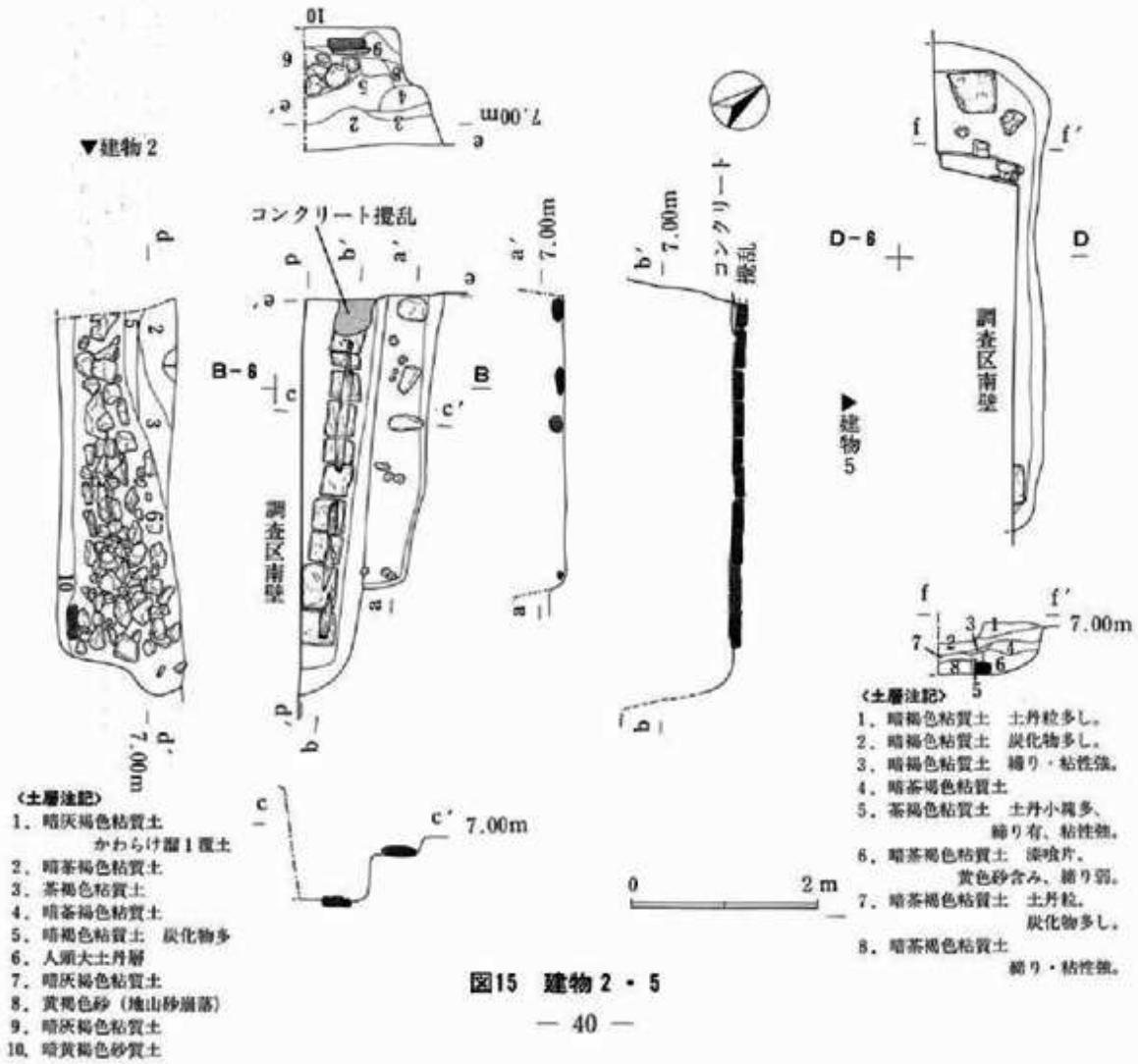



図15　建物2・5

**建物２（図15）**

グリッド　A・B－5

確認標高　7.30m

平面形状　主屋部　調査区外（確認範囲長方形）

張出部　調査区外（確認範囲長方形）

長軸方位　N－50°－W

床面規模　主屋部　石敷き面　NS…0.70m以上　EW…3.70m以上　2.59㎡以上

張出部　NS…0.45m　EW…3.05m以上　1.37㎡以上

掘方規模　NS…0.90m　EW…4.20m

床面深さ　主屋部　1.05m　標高　6.25m

張出部　0.55m　標高　6.75m

［検出状況］　表土掘削後、精査を始めてほどなく、調査区南西隅付近に大小の土丹塊が集中している部分が現れた。当初そのプランは明瞭でなく性格不明であり、土丹塊除去開始直後は井戸かとも思われたが、１mほど掘り下げたところで鎌倉石切石列が現れ、主体を調査区外にもつ方形竪穴の一角であることが判明した。

［構造］　建物２は、地覆石を用いた方形竪穴である。掘り方は下半の壁が地山となり、東端で土丹列２を切っている。覆土の殆どが人頭大土丹塊集積層であり、一気に埋められたものであろう。検出されたのは北東部分のみで主体は調査区外になってしまうため、詳しい様相は明らかにならないが、東端の切石が長方形で南の方に延びていることから、恐らくは四周にのみ切石を巡らすタイプだと考えられる。切石の大きさは、一辺が30～40cm、厚さが10cm強とかなり小さなものが多く、別の建物か何かの石材を転用したものであろう。壁体として立てられる切石は、この範囲では確認できなかった。切石以外の構造材として、地覆石の中軸線上に土台らしき木材が残っていたが、かなり朽ちていて原形を留めず、計測不可能。また、西端の地覆石上面には、調査区壁のH鋼に流し込まれたコンクリートが浸出してしまっている。

張り出し部は主屋部の北辺に接し、主屋部より約50cm高い。底面には伊豆石と土丹塊が50～70cmの間隔をおいて検出された。この部分は、調査時には一応建物２の付属施設として扱ったが、形状が細長く不自然であり、別個の遺構である可能性が高い。

［特記事項］　建物２の構築位置は、切石列１・２や土丹列１で形成される境界線のすぐ南にあたり、建物１a～dや建物８a・b、建物10などの一群とは別区画に、別の"構成原理"で建てられたものと見ることができる。また、本址が建物と判明していない段階で、ちょうどその直上（土層図中１層部分）から、かわらけの小皿ばかりが32枚まとまって出土した。器形的にもかなり均質な一群である。とりあえずかわらけ溜まりとして扱ったので、詳しくは特殊遺構の項で述べるが、建物２の土層を見ると、覆土の最上層に建物の廃棄と関連して形成された可能性も考えられよう。建物に関わる祭祀の一例と捉えられるとすれば、非常に興味深い事実である。

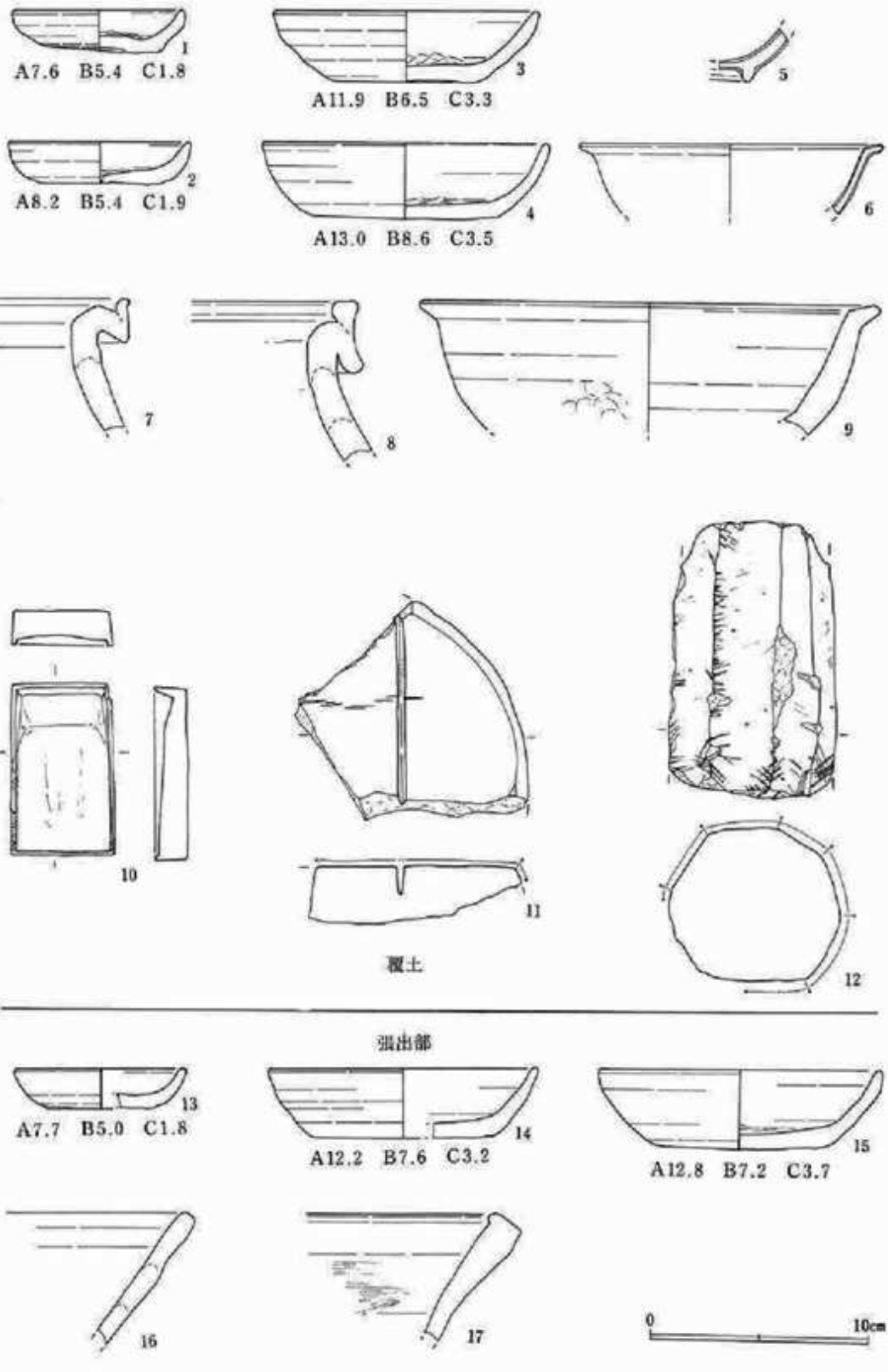

1
A7.6 B5.4 C1.8
3
A11.9 B6.5 C3.3
5
2
A8.2 B5.4 C1.9
4
A13.0 B8.6 C3.5
6
7
8
9
10
11
覆土
12
張出部
13
A7.7 B5.0 C1.8
14
A12.2 B7.6 C3.2
15
A12.8 B7.2 C3.7
16
17
0
10cm

**図16　建物2出土遺物**

**建物2出土遺物（図16）**

図16—1～12は主屋部覆土から、13～17は張り出し部から出土したものである。

1～4はかわらけ。いずれもロクロ成形で、1・2は小皿、3・4は大皿。4はやや薄手化しているが、概ねやや厚手で浅く、側面が丸みをもつタイプである。

5・6は貿易陶磁。

5は青磁鉢底部小片。素地は黒色粉粒を少量含むが、非常に緻密で断面が光沢をもつ白色土。釉は灰緑色を呈し、釉層がかなり厚いこともあって透明感に欠ける。高台畳付部分のみ削り取って露胎となっている。

6は青磁折縁鉢の体部1/5弱片。丸みを帯びた体部から外方やや上に向かって小さく折り曲げて幅の狭い口縁を形成している。素地は気孔を少々含むが堅い灰色土。焼成はやや甘いようである。釉は色調灰色がかった淡緑色を呈し半透明。内外全面にやや厚く掛けられている。また、細かな貫入が全面に広がっている。復元口径13.6cm。

7・8はいずれも常滑窯産大甕口縁小片。

7は端部を上方に突出させ、幅の狭い縁帯を作る。8はしっかり折り返して上・下両方に引き出している。

9は手焙り。厚手で丸みを帯びた体部から横ナデによって端部を外方にやや鋭く引き出している。外面下部に指頭痕が僅かに見られる。胎土はかわらけ質できめ細かく、黒色微砂、雲母を含む。色調は橙色で、火を受けたような使用痕は観察できない。復元口径20.8cm。

10は小型の長方硯。完形。石質は緻密で色調はやや灰色がかった紫褐色を呈する。陸部中央に使用による擦痕が僅かに残る。長さ7.9cm、幅4.7cm、陸部厚さ1.1～1.3cm。

11は加工途中の石材の残欠かと思われるが、砥石として使用されていた可能性もある。石質は硯石のようで緻密。色調灰褐色。表面及び側面は良く磨かれている。元来は円形をていしていたものと思われる。表面中程に、切断途中のような細く深い溝が真っすぐ走る。

12は砥石。荒砥である。石質は気孔をあまり多く含まず、色調はやや赤みがかった黄灰色。形状はほぼ八角柱状であり、その大半の面を使用している。また、各面の稜には鋭く細かい削痕が残る。長さ12.8cm、幅7.0～7.7cm。

13～15は張り出し部出土のかわらけ。13が小皿、14・15が大皿で、いずれもロクロ成形である。様相は主屋部出土のものとあまり変わらない。

16は山茶碗窯系こね鉢口縁部小片。端部はあまり肥厚せず、ほぼ丸く収められる。胎土は長石粒を主体とする小石、雲母を含んでややガサつく灰褐色粗土。内面上半に淡く灰緑色の降灰が降り懸かる。

17は瓦質鉢型手焙り口縁部小片。外面下半は不定方向の指ナデ、内外面上半は横ナデ、内面下半は横～斜位のナデが施される。胎土は白色粒、雲母を含み、色調は灰色がかった橙褐色を呈する。また、外面には被熱して黒変したところがある。

**建物5（図15）**

グリッド　C・D－5

確認標高　7.20m

平面形状　調査区外（確認範囲略長方形）

長軸方位　N－56°－W

床面規模　石敷き面　NS…1.0m以上　　EW…4.55m

掘方規模　NS…1.20m以上　　EW…5.20m

床面深さ　0.55m　　標高　6.65m

［構造］　建物5は、地覆石を用いた方形竪穴だと思われる。検出されたのはその東辺のみで、主体は南側調査区外に延びるため詳しいことは判らないが、東西両端の底面に鎌倉石切石が一個ずつ敷かれている。他の石は恐らく抜き取られたのであろう。それ以外の構造材は検出されていない。なお、本址も建物2と同様、調査区中央の建物群とは別区画に建てられたものである。

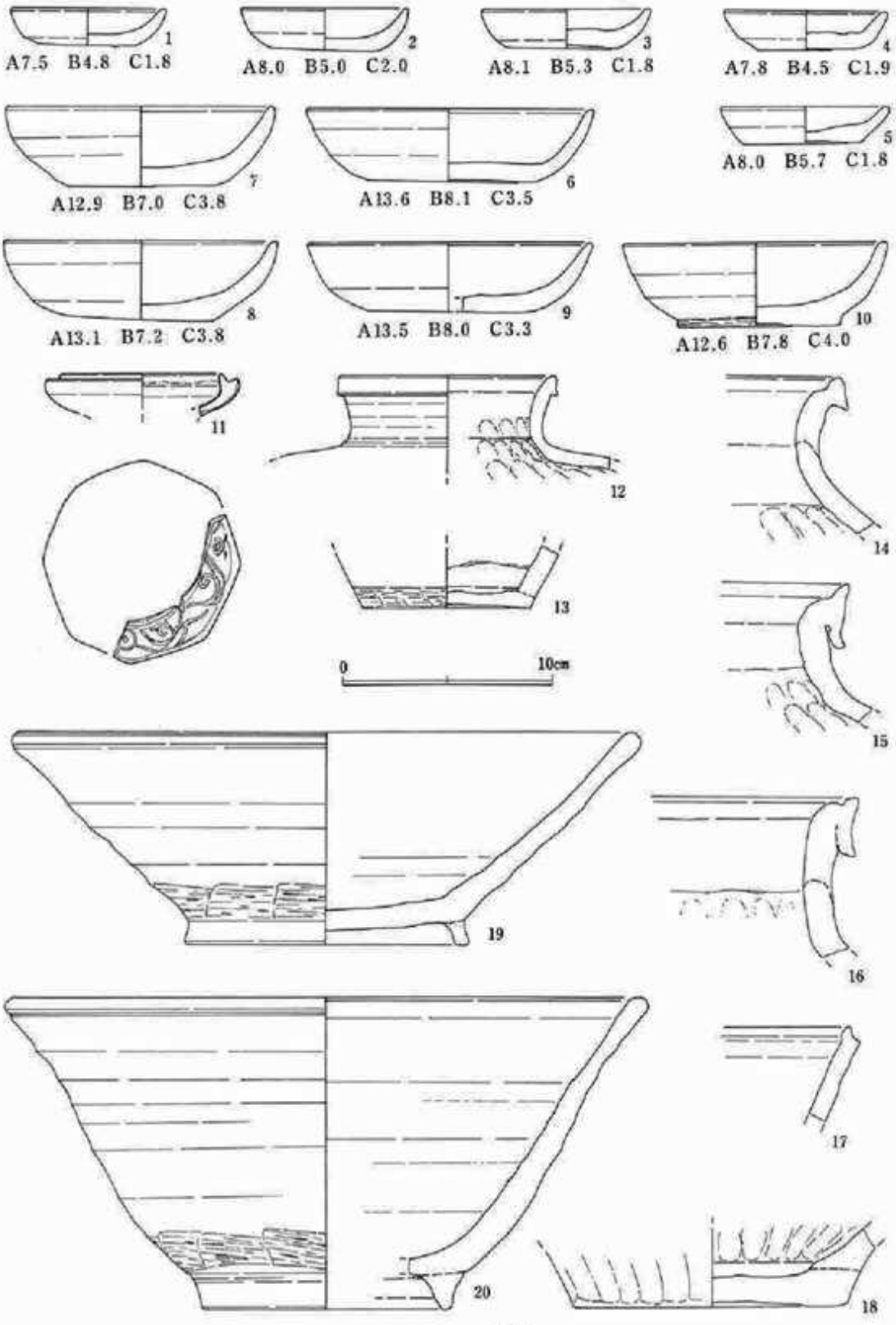
**建物5出土遺物（図17・18）**

図17－1～図18－23は覆土から、24～30は掘り方裏込め土から出土したものである。但し、検出範囲が狭く、土層が明確でなかったところも多い。

1～10はロクロ成形のかわらけ。1～5が小皿、6～10が大皿である。厚手のものが多く、器壁が上方に立ち上がる、やや深い器形となる。

11は青磁合子の身である。平面形が一辺が約3.7cmの八角形になると思われるやや珍しいタイプ。体部外面に型押しされた唐草文様が巡る。断面の様子から高台がつくものと思われる。素地は夾雑物を含まない灰白色堅緻土。釉は不透明なオリーブ色を呈し、内外面に掛けられるが、口縁内側から蓋受けの部分は拭き取られている。また、内外とも細かな貫入が見られる。対角における復元口径7.5cm、最大径9.4cm。

12～18は常滑。12は壷の肩部以上片。外面から口縁内側にかけては横ナデ、それより下位には指頭痕が明瞭に残っている。胎土は長石を含むが精良で、岩石質に堅く焼き締まっている。色調は灰黒色だが、外面には灰緑色の降灰が目立つ。復元口径10.1cm。13は壷底部。恐らく鳶口になるものであろう。外面下端は幅の狭い横位ヘラケズリ、以上は横ナデ。内面は荒いナデ成形。外底面は砂目でやや薄く作られている。胎土は長石を含む砂粒が多く、黒色土が流文状になっている。色調は暗赤灰色。復元底径8.0cm。14～16は甕口縁部小片。14はやや傾きに不安があるが、湾曲して外反する頸部から、強いナデによって、幅の狭い縁帯を作り出している。15・16は直立する頸部から屈曲してやや幅広の縁帯が付く。いずれも胎土に長石・砂粒等は少なく、色調は灰褐色系である。17はこね鉢口縁部小片。強いナデによって口唇は小さくつまみ上げられ、外面は僅かに突帯状に張り出す。胎土は長石を多く含みやや砂質。焼成は良好で色調茶黒色を呈する。18は甕底部。体部下半はヘラにより撫で上げられ、内底中央部にはナデよる凹凸がある。胎土は長石を含むが良土。色調灰褐色。内面に緑がかった灰白色の降灰が厚くかかる。復元底径13.1cm。




覆土

**図17　建物5出土遺物(1)**

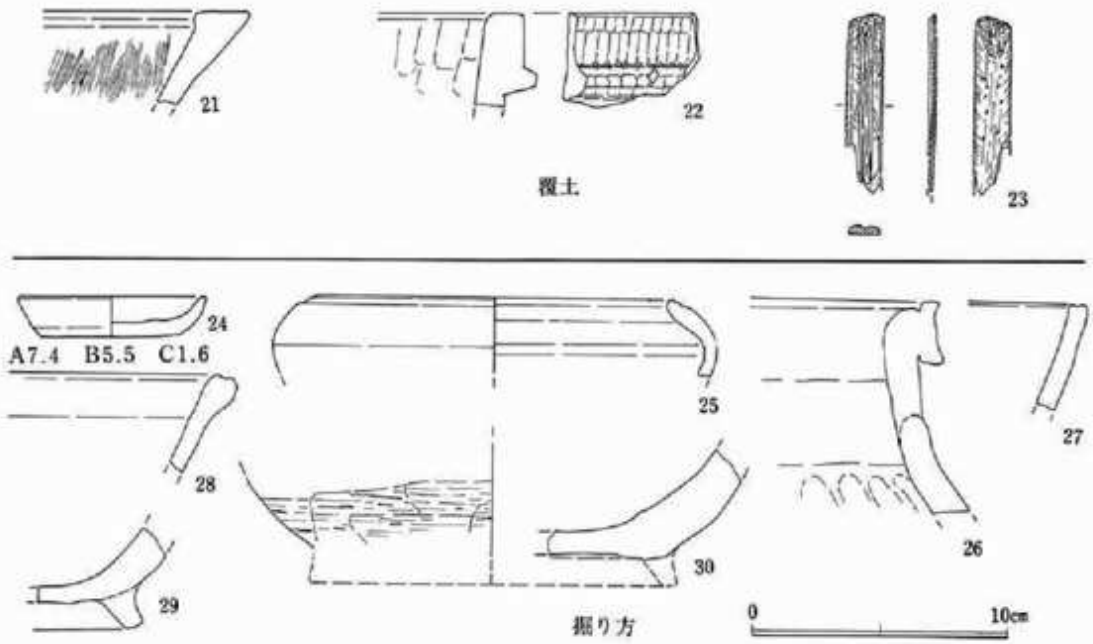



**図18　建物5出土遺物(2)**

19・20は山茶碗窯系こね鉢。いずれも破片よりの復元。成形は内外横ナデで、外面下端に一段のヘラケズリが入る。19は器壁が直線的に外方に開き、口縁端部はやや肥厚して丸く仕上げられる。内面下半は若干摩耗するが、ナデの目がはっきり残る。高台はやや潰れて八の字型に開いている。胎土に小石粒は少ないが、表面に鉄分の噴出がやや多く見られ、粘性をもつ。色調暗灰色。口径29.0cm、高台径13.5cm、器高10.1cm。20は下半の器壁が厚く、やや内湾気味に立ち上がった後、上部1/3ほどのところで屈曲して直線的に外傾する。内外にナデの目が強く残る。内面はその屈曲部より下方が摩滅するが、これもさほど使い込まれた様子はない。高台は断面逆三角形でしっかりした作りである。胎土は小石粒を多量に含んだ粗土で、焼成やや甘く、色調は灰色を呈する。

21は土器質鉢型手焙り。口縁は肥厚して内外に少し張り出し、上端面がほぼ水平になる。胎土は石英・粗砂を多く含み、表面は灰白色に被熱変色している。

22は滑石鍋。内面のケズリは粗いが、外面は縦位の細かく丁寧なケズリで成型している。外面には一部に煤が付着する。

23は骨製笄。表面は丁寧に磨かれているが、頂部には未調整の削り面がそのまま残る。幅1.4cm、厚さ0.4cm、残存長6.9cm。

24はロクロ成形のかわらけ小皿。

25～27は常滑。25は片口碗。口縁は内側に強く傾き、口唇に一状の沈線が巡る。胎土は長石・鉄分を含むが比較的緻密。色調は茶灰色を呈し、外面に暗灰緑色の自然釉がかかる。口径13.8cm、最大胴径17.4cm。26は甕口縁。覆土出土のものと同様である。27はこね鉢口縁。器壁やや薄く端部は角張る。胎土は小石粒・鉄分を含むが緻密な灰色土。

28～30は山茶碗窯系こね鉢。28は端部が肥厚し一条の沈線が巡る。29はやや潰れた高台をもち、内面は良く摩耗して滑らか。30も内面が摩耗し、高台は剥離している。推定高台径14cm程か。

**建物８ａ（図19）**

グリッド　D－2・3

確認標高　7.40m

平面形状　長方形

長軸方位　N－61°－W

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 床面規模 | 石敷き面 | NS…3.40m | EW…4.55m | 15.47㎡ |
| | 地覆石芯々 | NS…2.80m | EW…3.90m | 10.92㎡ |
| 床面深さ | 0.50m | 標高　6.90m | | |

［構造］　建物８ａは、建物８ｂを埋めて同じ位置に建築された、地覆石を用いる方形竪穴である。本址も、表土掘削直後は土丹塊の集積として把えられていたが、その密度は低く、プランも不正形であったため、地覆石が検出されるまではそれと判らなかった。そのため、完掘時の壁高はかなり低くなってしまっている。地覆石は長さ80～85cm、幅35～45cm、厚さ12～15cmほどの鎌倉石を用いており、その長辺を接するようにして敷き並べてある。遺存していたのは西・南の二辺のみであったが、本来は四周に巡らされていたものであろう。但し、長辺を接する地覆石の並べ方をする建物は、内部にも切石を敷き詰める場合が多く、本址も全面石敷きであったものかも知れない。また、遺存した地覆石の多くが中央付近で二つに折れている。特に西辺のそれは折れている位置がほぼ一直線に並び、西側の破片が東側に比してやや落ち込んでいる。これは、地覆石の西側に一様に相当な荷重がかかったため生じたものであろう。後述する建物10では、重長な土台と二段積みにされた壁石の荷重によって、地覆石が内側の敷石よりも数センチ沈下していた。本址も同様に堅牢な上部構造であったことを推測させる。

**建物８ａ出土遺物（図20）**

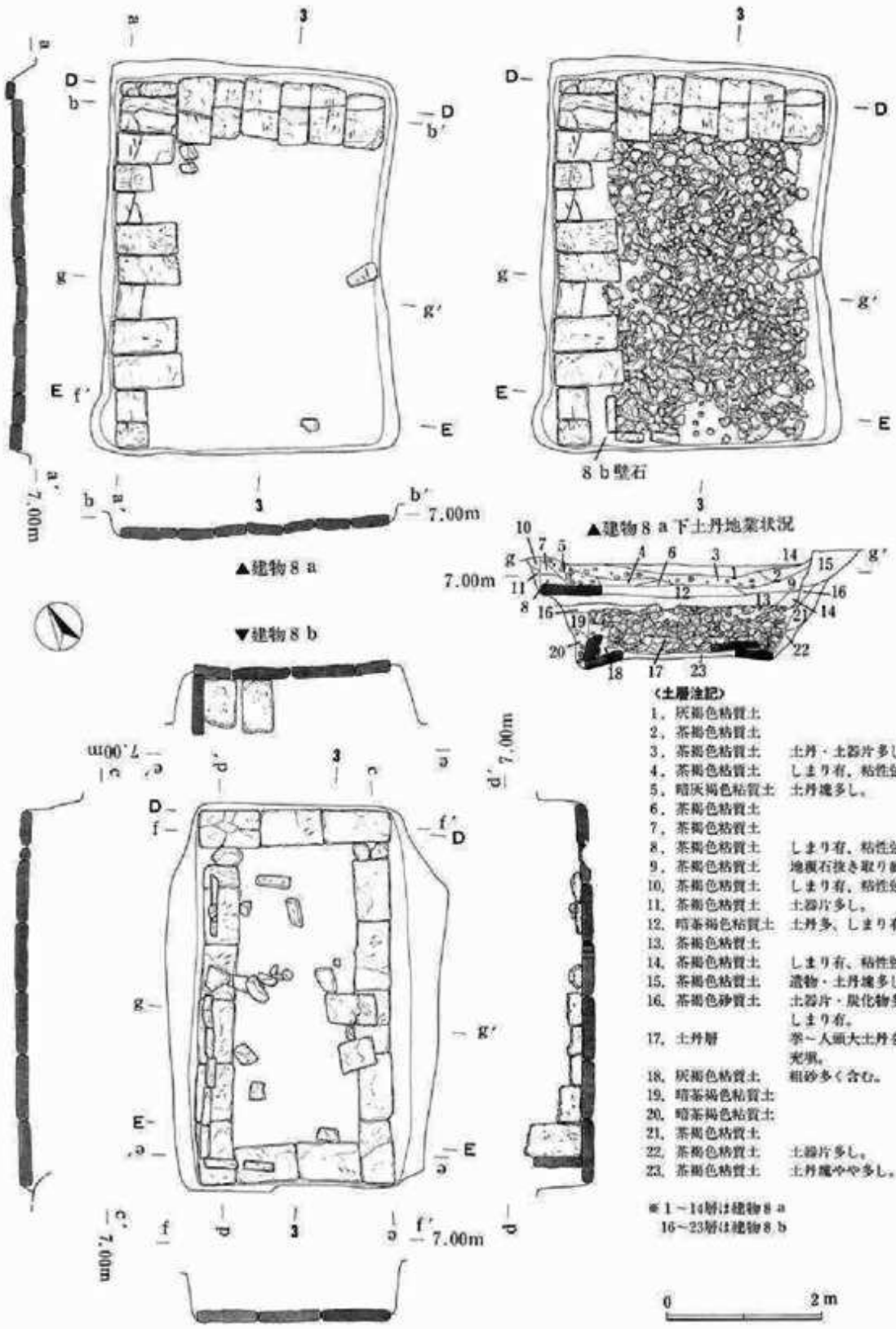
図20－１～15は覆土出土、16～27は掘り方出土である。但し、この場合の掘り方とは床面直下の土層（図19土層図中12・13層）を指しており、建物８ｂの埋土と厳密な意味で分けられるものではない。

１～８はかわらけ。すべてロクロ成形。１～３が内折れのミニタイプ、４～６が小皿、７・８が大皿である。全体にやや厚手で浅い。

９・10は瀬戸。

９は入子皿。内底面が磨かれたように滑らかになっている。微砂質の胎土で焼成は良好。色調灰色を呈する。復元口径6.3cm、底径3.6cm、器高1.9cm。

10は卸し皿底部片。外底面は糸切り。胎土は微細な気孔をもつが、灰白色で良い焼きである。内面に淡い黄緑色の釉が見られる。復元底径9.0cm。




〈土層注記〉

1．灰褐色粘質土
2．茶褐色粘質土
3．茶褐色粘質土　土丹・土器片多し。
4．茶褐色粘質土　しまり有、粘性強。
5．暗灰褐色粘質土　土丹塊多し。
6．茶褐色粘質土
7．茶褐色粘質土
8．茶褐色粘質土　しまり有、粘性強。
9．茶褐色粘質土　地覆石抜き取り痕。
10．茶褐色粘質土　しまり有、粘性強。
11．茶褐色粘質土　土器片多し。
12．暗茶褐色粘質土　土丹多、しまり有。
13．茶褐色粘質土
14．茶褐色粘質土　しまり有、粘性強。
15．茶褐色粘質土　遺物・土丹塊多し。
16．茶褐色砂質土　土器片・炭化物多。しまり有。
17．土丹層　拳～人頭大土丹を充填。
18．灰褐色粘質土　粗砂多く含む。
19．暗茶褐色粘質土
20．暗茶褐色粘質土
21．茶褐色粘質土
22．茶褐色粘質土　土器片多し。
23．茶褐色粘質土　土丹塊やや多し。

※1～14層は建物８ａ
16～23層は建物８ｂ

**図19　建物８ａ・８ｂ**

11～13は常滑。

11は甕口縁部小片。端部を下へ折り曲げた後上方へ僅かに引き上げ、断面T字状の縁帯を作る。胎土は白色粒・砂礫を少々含むが粘質で締まる。色調は表面赤褐色、胎芯灰黒色。

12は甕底部片。外底面は砂底で、外縁の一部に重ね焼きのために挟み込んだと思われる小さな陶片が溶着して残っている。また、その部分は荷重によってやや変形している。胎土は砂粒を含むが比較的緻密な良土。表面茶褐色、胎芯灰色。復元底径14.0cm。

13はこね鉢口縁部。外面は板ナデ、端部は角張り、横ナデによって外方に弱く突帯を形成する。胎土は長石粒・砂礫を多く含み堅い。色調は茶褐～褐色。内面に粗斑降灰。

14は山茶碗窯系こね鉢。1/3程の破片より復元。外面下半に横位ヘラケズリ。外底面は砂底たがケズリが入る。内底面の外縁から内面下半にかけてやや摩滅するが、中央付近は擦り減っていない。高台畳付部が欠損しているが、重ね焼きで溶着したためであろうか。胎土は微細な長石粒・砂礫をやや多く含みザラつく。焼成がやや甘く、色調淡黄橙色。高台径は推定12cmほどである。

15は女瓦片。凸面には縄目叩きを施し、凹面はごく弱いが布目痕・模骨痕が残る。側面はヘラケズリ。胎土は砂粒を少々混じえるが精良で、焼成はやや甘い。色調灰～茶灰色を呈する。厚さ1.7～1.8cm。

16～20はロクロ成形のかわらけ。16は内折れミニ、17・18は小皿、19は中皿、20は大皿。17は歪みが大きく、口縁内外に煤が付着する。

21は白磁四耳壺の高台部小片。高台外面中程に回転ケズリにより強い稜を形成する。素地は若干の気孔をもつが粘性があり緻密な明灰色土。釉は内底面及び外面の稜以上に掛けられ、色調淡灰緑色を呈する。

22～24は常滑。

22は甕口縁部小片。やや幅広で外方に開く縁帯をもつ。二次焼成を受けたものと思われ、自然釉が荒れて剝げ落ちている。

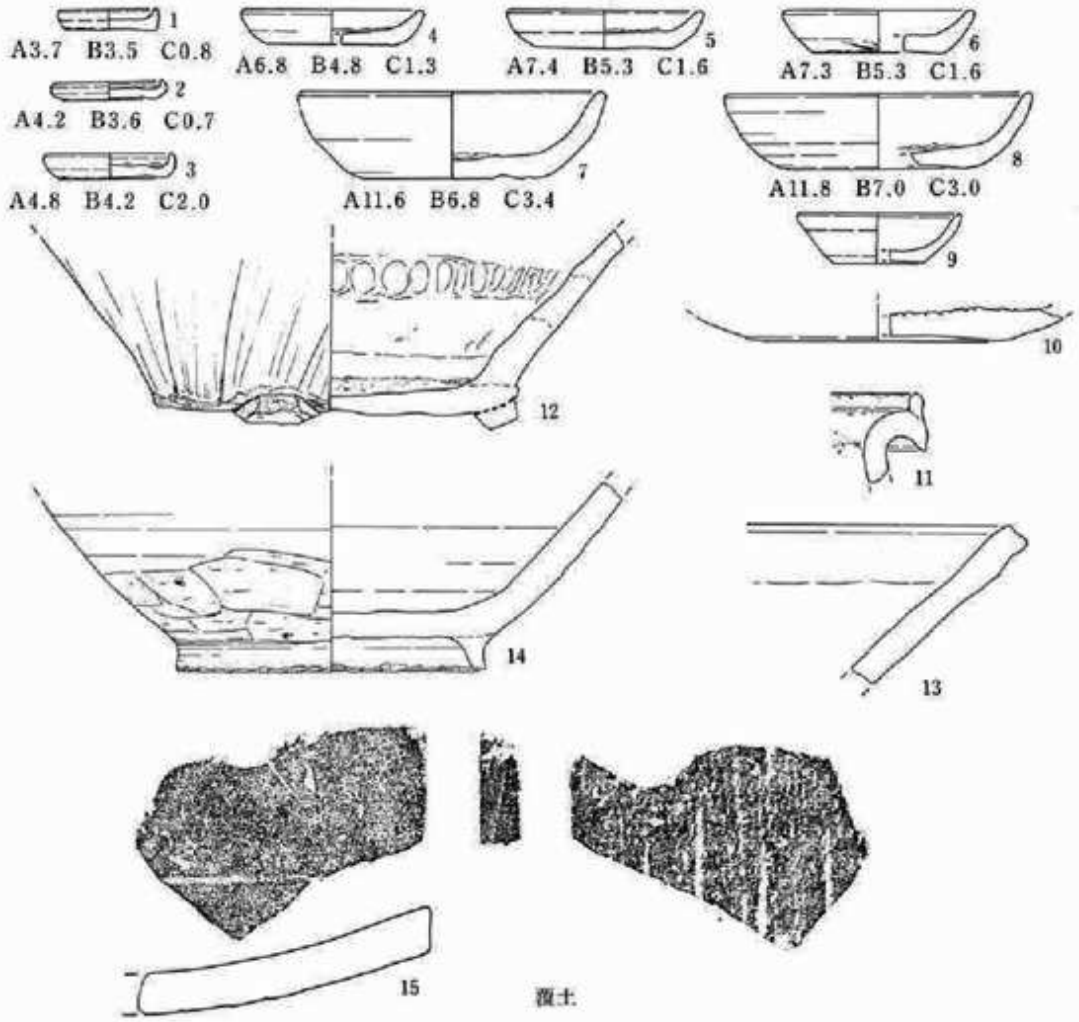
23は壺口縁部片。小さくすぼまった頸部から逆八の字状に開く。口縁は端部を下方に折り返し玉縁状になるが、先端は器面から離れている。胎土は長石・砂粒を含んでややガサつき、色調茶褐色。復元口径9.6cm、頸部径7.6cm。

24は鳶口壺。小片を接合して復元したもので、片口部分は遺存しない。口縁部は小さく折り返され、断面三角形となる。胎土は砂粒等少なく比較的よく締まった良土。表面茶褐色、胎芯暗灰色。復元口径6.2cm、底径8.4cm、最大胴径12.6cm、器高10.1cm。

25はかわらけ質手焙りの口縁部小片。ナデにより端部が外方に水平に引き出される。内面に黒色・白色の溶着物が斑らに付着し、被熱で褐色に変色している。胎土は夾雑物を殆ど含まないがやや粗。表面黄橙色、胎芯赤橙色。

26・27は石製品。

26は平面やや歪んだ円形で、表面は丁寧に磨かれている。黒色の碧石と思われる。径1.6～1.9cm、



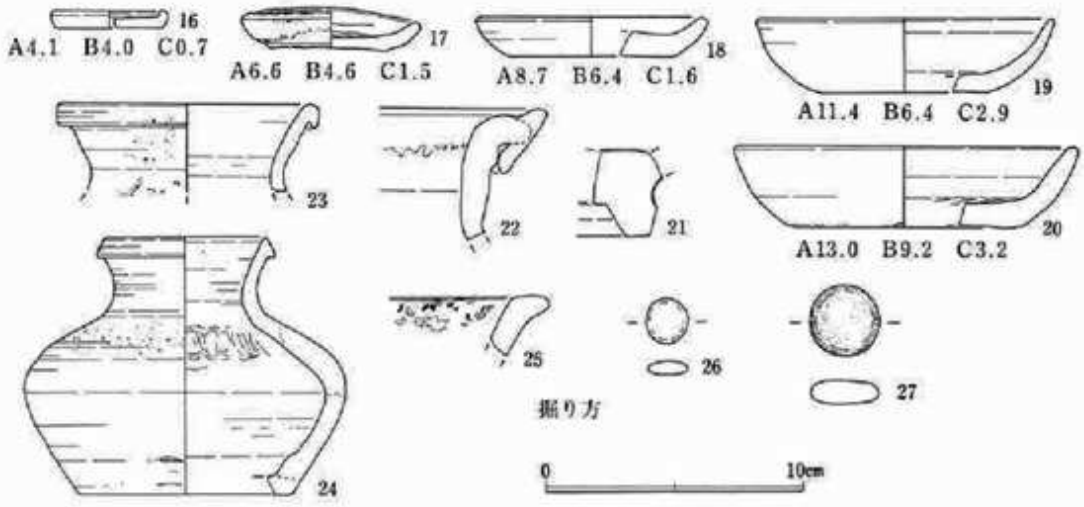




図20　建物８ａ出土遺物

厚さ0.6cm。

27は安山岩系の石質で、平面ほぼ真円形に磨いて成形している。色調はやや青味がかった灰黒色。径2.8cm、厚さ0.9cm。

**建物8b（図19）**

グリッド　D－2・3

確認標高　6.75m

平面形状　長方形

長軸方位　N－62°－W

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 床面規模 | 石敷き面 | NS…2.50m | EW…4.75m | 11.88m² |
| | 地覆石芯々 | NS…1.95m | EW…4.25m | 8.29m² |

床面深さ　0.70m　　標高　6.05m

［検出状況］　建物8aの床下を断ち割ったところ、8a石敷き面より30cmほど下に人頭大土丹塊を集積した面が検出された。これが建物8bの埋土の主体であったわけだが、当初はやはり不明で、8aの基礎構造と見なした。これまでも述べたように、下層方形竪穴を大土丹塊で充塡する例が本遺跡では多い。これなどは状況からすれば、正しく8aの建物基礎地業としての作事と見るべきであろう。

［構造］　建物8bは、地覆石を用いた方形竪穴である。西辺で建物9を切っている。地覆石は、鎌倉石切石を短辺を接するようにして、四周に巡らしている。切石は規格性が高く、長さ80～90cm、幅45cm前後、厚さ12～15cmで均一である。しかし、南北両辺が西辺に接する部分には小さな断片が用いられている。土台の長さに合わせるための調整ではないだろうか。敷石の範囲は他のものに比べてかなり小さい。石敷きのものは方形竪穴一般の中では概して規模が大きいが、これはその中にあって最小クラスのものと言えよう。

南辺と東辺南隅の地覆石上には壁石が立ったままの状態で検出されたが、その多くは折損して基部が残るだけで、南東コーナー部分のみが原形を保っている。その高さは70cmほどであった。壁石の内側には一部に腐植土が堆積しており、土台などの痕跡と思われる。北辺中央にも壁石と見られる切石が一個倒覆しており、内部にも残欠が点在する。

**建物8b出土遺物（図21）**

図21－1～10はかわらけ。総てロクロ成形。

1は内折れの極小タイプ、2～7は小皿、8は中皿、9・10は大皿。7は底径が大きくやや古い。内外には煤が付着する。全体にやや厚手のものが主体を占めるが、8・9のように薄手化の製品も入っている。

11は白磁小皿。約1/5ほどの破片より復元。内面に唐草様の花文を型押しし、口縁外面には重ね焼きの目跡のような粘土粒が溶着している。素地は夾雑物を含まず堅緻な白色土。釉は乳白色を呈し

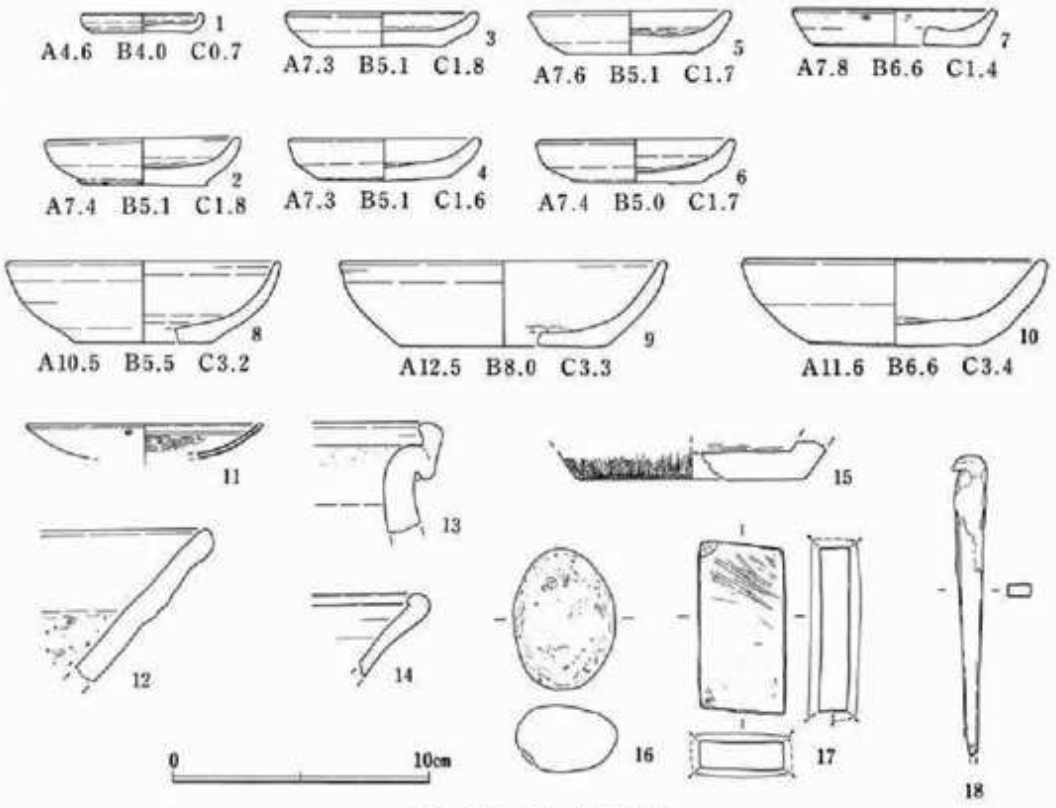



**図21　建物８ｂ出土遺物**

内外面に掛けられるが、口唇部は削り取って口兀となっている。復元口径9.0cm。

12は山茶碗窯系こね鉢。胎土は長石・砂粒を多く含む灰色粗土。内面下半が良く摩滅している。

13・14は常滑。

13は甕口縁部小片。断面N字状になる。胎土は長石・砂礫をあまり含まず、良く焼け締まっている。色調茶褐～灰色。口縁内側から外面にかけて深緑色の自然釉が厚く掛かる。

14は鉢になるとおもわれる。外側に開いた薄い器壁からやや肥厚して口縁に至り、端部は丸く内側に向かってなでられて僅かに突出する。胎土は砂粒等少ないがややガサつく。色調は表面が茶褐色、胎芯が灰黒色。内面下半に斑状降灰が掛かっている。

15は滑石鍋底部。体部外面には不明瞭だが、細かな丸ノミ状工具の削痕が見られ、全体に煤けている。復元底径8.7cm。

16は加工軽石。平面いびつな長円形に擦って加工したもの。石質は気孔が多く、径１～４㎜の黒雲母粒を多数含んでいる。長さ5.5cm、幅4.0cm、厚さ2.6cm。

17は砥石。黄白色泥岩質の仕上げ砥。本来の形状が折損した後、中央付近を半分の厚さまで切削し、折り取って再利用したものと思われる。両面使用。長さ6.5cm、幅3.4cm、厚さ1.1cm。

18は鉄釘。先端は欠損するが、四寸ほどの長さであろう。頂部は平たくたたき潰して一方に折り曲げてある。断面長方形。残存長11.7cm。

**建物９（図22）**

グリッド　C－3・4

確認標高　6.80m

平面形状　主屋部　長方形

張出部　長方形か

長軸方位　N－34°－E

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 床面規模 | 主屋部 | 土台芯々 | NS…4.40m | EW…3.15m | 13.86㎡ |
| | 張出部 | 推定 | NS…1.0m | EW…1.35m | 1.35㎡ |
| 掘方規模 | 主屋部 | | NS…6.65m | EW…4.50m | |
| | 張出部 | 推定 | NS…1.50m | EW…2.7m | |
| 床面深さ | 主屋部 | 1.20m | 標高　5.60m | | |
| | 張出部 | 0.90m | 標高　5.90m | | |

［構造］　建物９は、長方形の主屋と張り出し部とからなる方形竪穴である。南東部分を建物１ｄに、北東部分を建物８ｂにそれぞれ切られており、また、北西部分で井戸７と井戸状遺構を切っている。本址は、床面が湧水レベル（5.8～6.0m）より低いため、木製部材の遺存状況がかなり良好であった。なお、基本的な構造は後述の建物10と同様であるので、以下の記述は図30の構造模式図を参照されたい。

土台は東辺・南辺と西辺の南半分が原位置に残っている。規模は、幅11cm、高さ９cm、長さが東辺で残存3.20m（南辺の位置から推定される当初の長さは4.40m）、南辺で2.85m（推定3.30m）程である。西辺は残存長2.25mだが、中央部の断面の様子からすると、建物廃棄時に切り取られたのではなく、元々二本以上の材をつないで用いていたものと思われる。各土台上面には10cm×５cm、深さ４cm程のほぞ穴が、芯々で約55cm間隔、対辺同士で対称位置に穿たれている。間柱が立つのであろう。ただ、東西両辺とも、中央（根太接続部）の穴と一つ南の穴との間は65cmほどもあり、構造上の意味は不明。南辺の張り出し部に接する部分では穴は開けられない。土台の北西隅はほぞ組みで、隅柱を立てる７cm×９cm程のほぞ穴が開けられている。また、土台直下には処々に礎板が挟み込まれ、その水平を支持している。

根太は長辺の中央を東西に走る。規模は長さ1.5m、幅９cm、高さ５cm程。中心で相欠き継ぎの要領で２本をつなぎ、両側から杭で押えている（PL.11－ｃを参照）。二本とも土台とはほぞ組みでつながれていた。また根太にも礎板が敷かれている。

南辺土台と根太の上面には、腐食しながらも鉄釘が残っていた。床板を固定していたものであろう。釘は曲がって頂部を失っているものばかりで、建物廃棄時に床板を強引に引き剥がしたことを物語っているが、状態の良いもので２cmほど頭を出している。またその位置は均等でないが、土台のほうでは25～40cm間隔で打たれており、板一枚の幅が凡そ30cm、厚さ２cmほどだったことを推測させる。土台と中央の根太の間には原位置を保つ構造材は他に残っておらず、もしこれが原状であ

るなら板の長さも220cmと推定できることになる。

土台のすぐ外側には横板が、その後ろには縦板が立てられる。横板は、残りの良い南辺で長さ190cm、幅32cm、厚さは3cm程もあるものである。それに比べると後ろの縦板は1～2cmの厚さしかな

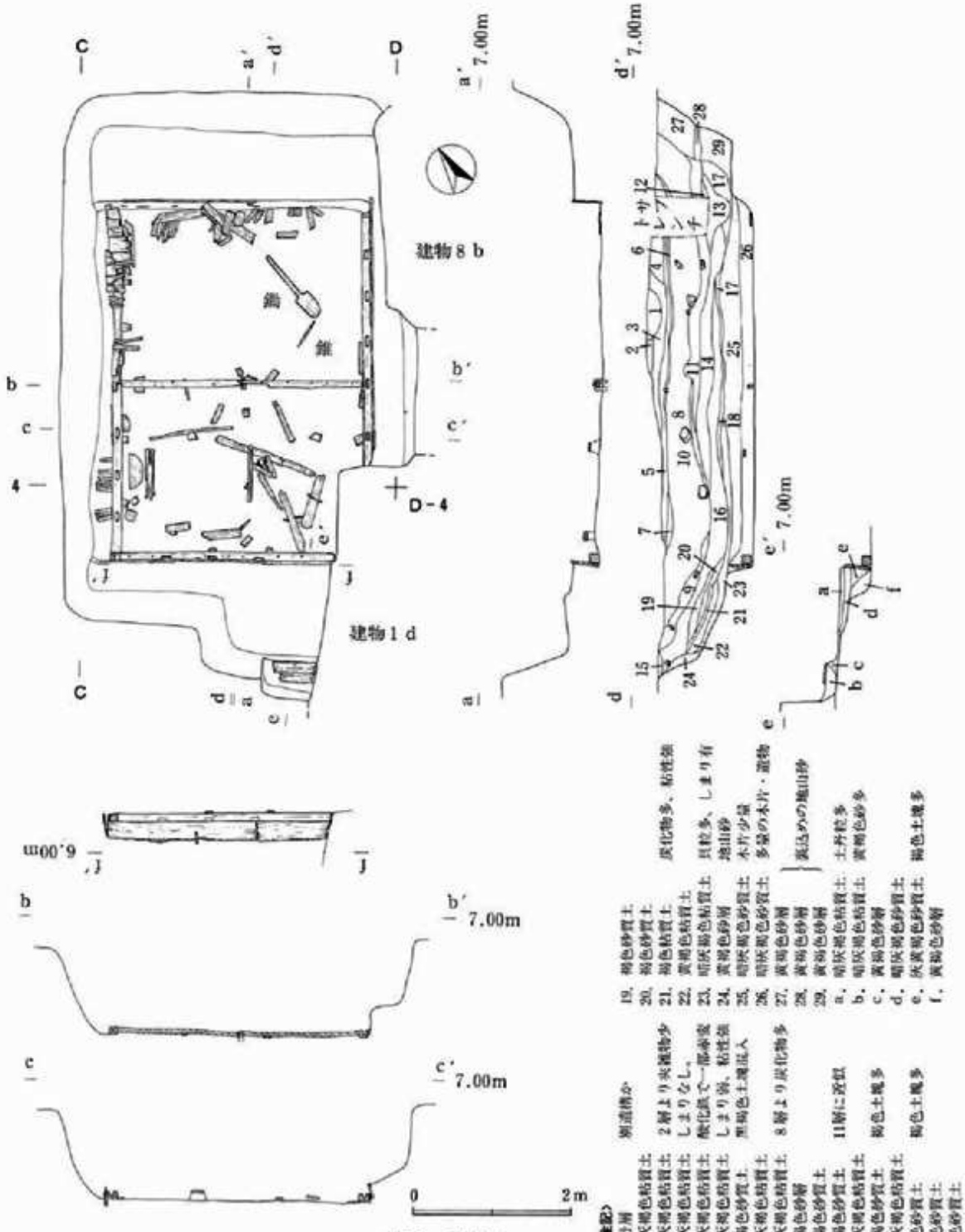



図22　建物9

く、遺存状況も悪い。

張り出し部は南東隅に付く。木製部材は殆ど検出されなかったが、南側に15cm上がって更に50cm程張り出す部分があり、その底面に板状の材が残っていた。一見階段を思わせるが、確認面から70cmも下がっている。しかし、張り出し部に接する土台に間柱の立つほぞ穴がないことからすれば、やはりここは階梯で上り下りする入り口施設の可能性が高い。

掘り方は南北に広いのが特徴的であり、地山（黒褐色粘質土・黄褐色砂層）を大きく掘り抜いて作られている。

［特記事項］　建物９はその構造に切石を用いない。また、石敷きの建物１ｄ・８ｂに切られ、軸線もそれらとは異なって南北を基調とする。覆土に土丹塊を多量に含むこともない。これらのことから本建物は石敷き建物の前段階の、恐らくは本遺跡内で最も古い方形竪穴の一つであり、敢えて言えば別の〝構成原理〟に基づいて建てられたものと推察される。建築構造としては石敷きの建物と同様であるが、西辺土台や根太の造作からして、転用材が用いられている可能性が高い。

**建物９出土遺物（図23～28）**

図23－１～図28－116が建物覆土上層から、117･118は床面直上から、119～125は床下から出土したものである。ここで床面とは、凡そ土台上面レベルを指し、床下は以下掘り方底面までを意味する。

図23－１～44はかわらけ。１～22、24～37はロクロ成形、23・38～44は手づくね成形である。様相は全体に混乱しているが、小皿には厚手で底径大きく器高の低いものが多く見られる。手づくねにも42・43など、古い特徴をもつものが入る。

図24－45～53は貿易陶磁。

45・46は龍泉窯系青磁劃花文碗小片。45の文様は唐草の一部と思われる。素地は若干の気孔をもつが堅緻な淡灰白色土。釉は淡青色透明で層が厚い。46は蓮華の一部が見られる。素地は夾雑物なく堅緻な暗灰褐色土。釉はオリーブ色で透明感がある。

47・48は龍泉窯系青磁蓮弁文碗。47は幅の狭い蓮弁だが、釉層が厚く不明瞭。素地は若干の粉粒を含むが緻密な淡灰白色土。釉は淡緑色透明。復元口径13.8cm。48は幅広の蓮弁。図上の割り付けが間違っている。素地は夾雑物を含まず灰色堅緻。釉は淡オリーブ色半透明。復元口径16.0cm。

49は龍泉窯系青磁碗底部片。無文のようである。素地は若干の気孔をもち灰白色を呈するが、高台付近は淡い肌色になる。釉は青緑色半透明で層が厚く内外面に掛けられるが、高台畳付部のみ削り取られて露胎となっている。復元高台径4.2cm。

50は青白磁梅瓶底部片。唐草かと思われる文様が一部残る。素地は若干の黒色粉粒を含み緻密だがやや軟質な灰白色土。釉は青味がかった灰白色で半透明。高台外面から外底面にかけて露胎。復元高台径8.2cm。

51は白磁。合子の蓋か。外面には不明瞭だが花文が型押しされている。素地は夾雑物なく堅緻。釉は淡く緑がかった灰白色で透明感があり、外面及び内面上半に掛けられる。

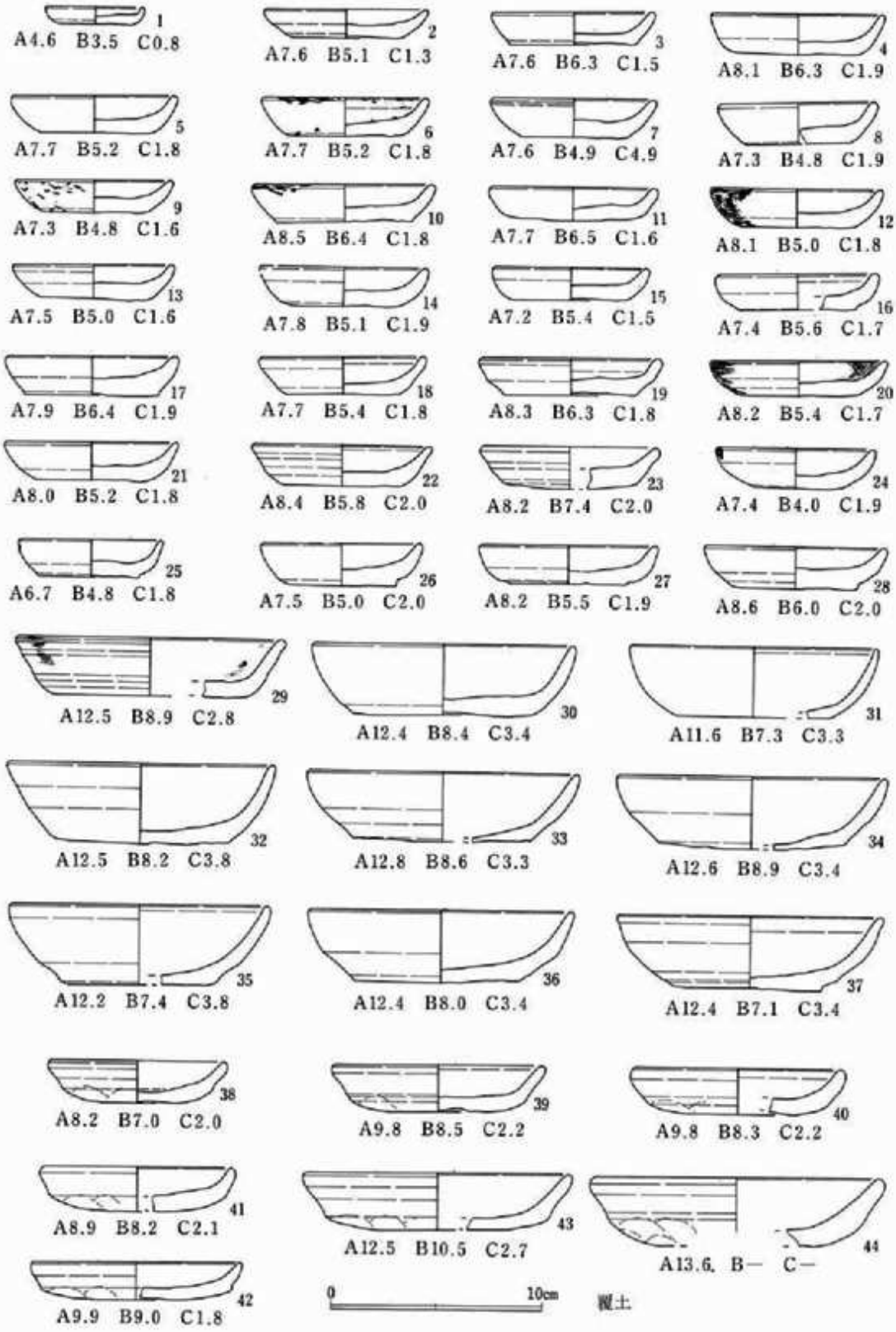



**図23　建物 9 出土遺物(1)**

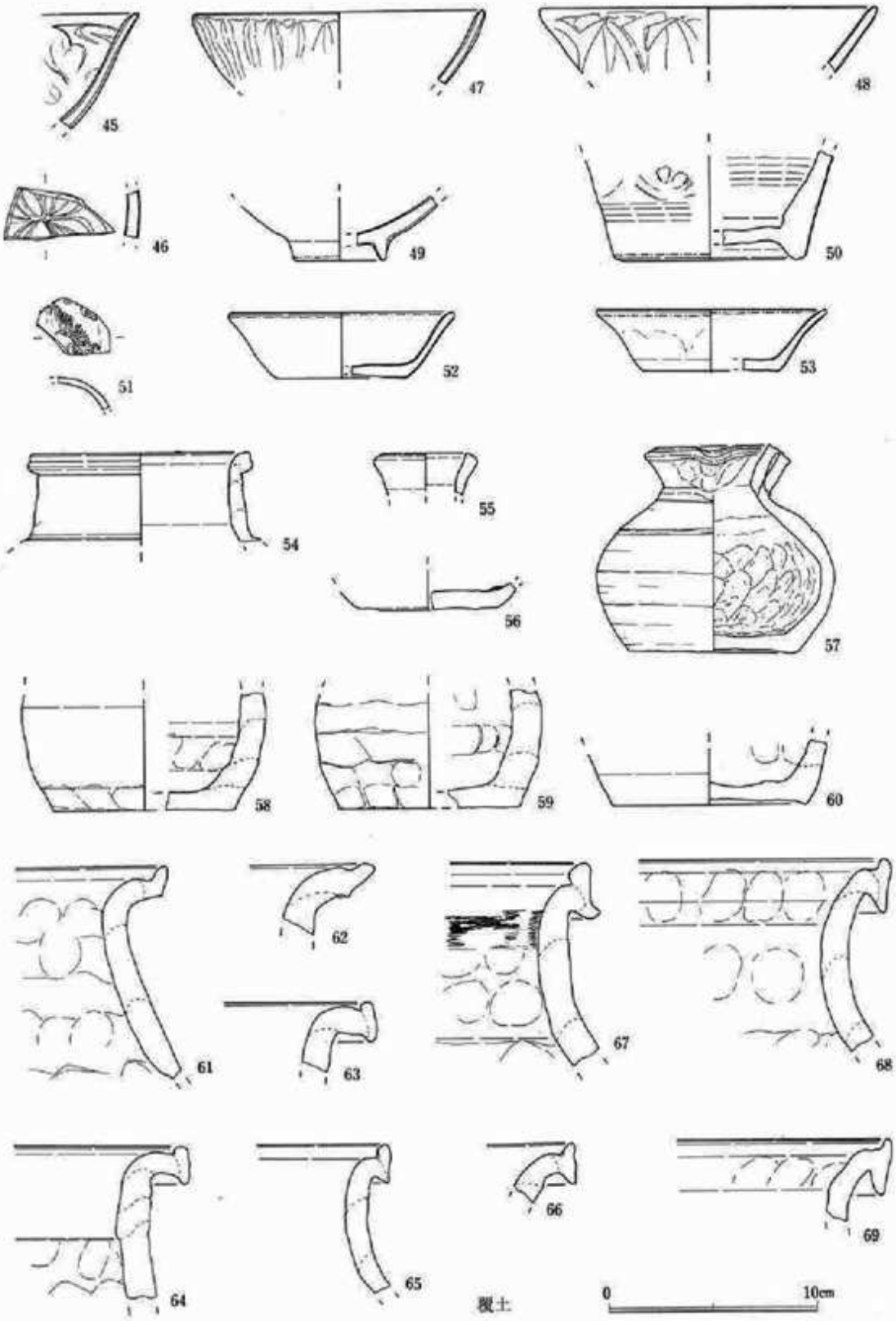



**図24　建物 9 出土遺物(2)**

52・53は白磁口兀皿。52は体部下半がやや丸みをもち口縁が肥厚してやや開く。素地は堅緻な白色土。釉は淡青灰色半透明。口兀部分に一部煤が付着。復元口径10.7cm、底径6.2cm、器高3.2cm。53は更に外反して開く器形となる。素地は粉粒を含むが堅緻な灰白色土。釉は淡灰白色半透明。復元口径10.8cm、底径6.5cm、器高3.0cm。

54～図26—77・82～84は常滑。

54は壺頸部。口縁形態は玉縁状。胎土は砂粒等少なく比較的粘性をもった密な土。色調は表面赤褐色、胎芯暗灰色。復元口径10.2cm。

55は鳶口壺口縁部小片。胎土は微砂を少量含むが粘性のある密な土。色調は暗灰色。復元口径3.9cm。

56は山茶碗底部。高台が剝がれてしまっている。長石粒・砂礫を含む粗胎。外底面に糸切り痕が残る。復元底径6.6cm。

57は鳶口壺。建物覆土中のやや離れたところから出土した二片が接合して完形となる。胴部は丸みをもち、撫で肩には一条の沈線が巡る。口縁形態は端部を外方に小さく引き出して突帯状になり、片口はヘラと指によってやや鋭くつまみ出している。外底面は砂目、外面から内面上半は横ナデ、下半には押さえとナデによる指頭痕が明瞭に残っている。底部には焼成時に生じたと思われる亀裂があり、液体容器としての機能は果さなかったものであろう。胎土は白色粒・黒色微砂を多く混じえ、気孔も多いが堅く締まる。色調は表面が茶褐色、胎芯が灰色。外表上半には灰緑色の降灰がやや厚く掛かっている。口径5.3cm、最大胴径11.4cm、底径7.9cm、器高9.8cm。

58～60も鳶口壺の底部片であるが、57に比べて器壁がかなり厚手である。いずれも胎土は砂粒・気孔をやや多く含むが、比較的きめ細かい良土。58・59の外面下端には横位のヘラケズリが施される。復元底径は58・59が8.7cm、60が9.2cm。

61～74・図26—76・77・84は甕類。

62・63・76や65・71のように端部を上方にのみ小さく引き上げる古手のものも含まれるが、大半は上下にやや突出して幅の狭い縁帯を形成するタイプである。77は口縁の一部に粘土塊が溶着しているが、重ね焼きに関わるものか不明。復元口径は、70が28.3cm、71が31.7cm、72が32.6cm、73が36.5cm、74が28.2cm、77が41.2cmを測る。また、67の内面口縁直下には煤状の黒色物質が薄く付着している。最近、同様の甕内付着物について、甕内に貯蔵されていた燈油が炎上した時の炭素・煤である可能性が指摘されている(22)。

75・82・83はこね鉢。75は内面がよく摩耗している。復元底径16.5cm。82は口縁付近が強いナデで薄くなる点やや特異だが、83と共に端部は小さく外方に突出する。

78～81はいずれも渥美窯の甕口縁小片。概ね夾雑物の少ない微砂質の胎土で、灰緑～灰黒色の釉が薄くハケ塗りされている。但し、質感の違いなどからすれば別個体だと思われる。本建物址からは他部位の破片は出ていない。

85～図27—100は山茶碗窯系こね鉢。口縁形態は、概ね端部で肥厚し丸く収められるものばかりで

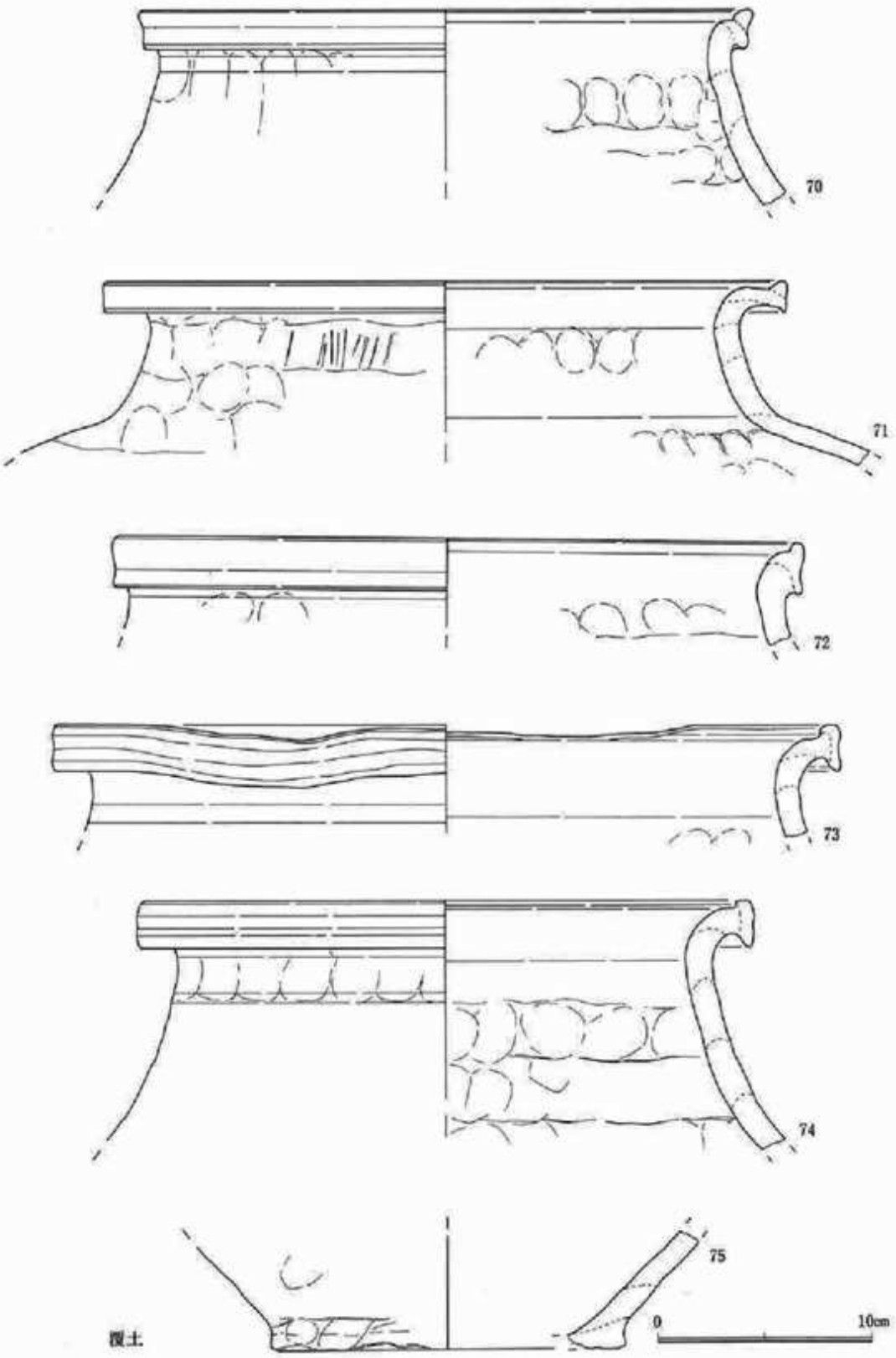



図25　建物 9 出土遺物(3)

あるが、外縁に沈線の巡るものは94の一片しかない。高台は断面逆三角形状で潰れておらず、しっかりとした作りである。胎土は砂質で砂礫を多く含む粗いものが殆どで、堅く焼き締まっている。色調は灰白～茶灰色。97・99の内底は摩滅している上に煤状の黒色物質が付着している。また、97の外底部には灰釉を塗ったかのような痕跡が見られるが、重ね焼きの時に挟み込まれた藁による自然釉であろう。復元値は88が口径30.8cm、98・99・100がそれぞれ高台径12.1cm・16.1cm・13.0cmを測る。

101は穿孔かわらけ。底部の平らな手づくね成形大皿を用いたもので、径4㎜ほどの孔が底部中央からずれた位置に、やや斜に穿たれている。

102は土器質鉢型の手焙り。口縁は肥厚し、内側に小さく突出する。胎土は砂礫をやや多く含んだ粗土で、色調は表面淡灰橙色、胎芯黒灰色。内面下半に煤がやや濃く付着しているのが異様に思われる。

103は土器質鍔釜。鍔幅は約1cmと狭く、口縁はやや内傾して端部が角張らない。全体に横ナデ整形だが、外面下半に指頭痕らしきものが見られる。胎土はやや粉質で砂礫・雲母粒を混じえ、甘い焼きである。色調は表面灰色、胎芯黒褐色。復元口径18.8cm、鍔径22.1cm。

104・105は女瓦。

104の凸面にはやや太い縄目叩きを施している。凹面には離れ砂が付着し、細かい布目痕と模骨痕を微かに残す。側面はヘラケズリ、側縁はやや幅広く撫でられる。胎土は夾雑物を殆ど含まず精良だが軟質。焼成がやや甘く、色調は灰白色を基調とするが凹面のみ濃灰色を呈する。厚さ2.1cm。

105は広端部の破片と思われる。凸面に斜格子の叩きを施す。格子目は一辺1.2cmのほぼ正方形。凹面にはやや粗い離れ砂が付着し、不規則なナデによって細かい布目痕を一部消している。胎土は若干の砂粒を混じえる灰色土で、焼成は堅く良好。厚さは1.1～1.3cmと薄い。

106は銅製品。17葉の花弁をレリーフして菊花にし、中央には孔が開いている。厚さが1㎜弱と非常に薄く、その作りは緻密・精巧。釘隠しであろう。径は2.1cm、高さ0.4cm、孔径0.6cm。

107は刀子。ほぼ床面に近いところから出たものである。全長24.5cm、刀長16.7cm。茎部に径2㎜ほどの目釘穴が残る。

108は錐。これは125の鋤とともに床面下から出土したものであるが、間違ってここに載せてしまった。丸棒の柄の木口に孔を開け、錐身の根を差し込んでいる。錐身は錆着が著しく不明瞭だが、四ツ目錐になるものと思われる。但し、先端は潰れて偏平になっている。全長35.5cm、柄径2.0cm、錐身長7.7cm、同径0.6cm。これについては、その出土状況に注意する必要があろう(125鋤の項を参照)。

図28—109～112は砥石。112は中砥、その他は総て仕上げ砥である。仕上げ砥はいずれも黄灰白色の泥岩製で両面使用、側面には切削痕を残す。109は幅3.8cm、厚さ0.3cm。110は最大幅2.8cm、厚さ0.5cm。111は幅3.4cm、厚さ1.0cm。112は灰白色で僅かに気孔をもつ堅い石質で、側面にも使用痕が見られる。厚さ1.2cm。

図26　建物 9 出土遺物(4)

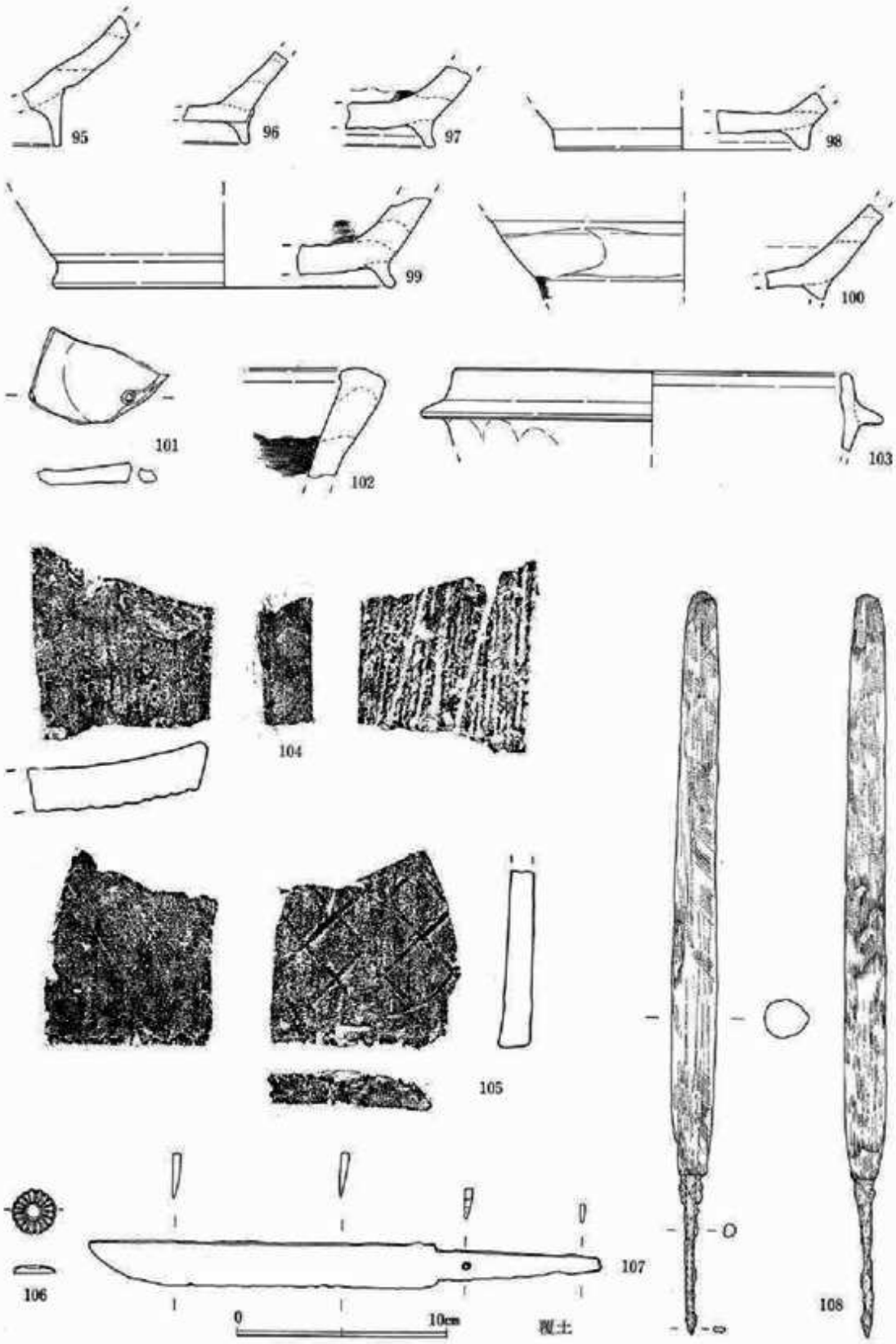



図27　建物9出土遺物(5)

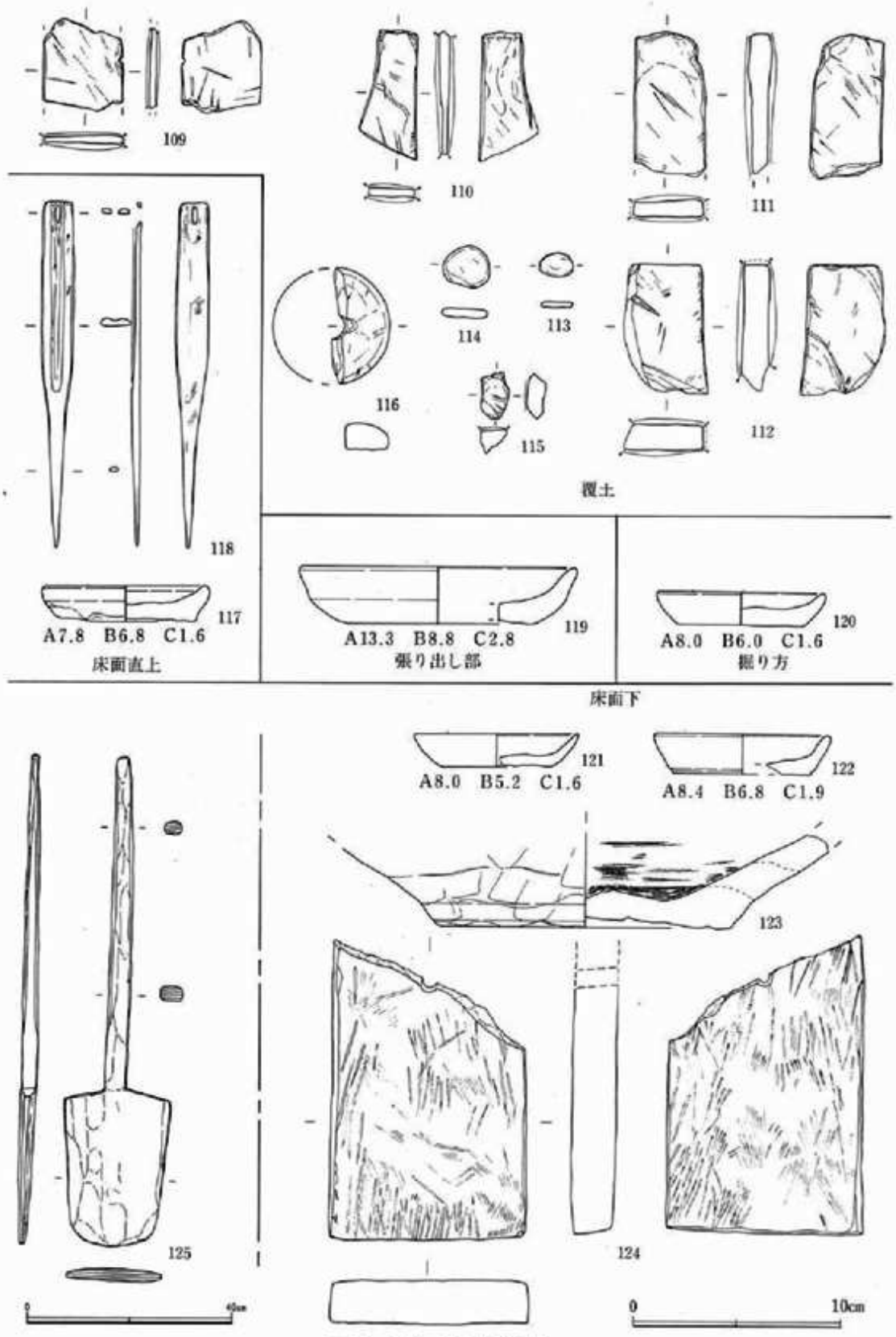



**図28　建物9出土遺物(6)**

113・114は碁石であろう。ともに黒色の緻密な石を磨いて偏平に成形しているが、真円形にはならずいびつである。113は長径1.6cm、短径1.2cm、厚さ0.3cm。114は長径2.3cm、短径2.0cm、厚さ0.5cm。

115は火打石とおもわれるチャート片。打撃痕らしきものが面的に観察されるが、本来の形状は更に大きなものであり、使用途中で割れた（割った）ものか、廃棄後に割れたものかは不明。

116は滑石製円盤。中央に孔が穿たれており、紡垂車の可能性もある。鍋の底部を転用したものかと思われ、円形に型取りした後一面の縁を削ってなだらかにし、断面カマボコ型に整形している。復元径5.6cm、孔径1.2cm、厚さ1.3cm。

117は、建物南辺土台のすぐ内側から出土したかわらけ。ロクロ成形の小皿であるが、厚手で底径が大きく器高も低い。側壁は小さく外方に開き、断面三角形となる。胎土は微砂・白針等を含むが精良でややきめ細かい。色調は橙色を呈する。

118は笄。片面中央に浅い溝が彫られ、頂部には長楕円形の穿孔がある。鹿四肢骨を材としたものであろう。長さ16.6cm、幅1.6cm、厚さ0.3cm。

119は張り出し部出土のかわらけ。ロクロ成形の大皿である。器壁が厚く、体部中程で稜をもち外反する。

120は掘り方出土のかわらけ。ロクロ成形の小皿。117と類似した器形である。

121・122は床面下出土のかわらけ。ともにロクロ成形の小皿。

123は常滑甕底部。胎土は微砂質で若干の長石粒を含む。やや渥美に類似した土である。色調は灰色。内底面及び外底面の一部に煤状の黒色物質が付着する。復元底径14.1cm。

124は滑石製温石。上端を破損する。全面に不定方向の削痕が見られ、上部中央に穿孔する。厚さや大きさ、整形の様子からして、鍋底部の転用製品ではない可能性もある。残存長14.6cm、幅9.4cm、厚さ1.9～2.2cm、孔径は0.6cmほどである。

125は鋤。掘り方底面の地山（黄褐色砂）に張り付くように出土した。一木作りで遺存状況の極めて良好な完形品である。身は両面とも端部に向けてやや薄く削り込まれ、前・後面の区別は難しく、刃先を着けるための着装部は作られない。柄は身から同じ厚みで真っすぐ伸び、握りの断面は隅丸長方形、角は面取りされている。把手はなく、柄頭はやや丸みを帯びている。全体に整形の削り痕が比較的明瞭で、使用による摩滅や傷などは見られず、実用的な製品とは見なし難い。全長94.3cm、身長30.9cm、身最大幅20.6cm、身厚0.5～2.8cm、柄長63.6cm、柄幅2.5～4.2cm、柄厚1.5～3.0cm。同様の鋤が建物１ｄの掘り方底面から出土していることは既に述べた。これについては、やはり建物の廃棄に関わる呪術的なものと考える（建物１ｄ出土遺物の項を参照）。更に、ここでは108の錐が並んで出土している。この錐が実用に供されたものかどうか定かにならないが、ともに土木・建築に関わる工具であり、建物廃棄後の底面から出土した事実は非常に興味深い。

（註）菅原正明「甕倉出現の意義　—中世経済の一側面—」『国立歴史民俗博物館研究報告』第46集　国立歴史民俗博物館　1992

**建物10（図29～34）**

グリッド　E・F－2・3

確認標高　7.30m

平面形状　主屋部　正方形

張出部　ほぼ正方形

長軸方位　N－60°－W

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 床面規模 | 主屋部 | 石敷き面 | NS…4.50m | EW…4.50m | 20.25㎡ |
| | | 土台芯々 | NS…4.00m | EW…3.98m | 15.92㎡ |
| | 張出部 | 石敷き面 | NS…1.65m | EW…1.10m | 1.82㎡ |
| | | 地覆石芯々 | NS…1.40m | EW…1.35m | 1.89㎡ |
| 掘方規模 | 主屋部 | NS…5.95m | EW…5.30m | | |
| | 張出部 | NS…2.00m | | | |
| 床面深さ | 主屋部 | 土台上面　1.45m | 標高　5.85m | | |
| | 張出部 | 石敷き面　1.10m | 標高　6.20m | | |

［検出状況］　先行して行われた西側調査区で、その東端に切石の立石列が検出された。これは本建物の西壁を裏掘りしていたもので、これによって建物の存在が推定された。東側調査区に入って、現地表面より層厚約60cmの近現代撹乱と近世耕作土を除去し、精査を始めるとすぐに北壁切石の頭が一部顔を出した。東および南壁については抜き取られているのか、検出できない。西・北両壁の内側には土丹塊が充塡されていたが、それは東・南へ散漫に広がってしまう。そのため、この段階でプランを明瞭にすることはできず、ベルトを残して掘り下げ、倒覆した東・南二辺の壁石を検出することで、ようやくほぼ方形であることが確認された。

埋土は図29土層図のように細分したが凡そ人為的なもので、大きくは三層として捉えられる。上層（1・2・7層）は土丹塊を主体とし、中層（13～15・19層）は炭化物・灰層。下層（24・26・29・30・32層）は腐植土を多く混じえる層である。中層については本建物址に伴うものではないと考えられる。第一に遺存した建築部材（石・木）に被熱・炭化した痕跡がほとんど見られない。また、この炭化物・灰層はシルト質で純度が高く、被災した事を物語るような瓦礫などを含まない。更に、埋土中には倒壊あるいは投棄された壁石と思われる切石が多く含まれるが、それらは概ね埋土下層の上面を覆うように広がっている。すなわち、本建物の廃棄に際しては、転用可能な木製部材をある程度抜き取った後、壁石の半分ほどを倒し込んで埋められたものであろう。

尚、張り出し部については、当初建物８ｂの付属施設として、西側調査段階に掘り上げてしまっていたが、東側主屋部の調査に入ってから本址に属するものと判明したものである。

［構造］　建物10は、主屋部と張り出し部とからなる全面石敷きの方形竪穴である。主屋部掘り方のプランは隅丸長方形を呈するが、その確認は前述のように困難でレベルも均一でない。すなわち、北西付近では7.10m前後であるが、東側では6.30mほどと、かなり低い。もちろんこれは東壁

石頂部よりも低いわけで、上面では確認できない。本址とその東側を南北に走る小町大路側溝との間に設定したG3セクションベルト土層断面（図32）を見ると、建物の掘込み面が壁石の下段のレベルであることがわかる。つまり、本建物の東壁付近は旧地表面が低く、下層の基盤層（地山）が東へ落ち込んでおり、建物建築以前の地形は、この付近で東に向かって傾斜して下がっていたと推

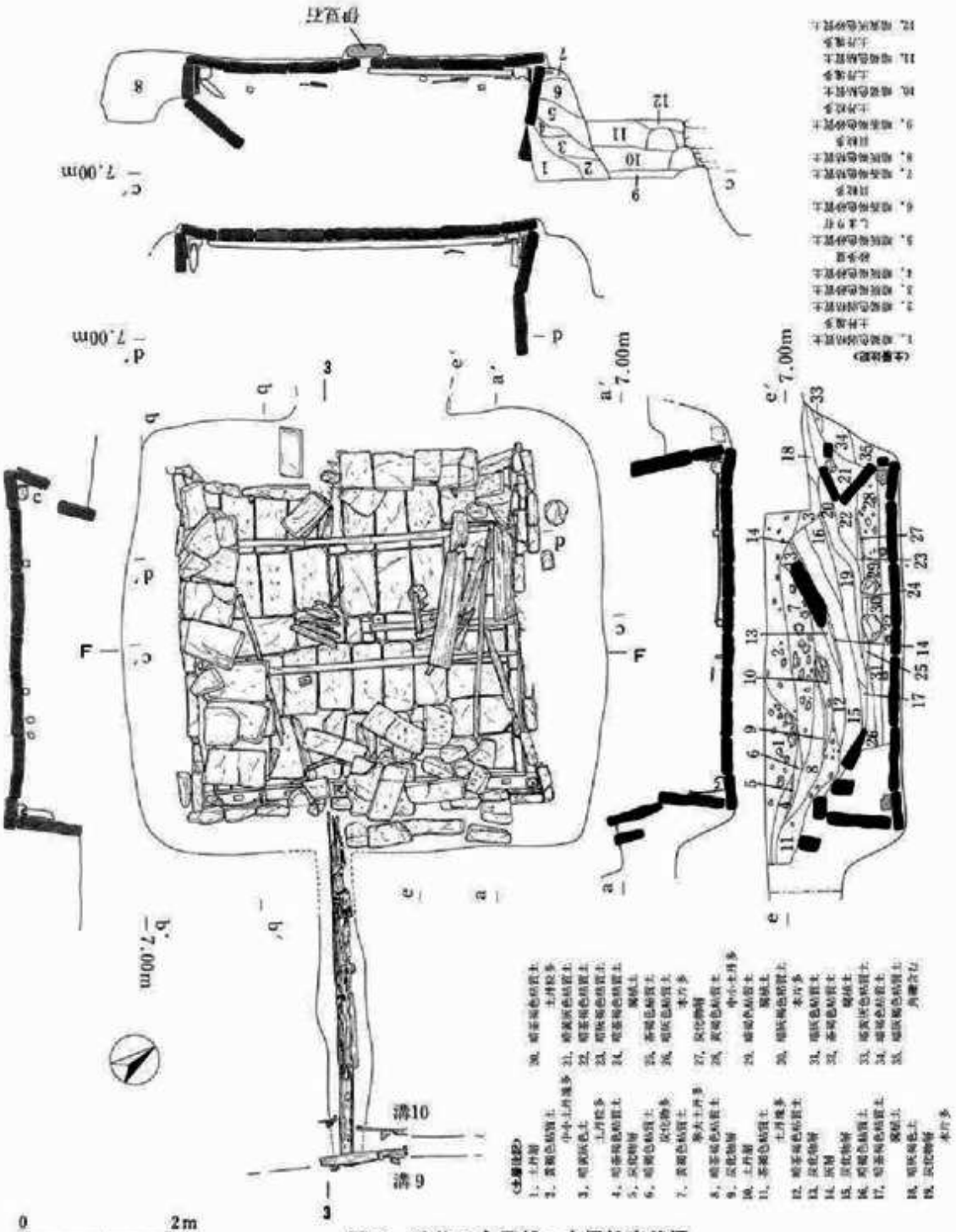



図29　建物10主屋部・木樋検出状況

測される。これは平面的に確認できたわけではないが、後述するG4トレンチの土層も同様の堆積を見せていた(地山落ち込みの項を参照)。そこで、建物10を建築する際、東側については切石一枚分だけ掘り下げ、周囲を土盛り・かさ上げして2段目の石を立てたのではないかと考えられる。

以下建築構造の概略を述べるが、図30の構造模式図及び写真図版を参照して頂きたい。

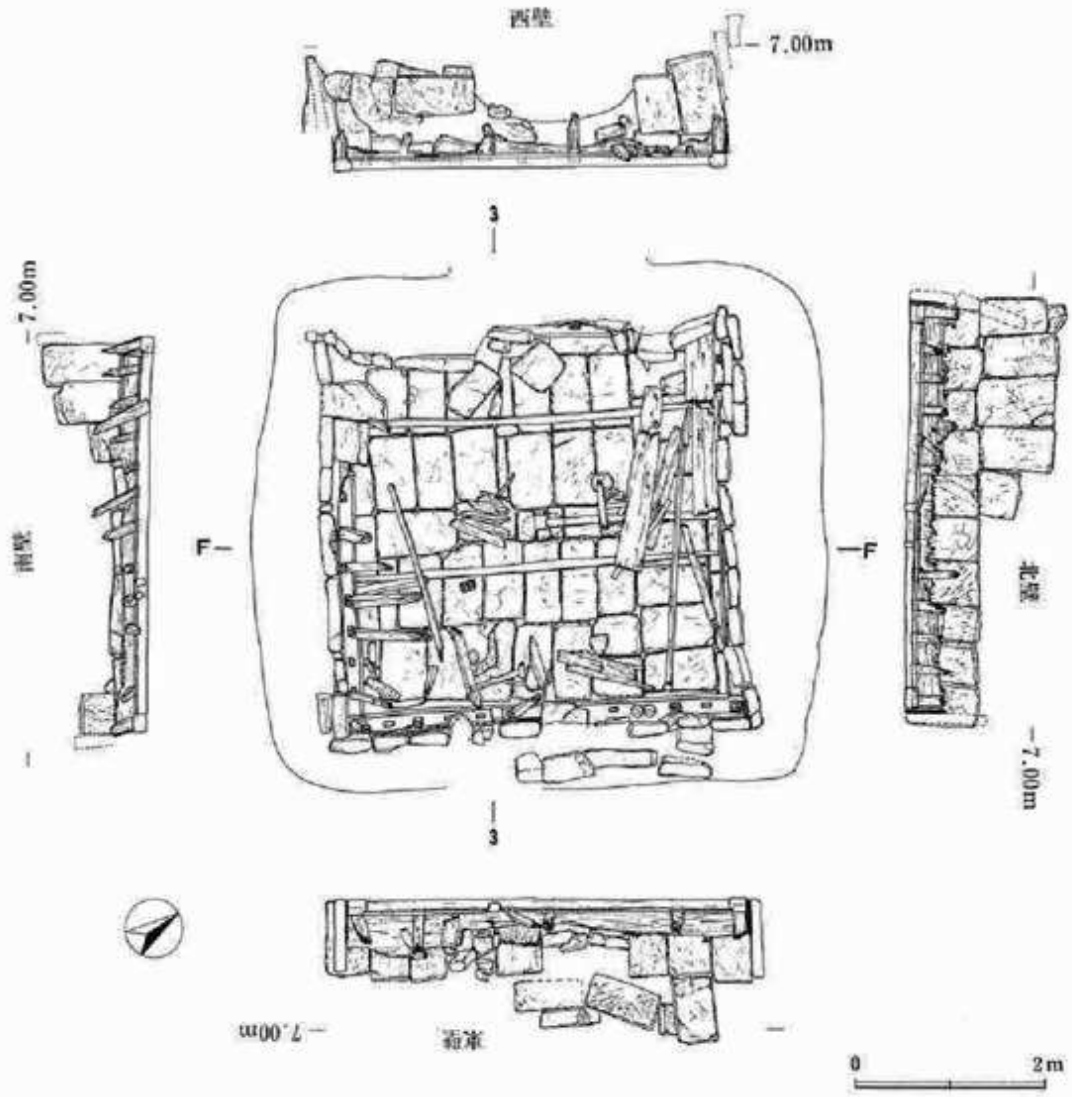
**主屋部**は、約4m四方の規模で底面に鎌倉石切石(80×45×12cm)を敷き詰めている(PL.16—C)。その敷き方は、まず**地覆石**を短辺が接するように四周に並べ、その内側に長辺を東西方向にして切石を詰める。但し、北辺地覆石のすぐ内側のみは方向を転じて敷いてある。地覆石は荷重によって2～4cm程も沈下してしまっている(PL.16—D)。主屋中央には、約14cm角、深さ12cmの方形柱穴が小さな切石を組んで作られている。その基底には伊豆石が礎石として据えられていた。棟持ち柱が立つのであろう。地覆石外縁上には切石を縦(西壁のみ一部横)に2段積んで壁としており、その多くは内側に倒覆していたが、北壁の東隅付近ではかなり良く原状を保っている。その高さは石敷き面からは約160cmであった。

四辺に置かれた**土台**は、高さ12cm、幅16.5cm、長さ410cm強である。各辺の内側上端角は縦・横3cmほどを直角に削り取って、床板をはめ込むように細工されている(図30—B・PL.14—C)。これを「板じゃくり」と呼ぶ。土台両端は相互に組み合わさる「相欠き継ぎ」(図30—C)で、隅柱をたてるほぞ穴が切られる。**隅柱**は凡そ13×10cm程もあり残存長は30～40cmだが、四隅総てに遺存していた。土台上面には12×7cm、深さ6cm程の間柱ほぞ穴が、芯々31～33cm間隔で穿たれる。**間柱**の規模は8～10cm角で残存長は最も長いもので70cm程。南北両辺に良く残っていた。また、土台中央には隅柱とほぼ同規模の**中柱**が立つため、ほぞ穴は15×7cm、深さ6cmと大きく、芯々間隔も39cmとやや広くなっている。

土台のすぐ裏側には**横板**が、その後ろには**縦板**が立てられ、間柱と壁石とに挟まれる形になる。共に遺存状況はあまり良くないが、横板は長さ2m、厚さ2mほどで、幅は不明だが凡そ30cm強残っている。これを各辺に二枚ずつ並べる。模式図では三段積みにしているが、二段目以上に関しては不明。縦板は更に残りが悪く、厚さ1cmほど、長さ50cm以上、一枚の幅は判らない。これらの板によって、建物内部からは壁石が見えない様になっていたであろう。

以上のような構造の壁体を支持するために**胴縁**(どうぶち)と呼ばれる部材を用いていたらしい。これは壁体の内側への倒壊を防ぐため渡される横木である。端部を隅柱の幅に合わせて削り込み釘で打ちつけて固定したらしい。南壁に遺存しており、間柱を押え込んでいた状況が理解できる(PL.15—C)。

石敷き面上には、床板を支えるための**ころばし根太**が三本残っていた。南北方向に置かれ、凡そ8cm角、中央南北の北半に一本(長さ180cm)、それより45cm東と110cm西(いずれも芯々)に各一本ずつ(長さ378cm・376cm)である。中央の一本は棟持ち柱にベタ付けされていたようで、南半のものは抜かれて遺存しない。根太は床板を支えるものであるから、本来はもっと細かく(恐らく東二本の間隔、45cmほど)敷かれていた可能性もあるが、床板の一枚が原状を保っていることからすれば、本数は意外と少なく、土砂などを充塡して補強したのかも知れない。



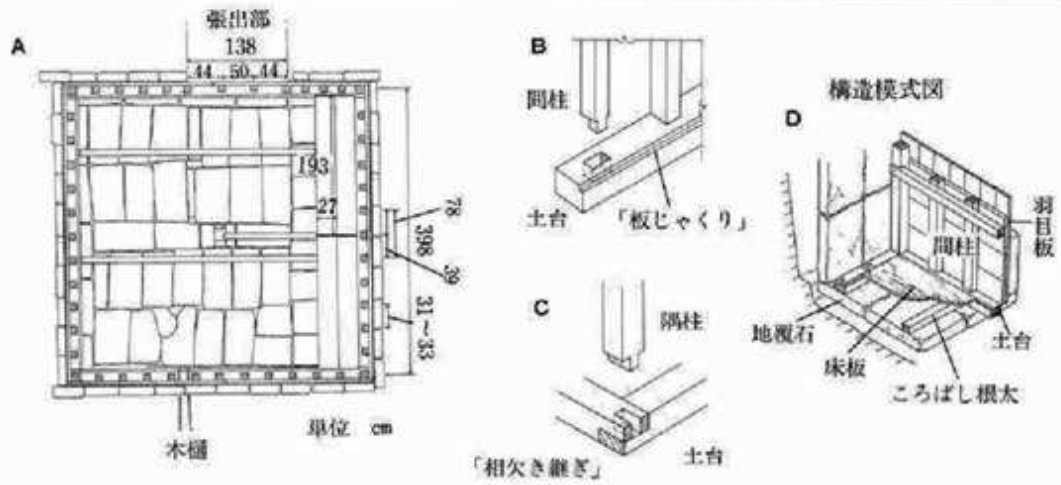




**図30　建物10主屋部及び構造模式図**

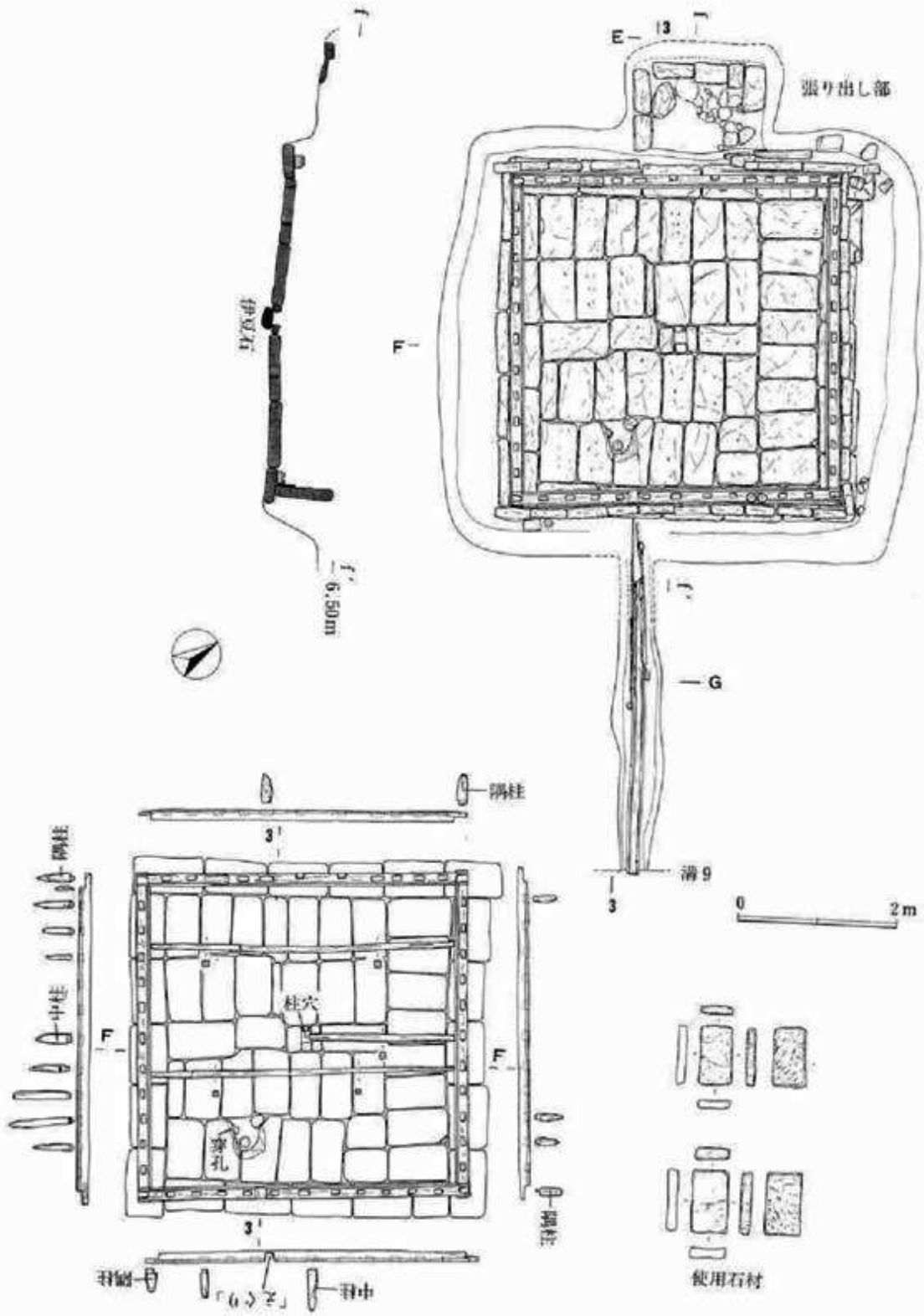
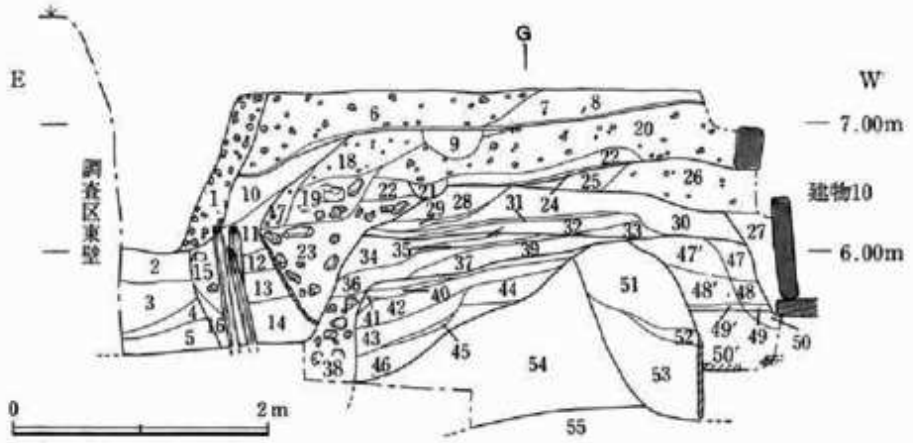
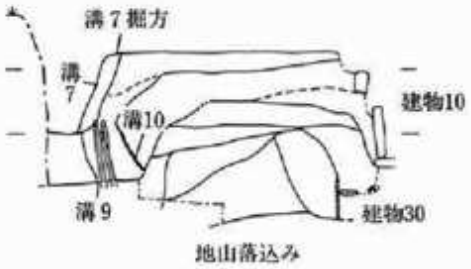



図31　建物10部材取りはずし状況




〈土層注記〉

1. 土丹版築面　　拳大土丹による密な版築。…溝7西壁構成土。
2. 黒褐色砂質土　　砂主体。かわらけ片・貝片を多く含む。しまりなし。
3. 黒褐色砂質土　　土丹ブロック・貝片を多く含む。しまりなし。
4. 暗灰色砂層　　夾雑物を殆ど含まない。しまりなし。
5. 暗黒褐色砂質土　　土丹ブロック・貝片・木片を多く含む。しまりなし。
6. 土丹版築層　　1層に類似するが、密度がやや低い。
7. 暗茶褐色砂質土
8. 炭化物層　　部分的に焼土混入。
9. 暗黄褐色砂質土　　土丹粒を多く含む。
10. 茶褐色粘質土　　土丹粒・炭化物粒を少量含む。
11. 茶褐色粘質土　　指頭大土丹（多）・土丹粒・木片・炭化物を含む。
12. 暗茶褐色粘質土　　11層に類似するが、しまりなし。
13. 暗茶褐色粘質土　　木片を非常に多く含む。しまりなし。
14. 暗灰褐色砂質土　　木片を多く含む。しまりなし。
15. 黄茶褐色砂質土　　土丹ブロック・かわらけ片・貝片多。やや粘性あり。
16. 暗褐色砂質土　　木片をやや多く含む。やや粘性あり。
17. 土丹版築層
18. 土丹版築層
19. 暗灰褐色砂質土　　土丹ブロック・土丹粒を多く含む。しまりなし。
20. 土丹版築層
21. 黄褐色粘質土　　土丹粒を密に含む。
22. 暗黄褐色砂質土　　土丹粒・かわらけ粒・炭化物少量含む。しまりあり。
23. 黒褐色粘質土　　拳大土丹・かわらけ片・貝片多し。やや還元。しまりなし。
24. 炭化物層
25. 暗茶褐色砂質土
26. 暗黄褐色砂質土　　指頭大土丹・かわらけ粒を多く含む。
27. 暗茶褐色砂質土　　建物10東壁裏込め土。
28. 暗黄褐色砂質土
29. 炭化物層　　木片をやや多く含む。
30. 灰茶褐色弱粘質土　　炭化物粒をやや多く含む。
31. 暗灰褐色弱粘質土　　炭化物粒をやや多く含む。
32. 暗黄褐色弱粘質土
33. 暗黄褐色粘質土　　木片を含む。しまりあり。
34. 暗灰褐色砂質土　　木片・貝粒をやや多く含む。
35. 暗灰褐色砂質土　　木片を多量含む。
36. 灰黒褐色粘質土　　木片・貝粒・土丹粒を含む。
37. 暗黒褐色粘質土　　貝片を含む。しまりあり。
38. 暗灰褐色砂質土　　拳～人頭大土丹充填。…古手の溝もしくはその裏込めか。
39. 灰褐色粘質土　　木片・土丹粒を含む。
40. 暗黒褐色粘質土　　土丹粒・貝粒を含む。やや粗砂を混じえる。
41. 灰黒褐色粘質土　　土丹粒・貝粒・粗砂を含む。
42. 暗黒褐色粘質土　　40層に類似。粘性強、しまりあり。
43. 暗茶褐色粘質土　　腐植土ブロック混入。しまりあり。
44. 暗茶褐色粘質土　　粘性強く、しまりあり。
45. 暗茶褐色粘質土　　木片を少量含む。しまりあり。
46. 黒褐色粘質土　　しまり強い。
47. 灰褐色砂質土
48. 灰褐色砂質土　　} 建物30埋土
49. 黒褐色砂質土　　夾雑物を殆ど含まない。
51. 灰黒褐色粘質土　　土丹粒・貝粒・炭化物含む。
52. 黒褐色砂質土　　} 建物30裏込め土
53. 暗灰褐色砂質土　　貝片含む。しまりなし。
54. 暗茶褐色粘質土　　腐植土。
55. 青灰色砂層　　地山2の還元層。

（ダッシュは還元層）

**図32　G3セクションベルト土層図**

**床板**は、原位置で検出されたのは北壁直下西側の一枚だけだが、長さ193cm、幅27cm、厚さ2.5cm程のしっかりしたもので、前述の「板じゃくり」に嵌まり込んでいた。東西方向に置かれ、西端を西辺土台に、東端を中央根太上に乗せる。東西両土台と根太に鉄釘残欠及び釘穴が確認され、固定

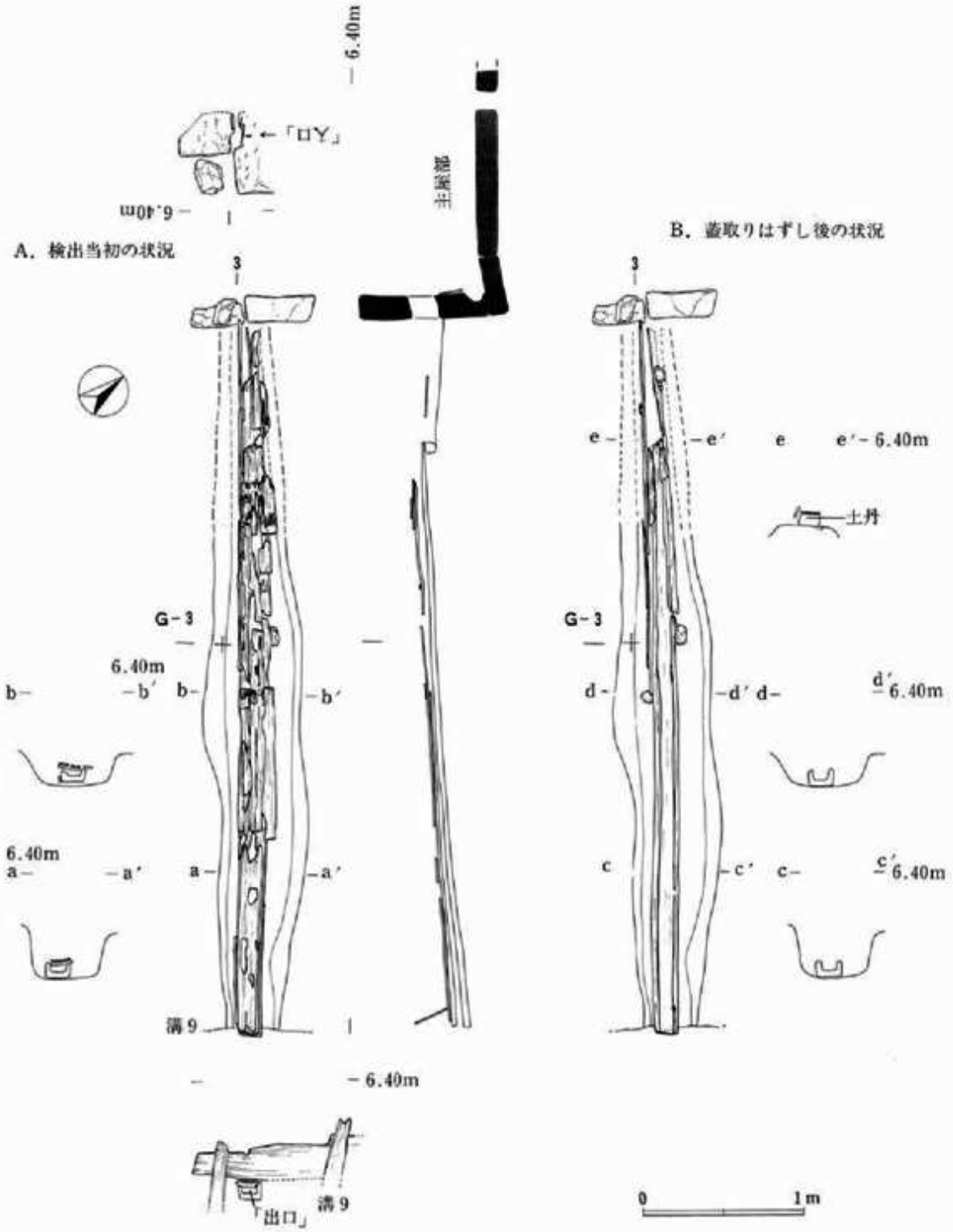



**図33　建物10木樋**

してある状況を推測できる。但し、その間隔は不均一で、あるいは釘は板交互に打たれたものであろう。全面に二列で敷き並べられたと考えられ、推定28枚となる。

建物内壁の様子は不明だが、柱等の部材が剝き出しだったのではなく、板壁であった可能性がある。すなわち、南西角の隅柱脇に7×5cm、残長20cmほどの小材が寄り添うように立てられていた（PL.15—A）。鈴木亘氏の御教示によると、これが原位置であるとすれば、羽目板を打ち付けるための補助材と考えることもできるとの事である。

**張り出し部**は西側に付き、西辺土台のほぞ穴の切り方・間隔がこの部分で変わる。ここにも地覆石が巡らされ、内側に破砕した鎌倉石を若干敷くが、遺存状況は良好でなかった。張り出し部については、中途で単独放棄された可能性が高いと考える。それは、張り出し取り付き部分にも並んだ壁石が倒覆して検出されたためで、しかもそれは小材を用い、造作の状況からして明らかに二次的な構造と見られる。当初は機能していた張り出し部が何らかの事由で廃棄、閉塞されたものではないだろうか。但し、これについては調査区境で主屋部とは別個に掘り上げたため、理解に若干整合性を欠く点もあり、更に検討を要する。

**掘り方**は規模が大きく、壁石の裏に約70cmの幅が取られる。建築作業上の"配慮"であろうか。また、コーナー部分底部からは礎板状の板小材が数個検出された（PL.16—A）が、工程上なにがしか機能したものか不明である。

**上部構造**については残念ながら不明であるが、角材の太さや柱の間隔の細かさ、土台直下の切石がかなり沈下していること等からも、相当に堅牢で重量のある構造であろうことは想像に難くない。

建物10には、小町大路側溝（溝9）に向かって暗渠の**木樋**が埋設されている。東壁に穴をあけ、そこから約4.5m東を南北に走る小町大路西縁側溝に水が流れるように、約5度の傾斜で2本の部材を組み合わせ、更に板で蓋をしてある。建物付近の部分は遺存状況が悪いが、本体は全体で4.38m（その内残りの良い先端部材—図34右—が3.62m）、幅15cm、高さ10cm程、内側のくり抜きは幅8cm、深さ6cmである。木樋口は縦15cm、横8cmほどの不整形で壁石の境目を粗く穿っている。建物内部における口の高さは推定床板面上約30cm。その直下部の土台は10×10cmほ

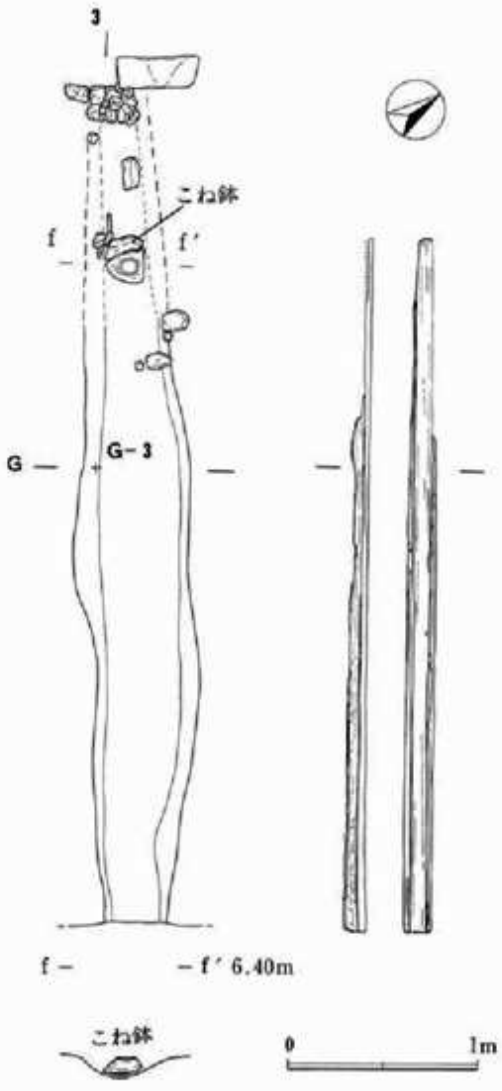



**図34　建物10木樋掘り方**

どやや粗く刳り取られており、木樋口内側70cmほどの部分の敷石が30×40cmほどで不整形に削られピットが開いている。いずれも木樋に関わる施設だと考えられる。

本木樋は、建物構築当初のものではなく、途中で何らかの必要が生じて造り付けられたものと判断される。すなわち、東壁の木樋の取り付き部の石積みがかなり乱雑になっていること、木樋口及び木樋に関連する土台の刳り・敷石上ピット等の造作が粗雑であることなどは、主屋部の丁寧な造作と明らかに相違しており、いずれも二次的なものである可能性が高い。なお、ピットからはその機能を考えさせる遺物は出土していない。これについては、近世の江戸や京都などの穴蔵に見られる集水孔である可能性を指摘しておく(註)。

(註) これについては馬淵和雄氏の御教示を得た。

参考：古泉　弘『江戸の穴』柏書房　1990　p.p.194～200

**建物10出土遺物（図35～38）**

図35は主屋部覆土上層（概ね土丹層）から、図36—20～42は中層（炭化物・灰層）から、43～図37—63は下層（腐植土層）から出土したものであり、64～77は覆土中の層位が不明のもの及び各層間で接合したものを掲載した。また、図38—78～91は床面（石敷き面）上、92～94は土台直上、95～97は張り出し部、98～102は掘り方、103は木樋掘り方から出土したものである。

図35—1～12はロクロ成形のかわらけ。1～9が小皿、10～12が大皿である。7・12には煤が付着、9は最初の糸切りに失敗したらしく、糸切り痕が二段になって残る。

13は山茶碗窯系こね鉢。口縁形態は端部が肥厚せず、丸く仕上げられる。内面下端が若干摩滅する。胎土は長石粒・砂粒少なく砂質で、焼成がやや甘く軟らかい。色調灰色。

14・15は常滑こね鉢。口縁形態は類似し、角張って僅かに外方に突出する。14は外面下半ヘラ撫で上げの後、指による不定方向のナデと押さえ。内底面は良く摩耗する。胎土は砂礫・気孔を多く含茶褐色粗土。口縁外面のみ重ね焼きにより変色し、赤褐色を呈する。復元口径34.6cm、底径16.0cm、器高11.0cm。15は胎土に気孔少なくやや締まる。復元口径32.6cm。

16・17は手捏り。共に瓦質鉢型になるものと思われるが、整形・口縁形態が異なる。16は内外面横ナデ、端部にはミガキが入る。口縁は肥厚して外方に僅かに突出。17は体外面中段が板ナデ上げ、内面中段が斜位ナデ。口縁は横ナデで緩やかに肥厚し、やや外方に向かって丸く撫で収められる。端部にはやはりミガキが入る。

18・19は砥石。共に泥岩質の仕上げ砥。18は片面使用。色調は淡橙色だが被熱黒変。残長5.1cm、幅3.3cm、厚さ1.6cm。19は両面使用。上端両側面を二次的に削って若干細くしているが、木製の台に嵌め込む為の調整だろうか。色調は淡く緑がかった黄白色。残長7.9cm、幅3.5cm、厚さ1.4cm。

図36—20～35は中層出土のロクロ成形のかわらけ。20～28が小皿、29～32が中皿、33～35が大皿である。22・26・29には口唇に煤が付着し、26は器壁もかなり荒れている。

36～38は常滑。36は甕底部。内面には自然釉によって砂礫が多数溶着している。37・38はこね鉢。口縁形態はやはり角張ってやや外方に突出するのを基本とする。

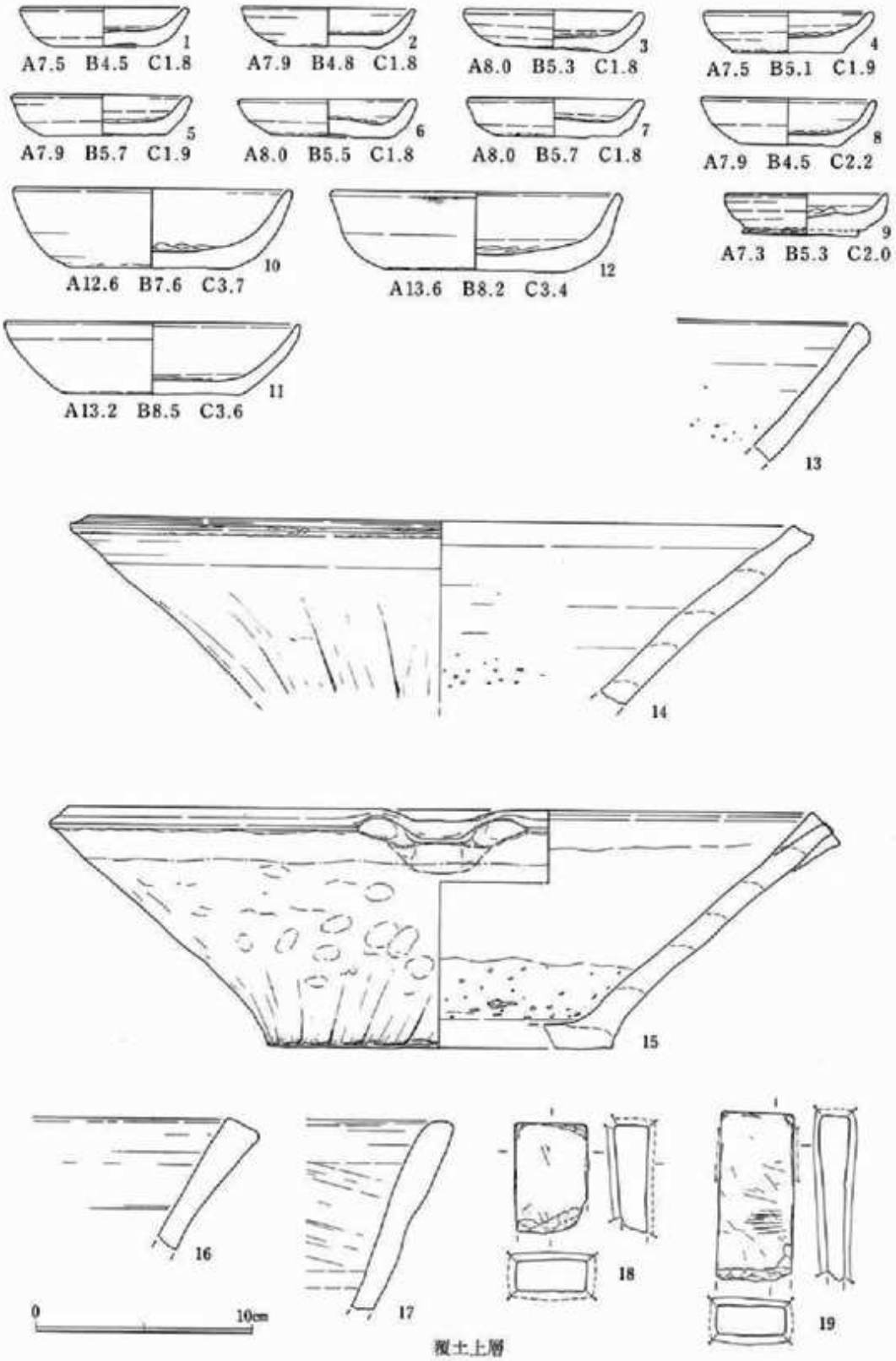



**図35　建物10出土遺物(1)**

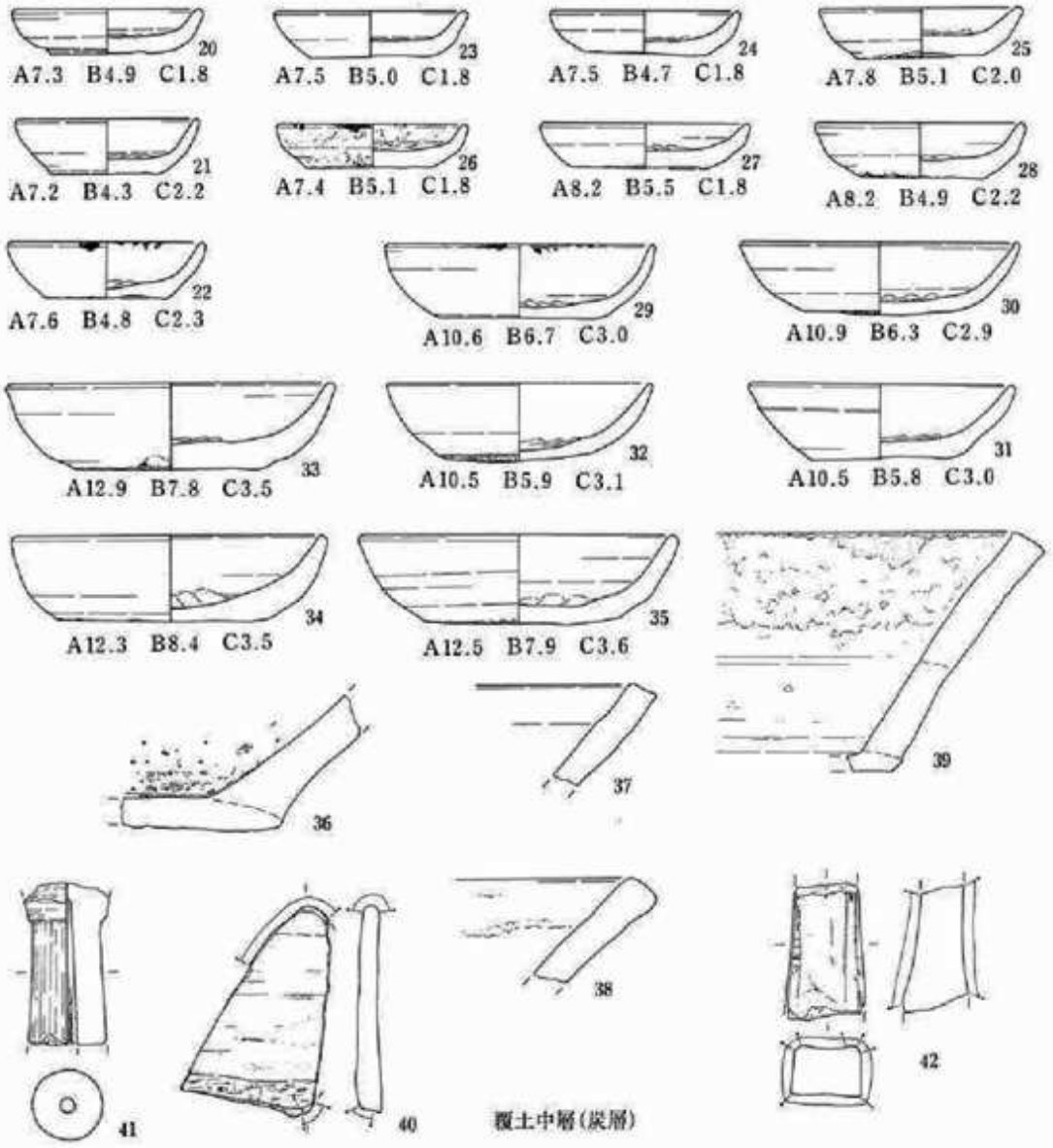



**図36　建物10出土遺物(2)**

39は土器質鉢型手焙り。側壁は同じ厚さでやや外反し、口縁は角張って内外に小さく突出する。全体に横ナデ調整で、上半は内外とも被熱し荒れている。また、外底部には微砂がやや多く付着する。色調は淡橙白色だが、口縁内側は一部暗赤紫色に変色している。器高9.6cm。

40は転用陶片。山茶碗窯系こね鉢の体部片を用いたもの。片面にはこね鉢当時の摩耗が見られる。一部割れており、転用時の全形ではないが、握るのには適当な大きさである。

41は燭台の脚部片。中心部に貫通しない孔が開き、その内表には棒を引き抜いた擦痕が見られる。丸棒の周囲に粘土を張り付けて成形したものであろう。外面は横ナデの後、軽く縦位のケズリで調整している。胎土は精良なかわらけ質。焼成良く、色調淡橙褐色。残長6.5cm、径2.7～3.1cm。

42は砥石。中砥である。石質は微気孔を若干もち、白色粒が細かく斑らに含まれ、色調淡黄白色。総面使用。上面には使用のクセにより段差が生じている。残長5.5cm、幅3.2cm、厚さ2.6cm。

43～図37—59は下層出土のロクロ成形かわらけ。43～53が小皿、54・55が中皿、56～59が大皿である。46・49などには大きな白色泥粒が含まれる。53は底部穿孔。

60・61は瀬戸。60は卸し皿。口端が角張って外方に弱く突出し、卸し目は一部口縁にまで達する。胎土は灰白色精良。釉は灰緑色で薄くハケ塗りされる。復元口径12.4cm。61は仏華瓶。脚台は器肉厚くどっしりした作り。胴部は下方に最大径をもつ。上部に櫛描による4本条線が巡り、その上には半周する2本条線が施される。外底面は糸切り。胎土は微砂をやや多く含む黄灰白色土で硬質。釉は灰緑色で外面にのみ掛け流される。底径4.6cm、最大径4.8cm、残存高8.8cm。

62は土器質鉢型手焙り。横ナデを基調とし、外面上半に不定方向指ナデを施す。口縁は内側に強く突出し、端部はミガキ。砂礫を多く含む褐色粗土。内表と外面下半は黒変する。器高10.4cm。

63は砥石。石質は多孔質だが比較的きめが細かく白色軟質。中砥であろう。総面使用。一部に断面V字の刻みが僅かに残る。残長9.4cm、幅5.5cm、厚さ5.0cm。

64～68は貿易陶磁。64は青磁折縁鉢口縁部小片。内面に恐らく唐草になると思われる片切り彫りの文様が僅かに残る。素地は微量の黒色粉粒を含むが堅緻な灰白色土。釉は灰緑色半透明で層がやや厚い。全体に粗い貫入が見られる。65は青磁小片。酒会壺など大物の高台になると思われる。やや傾きに不安があるが、外反気味に立ち上がる。素地は微気孔をもつほかは夾雑物なくやや粘性の高い緻密灰白色土。釉は淡緑色半透明。釉層は厚く内外に掛けられるが、畳付部は削り取られている。内表には細かな、外表には粗い貫入あり。66は白磁蓋。小壺であろう。文様は型押しで、中央に径7mmほどの円、そこから右方に緩やかな弧を描く放射線が細かく出る。周縁は細かな輪花状になるが、型からはみ出した土が僅かながら未調整で残っており、ギザギザと角が立ち粗い。素地は夾雑物なく堅緻な白色土。釉は淡く青味を帯びた白色を呈し、表面にのみ掛けられる。復元口径3.5cm、最大径5.8cm、器高1.0cm。67は白磁口兀皿1/4片。器形がかなり浅く、外方に開く。素地は微量の黒色粉粒を含むが堅緻な白色土。釉は若干青味がかった灰白色を呈し内外に掛けられるが、口唇部は削り取られている。復元口径10.0cm。68は青白磁水注口。素地は堅緻な灰色土。釉は淡青灰色で細かな貫入が見られる。残長2.5cm、外径1.1cm、内径0.6cm。

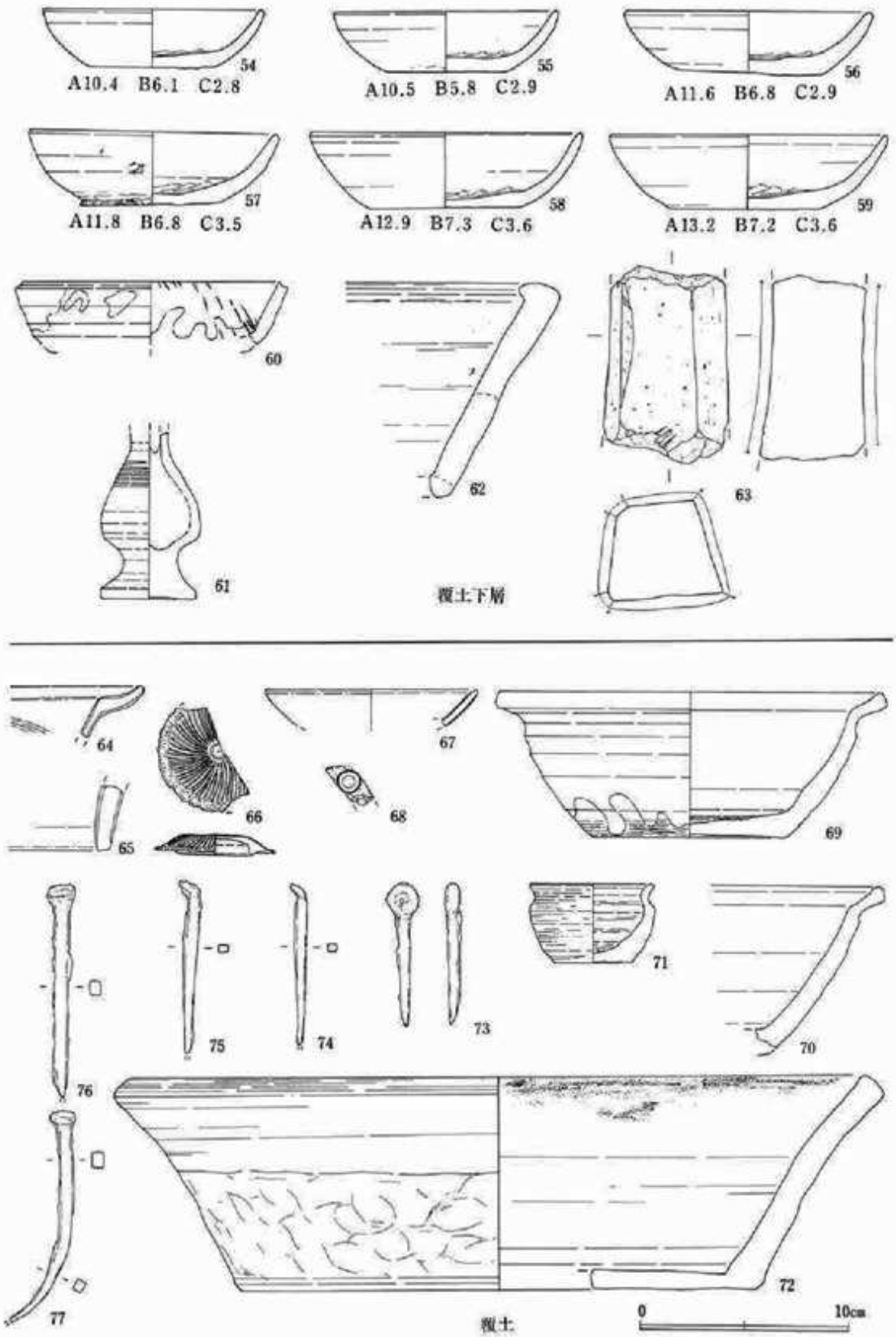



図37　建物10出土遺物(3)

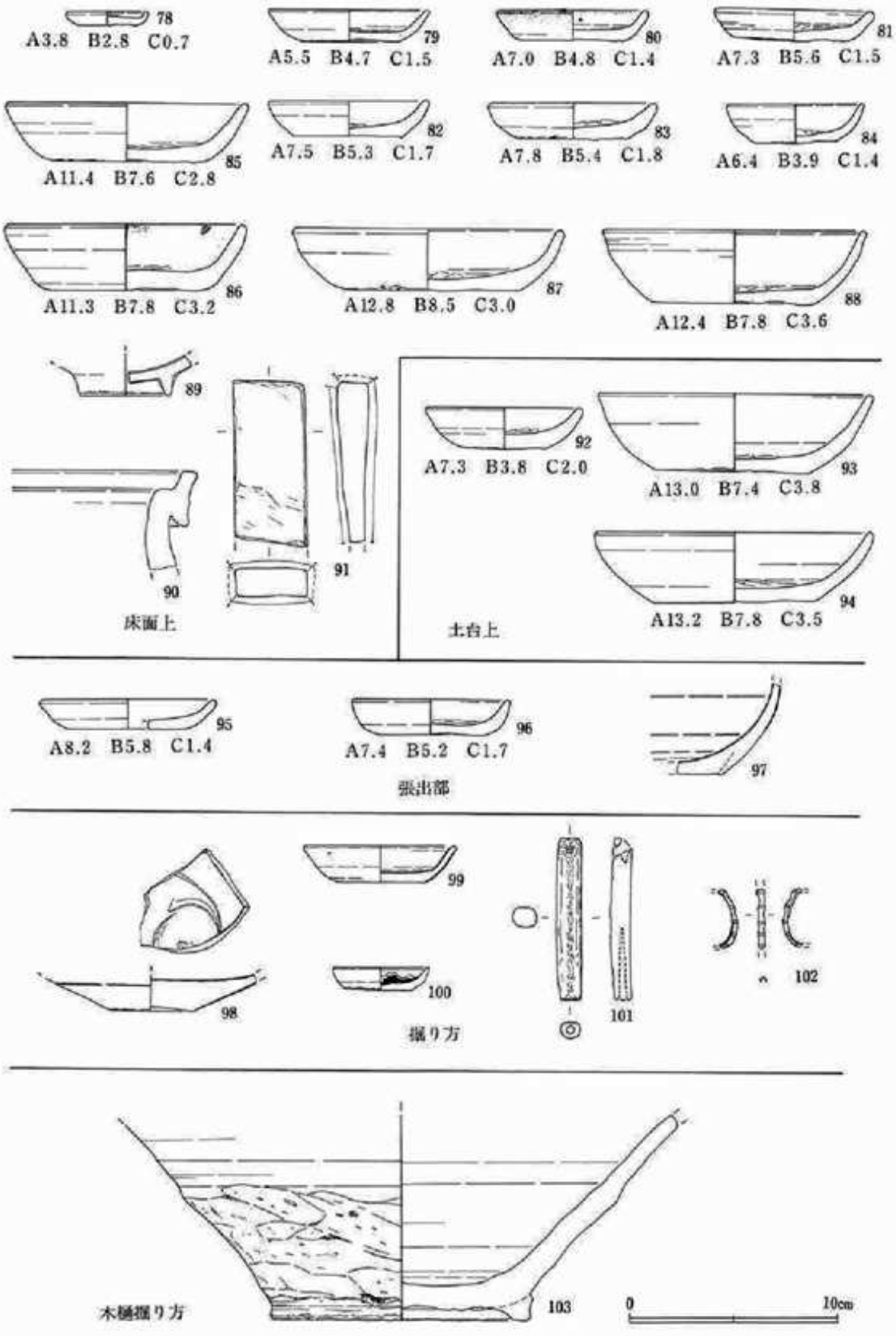



図38　建物10出土遺物(4)

69・70は瀬戸灰釉折縁鉢。69は接合できない同一個体片4点から合成復元した。小さ目の底部から側壁が内湾しながら立ち上がる。外表には水挽き痕が明瞭に残り、内底には二条沈線の円圏が描かれている。ハケ塗りの釉は斑らで、鈍い灰緑色に発色する。胎土は白色粒・黒色微砂を含む灰色土。復元口径18.2cm、底径9.2cm、器高6.9cm。70は69より大振りでやや外方に開く。口端は丸く玉縁状になる。胎土は白色粒を含むやや粉質の灰白色土で焼き締まりに欠ける。釉は淡い黄緑色。

71はかわらけ質の小壺。小さ目の底部からやや厚い器壁が内湾しながら立ち上がり、口縁は外方へ「く」の字型に短く屈曲外反する。全体にロクロ成形の痕跡が明瞭で、外底は糸切り。胎土に砂は少なく、焼成はやや甘い。色調暗褐色を呈する。復元口径6.0cm、底径1.8cm、器高4.8cm。

72は鉢型手焙り。体部外面下半は不定方向の指ナデ、指押え。上半から内面にかけては横ナデで、口端には細かなミガキがかかる。胎土は白色粒・砂礫を少々含んでやや粗くガサつくが、土器質の範疇である。焼成やや甘く、色調は灰黒～橙灰色。口縁内側は被熱して黒変。口径35.2cm、底径24.6cm、器高10.3cm。尚、本資料は覆土上層から床面上までの各層から出土した破片が接合して略完形に復元できたものである。本建物のように、覆土の様相が上中下で明らかに違っていても、その埋没は一回性の行為によるものであることが推察されよう。

73～77は鉄製品。73は掛金具と思われる。錆着が著しいため不詳だが、頭部を環状にする。長さ6.8cm、環径1.5cm程である。74～77は釘。いずれも先端部を欠くが、残りの良いものである。残長は、74が7.8cm、75が8.3cm、76が10.3cm、77が11.5cm。前二者が三寸、後者が四寸釘であろうか。

図38－78～88は床（石敷き）面上から出土したロクロ成形かわらけ。これらは面上に据えらた状況ではない。78は内折れミニ、79～84は小皿、85～88は大皿。85・86はやや小振りなものの、中皿とは言えない。80は内外とも煤け、一部にスラグ状の溶着物が付着する。86の体内表も黒変する。

89は青磁碗底部1/4片。素地は非常に緻密で粘性がある灰白色土。釉は淡緑色半透明で内外に掛けられるが、畳付部のみ削られて露胎。全体に粗い貫入あり。復元高台径4.3cm。

90は常滑甕口縁部。復元可能（口径38.4cm）な破片だが、遺存部位からして断面の提示に留めた。口縁形態はN字状で幅の広くない縁帯をもち、端部は外方に僅かに突出する。

91は砥石。淡灰緑色泥岩質の仕上げ砥。両面使用。残長8.0cm、幅3.4cm、厚さ1.5cm。

92～94はロクロ成形のかわらけ。いずれも建物廃棄と何らかの関わりを推測させる出土状況を示した。92は略完形の小皿。南辺土台のほぞ穴の中に入れられていたが、部材取り上げの後に発見されたので詳しい状況は不明。93・94は完形の大皿。東辺土台北寄りの直上に2個並んで据えられていた（PL.17-C）。本建物出土資料の中ではやや大振りで、胎土の精良な薄手化した製品である。

95・96は張り出し部出土のロクロ成形かわらけ小皿。

97は張り出し部出土の二彩盤底部小片。内面には3条沈線が巡る。胎土は白色粒・黒色粒をやや多く含むが非常に堅い明灰色土。釉は外面上半から内側面にかけて濃緑色釉、内底には黄褐色釉が掛けられる。

98は青磁皿底部。小さい底部から外方に直線的に開き、丁度欠失するあたりで上方へ屈曲すると

思われる。内底には唐草とおぼしき文様が片切り彫りされ、目跡も見られる。外底は回転ヘラケズリでやや弓なりにへこむ。素地は黒色粉粒・気孔を含む灰白色土。外底付近は焼きが甘く淡桃色を呈す。釉は淡灰緑色透明で、外底は露胎。復元底径4.0cm。鎌倉での出土量は少ない。

99は白磁口兀皿1/2片。かなり小振りな製品。素地は気孔やや多く締まりに欠ける淡茶灰色土。釉は灰緑色半透明。復元口径7.1cm、底径4.1cm、器高1.8cm。

100は瀬戸入子。外底はヘラケズリ、内底には紅が付着する。口径4.6cm、底径3.2cm、器高1.1cm。

101は骨角製品。頂部は斜めに穿孔し、その孔の途中からも内側に向かって若干穿っている。端部からは身内部を3.5cm程穿ち、受け部を作り出している。断面不正楕円形。全体に良く研磨されているが、一部に髄孔が若干残る。組合せ釣針の柄であろう。長さ7.8cm、径1.3cm。

102は銅製品残欠。細長い銅板を曲げて竹を模した細工を施し、環状にしている。長さ3cm、幅3mm。装飾部材であろうか。

103は山茶碗窯系こね鉢。外表下半は粗いヘラケズリを3段ほどにわたって施す。高台は潰れ、モミ殻とは異なる植物繊維圧痕が見られる。内面は殆ど摩滅しない。胎土は長石・砂礫をやや含むが比較的きめ細かい良土。焼成が甘いためかやや粉っぽい。色調は茶白色。内外面に部分的に煤が付着する。高台径12.2cm。本品は木樋掘り方底面から転覆して出土した。木樋本体とは接していないが、あるいはその支脚として据えられたものか。

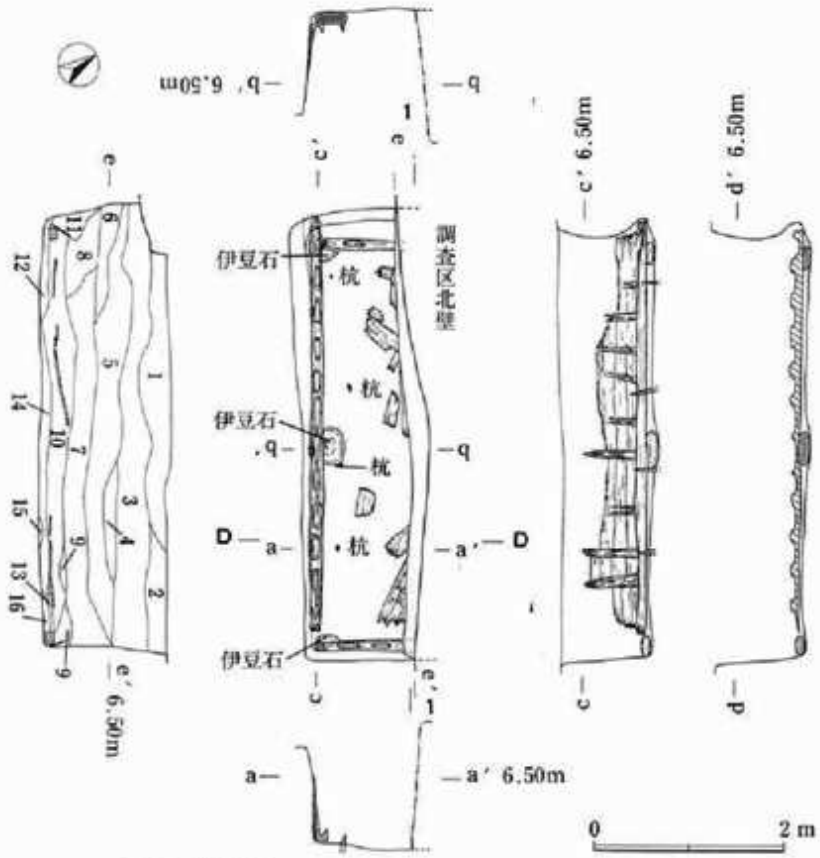



図39　建物11

**建物11（図39）**

グリッド　C・D－1

確認標高　7.10m

平面形状　調査区外（確認範囲長方形）

長軸方位　N－56°－W

床面規模　土台芯々　NS…1.00m以上　EW…4.25m　4.25㎡以上

床面深さ　土台上面　1.15m　標高5.95m

［構造］　建物11は土台建ての方形竪穴である。その大半部が調査区外にあるため詳細は不明だが、半ば朽ちた木製土台と羽目板が遺存しており、構造の大要は判明する。土台は三方に検出された。東西両辺は一部分のみだが、南辺土台は長さ4.30m、幅10～12cm、高さ12cmほどの規模をもつ。東端は腐っていてはっきりしないが、西端は掘り方壁面を10cmほど穿って差し込む形になっており、西辺土台はT字型にベタ付けされているだけのようである。土台下には東西両端と中央に伊豆石が礎石として据えられていた。3石の間隔は芯々2.05mで等しい。また、中央の石上面には、径10cmの範囲で赤変した柱当たりらしき痕跡が見られるが、本建物構造に関連するとは思われない。転用されたものであろう。土台上面にはほぞ穴が芯々35cm程の間隔で穿たれている。20～30×6～7cm、深さ5cmほどの穴だが、遺存状況が悪くかなり広がっているらしい。南壁には羽目板とそれを押さえる間柱が痕跡的に残っていた。間柱の高さは60cmほど、羽目板は横に2段以上積んでいると思われるが明らかではない。掘り方底面には4本の小杭が検出された。一本は中央礎石を支えるように打ち込まれているが、他の3本はいずれも南辺土台から10～20cm離れて独立している。あるいは根太などを固定するものであったか。但し、杭上端が土台上面より突出するものもあり疑問である。以上の他に、構造材と思われる小片が底面付近に散乱していた。

［特記事項］　上述の状況からして、建物11はその部材の多くを転用材で賄った可能性が高い。また、ここで検出された礎石の状況は、由比ガ浜中世集団墓地遺跡（若宮ハイツ用地）の方形竪穴8・48などと同様のものであろう。尚、建物11の建つ敷地は、道路を挟んで他の建物群と別区画になる点、注意を要する。

**建物11出土遺物（図40）**

図40－1～17は覆土上層から、18～23は同下層から出土したものである。

1～8はロクロ成形のかわらけ。1～6は小皿、7・8は大皿。あるいは7を中皿の範疇にいれるべきかも知れない。1～4・8など器壁やや薄く、体部中程に稜をもつものが主体となり、6・7の薄手丸深タイプが入る。

9～11は常滑。胎土はいずれも長石・砂礫を含んだ灰褐色土。

10はやや良質。9・10は甕口縁部小片。口縁形態はどちらも同様で幅の狭い縁帯をもつ。11は壺下半部。底部はかなり薄手である。外面はヘラなどによる横ナデ、内面には指ナデと押圧痕が明瞭に残る。

12～14は山茶碗窯系こね鉢。

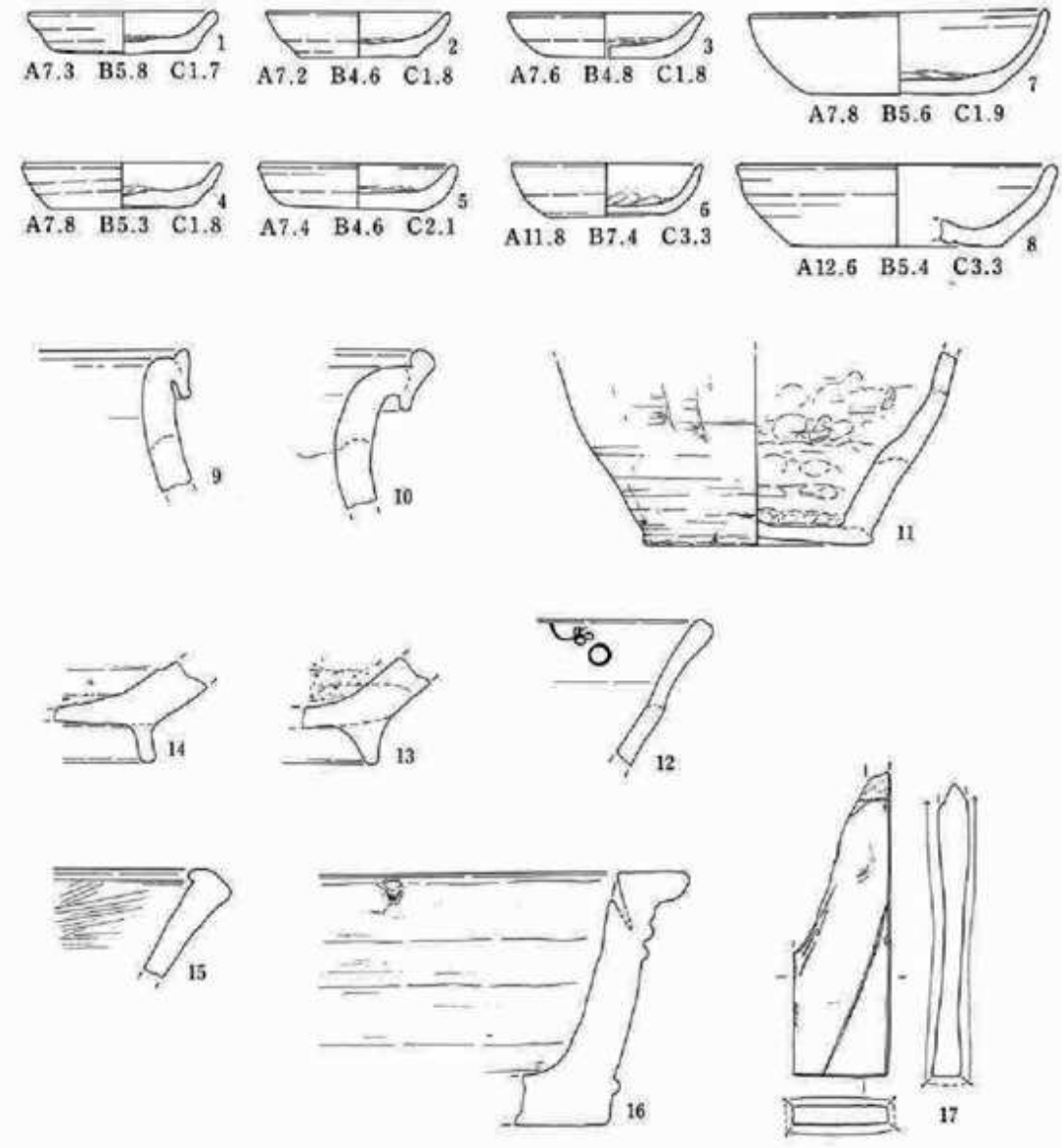



**図40　建物11出土遺物**

12は口縁部小片。器壁やや薄く、端部はやや肥厚して丸く仕上げられ、外縁に沈線が入る。胎土は長石・砂粒をやや多く含むが、比較的緻密で堅い灰黒色土。内面には4弁の花と円弧を描いた墨痕が見られる。13・14は底部小片。高台は形態こそ違え、いずれもしっかりした作りである。

15・16は手焙り。

15は瓦質鉢型で、口端が内側に強く突出する。16は接合しない同一個体2片より復元。砂粒を含んだかわらけ質の胎土で、器壁厚く胴部は直線的に立つ。口縁は折り曲げて外方に強く突出する。外面には口縁直下に2条、胴下端に1条の凸帯が巡らされている。外表～口端はヘラナデ、内表は横ナデ。外底には板状圧痕らしきものが見られる。また、口縁内側から斜め下方に貫通しない刺突孔が開く。色調は器表が淡橙色、胎芯が灰黒色。外表一部には白く化粧土らしき付着物も見られる。17は砥石。灰白色泥岩質の仕上げ砥。両面使用。残長12.0cm、幅3.8cm、厚さ0.8cm。

18～23は覆土下層出土のロクロ成形かわらけ。18～22は小皿、23はやや小振りだが大皿であろう。様相は上層のものとほぼ同様である。

**建物12（図41）**

グリッド　A－4

確認標高　7.00m

平面形状　主屋部　調査区外（確認範囲長方形）

張出部　調査区外（確認範囲長方形）

長軸方位　N－34°－E

床面規模　主屋部　NS…3.80m以上　EW…0.70m以上　2.66㎡以上

張出部　NS…1.00m　EW…0.40m以上　0.40㎡以上

床面深さ　主屋部　1.75m　標高　5.25m　（いずれも推定値）

張出部　1.30m　標高　5.70m

［構造］　建物12は、主屋部と張り出し部とからなる方形竪穴である。しかし、大半が調査区西側に延び、北側は井戸6に、中程を土壙43に切られている。また底面も、調査区壁際で湧水による崩落の危険性があったため、サブトレンチとピンポール探査による部分の確認に留まり、その詳細は不明である。

主屋部では東壁の羽目板が検出された。板は縦並びで残存長が50cmほど、幅20～25cm、厚さ1～1.5cmである。全て内側に向かって倒覆していた。それ以外の部材は確認されていない。覆土の17・18層及びその下の未掘部分は、地山の黄褐色砂が多量に含まれている。

張り出し部は、主屋部底面と約45cmの比高差をもつ。ここでは部材は検出されていない。

建物12は、地山を大きく掘り込んで構築されており、石材は用いない。また軸線方向などからしても、構造的には建物9と同様であろうと推察される。

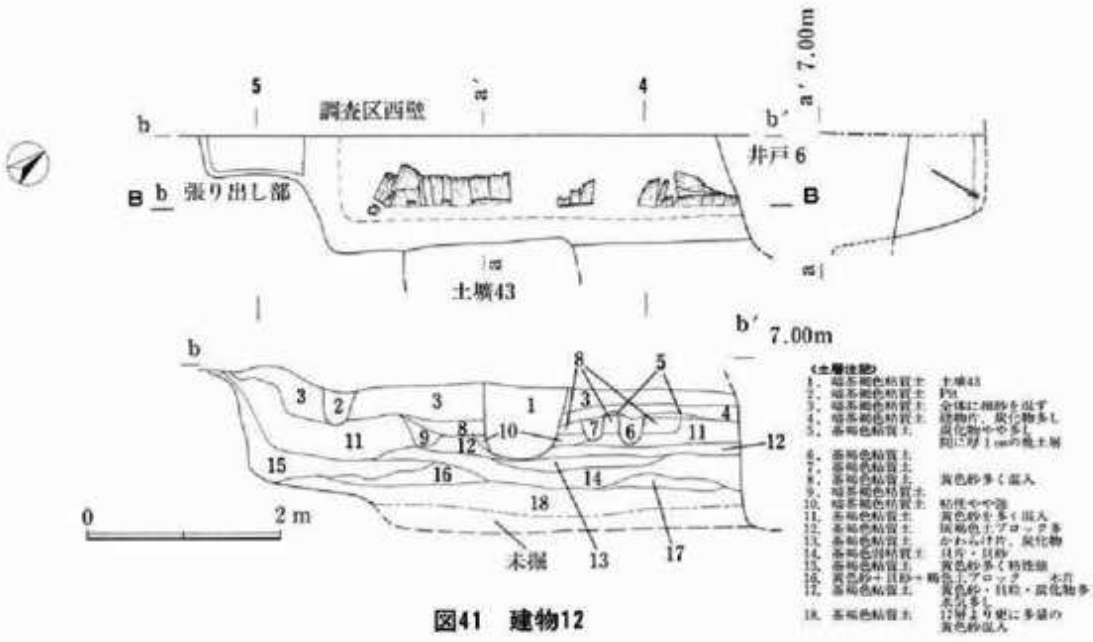



図41　建物12

**建物12出土遺物（図42）**

図42—1～14はかわらけ。総てロクロ成形。1～8は小皿、9～14は大皿である。器壁はやや薄いが体部が浅く直線的に開くタイプが多く、薄手化傾向を示すものと相半ばする。2・8は体部内外面に薄く煤が付着。9・13は口縁内外に煤が付着し器表の荒れが著しい。

15～20は貿易陶磁。

15は青磁小碗体部1/4片。口縁が輪花状になるいわゆる百合口の碗である。花弁は鎬があまり明瞭でなく、復元推定20枚が巡らされる。素地は黒色粉粒を少々含み、やや締まりに欠けるが堅い。色調は灰白色を呈する。釉は水青色で厚く掛けられ、透度は低い。復元口径は最大部分で9.8cmを測る。

16は青磁蓮弁文碗体部1/4片。蓮弁は細く、鎬文が浅い。素地は黒色粉粒を僅かに含むが堅緻。色調は白色。釉は淡緑色を呈し、釉層が厚く半透明である。内外とも貫入が僅かに見られる。復元口径12.4cm。

17は白磁口兀皿。口縁の一部を欠くが略完形。器肉は厚いがかなり小振りで浅い。素地は僅かに黒色粉粒と気孔を含むが堅緻な灰白色土。釉は若干青味がかった灰白色を呈する。外底部は釉を拭き取るが殆ど残っている。口径7.8cm、底径5.1cm、器高1.5cm。

18は白磁皿。底部1/2ほどの破片である。やや小さ目の底部からほぼ水平に外方に開き、欠失している部分で屈曲してやや上方に立ち上がるものであろう。素地は黒色粉粒を少々含むが堅緻であり、灰白色を呈する。釉は若干茶色味を帯びた灰色。体部外面下半から外底部にかけては露胎で、回転ヘラケズリの痕跡が残る。復元底径4.2cm。

19は白磁碗。体部2/3程の破片である。内面上半に雷文帯を巡らせ、その内部に草花（牡丹唐草）文を型押しした優品である。口縁は口兀で、小さく刻みを入れて6弁の輪花にしており、直下の雷

文帯もその部分で刻まれている。また、口冗部には処々に黒く変色した金属（銀か）の覆輪が残る。素地は精良堅緻な白色土。釉は淡青白色で、薄くムラなく掛けられている。口径14.8cm。

20も白磁碗。こちらは底部で、19と同様の印花文碗であるが、文様は内底中央に蓮華を、その周囲は界線で6分割して牡丹唐草と蓮華唐草を配している。素地や釉調は19に類似しており、器形もほぼ同一のものであろう。高台は径3.9cmで小さく直立し、釉が全体に掛けられている。

21は漆器椀体部下半片。高台は殆ど確認できない。黒漆の上に朱で笹文のスタンプを押印する。特に内面は非常に密である。復元底径6.6cm。

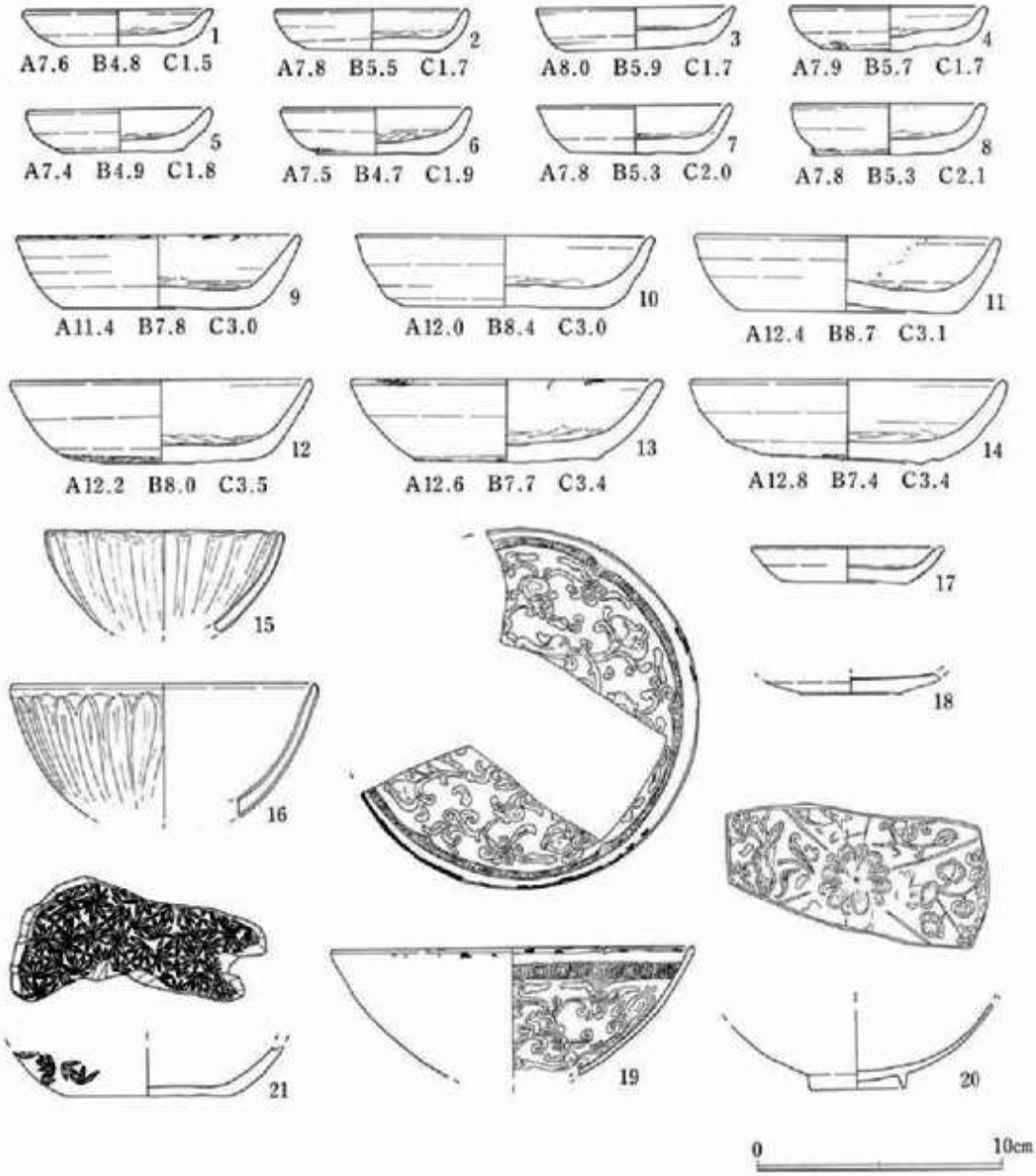



**図42　建物12出土遺物**

**建物13（図43）**

グリッド　B—2・3

確認標高　6.70m

平面形状　調査区外（確認範囲長方形）

長軸方位　N—34°—E

床面規模　NS…4.50m　　EW…2.80m以上　　12.6m²以上

床面深さ　0.50m　　標高　6.20m

［構造］　建物13は、井戸1・2・3に切られつつ調査区外に延び、また、確認当初は建物14と弁別できず、下層の土壙をも一緒に掘り上げてしまったため、構造的には不詳な部分が多い。

本址は黄褐色砂の地山を底面としており、東辺と南辺に建築部材の痕跡がやや黒いシミ状になって残っていた。南辺のそれは長さ60cm以上、幅25cm、深さ15cmほどの溝状を呈する。東辺でも一見溝状だが、その底部はかなり激しい凹凸があり、あたかも別個の長円・長方形ピットが重複連続して掘られたかのような様相を示す。全体としては長さ3m以上、幅20～30cmほど。若干掘り過ぎた部分もあるようでその深さは10～20cmとばらつきがある。東・南両辺とも、土台の痕跡であろう。東辺の凹凸は、遺存状態の良好な建物9などを参考にすれば、土台下に置かれた礎板や礎石などの痕跡かと考えられる。尚、北辺では同様の痕跡は確認されていない。

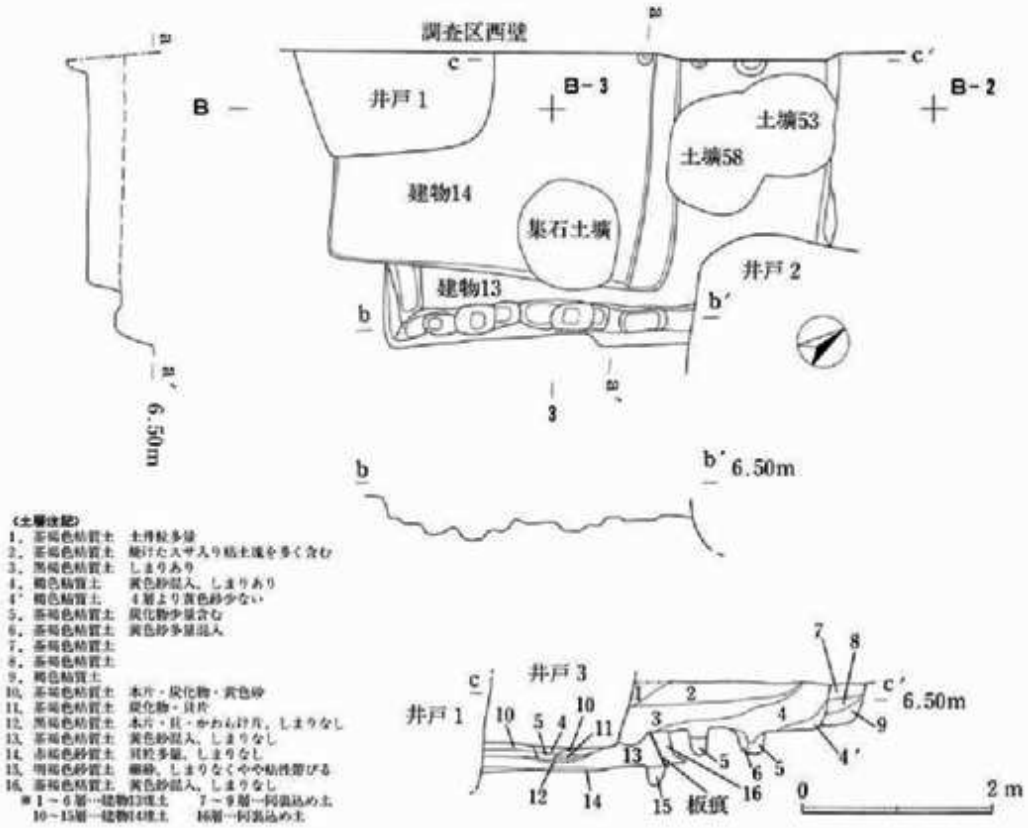



**図43　建物13・14**

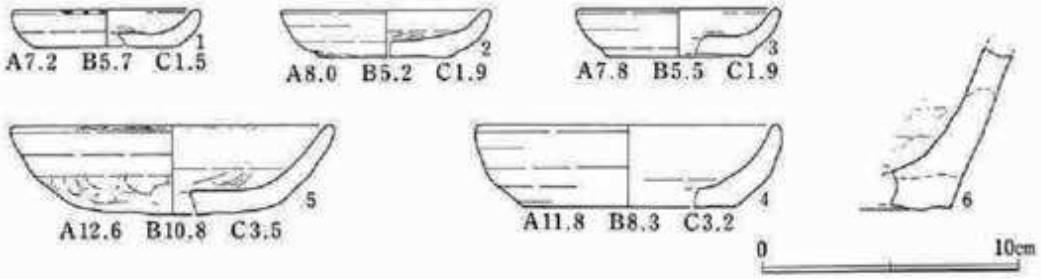



**図44　建物13出土遺物**

建物西側には、調査区壁に引っ掛かる形で2個のピットが検出された。北側のピットは上面径30cm、深さ25cm、南側は径20cm、深さ30cmほどであり、覆土はほぼ同様である。また、土層断面を見ると、飛ばしてしまった南半に2個の同様な落ち込みを確認できた。これらピットの機能は不明だが、軸線に沿ってほぼ直線上に並ぶことから、建物基礎構造に深く関わるものと推察される。

**建物13出土遺物（図44）**

図44－1～5はかわらけ。1～4がロクロ成形で3までが小皿、4は大皿。5は手づくね成形の大皿である。ロクロのほうは厚手で体部下半に稜をもつ均質な一群と見られる。手づくねは底部が丸くナデの稜も明瞭でなく、口唇も鈍重なものである。

6は渥美。壺の底部小片。外面は下端が横位、以上が縦位のナデ、内面は横ナデ調整。胎土は微砂質の灰褐色土で、白色粒を少量含む。あるいは常滑の産か。

**建物14（図43）**

グリッド　B－2・3

確認標高　6.45m

平面形状　調査区外（確認範囲長方形）

長軸方位　N－40°－E

床面規模　NS…3.55m　　EW…2.40m以上　　8.52㎡以上

床面深さ　0.40m　　標高　6.05m

［構造］　建物14は、井戸1・3及び建物13に切られ、調査区外に延びるため、その詳細は明らかでない。また、底面（地山黄褐色砂）に見える集石土壙は下層のものであるが、これも同時に掘り上げてしまっている。本址の構造を知る手掛かりは少なく、北辺に羽目板を検出したのみである。羽目板は、北壁（掘り方）から内側に25cmのところを壁と平行に走っている。板材はほとんど痕跡的でしかなく、計測不可能だが、土層断面からすると高さ40cm以上はあろう。その外側は地山砂を多く混じえた裏込め土である。また、調査区壁の板内側部分に、上面径20cm、深さ20cmのピットが半分検出された。羽目板を押える杭などの痕跡かとも思われる。その他の辺では部材の痕跡は確認できなかっが、本建物は恐らく土台が四周に巡る構造であったと推測する。尚、出土遺物はかわらけの小片等が僅かにあるものの図示できなかった。

**建物17（図45）**

グリッド　D－2

確認標高　6.70m

平面形状　他建物重複（確認範囲長方形）

長軸方位　N－56°－W

床面規模　NS…0.80m以上　EW…2.45m　1.96㎡以上

床面深さ　0.80m　標高　5.90m

［構造］　建物17は、大半を南接する建物8a・bに切られて失い、詳細は不明である。いわゆる方形土壙の可能性もあるが、形状と深さ、壁面がほぼ垂直であることから、方形竪穴であろうと判断した。内部には建築構造を推定させる部材等は遺存せず、西半底面に人頭大ほどの土丹塊が集積されているに過ぎない。これらは恐らく埋土に投げ込まれたものであろう。

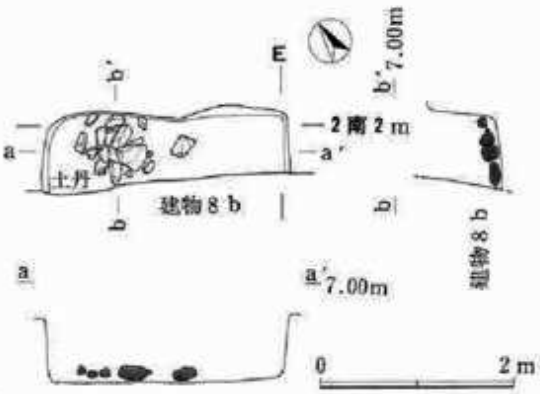



図45　建物17

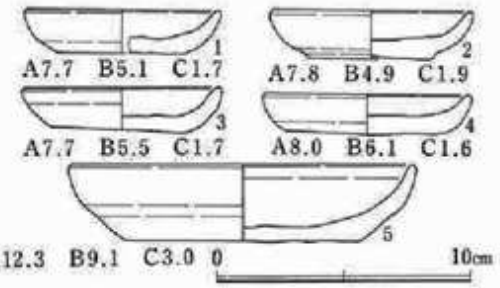



図46　建物17出土遺物

**建物17出土遺物（図46）**

遺存状態を反映して遺物の出土数は少なく、図示し得たのはロクロ成形かわらけ5点のみである。

1～4は小皿、5は大皿である。4は底径大きく浅い。2は底部がやや突出するが、全体としては概ね下半に稜をもつ器形でまとまる。

**建物18（図47）**

グリッド　C－5

確認標高　6.70m

平面形状　調査区外（確認範囲長方形）

長軸方位　N－56°－W

床面規模　土台芯々　NS…1.00m以上　EW…3.10m　3.10㎡以上

床面深さ　土台上面　0.85m　標高　5.85m

掘方底面　0.95m　標高　5.75m

［構造］　建物18は、南半を調査区外に延ばすため不詳だが、木製土台建ての方形竪穴である。土台は腐って殆ど原形を留めないが、北・東・西の各辺で検出された。規模は北辺で長さ3.10m、幅・高さがそれぞれ10cmほどであるが、正確な計測は難しい。土台上面には明確なほぞ穴等の加工痕は観察できず、果たしてこれが柱を立てる土台なのか、若干不安もある。尚、西半中央底面に上面平坦な土丹塊が検出された。土台上面と同レベルであり、構造上意味をもつものと思われる。

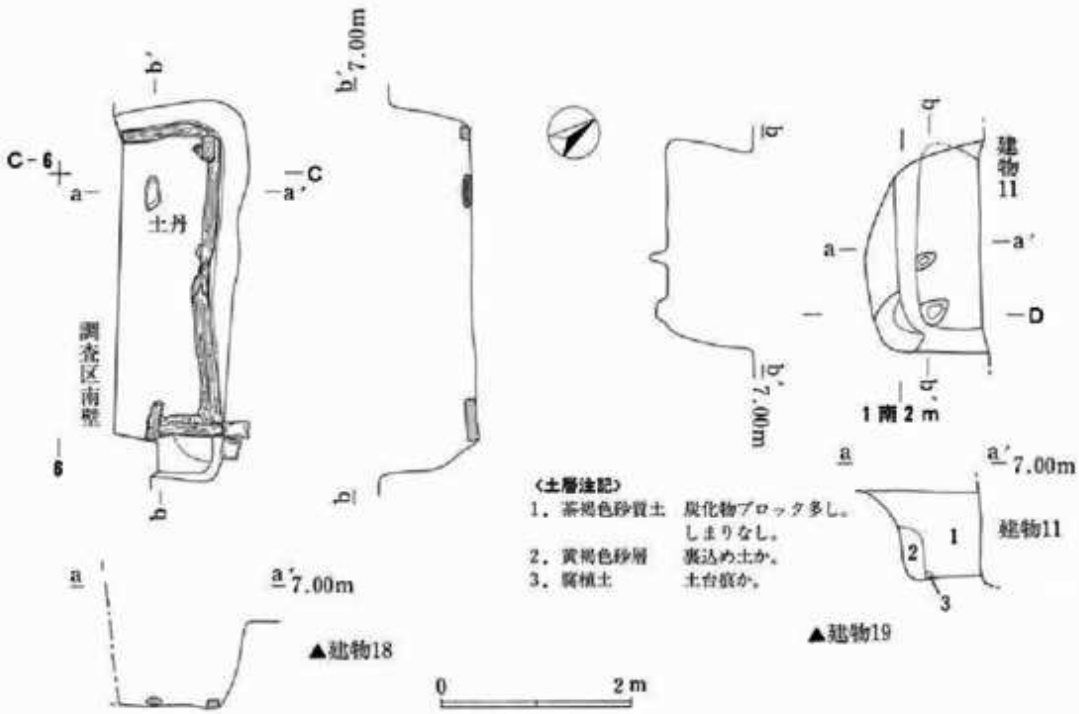



図47　建物18・19

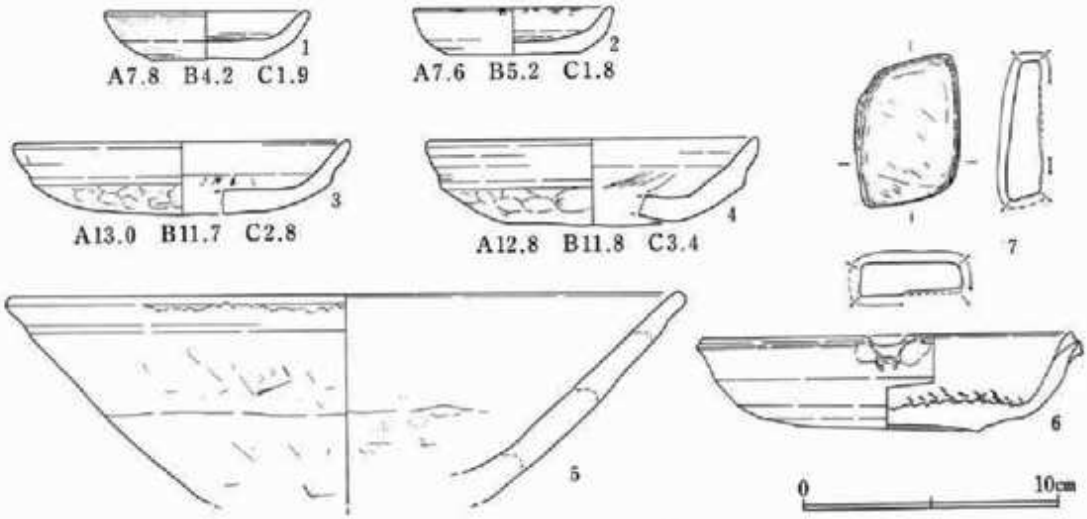



図48　建物18出土遺物

**建物18出土遺物（図48）**

図48 1～4はかわらけ。1・2はロクロ成形小皿。3・4の手づくねは混入品であろう。5は常滑こね鉢。外面下半は板ナデ、口縁部は強い横ナデで薄くなり、端部をほぼ丸く収める。本遺跡出土鉢の中では古相を示す。復元口径25.8cm。6は瀬戸卸し皿。内底の4カ所に重ね焼きのトチ痕が見られる。胎土はきめ細かい灰白色土。釉は淡灰緑色で外底を除きハケ塗りされる。口径14.4cm、底径7.1cm、器高3.7cm。7は石製品。黒褐色砂岩系の硬質な石の各面が、使用研磨されている。

**建物19（図47）**

グリッド　C－1

確認標高　6.80m

平面形状　他建物重複（確認範囲不正長方形）

長軸方位　N－56°－W

床面規模　NS…0.35m以上　　EW…1.75m　　0.61㎡

床面深さ　0.90m　　標高　5.90m

［構造］　建物19は、北側の建物11に切られて大半部を失っている。構造を推し測り得る痕跡は殆どないが、覆土断面を見ると底面壁寄りに腐植土が堆積している。全体規模からして土台構造とは考えにくいが、何らかの建築部材の痕跡であろう。本遺跡では建物28や32のように小規模で、構造的には杭で押さえた横板の壁体しか確認できないものがある。いずれ建物としては小さ過ぎるが、本例のように明確な痕跡を残さない場合は、方形土壙とすべきかも知れない。

**建物19出土遺物（図49）**

図49－1～4はかわらけ。総てロクロ成形で、1～3が小皿、4が大皿である。小皿はやや薄手で器高が低い。大皿は厚手で側壁は丸みをもつ。3は歪みのため復元に無理がある。

5は土器質鉢型手焙り小片。外面には木口状工具によるナデ上げ及び若干の指頭調整がなされる。胎土は長石・雲母・砂粒を含むが焼成が良く、堅く締まる。

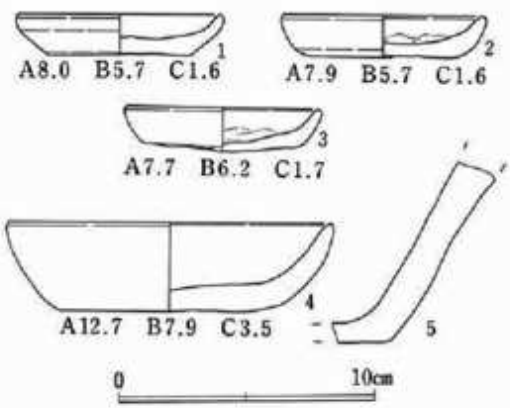



図49　建物19出土遺物

**建物20（図50）**

グリッド　F－4

確認標高　7.30m

平面形状　略正方形

長軸方位　N－34°－E

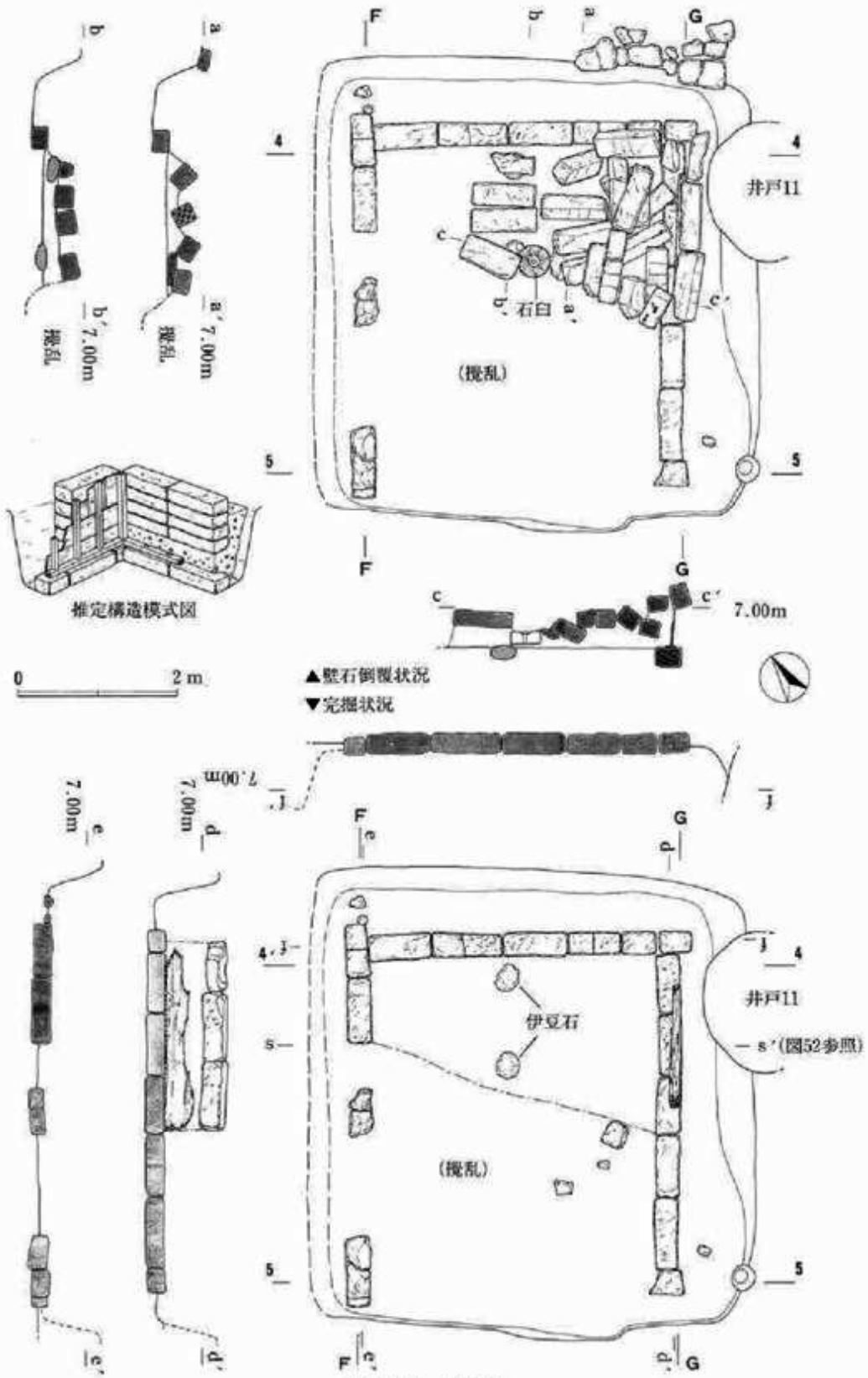
床面規模　石敷き面　　NS…4.55m　　EW…4.15m　　18.88㎡

地覆石芯々　NS…4.30m　　EW…3.95m　　16.99㎡

床面深さ　石敷き面　0.75m　　標高　6.55m

掘方規模　NS…5.75m　　EW…5.50m

［構造］　建物20は、建物21を廃棄してほぼ直上に造られた、四周に地覆石を巡らす方形竪穴である。但し、現代撹乱によって建物南半を床面前後まで大きく破壊されているため、明らかにならない部分も多い。また、東掘り方の一部を井戸11（近世）に切られる。




05 図50 建物20

本址の地覆石は鎌倉石切石であるが、その規格・形状は他の石敷き建物のものとは異なり、長さ70～90cm、幅30cm、厚さ20～25cmの方柱状を呈する。それを短辺が接するように一列に並べている。直上には土台がおかれていたであろうが、東壁の一部に痕跡的に遺存するのみであった。壁体にも切石が用いられるが、その構造はかなり特異な様相である。原状を保つと考えられる東壁北半と、その内側に倒れ込んでいた切石群の観察によると、壁石は地覆石上面に積まれるのではなく、約50cm程も土盛りしてその上に地覆と同方向に並べられる。そして、その壁石は4段ほど積み上げられていたらしい。恐らくはそれを内側から羽目板と柱で支えていたであろう(構造模式図参照)。集積された切石群は、よく見ると北・東両壁がそのまま内側に倒壊した状況である。但し、それは建物廃棄の際の所作によるものと考えられる。一見、目を疑うような構造だが、類似した構造の方形竪穴は、本調査地点にほぼ隣接するスポーツクラブ用地（図1・地点4、1993年調査、未報告）でも確認されている。建築学的な検討を要しよう。また、倒壊した切石群の間から、板圧痕のついたスサ入り粘土小塊が出土している（PL.54)。量が多くないので疑問だが壁土であろう。あるいは、こうした特異な石積みを固定するのに用いられたとも考えられるか。

これまで市内でも方柱切石を用いる方形竪穴は殆ど例がない（図1・地点16では板状地覆石の上に方柱状切石を2段積みにした竪穴が見つかっている)。壁体構造の特異性からしても、本建物址の技術的な系譜を別個に求める必要があるのかも知れない。

**建物20出土遺物（図51）**

本建物址からは、かわらけ・常滑・貿易陶磁等も出ているが、いずれもごく小片である。

図示したのは、倒壊した切石群に挟まれる形でほぼ底面直上から出土した石臼である。一部を欠くが略完形の下臼で、直径44.3cm、孔径4.4cm、高さ15.5cm。目は6分画11～15溝で、工具の痕跡は明瞭でない。中央に径17cm、深さ1.5cm程のくぼみがある。石材は安山岩系で色調灰色。胴部中央に1カ所、「本」と刻まれている。

鎌倉出土の石臼は8分画のもので、6分画はこれまで報告例がない。詳しく調べていないので定かでないが、他地域の出土例も多くは8分画のようである。系譜を考えねばなるまい。

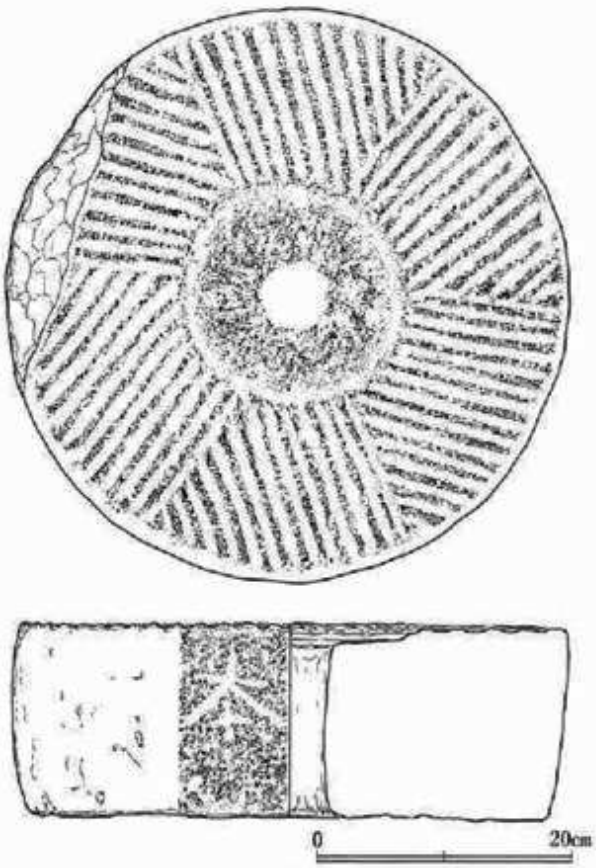



図51　建物20出土遺物

**建物21（図52）**

グリッド　F－4

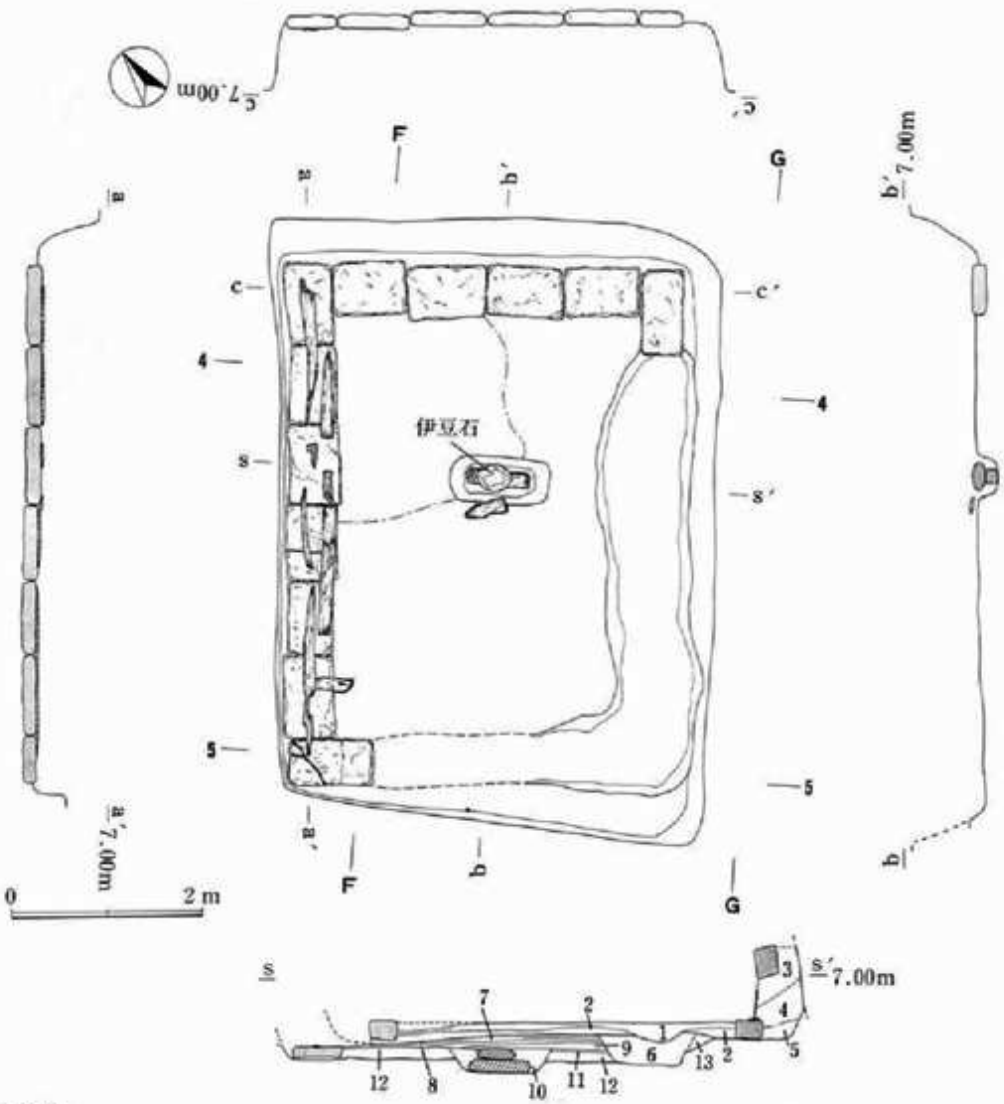
確認標高　6.95m

平面形状　長方形

長軸方位　N－34°－E

床面規模　石敷き面　NS…5.40m　EW…4.20m　22.68㎡

地覆石芯々　NS…4.90m　EW…3.75m　18.38㎡




〈土層注記〉

1．暗灰褐色弱粘質土　中小土丹塊・かわらけ粒・炭化物やや多し、しまりあり
2．暗灰褐色粘質土　土丹粒多し、しまりあり
3．茶褐色弱粘質土
4．茶褐色弱粘質土　土丹粒多し
5．暗灰褐色粘質土　土丹粒多し
6．灰褐色粘質土　土丹粒多し、地覆石抜き取り痕
7．暗灰褐色粘質土　土丹粒多し、しまり強い
8．暗灰褐色粘質土　木片・鉄分を多く含む、しまり弱く粘性に富む
9．暗灰褐色弱粘質土　しまりなし
10．褐色粘質土　土丹小塊充填、「礎石」埋土
11．暗褐色粘質土　土丹粒やや多し
12．暗灰褐色粘質土
13．暗灰褐色粘質土　しまりなし

※1～5層…建物20裏込め土
7～9層…建物21埋土　11～13層…同裏込め土

**図52　建物21**

床面深さ　0.65m　　標高　6.30m

［構造］　建物21は、地覆石を四周に巡らした方形竪穴である。建物25ａを廃棄埋没してその直上に建てられており、また建物１ｂに西端を切られ、廃棄後直上に建物20が建つ。そのため遺存状況は余り良好ではない。

地覆石は、長さ80cm、幅50cm、厚さ12cm程の板状切石を用い、それを短辺が接するように敷き並べている。東・南両辺は抜き取られており、その痕跡が幅広く浅い溝状を呈する。西辺の石上面には、殆ど原形を留めない木製部材断片が検出された。土台や羽目板の残欠であろう。

中央やや北寄りには伊豆石の礎石が地覆石と上面レベルを合わせるように埋めてある。その基底を断ち割ると、105×50cm、深さ25cmの隅丸長方形ピットが掘られており、底面に12cm角、長さ60cmの角材を据えてその上に礎石を乗せていた。これは根太を支持する可能性もあるが、基礎地業の造作からすれば棟持ち柱を受けるのであろう。少々偏在している点が疑問ではあるが、この程度では構造上問題ないのかも知れない。

**建物21出土遺物（図53・54）**

図53－１～10は建物20と土層の識別が困難で、多少混じた可能性のあるもの。本来こうした遺物は除外すべきであるが、図版作成段階で間違えて入ってしまった。11～18は建物21覆土、19～図54－21は床面上、22～24は掘り方出土である。

１～６はロクロ成形のかわらけ。１～５は小皿、６は大皿。典型的な薄手丸深タイプが入る。５は小皿としてはやや大きい。

７～９は常滑。７は甕口縁。縁帯の幅は狭いが、その上端を規則的に削って波状に作っている。これは焼成前の所作であり、特異である。胎土は長石･砂礫を混じえる灰褐色土。復元口径20.6cm。８も甕。口縁はやはり幅狭いが頸部に接し、上方に突出する。白色粒を含んだ黒褐色の胎土。９はこね鉢体部下半片。外面は板ナデ上げ、内面の摩耗は僅かである。胎土は長石・砂礫を多く混じえる橙褐色粗土。復元底径12.6cm。

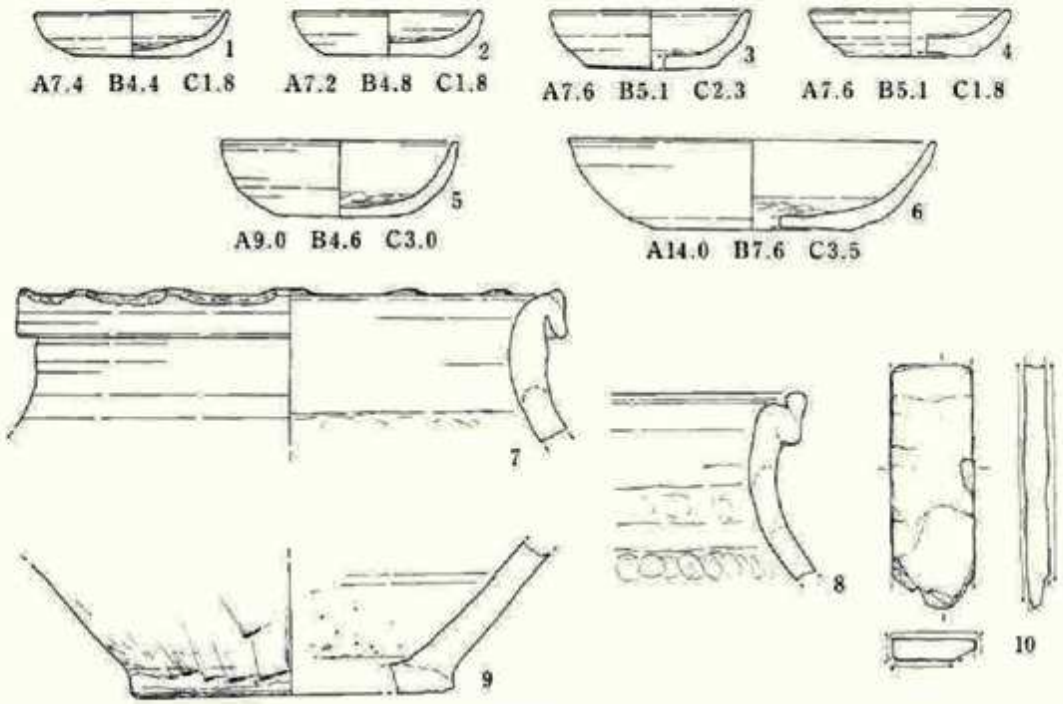
10は砥石。灰白色泥岩質の仕上げ砥。両面使用。残長9.4cm、幅3.2cm、厚さ0.9cm。

11～13はロクロ成形のかわらけ。やや厚手で浅く、側壁はやや丸みを持って立ち上がる。11・12は内外に薄く煤が付着する。

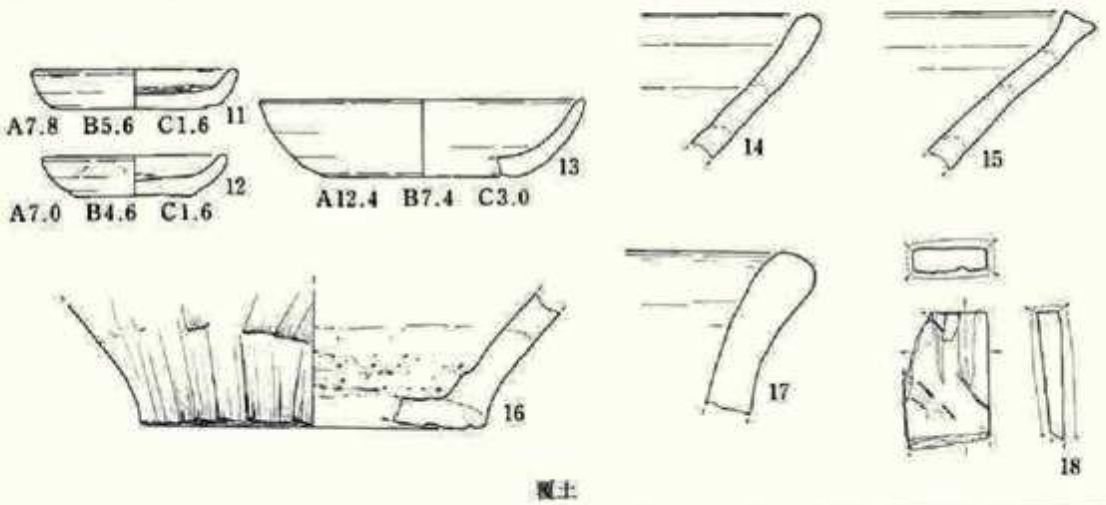
14～16はいずれも常滑こね鉢。14の口縁は丸く、端部内側に弱い沈線が巡る。外面下半に縦位の板ナデ痕あり。胎土は砂粒をやや含んだ黒褐色土。器表は赤茶色を呈す。15は端部が角張り、外方に強く突出する。外面下半には板ナデ上げ痕が残る。胎土は砂粒を含む灰褐色土。16は外面下位が縦位、以上が斜位の板ナデ上げ。胎土は灰褐色粗土。復元底径13.4cm。

17は瓦質手焙り。内面は横ナデ、外面には横位のミガキが入る。胎土は砂礫をやや多く含み、色調橙白色。

18は砥石。黄灰緑色泥岩質の仕上げ砥。両面使用で、片面には浅く鈍いＶ字状の刻みが２条入る。残長5.3cm、幅3.3cm、厚さ0.9cm。




覆土(混)




覆土

床面上

0 10cm

**図53　建物21出土遺物(1)**

**図54　建物21出土遺物(2)**

19は床面上出土のかわらけ。ロクロ成形の小皿で、薄手丸深タイプ。口縁内外に煤付着。

20は常滑甕口縁。T字状で幅の狭い縁帯が巡る。復元口径21.6cm。

図54—21は瀬戸灰釉天目茶碗。側壁は厚みのある底部から稜をもって屈曲し直線的に開く。口縁は上方に直立してすぐに小さく外傾する。また、高台は貼り付けで畳付部が外方へ僅かに開く。胎土はややザラつく黄灰色土。釉は灰緑色で層厚く、内面から外面胴下半部まで垂れかかり、一部白濁している。復元口径11.4cm、高台径4.2cm、器高7.3cm。これについては、出土位置が上層の建物20を侵食している撹乱に近く、混入した可能性もある。

22は長方硯断片。内側が四葉状になる。明瞭ではないが、周縁に沈線を配し、波頭文を線彫りしている。残長6.2cm、幅6.6cm、厚さ1.5cm。

23は掘り方出土のかわらけ。ロクロ成形の小皿。厚手で浅く、側壁は丸い。

24・25は常滑こね鉢。ともに口縁形態は似通い、強いナデによってうすくなり、端部が角張る。

**建物23（図55）**

グリッド　F・G—5

確認標高　7.05m

平面形状　調査区外（確認範囲長方形）

長軸方位　N—56°—W

床面規模　NS…0.50m以上　　EW…3.30m

床面深さ　1.30m　　標高　5.75m

建物23は、北辺のごく一部を確認したのみであり、構造を知る手掛かりはなかった。尚、本建物址は建物28直上に建てられ、西側で建物24を切っている。

**建物23出土遺物（図56）**

図56—1～6が建物23より出土した。

1・2はかわらけ。ロクロ成形の小皿。

3はかわらけ質で、柱状高台部分のみ残存するが皿であろう。外底面は糸切りでスノコ状圧痕が付く。胎土は微砂・白針を含む淡灰褐色土。高台径4.6cm。

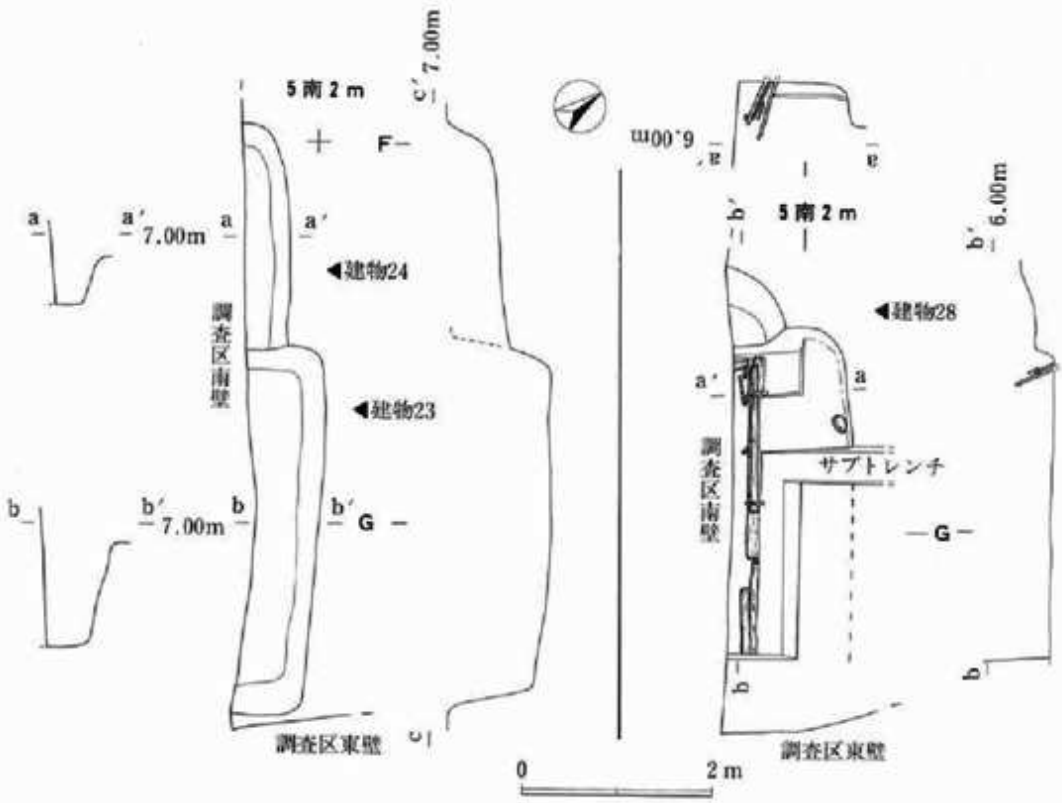



**図55　建物23・24・28**

4は瀧美壺頸部。口縁は下方に小さく折り曲げているが、その端部はすべて打ち欠かれている。胎土は微砂質の精良な灰褐色土、ハケ塗りの釉は薄く斑らである。復元口径9.8cm。

5・6は常滑甕。5は線帯幅のやや狭いT字状口縁、6は外方に開く底部。復元底径15.2cm。

**建物24（図55）**

グリッド　F−5

確認標高　6.85m

平面形状　他建物重複・調査区外

長軸方位　N−56°−W

床面規模　NS…0.30m以上　　EW…2.10m以上　　0.63m²以上

床面深さ　0.55m　　標高　6.30m

建物24も、大半は調査区外に延び、東側を建物23に切られるため構造は不詳。

**建物24出土遺物（図56）**

図56−7〜12が建物24から出土した。

7〜9はロクロ成形のかわらけ小皿。7は内底にナデが施されず、中央にロクロ目の高まりが残る。9は径が大きく器壁が直線的に開く。

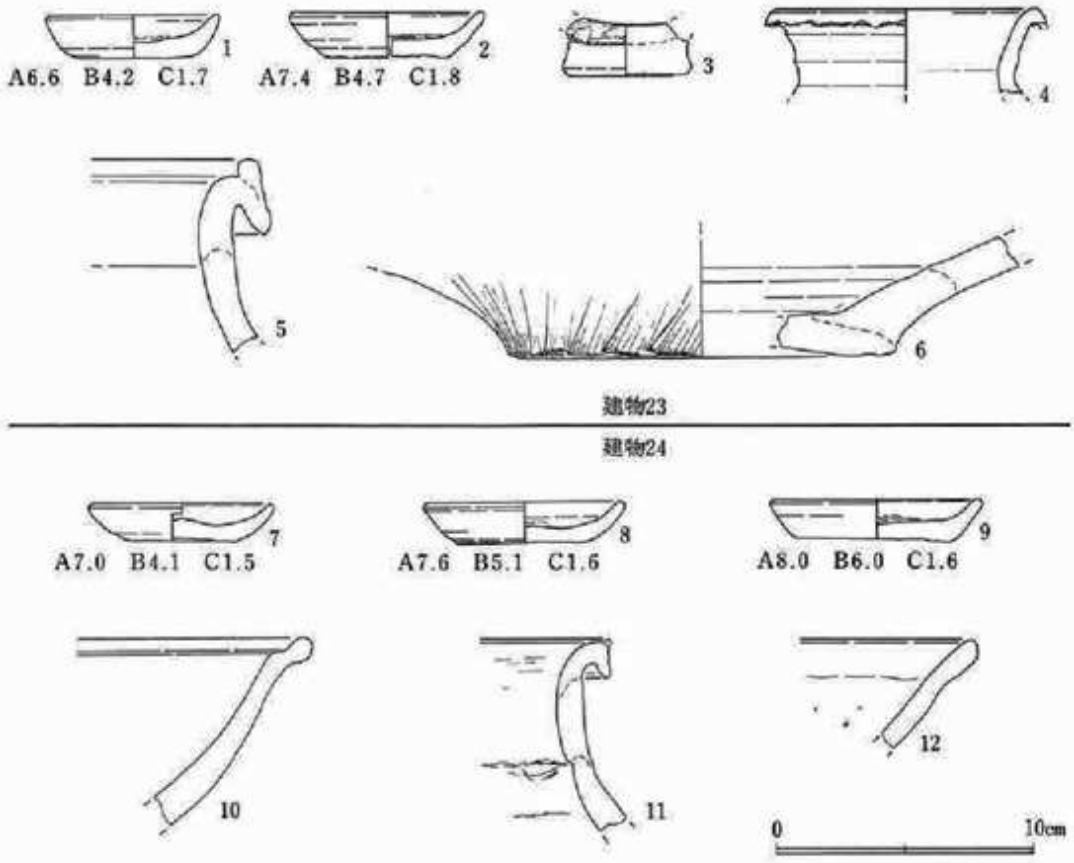



**図56　建物23・24出土遺物**

10は瀬戸灰釉折縁鉢。胴部は丸みをもって立ち上がり、口縁は外方に小さく折り返されて、玉縁状になる。外表下半は回転ヘラケズリ整形。胎土は白色粒を含み淡黄白色を呈す。釉は淡黄緑色。

11は常滑甕。器壁やや薄く、口縁は小さく上下に突出する。内面下半に煤が薄く付着する。

12は山茶碗窯系こね鉢。端部は外から内に向かって摘でられ、断面は鈍三角形を呈す。

**建物25 a（図57）**

グリッド　F－4

確認標高　6.15m

平面形状　主屋部　正方形

張出部　長方形

長軸方位　N－34°－E

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 床面規模 | 主屋部 | 羽目板内法 | NS…4.05m | EW…4.05m | 16.40㎡ |
| | | 土台痕芯々 | NS…3.90m | EW…3.90m | 15.21㎡ |
| | 張出部 | 土台芯々 | NS…1.10m | EW…1.30m | 1.43㎡ |

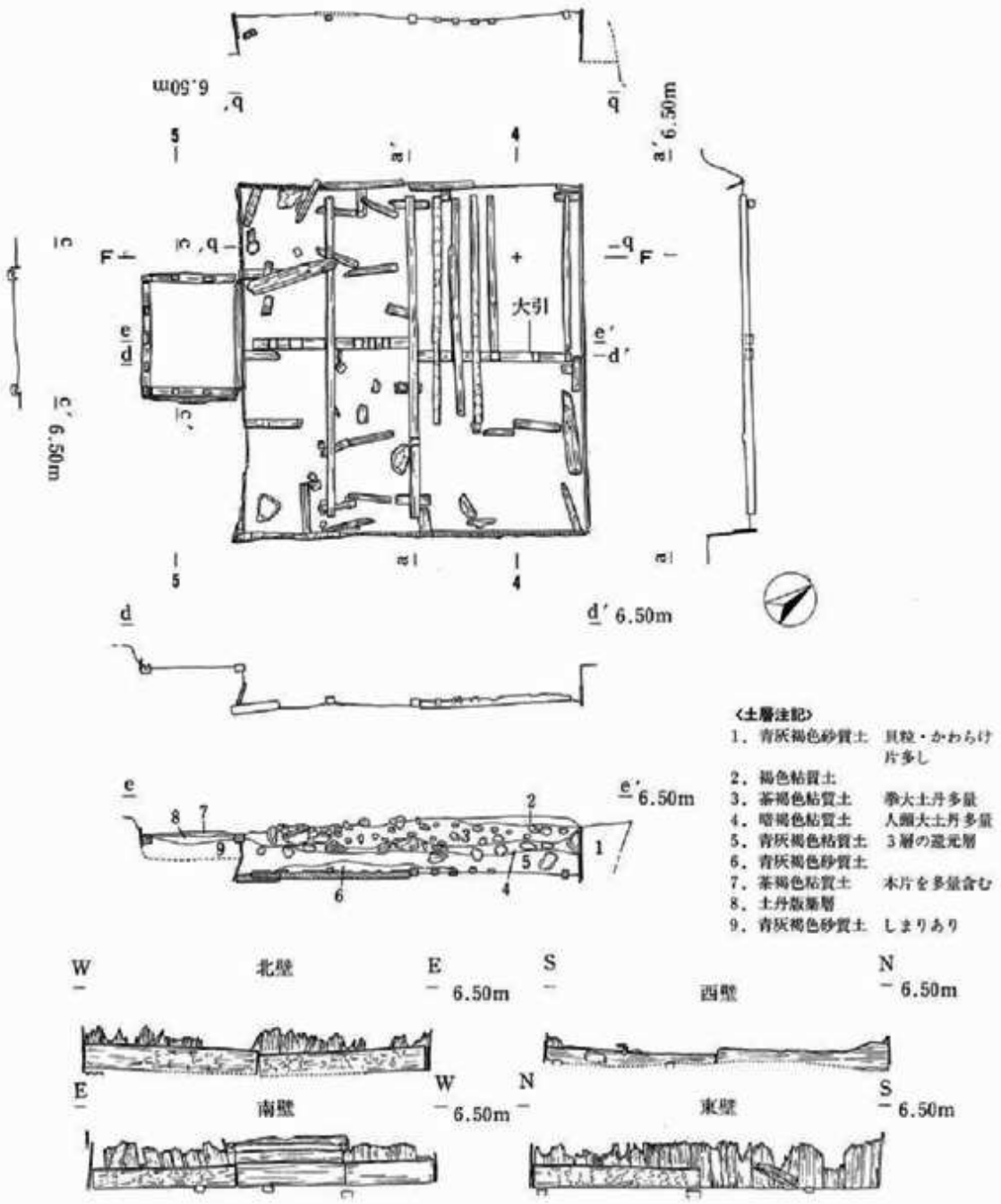



**図57　建物25a**

床面深さ　主屋部　根太上面　0.50m　　標高　5.65m
　　張出部　土台上面　0.10m　　標高　6.05m

［構造］　建物25aは、主屋部と張出部とからなる土台建ての方形竪穴である。建物25b・32を埋没した上に建てられており、その廃棄後は直上に建物21が建築される。

本建物址は、木製部材の遺存状態が良好であった。主屋部の土台は抜き取られているが、ベタ付けで接する根太の位置からして、推定12cm角、長さ405cmの材が用いられていたと思われる。床下構造は、まず、東西中軸線上に長さ375cm、幅・高さとも10cm程の根太が置かれ、直交方向の南北中軸付近に、若干食い違う形で大引（根太を受ける横木）が南北それぞれにほぞ組みされる。大引は各々長さ180cm、10cm角ほどの材で、根太を固定するための凹みが不等間隔（多くは芯々20cm前後）で刻まれている。凹みは12カ所であるが、上に遺存していた根太は6本であった。南半中央の根太は東西両土台にベタ付けされる、長さ370cm、8cm角のしっかりした材であるが、北半に残るその他の根太はいずれも中途半端で、西端を土台に付けるが東端は不揃いである。これは端部の様子からすれば、建物廃棄時に刻まれたものではない。また、それらは幅8cm、高さ4～6cmとやや細く、一部には厚さ1cmほどの板状になるものもあった。これらの下は薄く土丹地業されていた。羽目板は、建物10などと同様、内側に横板（長さ195cm、幅27cm、厚さ2cm）、その背後に密着して縦板（残長60cm、幅25cm、厚さ1cm）が並べられる。横板は東壁南半を欠失するが、1段ずつ、南壁の張り出し取り付き部のみ2段に積まれていた。これらの羽目板直下には、各辺に2～3本ずつ直交方向に角材が挟み込まれている。土台の基礎であろう。柱材は、原状を保つものはなく、北東・南西両コーナー付近に隅柱と思われるほぞを切った部材が倒覆していた。残長100cm、12cm角の太い材である。

張り出し部は主屋部と約40cmの比高差がある。三方に10cm角の土台が巡り、10×6cm、深さ5cmほどのほぞ穴が30～40cm間隔で穿たれていた。主屋側には同規模の框が置かれる。その内側は土丹により版築されていた（層厚5～10cm）。また、羽目板は横板が僅かに遺存するのみであった。

掘り方は土層識別が困難で、北壁の一部などでしか確認していない。幅は狭かったようである。

**建物25a出土遺物（図58）**

図58－1～11はロクロ成形のかわらけ。1～8が小皿、9～11が大皿である。全体に厚手で器高低いが、薄手化した製品（7・8・10）も含まれる。

12は白磁口兀碗。復元口径14.2cm。13は瀬戸入子。口径5.7cm、底径3.8cm、器高1.7cm。14は常滑甕口縁部。15は常滑甕転用陶片。16は坩堝片。胎土にモミ殻を多く含む。内面から外表中程まで付着した溶着物は赤褐色～茶褐色を呈し、一部に緑青が吹いている。17は加工土丹。一端に小さな孔を穿つ。

18は刀子の柄と思われる。上下2カ所を5mm幅の桜皮紐で締めており、一端を柄材に挟み込んで巻きはじめ、最後は柄に刻みを入れて差し込んでいる。また、2カ所に孔が開き、一方には腐食した目釘が残る。19は刀子の鞘であろう。20は漆器皿。黒漆が全体に塗られる。無文。口径9.2cm、底径7.0cm、器高1.5cm。

21は青磁碗底部。高台径4.8cm。22は褐釉小壺底部1/4片。素地は非常に緻密な暗赤褐色土。復元底径3.0cm。23は貝製品。材はハマグリ。24は四葉硯。海部隅に墨が残る。25は鉄製品。火箸と思われる。上半の一部を捩って螺旋状にし、端部は環状に作っている。残長21.2cm。

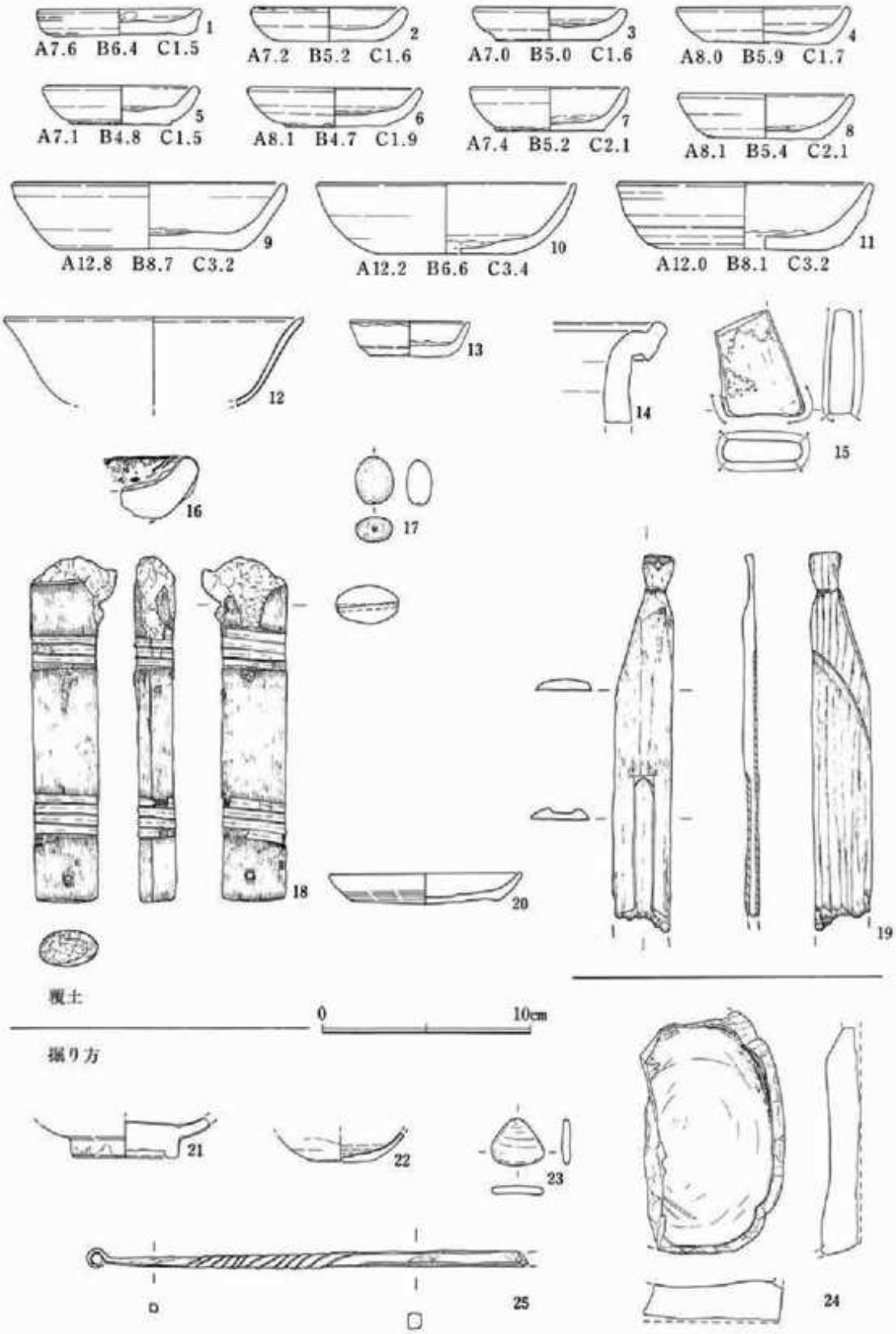



図58　建物25 a 出土遺物

**建物25ｂ（図59）**

グリッド　F－4・5

確認標高　6.30m

平面形状　主屋部　他建物重複（確認範囲長方形）

張出部　長方形

長軸方位　N－56°－W

床面規模　主屋部　NS…3.40m以上　EW…4.60m　15.64㎡

張出部　NS…1.30m　EW…1.00m　1.30㎡

床面深さ　主屋部　1.10m　標高　5.20m

張出部　0.60m　標高　5.70m

［構造］　建物25ｂは、主屋部と張り出し部とからなる、推定土台建ての方形竪穴である。建物27埋没後に構築され、廃棄後は直上に建物25ａが建てられる。張り出し部の遺存状況は良好だが、主屋部は部材の殆どを抜かれた上、建物25ａに切られ、また掘り方が砂層であったため湧水崩落し、その形状を把握するのは困難であった。主屋部については、南壁東隅に羽目板の一部が遺存する他は不詳。張り出し部は、主屋部と約50cmの比高差をもち、南北方向に7cm角材の根太1本と框が残り、横羽目板の残欠が周囲を巡る。根太直下に1カ所礎板が挟まれている。

建物25ｂには、東壁に竹樋が埋設されていた。先端は調査区外に延びてしまうため不明だが、長さ185cm以上、東に向かって約5°下方傾斜をもつ。樋本体は、検出した範囲では1本の孟宗竹の節を抜いたものと見られる。土圧で潰れており、その幅は11cmほどである。建物取り付きの部分には10cm角材（転用材）を二つ土台にし、両脇も小材で押え込んでいる。また、掘り方北側にも2カ所に補助材が検出された。これも建物10と同様に排水を目的としたものであり、小町大路側溝へ流れ込んでいたものと推察される。

**建物25ｂ出土遺物（図60）**

図60－1～7は総てロクロ成形のかわらけ。1～3は小皿、4・5は内折れミニ、6は内折れ小皿、7は大皿である。

8は渥美鉢。胎土はややきめの粗い砂質土で青味がかった灰黒色を呈す。施釉は見られない。内面上下端に煤が薄く付着する。9は瓦質鉢型手焙り。

10は漆器。器形は浅い盤のようで、口縁を外方にやや突出させている。黒漆が外底面を除き厚く塗られる。口径21.0cm、底径20.3cm、器高3.8cm。

11・12は酸化焔焼成の山茶碗窯系こね鉢。同一個体かと思われる。胎土は微砂質で締まった茶褐色土。内面はよく摩耗する。13は瀬戸入子。外底はヘラケズリ。内面はかなり摩滅する。口径9.0cm、底径4.4cm、器高3.4cm。14は青磁折縁鉢。釉は灰緑色半透。復元口径12.1cm。

15は漆製品。一木でしなりをもった竹を作り出し、下端に深さ2～3㎜の浅い孔を開ける。竹は上端で二股に分かれ、途中には小枝が2カ所から出た様を精巧に写実している。先端は斜面になっ

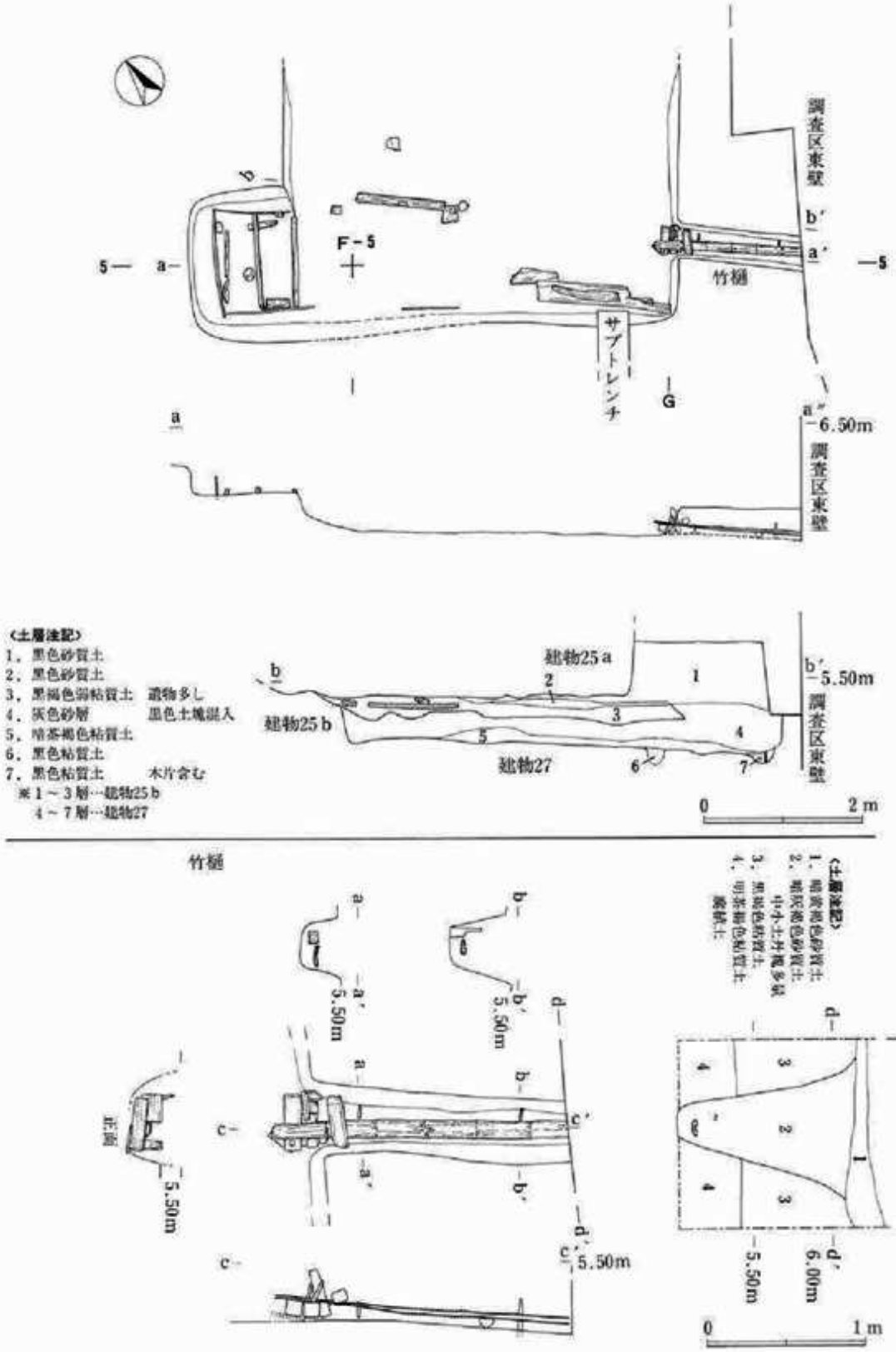

調査区東壁
b'
a'
5
a
F-5
竹樋
サブトレンチ
G
a''
6.50m
調査区東壁
〈土層注記〉
1．黒色砂質土
2．黒色砂質土
3．黒褐色弱粘質土　遺物多し
4．灰色砂層　黒色土塊混入
5．暗茶褐色粘質土
6．黒色粘質土
7．黒色粘質土　木片含む
※1～3層…建物25b
4～7層…建物27
建物25a
建物25b
建物27
b'
5.50m
調査区東壁
0
2m
竹樋
〈土層注記〉
1．暗黄褐色砂質土
2．暗灰褐色砂質土
中小土片塊多鉄
3．黒褐色粘質土
4．明茶褐色粘質土
腐蝕土
5.50m
正面
c
c'
d
d'
6.00m
0
1m

図59　建物25b

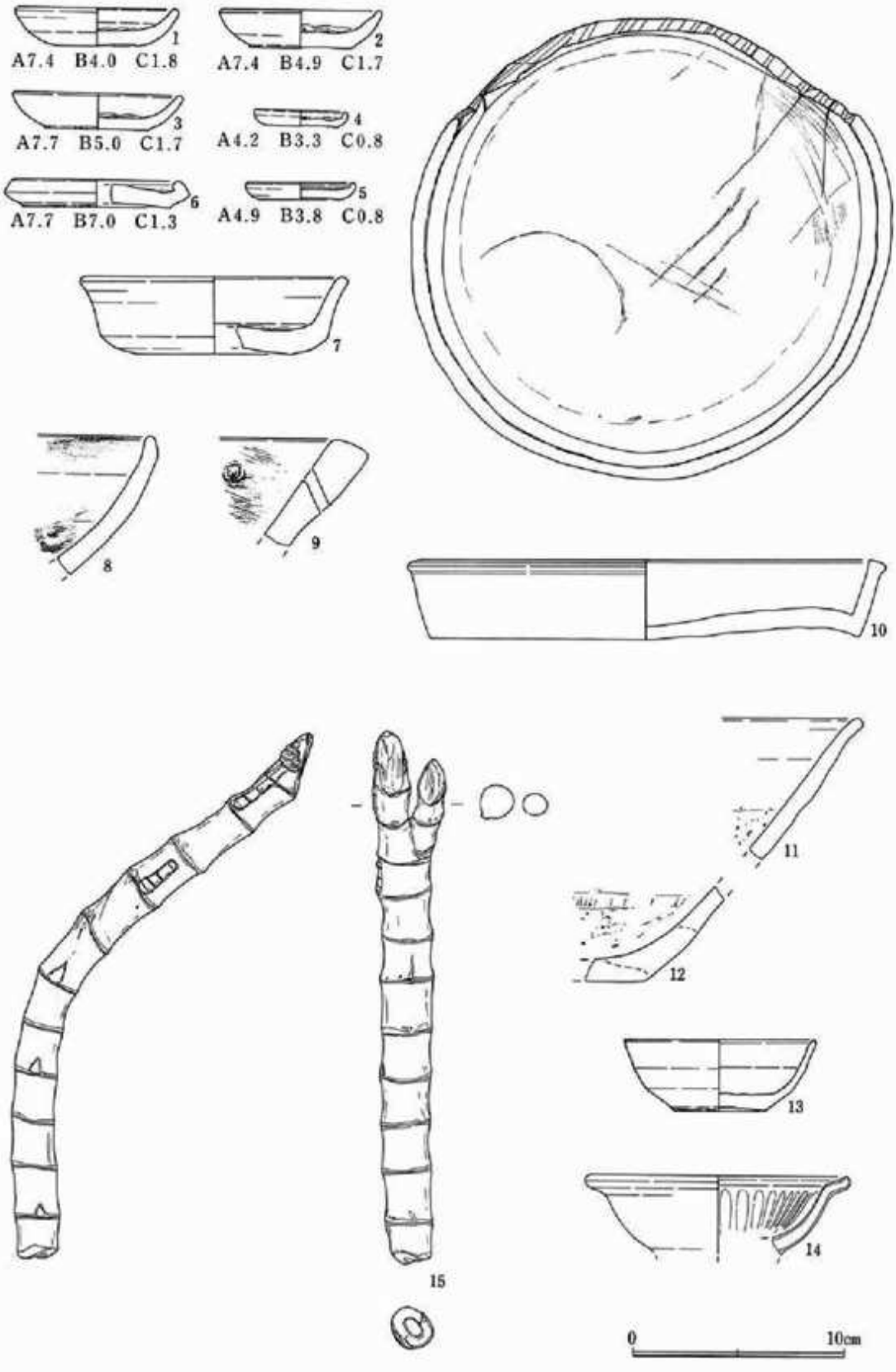



**図60　建物25ｂ出土遺物**

ているが漆が付着しており、まだ延びるのかもしれない。全体に黒漆が塗られるが、下端は下地かと思われる朱漆が表出している。全長（直線）25.2cm。用途不明。

**建物27**

グリッド　F－4

確認標高　5.10m

平面形状・長軸方位　不明

床面規模　NS…不明　　EW…5.40m

床面標高　4.65m

［構造］　建物27は、建物25b下に設定したトレンチによって存在が確認されたもので、全掘していないため不詳である。しかし、トレンチ内で南東コーナーが引っ掛かっており、推定範囲はおよそ図147に示したようになろうか。土層堆積（図59）を見ても判るように、平坦な底面と直立する壁の様子から方形竪穴と判断したが、いかにも底面レベルが低すぎる点、疑問とせざるを得ない。東壁は茶褐色の腐植土であり、地山落ち込みの堆積土を掘り込んでいるようである。

**建物27出土遺物（図61）**

建物を確認したトレンチ内の遺物であり、若干混入している可能性がある。

図61－1～6はかわらけ。1～3・5はロクロ成形、4は手づくね成形。6は古代以来の系譜を引く底部円盤作りによる大皿。体部が一部剝落して、円盤の形状がよく判る。外底は糸切り・板状圧痕、内底ナデの範囲は狭い。胎土は微砂・雲母粒をやや多く含み、淡黄茶色を呈す。

7は青磁小碗。側壁は丸味をもち、半球状を呈する。素地は黒粉をやや多く混じえ、比較的きめが粗いが、堅く焼き締まった灰色土。釉は暗灰緑色半透明で、口唇部が削り取られて口兀となる。また、断面には補修に用いた漆が付着する。復元口径8.2cm。

8・9は常滑。8は甕。口縁を上方にのみ小さく引き上げる。内面下半には油煙と思われる煤が付着している。胎土は粒径の大きな長石等を含まず、比較的きめ細かく締まりがある。復元口径33.4cm。9はこね鉢。口縁やや肥厚し、断面三角形となる。

10～12は山茶碗窯系こね鉢。10は外表下半を3段にわたってヘラケズリし、内外の一部に煤が薄く付着している。復元高台径14.6cm。11は口縁玉縁状で、外縁に沈線は巡らない。12は微砂質で夾雑物の少ない胎土で、色調は若干青味を帯びた灰～灰黒色。高台はやや潰れ気味で外方に軽く張り出し、モミ殻圧痕が付く。内面は使用により著しく荒れている。また、内底外縁に外方に向かって水平に、径3mmほどの貫通しない孔が穿たれている。復元高台径14.4cm。渥美の製品か。

13は渥美甕口縁部小片。端部が強いナデにより稜をもって凹む。内面一部に煤付着。

14は手焙り。浅鉢型で、胴はやや丸みをもち、口縁が外方に張り出して角張る。外面下端と外底面はヘラケズリ。内面には交叉する斜位ナデが見られる。上半は内外とも被熱によって器表が荒れ、煤が付着する。復元口径30.4cm、鍔径33.8cm、底径22.6cm、器高7.3cm。

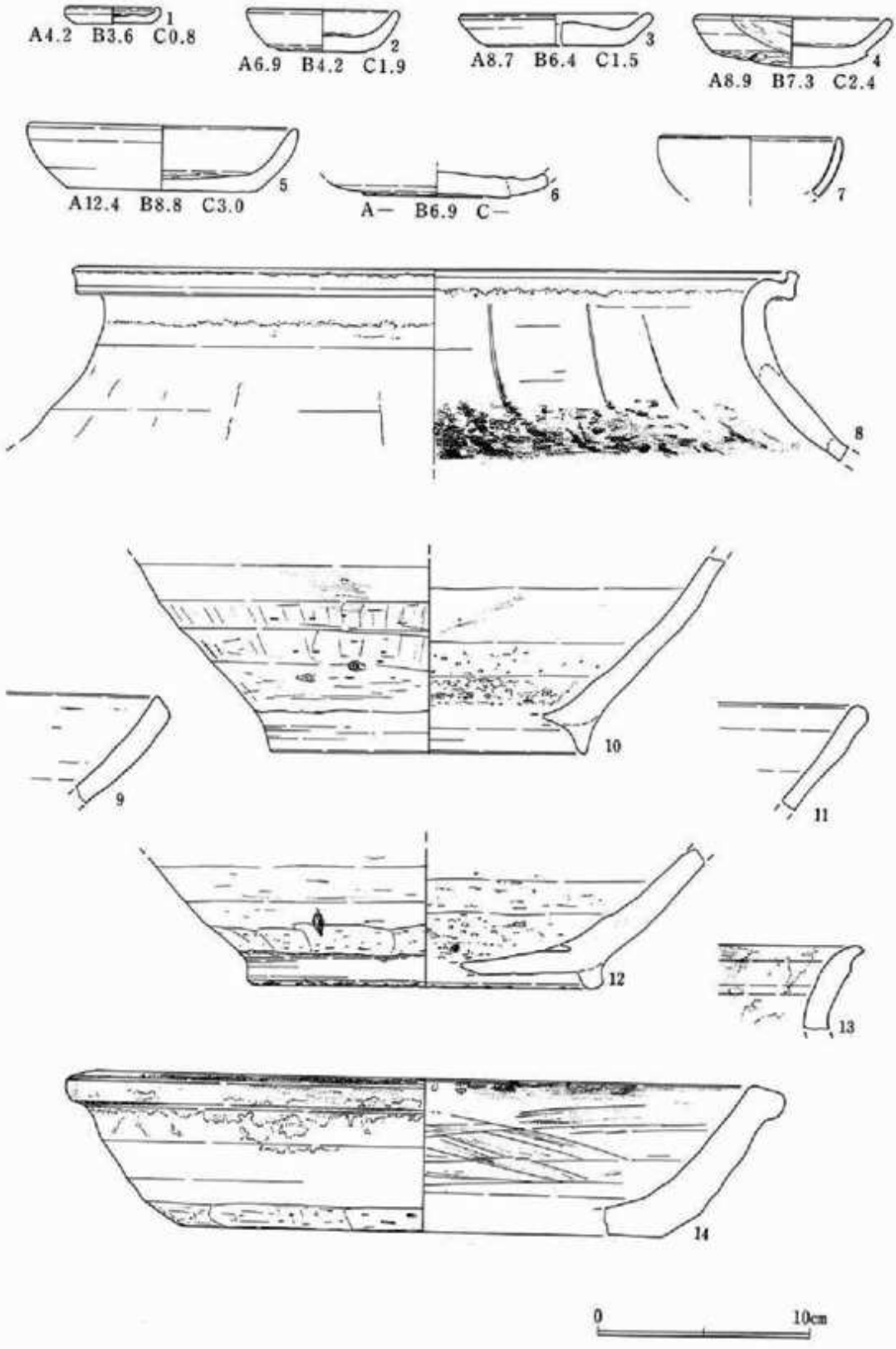



図61　建物27出土遺物

**建物28（図55）**

グリッド　F・G－5

確認標高　5.70m

平面形状　調査区外

長軸方位　N－56°－W

床面規模　NS…0.30m以上　　EW…3.10m以上

床面深さ　0.35m　　標高　5.35m

［構造］　建物28は、調査区南東隅でその一部が確認されたに過ぎず、詳細は不明である。これを廃棄した後、直上に建物23が建てられる。

建築部材としては、北壁の羽目板とそれ支持する杭を検出した。崩落の危険性がある調査区壁際という事もあって詳しくは記録できなかったが、2～3枚の横板を表裏両面から小杭で押さえており、西端では直交する西壁羽目板が南調査区外へと延びている。北側掘り方がやや広く掘られ、その一部に多数のマテ貝とアワビが集中して出土する部分があった。貝が掘り方に集積された経緯は不明である。

**建物28出土遺物（図62）**

図62－1～3はロクロ成形のかわらけ。1・2が小皿、3が大皿。器形は概ね浅く側壁が丸味をもつ。1は内外に煤が付着している。

4は常滑こね鉢。口縁は肥厚せず、断面三角形状に外方に少し張る。胎土は長石・砂粒を少量含み、やや締まる。二次焼成を受けているため色調は灰褐色を呈し、内外に煤が付着する。

5は山茶碗窯系こね鉢。体部は直線的に開く。強いナデによって口縁は薄くなり、ごく小さく外反する。内外面横ナデ。内面下半はやや摩滅している。胎土に粒径の大きな長石・砂礫は少なく、やや砂質である。焼成が甘いため軟質で、色調は灰～灰白色を呈する。内表には広範に褐～茶褐色の物質が薄く付着している。復元口径33.2cm。

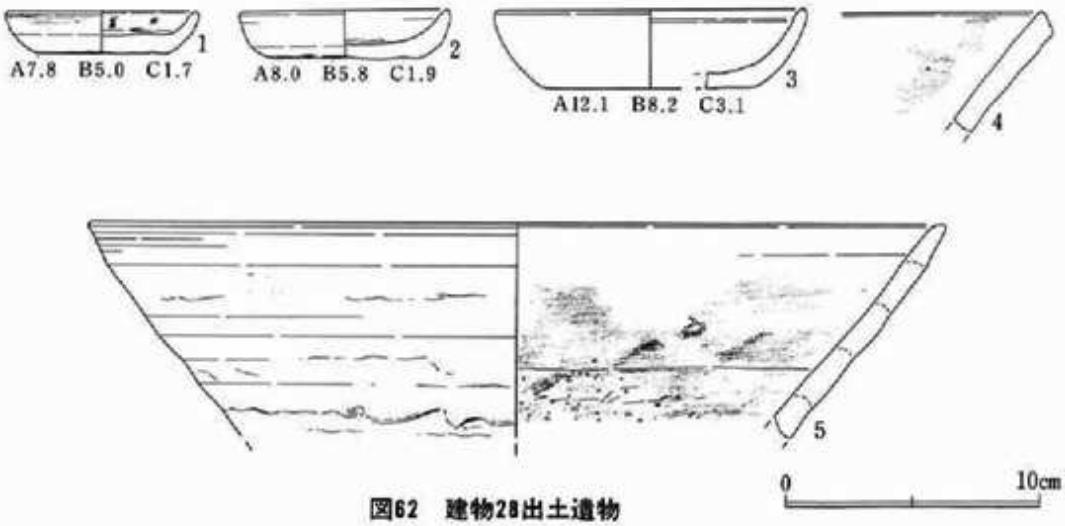



**図62　建物28出土遺物**

**建物29（図63）**

グリッド　E・F－2・3

確認標高　5.50m

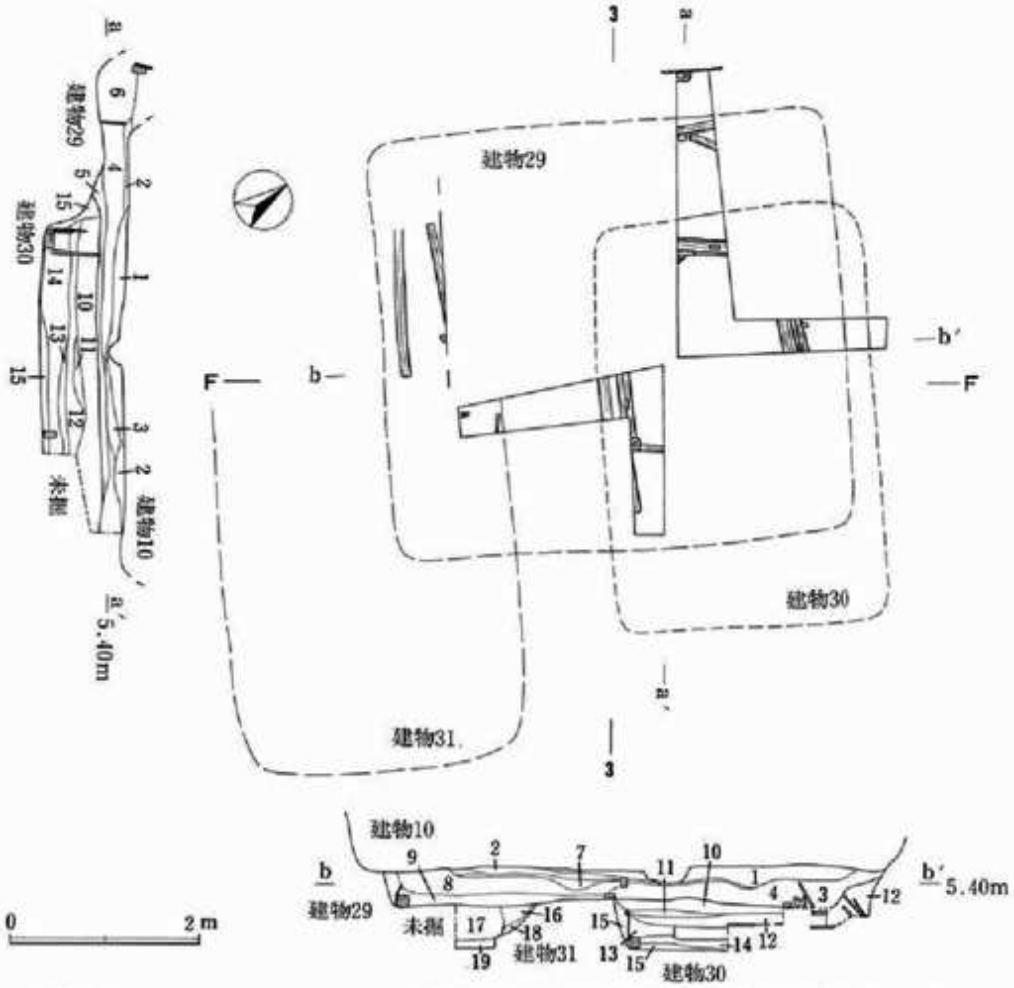
平面形状　推定正方形

長軸方位　N－60°－W

床面規模　NS…4.30m　　EW…4.20m以上　　18.06㎡以上

床面深さ　0.35m　　標高　5.15m

［構造］　建物29は、木製土台建ての方形竪穴である。南北両辺に上面にほぞ穴を切った12cm角




〈土層注記〉

1．黒褐色粘質土
2．暗灰褐色粘質土　しまりあり
3．暗灰褐色粘質土
4．暗灰褐色粘土
5．暗灰褐色粘質土　木片多量
6．暗青灰色砂層　灰褐色粘土塊混入
7．暗灰褐色粘質土　かわらけ片多量
8．暗灰褐色粘質土　貝粒多量
9．暗灰褐色粘質土　青灰色砂混入
10．暗灰褐色粘土
11．暗灰褐色粘質土
12．灰褐色粘質土
13．灰褐色粘質土　木片多し
14．黒灰褐色粘質土　しまりあり
15．青灰色砂層　しまりあり
16．暗灰褐色粘質土
17．暗灰褐色粘質土　しまりあり粘性強
18．暗灰褐色粘質土　青灰色砂混入
19．青灰色砂層

**図63　建物29・30・31**

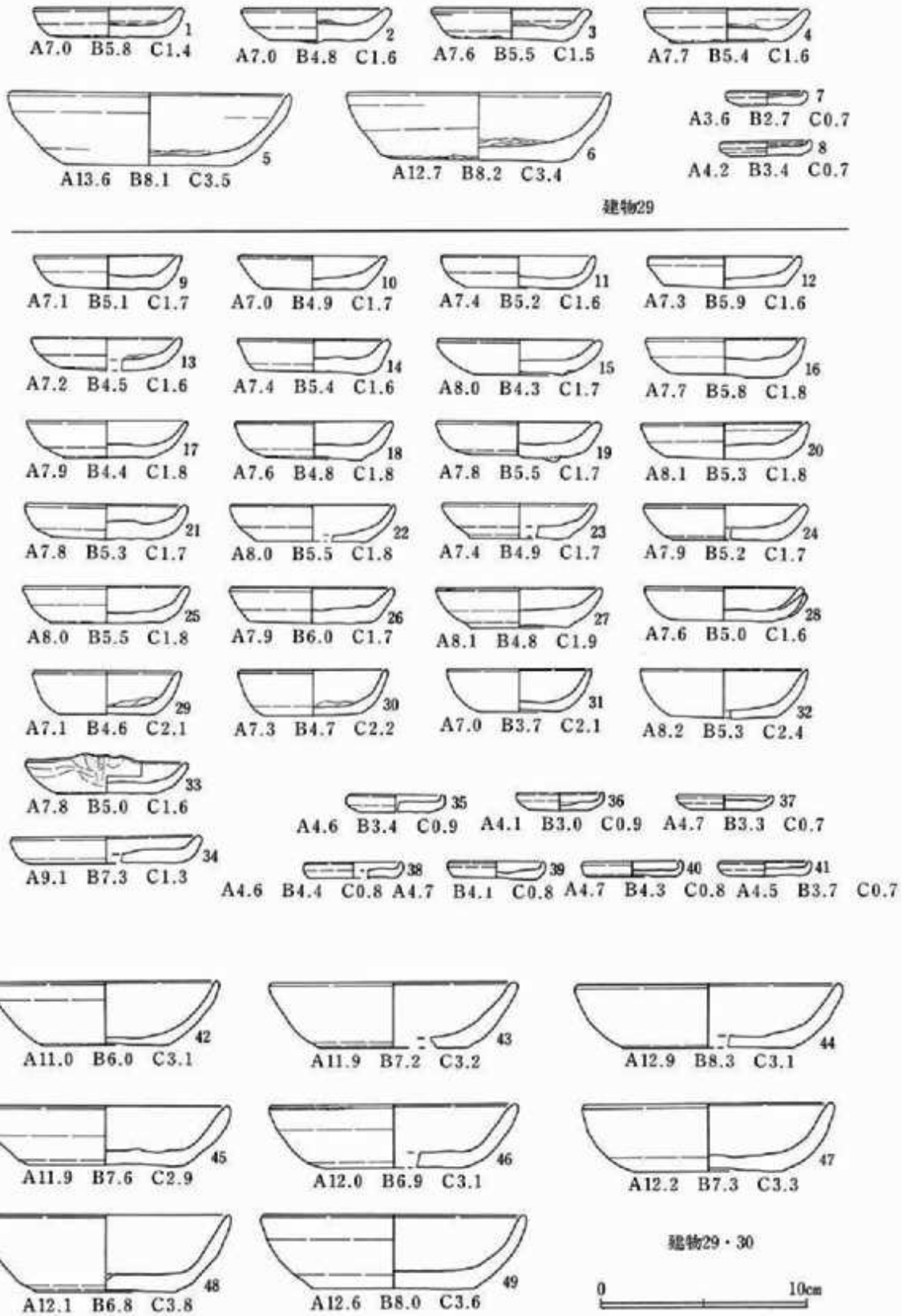



**図64　建物29・30出土遺物(1)**

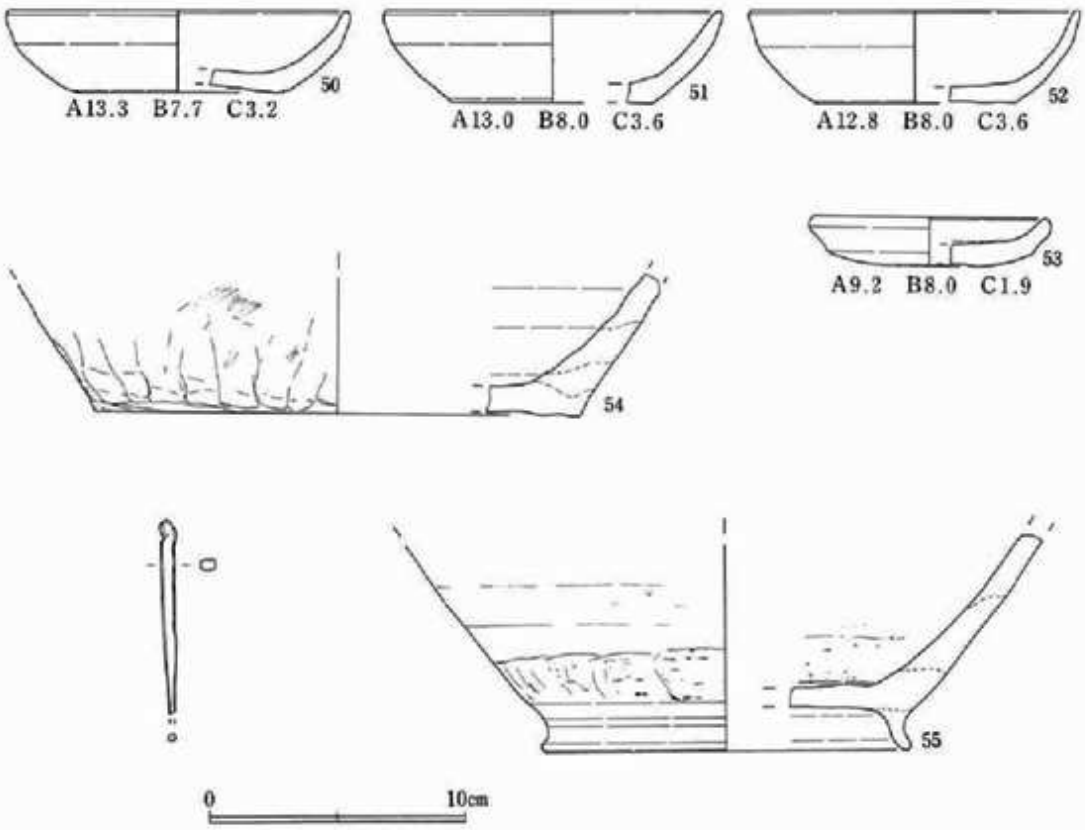



**図65　建物29・30出土遺物(2)**

の土台角材が、北・南・西辺に横板の羽目板が検出されている。

**建物30（図63）**

グリッド　E・F－2

確認標高　5.15m

平面形状　推定長方形

長軸方位　N－60°－W

床面規模　NS…2.40m　　EW…3.90m　　9.36㎡

床面深さ　0.45m　　標高　4.70m

［構造］　建物30は、木製土台建ての方形竪穴である。西・南辺にほぞ穴を切った10cm角ほどの土台角材が、西・南・東辺に横板の羽目板が検出されている。

**建物31（図63）**

グリッド　F－3

確認標高　5.15m

平面形状　不明（確認範囲長方形）
長軸方位　N－60°－W
床面規模　NS…2.90m　　EW…3.70m以上　　10.73㎡以上
床面深さ　0.45m　　標高　4.70m

建物29～31は、建物10床下トレンチ（図63）及びG3セクションベルト（図32）、G4トレンチ（図142）によって存在が確認された。これらは諸般の事情により完掘できず、規模等についての若干の記録を取ったのみであるので、ここでは詳述しない。尚、いずれの建物も掘り方底面は地山（還元青灰色砂層）であった。

**建物29・30出土遺物（図64・65）**

建物10床下トレンチから出土した遺物を図示した。その大半は一括して上げられてしまい、帰属遺構を明確にできるものは僅かしかない。しかし、混乱した遺物も殆どは建物29から出たものであろう。

図64－1～8は建物29出土の、9～図65－53は建物29・30混入のかわらけ。53のみ手づくねで他はロクロ成形である。やや薄手化傾向を示すもの、典型的な薄手丸深タイプに属するもので殆どを占められている。狭いトレンチの割りには出土数が多く、胎土も全体に均質であり、内折れ極小タイプが割合的に多く含まれるなど、かわらけ溜まりの様相に近い。

54は常滑甕底部。復元底径19.0cm。55は山茶碗窯系こね鉢。しっかりした高台が外方にやや張り出す。復元高台径14.0cm。56は鉄釘。先端を欠く。残存長7.6cm。

**建物32（図66）**

グリッド　F－3・4
確認標高　5.60m
平面形状　長方形
長軸方位　N－56°－W
床面規模　NS…1.85m　　EW…3.25m
　　6.01㎡
床面深さ　0.50m　　標高　5.10m

［構造］　建物32は、羽目板を杭で押える簡素な作りの方形竪穴である。建物31を廃棄埋没した上に建てられ、建物25aによって南半を切られている。また、建物北西隅は、残土処理の関係上未掘に終わってしまった。

部材は南北両壁に比較的良く残っていたが、個

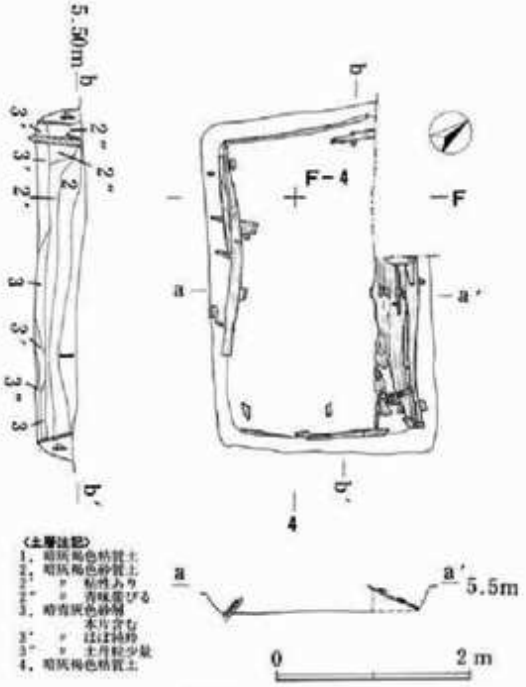



図66　建物32

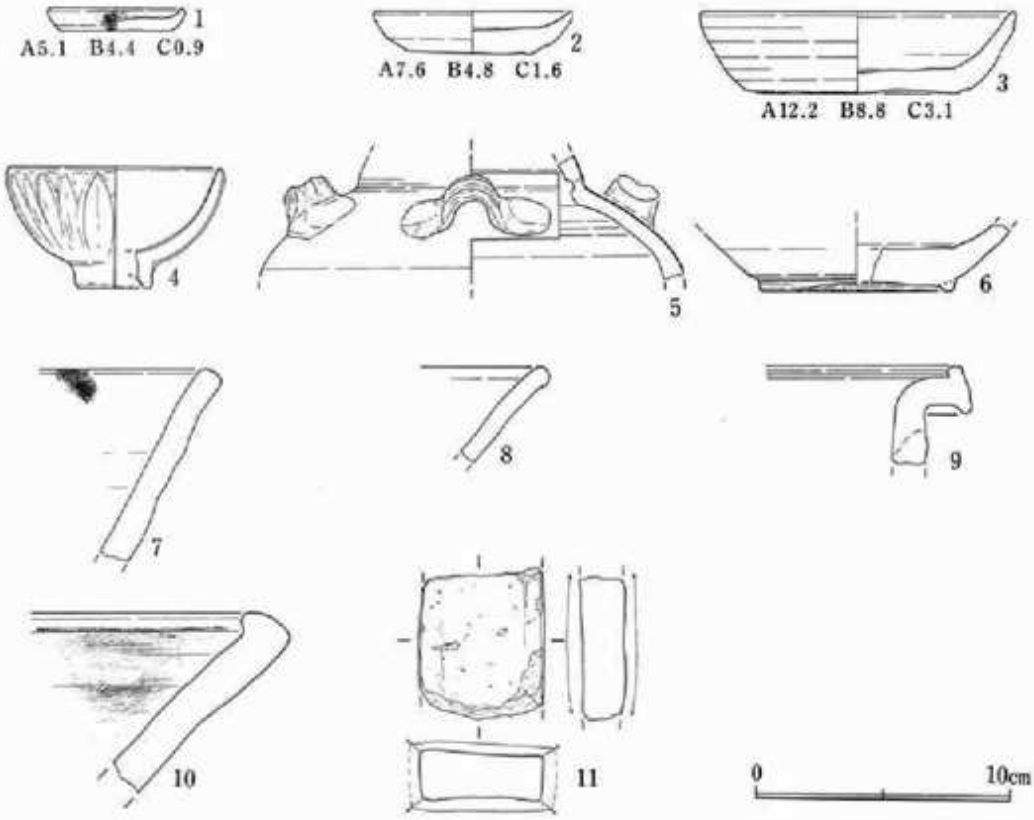



**図67　建物32出土遺物**

別の材は原状を失っているものが殆どで、正確な計測はできていない。羽目板は、幅30cmほどの横板を2枚以上積み重ね、内側から細い杭で押さえている。南北とも内側に倒れ込むように検出された。南壁は外側にも杭を打ち込んでおり、両側から押さえ込んでいるが、建物28でも同様の構造が見られる。

以上の他に部材は検出されておらず、床面・上屋構造は全く不明である。

建物32は、本遺跡で検出された方形竪穴の中で、最も小規模なものであり、構造的にも脆弱である。このタイプは「付属舎的性格」[1]の竪穴と考えられているが、上屋が想定しにくく規模が小さい点などから、方形竪穴建築址の範疇から除外すべきとする意見[2]もある。

註(1)　河野眞知郎「鎌倉の武家屋形と都市住居－中世鎌倉市街地の居住様態－」『仏教藝術』164号　毎日新聞社　1986

(2)　汐見一夫「方形竪穴建築址再考」第1回中世都市研究・討論会レジュメ『都市内の収納・貯蔵』－方形竪穴建築址の性格と分布を含めて－　中世都市研究同人会　1993

**建物32出土遺物（図67）**

図67－1～3はロクロ成形のかわらけ。1は内折れ極小タイプで、内外面の半分に煤が付着する。2は小皿。底部は厚く切り残され、側壁は半ばに稜を持ち鋭く外に開く。3は底径大きく、側壁は

直線的に開いている。

4は青磁蓮弁文小碗。1/4程の破片より復元した。素地は黒粉・気孔を若干含む灰白色堅緻土。釉は淡緑色半透明で、釉層が厚く文様が不明瞭となる。高台畳付部は露胎。口径8.2cm、底径2.8cm、器高4.7cm。

5は白磁四耳壺。肩部1/4片。素地は黒粉・気孔を含むが堅緻。色調は淡く茶色味を帯びた灰色。釉は淡く緑がかった灰色でやや失透し、内外に掛けられる。肩部径16.6cm。

6は南部系粗胎山茶碗。底部は厚く、高台は潰れて丸くなる。復元高台径7.4cm。

7・8は山茶碗窯系こね鉢。7は口縁端部がやや角張る。口縁内側に煤付着。8は玉縁状になる。器壁の薄さから見て、碗とすべきかもしれない。

9は常滑甕。口縁は外方に強く引き出され上下に小さく突出する。良く焼き締まって胎土が若干光沢をもつ。

10は瓦質鉢型手焙り。端部が内側に強く張り出す。内面は全体に煤ける。

11は砥石。中砥であろう。やや気孔をもち緻密さに欠け、軽い感じの白色石材。両面使用。残存長5.8cm、幅4.9cm、厚さ2.0cm。

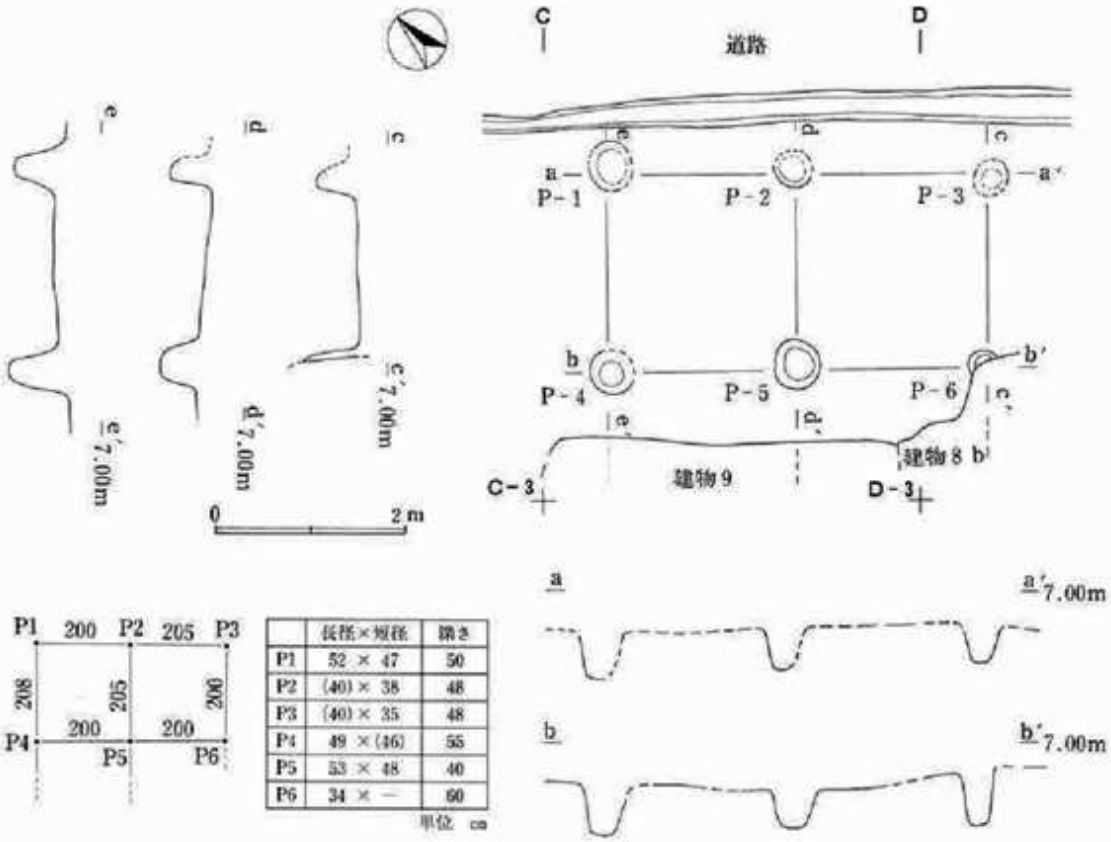
## B）掘立柱建物址

本遺跡では、約200口のピットを検出している(図141参照)。しかし、明瞭な地業面もなく、土層の識別が困難な状況の下で、その多くは地山1（黒褐色粘質土）上面まで下げなければ確認できなかった。層位的な時期差が把握できず、尚且つ、調査面積の大半を方形竪穴が占めている状況では、ピットの配列等の確認も殆どなし得なかった。方形竪穴と明確な関連を示すピットは確認されていないが、それは必ずしも竪穴と掘立柱の同時併存を否定するものではない。しかし、今回は報告できなかったが、中には13世紀前半の様相を示す遺物を出土するピット等もあり、方形竪穴以前には掘立柱建物群が構築されていたことを推測させる。

**掘立柱建物1（図68）**

C・D－2グリッドで検出された。確認面は黒褐色粘質土上面、標高6.75m。埋没した井戸状遺構の上に構築されている。確認されたのは一間×二間の範囲だが、P6が建物8bに切られている。ピットの配列は道路下層には検出されず、また軸線はN－56°－Wで道路とほぼ一致する。

各ピットから図示できる遺物は出土しなかった。方形竪穴群より古い遺構ではあるが、井戸状遺構よりは新しく、道路との関係を考慮すれば、さほど時期を遡るものではないと思われる。




| | 長径×短径 | 深さ |
|---|---|---|
| P1 | 52 × 47 | 50 |
| P2 | (40) × 38 | 48 |
| P3 | (40) × 35 | 48 |
| P4 | 49 × (46) | 55 |
| P5 | 53 × 48 | 40 |
| P6 | 34 × — | 60 |

単位 cm

**図68　掘立柱建物1**

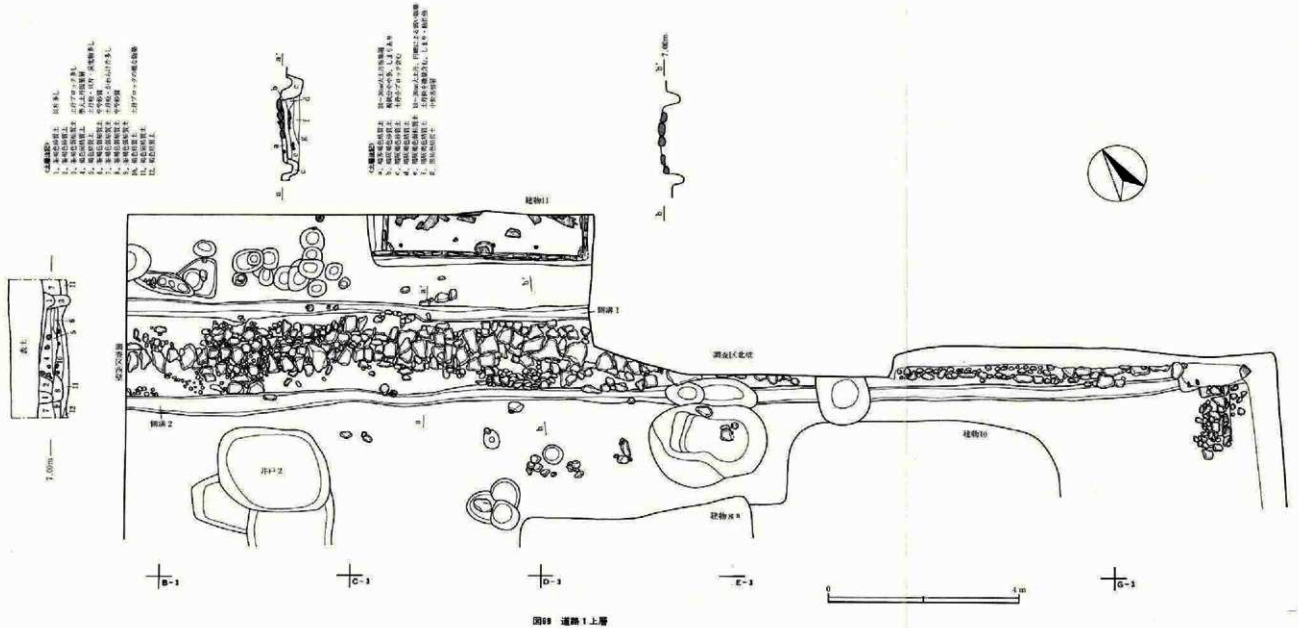



図69　道路1上層

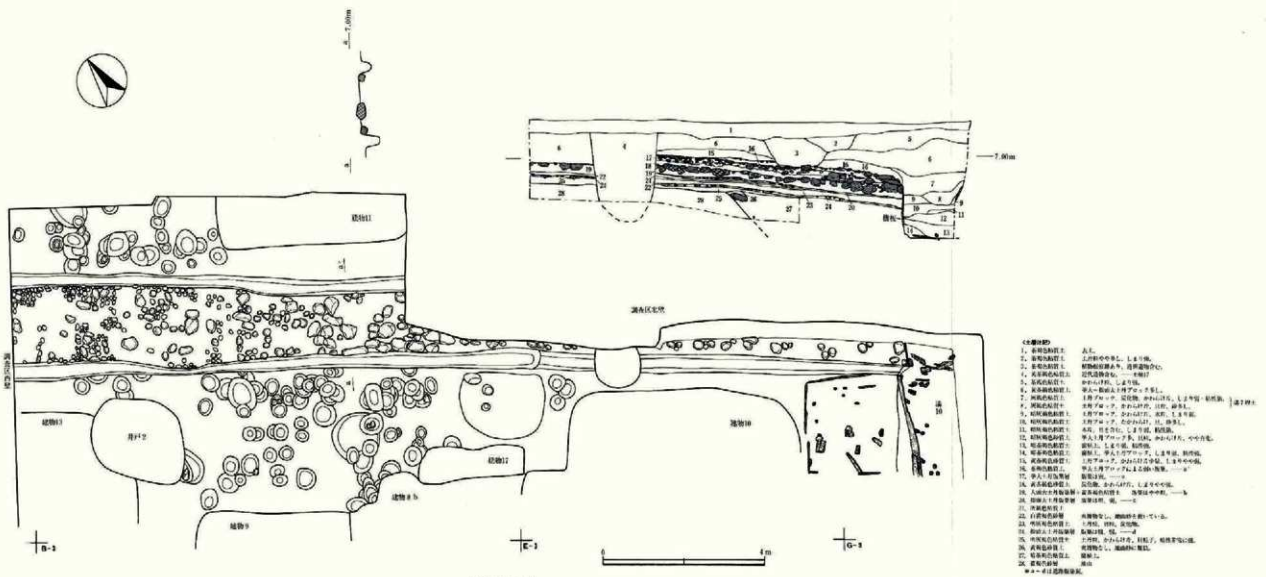



図78 道路1下層

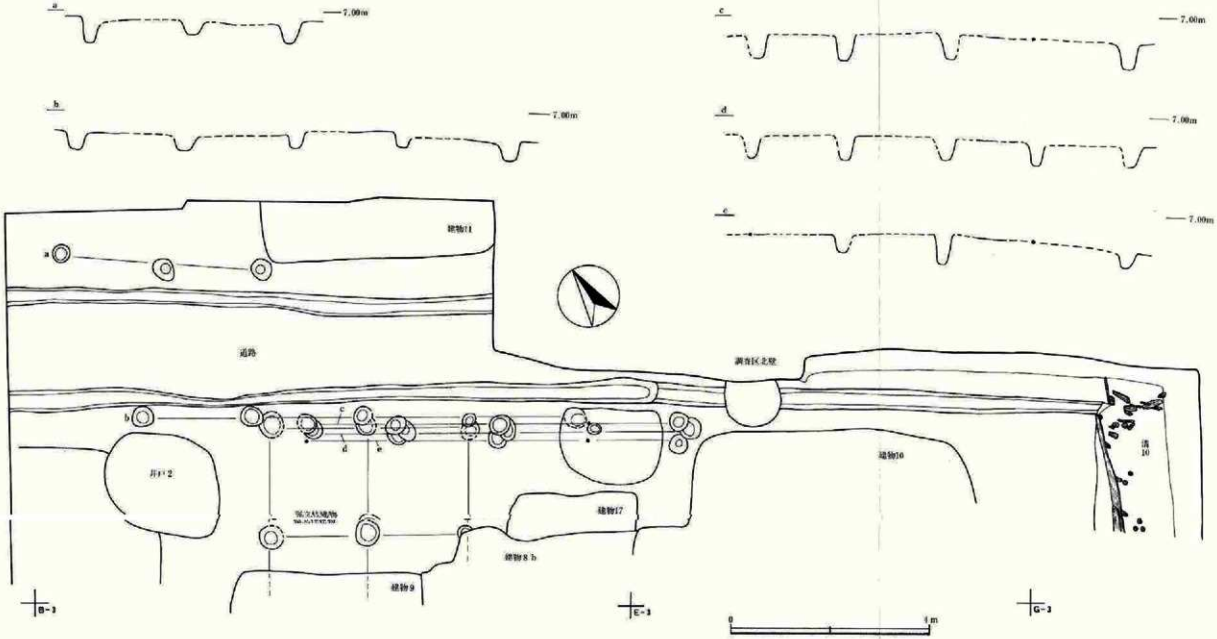

a
7.00m
b
7.00m
c
7.00m
d
7.00m
e
7.00m
建物11
通路
調査区北壁
井戸2
建物10
建物17
建物8 b
建物9
B-3
E-3
G-3
0
1m

図11 柱穴列

## C）道路

**道路１（図69～71）**

調査区北端、２ライン北側を東西に走り、東端で小町大路側溝に突き当たり、横板と杭で土留めが施される（PL.32－C）。確認された長さは11.0m、幅1.5～1.7m。東側調査区北壁にちょうど縦断面が引っ掛かる形であった。その土層堆積（図70）によれば凡そ４時期に大別できるが、平面的に確認できた西側調査区では、後世の削平によって最上層の道路面が存在しなかった。また、下２層も西側では同一面になってしまう。そのためここでは、土層図による道路面ｂを上層、以下を下層として扱う。

上層（図69）の確認標高は西端が7.15m、中央付近で7.00m、そこからやや急に下がって東端が6.50mと東へ傾斜している。これは「地山落ち込み」として確認された旧地勢に影響されたものと思われる。道路面には拳～人頭大土丹塊が一面に敷かれ版築されているが、その敷き方は規則性なく粗密がある。土丹塊表面はさほど摩耗してはいない。シルト質で脆い土丹は、長時間表出して風雨にさらされると自然破砕していくものである。その点からすれば、上層道路は土丹面のまま使用されたのではないのかも知れない。土丹上面には層厚10cm内外で、黄茶褐色砂質土が堆積していた。千葉地遺跡では、道路版築面上に堆積する海砂主体の砂質土を上層道路の基礎地業としており、本遺構でも同様の事が考えられるが、土丹面上に砂を敷いて使用した可能性もあろうか。但し、この砂質土は締まりにやや欠ける。

道路には南北両辺に側溝が付く（北側を側溝１、南側を側溝２とした）。共に上幅20～40cm、深さ30cmほどで、ごく一部に側板を杭で止めた痕跡があった。簡素な木組構造であったと思われる。

下層（図70）は、上層土丹塊とその下の層厚７～８cmの褐鉄をやや多く含んだ暗灰褐色砂質土を外すと、土丹版築面が現れた。西端標高6.95m、中央付近で6.70m、東端は２層に別れ、上が6.10m、下が5.90mと、上層面よりも更に急激な傾斜で落ち込んでいる。版築はかなり粗く、細かく破砕して残りの悪い部分が多い。この版築面は、地山に酷似した暗灰褐色粘質土の上面に形成されている。尚、下層にも側溝が付くが、上層側溝と弁別できずに掘り上げてしまったので、不詳である。

この道路に沿って、５本の柱穴列が確認された（図71）。柵列もしくは塀が建っていたものか。柱穴は地山面まで下げて検出されたもので、どの列がいずれの面に対応するのか不明。柱穴の規模は上面径20～40cm、深さ30～50cmで概ね等しい。芯々間隔は列によって190cmから220cmの間でばらつくが、時期差によるものか。

**道路１出土遺物（図72・73）**

道路上層（図72－１～25）

図72－１～17はかわらけ。底部糸きり、ロクロ成形。１は内折れ極小皿。２～10は小皿。11は中皿。12～17は大皿。

18は青磁蓮弁文碗。龍泉窯系。復元高台径5.9cm。胎土は気孔を若干含むが、灰色堅緻土。釉は淡

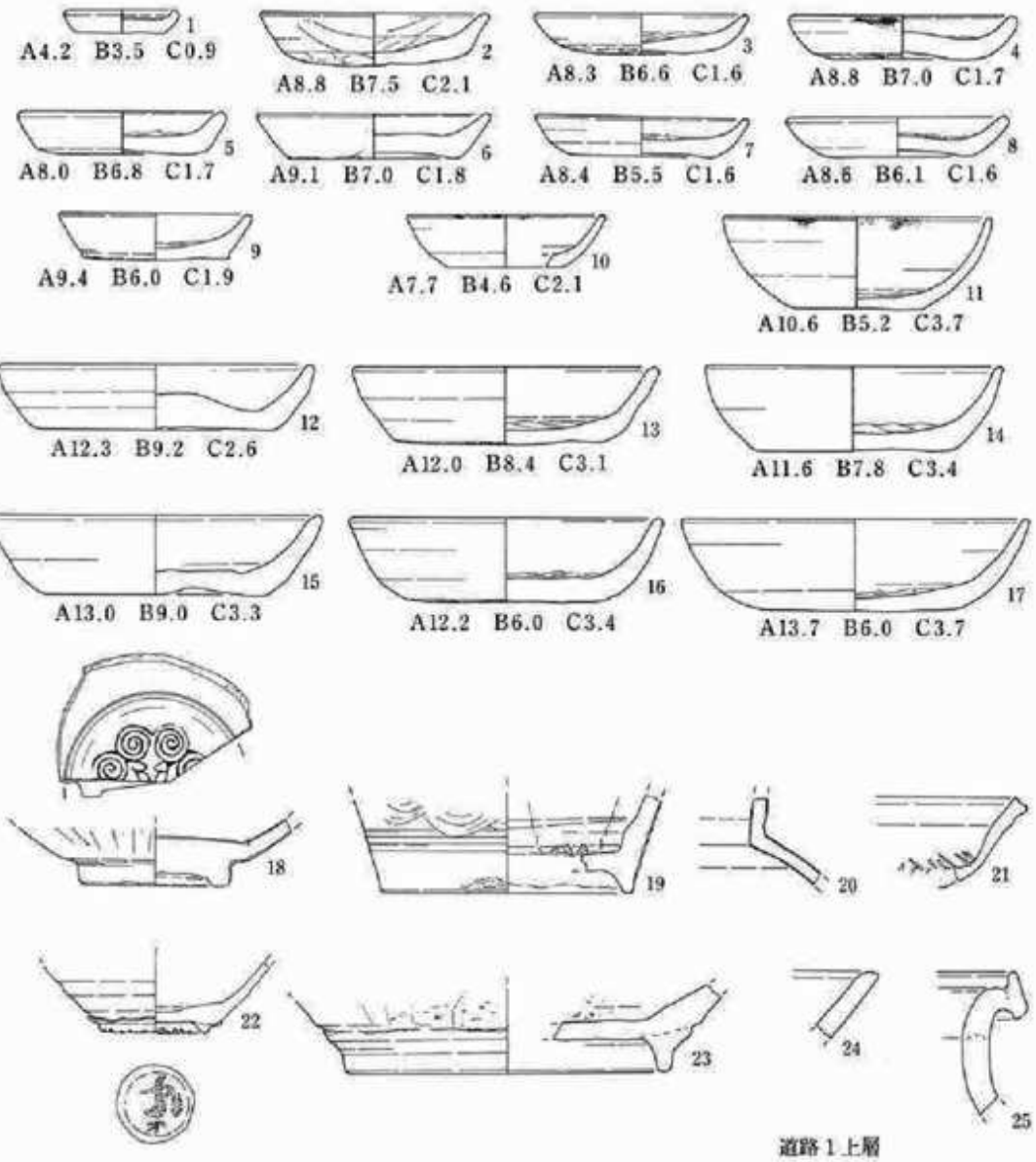



**図72　道路1上層・同側溝1出土遺物**

緑色半透明。内底面に渦巻き状の文様が型押しされる。

19は青白磁梅瓶。復元高台径10.0cm。胎土は白色で夾雑物含まず堅いが、やや締まりに欠ける。釉は水青色半透明。胴下部に２本の沈線が巡り、渦巻文と思われる文様が僅かに見られる。

20は白磁。水注または四耳壺の頸部と思われる。小片の為、復元不能。胎土は黒粉、若干の気孔を含むが、白色堅緻。釉はやや緑がかった淡水青色で透明。

21は瀬戸卸皿。胎土はやや粉っぽく淡黄灰白色。釉は灰緑色で全体に薄くハケ塗りされる。

22は山茶碗。高台径4.2cm。胎土は灰白色精良。外底面に墨痕が見られるが判読できない。

23は山茶碗窯系捏鉢。復元高台径13.0cm。内底面がよく摩滅している。

24は渥美捏鉢口縁片。

25は常滑甕口縁片。胎土は灰褐色、白色粒子を含む。縁帯部がやや内側に傾く。

**道路側溝１（図72—26～31）**

26～30はかわらけ。底部糸きり、ロクロ成形。26～28は小皿。29・30は大皿。

31は常滑捏鉢口縁片。胎土は灰色、砂粒、白色粒等を含むが緻密で焼き締まる。

**道路側溝２（図73—32～45）**

32～41はかわらけ。底部糸きり、ロクロ成形。32は内折れ極小皿。39は中皿。

42は瀬戸入子。口径7.4cm、底径4.4cm、器高2.3cm。外底部ヘラ削り。内面はよく摩滅し、全体に赤色物質が付着している。

43は燭台脚部。胎土はかわらけ質。

44は常滑甕口縁。口径22.0cm。胎土は小石等を含み、暗褐色。頸部から肩部にかけて降灰。

45は陽物。径およそ2.8cm、長さ9.0cm。土丹を丁寧に削り込んで写実的に作っている。

**道路１下層１（図73—46～52）**

46～49はかわらけ。底部糸きり、ロクロ成形。46.47は小皿。48.49は大皿。

50は白磁合子身。口径8.6cm、底径6.6cm、器高2.25cm。胎土は白色で、気孔を若干含みやや軟質な感じである。釉は淡茶色がかった白色で不透明。外面は型押しの渦巻文。建物１ｄの白磁合子蓋（図７—22）と同様の意匠だが、釉調が若干違い、同一個体ではないと思われる。

51は白磁口兀皿。口径11.6cm、底径6.2cm、器高2.9cm。胎土は明灰白色堅緻。釉は灰白色。

52は山茶碗窯系捏鉢。胎土は小石、砂粒を含み灰黒色。

**道路１下層２（図73—53～60）**

53～57はかわらけ。底部糸きり、ロクロ成形。53～55は小皿。56.57は大皿。

58は白磁玉縁碗片。胎土は茶色がかった白色土でやや軟質。釉は淡く緑がかった灰白色。

59は白磁皿。口径9.6cm、底径5.1cm、器高2.1cm。胎土は黒粉、気孔を若干含むが、白色緻密。釉は灰白色不透明。内底の外周を蛇の目状に釉剥ぎ取りしている。

60は転用陶片。常滑甕口縁部を再利用。甕の復元口径は約53cmである。

61は渥美捏鉢片。胎土は微砂質黒灰色土。内外面に若干の指頭痕が見られる。焼成は良好。

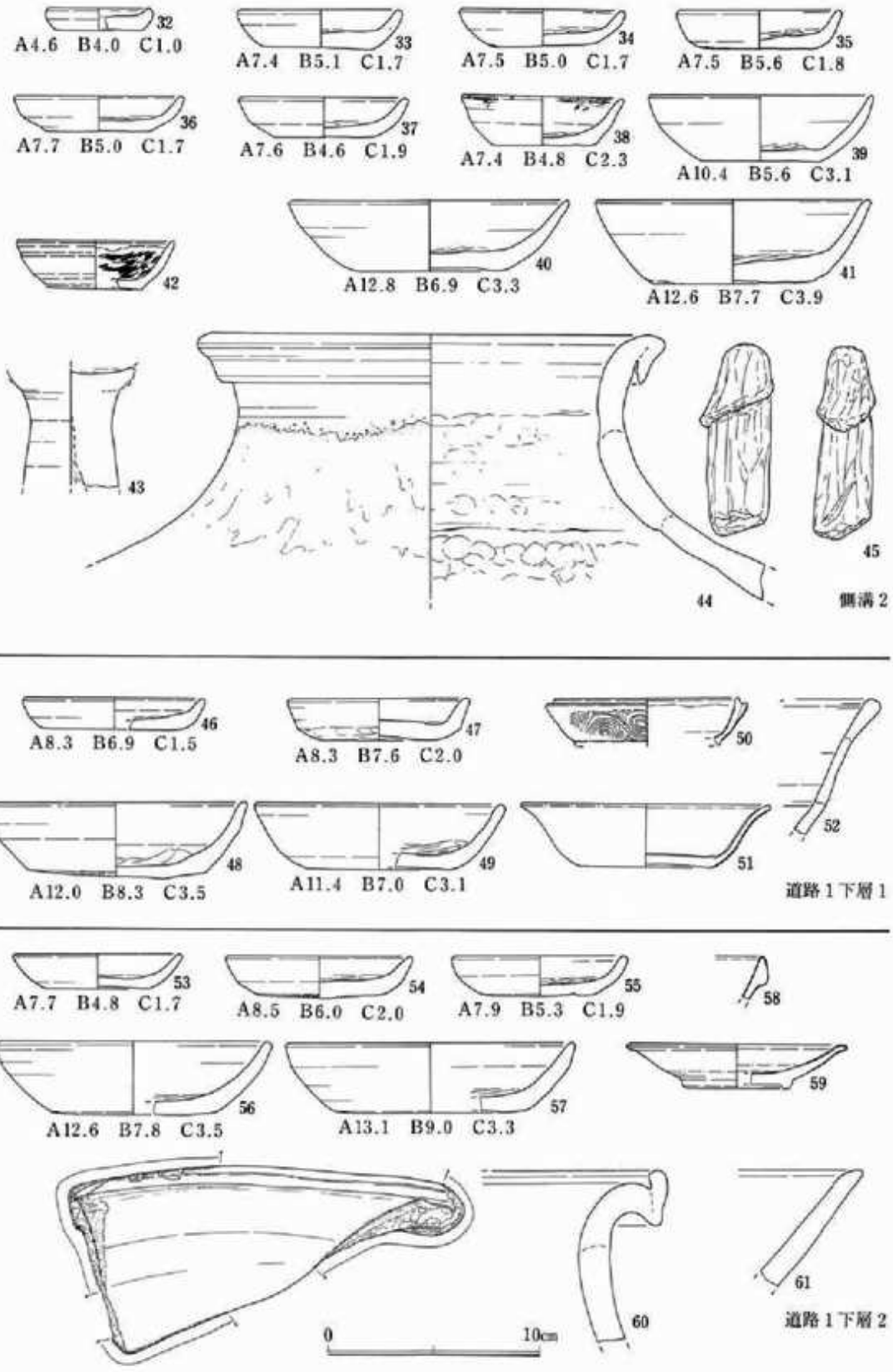



**図73　道路1側溝2・同下層出土遺物**

## D）溝

本節には、溝の他、同様に敷地を画する役割を担うと考えられる切石列・土丹列を含めた。

**溝3（図74）**

B－3～5グリッド、調査区西壁に沿って南北に走る。確認標高は7.05m。南端はほぼ直交方向に走る切石列2のやや手前で止まり、北側は井戸1・3・6に切られている。以北では検出できない。確認された長さは7.6m、幅35～40cm、深さ20cmほどで、底面は部分的に凹凸するが全体としては傾斜がない。断面で見るとほぼ箱型に掘られている。軸方位はN－38°－E。覆土は概ね褐色粘質土一層で、流・滞水した様子は窺えない。

尚、溝3は遺構全測図（図4）に載せられていないので判りにくいが、上層建物群（主に石組み）の敷地区画に関わる可能性がある。

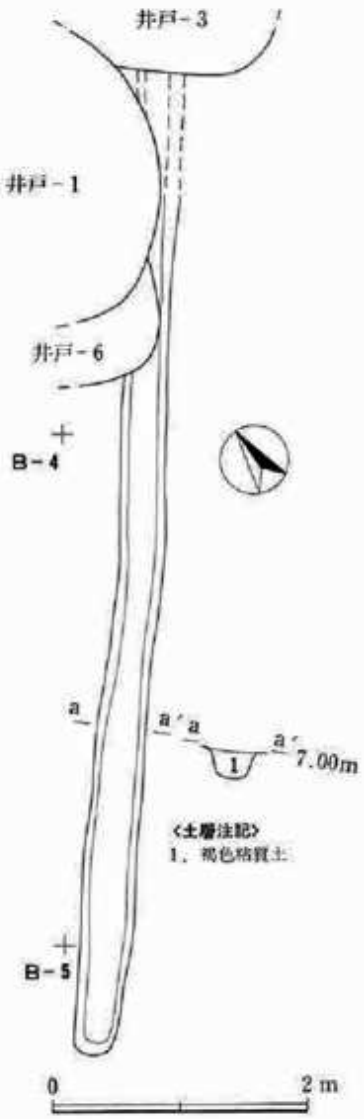


図74　溝3

**溝3出土遺物（図75）**

図75－1はかわらけ。底部糸きり、ロクロ成形の大皿。器高は低く、底部付近に弱い稜をもち、やや内湾気味に立ち上がる。ススが口縁部内側から体部下半にかけて、および内底中央にもほぼ方形に付着している。

2～4は山茶碗窯系捏鉢口縁片。胎土は3点共に、砂粒、白色粒を含む、灰色粗土である。2は口縁端部が角張り、微妙であるが沈線が巡っている。3は口縁部でやや薄くなり、若干外側に摘み出される。4は口縁部がやや肥厚し、丸みをもつものである。

5は常滑壺底部片。復元底径9.8cm。胎土は砂粒、長石粒、若干の鉄分を含むがキメ細かく、暗灰色緻密土。底部付近に縦位の篦整形痕が見られる。

6は常滑片口碗口縁片。胎土は砂粒、長石粒、石英粒、若干の鉄分を含むが、灰色で堅い。器形は胴部中程から内側にやや強めに内傾させ、口縁端部を上方につまみ上げている。口縁内側は黒褐色、口唇部から肩部に緑灰色の自然釉がかかる。

7、8は常滑甕口縁片。

7は口縁部を〝く〟の字に外反させ縁帯下部を摘み出している。上端は鈍重に丸みをもつ。胎土は砂粒・白色粒を含むが比較的きめ細かく緻密な暗赤褐色土。

8は口縁端部をN字状に折り返し、若干幅の広い縁帯部を作り出している。胎土は砂粒、白色粒

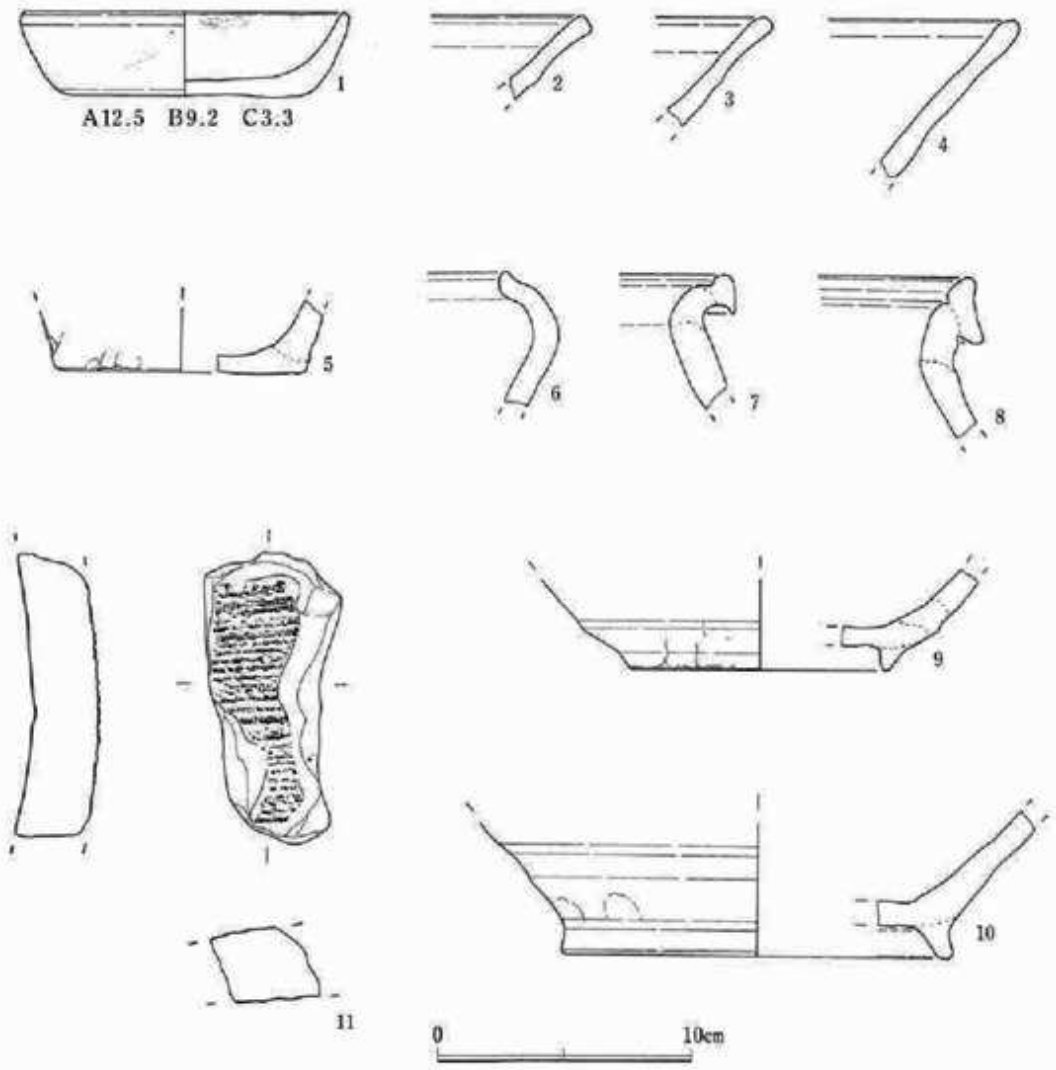



**図75　溝3出土遺物**

を含みキメ細かいが、気孔がやや多い。色調は赤褐色を呈す。

9、10は山茶碗窯系捏鉢底部片。

9は復元高台径9.9cm。胎土は砂粒、長石粒、若干の鉄分を含み暗灰色羽粘質土。体部下端が緩やかに丸みをもって立ち上る。高台は貼り付け高台、断面は逆三角形を呈する。貼り付け部分に横位の篦整形痕が若干みられる。

10は復元高台径15.0cm。胎土は砂粒、長石粒を含み、やや粘性をもつ褐色土。体部は直線的に開く。高台は貼り付け高台で外側にやや張りだす。

11は女瓦片。胎土は淡桃褐色でやや軟質である。凸面は縄叩きが施され、叩き目はやや深めである。厚さ2.7cm。

**切石列１（図76）**

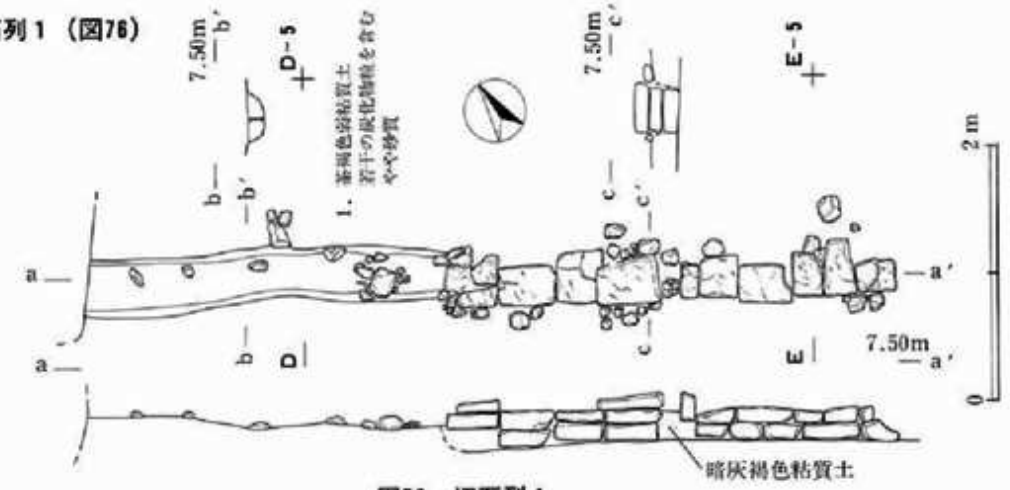



**図76　切石列１**

調査区南辺、D・E－５グリッドで検出された、東西方向に走る石列である。確認標高は7.30mで、北接する建物１a・bなどとほぼ同等。軸方位はN－56°－Wである。切石は鎌倉石であり、ややばらつくが50×30×12cm程と小さく、建物の部材を転用したものと思われる。それを短辺が接するようにして２～３段の平積みにしている。遺存状況からすれば、更に数枚の切石が積まれていたものと思われる。その際、南のツラを合わせているようであり、石垣と見るべきかも知れない。石列の長さは3.5mで、東側調査区ではその延長は検出されていない。西側には溝状の浅い掘り込みが続くが、現代撹乱によって消滅する。また、石積み基底部の標高は6.88mである。

切石列１は、後述する切石列２、及び下層の溝５と殆ど同一軸線上にあり、北側の道路１に対応して本遺跡の南側を区画する境界であったと思われる。なお、道路１と切石列１の距離は芯々でほぼ15mである。

**切石列１出土遺物（図77－１～８）**

図77－１～３はかわらけ。底部糸きり、ロクロ成形の小皿。器高やや低く、体部中位に稜をもつものである。

４は青磁碗。復元高台径5.3cm。胎土は夾雑物を殆ど含まない、淡灰色緻密土。釉は淡緑色透明、高台畳付部から外底部を除き施釉される。外面に僅かであるが、うっすらと蓮弁文とおもわれる文様がみられる。

５は白磁口兀皿。復元口径10.7cm。胎土は若干の微細砂を含む、淡灰白色緻密土。釉は淡灰白色透明釉。口兀部分はスズか銀であろうと思われる物質で覆輪される。

６は青白磁壷。底部片。復元底径8.0cm。夾雑物を含まない、淡灰白色緻密土。釉は青白色透明、外面底部より１cmのところから底部１cmのところまで釉が拭き取られている。

７、８は常滑甕口縁片。７は縁帯幅2.0cm。胎土に小石を多く含む、灰褐色土。口縁を外方に折り曲げ、縁帯をつくる。８は縁帯幅2.6cm。胎土に黒・白色粒を含む、赤褐色緻密土。口縁をN字状に折り曲げ、縁帯をつくる。

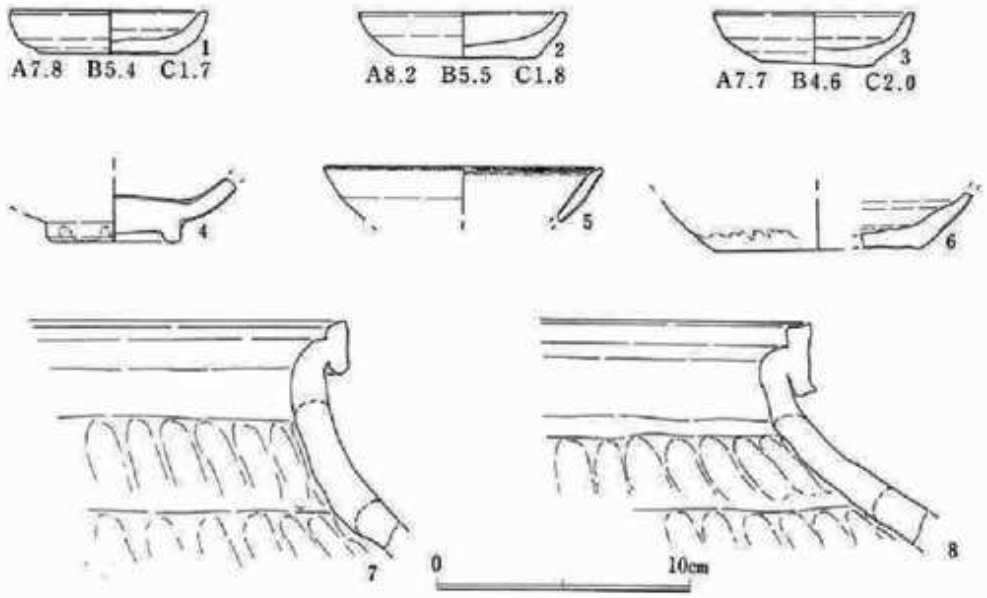



図77　切石列1出土遺物

**切石列2・土丹列1・2（図78）**

切石列2は、調査区西南隅、B－5グリッドで検出された。確認標高は7.40m。中央の一部を現代撹乱に、東側を試掘壙に切られるが、試掘では石材は検出されていない。軸線は切石列1と同様で、N－54°－Wである。しかしその構造は異なり、幅1mほど溝状（建物2によって切られる）に掘り込んだ中に、50×40×12cm程の鎌倉石切石を縦にして一列に並べている。その長さは3.0m、底面標高は6.85m。切石はいずれも北側にやや傾いている。形状などから、やはり転用材であろう。

土丹列1は、調査区南辺際、C・D・E－5グリッドで検出された。切石列1のすぐ南を東西に走る。溝状に掘り込んで、その底面に人頭大もしくはそれ以上の土丹塊を並べた様相を呈している。南側は調査区外に出てしまい、また一部を建物5に切られる。西側は試掘壙が重複するが、この土丹列も試掘の際には確認されていない。全長8.7mで、確認標高は7.10m。軸方位N－55°－W。土丹は上面レベルで6.75～6.90mと凹凸が激しく、規模的にも建物基礎地業とは見なしがたい。

土丹列2は、調査区南辺やや西寄りのC－4・5グリッドで検出された。東西をそれぞれ、建物5・2に切られ、北側を試掘壙が掠める。30×40cmほどの大きさでごく粗く板状に成形した土丹塊と鎌倉石（東側の3個）を、長さ2.3mにわたって比較的丁寧に並べており、その上面レベルは6.80～6.85mでほぼ平坦になっている。建物地業と見られなくもないが不明。軸方位はN－56°－W。

**切石列2出土遺物（図79・図80－19～25）**

図79－1～9はかわらけ。底部糸きり、ロクロ成形。1、2は極小皿。1は内底面に「さ」6文字の墨書が見られる。習書と思われるが、他になにか意味をもつものか。2は内折れのもの。3～7は小皿。8、9は大皿。

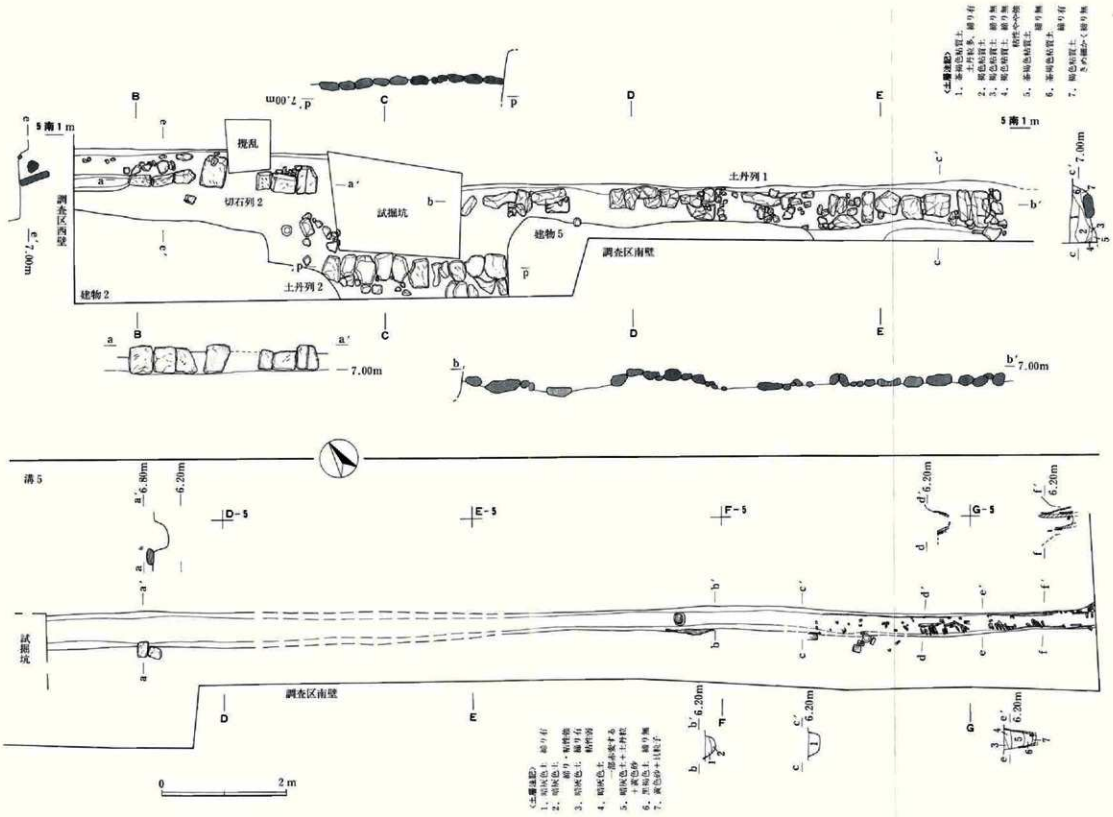



図78　切石2・土丹列1、2・溝5

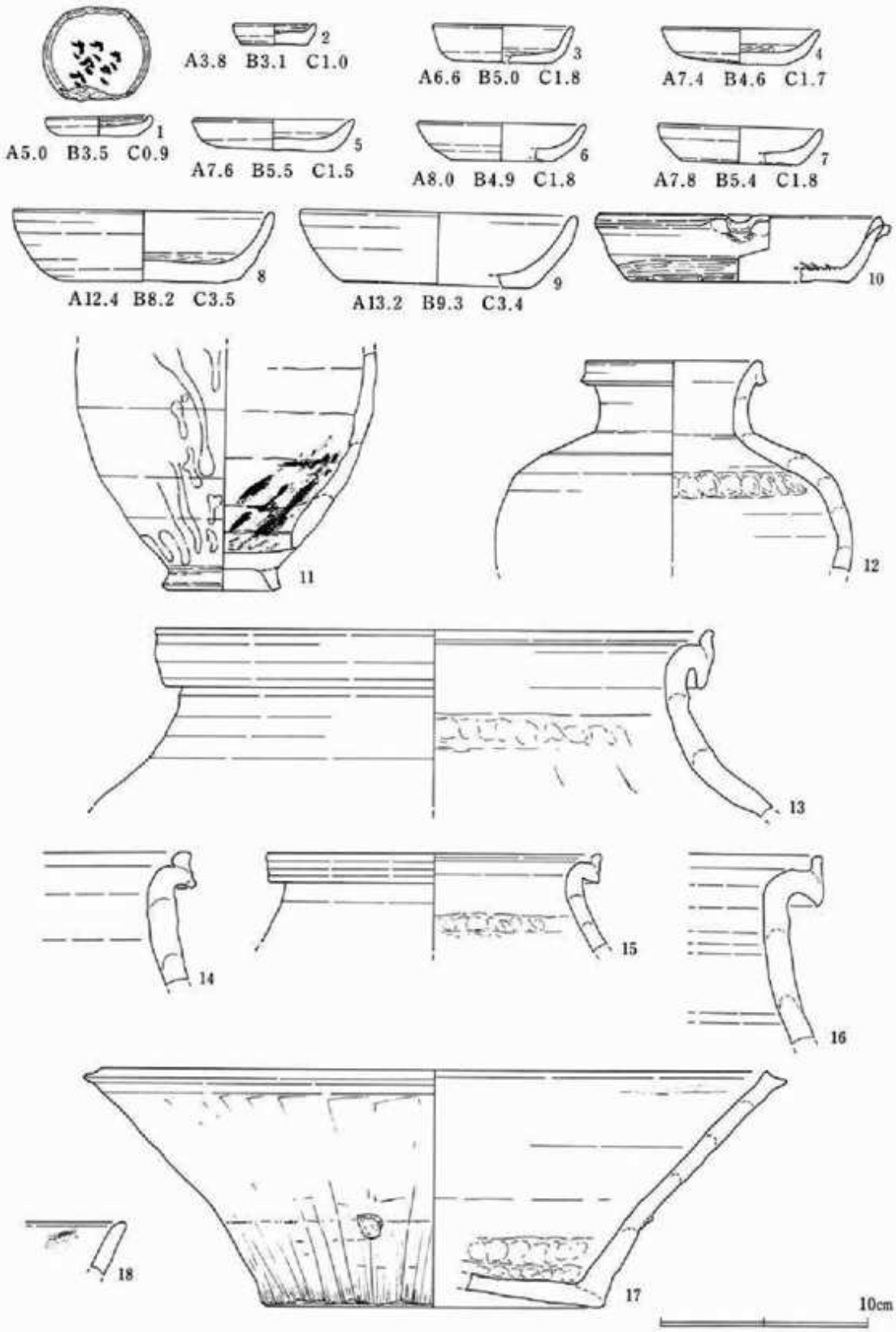
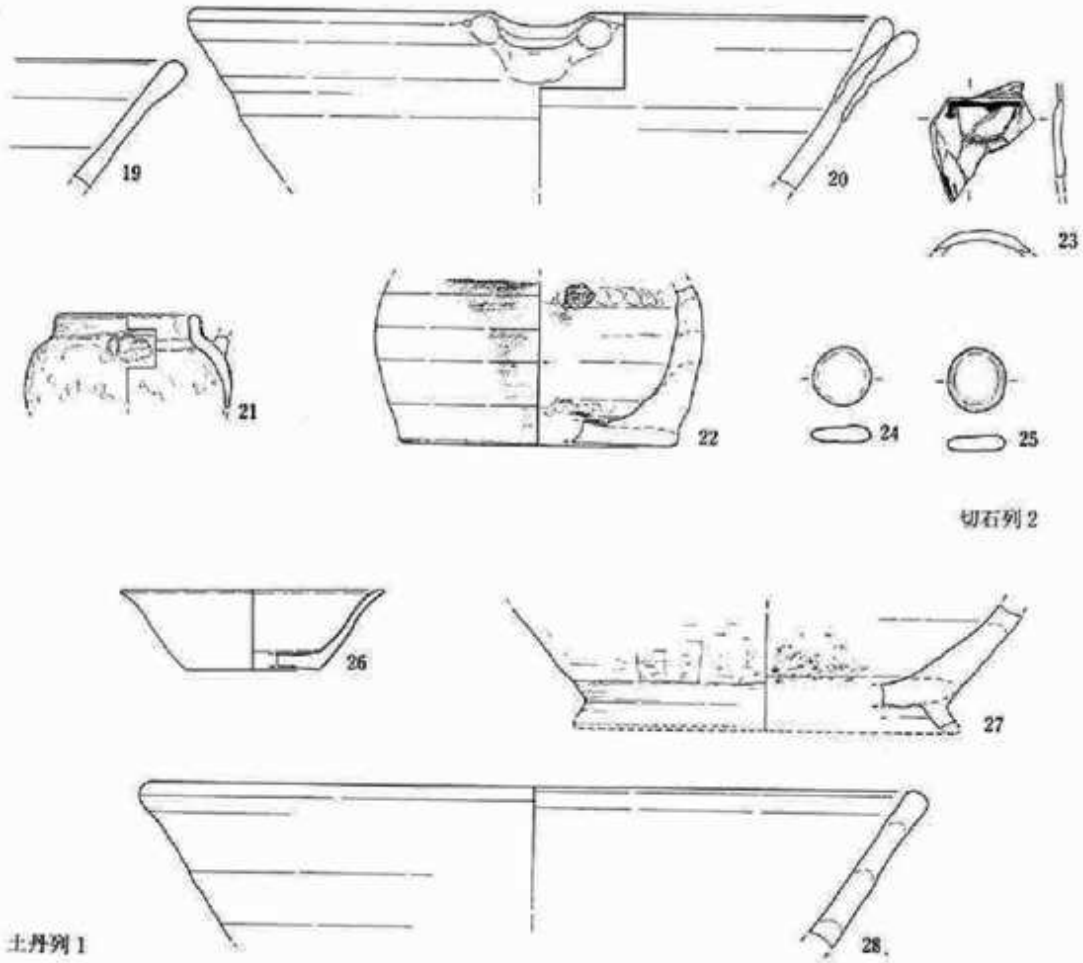



**図79　切石 2 出土遺物(1)**



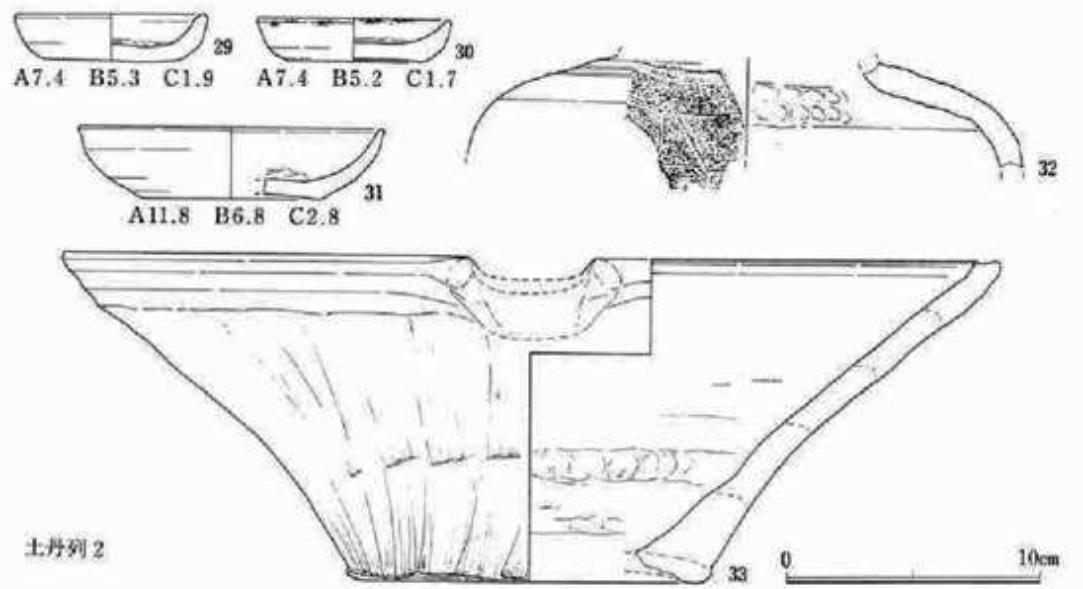




**図80　切石列2(2)・土丹列1、2出土遺物**

10は瀬戸卸皿。復元口径14.0cm、底径10.6cm、器高3.2cm。胎土はキメ細かな灰白色良土。全体に淡緑灰色の釉が薄くかかる。

11は瀬戸四耳壺。高台径5.8cm。胎土は細かな気泡を含む、灰色土。焼成は良好。底部と胴部の接続部分が極めて薄い。釉色は淡緑灰色で吹き上がりが目立つ。内面には赤色顔料が付着する。高台は貼り付け。

12は常滑壺。復元口径8.6cm。胎土は砂粒、気孔含む、キメ細かい灰褐色土。口縁部を折り曲げ縁帯をつくる。

13～16は常滑甕口縁片。13は復元口径27.0cm。15は復元口径16.2cm。口縁を水平に外反させ端部を摘み上げている。他のものは口縁をN字状に折り曲げ縁帯をつくるタイプである。

17は常滑捏鉢。復元口径34.0cm、底径16.6cm、器高11.5cm。胎土は白色粒、細石粒を含む橙褐色土。胴部中位下に窯ダレまたは重ね焼き痕と思われる部分がみられる。

18は渥美口縁片。胎土は微砂粒を小量含む、暗灰色土。内面にススが付着する。

図80—19・20は山茶碗窯系捏鉢。19は口縁片。胎土は黒砂粒、白色粒、小石を含む、灰白色土。口縁部に丸みをもつ。20は復元口径27.6cm。胎土は白色粒、小石、砂粒、気孔を含む、暗灰色土。器壁はほぼ直線的に立ち上り、口縁端部を丸く仕上げている。

21は鉄製品。小さな釜のような形態である。復元口径5.0cm。肩部に把手あるいは手堤の基部とみられる突起が残る。

22は渥美壺。復元底径10.8cm。胎土は夾雑物を殆ど含まない、キメ細かい暗褐色土内面中位に指頭痕がみられ、全体を横ナデ調整している。

23は土製品。人形か？　胎土は極めて精良な茶褐色土。内型作りと思われ、裏面に指頭痕多数。表面はスベスベした感じに仕上がる。黒色物質の筆割き痕、赤色、黒色の物質がみられる。　製作技法、胎土等は長谷小路南遺跡出土の「布袋像」と類似している。

24は碁石か。径約2.3cm、厚さ0.5cm。暗灰緑色の自然石。

**土丹列1・2出土遺物（図80—26～33）**

図80—26は白磁口兀皿。復元口径10.2cm、底径5.2cm、器高3.1cm。胎土は灰白色緻密土。釉は淡灰緑色、不透明。

27、28は山茶碗窯系捏鉢。27は底部片。高台端部が若干剝離するが、推定径15cmと考えられる。内面はよく摩滅している。28は口縁片。復元口径31.0cm。胎土は白色粒、小石等を含む、灰褐色弱粘質土。口縁部がやや角ばる。

29～31はかわらけ。底部糸きり、ロクロ成形。29、30は小皿。31は大皿。器壁が割と薄めで口縁端部が微妙に外反する。

32は渥美壺。肩部に二条の沈線が巡り、袈裟襷文が刻まれる。

33は常滑捏鉢。復元口径36.8cm、底径14.4cm、器高12.8cm。口縁端部が平坦になる。外面はヘラによるナデ上げ整形痕、内面には指頭痕が顕著にみられる。

**溝5（図78）**

調査区南辺、5ライン南2m弱の所を東西に走る、やや古手の溝。前述切石列1・2と同一軸線上（N—56°—W）に乗っており、それらに切られている。また東端は調査区外に延びるが、小町大路側溝に流れ込むものと推測される。確認全長16.85m。確認標高は西端で6.65m、Fライン付近で6.35m、東端で6.25mであり、西側調査区においては殆ど削平されてしまっている。東側は比較的遺存状況が良好で、側板で土留めし杭で押さえる構造であることが判った。側板には幅30cmほどの横板を重ねて用いており、その内側に3～4cm角の杭を細かく打ち込むことで支えとしている。最も残りの良い所で深さが50cmほどもある。底面レベルで比較すると、それぞれ6.45m・5.95m・5.80mとなり、かなりの傾斜で東に向かって下がっていたことがわかる。この傾斜は、同じく東西に走る道路1の土丹版築面でも確認されており、本遺跡の古い段階での地勢を示したものであろう。

**溝5出土遺物（図81・82）**

図81—1～図82—48はかわらけ。底部糸きり、ロクロ成形。1、2は内折れ極小皿。3～31は小皿、44～48は大皿。いずれも厚手で器高が低く、建物出土のそれよりも明らかに古相を示している。31は墨書かわらけ。内外面に墨書が施されているが判読不能。

49～59はかわらけ。手づくね成形。49～56は小皿。57～59は大皿。小皿のうち49・51・52・55などはやや薄手だが、他は概ね厚手でぼってりしている。

60は緑釉小片。壷か水注等の胴部であろう。胎土は淡茶白色で陶質。釉はやや茶色がかった深い緑色。釉層は極めて薄く、器表には植物（唐草か）と思われる文様が施されている。遺構外でやや類似したものが出土している（図145—6）。

61は青磁蓮弁文碗。復元高台径5.2cm。胎土は白色、気孔をやや多く含んで堅く岩石質である。釉は淡緑色、透明。龍泉窯系。

62は青磁劃花文碗。復元口径14.0cm。胎土は淡茶灰色、堅緻土。若干の黒粉を含む。釉は緑褐色、透明。

63は常滑捏鉢口縁片。胎土は淡茶灰色、長石、鉄粒を含むが粘性強く、堅緻土。口縁内側がやや肥厚し、玉縁状をなす。

64は木製品。独楽ではないかと思われる。径3.6cm、高1.0cm、底部径約1.1cm。中央の穴は貫通しておらず、全体な作りはやや粗雑である。

65は燭台（土製）。下部径2.8cm、上部径2.1cm、孔径約1.1cm。胎土は淡赤灰色、黒色微砂、赤褐色粒を含むかわらけ質。外面に縦位の細かな篦削りを行い、円形に仕上げている。

66は山茶碗窯系捏鉢片。胎土は灰色、多量の長石、鉄分を含むが非常に堅緻土。胴部中位に強いナデによる窪みができ口縁付近がやや肥厚し、四角気味の片口が付く。降灰による自然釉は内面に厚くかかる。

67は山茶碗窯系捏鉢片。胎土は灰色、長石、鉄分を含むが堅緻土。口縁端部に弱い沈線が引かれる。

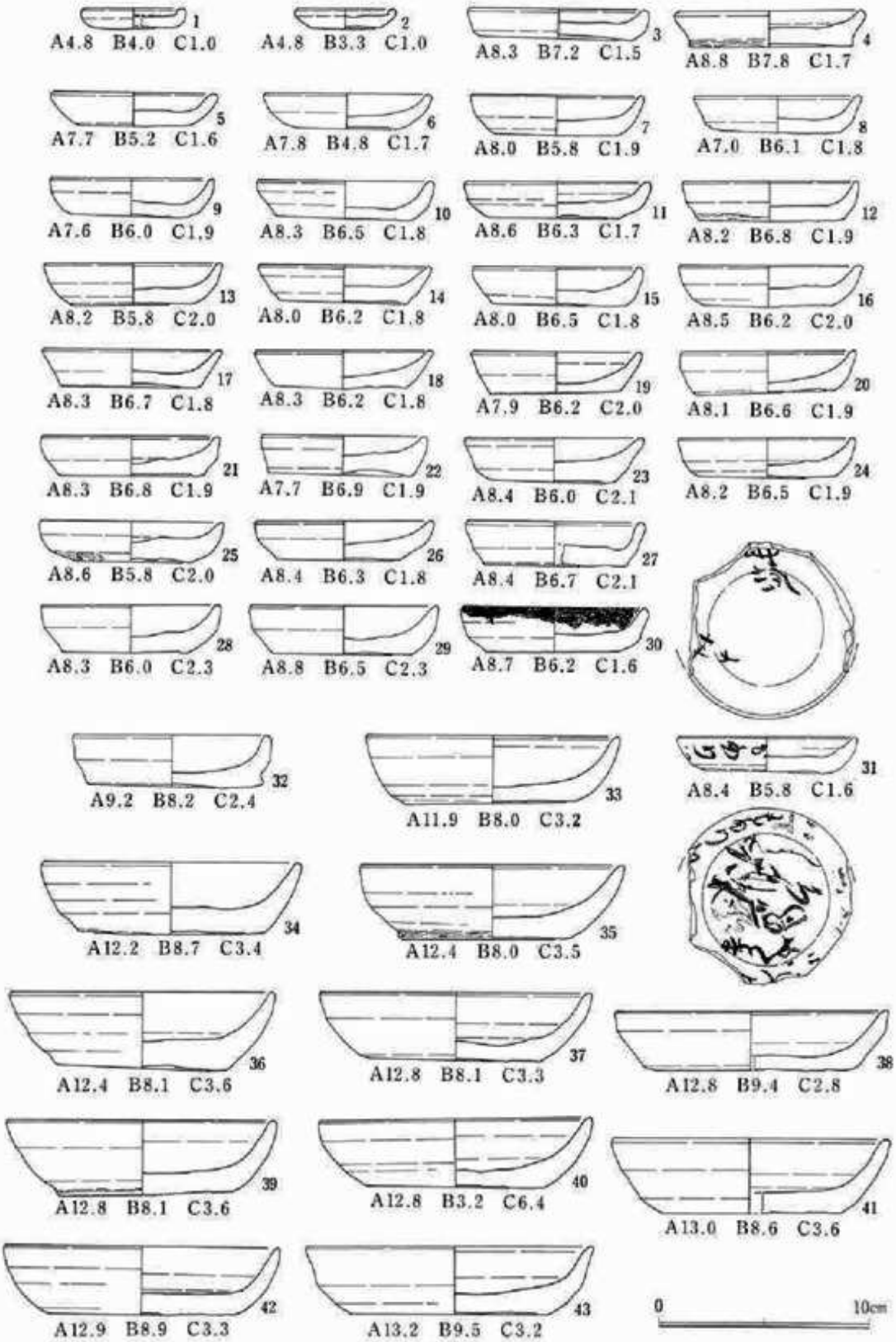

1 A4.8 B4.0 C1.0
2 A4.8 B3.3 C1.0
3 A8.3 B7.2 C1.5
4 A8.8 B7.8 C1.7
5 A7.7 B5.2 C1.6
6 A7.8 B4.8 C1.7
7 A8.0 B5.8 C1.9
8 A7.0 B6.1 C1.8
9 A7.6 B6.0 C1.9
10 A8.3 B6.5 C1.8
11 A8.6 B6.3 C1.7
12 A8.2 B6.8 C1.9
13 A8.2 B5.8 C2.0
14 A8.0 B6.2 C1.8
15 A8.0 B6.5 C1.8
16 A8.5 B6.2 C2.0
17 A8.3 B6.7 C1.8
18 A8.3 B6.2 C1.8
19 A7.9 B6.2 C2.0
20 A8.1 B6.6 C1.9
21 A8.3 B6.8 C1.9
22 A7.7 B6.9 C1.9
23 A8.4 B6.0 C2.1
24 A8.2 B6.5 C1.9
25 A8.6 B5.8 C2.0
26 A8.4 B6.3 C1.8
27 A8.4 B6.7 C2.1
28 A8.3 B6.0 C2.3
29 A8.8 B6.5 C2.3
30 A8.7 B6.2 C1.6
31 A8.4 B5.8 C1.6
32 A9.2 B8.2 C2.4
33 A11.9 B8.0 C3.2
34 A12.2 B8.7 C3.4
35 A12.4 B8.0 C3.5
36 A12.4 B8.1 C3.6
37 A12.8 B8.1 C3.3
38 A12.8 B9.4 C2.8
39 A12.8 B8.1 C3.6
40 A12.8 B3.2 C6.4
41 A13.0 B8.6 C3.6
42 A12.9 B8.9 C3.3
43 A13.2 B9.5 C3.2
0 10cm

**図81　溝5出土遺物(1)**

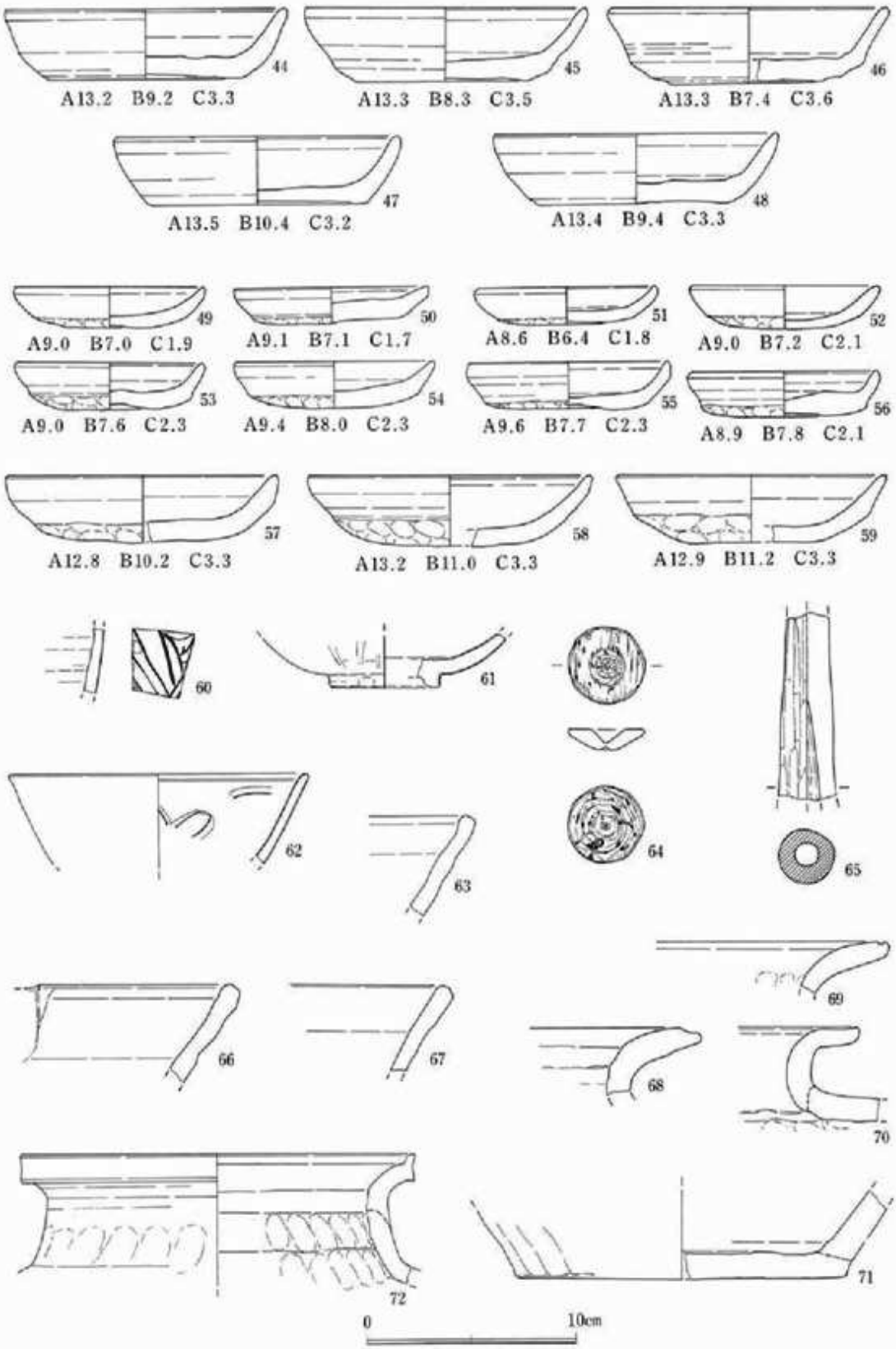

44
A13.2 B9.2 C3.3
45
A13.3 B8.3 C3.5
46
A13.3 B7.4 C3.6
47
A13.5 B10.4 C3.2
48
A13.4 B9.4 C3.3
49
A9.0 B7.0 C1.9
50
A9.1 B7.1 C1.7
51
A8.6 B6.4 C1.8
52
A9.0 B7.2 C2.1
53
A9.0 B7.6 C2.3
54
A9.4 B8.0 C2.3
55
A9.6 B7.7 C2.3
56
A8.9 B7.8 C2.1
57
A12.8 B10.2 C3.3
58
A13.2 B11.0 C3.3
59
A12.9 B11.2 C3.3
60
61
62
63
64
65
66
67
68
69
70
71
72
0
10cm

図82　溝5出土遺物(2)

68は渥美甕口縁片。胎土は灰褐色、長石、小石粒を多く含み粘性に欠ける。口縁端部が強いナデにより上方に若干摘み出される。この小片では施釉は確認できない。

69は渥美甕口縁片。胎土は灰褐色、砂粒、鉄分を多く含み若干粘性に欠ける。口縁端部に一条のやや深目の沈線をもつ。内面には灰褐色の釉がみられる。

70は渥美甕口縁片。胎土は灰褐色精良土、黒色土の流文がみられる。口縁は頸部からコの字状に反り返る。内面頸部付近に指頭痕、横ナデが見られる。釉は灰褐色～灰黒色、内外面にハケ塗りで施されている。

71は渥美捏鉢底部片。復元底径15.8cm。胎土は灰褐色、精良土だがやや粘性が弱い。白色土が流文状に若干見られる。外面には、底部付近から縦位に篦状工具による調整痕がみられ、側壁内面から内底面にかけてはよく摩滅している。

72は常滑壺口縁部片。復元口径18.8cm、頸部径16.2cm。胎土は灰黒色、長石を含むが比較的良土。内面に指頭痕、外面には指頭痕及び横位のナデが顕著にみられる。口縁は外反し、口縁端部を上方に摘みあげている。

**溝6（図83）**

調査区東端、Gライン東3mの線上を南北に流れる。ちょうど調査区壁が溝内を縦断するため、検出されたのは西岸のみであり、南半を土壙66や現代撹乱によって破壊されている。確認全長7.45m、上幅1.00m、下幅0.55m、確認標高7.30m。底面標高は6.50～6.85mで凹凸しており、この範囲では傾斜不明。軸方位は、N－34°－Eである。覆土の一部に鎌倉石切石が数個まとめて投げ込まれていた。位置的には小町大路側溝と考えられるが、下層の溝7～10に比して簡素・脆弱に過ぎる。あるいは溝7浚渫によって生じたものであろうか。

**溝6出土遺物（図84）**

図84－1～9はかわらけ。総てロクロ成形。1～6は小皿だが、6はやや大振りである。側面中位に稜をもち、丸みを帯びたものが主体となる。7～9は大皿。

10・11は瀬戸。

10は仏華瓶。頸部下から胴部にかけての破片。最大径8.2cm。梅花文、竹管文、唐草文などが隙間を開けずに押捺される。胎土は黄色味を帯びた灰白色で、焼き締まり良く堅い。釉は鉄釉で、暗緑褐色に発色する。

11は香炉か。印花文は、唐草の下に剣頭文状の蓮弁が頭をのぞかせているようである。胎土は黄灰色精良。釉は紫黒褐色の鉄釉が厚く掛けられる。

このほかに、緑釉小皿の小片なども出土している。

12は黄釉盤。口縁は角張った玉縁状になる。内面中位に鉄釉の太い線が一部残っており、鉄絵が描かれていたものと見られる。胎土は茶白色を呈し、鉱粒、赤褐色粒をやや多く含むが、非常に堅い。釉は淡黄褐色半透明。内外面に掛けられるが、口唇内側は拭き取られているようである。また、

細かな貫入が見られる。

13・14は瓦質手焙り。

13は体部上半の破片。厚さ1.5cm。外面に珠文が貼り付けられ（欠失）、上に沈線で区画して渦文を押捺する。下半は丁寧にミガキがかかる。内面はヨコナデ。胎土は明灰白色で微砂を含む。器表は褐白～橙白色で、黒色処理が不十分である。

14は口縁部小片。厚さ1.5cm。貼り付け珠文の上を2条の沈線で区画し、その中に菊花文を捺す。端部から内面にかけては良く磨かれる。胎土は砂粒、白色粒、赤褐色粒を含み、色調淡橙白色。外表は灰褐色を呈する。

15、16、19～21は常滑。

15はこね鉢。同一個体片を合成した。口縁はやや肥厚し、端部を水平に引き出すとともに上方に小さくつまみ上げている。外表下端はヘラナデ、外底は砂底である。内面の摩滅はさほど激しくない。胎土は砂粒、白色粒、気孔をやや多く含み、ガサついた灰黒色土。器表は茶褐～灰褐色。

16は大甕口縁部。縁帯が幅広く、頸部に接続している。胎土は小石を若干含んだ灰色土で、岩石質に焼き締まる。器表は赤茶色。

19は広口壺。2片より合成復元。体部下端は非常に厚く、外面はヘラナデされる。底部は急に薄くなり、砂は殆ど付着していない。肩部には二本1組の沈線が2カ所に巡る。胎土は長石が良く溶けて光沢をもつ灰色土。器表は茶褐色を呈す。底径7.2cm。頸部径は10.2cmだが、やや大きすぎるかも知れない。

20はこね鉢片口部小片。21は甕底部小片。

17は土製品。かわらけ質の土丸。表面は磨かれている。ごく僅かに長円形となる。長径2.1cm、短径1.9cm。

18は砥石。黄灰色泥岩製の仕上げ砥。完形品。両面とも良く使い込まれている。両端面の切断は、5㎜ほどを残して切削し、最後に折り取っていることが窺える。長さ17.1cm、幅3.0cm、厚さ1.9cm。

22は加工痕骨断片。微孔多く軟質で、クジラの頭骨かと思われる。一面に本来の骨表面を残して大きく切断し、加工しやすい原材を作ったものか。一部に切削痕をよく残す。

**溝7（図83）**

調査区東端、溝6直下で検出された小町大路側溝と思われる溝である。やはり東岸は調査区外になる。構造は、鎌倉石切石や土丹塊を積み上げて護岸をした石組み溝である。南端付近で、一部を近世井戸11に切られている。確認全長10.60m、上幅0.90m、下幅0.60m。確認標高は溝6と変わらず7.30mである。溝は、調査区内ではほぼ直線的に流れ、その軸方位はN－30°－Eを測る。道路1が突き当たる所では、西側へ80cmほど枡形に張り出している。この遺作の意味は不詳だが、以下のような推測も可能であろう。すなわち、道路土留め板は、溝10とほぼ面を併せて造られたものらしい（図88）。その後、溝が改修を繰り返す過程で東側にせり出して来るのに対して、道路端だけは何

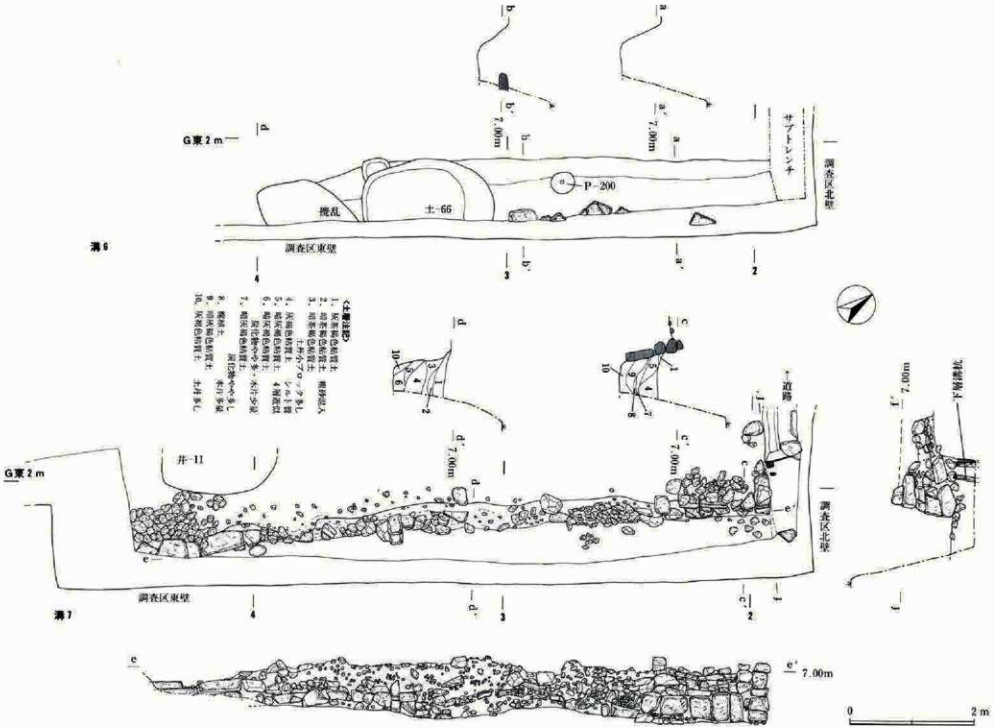



図83 溝6・7

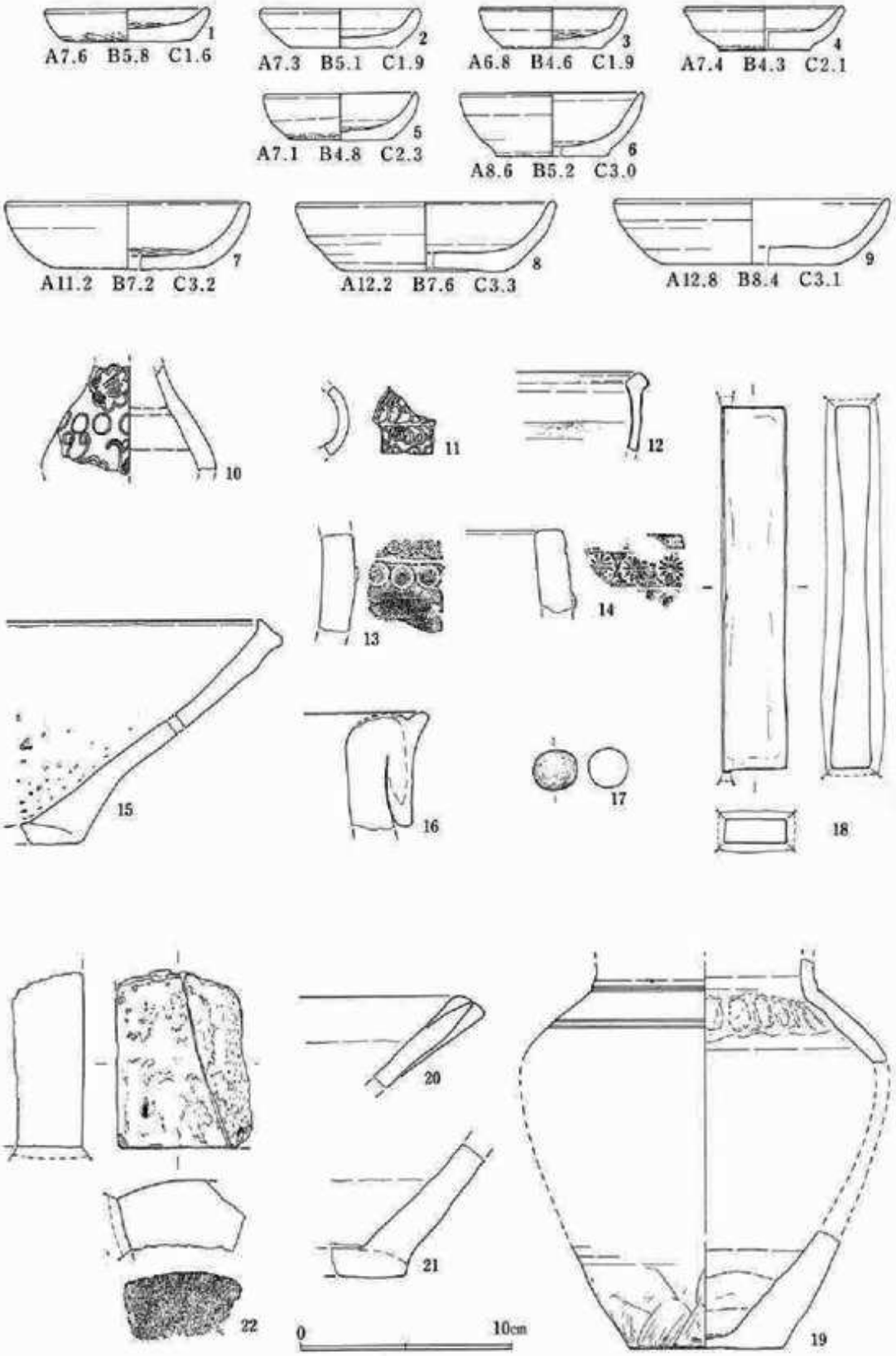

1
A7.6 B5.8 C1.6
2
A7.3 B5.1 C1.9
3
A6.8 B4.6 C1.9
4
A7.4 B4.3 C2.1
5
A7.1 B4.8 C2.3
6
A8.6 B5.2 C3.0
7
A11.2 B7.2 C3.2
8
A12.2 B7.6 C3.3
9
A12.8 B8.4 C3.1
10
11
12
13
14
15
16
17
18
20
21
22
0
10cm
19

図84　溝6出土遺物

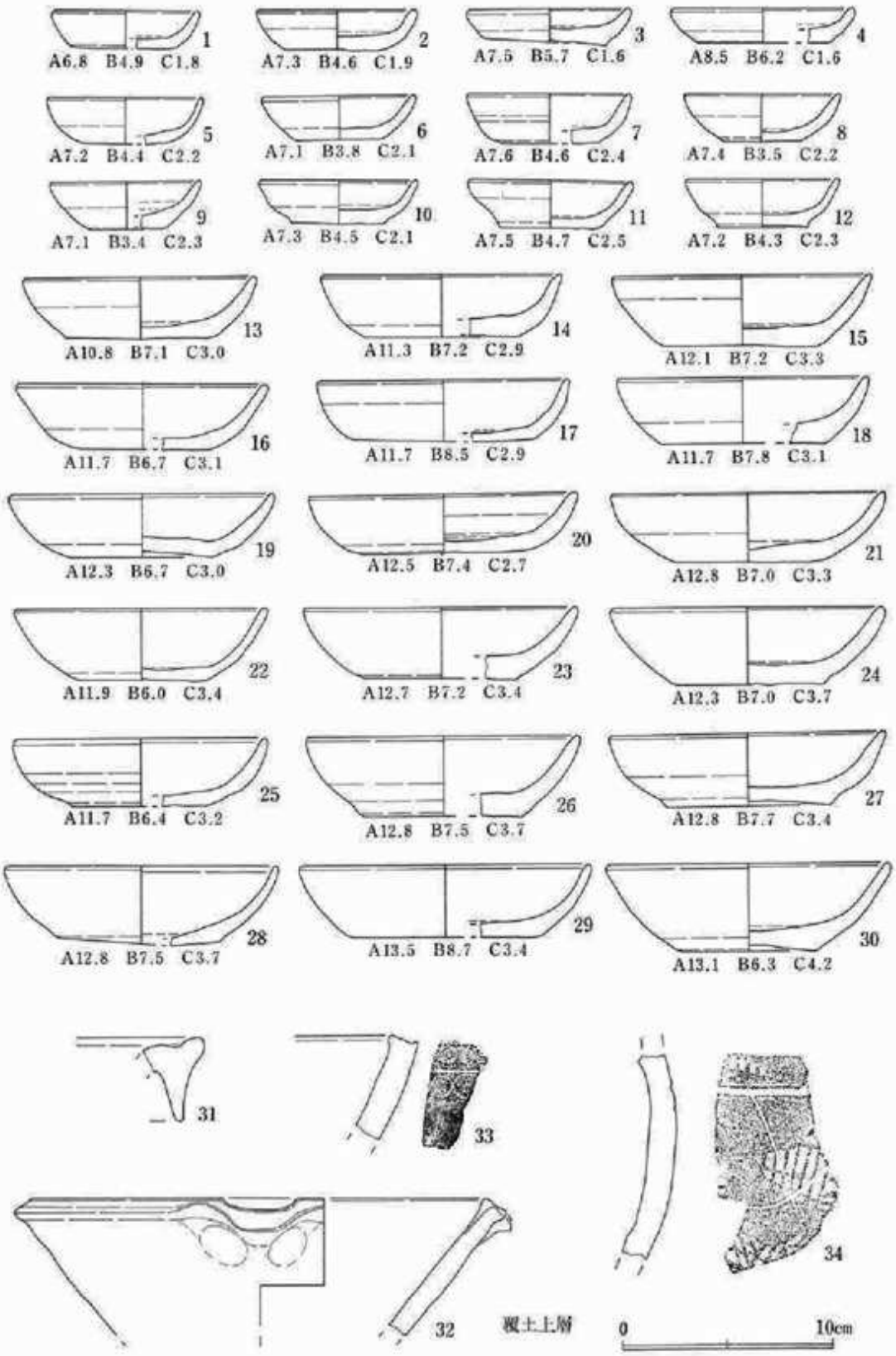

1 A6.8 B4.9 C1.8
2 A7.3 B4.6 C1.9
3 A7.5 B5.7 C1.6
4 A8.5 B6.2 C1.6
5 A7.2 B4.4 C2.2
6 A7.1 B3.8 C2.1
7 A7.6 B4.6 C2.4
8 A7.4 B3.5 C2.2
9 A7.1 B3.4 C2.3
10 A7.3 B4.5 C2.1
11 A7.5 B4.7 C2.5
12 A7.2 B4.3 C2.3
13 A10.8 B7.1 C3.0
14 A11.3 B7.2 C2.9
15 A12.1 B7.2 C3.3
16 A11.7 B6.7 C3.1
17 A11.7 B8.5 C2.9
18 A11.7 B7.8 C3.1
19 A12.3 B6.7 C3.0
20 A12.5 B7.4 C2.7
21 A12.8 B7.0 C3.3
22 A11.9 B6.0 C3.4
23 A12.7 B7.2 C3.4
24 A12.3 B7.0 C3.7
25 A11.7 B6.4 C3.2
26 A12.8 B7.5 C3.7
27 A12.8 B7.7 C3.4
28 A12.8 B7.5 C3.7
29 A13.5 B8.7 C3.4
30 A13.1 B6.3 C4.2
31
33
34
32
覆土上層
0
10cm

**図85　溝7出土遺物(1)**

らかの事由によって取り残されてしまった。恐らく、道路は堅固な地盤を必要とするので、あえて溝を埋め立てて軟弱な地盤上に延ばすことはしなかったのだと。

護岸の切石は主に南北両端に集中し、特に北端では面を併せて2.5mにわたって堅牢に積み上げている。特に枡形部分の石積みは、厚みをもった角柱状の切石を混じえて5段積み（高さ1.0m）になっており、石の角をコーナーに揃えて丁寧に組んである。切石のない部分は、大小さまざまの土丹塊版築によって護岸されていた。

底面レベルは6.0～6.1mを前後し、傾斜は明瞭ではないが、全体としては僅かに南へ下がっているようである。覆土の堆積土層を見ると、2回（以上）浚渫された痕跡が窺える。

**溝7出土遺物（図85～87）**

図85—1～30はかわらけ。全て底部糸きり、ロクロ成形である。1～12は小皿。16～30は大皿。

31は常滑甕口縁片。縁帯部の長さ3.9cm。胎土は暗灰色、白色粒を多く含むがキメ細かく粘性の強い良土。大型の甕になると思われる。

32は常滑捏鉢。復元口径21.4cm。胎土は暗茶褐色、2～3㎜大の白色粒を多く含むが粘性強く良土である。片口部分は両脇から指頭により、外側に押し出されている。

33は手焙り（瓦質）。胎土は橙灰色、砂粒、白色粒を多く含み軟質。体部上方に流文と思われるスタンプ捺印文様が、その下に珠文が付けられている。

34は渥美甕胴部片。

図86—35は山茶碗窯系捏鉢口縁片。復元口径30.2cm。胎土は砂粒を多く含み、粘性の弱い灰色土内外面からのナデで口縁端部を丸く仕上げている。

36は山茶碗窯系捏鉢底部片。復元高台径14.6cm。胎土は小石、微砂粒、長石粒を含むが暗灰色良土。外面には横位に、篦削り整形痕がみられる。高台は貼り付け高台、断面は三角形を呈する。内底面は若干摩滅している。

37は手焙り口縁小片（土器質）。胎土は微砂粒、白色粒を多く含む暗灰色土。口縁端部がやや角張る。

38はフイゴの羽口。径7.0cm、孔径2.7cm。胎土は淡黄褐色、先端部はボロボロに剥離し、所々に鉱滓が溶着している。

39は転用陶片。女瓦を転用している。胎土は砂粒、白色粒、小石を含み、橙色粗土。端面に細かな擦痕がみられる。

40は備前擂り鉢。復元口径26.8cm。胎土は砂粒、白色粒を多く含むがキメ細かく粘性の強い暗赤茶色土。条線は9本である。本遺跡では、他に図示できる備前製品は出土していない。

41～57はかわらけ。全て底部糸きり、ロクロ成形。41～48は小皿。49は中皿。50～57は大皿。

58は瀬戸折縁鉢片。胎土は夾雑物を殆ど含まない灰色良土。内外面にやや濁った緑灰色の釉が施釉される。口縁部の折り返しが強く、口唇部は角張っている。

59は瀬戸卸し皿底部片。復元底径7.4cm。胎土はやや粉っぽい、灰黄色土。釉色は黄灰色、内外面

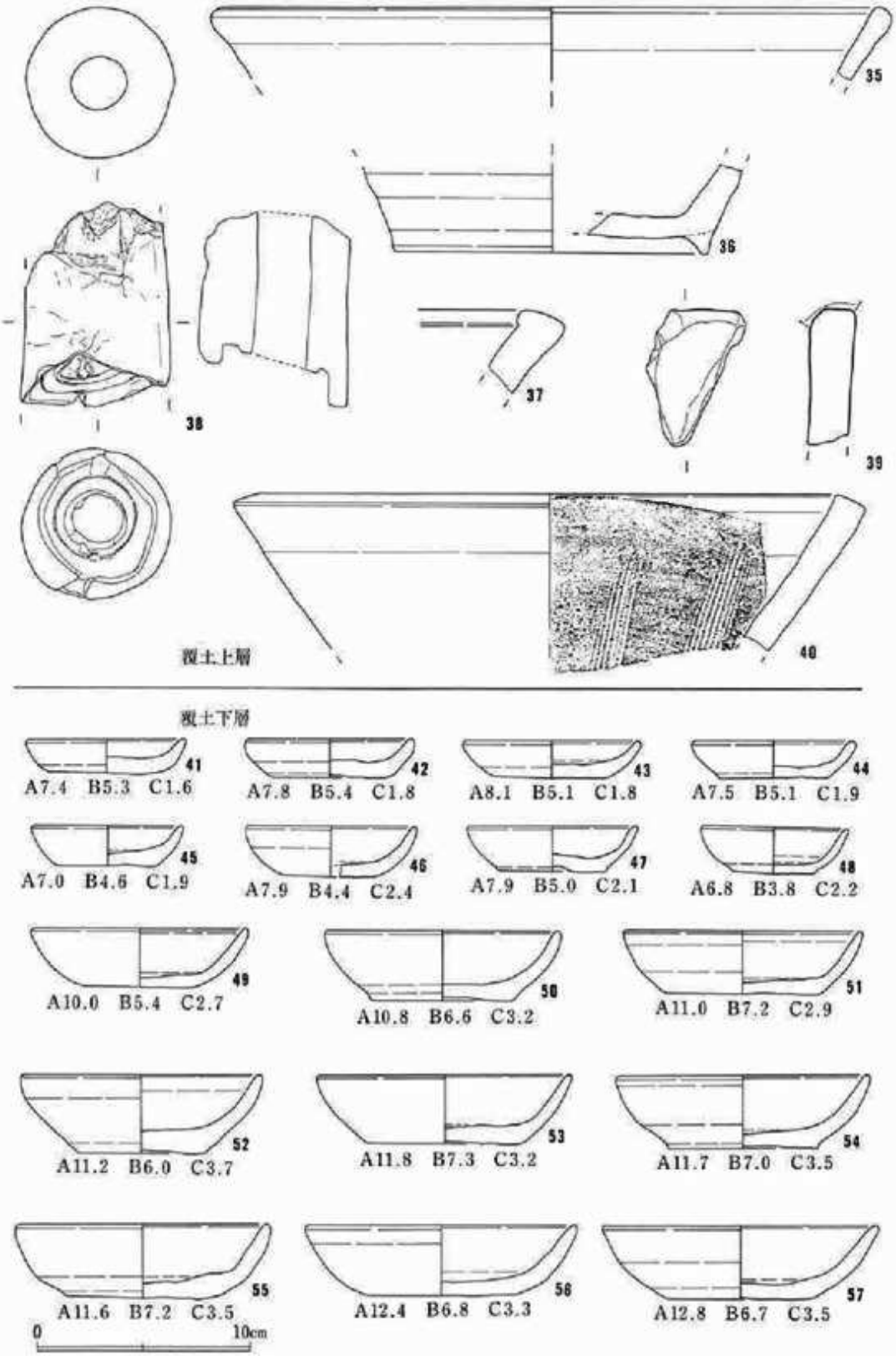

35
36
37
38
39
40
覆土上層
覆土下層
41
A7.4 B5.3 C1.6
42
A7.8 B5.4 C1.8
43
A8.1 B5.1 C1.8
44
A7.5 B5.1 C1.9
45
A7.0 B4.6 C1.9
46
A7.9 B4.4 C2.4
47
A7.9 B5.0 C2.1
48
A6.8 B3.8 C2.2
49
A10.0 B5.4 C2.7
50
A10.8 B6.6 C3.2
51
A11.0 B7.2 C2.9
52
A11.2 B6.0 C3.7
53
A11.8 B7.3 C3.2
54
A11.7 B7.0 C3.5
55
A11.6 B7.2 C3.5
56
A12.4 B6.8 C3.3
57
A12.8 B6.7 C3.5
0
10cm

**図86　溝7出土遺物(2)**

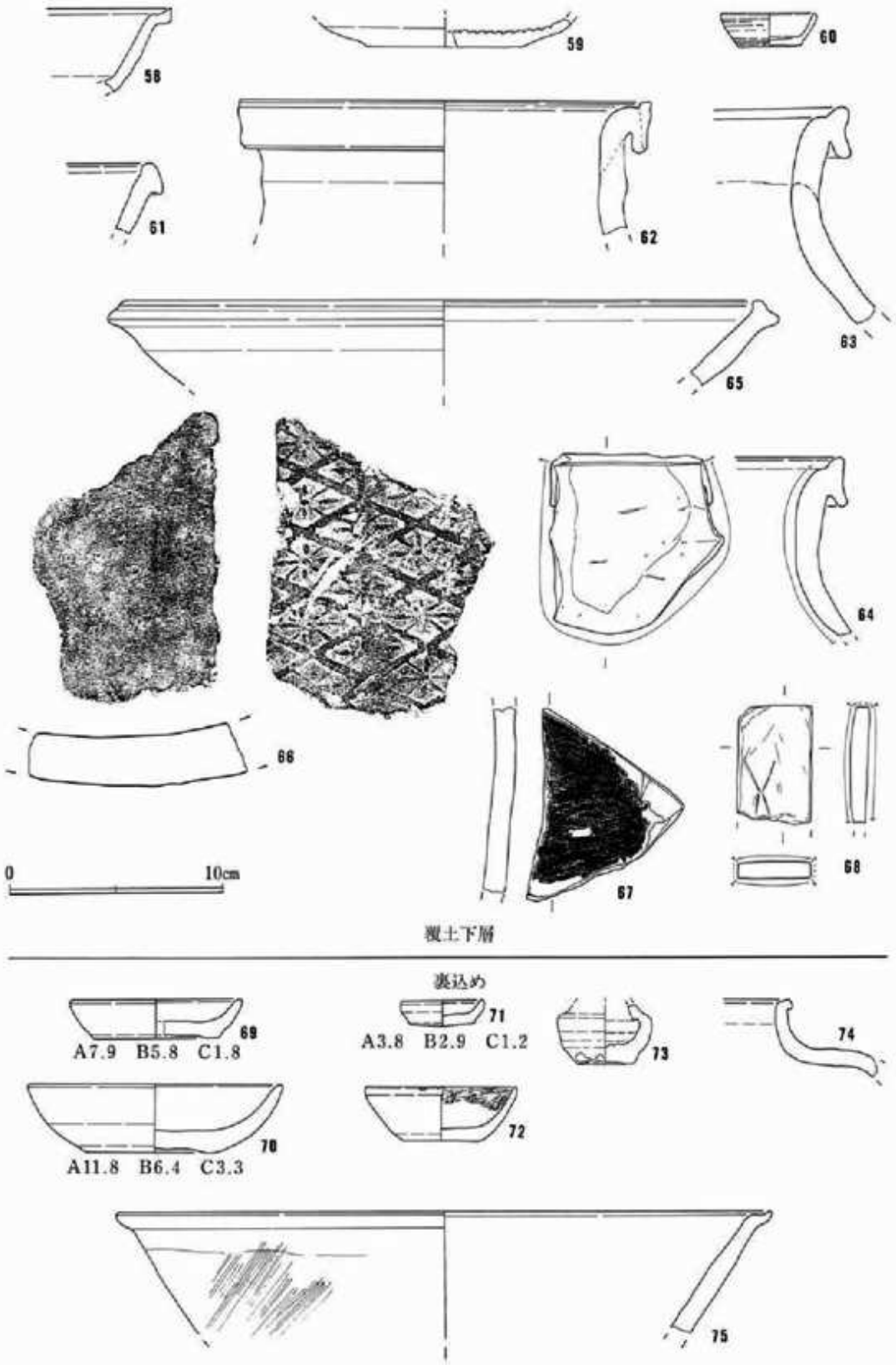

58
59
60
61
62
63
65
64
66
67
68
0
10cm
覆土下層
裏込め
69
A7.9 B5.8 C1.8
71
A3.8 B2.9 C1.2
73
74
70
A11.8 B6.4 C3.3
72
75

**図87　溝7出土遺物(3)**

にハケ塗りされる。底部糸きり、卸し目は細かな間隔で鋭い。

60は瀬戸入子。口径4.5cm、底径3.0cm、器高1.6cm。底部糸きり。胎土は黒色砂粒、白色粒を含むが明灰色良土。焼成良好。内底面は殆ど摩滅しない。

61は東播系捏鉢口縁片。胎土は砂粒、白色粒を多くみ、やや粘性の弱い暗灰色土。口縁端部が上下に広がり、縁帯のようになる。

62は常滑甕口縁片。復元口径19.4cm。縁帯幅2.2cm。胎土は砂粒、長石粒を含むが、やや粘性をもつ暗灰褐色土。口縁はN字状を呈し、口唇部は上方に摘み上げられる。

63は常滑甕口縁片。縁帯幅2.3cm。胎土は長石粒、赤褐色粒を小量含む、明淡褐色粘質土。口縁部はN字状を呈する。

64は転用陶片。常滑口縁片を転用している。内面割れ口周辺に摩滅が見られる。

65は常滑捏鉢口縁片。復元口径30.0cm。胎土は砂粒、白色粒を多く含む暗茶褐色土。口縁内外面にナデによるへこみができ、口縁端部に若干の凹ができる。

66は女瓦。胎土は砂粒、小石を多く含む暗黄褐色粗土。凸面は斜格子の中に花菱文を組み入れた文様の叩き目で、凹面は丁寧なナデ調整が施され、黒色微砂が多量に付着する。

67は常滑壺胴部片。胎土は長石粒を若干含む、暗灰白色粘質土。内面に漆らしき黒色物質が付着する。

68は砥石。泥岩製仕上げ砥。短辺3.5cm、厚さ0.5～0.8cm。砥面にはやや深いV字状の切りこみ、各面には細かい擦痕がみられる。色調は暗桃灰色。

図87—69～71はかわらけ。いずれも底部糸きり、ロクロ成形。69は小皿。70は大皿。71は内折れの極小皿。

72は瀬戸入子。外底面糸きり。口径7.0cm、底径3.6cm、器高2.6cm。胎土は灰色の精良均質土、焼き締まる。微妙に片口が付く。口唇部から内面に黄緑色の自然釉がかかる。内面にタール状物質付着する。

73は瀬戸小壺。底径2.6cm、肩部径4.5cm。底部糸きり、ロクロ成形である。胎土はキメ細かい灰色土。底部を除き、緑灰色の釉がかけられる。全体に雑なつくりでボッタリした感じである。

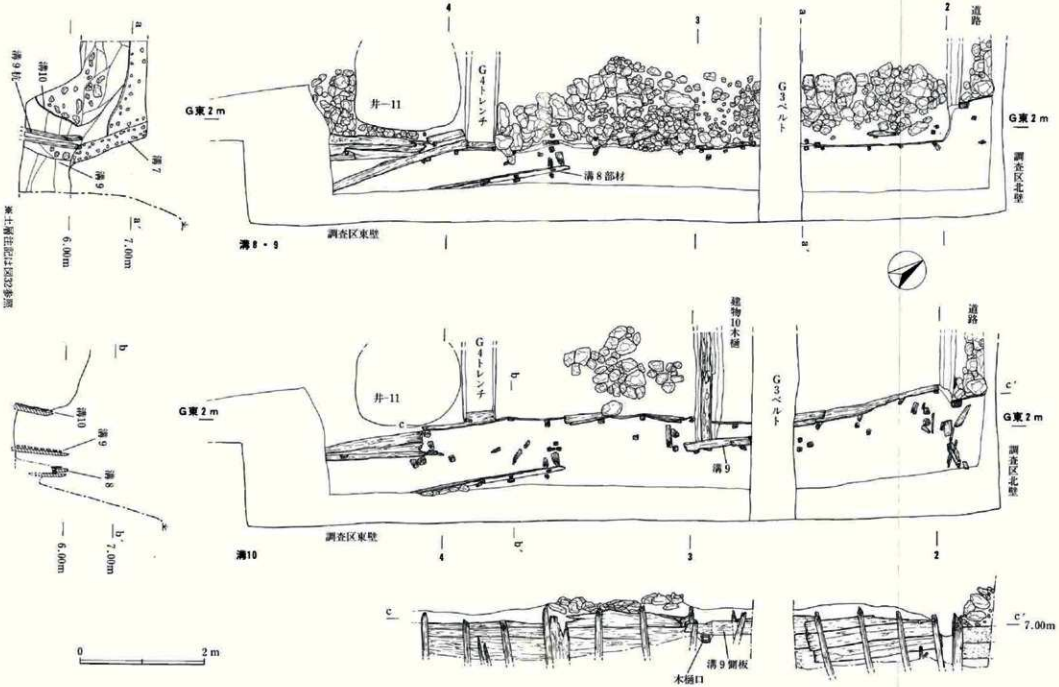
74は常滑小壺片。胎土は白色粒を多く含むが、暗灰褐色良土。肩の張りが強い。

75は常滑捏鉢片。復元口径30.6cm。胎土は白色粒を含む、暗灰色弱粘質土。口縁部内側の強いナデにより口唇部が外側に摘み出される。外面胴部には木口による調整痕がみられる。

**溝8・9・10（図88）**

いずれも調査区東端、ほぼG東2mライン上を南北に流れる小町大路西縁側溝と考えられる木組み溝である。これらも東岸は調査区外になり、全幅は不明であった。

溝8は、G—3グリッドでごく一部が確認されたに過ぎず、その詳細は不明。下層の溝9を埋めて構築されているが、その大半がレベル的にあまり差のない溝7によって破壊されており、溝9と



溝9枕
溝10
溝7
溝9
a
a'
6.00m
7.00m
G東2m
井—11
G4トレンチ
溝8部材
G3ベルト
道路
調査区北壁
調査区東壁
溝8・9
b
b'
溝8
建物10木樋
溝9
溝10
c
c'
0
2m
溝9側板
木樋口


図88 溝8・9・10

弁別できずに掘り上げてしまったためである。検出されたのは、ほぞ穴を切った一辺7～8cmの角材であり、その残存長は2.2m。溝壁板を押さえるための束材が立つ「地覆」であろう。これから知られる溝8の底面レベルは5.80m、軸方位は、N－24°－Eであるが、遺存状況が悪いため参考値に留まる。ほぞ穴は5×2m、深さ3cm程の小さなものが芯々52～60cm間隔で3穴確認され、そのうちの南2穴には5.5×6.5cm角、残長30cmの束材が立っていた。「地覆」西側に接して、厚さ1.5cmの横板＝「側板」が僅かに遺存している。これによって、検出されたのが溝の西辺であることが判明した。また、「地覆」を固定する補助杭が各束材内側に打ち込まれている。

溝9は、溝7を構成している石積みや土丹塊を外して50cmほど掘り下げた、標高6.80mの所で確認された。溝10を埋め東に約50cm張り出して構築されている。検出されたのは溝肩を構成する土丹集積とその護岸木組みである。確認全長10.55m、幅は上下とも0.75m。底面レベルは北端で5.30m、南端で5.50mと、北流する傾斜を示すが疑問である。下層溝覆土との区別ができずに掘り過ぎた可能性が高い。肩を構成する土丹は、拳～人頭大の塊で、幅1.0～1.4mの範囲に厚さ20～30cmで粗雑に集積・版築されている。護岸の木組みは、遺存状態が悪く正確な計測ができないが、厚さ1～2cmの横板を2～3段積み上げて、5～7cm角の杭で内側を支えるものである。杭の間隔は概ね50～70cmだが、さらに細かく打ち込まれた部分もあった。次の溝10とほぼ同規模・同構造であろう。尚、溝9の3ライン付近には、建物10に付設された暗渠木樋が取り付き、溝側板の下をくぐって木樋口が顔を覗かせている。溝9と木樋の構築が同時一連の造作になるものか、明らかにすることはできなかった。

溝10は、溝9肩部を構成する集積土丹を取り外し、標高6.30mの所で検出された。調査区内で存在の確実な小町大路側溝としては最も古いものであり、溝9によって東半を切られている。確認全長10.55m、上幅0.65m、下幅0.80と、土圧によって壁が内傾している。底面レベルは北端付近で5.20m、南端で5.30mであるが、若干凹凸があるため傾斜は定かでない。構造的には溝9と同様であるが、部材遺存状態はより良好であった。幅35cm、厚さ1.5～2.0cmの横板を一部重複させて3段積みにし、9×5cm、残長1m前後の杭で押さえ込む。一枚の横板は北端部分で長さ2.10mを測る。裏込めにはやはり土丹塊を多く混入し版築していた。尚、前述のように、溝10は道路端部と面をほぼ合わせており、また件の建物10木樋は、本溝の側板を幅30cm切り取って貫通している。

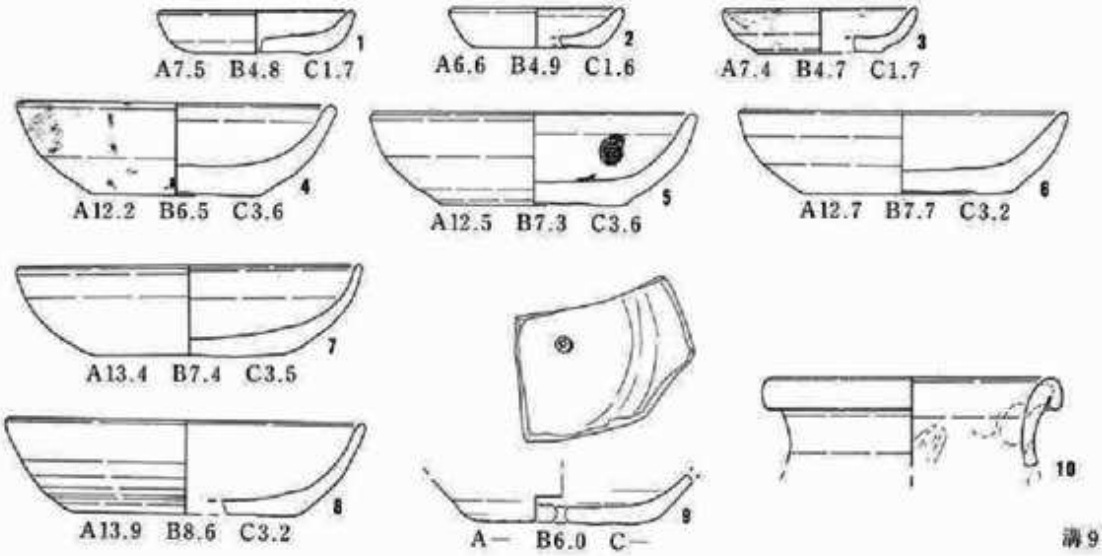
確認された小町大路側溝は以上であるが、G3セクションベルト等を見ると、より古い側溝が存在した可能性がある。

**溝8・9・10　出土遺物（図89・90・91）**

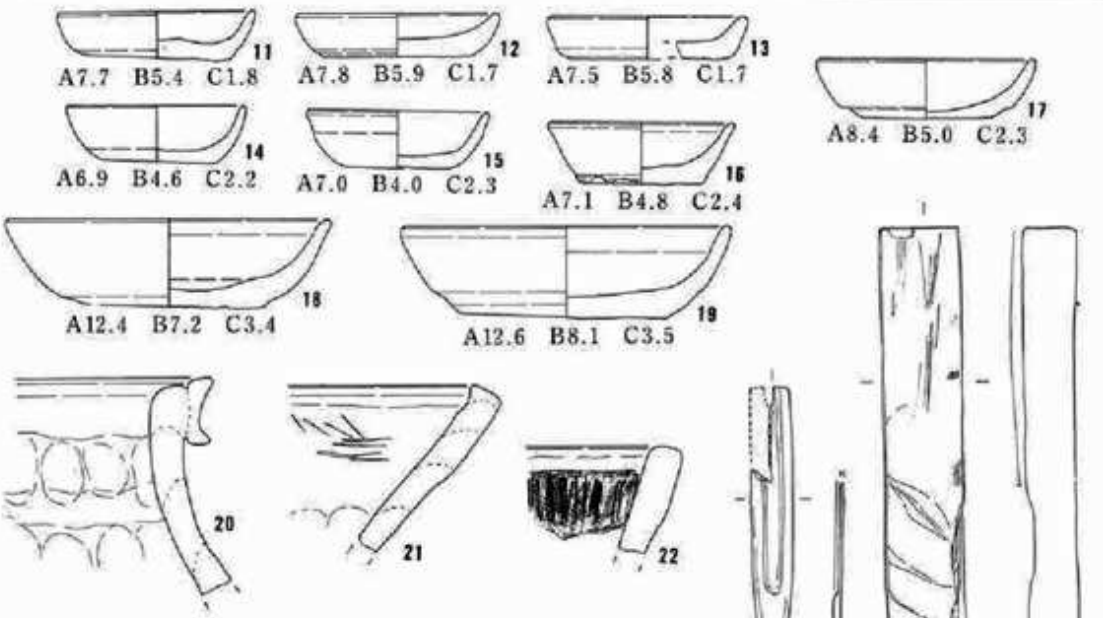
溝8・9・10の出土遺物は、部材の良く残っている部分では明確に弁別できたが、そうした遺物は少なく、多くは帰属不詳の状態で上がってしまった。

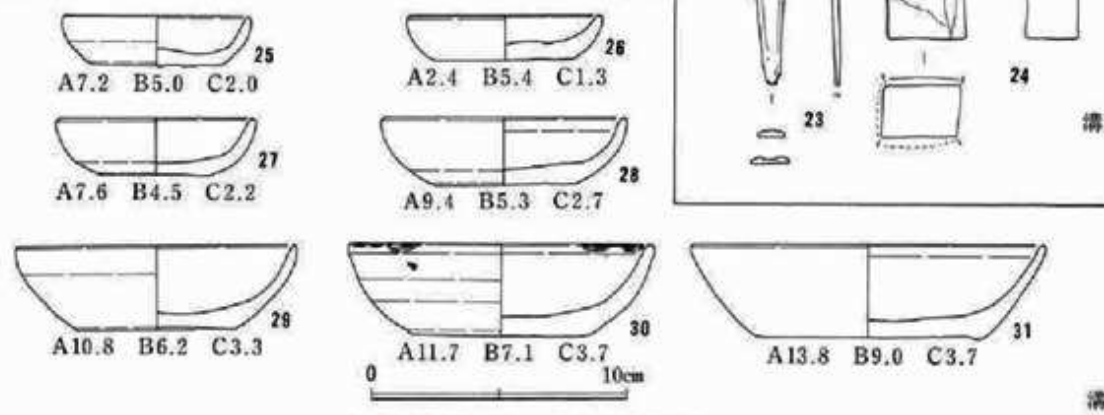
**溝9（図89－1～10）**

図89－1～9はかわらけ。底部糸きり、ロクロ成形。1～3は小皿。1は体部下位に、3は中位に稜をもつ。2は体部がクサビ型になるものである。4～8は大皿。4、5、6は体部中位に稜を




溝9




溝8・9

溝10

**図89　溝8・9・10出土遺物(1)**

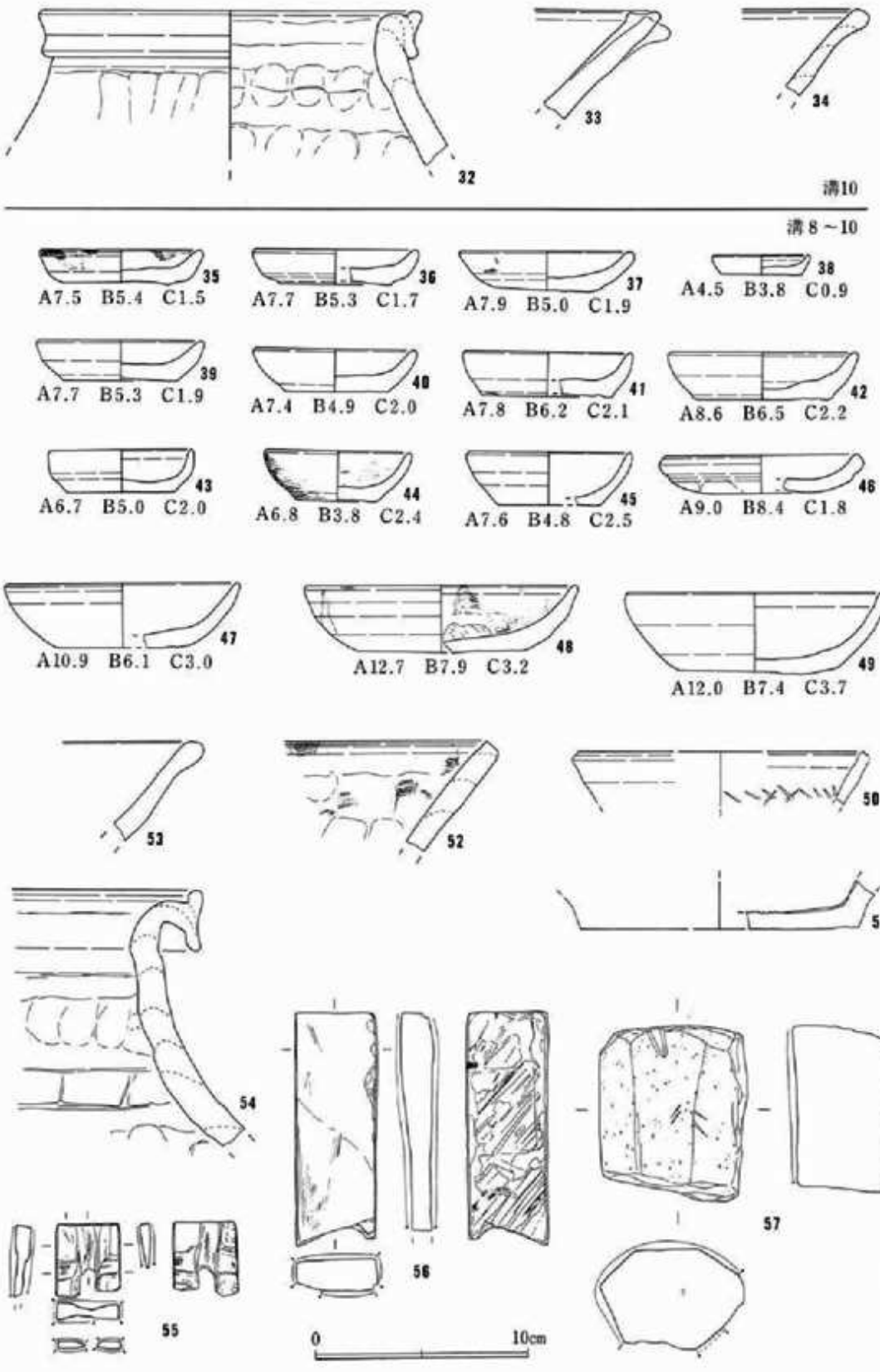



図90　溝8・9・10出土遺物(2)

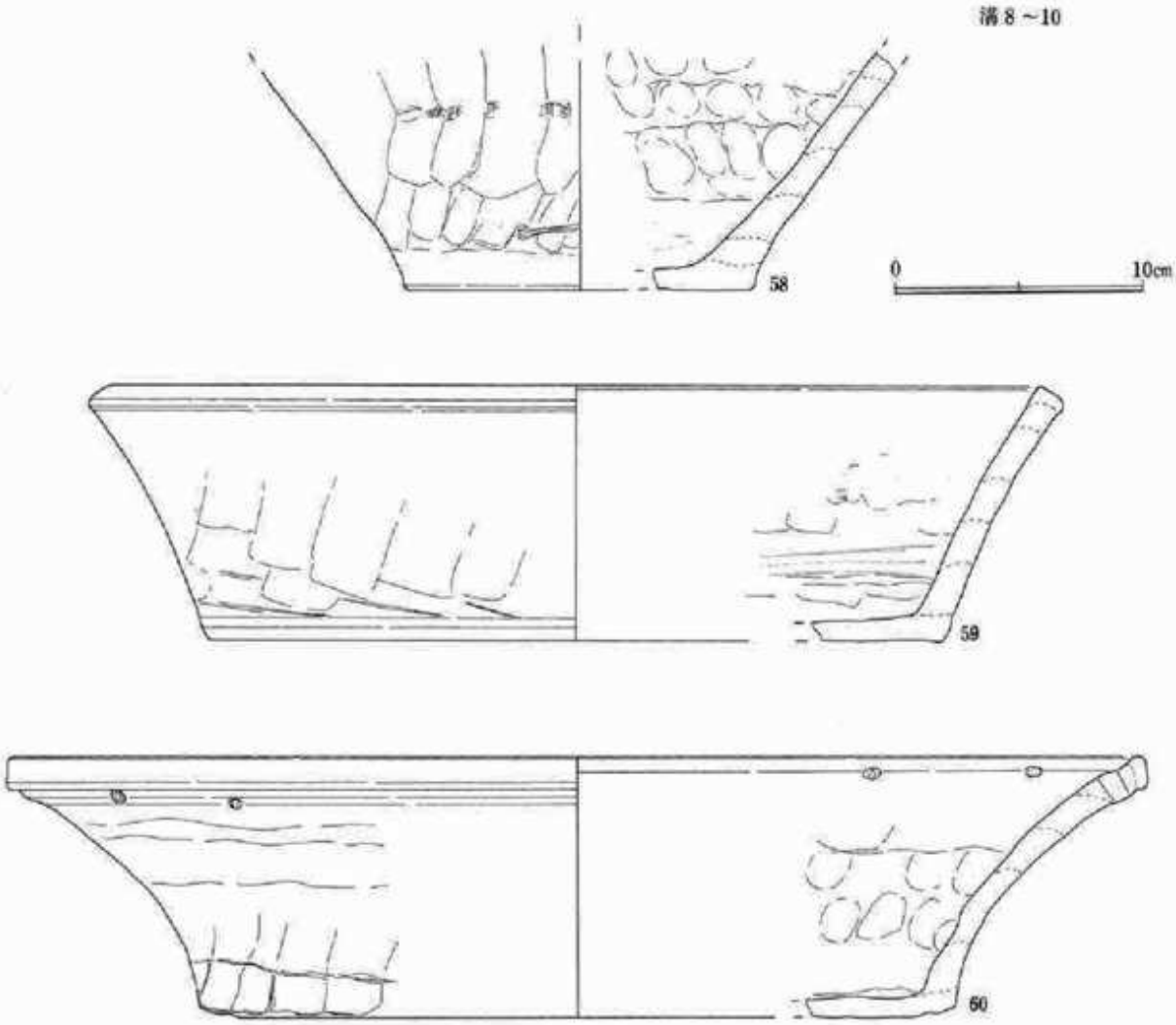



**図91　溝8・9・10出土遺物(3)**

もち7、8は器壁が薄く、7は側面観やや丸みをもっている。9は穿孔かわらけ底部片。孔は底部ほぼ中央に、焼成後開けられている。

10は常滑壺口縁片。復元口径11.0cm、頸部径9.6cm。胎土は砂粒、白色粒を含み、やや粘性を欠くが暗茶褐色緻密土。内面にはかすかに、横位の指ナデが残る。口縁は外側に折り曲げられ、頸部に接続する。

**溝8・9（図89—11～24）**

図89—11～19はかわらけ。底部糸きり、ロクロ成形。11～17は小皿。18、19は大皿。13は体部がクサビ形をなす。16は底部から直線的に立ち上がるものである。18は口縁部が微妙に外反する。

20は常滑甕口縁片。縁帯幅2.5cm。胎土はほとんど夾雑物を含まない、灰色良土。

21は常滑捏鉢口縁片。胎土は長石粒、小石粒を含み、ややガサつく淡赤褐色土。口縁端部は平らで、口縁内側のナデ強い為か内側端部が摘み出された形になる。

22は手焙り(土器質)。胎土は砂粒、白色粒含み、淡赤褐色の弱粘質土。内外面に篦による縦位の整形痕がみられる。内面口縁下には、縦位に棒状具による磨きがみられる。

23は笄。幅1.6cm、厚さ0.3cm。片面中央に溝状の凹、頂部に切れこみをもつ。

24は砥石。泥岩製の仕上砥。長さ17.4cm、幅3.1cm、厚さ2.0cm。砥面には細かい擦痕が残り1/3が剝離する。

**溝10(図89—25～31・図90—32～34)**

図89—25～31はかわらけ。底部糸きり、ロクロ成形。25～27は小皿。28は中皿。29～31は大皿。27、28は体部側面観にやや丸みをもつ。25、29、30は体部中位に稜をもつ。31はやや直線的に立ち上がる。全体に器壁は薄めである。

図90—32は常滑壺口縁片。復元口径17.6cm。胎土は砂粒、長石粒を含み、粘性のある黒灰褐色堅緻土。口縁端部はN字状に折り返される。縁帯部は頸部に付着する。いわゆる不識壺になると思われる。

33は常滑片口鉢口縁片。胎土は砂粒、長石粒含み、キメ細かい明淡茶色弱粘質土。口縁端部にナデによる浅い凹みができる。片口は指頭により外側へ摘み出される。

34は山茶碗窯系捏鉢片。胎土は砂粒、白色粒を含み、粘性のある灰色堅緻土。口縁下の強いナデのため口縁部が肥厚する。

**溝8～10(図90—35～57・図91—58～60)**

図90—35～49はかわらけ。35～45は底部糸きり、ロクロ成形の小皿。46は手づくね成形の小皿。47～49は底部糸きり、ロクロ成形の大皿。38は極小のもので、底部からやや直線的に立ち上がる

50は瀬戸卸皿。復元口径14.0cm。胎土は淡黄灰色の良土でよく焼き締まる。口縁はやや角張り、卸し目は鋭く切り込まれる。黄灰色の釉がハケ塗りされる。

51は瀬戸折縁鉢底部片。復元底径13.2cm。胎土は黒色微砂を含むが、明灰色精良土。内底見込みに三条の沈線が巡る。全体に緑色の釉が施されている。

52は常滑捏鉢口縁片。胎土は砂粒、長石粒、石英粒を多く含むが、粘性のある暗灰色良土器表は淡赤褐色。口縁部が角張る。内面には全体にススが付着する。

53は山茶碗窯系捏鉢口縁片。胎土は砂粒、白色粒を含むが、粘性のある灰白色堅緻土。内面および割れ口が、火を受けた為か黒色になる。口縁下が強いナデの為にへこみ、口縁部が丸くなる。口唇部から外面中程にかけて、緑黄色の自然釉(2次的焼成の為か気泡含む)がかかる。

54は常滑甕口縁片。縁帯幅2.8cm。胎土は砂粒、白色粒を含むが、粘性のある暗灰色堅緻土器表は赤褐色。内面頸部には指頭痕、ヘラによる横位の整形痕がみられる。外面には斜位に木口整形痕がみられる。口縁は外側に引き出され、縁帯をつくる。

55～57は砥石。55、56は泥岩製仕上砥。55は幅3.0cm、厚み0.3cm～0.7cm。両面に幅約1.0cmの十字状の使用痕がみられる。56は幅3.8cm、厚さ0.9cm～1.5cm両面をよく使用している。剝離の多い面には、斜めの鋭い擦痕が目立つ。57は中砥。気泡を多く含む、黄白色の石材である。砥面には0.3cmの擦痕、0.5cmのU字状の擦痕がみられる。

58は常滑捏鉢底部。復元底径13.7cm。胎土は白色粒を含む、淡赤褐色粘質土。外面には縦位の篦整形痕、内面には指頭による横ナデ痕が顕著にみられる。内底部にはススが付着する。

59は手焙り(瓦質)。復元口径37.5cm、底径29.5cm、器高10.2cm。胎土は夾雑物を殆ど含まない灰色土。器壁がやや反り気味で口縁部が角張る。外面には縦位に篦整形痕、内面にはかすかなス痕がみられる。

60は手焙り(土器質)。復元口径45.2cm、底径30.3cm、器高10.4cm。胎土は砂粒、白色粒等の夾雑物が多く、気泡を含む、ややガサつく淡黄褐色土。外面には篦によるナデ上げ整形痕、内面には指頭痕がみられる。器形は、器壁が大きく外側に張り出し、器高の低い鉢形を呈する。口縁下に2つの孔が外方に傾斜してあけられている。焼成前にあけられたものである。

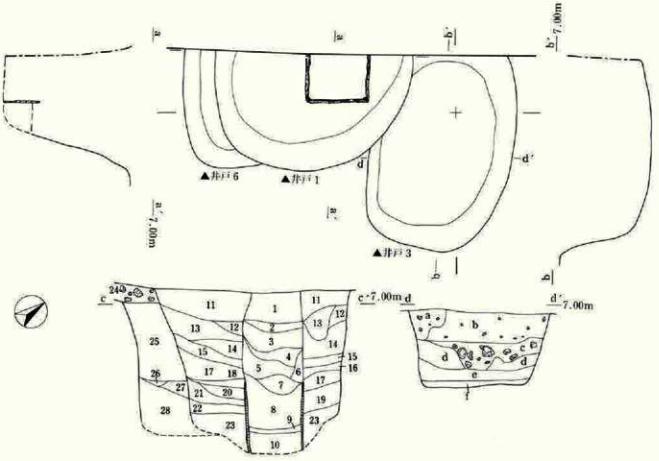



図292 井戸1・3・6

(土層注記)

1. 褐色砂質土　土丹粒を多く含む。しまりなし。
2. 褐色砂質土　土丹粒を1層より多く、炭化物・かわらけ粒を少量含む。
3. 褐色弱粘質土　土丹粒を多く、炭化物・かわらけ粒を少量含む。しまりなし。
4. 褐色粘質土　3層に近似するが、色調やや暗い。
5. 褐色粘質土　4層より色調黒味を帯び、しまり更に弱、粘性増す。
6. 褐色粘質土
7. 黒褐色弱粘質土　土丹粒・炭化物をやや多く含む。しまりなし。
8. 黒褐色弱粘質土　土丹粒・炭化物・かわらけ粒・貝片・木片多し。水気あり。
9. 青黒色粘質土
10. 暗茶褐色粘質土　有機物腐食土。
11. 暗黄褐色土　土丹粒を非常に多く含む。しまりあり。
12. 暗黄褐色弱粘質土　土丹粒を非常に多く含む。しまり弱い。
13. 暗灰褐色砂質土　土丹粒・炭化物・黄色砂を多く含む。しまりあり。
14. 暗灰褐色砂質土　13層に近似するが、しまりやや弱く、弱粘性を帯びる。
15. 灰黒褐色弱粘質土　13層に近似するが、しまり更に弱い。
16. 灰黒褐色弱粘質土　黄色砂をやや混じえ、しまり弱い。
17. 灰黒褐色粘質土　13層に近似するが、しまりなし。
18. 暗褐色粘質土　やや貝砂を混じえる。しまりあり。
19. 暗褐色粘質土
20. 暗灰褐色粘質土　かわらけ粒・炭化物粒を極少量含み、しまりなし。
21. 暗灰褐色粘質土　20層に近似するが、ややしまりあり。
22. 暗灰褐色粘質土　20層に近似するが、しまり、粘性ともやや強い。
23. 黒褐色粘質土　炭化物少なく、しまり、粘性とも強い。
24. 土丹層　拳大～人頭大土丹ブロック充填。
25. 褐色粘質土　土丹小ブロック、かわらけ片を多く含む。ややしまりあり。
26. 黄褐色砂層
27. 褐色粘質土　貝片を多く含み、黄色砂をやや混じえる。やや粘性強い。
28. 褐色粘質土　やや有機がかる。木片、貝片を多く含む。

■1～10層…井戸1埋土
11～23層…同　廃込め土
25～28層…井戸6

a．暗黄褐色砂質土　土丹小ブロックを含む。
b．茶褐色粘質土　土丹小ブロック・粒を多く、黄色砂ブロックを含む。
c．茶褐色粘質土　拳大～人頭大土丹ブロック多く、黄色砂ブロックを少量含む。
d．暗茶褐色粘質土　土丹粒・かわらけ片・炭化物を多く含む。ややしまりあり。
e．暗茶褐色粘質土　土丹粒・貝粒を少量含む。
f．茶褐色砂質土　土丹粒・貝粒を多く含む。やや粘性を帯び、しまりあり。

■a～f層…井戸3

0　2m

## E）井戸

**井戸１（図92）**

A－３グリッドに位置し、井戸３・６を切っている。確認標高7.20m。調査区西壁にかかる為全貌は明らかではないが、確認できる掘り方の形状は南北2.65m、東西1.55mの規模を測る楕円と考えられる。掘り方北寄りに井戸枠が据えられる。井戸枠は横桟支柱型で、確認面より１m掘り下げたところで検出された。南北85cm、東西は調査区外になり不明。底面は湧水と崩落の危険性により完掘不能であり、ピンポールによって確認した底面標高は約5.1mである。

**井戸１出土遺物（図93）**

図93－１～８はかわらけ。底部糸きり、ロクロ成形。１～６は小皿。２～５は体部中位に稜をもち、６は器形がやや深めである。７、８は大皿。７は穿孔かわらけ。孔は底部ほぼ中央に焼成後開

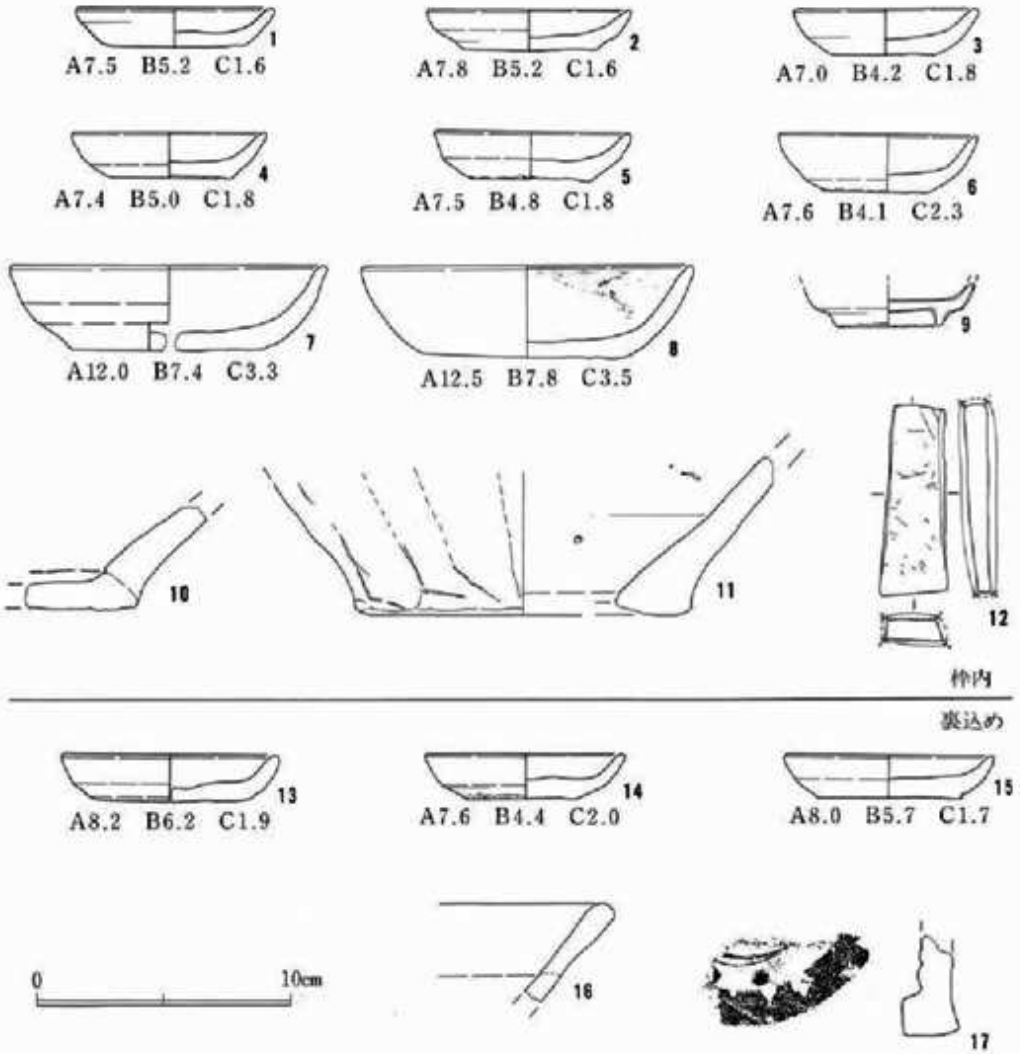



**図93　井戸１出土遺物**

けられ、孔径は約0.4cm。8は底部からやや開き気味に立ち上がり、内面にススが付着する。

9は青磁折腰鉢。復元高台径4.1cm。胎土は夾雑物を含まぬ、白色堅緻土。釉は淡緑色、畳付け部を残し全体にかけられる。

10・11は常滑捏鉢底部片。10は胎土は砂粒、長石粒を含む灰色土。11は復元底径12.8cm。胎土は砂粒、白色粒を含む橙褐色土。外面に縦位の篦ナデ上げ整形痕、内面はよく摩滅している。

12は砥石。中砥。

13～15はかわらけ。底部糸きり、ロクロ成形の小皿。体部中位下に稜をもち、やや開き気味に立ち上がるものである。

16は山茶碗窯系捏鉢口縁片。胎土は長石粒、黒色砂粒を含む、灰白色弱粘質土。口縁下外面の強い横ナデにより、口縁部がやや肥厚する。口縁端部を平坦に仕上げている。

17は鐙瓦片。三巴文。胎土は二次焼成を受けた為もろい。暗灰褐色である。

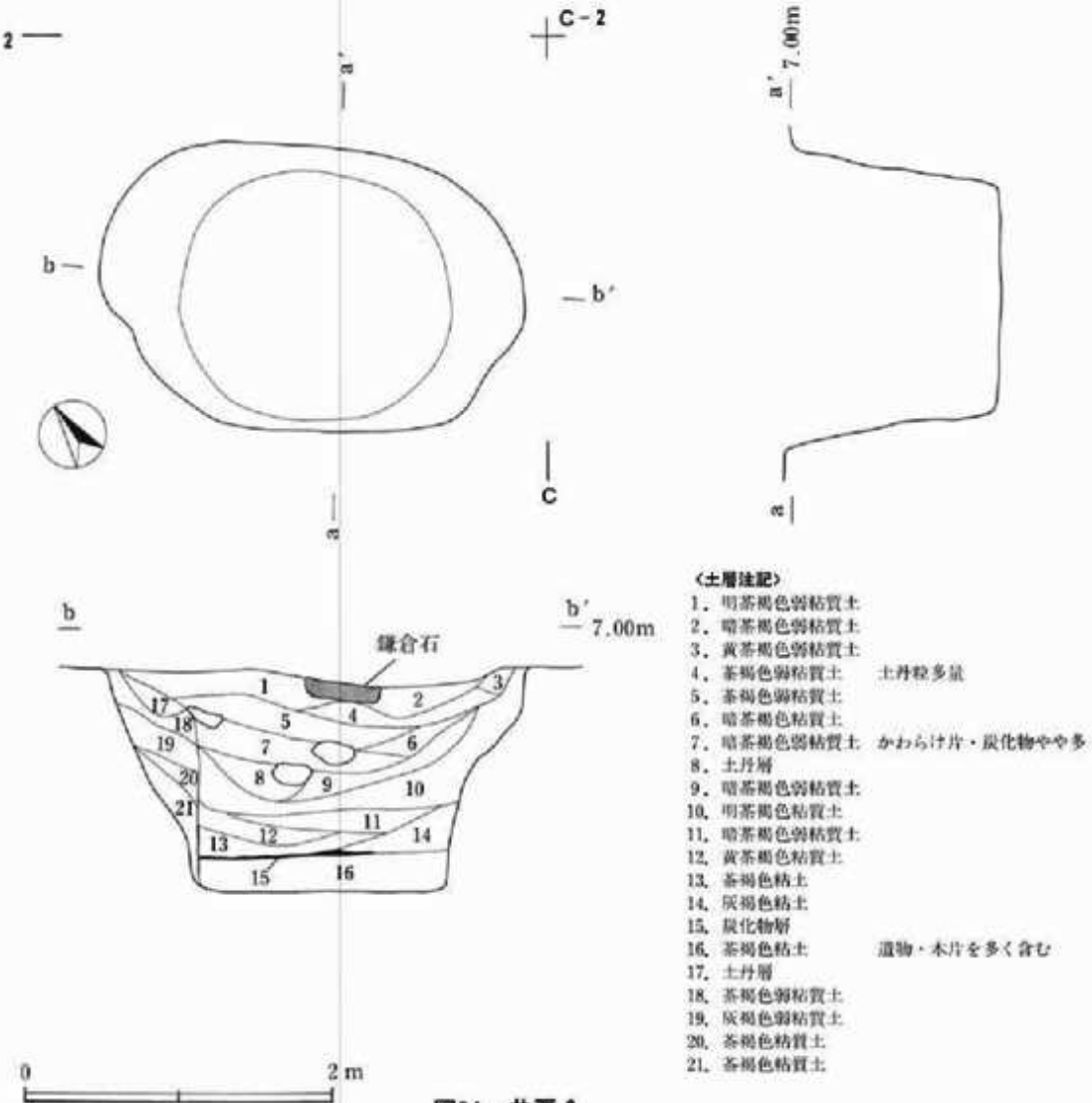



図94　井戸2

**井戸 2 （図94）**

B－2 グリッド、道路遺構の南に位置し、土壙29・30を切っている。確認標高7.05m。掘り方の形状は長円形で、東西2.75m、南北1.85m、確認面からの深さ1.43mの規模をもつ。底面は東西1.7m、南北1.6mの円形に近い形で掘り方内からは井戸枠は検出されなかった。東西の断面図を見ると井戸枠の痕跡が窺えないこともないが、東側の土の流れからすると不明である。

**井戸 2 出土遺物（図94）**

図94－1～7はかわらけ。底部糸きり、ロクロ成形。1は内折れの極小皿。2～4は小皿。2はやや器高が低く、体部中位に稜をもつ。3、4は側面観が丸みを帯びる。5は中皿。体部中位上に稜をもち、やや直立する。6、7は大皿。6は体部上位に稜をもち、7は器壁が薄い。

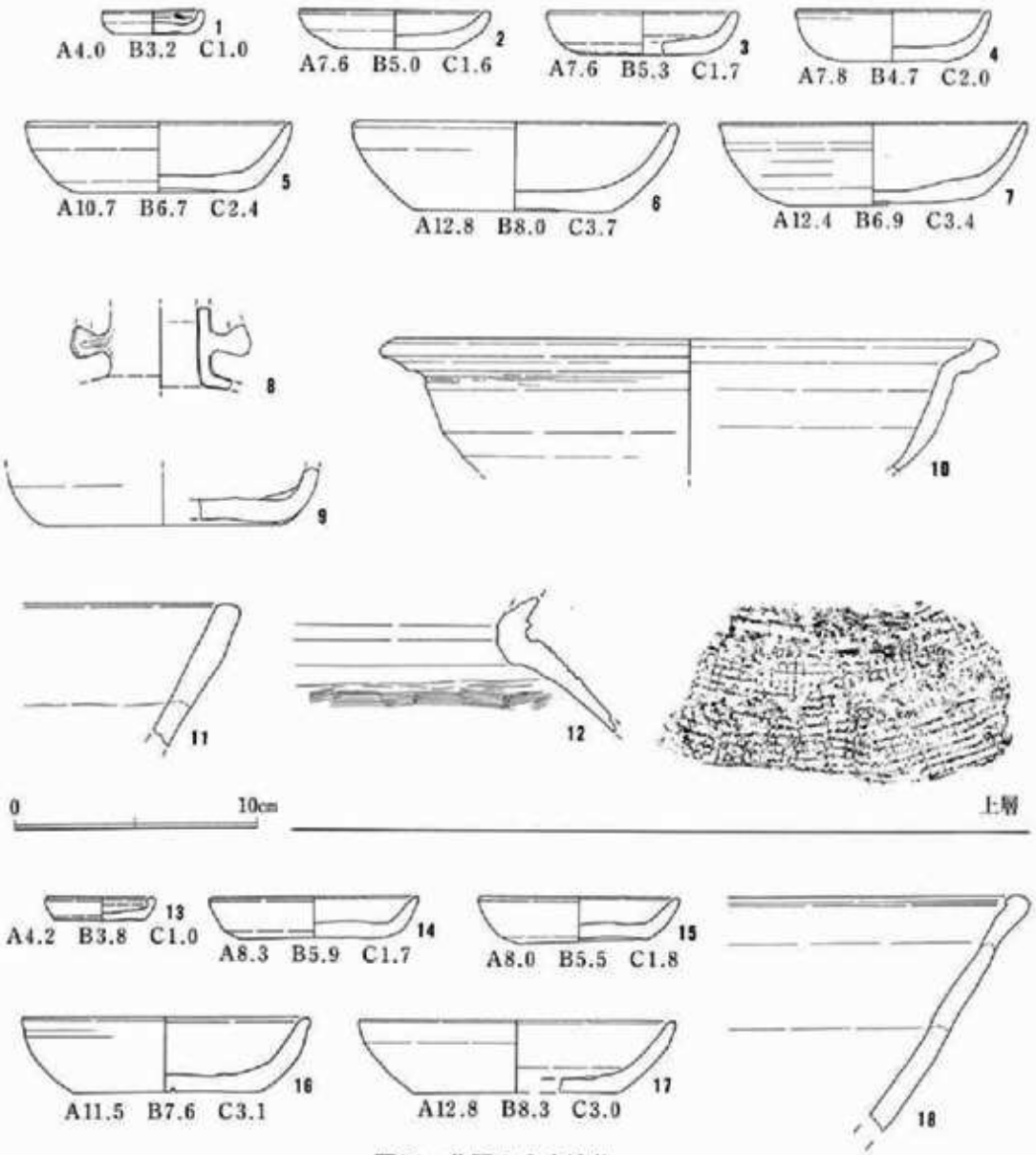



**図95 井戸 2 出土遺物**

8は青磁鳳凰耳花生。頸部片。復元頸径4.0cm。胎土は黒色粉粒を少量含む白色堅緻土。釉は淡青緑色で透明。龍泉窯系。

9は瀬戸底部片。行平鍋か。復元底径9.6cm。胎土は白色砂粒、黒色微砂を含む明灰色土。焼成は良好。外底部には糸きり痕が残る。釉は灰色、外底面を除き施釉され、外底の基部に釉溜まりしている。

10は瀬戸折縁鉢。復元口径25.4cm。胎土は淡黄灰白色弱粘質土。口縁は外方へ折り曲げられ端部は玉縁状に盛り上がる。釉は淡緑色で、薄くハケ塗りされる。

11は常滑捏鉢口縁片。長石粒、石英粒を密に含む暗褐色土。口縁端部を平坦に仕上げている。

12は亀山甕片。胎土は雲母を小量含む、暗灰褐色土。

13～17はかわらけ。底部糸きり、ロクロ成形。13は内折れ極小皿。14、15は小皿。いずれも体部下位に稜をもつ。16、17は大皿。16は口縁部が外反し、17は直立気味になる。

18は常滑捏鉢口縁片。胎土は小石粒、長石粒を小量含む、橙褐色土。口縁部は丸みをもち、内側に若干玉縁状となる。

**井戸3（図92）**

B－3グリッドに位置する。確認標高6.90m。井戸1に南西隅を切られ、西辺は調査区西壁にかかる。掘り方の形状はほぼ長円形で、確認できる規模は東西2.6m、南北1.9m、確認面からの深さ1.03mを測る。底面も長円形で東西2.2m、南北1.5m、標高5.90mである。掘り方内からは井戸枠は確認できなかった。土層堆積や深さ等から見て、井戸として機能していたものかどうか不安が残る。

**井戸3出土遺物（図96）**

図96－1～7はかわらけ。底部糸きり、ロクロ成形。1～5は小皿。1は器高のやや低めのもの。2は体部下位に稜をもち、3は体部中位に稜をもつ。4、5は器高が高くなるものである。6は大皿。体部のナデのためか口縁部がやや厚くなり口唇部が尖る。7は裏込めから出土したもので、体部中位に稜をもち立ち上がる。

8は常滑捏鉢底部片。復元底径13.4cm。胎土は長石粒、石英粒を多量に含む、黒褐色土。外面にヘラによるナデ上げ整形痕がみられる。

9は常滑甕口縁片。胎土は長石粒、小石を小量含む、暗灰色粘質土。口縁はN字状に折り曲げられ、縁帯部をつくる。

10は山茶碗窯系捏鉢。口縁片。胎土に小石を多量に含む、灰色弱粘質土。口縁端部に微かな窪みがみられる。

11は常滑捏鉢口縁片。胎土は長石、石英粒を小量含む、黒褐色粘質土。口縁端部にU字状の溝をもつ。

12は亀山甕片。外面に正格子の叩き目がみられる。

13は白磁口兀皿。復元口径9.8cm、底径6.6cm、器高1.9cm。胎土は淡灰白色、堅緻土。釉は乳白色

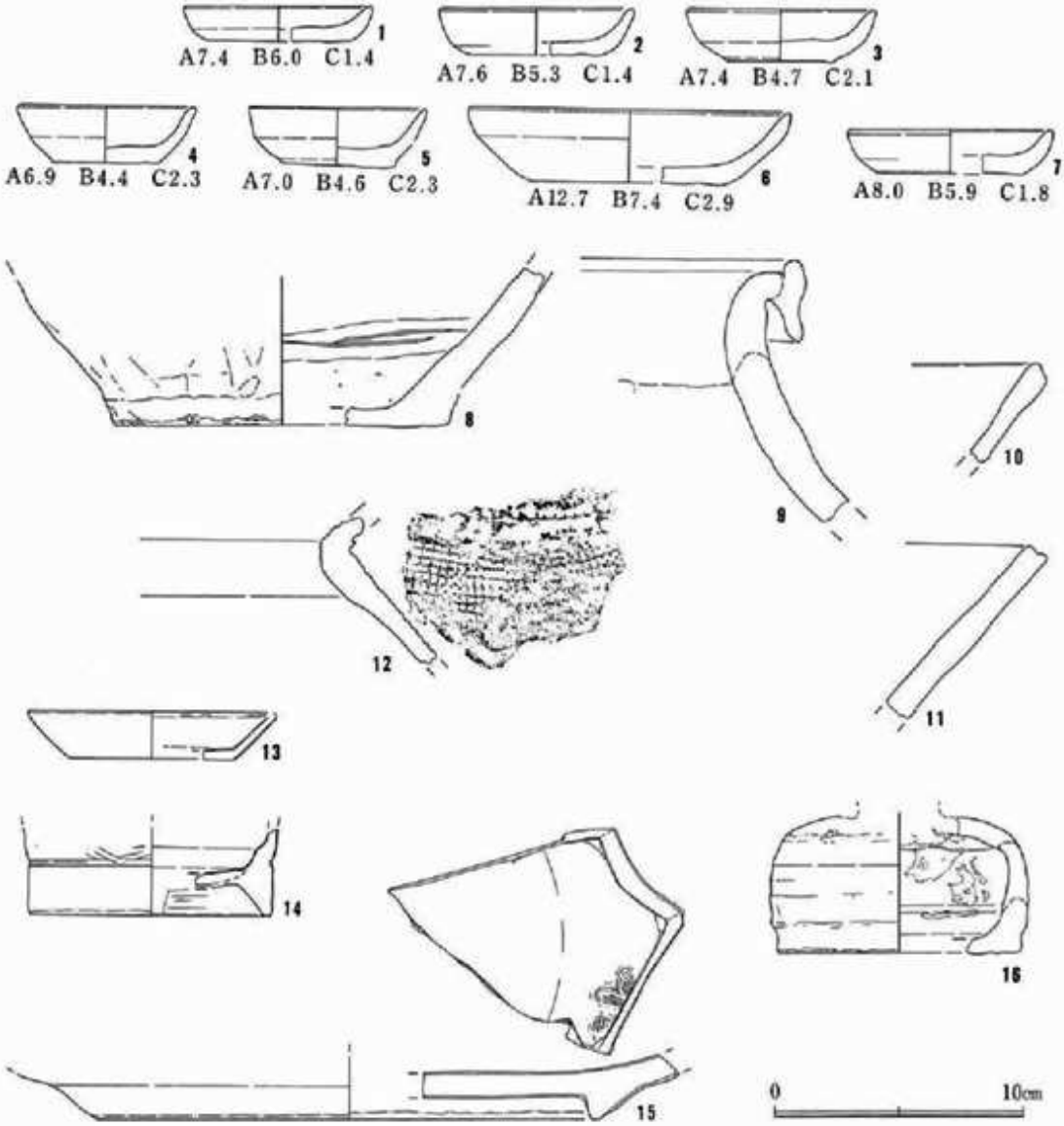



**図96　井戸３出土遺物**

である。

14は青白磁梅瓶底部片。復元高台径9.6cm。胎土は白色堅緻土。釉は色調淡水青色で全体に施釉され、畳付け部を拭き取りする。高台は削り出しである。胴部下位に二条の沈線が巡り、渦文の下端がわずかに見える。

15は青磁鉢。復元高台径20.2cm。胎土は淡灰白色堅緻土。釉は淡緑色で全体に施釉され、畳付け部は拭き取られる。高台は削り出しである。内面には魚文が貼り付けられる。

16は常滑壺。鳶口になるものである。復元底径9.8cm、胴部10.3cm。胎土は長石粒を小量含む灰白色粘質土。内面には指頭痕が強く残り、赤褐色の物質が付着する。

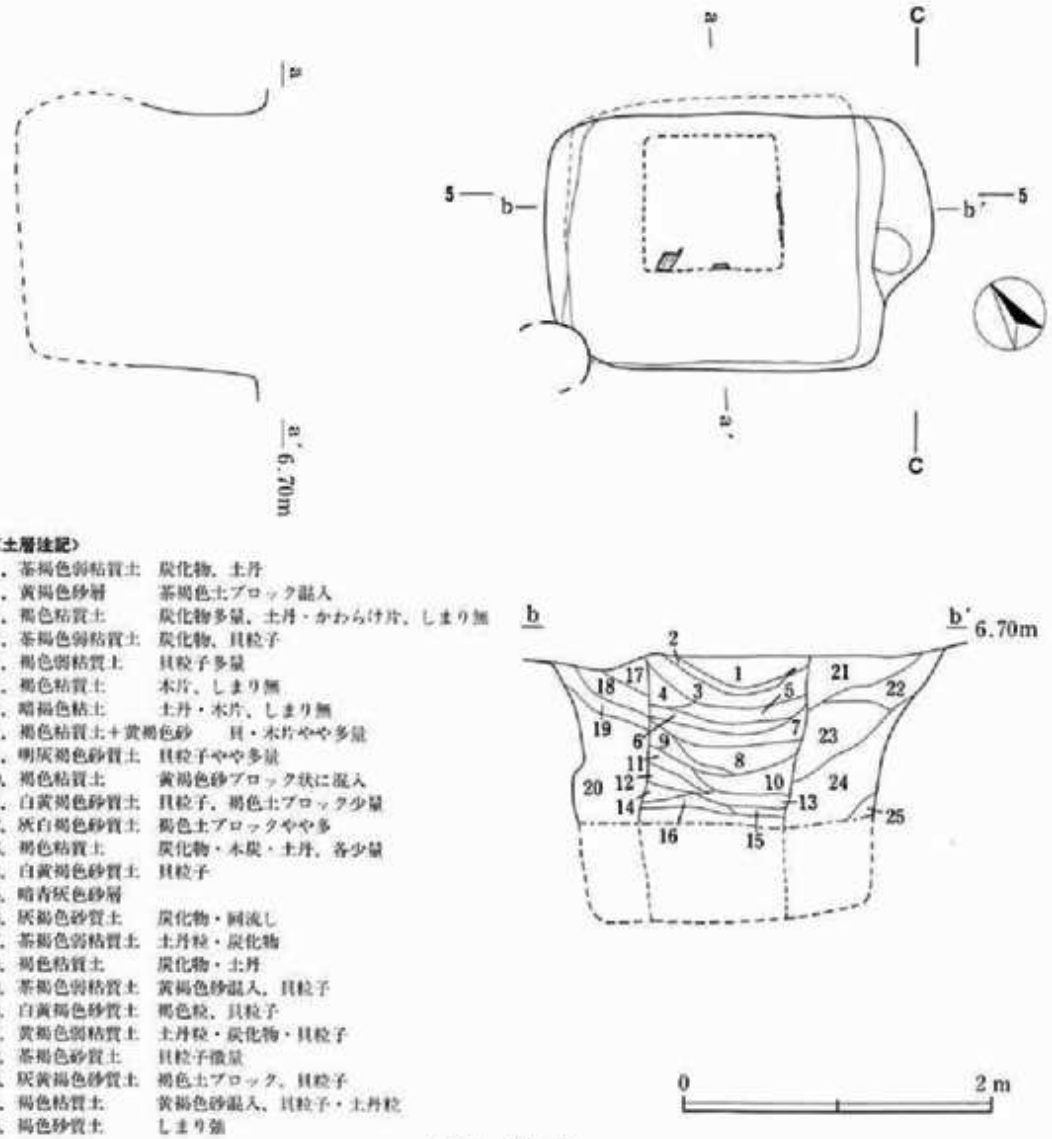
### 井戸４（図97）

B－５グリッドに位置する。確認標高6.65m。掘り方は東西2.2m、南北1.65mの規模をもつ隅丸方形である。確認面から1.1m下げたところで湧水がひどくなり、砂層を掘りぬいた壁の崩落の危険性が高く、以下の掘削は断念した。ピンポール探査による底面標高はおよそ4.8mである。北壁、西壁は一部ややオーバーハングして立ち上る。

掘り方内には一辺80cm程の井戸枠が据えられるが、掘削深度内ではほとんど遺存せず、構造等詳しい状況は不明である。

### 井戸４出土遺物（図97）

図97－１、２はかわらけ。１は底部糸きり、ロクロ成形の小皿、体部側面観は直線的である。２は手づくね成形の小皿。




〈土層注記〉

1．茶褐色弱粘質土　炭化物、土丹
2．黄褐色砂層　茶褐色土ブロック混入
3．褐色粘質土　炭化物多量、土丹・かわらけ片、しまり無
4．茶褐色弱粘質土　炭化物、貝粒子
5．褐色弱粘質土　貝粒子多量
6．褐色粘質土　木片、しまり無
7．暗褐色粘土　土丹・木片、しまり無
8．褐色粘質土＋黄褐色砂　貝・木片やや多量
9．明灰褐色砂質土　貝粒子やや多量
10．褐色粘質土　黄褐色砂ブロック状に混入
11．白黄褐色砂質土　貝粒子、褐色土ブロック少量
12．灰白褐色砂質土　褐色土ブロックやや多
13．褐色粘質土　炭化物・木炭・土丹、各少量
14．白黄褐色砂質土　貝粒子
15．暗青灰色砂層
16．灰褐色砂質土　炭化物・洪流し
17．茶褐色弱粘質土　土丹粒・炭化物
18．褐色粘質土　炭化物・土丹
19．茶褐色弱粘質土　黄褐色砂混入、貝粒子
20．白黄褐色砂質土　褐色粒、貝粒子
21．黄褐色弱粘質土　土丹粒・炭化物・貝粒子
22．茶褐色砂質土　貝粒子微量
23．灰黄褐色砂質土　褐色土ブロック、貝粒子
24．褐色粘質土　黄褐色砂混入、貝粒子・土丹粒
25．褐色砂質土　しまり強

図97　井戸４

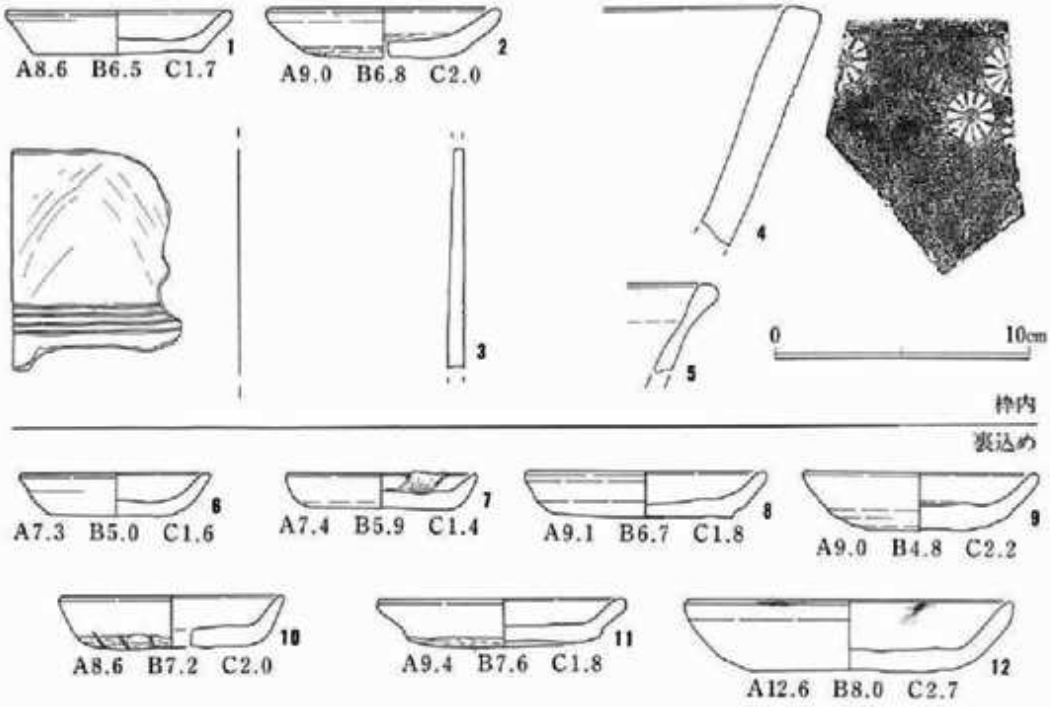



**図98　井戸4出土遺物**

3は漆器。円筒型容器になると思われる。復元胴部径17.7cm。外面に4本の沈線が巡り、内面には鉄分の沈殿物が付着する。黒漆が内外面に塗られ、破片ではあるが漆膜の損傷があまりない。

4は手焙り(瓦質)。胎土は黒色砂粒、赤褐色粒を多く含む、灰白色土。表面は黒色処理されよく磨かれる。外面口縁下には、径約2.0cm、花弁端が角張る菊花文スタンプが捺される。

5は山茶碗窯系捏鉢。口縁片。胎土は小石粒を多く含む、暗灰色弱粘質土。口縁端部は丸く仕上げられる。

6～12はかわらけ。1～9は底部糸きり、ロクロ成形の小皿。10、11は手づくね成形の小皿。12は底部糸きり、ロクロ成形の大皿。

**井戸5（図99）**

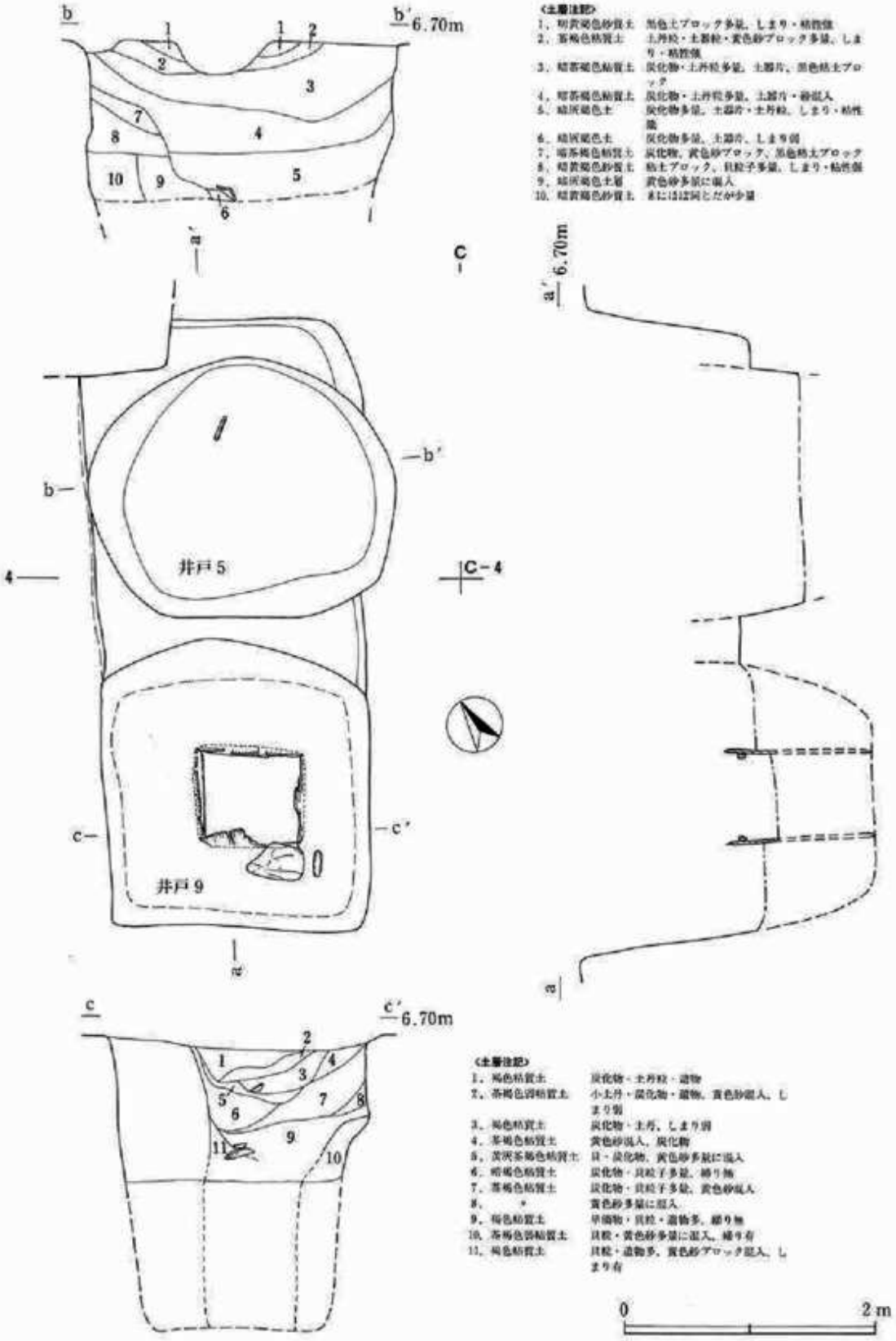
B－3グリッドに位置する。確認標高6.60m。掘り方は東西2.45m、南北2.05mの不整円形。深さは未掘の為不明。井戸9に伴うと思われる長方形土壙を切っている。井戸枠の残欠が一部確認されたが不詳である。

**井戸5出土遺物（図100）**

〈上層〉

図100－1、2はかわらけ。底部糸きり、ロクロ成形。

3は瀬戸四耳壺。口・頸部片。復元口径10.6cm、最大頸部径9.1cm。胎土はキメ細かい、明灰色粘質土。口縁は玉縁状となる。釉は淡茶色で薄く施釉される。




〈土層注記〉

| | | |
|---|---|---|
| 1. | 明黄褐色砂質土 | 黒色土ブロック多量、しまり・粘性強 |
| 2. | 茶褐色粘質土 | 土丹粒・土器粒・黄色砂ブロック多量、しまり・粘性強 |
| 3. | 暗茶褐色粘質土 | 炭化物・土丹粒多量、土器片、黒色粘土ブロック |
| 4. | 暗茶褐色粘質土 | 炭化物・土丹粒多量、土器片・砂混入 |
| 5. | 暗灰褐色土 | 炭化物多量、土器片・土丹粒、しまり・粘性強 |
| 6. | 暗灰褐色土 | 炭化物多量、土器片、しまり弱 |
| 7. | 暗茶褐色粘質土 | 炭化物、黄色砂ブロック、黒色粘土ブロック |
| 8. | 暗黄褐色砂質土 | 粘土ブロック、貝粒子多量、しまり・粘性弱 |
| 9. | 暗灰褐色土層 | 黄色砂多量に混入 |
| 10. | 暗黄褐色砂質土 | 8には同じだが少量 |

〈土層注記〉

| | | |
|---|---|---|
| 1. | 褐色粘質土 | 炭化物・土丹粒・遺物 |
| 2. | 茶褐色斑粘質土 | 小土丹・炭化物・遺物、黄色砂混入、しまり弱 |
| 3. | 褐色粘質土 | 炭化物・土丹、しまり弱 |
| 4. | 茶褐色粘質土 | 黄色砂混入、炭化物 |
| 5. | 黄灰茶褐色粘質土 | 貝・炭化物、黄色砂多量に混入 |
| 6. | 暗褐色粘質土 | 炭化物・貝粒子多量、締り無 |
| 7. | 茶褐色粘質土 | 炭化物・貝粒子多量、黄色砂混入 |
| 8. | 〃 | 黄色砂多量に混入 |
| 9. | 褐色粘質土 | 単個物・貝粒・遺物多、締り無 |
| 10. | 茶褐色斑粘質土 | 貝粒・黄色砂多量に混入、締り有 |
| 11. | 褐色粘質土 | 貝粒・遺物多、黄色砂ブロック混入、しまり有 |

図99　井戸5・9

4は山茶碗窯系捏鉢。口縁片。胎土は長石粒、小石粒を小量含む、明灰色良土。内外面からのナデにより、口縁端部が尖る感じになる。

〈下層〉

5～9はかわらけ。5～8は底部糸きり、ロクロ成形の小皿。9は手づくね成形の小皿。

10は白磁口兀碗。復元口径9.9cm。胎土は夾雑物を含まない、乳白色堅緻土。釉は白色。器壁は極めて薄く口縁部が外方に折れる。

11、12、15は山茶碗窯系捏鉢。11、12は口縁片。胎土に小石、砂粒を若干含む、暗灰色堅緻土。11は口縁部がナデによりやや薄くなる。12は口縁が若干玉縁状になる。15は長石粒を多く含む、灰色土。貼り付け高台で、断面は崩れた三角形を呈する。内面は剥離が著しい。

13、14は常滑甕口縁片。13は長石粒、砂粒を若干含む灰色土。口縁を折り曲げ、縁帯をつくる。14は小石を小量含む灰色土。口縁を大きく外方に曲げ、縁帯をつくる。

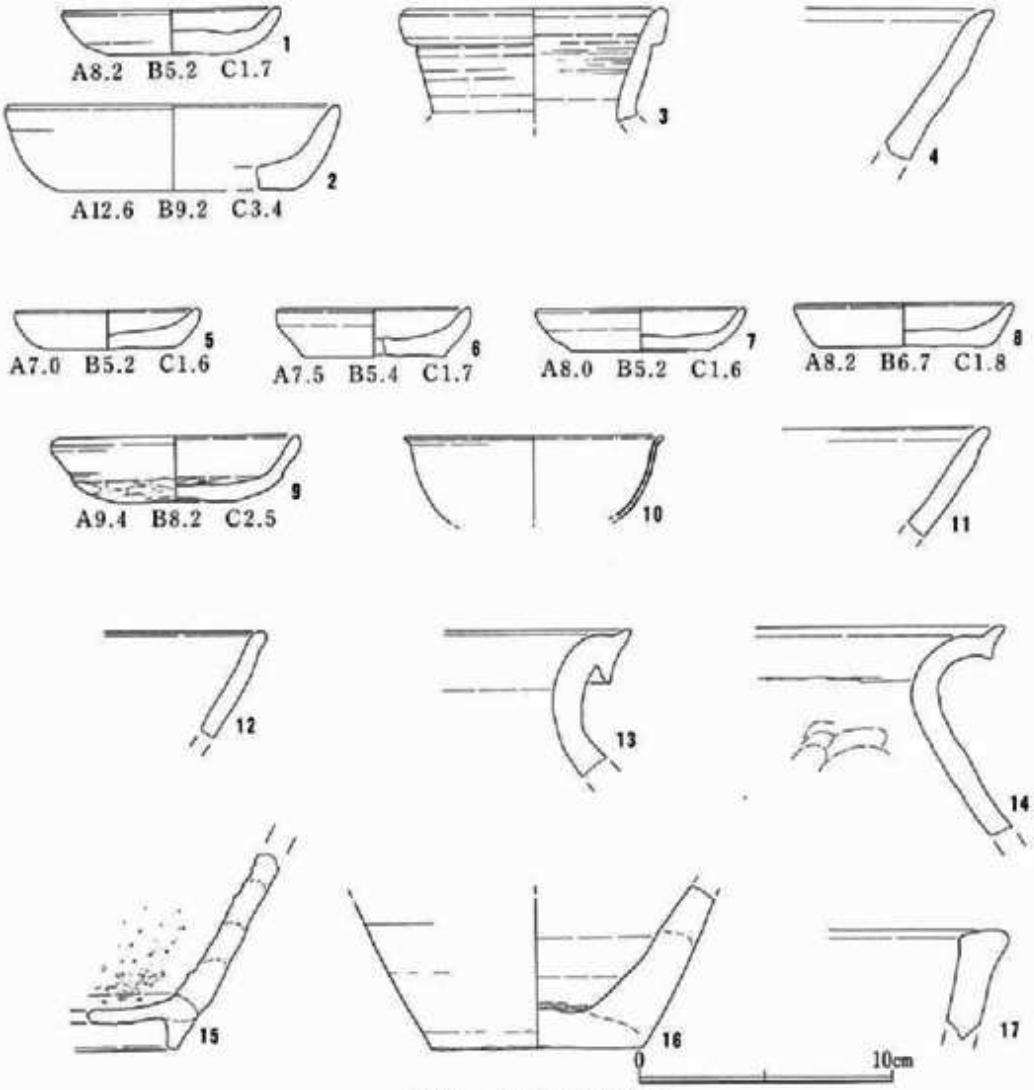



**図100　井戸5出土遺物**

16は渥美壺。底部片。復元底径8.2cm。胎土は白色砂粒を若干含む、黒褐色緻密土。

17は手焙り（瓦質）。口縁片。黒色砂粒を含むが、暗灰色精良土。

### 井戸6（図92）

A－3グリッドに位置する。井戸1に大きく切られ、僅かに掘り方の南部分を残すのみである。確認標高7.00m。深さ1.85m。遺物はかわらけの小片が出土しているが、図示できない。

### 井戸7（図102）

B－3グリッドに位置し、掘り方東辺を建物9に切られる。確認標高6.45m。掘り方規模は東西

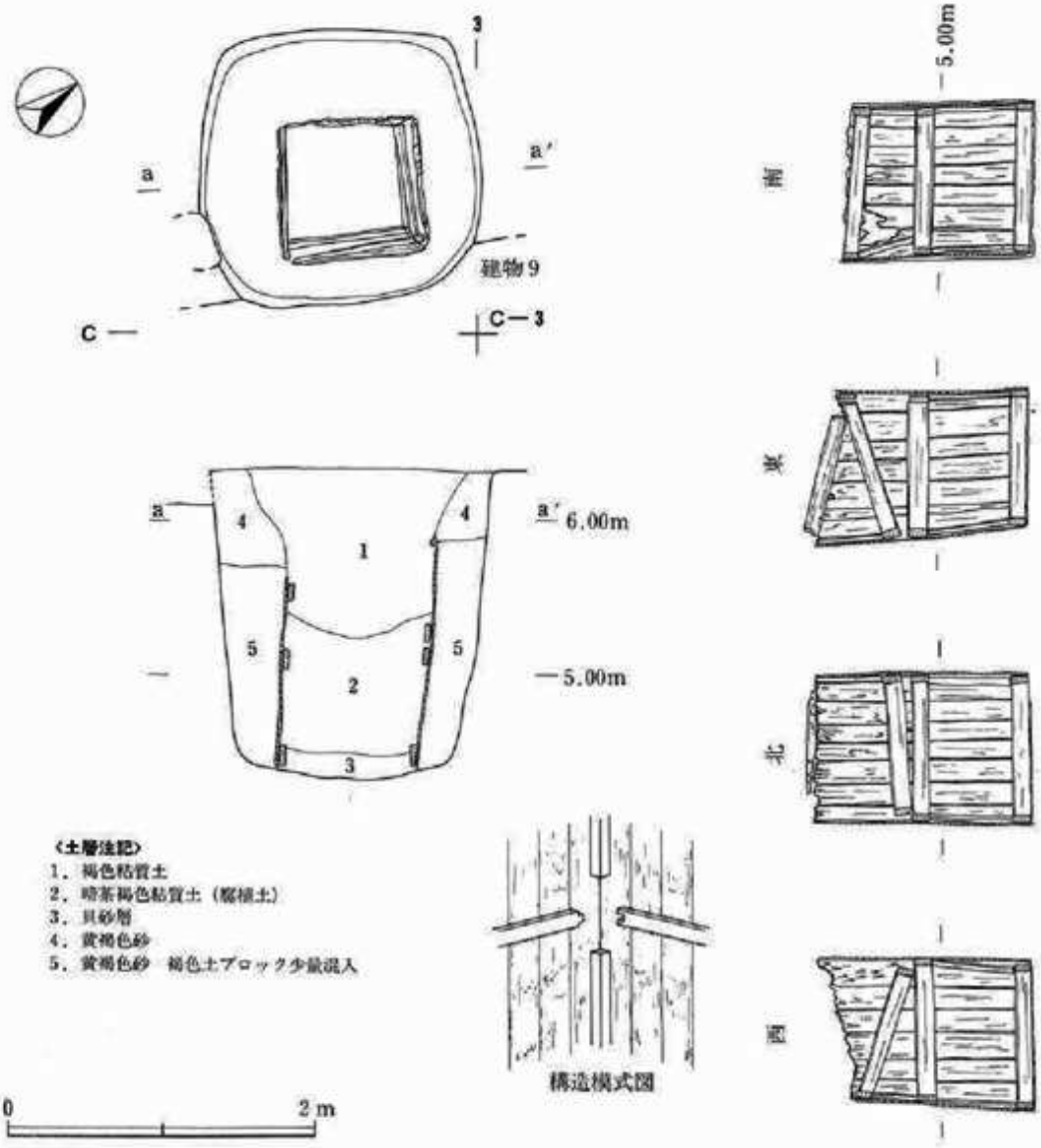



図101　井戸7

1.75m、南北1.8m、深さ1.95m。平面形状は隅丸方形を呈する。

掘り方内やや東寄りに、横桟支柱型の井戸枠が据えられる。井戸枠内法は一辺が約85cm。遺存状況の良い最下段で見ると、支柱は長さ54cmだが断面は一辺3～6cmで方形・長方形と一定しない。規格性には欠けるが転用とは思われない。横桟は幅12cm、厚さ5cm程の板状で、ほぞ組みされる。支柱と横桟は仕口の造作なくベタ付けで組み上げられる。側板は幅15cm前後、厚さ1.5cmで、東・西に6枚、南・北に7枚設置される。

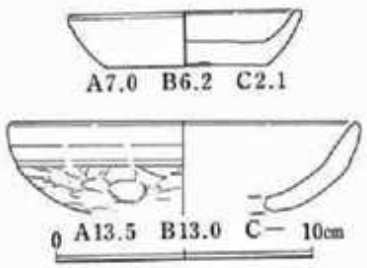


図102　井戸7出土遺物

**井戸7出土遺物（図101）**

図101－1、2はかわらけ。1は底部糸きり、ロクロ成形の小皿。2は手づくね成形の大皿。

**井戸8（図103）**

B－1グリッドに位置する。確認標高6.70m。道路遺構直下から検出された。東西2.0m、南北2.1mの隅丸方形で確認面からの深さ1.7mを測る。東壁は底部から緩やかな段をつくり直立する。掘り方内には井戸枠等は見られず、土層堆積からすると井戸というには疑問が残る。

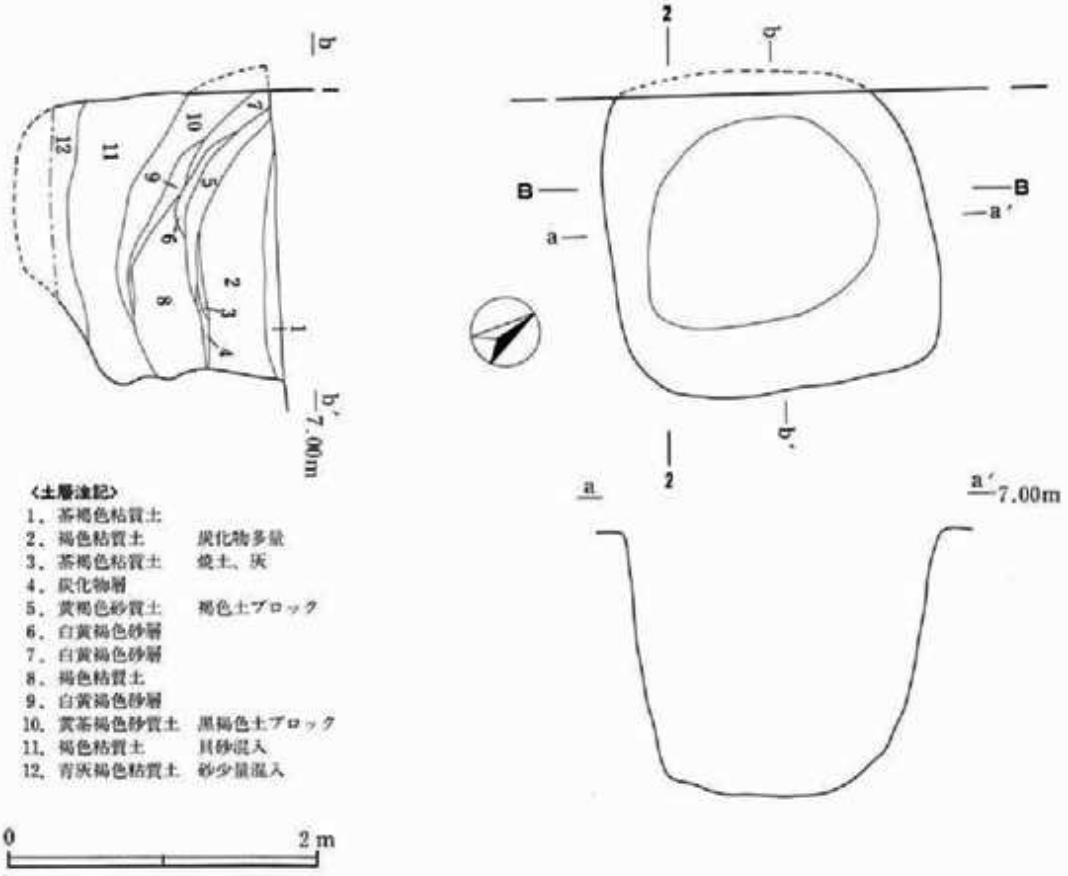


図103　井戸8

**井戸８出土遺物（図104）**

図104－１～９はかわらけ。全て手づくね成形。１～６は小皿。７～９は大皿。概ね薄手で器高が低く平底。なでによる稜は強くなく、口唇部が摘み上げられ断面三角形になるものが多い。本遺跡出土かわらけの中では最も古手に属すると思われる。９は内面に特異なナデ痕が顕著に見られる。

10、11は青磁碗。10の復元高台径は5.2cm、胎土は灰白色緻密土。釉は灰緑色で透明、畳付部外底部を除き施釉される。高台は削り出し。外底面に黒漆が付着する。11は内面に劃花文を配し、胎土は淡灰黄色緻密土。釉は黄緑色で透明、畳付部、外底面を除き薄く施釉される。

12は山茶碗窯系捏鉢口縁片。胎土は微砂粒、長石粒を含む灰色土。口縁がやや外方に反る。

13は常滑甕口縁片。胎土は砂粒、白色粒、鉄粉を含む暗橙色土。口縁を外方に引き出し口唇部を斜め外方に摘み上げ、縁帯を作っている。

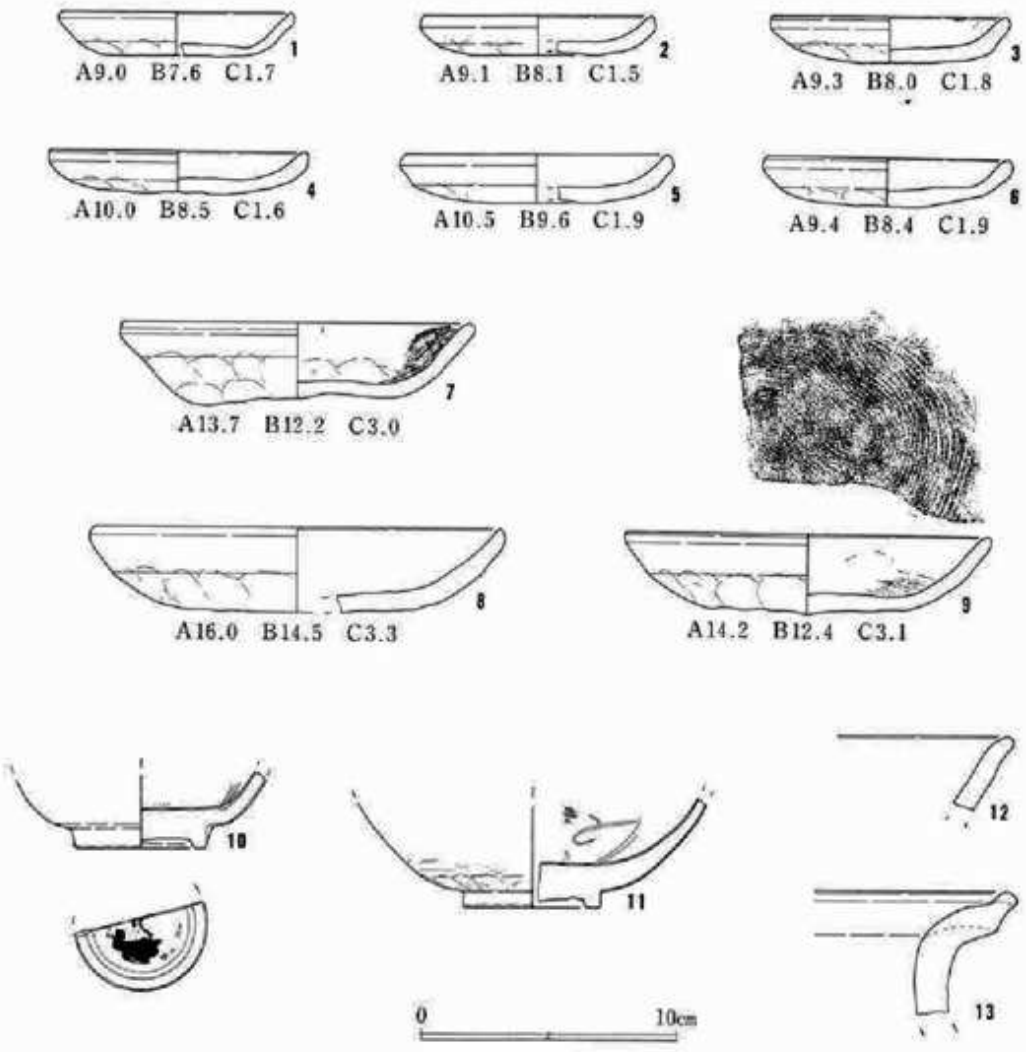



**図104　井戸８出土遺物**

**井戸９（図99）**

B－４グリッド、井戸５の南に位置する。確認標高6.80m。掘り方形状はほぼ方形。東西2.1mと、南北2.2mの規模を測る。この井戸も激しい湧水のため完掘していない。ピンポール探査による推定底面標高は4.2mほどである。

掘り方内ほぼ中央に、横桟支柱型の井戸枠が据えられる。井戸枠寸法は一辺が85cmを測る。

井戸９の北側には、その掘り方と寸分違わず辺を共有するように、長方形土壙がのびている。規模は井戸９掘り方北3.0m、幅2.1m、深さ0.8m程、断面箱型を呈し、井戸５に切られる。両者に新

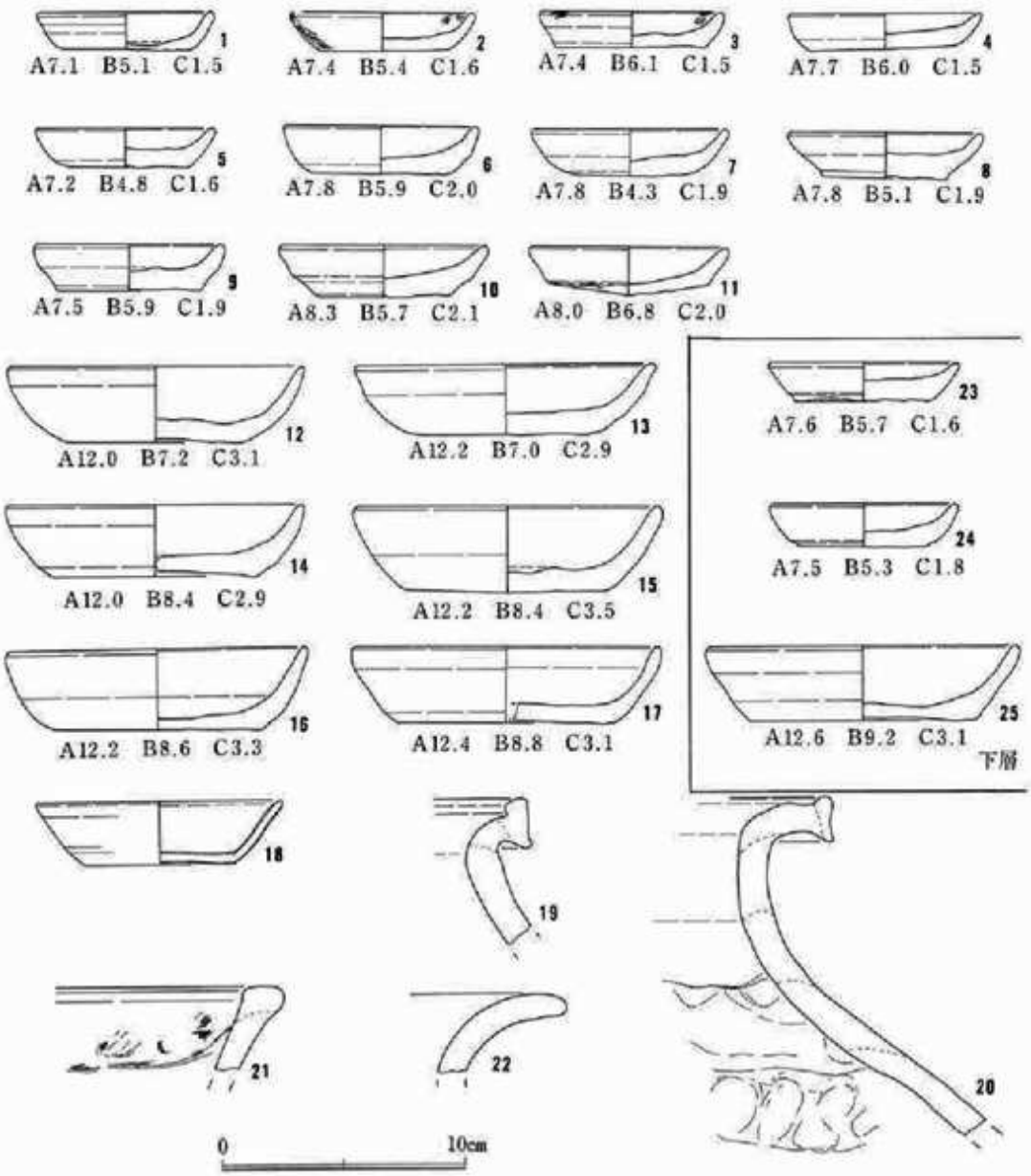



**図105　井戸９出土遺物**

旧関係は窺えず、何らかの関連をもってほぼ同時に掘られた可能性がある。

**井戸9出土遺物（図105）**

〈上層〉

図105－1～17はかわらけ。全て底部糸きり、ロクロ成形。1～11は小皿。12～17は大皿。

18は白磁口兀皿。復元口径10.0cm、底径6.1cm、器高2.6cm。胎土は夾雑物を含まない、淡茶白色緻密土。釉は灰白色で、底部の拭き取りが不完全である。

19、20は常滑甕。口縁片。19は胎土に砂粒、長石粒、石英粒をもつ、淡赤褐色粘質土。口縁を緩いN字に折り、口縁端部を上方に摘み上げ縁帯をつくる。縁帯幅1.8cm。20は灰色粘質土、夾雑物は21と類似する。

21は手焙り（土器質）。口縁片。胎土は砂粒、白色粒、赤褐色粒を含む、淡橙色粗土。外面に指頭痕、内面には微かなスス痕がみられる。口縁端部を平坦に仕上げている。

22は渥美甕。口縁片。胎土は粘性の強い、灰色精良土。黒褐色の釉を薄くハケ塗りしている。

〈下層〉

23～25はかわらけ。3点とも底部糸きり、ロクロ成形。23、24は小皿。23は体部がクサビ型を呈する。25は大皿。口縁断面がやや三角形を呈する。

**井戸10（図106）**

D－4グリッドに位置する。建物1・dの南西部石敷下より検出された。掘り方は隅丸方形で、東西1.95m、南北1.9mを測る。

掘り方内北寄りに、横桟支柱型の井戸枠が据えられる。井戸枠は一辺約80cmの方形。支柱は5cm角、長さ45cm。横桟は4×5cm、ほぞ組みで三段が遺存する。底面標高は4.25mを測る。

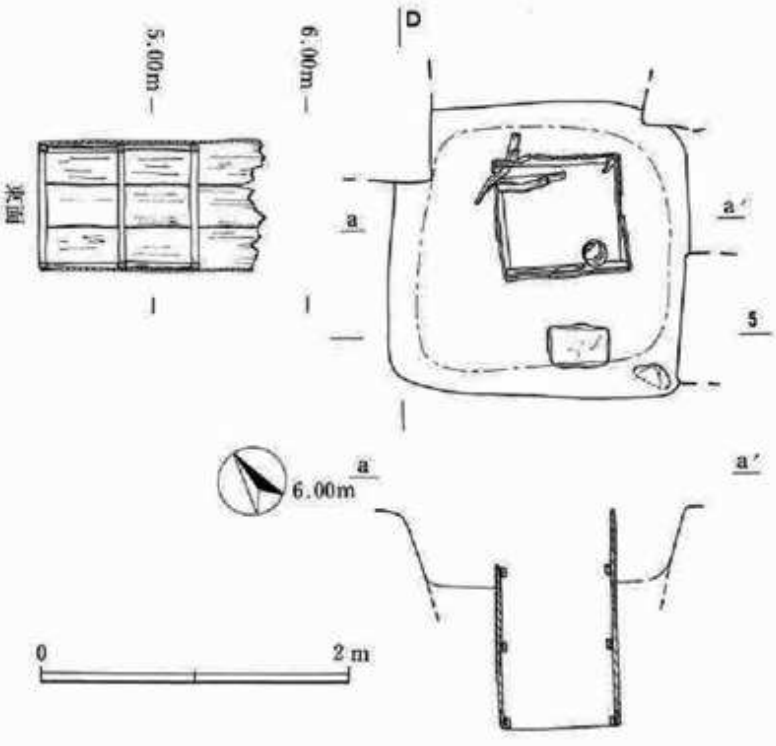



図106　井戸10

**井戸10出土遺物（図107）**

図107－1～7はかわらけ。1、2は底部糸きり、ロクロ成形の小皿。3は手づくね成形の小皿。4～6は底部糸きり、ロクロ成形の大皿。

7は漆器無文碗。口径

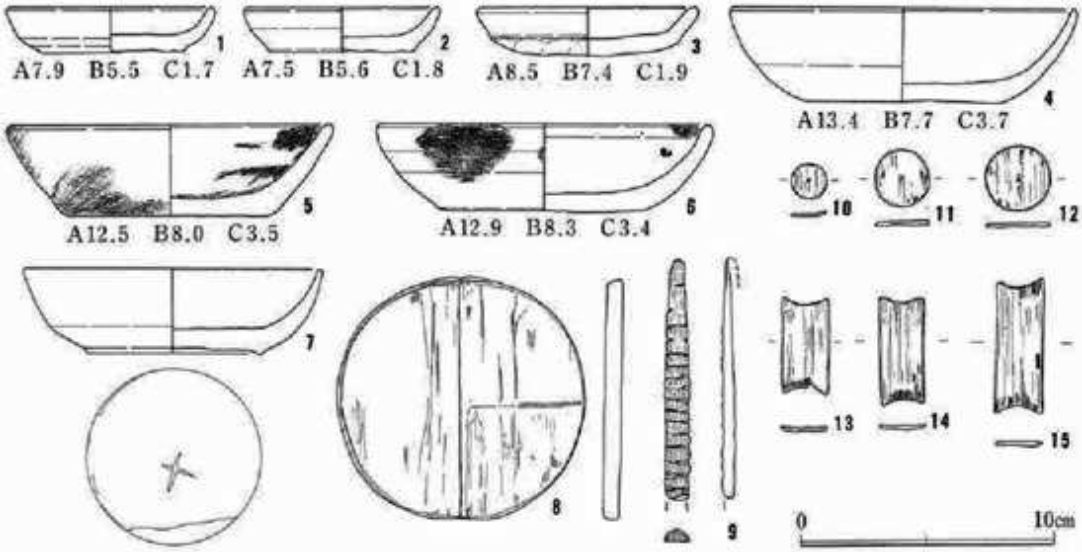



図107　井戸10出土遺物

11.6cm、底径6.9cm、口径3.3cm。漆との媒体は墨を使用している。外底部に十字状の刻印がみられる。

8は木製品。曲げ物の底部か？径約9.6cm、厚さ0.7cm。木質は硬質、側面にススが付着する。

9～15は木製品。用途不明品。9は、長さ9.4cm以上、幅0.9cm、厚さ0.4cmの断面半円の木の片面に0.5cm間隔で切り込みを入れたもの。10～12は大、中、小の円盤状製品。中央に孔が開く。多数出土しており、ヒゴ？に通して複数枚重なるものもあった。13～15は厚みが0.1cm、両端を弧状に切り込んだもの。これも多く出ているが、長さ、幅は必ずしも一定ではない。

**井戸11（図108）**

G－4グリッドに位置する。確認標高7.35m。土丹積みの近世井戸である。掘り方は楕円形で、東西1.9m、南北1.9mを測る。

掘り方北西寄りに井戸本体が据えられている。土丹と石を円筒状に積み上げたもので、下段は未調整の土丹と伊豆石が粗雑に積み上げられているが、上段は土丹を丁寧に整形し、内側をほぼ真円に造っている。井戸の上部内径は70cm、底部内径43cm、深さ2.20mを測る。

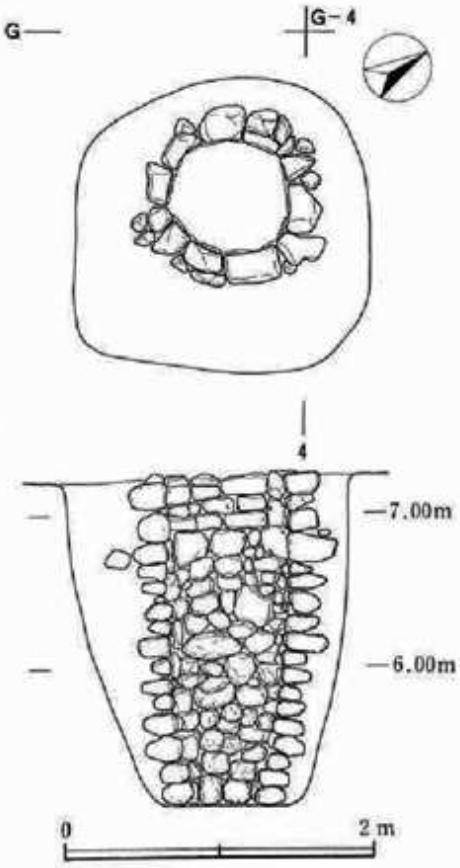



図108　井戸11

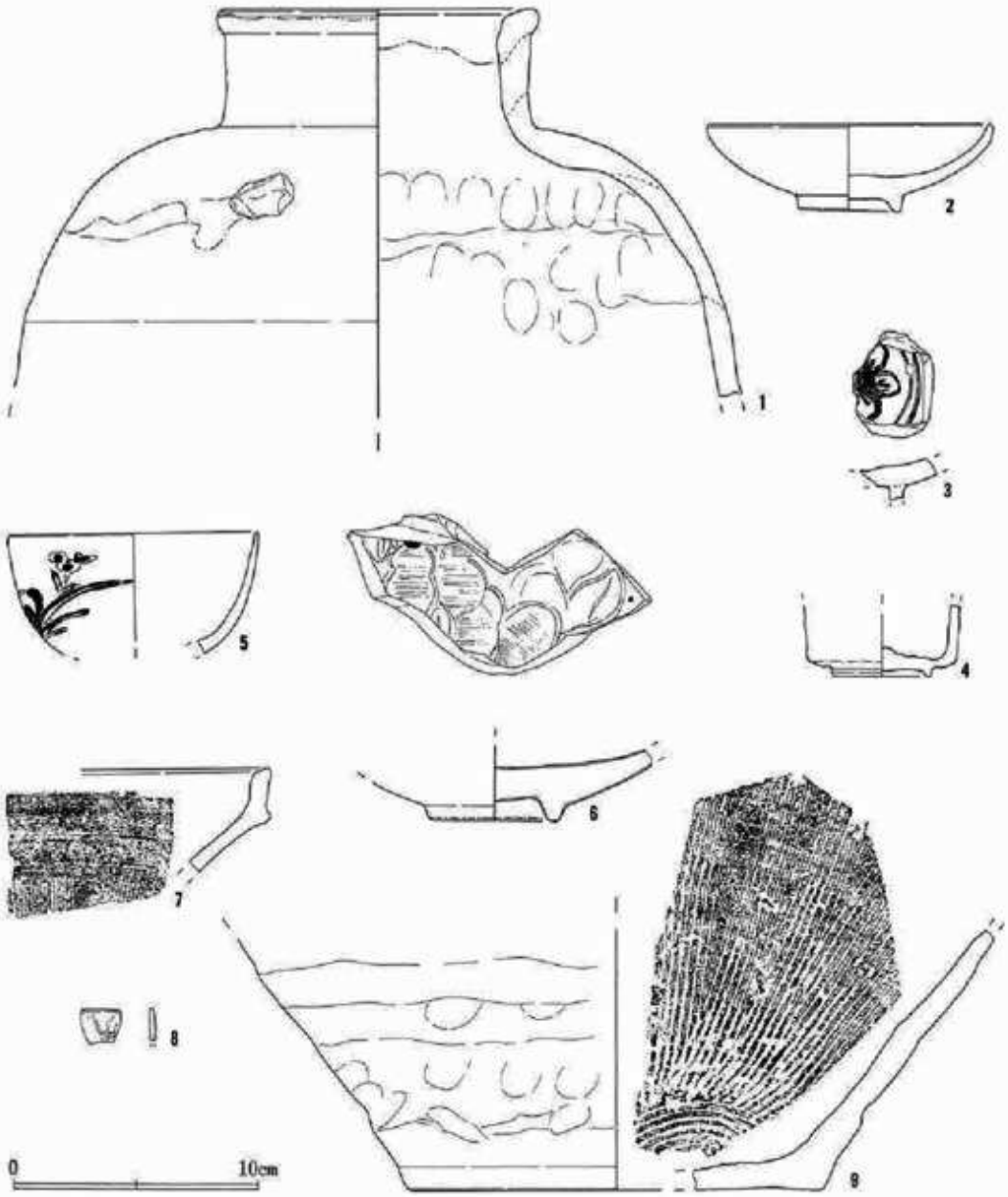



図109　井戸11出土遺物

**井戸11出土遺物（図109）**

図109－1は井戸底より出土した備前壺。復元口径12.7cm。胎土は砂粒、白色粒を含むが粘性に富む淡灰色土。口縁付近と肩部に緑黄色の降灰が見られる。

2は唐津系青緑釉皿。口径11.5cm、高台径4.2cm、器高3.5cm。胎土はきめ細かい茶白色土。青緑色の釉は口縁外側から内面に掛けられ、内底は蛇の目状に釉ハギしている。

3は瀬戸美濃系長石釉皿。内面に鉄絵で花文が描かれ、長石釉が厚く掛けられる。胎土は淡黄白色で締まりがない。

4は高台径4.0cm。胎土は黄白色で若干の微砂粒を含む。外面に掛けられた黄白色の釉は下端高台脇で削りとられる。内底にロクロ目がはっきり残る。高台は貼り付け。

5は染付碗。口径10.2cm。胎土は白色磁質。3ヵ所に描かれた草花（水仙？）は藍色に発色する。

6は青磁鉢底部。高台径5.3cm。胎土は灰白色で粘質。釉は淡青緑色。内面に牡丹文。中世。

7・9は摺り鉢。信楽か。復元底径17.2cm。胎土は砂粒、長石を多く含むがきめ細かく粘性がある。色調明茶色。

**井戸状遺構（図111）**

C－2グリッドに位置する。確認標高6.65m。建物9、掘立柱建物1に切られる。掘り方は隅丸方形で、東西3.2m、南北3.1m、深さ1.6mを測る。底部は東半分が平坦で略長方形を呈し、西半分が西壁中程より緩やかに下がっている。中間の平場が崩落したような形状である。湧水が激しく完掘できなかったが、部分トレンチにより全体の形状を掴んだ。土層の堆積状況等から見て、井戸と

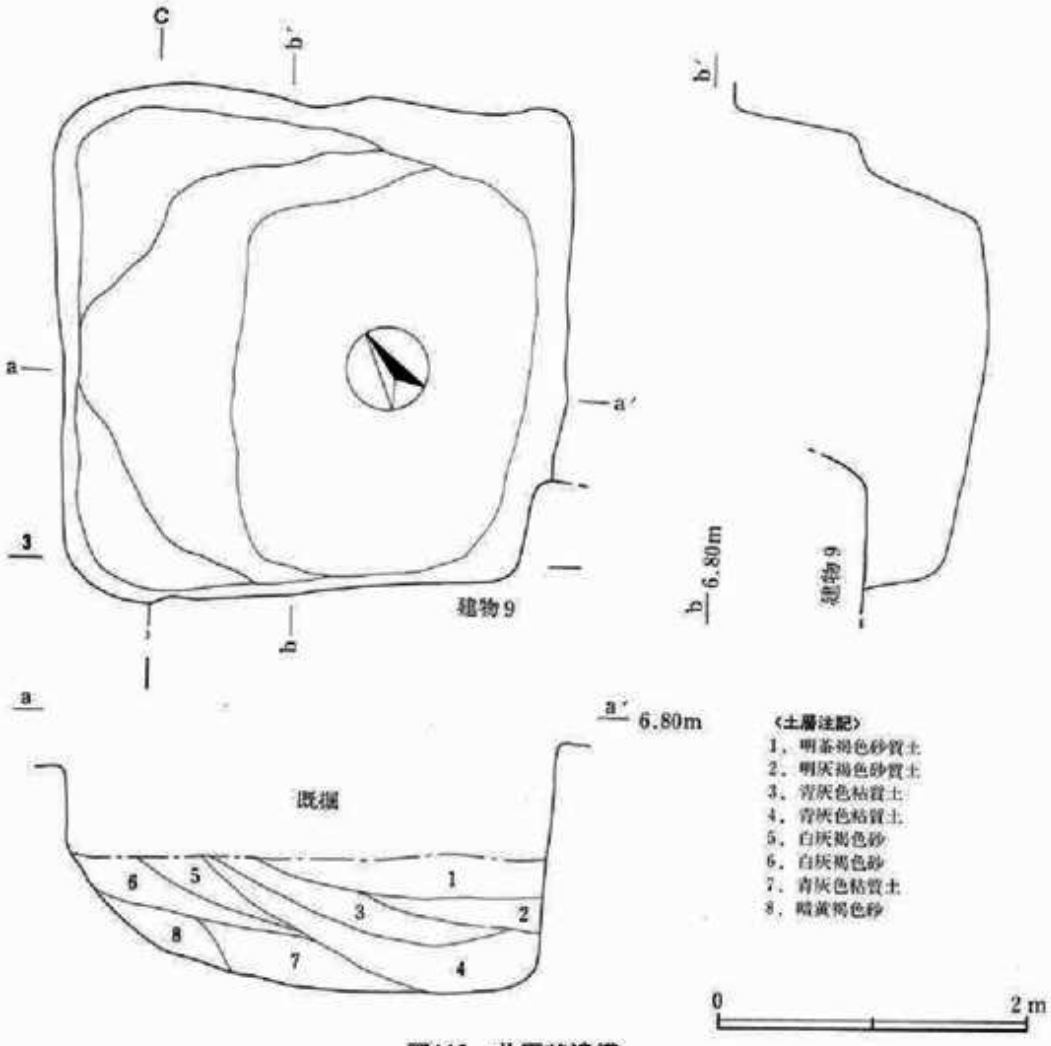



**図110　井戸状遺構**

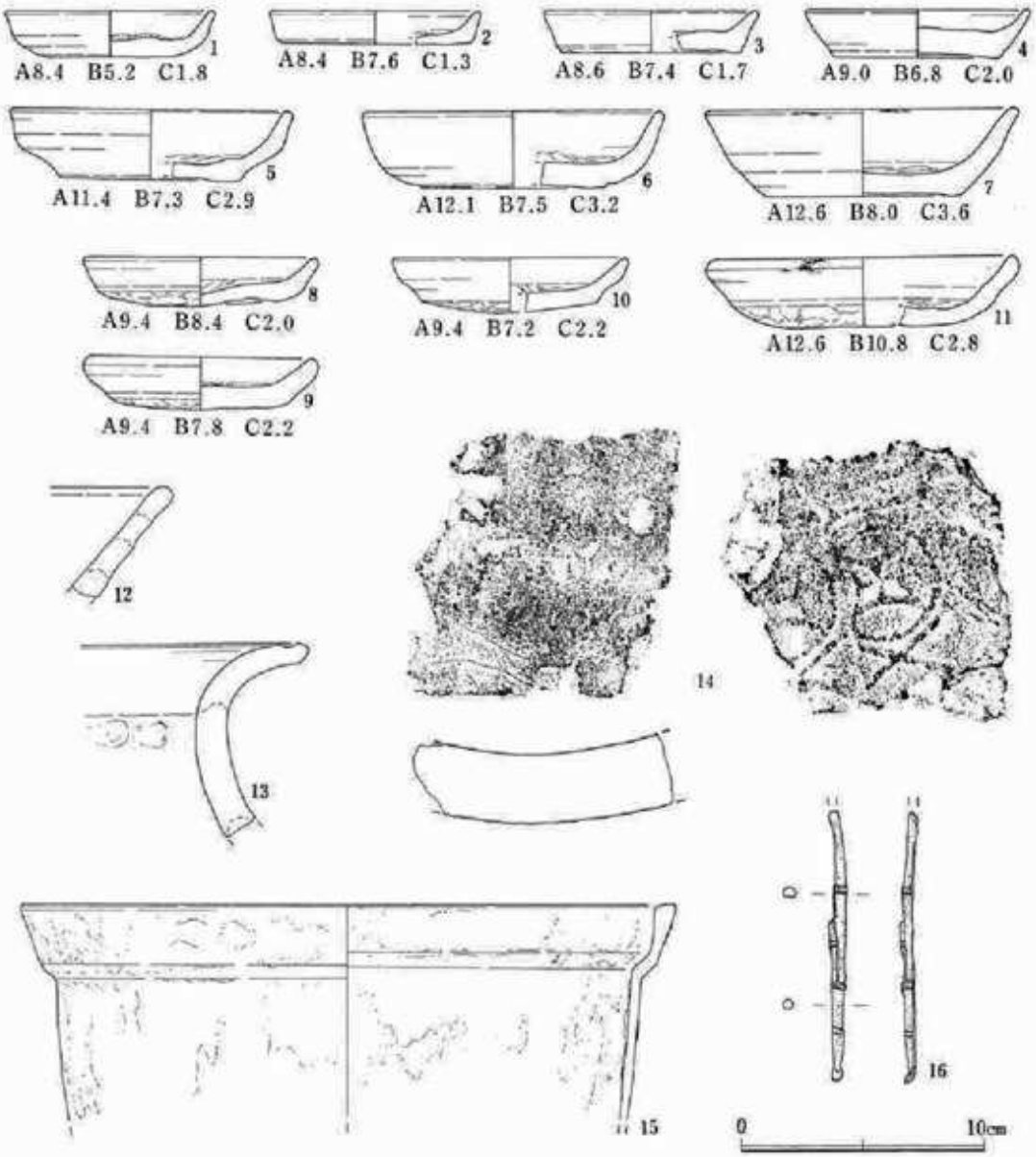



**図111　井戸状遺構出土遺物**

しては疑わしいものである。

**井戸状遺構出土遺物（図111）**

図111－1～11はかわらけ。1～7はロクロ成形。小皿では、1は体部がやや丸みをもつが、他は短く直線的に外傾。厚さにバラツキがある。5は復元径に不安がある。8～11はてづくね成形。やや厚手。

12は山茶碗窯系捏鉢。口縁は若干薄くなり、端部はほぼ丸く収められる。胎土は砂粒、白色粒を含む明灰色土。

13は常滑甕。口縁は大きく緩やかに外反し、端部上面に幅の広い沈線が巡る。胎土は灰褐色で砂礫を含む。口縁内外および肩部に灰白色の自然降灰が見られる。

14は女瓦。凹面には模骨痕とナデ、凸面には斜格子と内行花文状の文様を組み合わせた叩き目が施される。胎土は小石、砂粒をやや多く含み、気孔をもつガサついた土。色調は灰白色だが、再火のためか一部淡く煤けている。厚さ2.8cm。

15は鉄鍋。約4分の1が遺存。復元口径25.2cm、口縁部厚さ0.9cm、下端部厚さ0.3cm。本遺構を切っている建物9からも破片が出土したが、同一個体と思われたので合成した。

16は骨製品。耳掻きである。残存長10.9cm。竹を意匠し、節や小枝などを削りだしている。表面はよく研磨され光沢がある。

## F）土壙

土壙は約60基を検出したが、土層が明瞭でなかった上層では、遺構として不確実なものを掘り上げてしまった可能性も否めない。土壙40迄は上層（方形竪穴主検出面）で、土壙41以降は地山1（黒褐色粘質土）上面で確認されたものである。

**土壙1（図112）**　B－1に位置する。長径190cm、短径90cm、深さ25cm。複数の土壙が切り合っている可能性がある。

**土壙3（図112）**　E－2。長径150cm、短径100cm、深さ50cm。北側に土丹塊、鎌倉石が投げ込まれている。

**土壙4（図112）**　B－1。調査区北壁にかかり、土壙1に切られる。

**土壙6（図112）**　C－4。長径80cm、短径70cm、深さ15cm。

**土壙7（図112）**　C－3。長径75cm、短径70cm、深さ20cm。底部に土丹と鎌倉石を据える。

**土壙9（図112）**　C－4。長径80cm、短径75cm、深さ20cm。

**土壙10（図113）**　C－5。撹乱壙に切られる。長径55cm以上、短径50cm、深さ15cm。

**土壙11（図113）**　C－5。調査区南壁にかかる。長径90cm以上、短径65cm、深さ20cm。

**土壙12（図113）**　C－5。試掘壙に切られる。長径90cm以上、短径65cm、深さ15cm。

**土壙13（図113）**　B－5。撹乱壙、切石列2に切られる。長径95cm以上、短径80cm以上、深さ15cm。底部付近に土丹小塊が散在する。

**土壙15（図113）**　B－4。北東に散かれた土丹を切る。長径190cm、短径130cm、深さ20cmの不整形土壙である。

**土壙16（図114）**　C・D間4ライン上に位置。長径75cm、短径60cm、深さ25cm。覆土には粒径の小さな土丹塊が充塡されていた。

**土壙18（図114）**　B－4。溝3に東接する。長径70cm、短径65cm、深さ30cmの隅丸方形土壙。

**土壙20（図114）**　A－4。溝3に西接する。長径80cm、短径60cm、深さ20cm。

**土壙22（図114）**　A－1。調査区西壁にかかる。長径80cm、短径50cm以上、深さ25cm。

**土壙23（図114）**　C・D間4ライン上。長径65cm、短径55cm、深さ15cm。

**土壙24・25・26（図114）**　C－2。径50cm程の同規模の土壙が1か所で切り合う。新旧は24＞25＞26の順。土壙26中央には伊豆石が据えられていた。

**土壙29（図115）**　B－2・3。井戸2に切られ、土壙30を切る。形状は略長方形で、長軸360cm、短軸170cm、深さ75cmを測る。覆土は多くの方形竪穴と同様に大小の土丹塊で充塡される。多数の井戸に囲まれており、水利との関連を推測させる。

**土壙30（図115）**　B－2。井戸2、土壙29に切られる。井戸2を掘り過ぎた可能性もある。

**土壙31（図116）**　E－3。建物1b北壁を切る。長径175cm、短径120cm、深さ35cm。覆土は殆ど

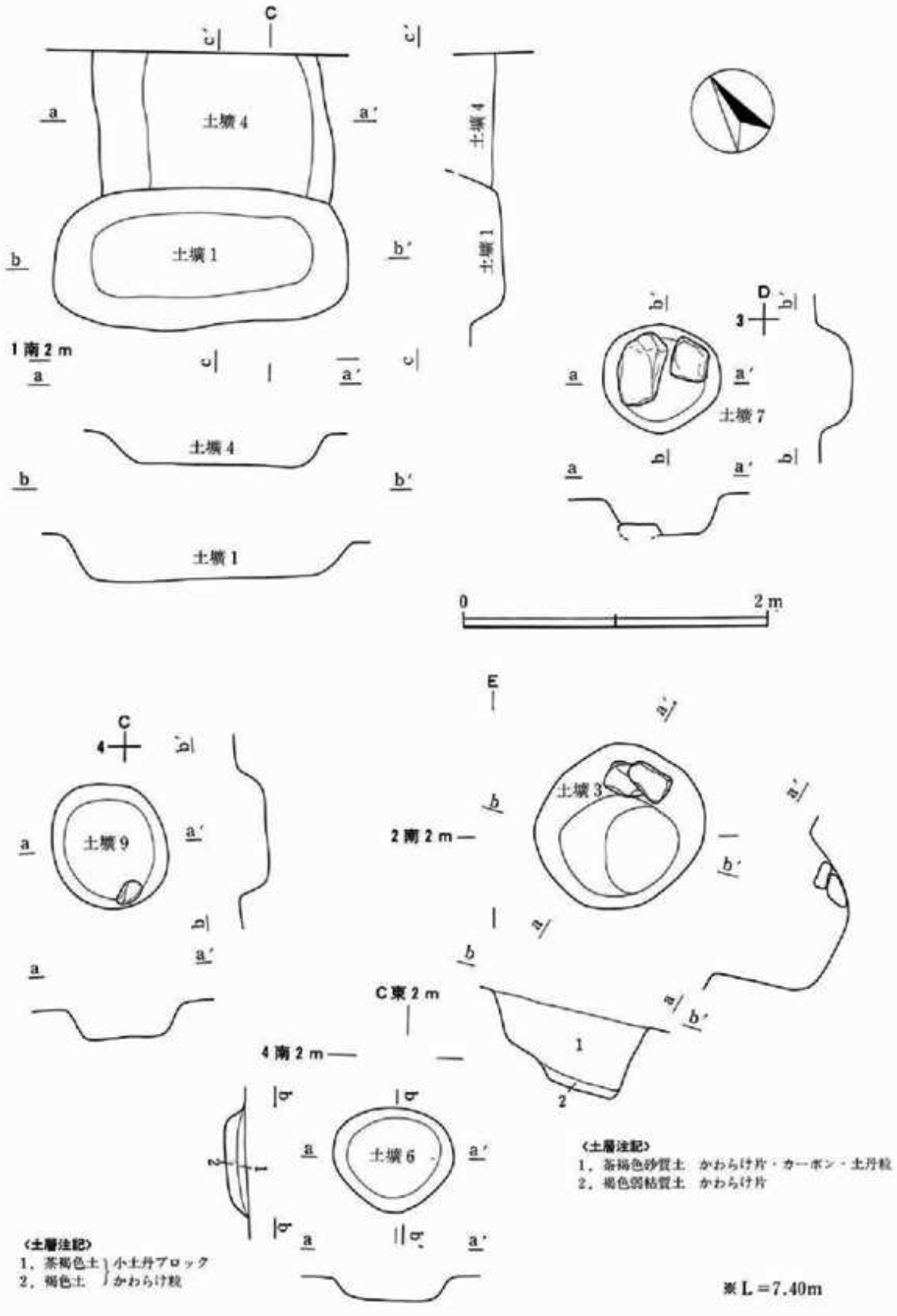



図112　土壙1・3・4・6・7・9

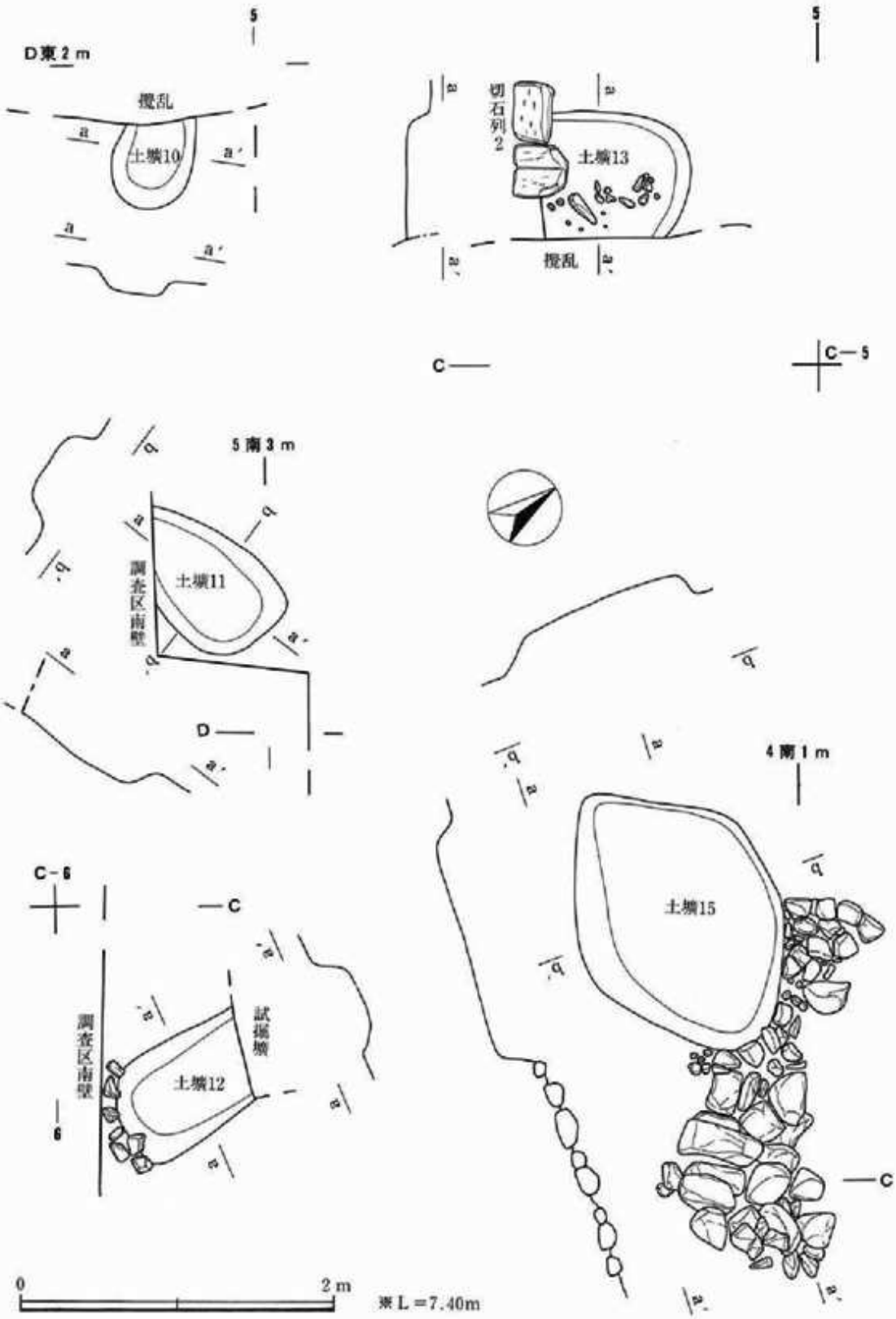



図113　土壙10・11・12・13・15

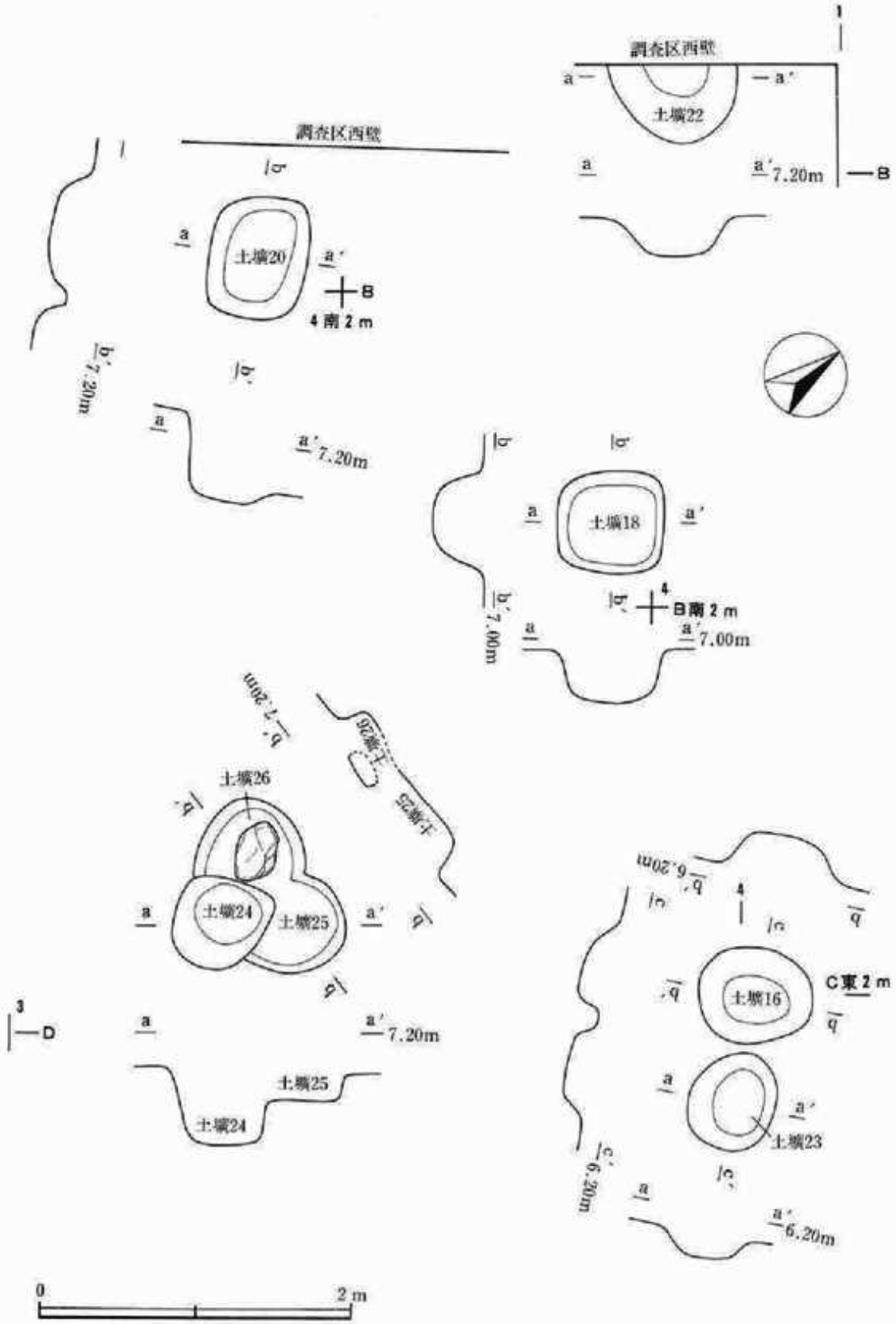



図114　土壙16・18・20・22・23・24・25・26

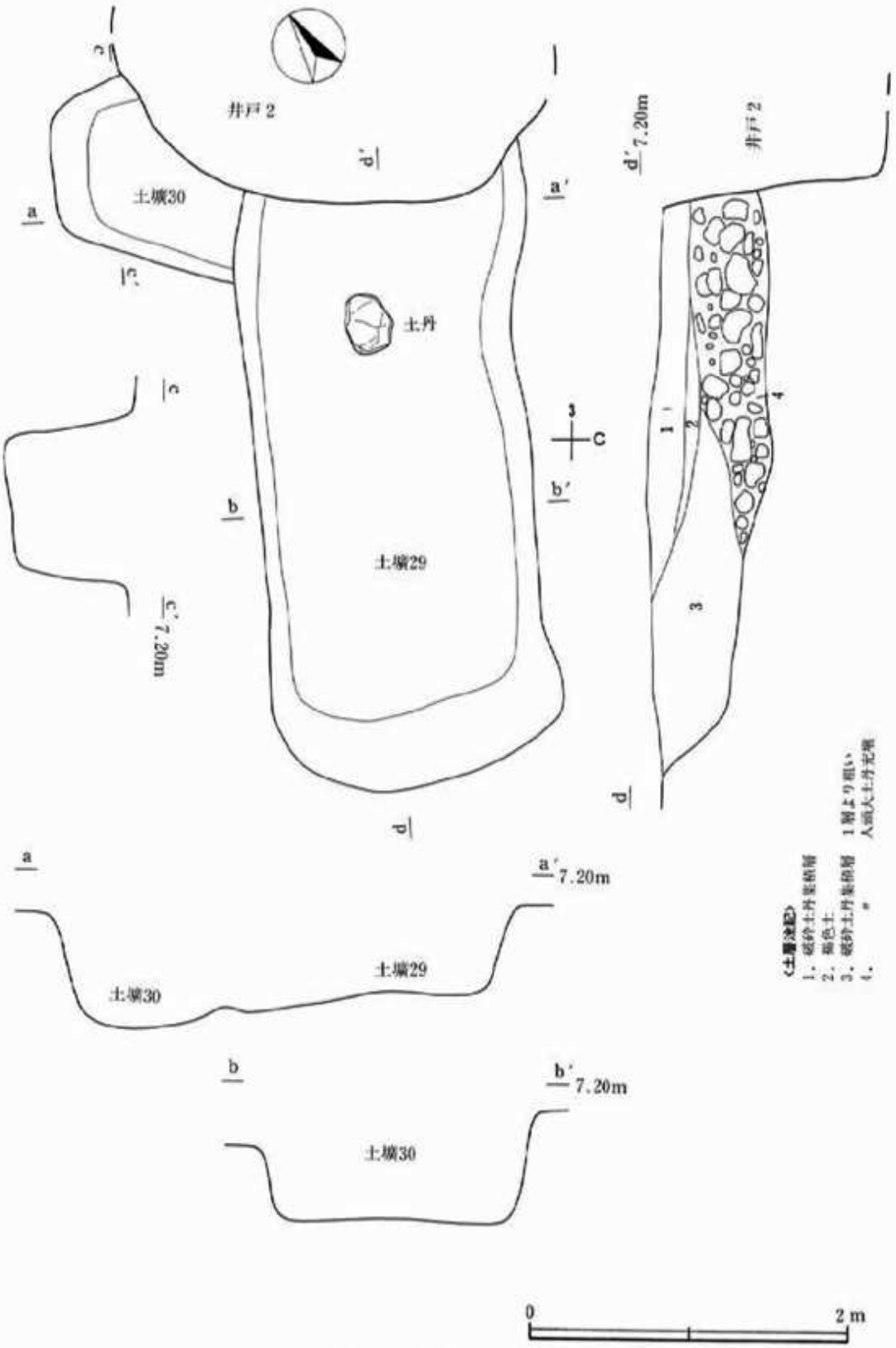
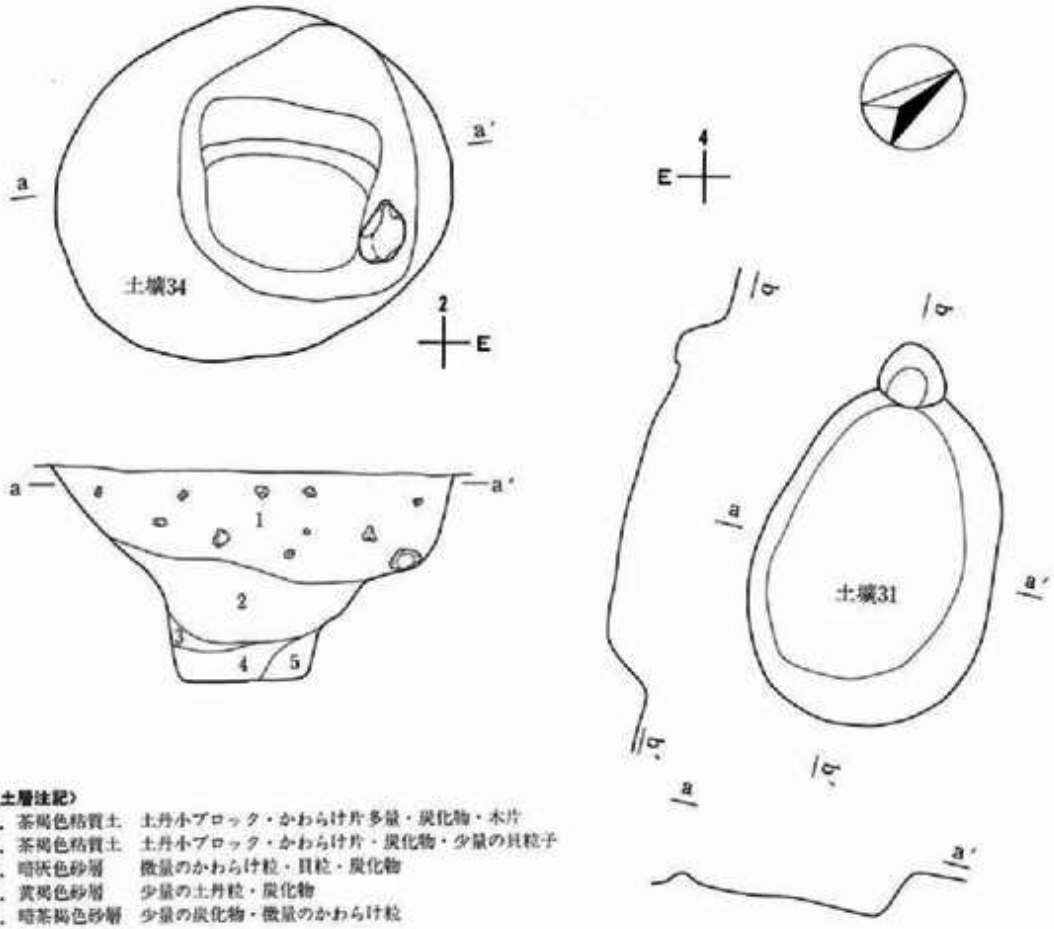

井戸2
土壙30
土丹
土壙29
a
a'
b
b'
c
c'
d
d'
7.20m
3
C
1
2
3
4
〈土層途記〉
1. 破砕土丹集積層
2. 褐色土
3. 破砕土丹集積層　1層より粗い
4. 〃　人頭大土丹充填
0
2 m

図115　土壙29・30




〈土層注記〉
1．茶褐色粘質土　土丹小ブロック・かわらけ片多量・炭化物・木片
2．茶褐色粘質土　土丹小ブロック・かわらけ片・炭化物・少量の貝粒子
3．暗灰色砂層　微量のかわらけ粒・貝粒・炭化物
4．黄褐色砂層　少量の土丹粒・炭化物
5．暗茶褐色砂層　少量の炭化物・微量のかわらけ粒

図116　土壙31・34・35・36

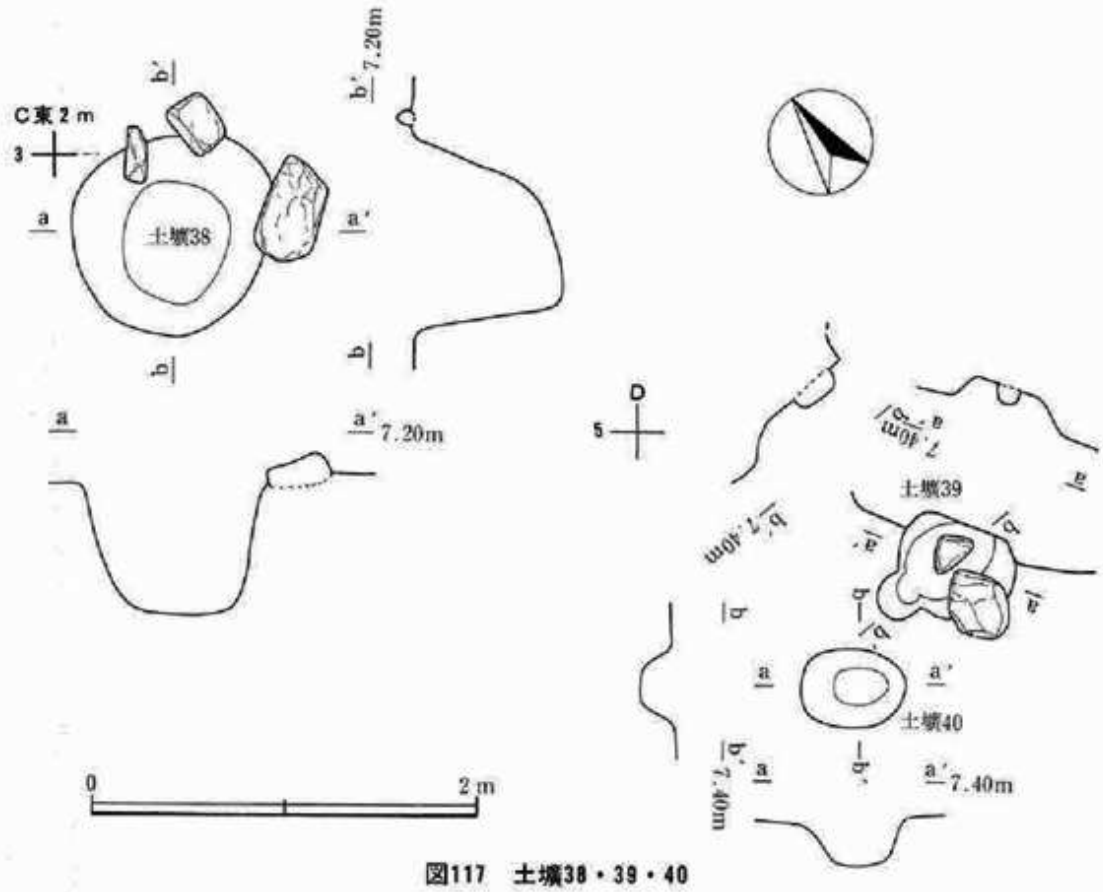



図117　土壙38・39・40

指頭大土丹粒で充填されていた。

**土壙34（図116）**　D－2。土壙35、道路1側溝1を切る。上面は長径205cm、短径180cmの楕円形だが中間に段差をもち、底面は65cm×40cmの長方形を呈する。深さ105cm。

**土壙35（図116）**　D・E－2。土壙34に切られる。径150cm、深さ100cm。

**土壙36（図116）**　E－3。長径90cm、短径65cm、深さ30cm。

**土壙38（図117）**　C－3。径100cmの略円形、深さ65cm。

**土壙39・40（図117）**　D－5。土壙39は北辺を建物1bに切られる。径60cm程、深さ15cm。底面に土丹が据えられている。土壙40は長径55cm、短径40cm、深さ20cm。

**土壙41・43（図118）**　B－4。土壙41は土壙43と井戸9を切っている。長径302cm、短径85cm、深さ15cm。土壙43は土壙41に切られ、建物12を切っている。長径225cm、短径170cm、深さ50cm。

**土壙45（図118）**　2・3間Dライン上に位置。径118cm、深さ20cm。

**土壙46（図118）**　B－4。井戸4に切られる。確認径90cm、深さ97cm。

**土壙47（図119）**　B－4。井戸9に切られる。長辺180cm、短辺120cm、深さ90cm。

**土壙48（図119）**　A－2。調査区西壁にかかる。径80cm、深さ65cm。

**土壙49（図119）**　C－2交点に位置。井戸2に切られ、道路1下から検出された。長径275cm、

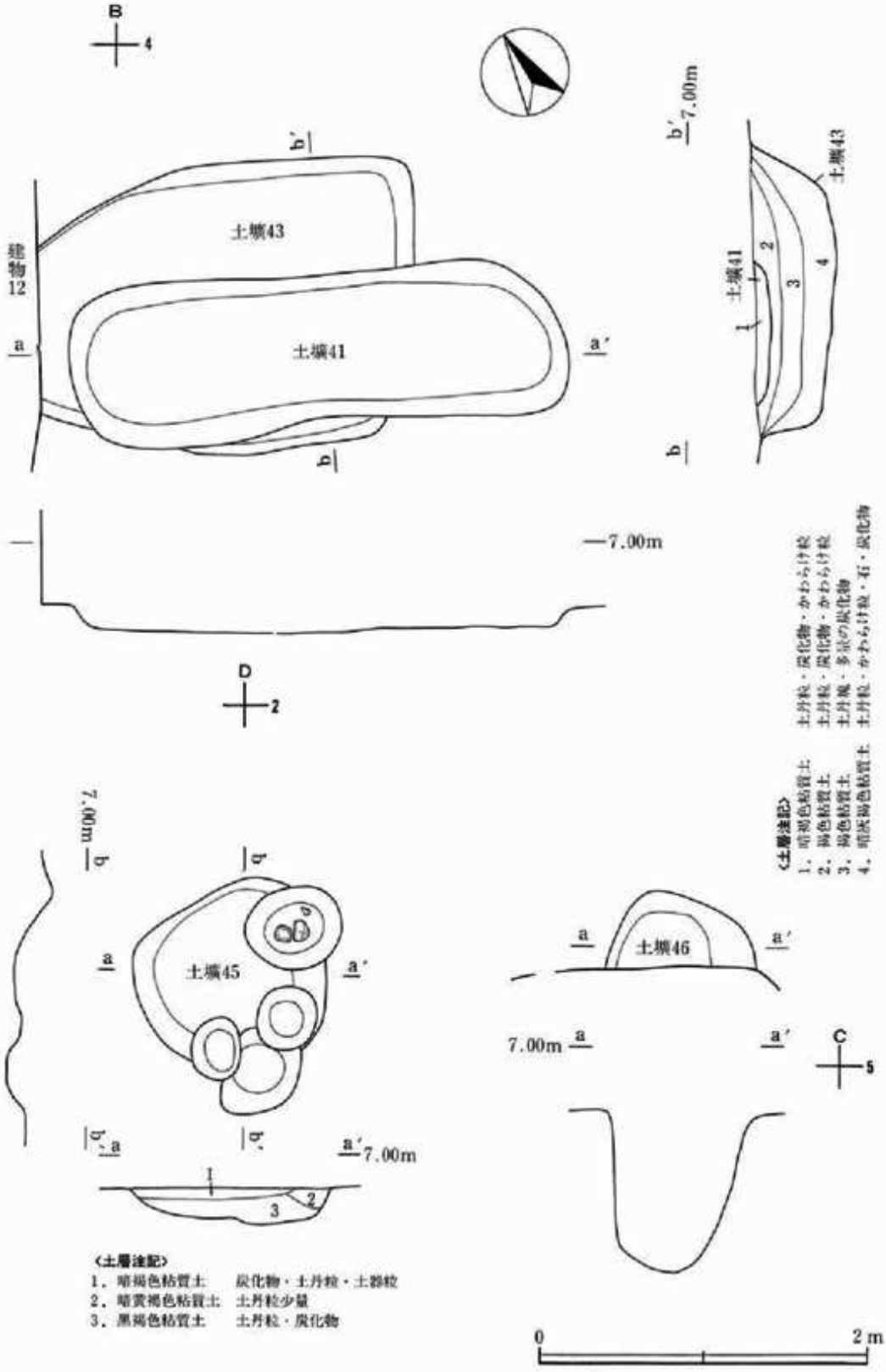



**図118　土壙41・43・45・46**

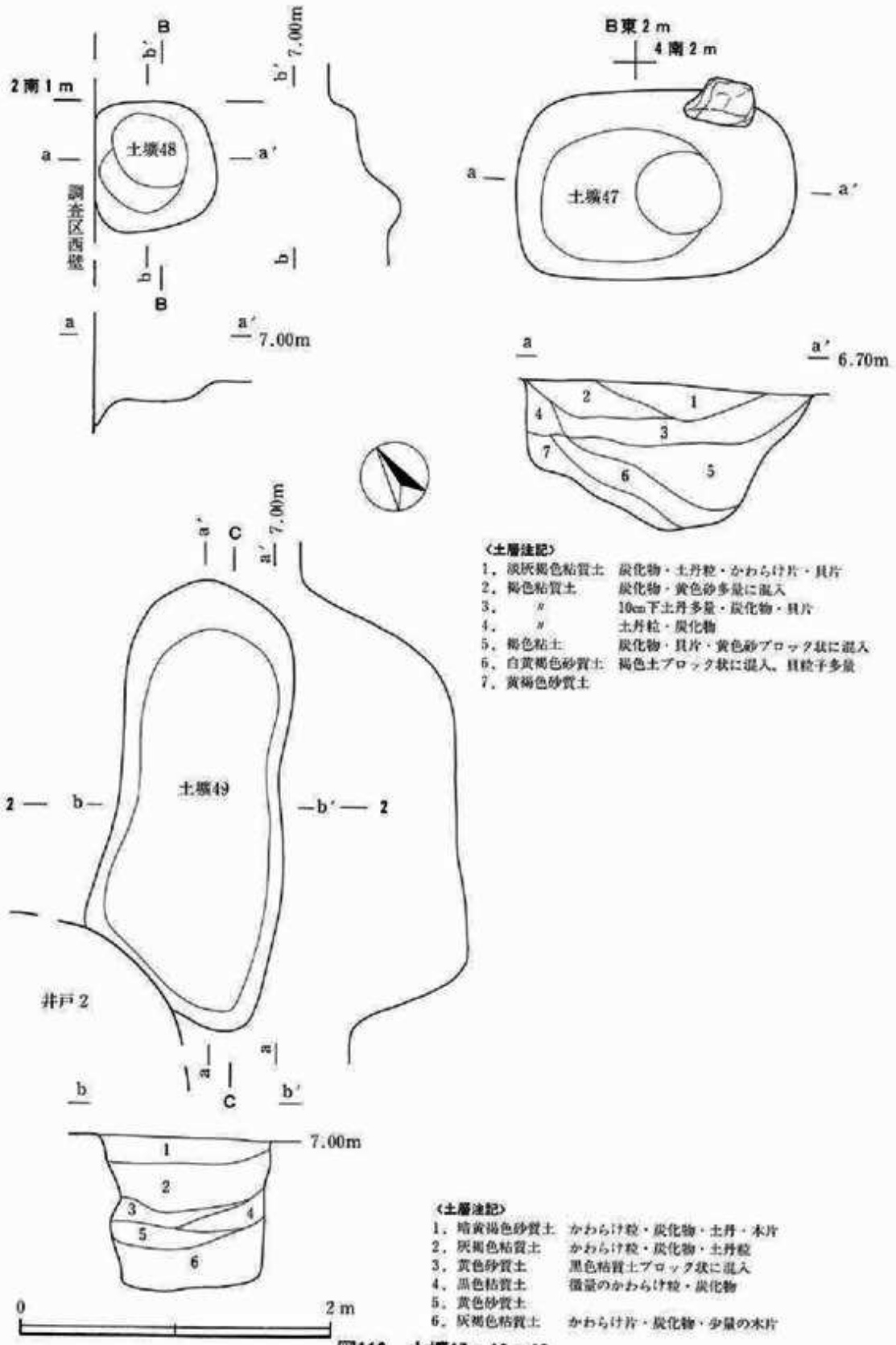
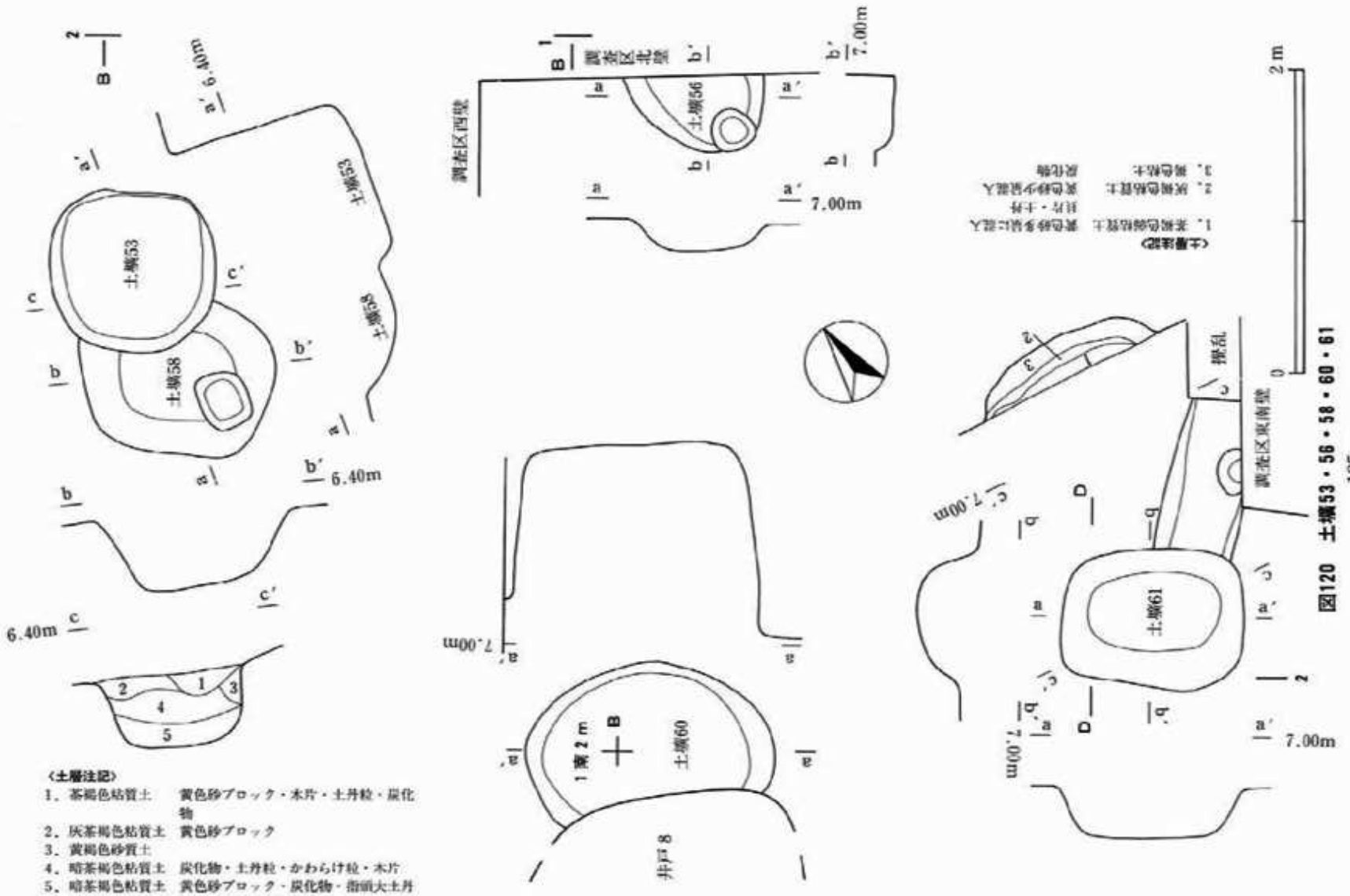



図119　土壙47・48・49




〈土層注記〉

1. 茶褐色粘質土　黄色砂ブロック・木片・土丹粒・炭化物
2. 灰茶褐色粘質土　黄色砂ブロック
3. 黄褐色砂質土
4. 暗茶褐色粘質土　炭化物・土丹粒・かわらけ粒・木片
5. 暗茶褐色粘質土　黄色砂ブロック・炭化物・指頭大土丹・かわらけ粒・木片

〈土層注記〉

1. 茶褐色粘質土　黄色砂多量に混入　柱穴・土丹
2. 灰褐色粘質土　黄色砂少量混入　炭化物
3. 褐色粘土

図120　土壙53・56・58・60・61

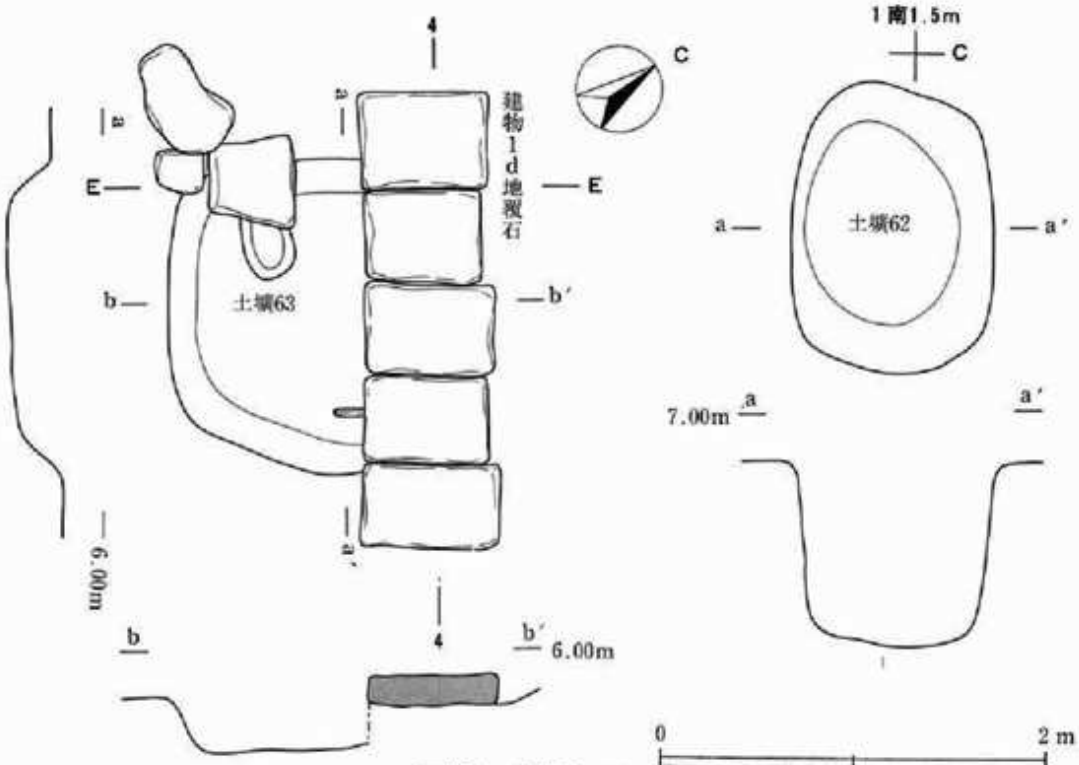



図121　土壙62・63

短径105cm、深さ95cmの略溝状土壙。形状、堆積土層等から便所壙に類似する。

**土壙53・58（図120）**　B－2。建物13に切られる。53>58。土壙53は径110cm、深さ120cm。土壙58は120cm×100cm、深さ35cm。

**土壙56（図120）**　B－1。調査区北壁にかかる。90cm×50cm以上、深さ20cm。

**土壙60（図120）**　B－1。道路1下から検出され、井戸8に切られる。長径160cm、短径90cm以上、深さ110cm。

**土壙61（図120）**　D－1。道路1下検出。長径120cm、短径90cm、深さ30cm。

**土壙62（図121）**　C－1。道路1下検出。長径145cm、短径105cm、深さ92cm。

**土壙63（図121）**　E－4。建物1d地覆石下から検出された。160cm×100cm以上、深さ25cm。

**埋甕土壙（図122）**

D－4交点北側、建物1b北西隅と建物8a南西隅の間に位置する。確認標高7.05m。90cm×80cm、深さ40cmの摺り鉢型土壙底面付近に、常滑甕底部が一部据えられた形で遺存していた。

**集石土壙（図122）**

B－3交点東側、建物14掘り方底面より検出された。径110cmほどの略円形で、深さ30cm。5cm～20cm大の土丹塊を集積して埋めている。

**土壙出土遺物（図123～129）**

**土壙１出土遺物（図123－１、２）**

図123－１は青磁鉢。大振りの製品だが復元率が高い。復元口径28.3cm、高台径10.6cm、器高8.0cm。胎土は白色、若干の気孔をもつが緻密堅緻土。釉は淡緑色、半透明で全体にやや細かな貫入をもつ。内面には片切彫りの蓮華文が配されるが、釉層が厚いため文様は不明瞭。内底中央に平面的な蓮華を一つ、周囲に花の側面を描き、各花の間に茎が描かれていると思われる。

２は青磁紅白双魚文鉢。復元口径20.2cm、高台径11.6cm、器高6.5cm。胎土は明灰白色、若干の微気孔を持つが緻密堅緻土。釉は淡緑色だが、表面全体が淡黄白色に濁っている。外面には鏡蓮弁文を片切彫りし、内底面に紅白一対の双魚を貼付している。

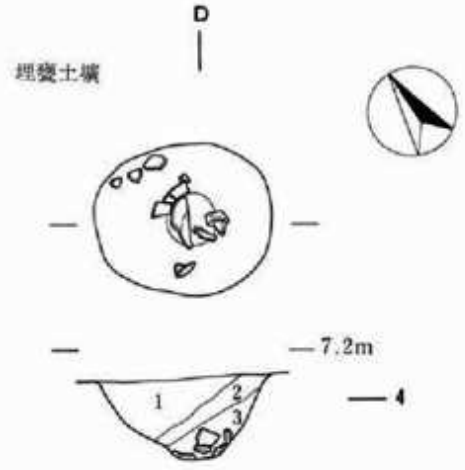
**土壙３出土遺物（図123－３、４）**

図123－３は山茶碗窯系捏鉢口縁片。胎土は灰色、白色粒、小石を含むが粘性強く良土。強い横位のナデにより口縁端部がやや肥厚する。

４は常滑壺頸部片。胎土は灰褐色、砂粒、白色粒、小石等を含むが粘性があり良土。内面には指頭痕、横位のナデがみられる。外面頸部には二条の沈線が引かれている。

**土壙４出土遺物（図123－５～７）**

図123－５～７はかわらけ。底部糸きり、ロクロ成形。５、６は小皿。５は体部中位上に稜をもち、６は底部近くに稜をもつ。７は大皿。



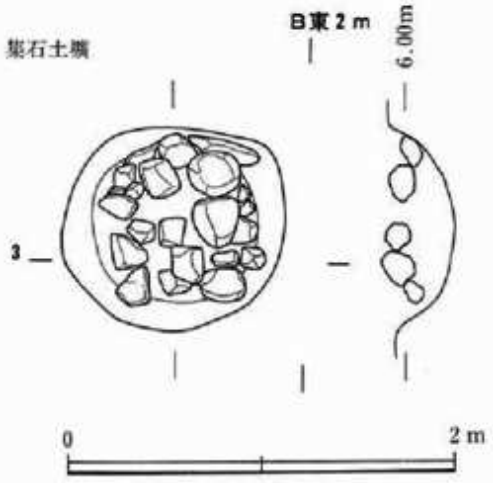




**図122　埋甕土壙・集石土壙**

**土壙９出土遺物（図124－１、２）**

図124－１、２はかわらけ。底部糸きり、ロクロ成形。いずれも体部中位に稜をもつ。

**土壙11出土遺物（図124－３、４）**

図124－３、４はかわらけ。底部糸きり、ロクロ成形。３は中皿に類するかと思われる。器壁がやや薄めで、体部に丸みをもつ。４は大皿。

**土壙13出土遺物（図124－５～12）**

図124－５～７はかわらけ。底部糸きり、ロクロ成形。５は稜をもたず開きながら立ち上がり、６

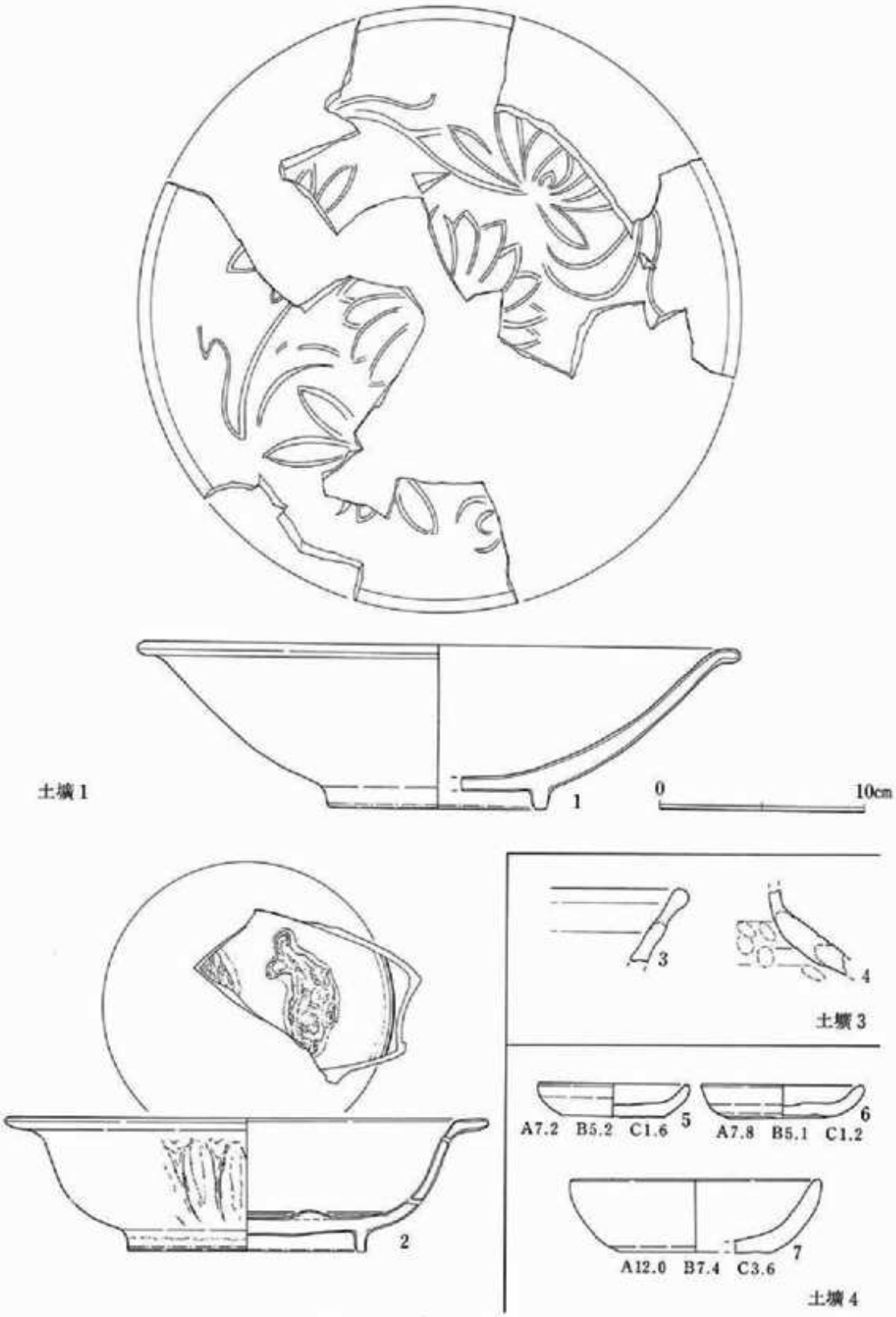



**図123　土壙出土遺物(1)**

は体部中位に稜をもち、直立気味に立ち上がる。7は大皿。体部が丸みを帯びている。

8は青白磁。小壺または水注の類と思われる。底径5.0cm。胎土は白色、夾雑物なく非常に堅緻。器形は輪花状に果実？を型どったような袋物と思われる。図145—9（遺構外出土遺物）にかなり類似しているようだ。内底外周を最後に丸く撫でている。底部は貼り付けである。

9は山茶碗窯系捏鉢底部片。復元底径15.4cm。胎土は灰色、焼成も良好、若干の小石を含むが精良土。高台は貼り付けで、籾殻痕が見られる。

10は土丸。長径3.1cm、短径2.6cm。胎土は灰橙色、精良土。一部に篦削りの痕が残る。

11は転用陶片。常滑甕の胴部を再利用している。二辺に磨耗痕がみられる。

12は滑石スタンプ。加工途中のものであろうか、何を型採ったものか判明しない。

**土壙16出土遺物（図124—13）**

図124—13はかわらけ。底部糸きり、ロクロ成形。小皿。

**土壙18出土遺物（図124—14～16）**

図124—14はかわらけ。底部糸きり、ロクロ成形。小皿。体部中位に弱い稜をもつ。

15は常滑捏鉢。復元口径31.4cm、底径15.5cm、器高11.3cm。胎土は赤褐色、粗砂、小石、若干の気孔を含むが、粘性があり良土。内面は上位から底部にかけて、横位の指ナデ、外面は底部付近から、篦状工具による縦位のかきあげ調整を行なっている。底部は砂目底である。

16は碁石。長径2.1cm、短径1.9cm、厚さ0.65cm。黒灰色の天然石である。

**土壙20出土遺物（図124—17、18）**

図124—17はかわらけ。底部糸きり、ロクロ成形。体部は丸みをもち、碗型である。

18は山茶碗窯系捏鉢。復元高台径10.6cm。胎土は粗砂粒、小石、気孔を含む灰色粗土。高台は貼り付け、断面は潰れた三角形を呈する。

**土壙22出土遺物（図124—19）**

図124—19はかわらけ。底部糸きり、ロクロ成形。体部中位に稜をもち、開きながら立ち上がる。

**土壙23出土遺物（図124—20～24）**

図124—20～24はかわらけ。底部糸きり、ロクロ成形。20～22は小皿。いずれも体部中位に稜をもってたちあがるタイプである。23は中皿。体部中位に弱い稜をもち、直立気味に立ち上がる。24は大皿。体部は丸みを帯び内湾する。

**土壙24出土遺物（図125—1～4）**

図125—1～3はかわらけ。底部糸きり、ロクロ成形。1は小皿。体部中位に強い稜をもち、やや直立気味に立ち上がる。2、3は大皿。体部中位より上に稜をもち、3は口縁部がやや外反する。

4は常滑壷底部片。復元底径8.6cm。胎土は粗砂粒を多く含み、褐色粗土。内面に指頭痕、外面にはハケ目調整痕がみられる。

**土壙26出土遺物（図125—5、6）**

図125—5、6はかわらけ。底部糸きり、ロクロ成形。5は小皿。器壁は底部から開きながら立ち

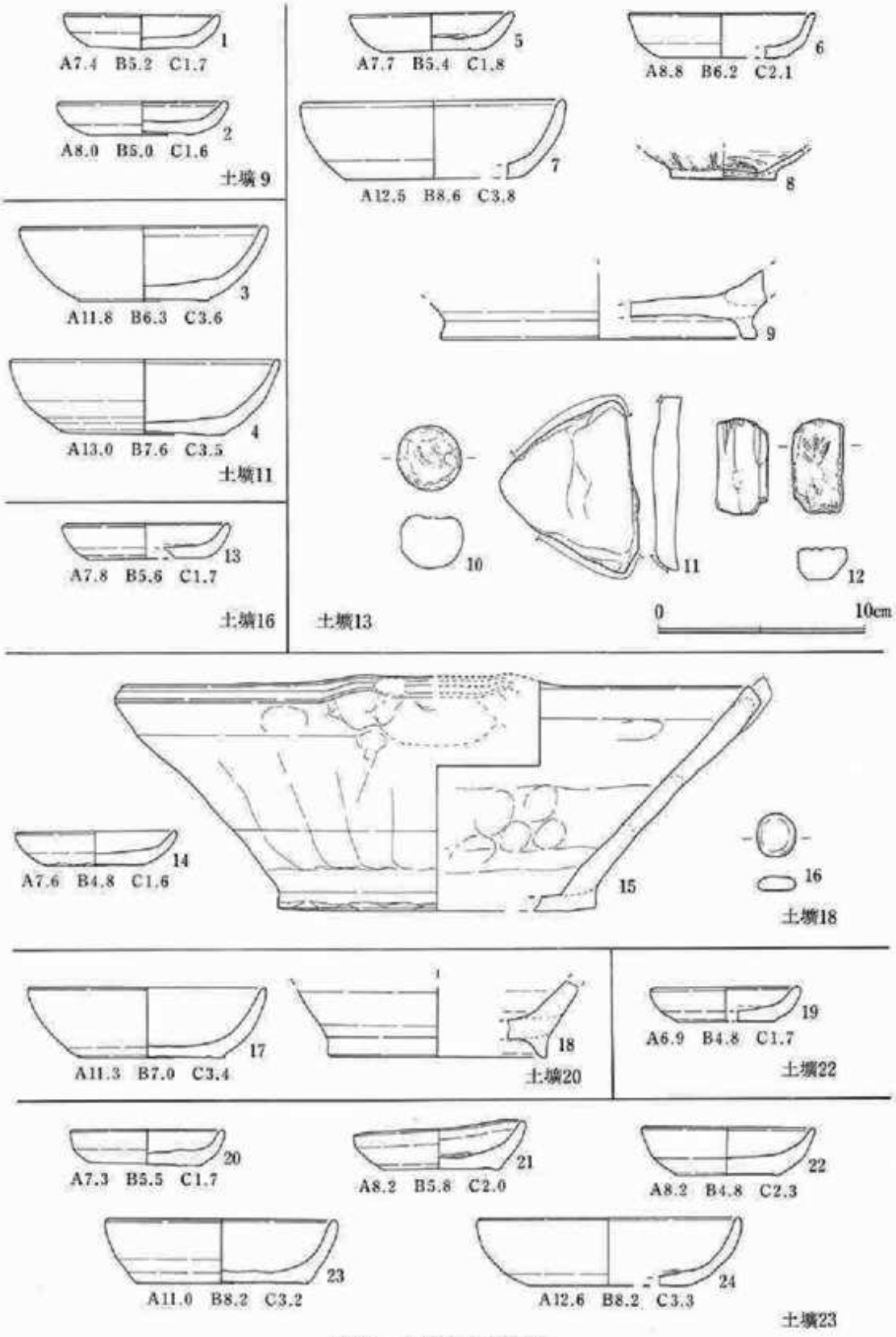



**図124　土壙出土遺物(2)**

上がる。6は大皿。体部はやや丸みを帯びるが、内湾せず開く。

**土壙29出土遺物（図125－7～14）**

図125－7～12はかわらけ。9は手づくね。体部に強い稜をもたず、底部がへこむ。それ以外は底部糸きり、ロクロ成形。7、8は小皿。7は体部中位下に稜をもち、8は稜をもたず開きながら立ち上がる。10～12は大皿。体部上位に稜をもち、やや直立気味に立ちあがる。

13は青磁輪花碗片。復元口径13.0cm。胎土は夾雑物を含まず、白色堅緻。釉は淡緑色不透明。

14は瀬戸壷。復元口径10.6cm。胎土は肌理細かく、灰白色堅緻土。口縁が玉縁状をなし、淡い茶色の釉を薄くかけている。

**土壙31出土遺物（図125－15）**

図125－15はかわらけ。底部糸きり、ロクロ成形の大皿。体部上位にやや強めの稜をもつ。

**土壙34出土遺物（図125－16～24）**

図125－16～20はかわらけ。底部糸きり、ロクロ成形。16は内折れ極小皿。17、18は小皿。17は体部中位に稜をもち、18は体部が丸みを帯びる。19、20は大皿。19は口縁付近に稜をもち、口縁の断面がやや三角形をなす。20は体部上位に稜をもち、口唇部がやや反り返る。

21は白磁口兀皿。復元口径10.8cm、底径5.6cm、器高3.2cm。胎土は夾雑物を含まず、白色堅緻土。釉は淡灰青色、不透明。底部に若干釉が残る。

22は燭台（土製）。胎土はかわらけ質、キメ細かく淡橙色。内面に指頭痕、外面は上部に縦位の篦削り、下部に横位のナデ痕がみられる。

23は手焙り（土器質）。復元口径32.2cm、底径21.7cm、器高10.5cm。胎土は黒色粒、気孔を含むが、キメ細かく灰褐色良土。内面に横位のハケ調整痕、外面中程に横位のナデ痕がみられる。

24は碁石。長径1.8cm、短径1.5cm、厚み0.5cm。黒灰色の天然石。

**土壙35出土遺物（図126－1～6）**

図126－1～4はかわらけ。底部糸きり、ロクロ成形。1、2は小皿。1は体部下位に稜をもち、直立気味に立ち上がる。やや深めで器壁も薄めである。2は底部付近に稜をもち、開きながら立ち上がる3は中皿。薄手である。4は大皿。体部上位に稜をもち、口縁部が微妙に外反する。

5は常滑小壷底部片。復元底径9.2cm。胎土は黒砂、白色粒を含むが灰褐色緻密土。内面には指頭による横位のナデ痕、外面には体部下位に横位の篦削り痕がみられる。

6は常滑甕口縁片。復元口径34.0cm。縁帯幅2.7cm。胎土は黒砂、白色粒、小石、気孔を含むが粘性があり、灰褐色良土。内外面に指頭による横位のナデ痕がみられる。

**土壙36出土遺物（図126－7）**

図126－7はかわらけ。底部糸きり、ロクロ成形。体部上位に稜をもつ。内面に墨痕がみられる。

土壙38出土遺物（図126－8～11）

図126－8～10はかわらけ。底部糸きり、ロクロ成形。8、9は開きながら立ち上がり、やや深めである。10は体部下位に稜をもち、開きながら立ち上がり、器肉が厚めである。

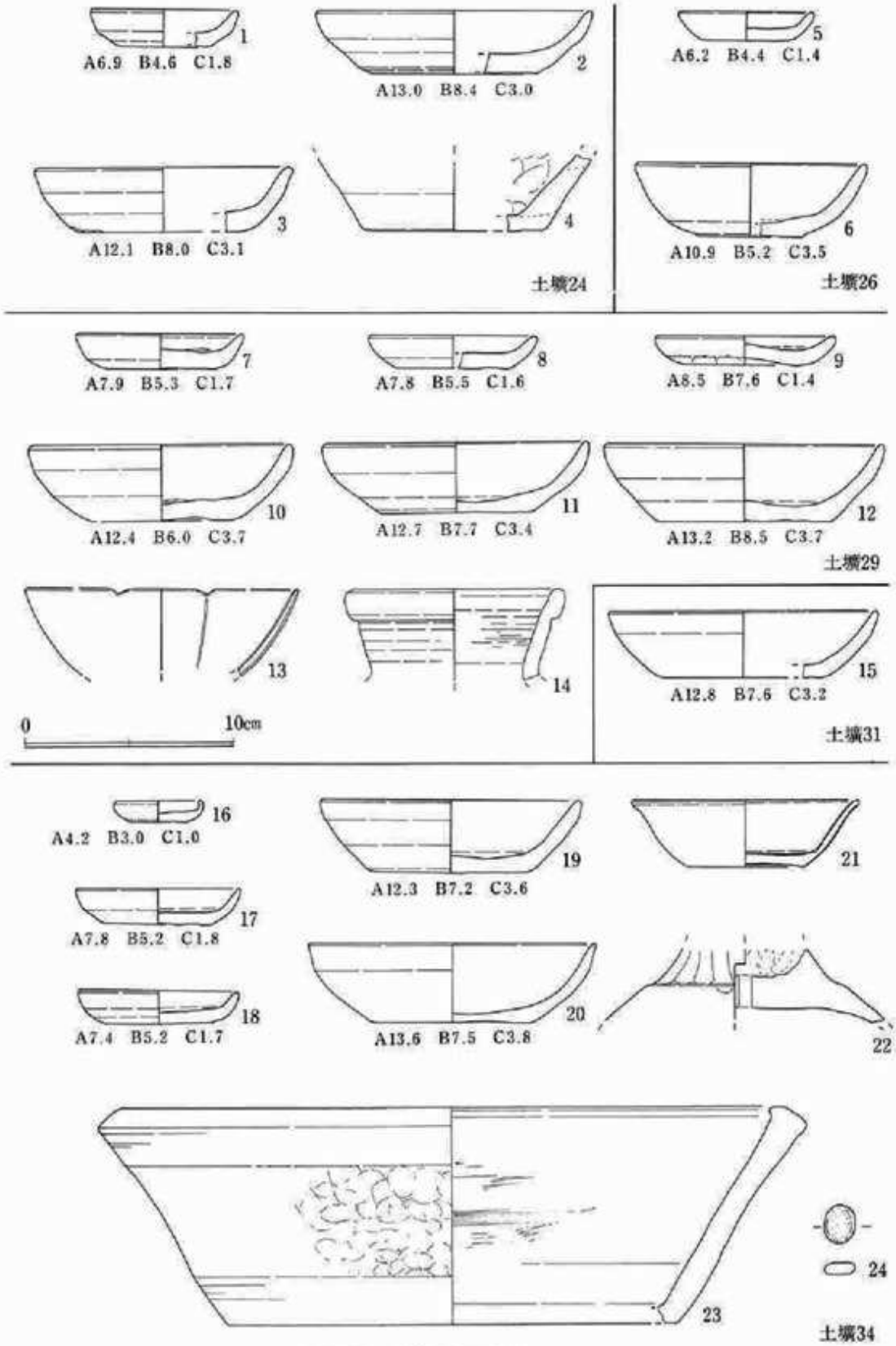



図125　土壙出土遺物(3)

11は土風呂（瓦質）。復元底径27.2cm。脚部高4.0cm。胎土は粗砂粒、小石粒、気孔を含む、灰色粗土。器表は黒色処理を施し、横位の磨きをかけている。胴部には帯状に刺頭文を配する。底部には獣脚を貼り付け、縦位に磨きをかけている。三脚になると思われる。

**土壙40出土遺物（図126—12）**

図126—12はかわらけ。底部糸きり、ロクロ成形。体部中位下に稜をもち、開きながら立ち上がる。

**土壙43出土遺物（図126—13～15）**

図126—13、14、はかわらけ。13は小皿。体部に稜をもたず、開きながら立ち上がる。14は大皿。体部下位に稜をもち、開きながら立ち上がる。

15は常滑広口壷。復元口径14.8cm。胎土は小石、気孔を若干含むが、暗灰色良土。胴部は内側に緩やかに内傾し、若干口唇部を摘みあげている。口縁部から体部にかけて、横位のナデがみられる。内外面には降灰による緑灰色の自然釉が付着する。

**土壙45出土遺物（図126—16～19）**

図126—16、18はかわらけ。底部糸きり、ロクロ成形。16は小皿。器壁は直立気味に立ち上がり底部から器壁にかけて厚くなる。18は中皿。体部下位に稜をもち、開きながら立ち上がる。

17は手づくね。体部に強い稜をもたず、口唇部は丸みをもつ。

19は常滑甕口縁片。胎土は小石、粗砂粒を含み、暗灰色やや粗土。口縁部は水平に外反し、降灰による緑褐色の濁釉が付着する。

**土壙46出土遺物（図127—1～4）**

図127—1～4はかわらけ。1、3は底部糸きり、ロクロ成形。1は小皿。体部上位に稜をもち、直立気味に立ち上がり、口径、底径差が少ない。3は大皿。体部上位に沈線のようなものが引かれる器壁はやや丸みをもち開きながら立ち上がる。

2、4は手づくね成形。2は小皿。体部に強い稜をもち、口縁がやや反り気味である。4は大皿。やはり強い稜をもち、口縁はかなり開いている。

**土壙47出土遺物（図127—5～7）**

図127—5～7はかわらけ。6は底部糸きり、ロクロ成形。大皿。体部上位に稜をもち、直立気味にち上がる。5、7は手づくね成形。5は小皿、7は大皿。5は体部に強い稜をもたず、底面が丸みを帯びる。7は体部に強い稜をもち、器高が低い。

**土壙48出土遺物（図127—8～14）**

図127—8～11はかわらけ。底部糸きり、ロクロ成形。8、9は小皿。共に体部中位に稜をもち、開きながら立ち上がる。9は背低である。10、11は大皿。10は体部中位に稜をもち、直立気味に立ち上がる。11はやや深めのもので、底部から開きながら立ち上がる。

12は常滑甕口縁片。縁帯幅2.1cm。胎土は小石を含み、灰色でやや粗土。口唇部が直立する。

13は常滑捏鉢片。復元口径36.2cm。胎土は黒砂粒、白色粒、小石粒を含むが粘性があり、暗灰色良土。内面中程に横位の篦調整痕、外面胴部に縦位の木口による調整痕が見られ、口縁端部は浅い

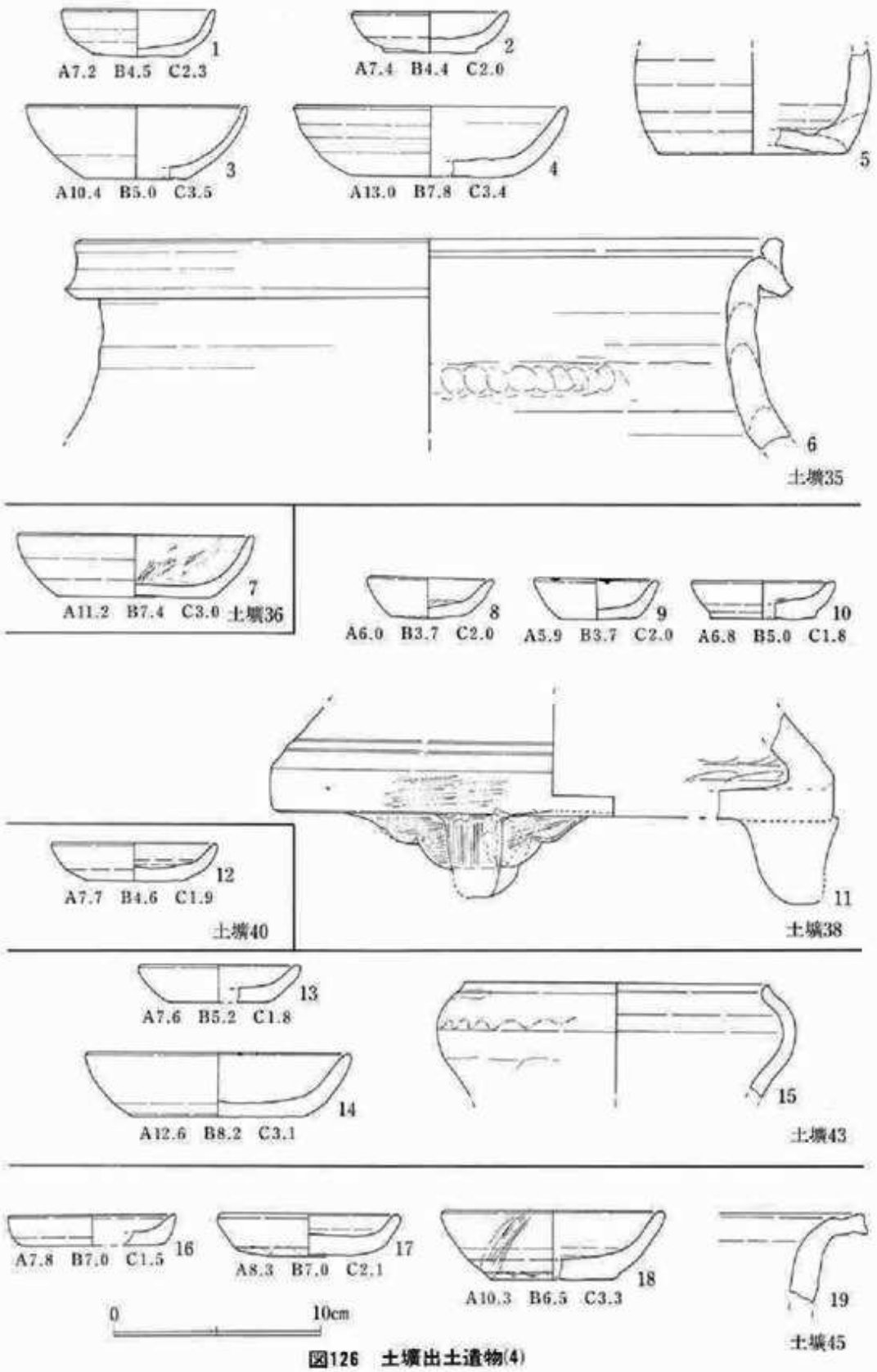



**図126　土壙出土遺物(4)**

U字状の凹をつくる。

14は手焙り（瓦器質）。復元口径34.5cm、底径22.0cm、器高9.0cm。胎土は赤褐色粒、小石粒気孔を含み、暗灰橙色粗土。器表は灰黒色。内面中位から底部にかけて横位のナデ、外面上位から下位には縦位に櫛目調整痕がみられる。口唇部は内側に摘み出された形をとる。

**土壙49出土遺物（図127—15～22）**

図127—15～22はかわらけ。15、17、21は底部糸きり、ロクロ成形のもの。15は内折れ極小皿。17は小皿。若干反り気味に立ちがる。21は大皿。器壁は丸みを帯びるが内湾しない。16、18～20、22は手づくね成形のもの。16、18～20は小皿。体部に強い稜をもたずに立ち上がるもので、16はやや内湾する。20は底部に丸みをもたない。22は大皿。体部に強い稜をもち、反り気味に開く。

**土壙53出土遺物（図128—1、2）**

図128—1、2はかわらけ。1は手づくね成形の小皿。体部中位下より外側に反りながら開く。2は底部糸きり、ロクロ成形の大皿。口縁下は強い横位のナデの為か、器壁がやや薄くなる。

**土壙56出土遺物（図128—3～5）**

図128—3～5はかわらけ。手づくね成形。3、4は小皿、5は大皿。それぞれ体部に強い稜をもたず口縁部断面が三角形をなす。

**土壙58出土遺物（図128—6～9）**

図128—6はかわらけ。手づくね成形の大皿。体部に強い稜をもたず、器形は碗型を呈する。

7は常滑壺肩部片。胎土は小量の長石粒を含むが比較的キメ細かい橙褐色良土。器表は茶褐色。

8は山茶碗窯系捏鉢。胎土は長石粒、砂粒を多く含むが締まりのある茶褐色土。

9は渥美窯系甕口縁片。胎土は白色粒を含むがキメ細かい暗灰色土。釉は内面口縁部分、外面頸部から下にハケ塗りされる。

**土壙60出土遺物（図128—10～16）**

図128—10～14はかわらけ。10～12は底部糸きり、ロクロ成形の小皿。10は底部より開きながら立ち上がり、11は体部中位下に稜をもち、やや直立気味に立ち上がる。13は手づくね成形の小皿。体部に強い稜をもち、底部にあまり丸みをもたない。14は底部糸きり、ロクロ成形の大皿。器壁中位から口縁にかけてやや肥厚する。

15は常滑壺底部片。復元底径9.1cm。胎土は長石粒を小量含むがキメ細かく、粘性のある灰黒色土。器表は茶褐色である。外面底部付近に横方向の篦による調整痕がみられる。内底面には降灰による灰緑色の自然釉が付着する。

16は山茶碗窯系捏鉢片。胎土は白色粒、砂粒を多く含み、ガサついた暗灰白色土。口唇部から内面にかけて薄く降灰する。

**土壙61出土遺物（図128—17～24）**

図128—17～23はかわらけ。17～19は底部糸きり、ロクロ成形の小皿。17は器高が低く、体部中位下に稜をもち開く。18は体部下位に稜をもち直立。口唇部の断面が三角形を呈する。19は底部付近

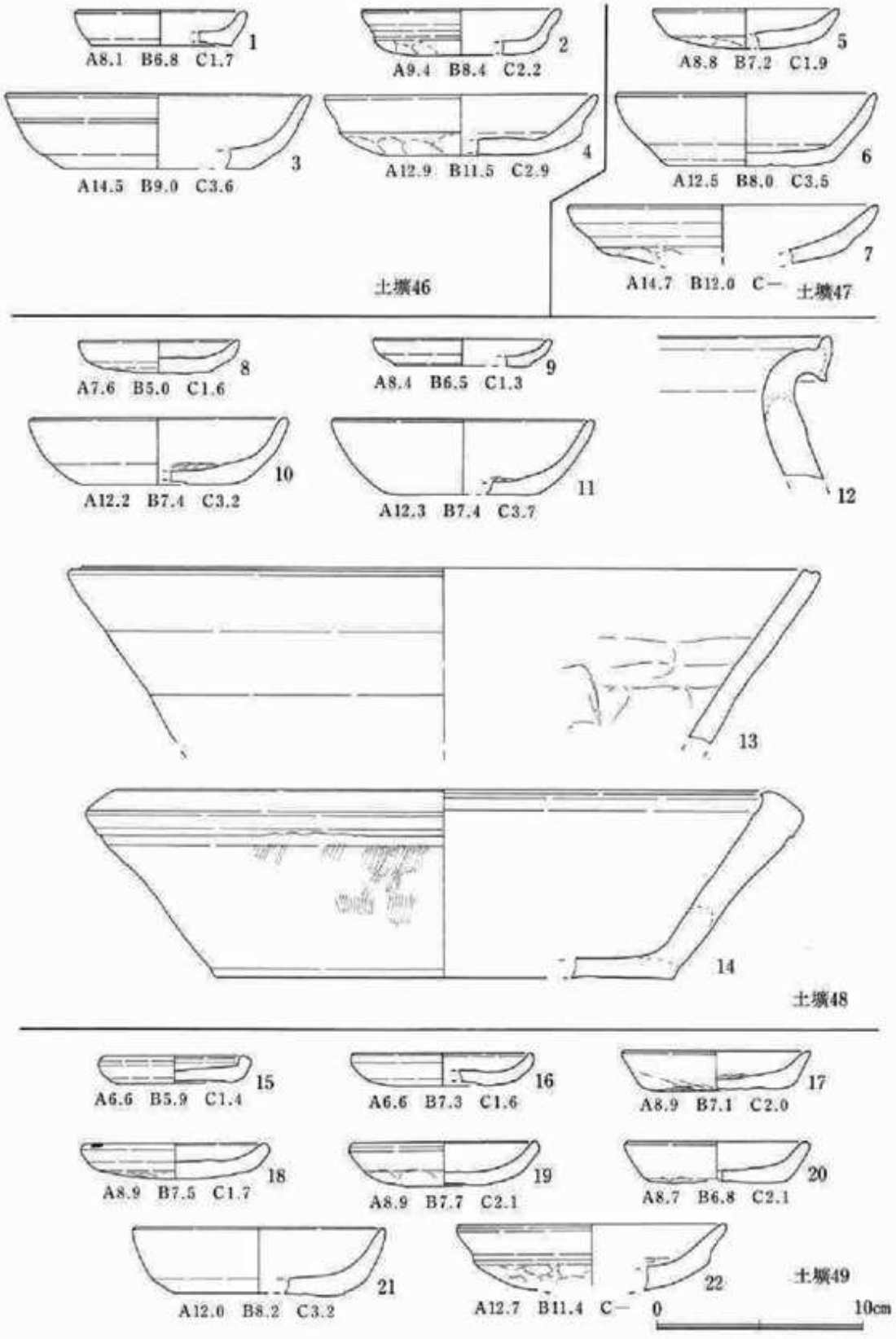



**図127　土壙出土遺物(5)**

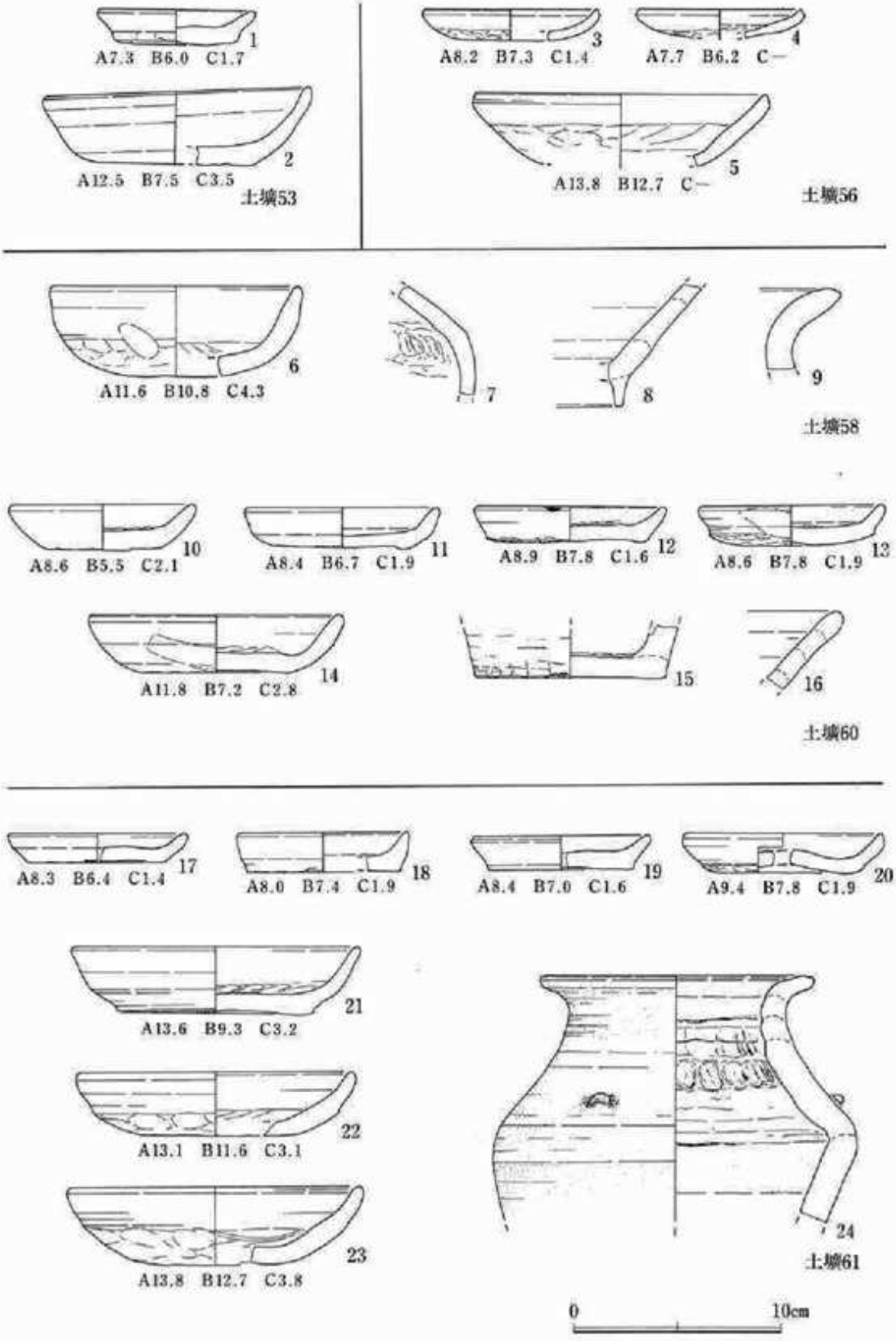



**図128　土壙出土遺物(6)**

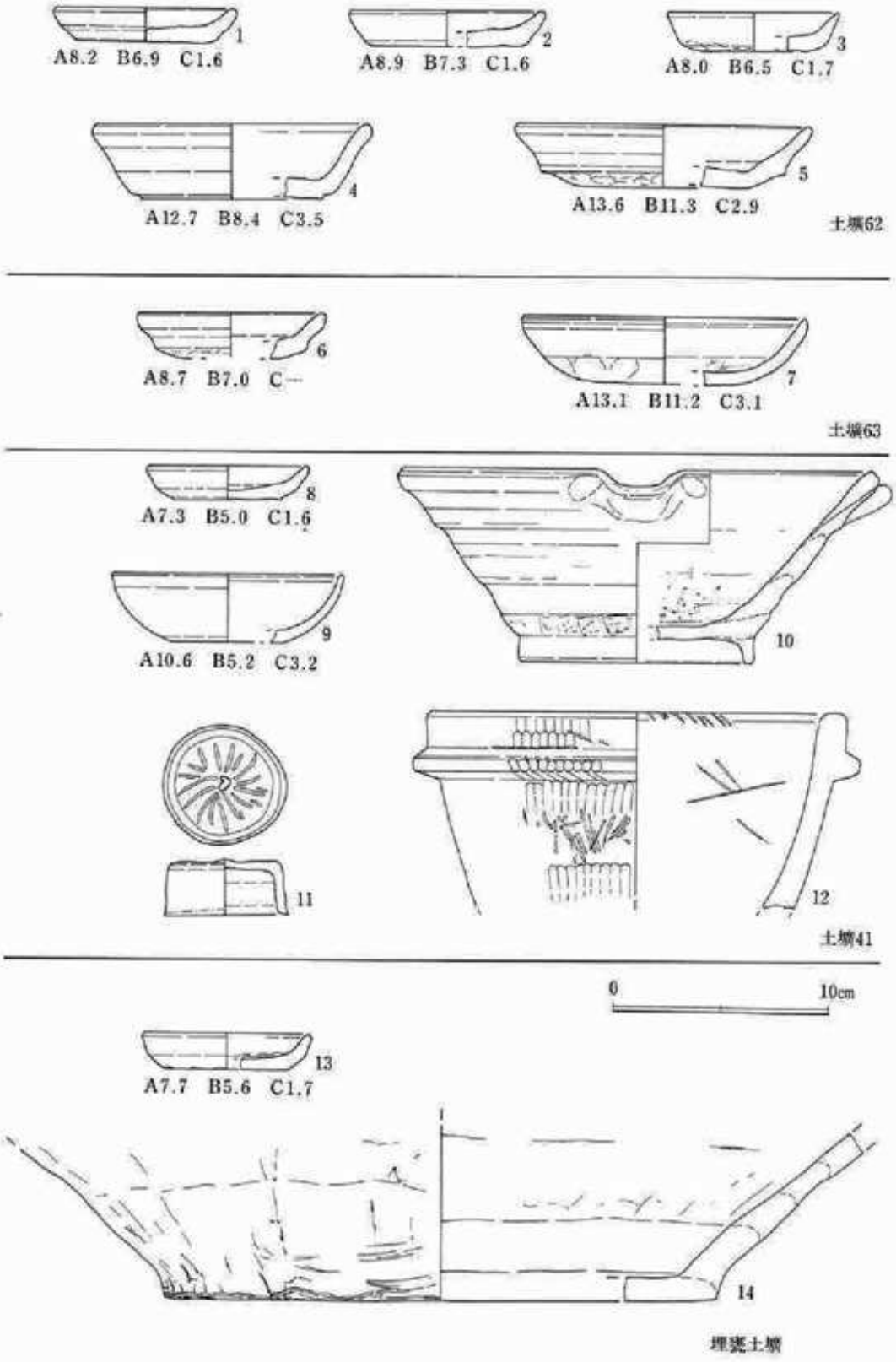



**図129　土壙出土遺物(7)**

より大きく開きながら立ち上がり、器壁に比べ底部が厚い。20は手づくね成形の穿孔小皿。穿孔径は約1cmで焼成後、丁寧にあけられている。21は底部糸きり、ロクロ成形の大皿。体部中位下に稜をもち、開きながら立ち上がる。22、23は手づくね成形の大皿。体部に強い稜をもたないもので、23は丸みを帯び、やや碗型を呈する。

24は常滑（山茶碗窯系）三耳壺。復元口径12.3cm、胴部径17.3cm。胎土は白色粒、砂粒を多く含む、灰白色粗土。やや歪みをもつが、肩部は〝く〟の字型に強く内傾し、内面には指頭痕、指頭による横位のナデがみられる。また降灰による淡緑色の自然釉が付着している。肩部には0.5cm×1.0cm程度の小さな耳が3箇所に取り付けられる。鎌倉ではこれまで類例がない。

**土壙62出土遺物（図129－1～5）**

図129－1～5はかわらけ。1、2は底部糸きり、ロクロ成形の小皿。共に肉厚で器高が低い。3は手づくね成形の小皿。口縁部を若干外側に引き出し片口のような器形を呈する。底部に丸みをもたない4は底部糸きり、ロクロ成形の大皿。やや反り気味に立ち上がり、口縁部に丸みをもつ。5は手づくね成形の大皿。強い稜をもち、やや器高が低く底部にあまり丸みをもたない。

**土壙63出土遺物（図129－6、7）**

図129－6、7は手づくね成形のかわらけ。6は小皿。体部に強い稜をもち、口唇部の断面が三角形を呈する。7は大皿。体部に強い稜をもたず、器壁は丸みを帯びやや内湾する。

**土壙41出土遺物（図129－8～12）**

図129－8、9はかわらけ。底部糸きり、ロクロ成形。8は小皿。体部中位に稜をもち、開き気味に立ち上がる。9は大皿。器体は丸みを帯び、口唇部は内側に玉縁状をなす。器壁は薄手である。

10は山茶碗窯系捏鉢。復元口径22.4cm、高台径11.0cm、器高8.9cm。胎土は小石、白色粒、気孔を含み、灰褐色粗土。焼成は良好である。外面下位には横位に篦状具による削りがみられる。器壁はほぼ直線的に立ち上がり、口縁端部を丸く仕上げている。片口は指頭により外側に押し出されている。高台は貼り付け高台、断面はやや丸みを帯びている。

11は青白磁梅瓶蓋。口径5.8cm、器高2.6cm。胎土はややザラつく淡黄灰白色。釉は乳青白色下端部から内面は露胎している。頂部には放射状文が刻印されている。

12は滑石製鍋。復元口径19.6cm。鍔の上面0.8cm、下面1.2cm。外面は、緩やかな曲面の丸ノミにより丁寧に整形されている。口縁部はやや丸みをもち、内側に削痕が多数みられる。

**埋甕土壙出土遺物（図129－13、14）**

図129－13はかわらけ。底部糸きり、ロクロ成形の小皿。体部中位に稜をもつ。

14は常滑大甕底部片。復元底径25.7cm。胎土は長石粒、砂粒をやや多く含むが、キメ細かく締まりのある灰色土。器表は明茶褐色。内外面に斑状に自然釉が付着する。底部は砂があまり付着せず、ケズリの痕跡がみられる。同一個体と思われる常滑甕片は11片出土したが、その殆どが体部か下半、底部付近のもので、上半に属するものは1片のみであったが、いずれも接合しなかった。図示したのは実測可能な最大片で、ほぼ土壙底面で正位の状態で発見された。

## G）特殊遺構

**合わせ口かわらけ（図130）**

C－4グリッド付近、標高6.98mで発見された。平面隅丸長方形、断面皿型のピット（長軸21cm、短軸15cm、深さ5cm）に、大皿2枚を口を合わせて納置してある。内部には褐色土が詰まっていたが、納入物は検出できなかった。関連遺構の存否は不明。

2枚のかわらけ（図131）はつくりを異にし、「蓋」は厚手で微砂をやや多く含むが、「身」は薄手精製、「蓋」より大振りで受け口状になる。

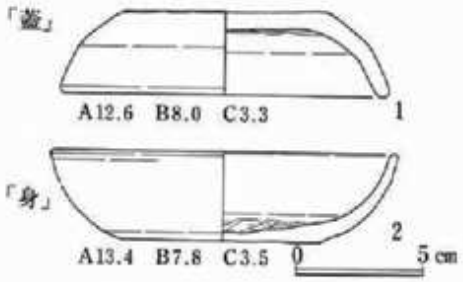



図131　出土かわらけ

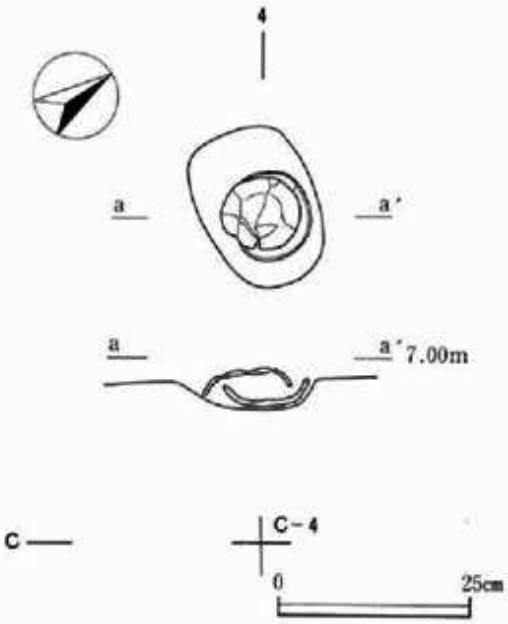



図130　合わせ口かわらけ出土状況

**かわらけ溜まり1（図132）**

調査区南西隅、A－5グリッド、標高7.25mで発見された。直径35cm、深さ8cm、断面椀型の（推定）円形土壙に、小皿ばかりが32枚、一括して廃棄されたものと考えられる。覆土は暗灰褐色粘質土一層であった。本址は、建物2の覆土最上層に形成されている為、建物の埋没と何らかの関連も推測されるが、直上まで近現代の撹乱（表土）が及んでおり、時間差の有無など不詳である（図15　建物2土層図参照）。

**かわらけ溜まり1出土遺物（図133）**

出土かわらけは、概ね胎土に微砂・白色針状物質・赤褐色土粒を含んで色調淡橙色を呈し、薄手で底径が小さく側壁は丸みをもってやや深く作られている。口径も7.3cmを平均にほぼまとまるなど、かなり均質な一群として把えられ、一括性の高いものである事が推察される。1～28は胎土や色調がほぼ均一であるが、1～5はやや浅い作りであり、27・28は側壁が直線的に外傾する。これらは個体差と理解できる。それ

図132　かわらけ溜まり1

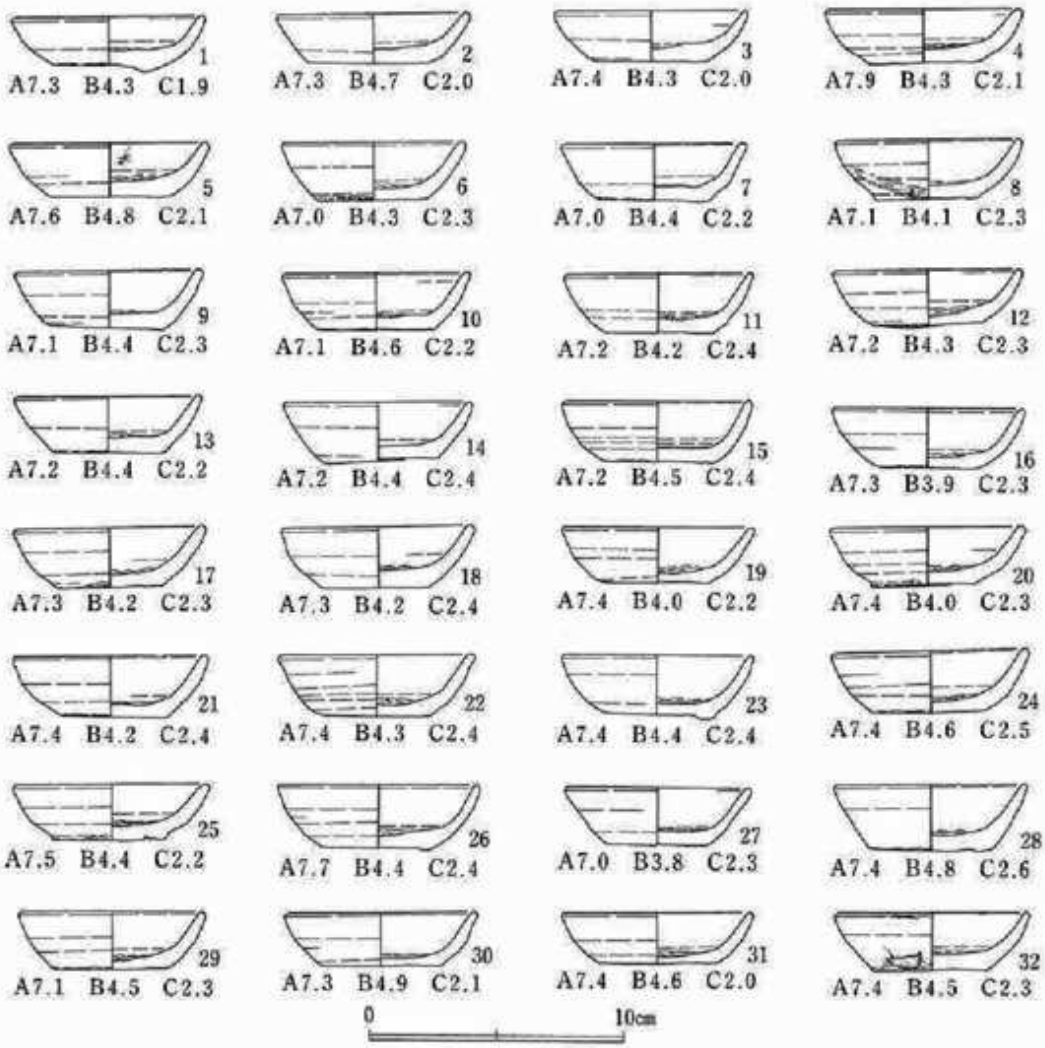



**図133　かわらけ溜まり1出土遺物**

に比して、29～32は胎土が非常にきめ細かくやや粉質で、色調も淡橙白色を呈する。焼成の差という可能性もあるが、やや異質である。尚、5・32には、口縁内外の一部には煤が付着する。

**かわらけ溜まり2（図134）**

D－2グリッドの上層、標高7.20mで発見された。位置的には道路と建物8aの中間にあたり、2m四方ほどの範囲にかわらけを主とする遺物と鎌倉石・土丹塊が散漫に広がっている。本来これに帰属すべき遺物はもう少し多いが、他遺構との関係上把握が遅れて掘り上げてしまった。

**かわらけ溜まり2出土遺物（図135）**

図135－1～11はロクロ成形のかわらけ。概ね厚手であり、1～9の小皿は器高が低く体部上3分の1のところに稜をもつ。10・11の大皿は体部が丸く深い作りである。

12は青磁碗。所謂百合口の碗。胎土は夾雑物なく非常に堅緻な白色土。釉は淡緑色半透明で釉層

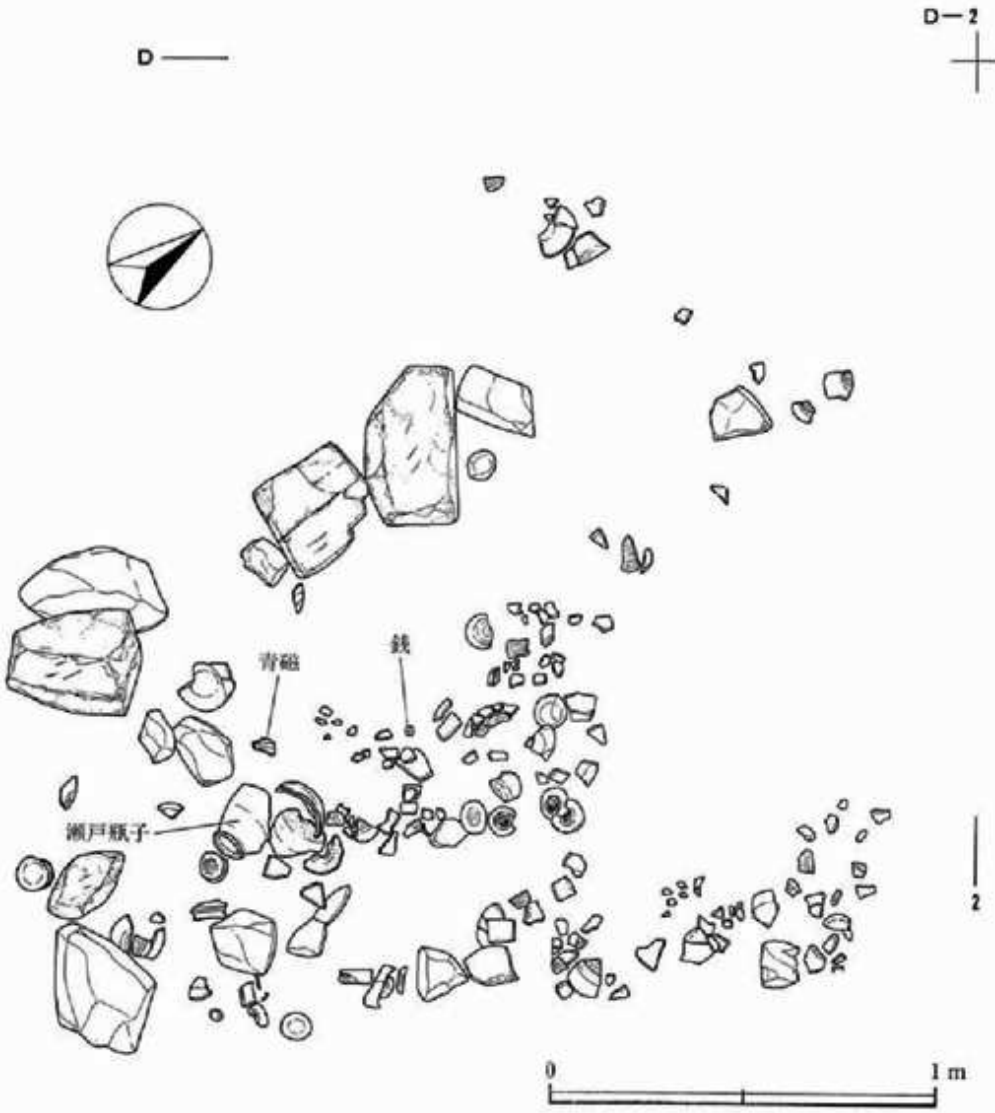



図134　かわらけ溜まり2

は厚い。13は白磁口兀碗。胎土は夾雑物なく緻密な白色土。釉はごく淡い灰緑色を呈し半透明。

14・15は瀬戸。14は卸し皿。口縁部は強いナデによって外方に短く突出しており、外底部はヘラケズリで調整している。釉はハケ塗りでほぼ全面に掛かる。胎土は非常に精良緻密な灰色土。15は残存率2/3ほど。器形は概ね四耳壺に近似するが、頸部（欠失）が小さくすぼまり耳も付かないので瓶とすべきか。類例を知らない。外表はヨコナデ、内表は下半に指頭痕が見られ、中程はヘラなで上げ、上部は再び指頭調整で、頸部接合のヘラ刻みが細かく入る。高台は端部がやや丸く仕上げられる。胎土は少量の微砂粒を含むが精良な灰白色土。釉は灰釉ハケ塗りだが発色悪く殆ど透明、胴部下半まで塗られ、肩部には淡灰緑色の自然降灰が掛かる。高台内外および肩部内面に一部被熱黒変箇所が見られるが、それは断面にも及ぶ。復元最大径18.0cm、高台径9.3cm、残存高19.3cm。

16は山茶碗窯系こね鉢。胎土は比較的密な灰色土。復元口径19.0cm、高台径12.2cm、器高9.9cm。

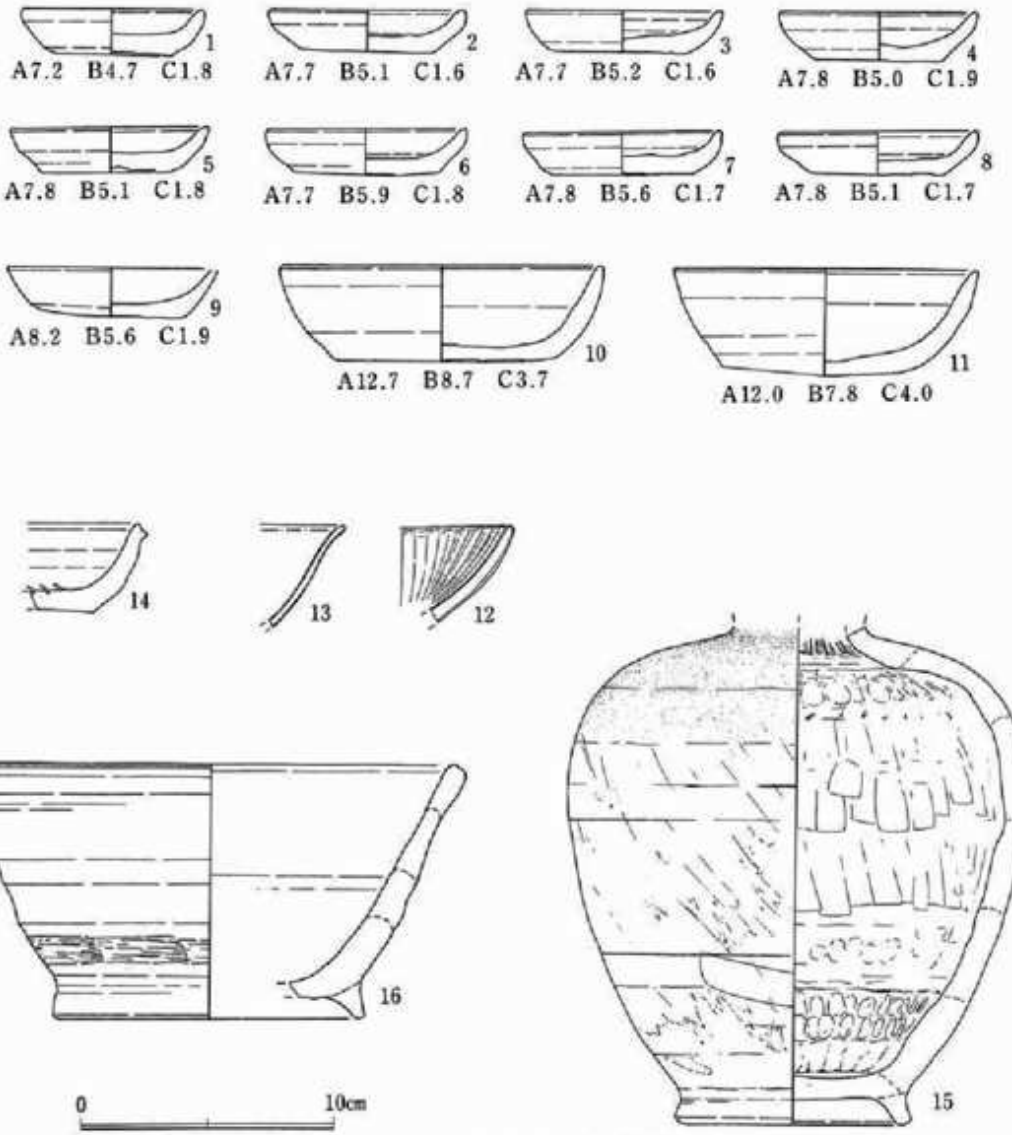



**図135　かわらけ溜まり2出土遺物**

**かわらけ溜まり3（図136）**

D－3グリッド、標高6.70mで発見された。建物8 bに北半を切られる。東西3.7m、南北0.9m程の範囲に約20cmの厚さでかわらけを主とする遺物が集積していた。しかし、諸般の事情により良好な状況では測図できず、図示したのは下層の出土状況である（上層の様相はPL.42を参照）。

**かわらけ溜まり3出土遺物（図137・138）**

図137－1～39は総てロクロ成形のかわらけ。上層より出土した。小皿は厚手で器高が低い。34の中皿は薄手で底径が小さく器高は高い。側壁は丸みをもつ。35～39は大皿。器高がやや高く、側壁上方1/3ほどのところで稜をもつものを主とする。

40・41は青磁蓮弁文碗。40は内外底とも削りの加減で中央が突出し紡錘形になる。胎土は若干の

黒色粉粒と気孔を含みやや陶質に近い。釉は淡青緑色半透明で高台脇まで掛けられる。高台径5.4cm。41は口縁部小片。鎬のない幅広の蓮弁が片切り彫りされている。胎土は夾雑物なく堅緻な茶灰色土。釉は緑褐色でやや透明感がある。

42は青磁折縁鉢。内面に蓮弁状の陰刻文が施されるが、釉層が厚く陰刻の部分が白濁している。胎土は夾雑物なく、若干の気孔をもつ。やや酸化焔焼成で、色調は素地が淡橙白色、釉が緑褐色を呈す。釉は細かな貫入が見られ畳付部は露胎となる。復元口径11.6cm、高台径4.9cm、器高4.5cm。

43は白磁口冗皿。体部中程が肥厚し、外面に稜をもつ。胎土は少量の黒色粉粒を含むが粘性に富み光沢をもつ白色土。釉は淡水青色不透明。復元口径11.9cm。

44は青白磁香炉。体部1/3弱片。ほぼ球形の丸い膨らみをもつ胴から頸部が若干外傾気味に立ち、ヘラで深い刻みを入れて口縁を水平に折り曲げ、端部は角張る。上端面には1条の沈線が巡るが、施釉によって不明瞭である。胴肩部には径1.5cmの不遊管が貼られ、やや鈍重な止具状突起が付く。双耳になるのであろう。胴中位に接合して撫で付けた痕跡が明瞭に見られるが、上半と下半を各々別個に成形し接合したものと思われる。その際、下半器壁がやや厚くなってしまったため、段差が生じてしまっている。胎土は微量の黒色粉粒を含む堅緻な白色土。釉はごく淡い草緑色で気泡が多く白濁、頸部内面中程まで施される。復元口径5.3cm、胴

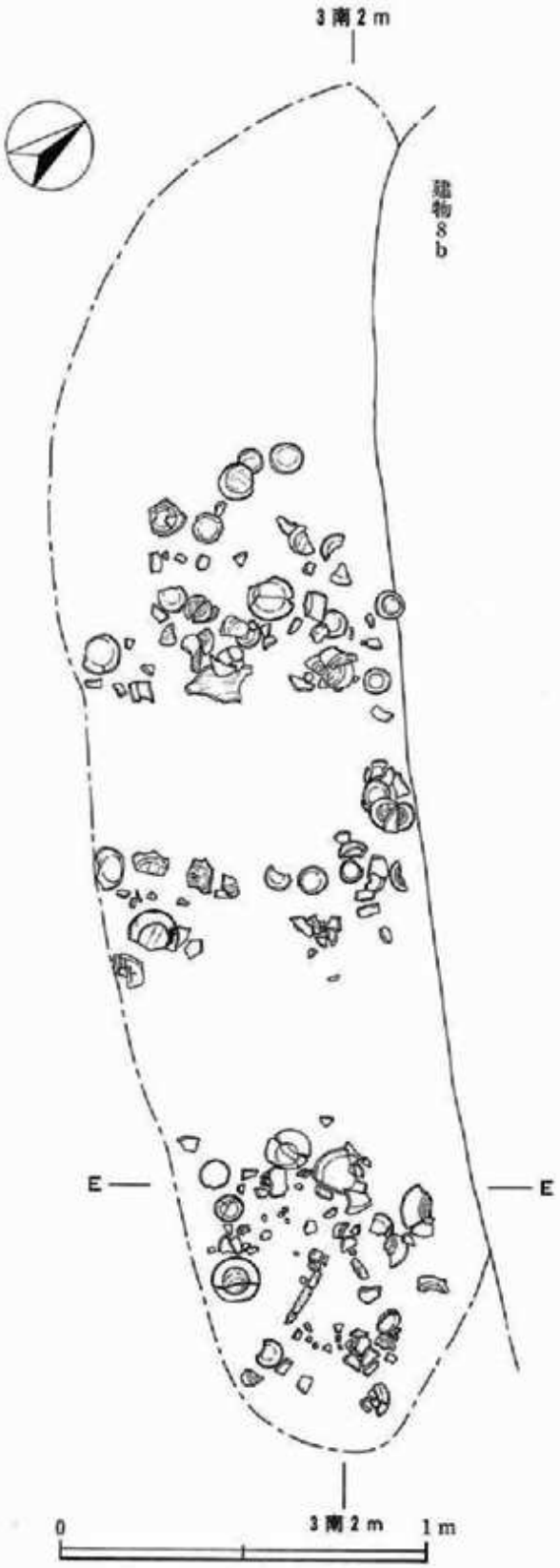



図136　かわらけ溜まり3

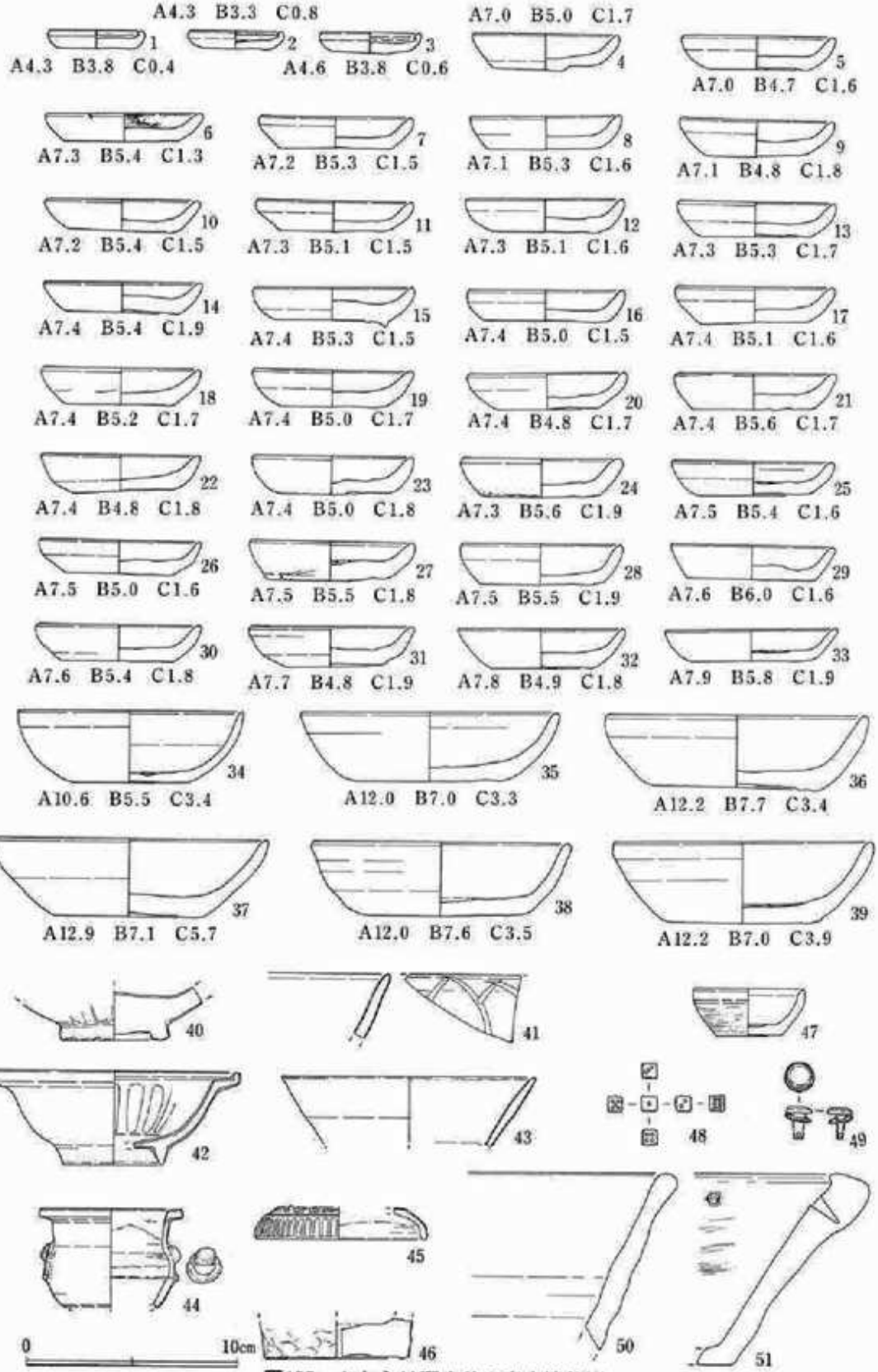



図137　かわらけ溜まり3出土遺物(1)

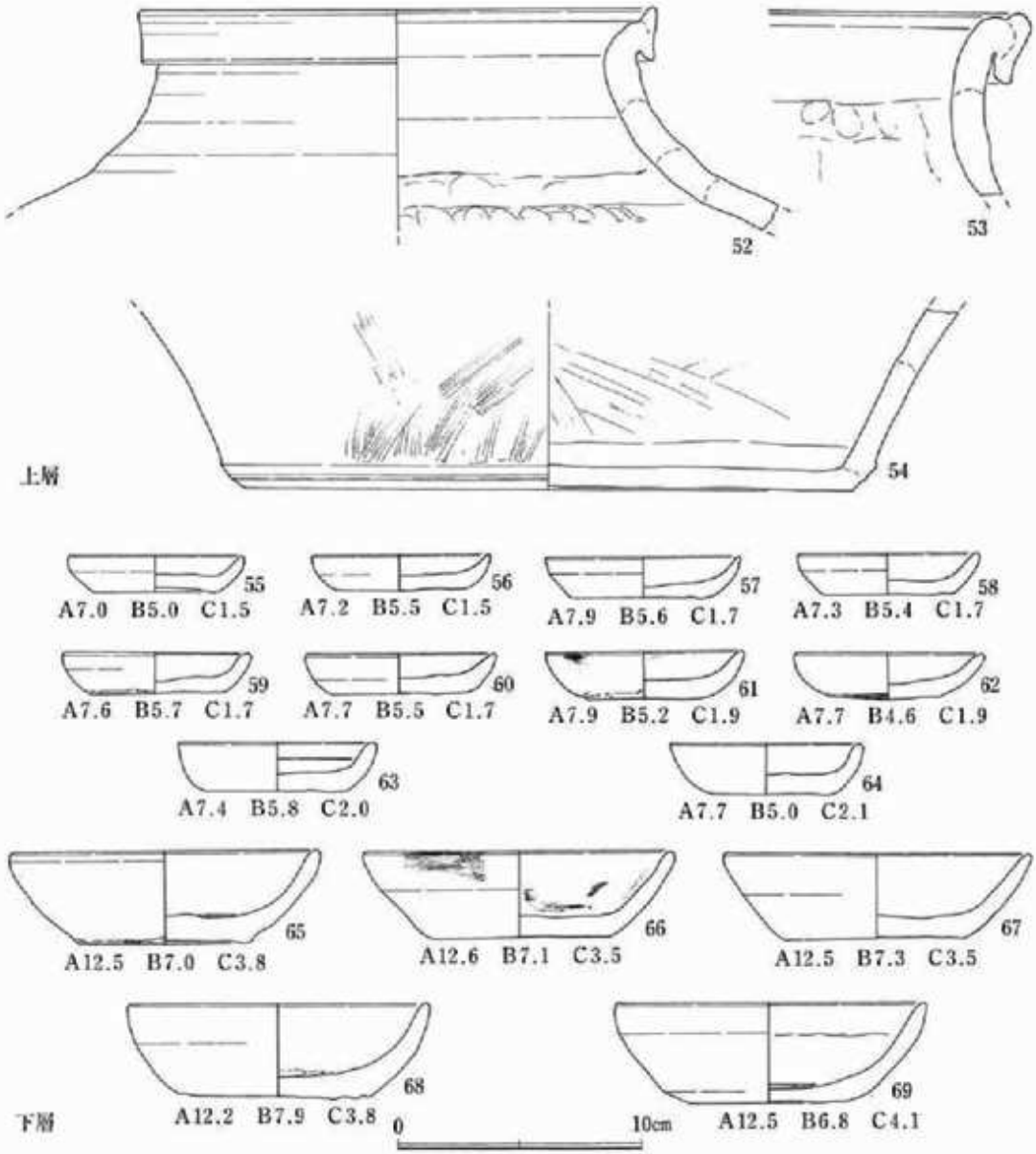



**図138　かわらけ溜まり3出土遺物(2)**

部最大径6.0cm。

45は青白磁合子蓋。上面に唐草文、側面には細かな蓮弁文が型押しにより施される。胎土は堅緻な白色土。釉は淡水青色でやや気泡を含み白濁する。一部に鉄分が噴出する。復元口径8.0cm。

46は褐釉壺底部1/3片。円筒型の壺であろう。側面はヨコナデ、外底はヘラケズリと思われ、内底にはロクロ目が残る。胎土は鉄分粒と気孔を若干含む。焼成にムラがあり、色調は表面付近で茶褐～橙褐色、芯部では灰色。釉は茶褐～暗緑褐色で側面から内底の一部に及ぶ。復元底径7.0cm。

47は瀬戸入子。外底は糸切り。口端部は強いナデによりやや尖る。胎土は白色粒・黒色微砂を含む灰色土。内面はやや摩滅し、紅色顔料が若干残る。口径5.1cm、底径3.0cm、器高2.3cm。

48は塞。鹿角製と思われる。一辺７㎜の方形で、各面に彫られた目に漆等は込められない。

49は金銅製鉄。全長1.6cm。頂部は径1.2cmの円形で上面がやや丸みをもつ。「針」は断面長方形で、先端に一辺1.5㎜ほどの方形の孔が開く。また、径1.5cmの釘隠状円板が付いており、その上面周縁には放射状に細かな毛彫りを施し花弁状に作っている。

50は山茶碗窯系こね鉢。口縁部は玉縁状に肥厚し、沈線は巡らない。色調は橙褐色を呈する。

51・54は鉢型手焙り。51は口縁直下に１カ所内側から穿孔されるが貫通しない。色調は表面淡橙～黒褐色、胎芯橙褐色。内面から口縁外側にかけて淡く煤が付着する。54は外底に板圧痕が残る。色調は表面が黒褐色、胎芯が橙褐色。復元底径24.8cm。

52・53は常滑甕。52は口縁端部を上下にやや引き出して幅の狭い縁帯を形成。復元口径21.0cm。

55～69は下層出土のかわらけ。総てロクロ成形。様相は上層のものと変わらない。

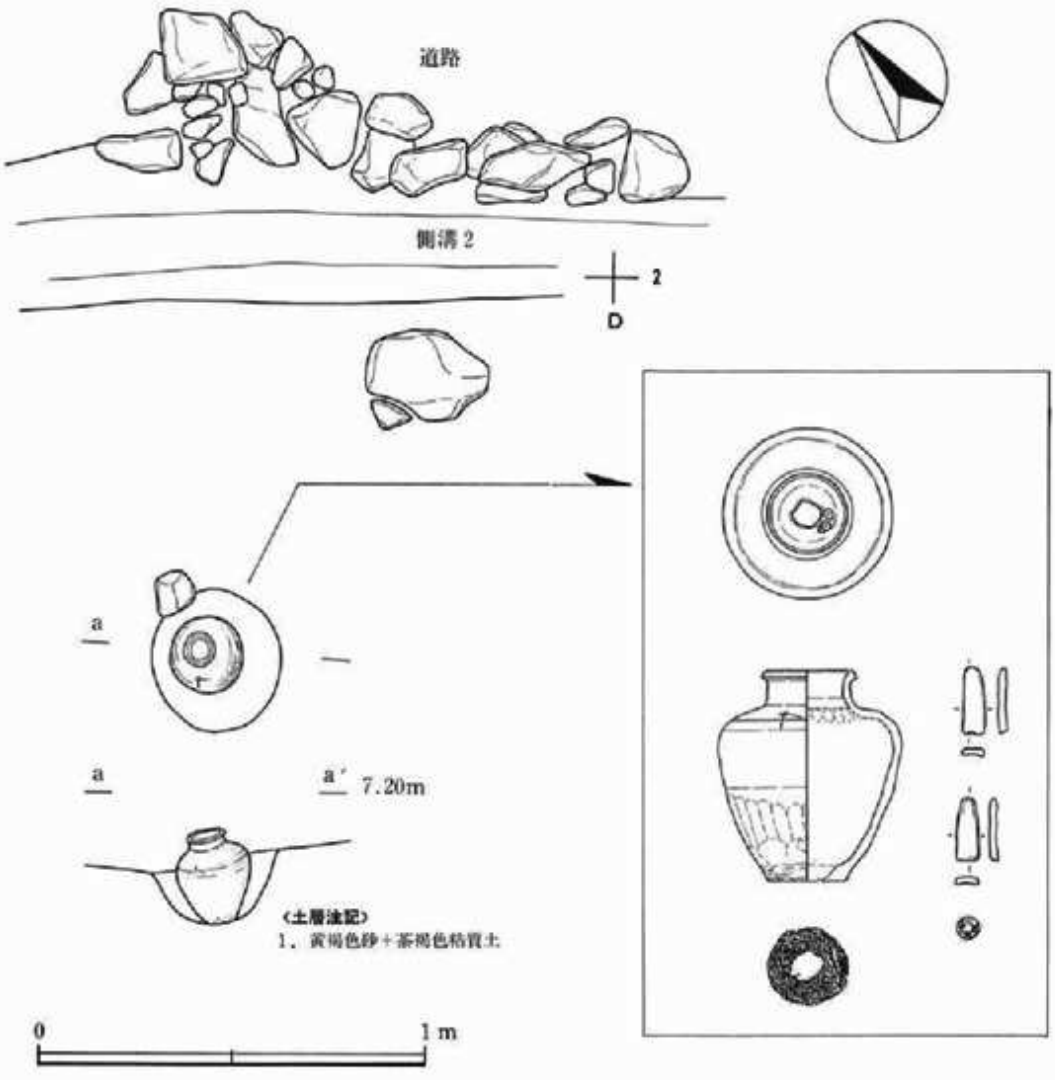



**図139　壺埋納遺構**

**壺埋納遺構（図139・140）**

C－2グリッドの上層、道路の南側1m、建物8aの北西2mほどのところで発見された。標高は道路上層土丹面とほぼ同一の7.10mである。長径37cm、短径33cm、深さ20cm以上の平面楕円形ピットの中に、底部を穿孔した常滑壺がほぼ正位で据えられていた。覆蓋施設は確認できず、内部には周囲とさほど変わらぬ茶褐色土が充満していた。そして、その中には銭5枚と墨挺と思われる炭化物3個が納められていたのである。

常滑壺（図140－1）は、底部を除き完形で、口径8.6cm、最大径18.2cm、底径8.0cm、器高21.8cmを測る。粘土紐輪積み、ヨコナデの後、胴下半部を縦位ヘラナデし、更に下端を横位ヘラケズリしている。外底は一部に粗砂塊が溶着するが、ほぼ平滑になでられ、板状圧痕らしきものも見られる。口縁はやや鋭く外下方に引き出され、断面三角形。肩部のすぐ上に一条の沈線が巡り、1カ所に「十」字のヘラ記号（墨印）が刻まれる。そしてそれらを覆う形で肩上面に淡灰緑色の自然降灰がやや厚く掛かっている。底部は2～3mmと非常に薄く、その中央を径2.5～3cmの不整円形に穿孔している。その内部には3枚の銭（銭種不明）が孔の縁に沿って重なりつつ錆着している。

墨挺と思われる炭化物は、2が長さ6.9cm、幅2.3cm、厚さ0.7cm、3が長さ6.5cm、幅2.3cm、厚さ0.7cm、形状は共に一端の幅がやや狭く、釣鐘を縦に伸ばしたような形で、長・短両軸方向とも若干の反りがある。殆ど同一の規格になるものと見られる。炭化物は他にもう1個出ている。不用意に水洗いしてしまい原形を損ねたため図示していないが、やはり他の2個と同規格であった。

銭は、壺内に錆着した3枚の他に2枚、合わせて5枚が納められていた。遊離した2枚のうち銭種が判明したのは4の大観通宝（北宋楷書初鋳1107年）のみである。

このような遺構の類例を求めるならば、平城京などで検出されているエナ壺を挙げることができよう。生まれた子供が健康に育ち出世することを願って、壺の中にエナ（後産）を銭や筆・墨とと

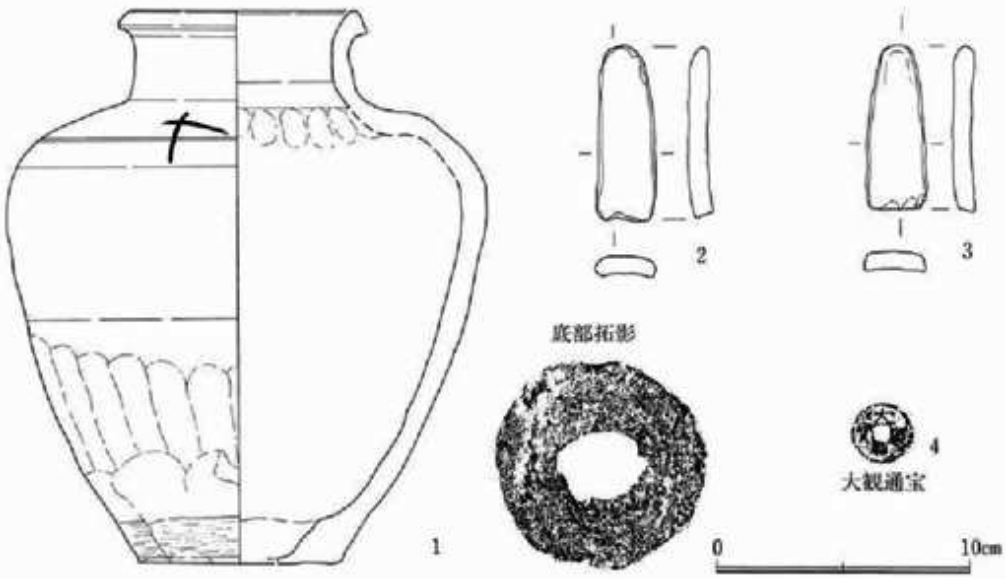



**図140　出土壺とその納入品**

もに納め、建物の入口近くの人によく踏まれる所、あるいは全く人の踏まない縁の下・床下などに埋める風習は、中国の道教の影響を受けたものとも言われ、奈良時代には都の人々の間で行われていたことが判っている。また、実際に近年まで各地に残ってもいた。

残念ながら、壺内における墨挺・銭納入状況の詳細は明らかにできず、また充填土の土壌分析もなしえなかった。さらに、関連する遺構の有無も不明である（道路・建物８ａ等との関係を考慮する必要がある）。このような状況下で本遺構の性格等について即断はできないが、仮にエナを埋納したものであるとすれば、中世に属する出土例が全国的にも恐らくなく、極めて貴重なものと言える。

## H）柱穴

既述のように、本遺跡では約200口の柱穴を検出した。しかし、明瞭な地業面がなく、土層の識別が困難な状況の下で、その多くは地山１（黒褐色粘質土）上面まで下げなければ確認できなかった。層位的な時期差が把握できず、尚且つ、調査面積の大半を方形竪穴が占めている状況では、柱穴の配列等の確認も前述の掘立柱建物と道路脇柱穴列以外にはなし得なかった。特に東側調査区においては地山１が存在せず、殆ど把握できていない。

図141は、地山１の面上で検出した遺構についての、柱穴を主とした配置概念図である。本遺跡では、少なくとも石組み方竪の優越する段階においては、明瞭な区画の中に方形竪穴が整然と配置されており、それらと柱穴群との関連は把握できていない。しかし、土壙や井戸の中には13世紀前半の様相を示す遺物を出土するものもあり、方形竪穴以前に掘立柱建物が構築されていたことを推測させる。尚、本報では柱穴及び地山１の面上出土遺物は掲載できなかった。

## I）地山落ち込み

東側調査区では、鎌倉市街地の遺跡において通常中世基盤層として把えられている地山１の存在が確認できなかった。西側調査区東端では確認されているので、恐らくE・Fライン間で消滅しているものと推測される。それは、中世の削平に起因する部分もあろうが、それ以前の地勢によるものとも考えられる。即ち、建物10・道路・溝５の項で述べたように、それらの構築段階において、本遺跡内の地形は西側に向かい傾斜して下がっていたようである。そして、それは調査区東端、F・Gライン間で一部確認された地山２の落ち込みと関係がある。

図142は、調査区東端４ライン北側に４m×0.5mで設定したG４トレンチの北壁土層断面である。これを見ると、Fラインより東へ3.5mの付近から、地山２（56層）が漸次東へ下がっている。傾斜の上場は建物31に切られて不明であり、確認レベルは4.85mである。斜面上には黒褐色系の粘質土（52～55層）が堆積するが、地山１とは異質である。そして、これらによって形成される斜面に腐植土（49・50層）が大きく流れ込んでいる。49層は極めてきめが細かく均質な土層で、かわらけなどが若干出土しているが夾雑物は少ない。道路側溝などの堆積土とは全く異なる。また、部分的に灰褐色粘質土が薄く帯状に挟まれている。これらのことから推察すれば、地山の傾斜によって生じた窪地に、ある程度の時間幅をもって漸次堆積したものである可能性も指摘できよう。

これと類似した状況は、前述のG３セクションベルト（図32）でも確認できる。やや傾斜は弱いが、ほぼGライン付近から、地山２が東へ下がり、均質な腐植土が厚く堆積する。建物30に切られるが、確認標高は4.80mであり、G４トレンチのそれと近似する。

更に、調査区北壁の道路縦断土層（図70）には、より顕著に表れている。Fラインから東へ１m程の所から地山２が急に落ち込み、そこにはやはり、かなり均質な腐植土が堆積しているのである。

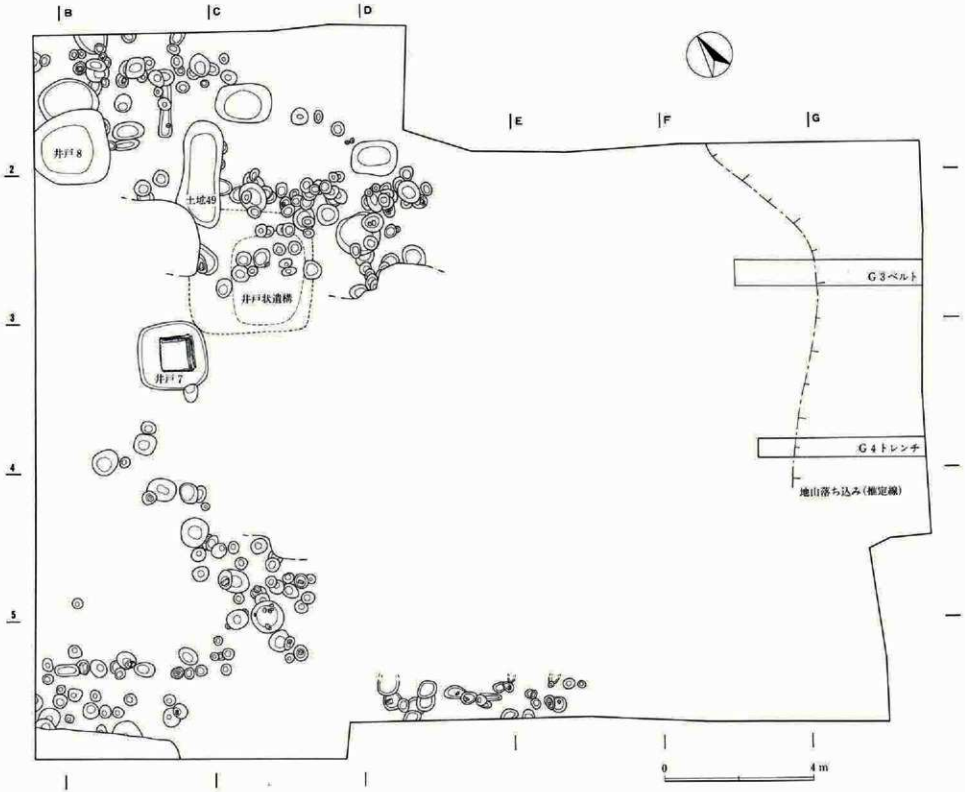
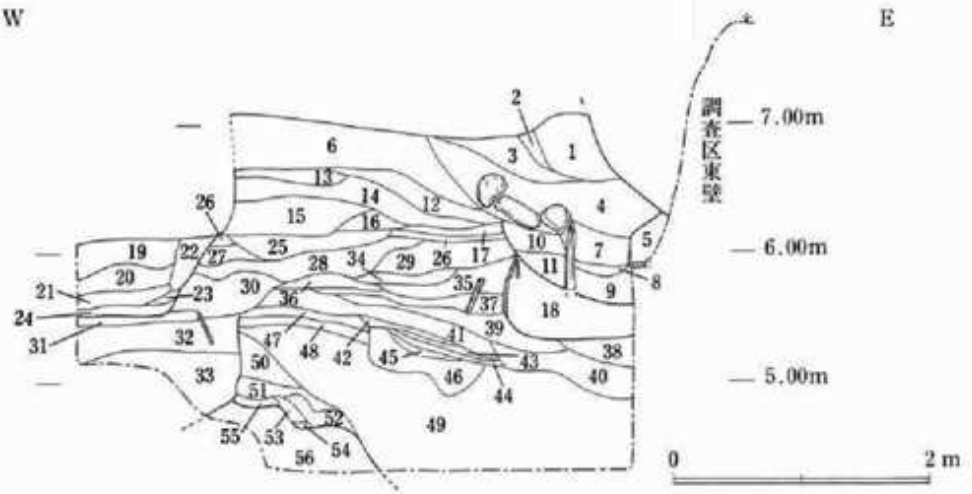



図141　柱穴・地山落ち込み

これも道路造成時に削平されている事が考えられるが、確認標高は6.20mと高い。

これらの部分的な把握から、地山の落ち込みラインを推定したのが図141である。北端で西側に大きく入り込んでいるが、これは確認レベルの差によるものである可能性が高い。調査区北壁の落ち込みの傾斜から考えれば、標高4.80mではFライン東3m付近に推定線が伸びることになる。これは逆に、G3ベルト、G4トレンチにおける削平を考慮すれば、地山落ち込みの上場推定線が本来Fライン付近、あるいはそれより西側にあったことを示唆していよう。即断は避けねばならないが、人為的に構築されたものと言うより、滑川の流路等と関わる自然地形の可能性がある。いずれ周辺の発掘調査によって明らかになろう。




〈土層注記〉

1. 土丹版築層　準大土丹集積…溝7西壁構成土。
2. 黄灰褐色粘質土　土丹粒・炭化物やや多。
3. 黄茶褐色粘質土　土丹粒多。
4. 灰茶褐色粘質土　土丹塊・玉石。粘性強。
5. 茶褐色粘質土　溝8覆土？
6. 明茶褐色粘質土　土丹小塊・粒を密に含む。
7. 土丹層　大土丹塊充填。
8. 黒褐色砂層　粗砂。貝殻多。木片。　溝9覆土
9. 暗茶褐色粘質土
10. 灰褐色粘質土
11. 褐色粘質土
12. 土丹版築層　土丹小塊を密。
13. 茶褐色弱粘質土　土丹粒多。
14. 明茶褐色弱粘質土
15. 明茶褐色弱粘質土　貝片・粒やや多。
16. 茶褐色弱粘質土　貝片多。炭化物やや多。
17. 黒褐色粘質土　粘性に富む。
18. 暗茶褐色粘質土　木片を含む。しまりなし。溝10覆土
19. 灰黄褐色弱粘質土
20. 暗茶褐色粘質土　土丹粒やや多。
21. 黄褐色粘質土
22. 黄茶褐色弱粘質土
23. 暗茶褐色粘質土
24. 黒褐色粘質土　灰色砂多く混入。　建物25
25. 暗灰褐色弱粘質土　木片を含む。
26. 暗茶褐色弱粘質土
27. 暗灰褐色弱粘質土
28. 灰褐色弱粘質土　炭化物帯状に流入。
29. 灰茶褐色粘質土
30. 灰茶褐色粘質土
31. 土丹層
32. 黒褐色粘質土　灰色砂多く含む。　建物31
33. 灰色砂層　茶褐色粘質土塊混入。
34. 褐色粘質土　粘性に富む。
35. 灰褐色粘質土　貝片・炭化物多。
36. 黒褐色粘質土　粘性に富む。
37. 灰茶褐色粘質土　粘性に富む。
38. 暗灰色砂層　木片・貝片多。
39. 暗茶褐色粘質土　腐植土。
40. 灰褐色粘質土　腐植土層が帯状に流入。
41. 灰褐色粘質土
42. 暗茶褐色粘質土　腐植土。
43. 黒褐色粘質土　褐色砂多。
44. 灰褐色粘質土　炭化物。
45. 暗茶褐色粘質土　腐植土。
46. 灰黒褐色粘質土　しまりあり。粘性に富む。
47. 明茶褐色粘質土　腐植土。
48. 灰褐色粘質土
49. 茶褐色粘質土　腐植土。灰褐色粘質土帯状に入る。しまりあり。粘性に富む。
50. 暗茶褐色粘質土　腐植土。
51. 暗灰色砂質土
52. 黒褐色粘質土　しまりあり。粘性に富む。
53. 暗茶褐色粘質土
54. 黒色粘質土
55. 黒褐色粘質土
56. 青灰色砂層　地山2の還元層

**図142　G4トレンチ土層図**

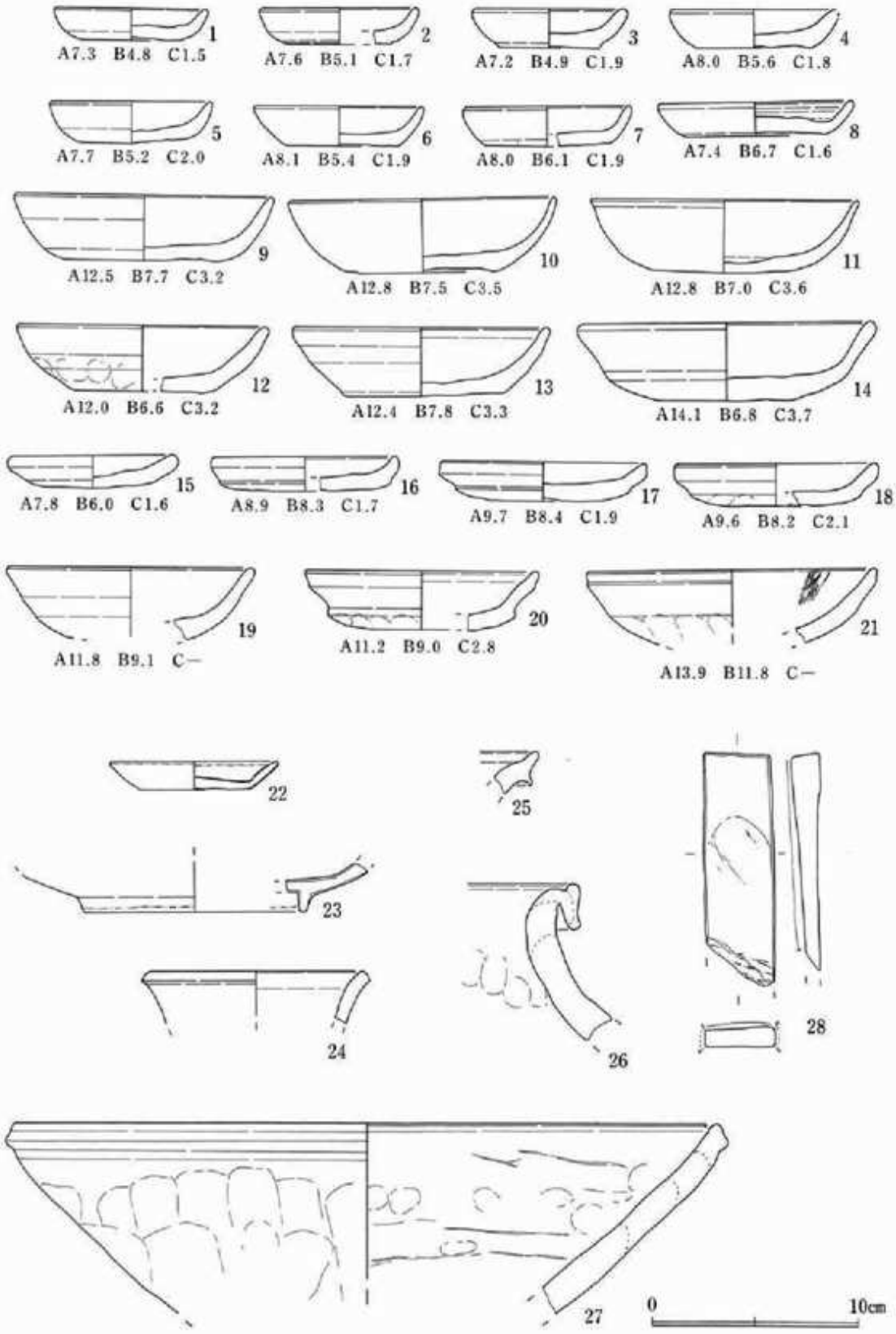



**図143　G４トレンチ上層出土遺物**

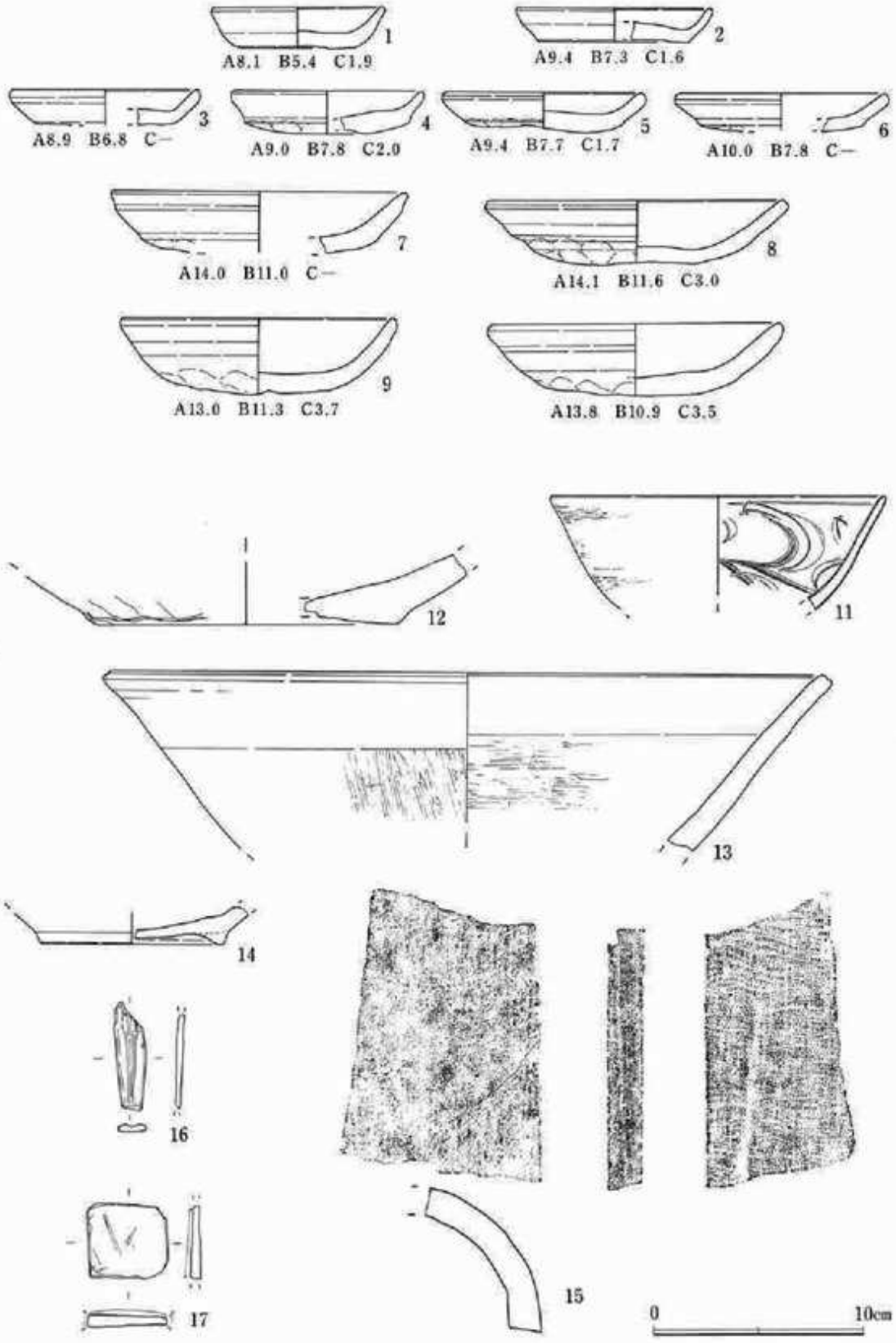



**図144　G 4 トレンチ下層出土遺物**

### G４トレンチ出土遺物（図143・144）

幅の狭いトレンチゆえ、出土遺物に若干の混乱は避けられないが、概ね49層より上とそれ以下とで分けて取り上げ、前者を上層として図143に、後者を下層として図144に示した。

図143－１～21はかわらけ。１～14がロクロ成形。上層遺構に帰属すべきものがかなり混入したものと思われる。15～21が手づくね成形。器壁が全体に厚手で、器高も高めになっている。

22は白磁口兀皿。1/4片。胎土は光沢があり緻密な白色土。釉はやや茶色味を帯びた淡青白色で透明感があり、外底は雑に拭き取られている。復元口径7.9cm、底径5.2cm、器高1.4cm。

23は青磁鉢。高台部1/4片。胎土は堅緻だが焼成にムラがあり、側壁は灰白色、高台付近は橙色を呈す。釉は淡緑色でやや細かな貫入が入る。釉層厚く気泡を含むため失透。復元高台径10.7cm。

24は渥美窯の壺と思われる。口縁部約1/4片。端部は外反して小さく外側に引き出され、断面三角形となる。胎土は微砂質でやや締まりに欠け、ごく少量の鉄分粒を含む。施釉は明瞭には見られず、口唇部に自然降灰が淡く掛かっている。復元口径10.3cm。

25・26は常滑甕。25は縁帯の下方への引き出しが弱い。26は幅の狭いN字状の縁帯をもつ。

27は常滑こね鉢。口縁は断面三角形を呈し、鉢類の中でも古相を示す。胎土はやや粒径の小さい白色粒を含むが、総じて緻密で良く焼き締まっている。色調明茶褐色。復元口径は34.2cmを測る。

28は砥石。黄灰色泥岩製の仕上げ砥。片面はよく使用されているが、もう一方の面は剝離して不詳。残存長11.2cm、幅3.4cm、残存厚1.4cm。

図144－１～10はかわらけ。１・２のみロクロ成形、他は手づくね成形である。手づくねの一群は概ねやや厚手で器高も若干高いが、49層の最下層で出土した８は薄手で器高が低く、口唇端部の上方へのつまみ上げ方など、比較的古手に属すると見られる。

11は青磁劃花文碗。口縁直下に１条の沈線が巡り、蓮華文が片切彫りされる。胎土は淡灰色で堅緻。釉は淡緑色透明で、釉層は薄い。復元口径15.9cm。

12は渥美。甕底部片と思われる。外底には若干の粗砂と籾殻圧痕が見られ、体部外面はヘラナデ、内面はナデにより仕上げられる。胎土は微砂質で少々気孔をもつ。復元底径14.1cm。

13は常滑こね鉢。外面は縦位、内面は横位の板ナデの後、口縁付近をヨコナデしている。端部は肥厚せず、明瞭な沈線が１条巡る。胎土は白色粒をやや多く含むが、非常に堅く焼き締まっている。色調はやや褐色がかった暗灰色、口縁に暗灰緑色の自然降灰が掛かる。復元口径34.5cm。

14は山茶碗。潰れた三角形の高台が貼り付けられ、内面は摩耗する。胎土はやや砂質できめ細かいが、気孔が多く粗である。色調は褐色がかった灰色を呈する。復元底径8.8cm。

15は男瓦。凸面は縄目叩きの後、縦位の丁寧なナデで調整、凹面には布目痕を明瞭に残し、側面はヘラケズリされている。胎土は細砂・白色粒・若干の小石を含むが良土で、焼成も堅い。色調は灰色だが二次焼成を受けたらしく、過半が灰黒色に変色している。

16は骨製笄小片。片面にU字の浅い溝をもつ。

17は砥石断片。淡黄灰色泥岩製の仕上げ砥。片面は剝離している。

## J）遺構外出土遺物

本項では、遺構外から出土した遺物の内、重立ったものを取り上げて紹介する。本来図示せねばならない遺物は多数あるが、紙数の都合で割愛した。

尚、これらの内、B－5グリッド上層出土として取り上げた遺物には注意を要する。図示したように、そこには貿易陶磁の優品が目に付く。表土掘削直後で土層が不明瞭だった上、調査区際だということもあり、その帰属・出土状況を明らかにできないのは残念だが、出土位置からして切石列2に関連する可能性が高い。

図145－1は青磁折腰鉢。約1/4片。胎土は微量の黒色粉粒を含むが堅緻な明灰色土。釉は灰色がかった淡緑色で半透明、口唇角は明茶褐色の発色に縁どられる。全体にやや粗い貫入あり。復元口径8.3cm、高台径4.4cm、器高3.1cm。B－5上層出土。

2は青磁鉢小片。比較的明瞭な魚文（龍？）を貼り付ける。胎土は堅緻な灰白色土だが気孔をやや多くもつ。釉は草緑色で透明感がある。復元高台径は10.4cmだが不安。西側調査区上層出土。

3は青磁香炉。いわゆる袴腰である。約1/2片。失われているが三足が付くもので、貼り付けの際に生ずる空洞が焼成によって破裂するのを防ぐため、底部を貫通する小孔が開けられている。折損部は丁寧に削って再調整している。恐らく足の一部が欠損した段階で、総て折り取って再利用したのであろう。胎土は若干の黒色粉粒を含む堅緻な灰白色土。釉は淡緑色半透明で、外表は再火により発泡、一部黒変している。復元口径7.0cm。B－5上層出土。

4は青磁花生。底部1/4片。下膨形と呼ばれる、下膨れの胴部に長く伸びた頸がつくものであろう。胎土は淡茶白色でやや陶質。釉は淡緑色不透明で、内底は露胎、畳付部は拭き取られるが茶褐色に発色している。復元底径6.1cm。西側調査区上層出土。

5は青磁植木鉢。底部1/4片。体部下半に隆線を巡らせ、外底内側を削り込んで鈍重な高台を作り出し、底部中央を大きく穿孔する。胎土は夾雑物のない堅緻な白色土。釉は淡緑色半透明、畳付部と内底外縁は拭き取られ、内底には溶着した重ね焼きの痕跡も残る。復元高台径8.8cm、孔径4.7cm。E－5下層出土。

6は緑釉陶器小片。露胎の内面にロクロ目が明瞭に残る。壺の胴部であろう。胎土はやや紫がかった褐色を呈し、若干の粉粒を混じえるが堅緻。その表面に白色土で文様（唐草か）を描き、施釉。文様部分は透明感のある緑色に発色し、それ以外は暗い深緑色に沈み込む（図の黒塗り部分）。再火による銀化及び細かな貫入、傷などで文様は不明瞭である。E－5下層出土。

7は青磁合子蓋。小片だが外縁の屈曲する角度から八角形と考えられ、図のように復元できた。文様は型押しで、体中位で外形と同じく八角形の段差をもって内外を区割し、内側には不詳だが櫛目状の文様、外側には唐草文を配する。胎土は灰白色で堅緻。釉は外面が青緑色不透明、内面は淡青灰色で、下端は拭き取っている。復元口径9.2cm。西側調査区地山1面上出土。

8は白磁合子蓋。外縁の一部が僅かに凹んでおり、輪花状になると思われる。草花文が外面に型

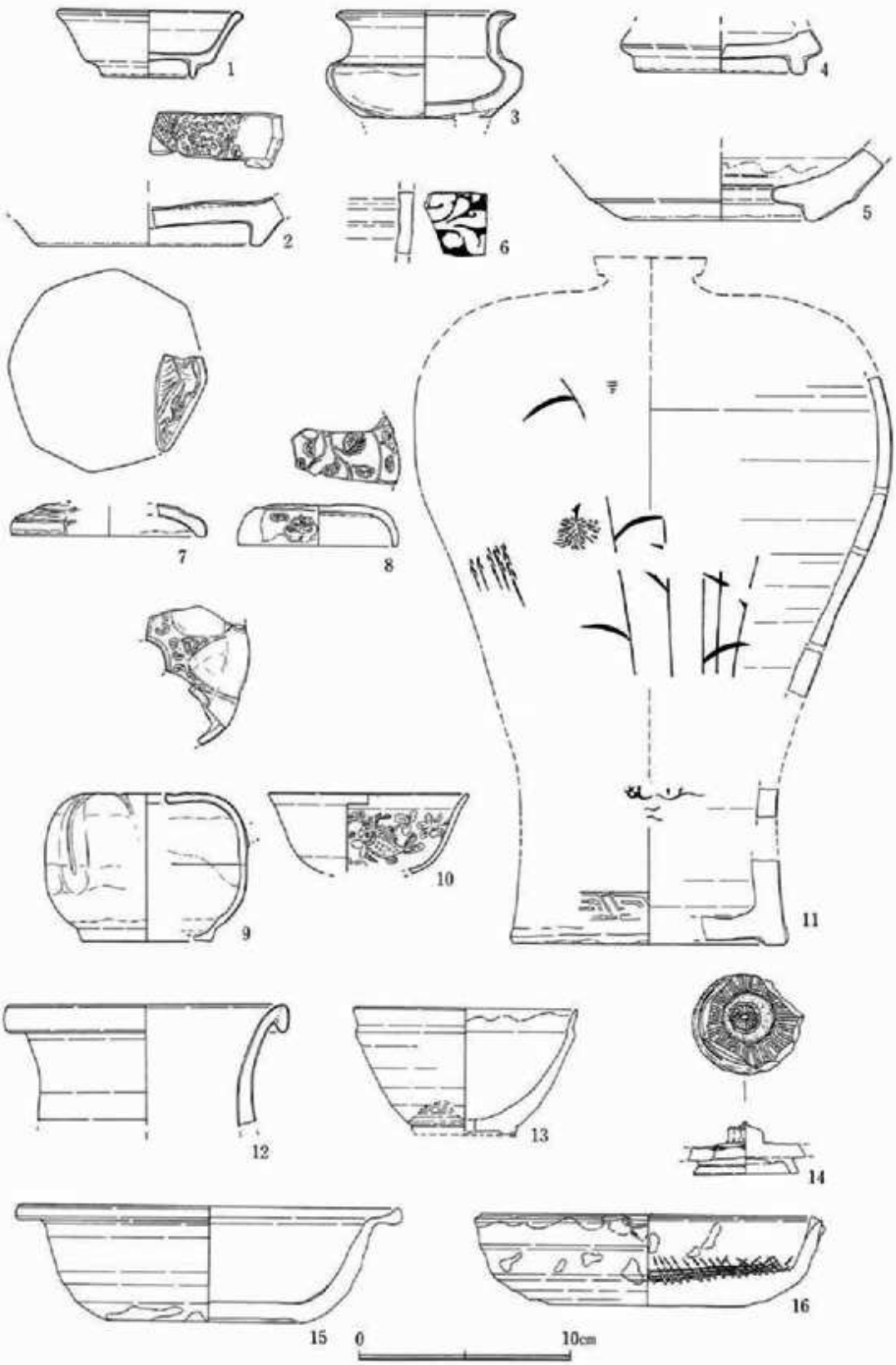



図145　遺構外出土遺物(1)

**図146　遺構外出土遺物(2)**

押しされる。胎土は夾雑物なく堅緻な灰白色土で、光沢をもつ。釉は淡く緑色がかった灰白色でやや透明感がある。下端から内側面にかけては露胎。復元口径7.4cm、器高1.9cm。B－5上層出土。

9は青白磁水注。約1/5が残る。上下別個に型押しにより成形して接合、瓜形に作っている。肩上面、口縁外周には瓜の凹みにあわせて瓔珞を思わせる装飾が施され、体部中位やや上（破線部分）には注口の接合痕の一部が僅かに残る。胎土は乳白色堅緻。釉は淡青白色で透明感があるが、凹みなど釉層の厚い部分では発泡白濁している。体部下端から外底、及び内面中位は露胎。復元口径1.9cm、最大径9.6cm、底径6.2cm、器高6.9cm。B－5上層出土。

10は白磁小碗。1/3片。内面に魚文と蓮華文が型押しされている。胎土は白色堅緻。釉は淡く青味を帯びた白色だが、特に外面に微細な発泡が見られ、茶白色の物質が溶着する。再火によるものか。復元口径9.4cm。B－5上層出土。

11は高麗青磁象嵌瓶子。僅かに残る各部断片より復元したものであり、その法量や部位については不安がある。象嵌の意匠には柳と蒲、若干の波紋が見られ、下端には雷文帯が巡る。これに水鳥が配されれば、いわゆる「蒲柳水禽文」となろう。蒲の花弁と雷文は白泥、それ以外は黒泥で象嵌されている。胎土は黒色粉粒、微気孔を含むが堅緻で光沢をもつ灰色土。釉はやや暗い灰緑色で半透明。高台畳付部のみ露胎で、内面にも薄いが均一に釉薬が及んでいる。復元最大径22.8cm、高台径13.0cm程となろうか。B－5上層出土。

12は白磁壺。約1/6片。四耳壺の頸部であろう。中程で弱く屈曲して外反、口縁は下方に折り返されて玉縁状になる。胎土は若干の気孔をもつが灰色堅緻、光沢がある。釉は淡青灰色半透明、やや細かな貫入が見られる。外面は再火のためか、微細に発泡してくすんでいる。復元口径13.0cm。B－5上層出土。

13は瀬戸灰釉天目茶碗。体部外面下端は横位二段のヘラケズリ、以上はヨコナデで若干内湾しながら開き、口縁は一旦内屈し小さく外傾。高台は低く幅広に削り出される。胎土は灰色精良で堅い。釉は透明感のある淡緑色で外面下端まで掛けられるが、大きく剥離し内面口縁以下にのみ残る。復

元口径10.4cm、高台径（推定）4.8cm、器高（推定）6.1cm。G－4上層出土。

14は瀬戸蓋。壺類の蓋であろう。上面中央には菊花文を施した宝珠形鈕を貼り付け、その周囲に少し間隔を開けて放射状に11分画、各々に蓮弁文を配する。型押し。下面には高台状に貼り付けて「かえり」を作る。胎土は黄色味の強い白色土で焼き締まる。釉は鉄釉で上面にのみ掛けられるが、発泡して文様が不明瞭。再火によるものか。鈕径1.7cm、「かえり」径5.0cm。G－2上層出土。

15は瀬戸折縁深皿。体部は丸みをもって立ち上がり、口縁は水平に折られ端部を小さくつまみ上げる。外底は糸切りで灰黒色にくすむ。胎土は灰白色でやや粗い。釉は外底を除いて掛けられ、淡緑色を呈する。口径17.8cm、底径9.3cm、器高5.4cm。B・C－3上層出土。

16は瀬戸卸し皿。糸切りの厚い底部から体部が緩やかに開き、中位で屈曲して上方に立ち上がる。口縁は端面に沈線が巡り、弱く外方に突出、小さく片口がつまみ出される。卸し目は斜格子状に深く内底全面にしっかり刻まれ、使用により若干摩滅している。胎土は微砂を僅かに含む精良土だが、焼成不良のためか淡橙灰色（肌色）を呈しており、ハケ塗りの灰釉も殆ど発色していない。復元口径14.4cm、底径9.3cm、器高4.3cm。B－2上層出土。

17は泥人形。左前胸部の破片。型押しによる成形と見られ、内面には不整に指頭痕が残る。外面は全般に磨かれているが、頸部に沿って横にナデ、肩から腕にかけては背面との型合わせによる凹凸を消すように縦のナデが入る。また、脇の凹みをヘラナデ調整して腕の輪郭をはっきり出そうとしている。乳頭は粘土小粒を無造作に貼り付け、頸部内側には粘土を継いだ痕跡がある。胎土はかわらけ質できめ細かく、白針・白粒・赤色泥粒を含む。色調淡橙褐色。試掘坑出土。

18は土馬。頸・脚・尾は欠損。背中に人あるいは荷が貼り付けられていたようで、胴両脇に粘土小塊が痕跡的に残る。背上面が灰黒色になっているのはそのための焼成ムラであろう。胎土はかわらけ質だが輝粒を非常に多く含みやや粗。色調淡橙褐色を呈す。C－2上層出土。

19は骨製野沓片。右端外縁には小刀による面取りが施され、全体によく磨かれている。表面は毛彫りで外形に沿って1条の沈線を画し、内側に渦文と波頭文を思わせる文様を配する。裏面の一部には網状組織の小孔が表出する。止め金具の孔は裏面に向かってややすぼまるように穿たれている。残存長5.2cm、厚さ0.6cm、孔径（表面）0.7cm、同（裏面）0.55cm。E－2上層出土。

20は鉄製品。平面撥型で、方柱状の基部から末広がりに一方に反って薄くなり、刃部を形成する。形態的には横斧であり、手斧と考えられるが、通常は鉄斧を袋状にして柄の着装部にとりつけるものであり、装着法が異なる点疑問が残る。残存長9.8cm、残存刃部幅6.1cm、基部幅3.1cm、同厚2.7cm。G－2下層出土。

# 第四章　まとめ

本遺跡は、鎌倉市街の中心部、宇津宮辻子幕府（1225～1236）があったと推定される区域のすぐ南に隣接する地区に位置している[1]。調査では、いわゆる方形竪穴建築址を主とする中世の遺構群がかつてなく良好な遺存状態で発見された。いま一度その内訳を述べるならば、方形竪穴建築址29棟、掘立柱建物址１棟、道路１条、溝７条、井戸10基、土壙約70基、柱穴約200口、特殊遺構として合わせ口かわらけ１、壺埋納遺構１基、かわらけ溜まり３カ所、地山落込み等である。しかしながら、本報は国庫補助事業にかかる部分を対象範囲としており、原因者負担分における未報告の遺構・遺物を含めた総括については、正式報告書に委ねなければならない。よってここでは、現地調査と整理作業を通じて注意された点のうち幾つかを列記することで、不十分ながらまとめに代えさせていただく。

小町大路について　　小町大路は、『吾妻鏡』では鎌倉の最初期から登場する（建久二（1191）年三月四日条）。この道は鎌倉の中枢と和賀江島を結ぶ経済要路であり、遅くとも和賀江島が築造された貞永元（1221）年頃までには整備されていたものと考えられる。調査開始当初は道路遺構そのものの検出の期待もあったが、残念ながら丁度側溝の中心が調査区境となってしまった。少なくとも調査区の範囲内では、鎌倉時代初期までさかのぼるような側溝、あるいは関連遺構は確認されていない。

現在の小町大路は、中程で「く」の字状に曲がっており、若宮大路の軸線に対して全く平行関係にない。これまで小町大路沿いでの調査例は殆どないが、希少な調査事例である北条泰時・時頼邸跡で、トレンチによって検出された木組みの溝は、現在の小町大路にほぼ平行することが確認されている[2]。一方、本遺跡検出の側溝も、現在の道筋とおよそ平行関係にある。

これらのことから推測するならば、中世の小町大路も、現況とさほど変わらない形で屈曲していたのではないかと考えられる。そうであれば、鎌倉の町並が、多分に周囲の地勢に影響され、「歪め」られたことを物語るものであろう。

区画について　　調査区北側を東西に走る道路は、南側の切石列１・２及び土丹列１・２、あるいはその前段階の溝５とほぼ平行している。道路の中軸線と切石列・土丹列及び溝５との間隔は約15mである。これは中世の単位で言うと、およそ五丈（一丈≒３m）ということになる。ここで想起されるのは、戸主という家地面積の基本単位であろう。一戸主は五丈×十丈（約15m×30m・約450m）である。今仮に、今回検出された小町大路側溝を東の堺として西に30mを取ると、６mほど調査区を西に外れてしまうため、本遺跡の区画が一戸主という単位を「忠実」にあてはめたものなのかどうか判然しない[3]。しかし、ある時期には明確な区画の中で、小町大路側を「表」として方形

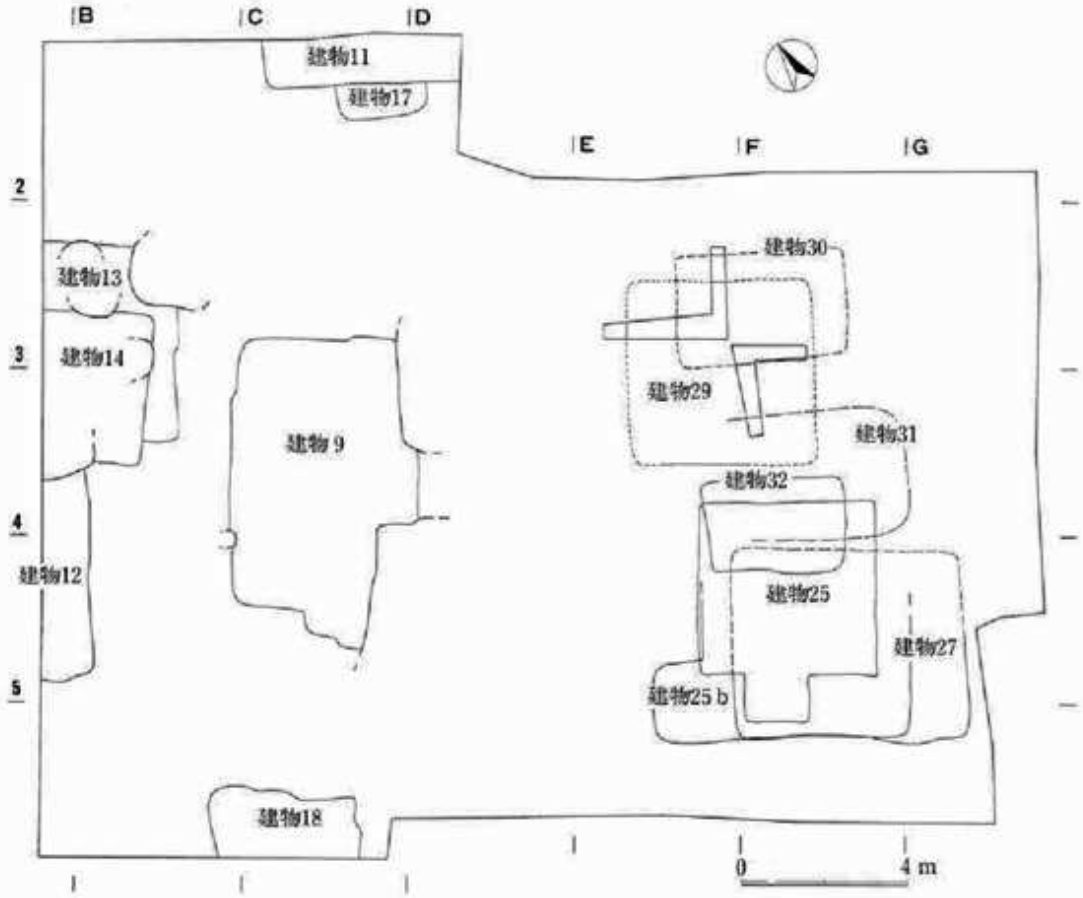



**図147　建物配置概念図(1)　—「木組み」方形竪穴—**

竪穴群が整然と並び建ち、その「裏手」に井戸が掘られる様子が見て取れる。

本遺跡の方形竪穴は、土丹塊を莫大量投げ込んで埋め立てられているものが目立つ。そしてその殆どが「石組み」方形竪穴であり、「木組み」方形竪穴の覆土に多量の土丹塊を含む例は確認されなかった[4]。市中における土丹の利用については、13世紀中葉以降、谷戸の開発によって切り崩された土丹などが、平地部の地業に用いられたことが指摘されている[5]。勿論、本遺跡では土丹塊は個別竪穴の埋葬に用いられたものであり、広範で堅固な地業のために使用されたものではない。しかし、それは本文で見てきたように、多く新たなる建物建築の為の基礎地業を兼ねているのである。加えて、ふんだんに使用されている鎌倉石切石や、木材の規格の大きさに留意せねばなるまい。

市内でこれまでに検出された方形竪穴は767軒に上るが、その内「石組み」のものは56軒と0.7%に過ぎない[6]。それも通常は、多数の「木組み」方形竪穴に混じって1～2軒が散発的に見られるのみである。本遺跡検出の「石組み」方形竪穴は10軒[7]を数えるが、これほどに密集するところは知られていない[8]。

こうした「石組み」方形竪穴の性格ついては、これまでのところ倉庫と見なす説が一般となりつ

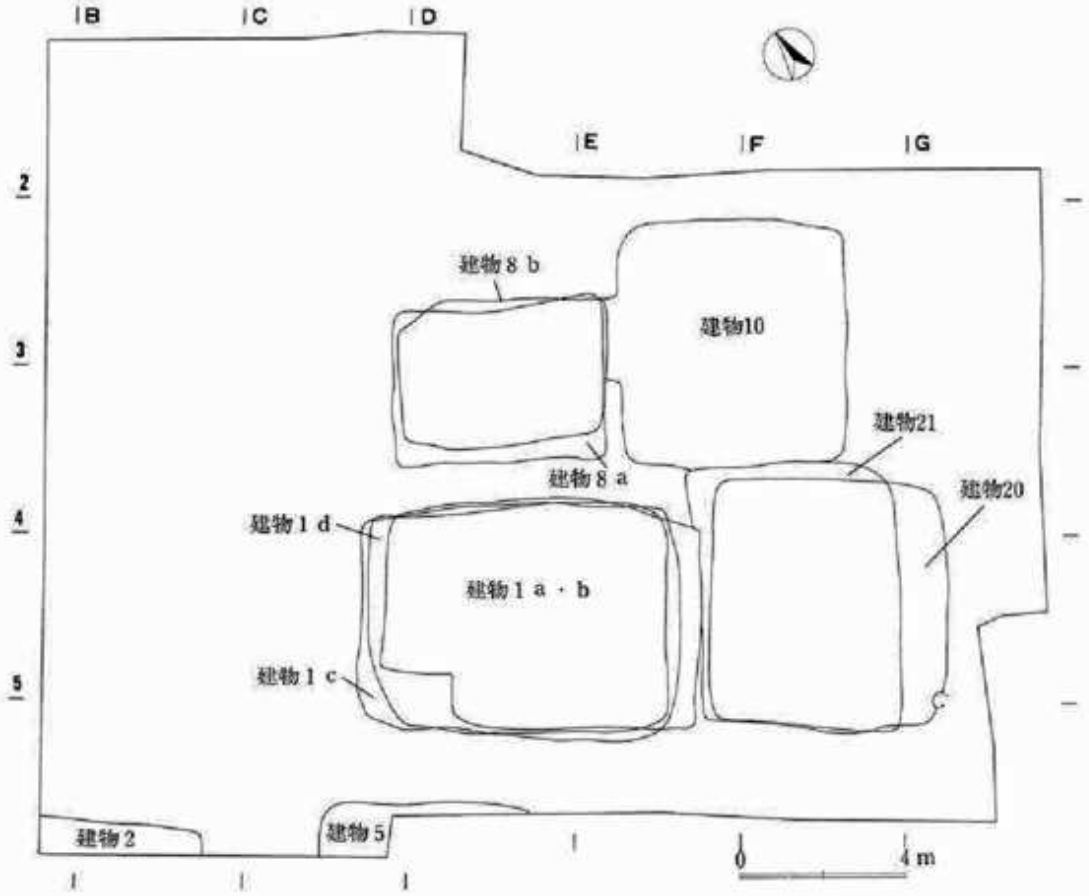



**図148　建物配置概念図(2)　—「石組み」方形竪穴—**

つある[9]。出土遺物に徴証もなく予断であるが、立地や構造からして、本遺跡の方形竪穴も、少なくとも「石組み」のものについては、倉庫の役割を担った蓋然性が高いと考える。

遺跡の年代については、出土遺物の総括がなされていない現段階では、詳しく言及できない。以前、遺構の大まかな変遷を示したことがある[10]。大要は、掘立柱建物から「木組み」方形竪穴、更には「石組み」方形竪穴へという図式だが、極めて雑駁なものである。

今少しこれに加えるならば、13世紀初頭～前半の遺構は地勢の高い調査区西側を中心に分布し(井戸8や若干の土壙など。明確にならないが掘立柱建物の存在を推定)、この段階では西側は低湿で未だ土地利用が希薄あるいは始まっていない。次いで、本遺跡内で、方形竪穴を規制するような区画がいつ頃成立するのかは、大きな問題であるが、南側を画する溝5の存在から、方形竪穴が主として登場する前段階、およそ13世紀中頃に一つの画期が措定できる。道路もこの頃に造られた可能性がある。方形竪穴は13世紀後半にまず「木組み」が現れる。この段階では、遺存状況の問題もあるが、その配置に明確な規制は見出しにくい。それらがほぼ一斉に「石組み」構造になり、配置も小町大路側に4棟が整然と並ぶようになる。その時期についてはもう少し検討しなければならないが、

方形竪穴はおよそ14世紀半ば頃まで存続するものと思われる。

図147・148は、それぞれ「木組み」と「石組み」の方形竪穴の遺跡内配置を示した概念図である。今述べたように両者は概ね前後関係にあるが、このままでは遺構の変遷図にはならない。例えば建物25ａは「木組み」であるが、その位置や規模等は「石組み」に準じたものと見られる。出土遺物や切り合い関係を踏まえ、詳細に検討する必要がある。

出土遺物については、破片数による計量を行っているが、十分な整理ができていないため本報では割愛した。概ね、かわらけが群を抜き、ついで常滑の甕類、山茶碗窯系鉢と続くが、貿易陶磁も多く出土している。それに比して瀬戸は少なく、備前は殆ど入っていない。かわらけは９割以上がロクロ成形のものである。また、銭の出土数が約540枚と、調査面積（約400㎡）に比して非常に多い[10]。そしてその中には、鎌倉でも出土例の希少な大型銭貨が２枚含まれていた(建物１ｄ出土遺物の項を参照)。遺跡の性格の一面を端的に物語っているように思われてならない。

**註**

(1) 宇津宮辻子幕府の位置については、最近、松尾剛次氏の一連の研究成果がある（『中世都市鎌倉の風景』吉川弘文館　1993　など）が、考古学的には未だ明らかになっていない。しかし、いずれ本地点北側は幕府や御家人の宿館の建ち並ぶ武家地であろう。

(2) 菊川英政「北条泰時・時頼邸跡　雪ノ下一丁目432番２地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書５　昭和63年度発掘調査報告』鎌倉市教育委員会　1989　ここでは木組み溝より古い、13世紀前半と考えられる溝の存在が想定されている。

(3) もっとも、どこをもって境とするかは、土地利用の問題、それに伴う敷地の変遷等とも絡めて留意せねばならない。

(4) 建物25ａは「石組み」に準ずる（後述）。尚、方形竪穴の建築構造については適確な名称を与えられないので、本報では暫時「木組み」・「石組み」と仮称した。

(5) 馬淵和雄「中世鎌倉における谷戸開発のある側面」『鎌倉』69　鎌倉文化研究会　1992.５　氏は、そこに「行政権力による町並みの統御」を認められている。

(6) 沙見一夫「方形竪穴建築址再考」第１回中世都市研究・討論会レジュメ『都市内の収納・貯蔵』中世都市研究同人会　1993.12　において提示された数値による。

(7) 延数。建物１ａについては、独立的に機能したとは考えにくいので省いた。

(8) 今小路西遺跡（御成小学校内）第５次調査の北街区では、同様の石組みをもつ大型竪穴がやや集中している。河野眞知郎『今小路西遺跡（御成小学校内）第５次発掘調査概報』同調査団　鎌倉市教育委員会　1993.８　また、本遺跡と指呼の間にある若宮大路周辺遺跡群（スポーツクラブ用地　図１－４）でも、遺構の軸線は異なるが、石組みの方形竪穴が３棟検出されている。富田　真「若宮大路周辺遺跡群（スポーツクラブ用地）の調査」『第３回鎌倉市遺跡調査・研究発表会発表要旨』鎌倉考古学研究所　中世都市研究会　1993.８

(9) 斉木秀雄「鎌倉石を使用した建物について－方形竪穴と板壁掘立柱建物の紹介をかねて－」『鎌倉考古』№21　鎌倉考古学研究所　1992.２など。尚、本地点及びその周辺の遺存状況良好な方形竪穴の検出を一つの契機として、1993年12月に第１回中世都市研究・討論会『都市内の収納・貯蔵』－方形竪穴建築址の性格と分布を含めて－（主催：中世都市研究同人会）が開かれ、そこでも一応「倉」としての性格が措定されたように思う。

(10) 佐藤仁彦「若宮大路周辺遺跡群（秋月医院跡地）の調査」『第３回鎌倉市遺跡調査・研究発表会』鎌倉考古学研究所　中世都市研究会　1993.８

(11) 銭が多数出土した遺跡としては、千葉地遺跡（約900㎡で625枚）、［推定］藤内貞員邸跡（約750㎡で567枚）などがあるが、いずれも「町屋的な場」と考えられる所である。〈参考〉河野眞知郎「中世鎌倉銭貨考」『創立三十周年記念　鶴見大学文学部論集』1993.３

# 写　真　図　版

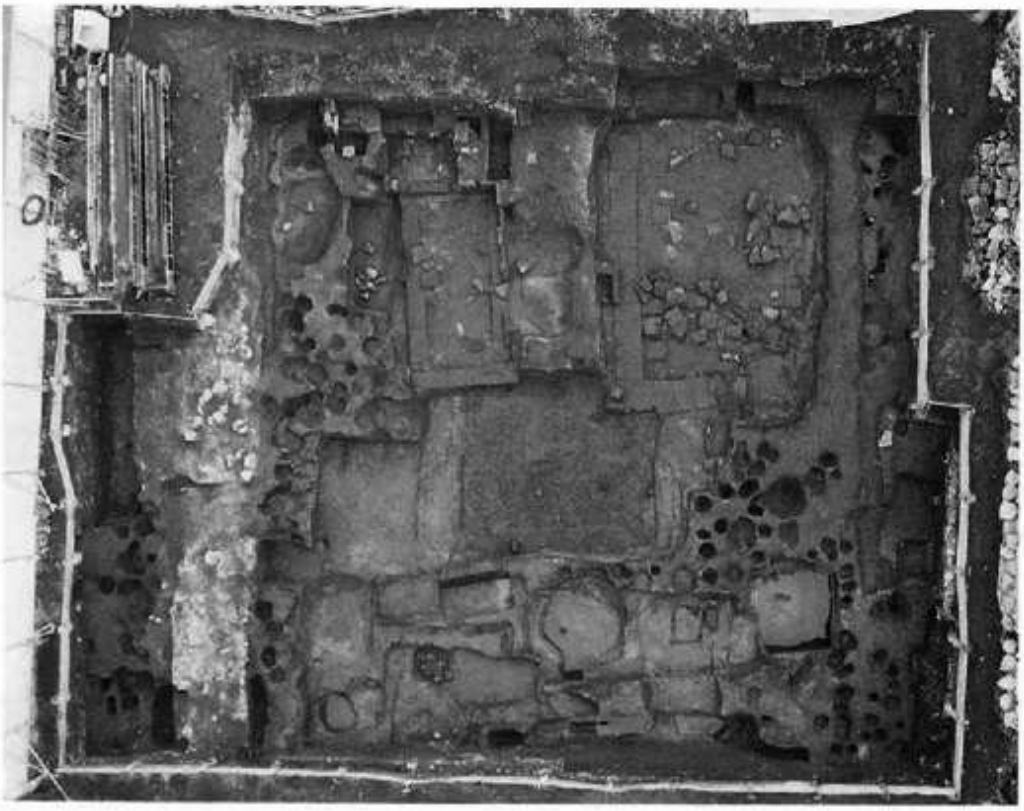
A．空撮遠景(上が北)

B．空撮近景(右が北)

PL. 2

A．西側調査区全景(左が北)

B．東側調査区全景(左が北)



◀A．建物１ａ(東から)

▶B．建物１ａ遺景(東から)

建物１ａの東側に広がる方形の土丹集積範囲が建物１ｂのプランである。

◀C．建物１ｂ(南東から)

PL. 4

▲A．建物１ａ南西コーナー(北東から)

▲B．建物１ｂかわらけ出土状況(南から)

左上に倒覆している大きな切石の直下に石を穿ったピット（写真左）がある。

▲C．建物１ｂ床面ピット(東から)

▲D．建物１ｂ石敷き状況(西から)

建物１ｃ石敷面上に12～３cm土盛りして地覆石を敷き並べる。

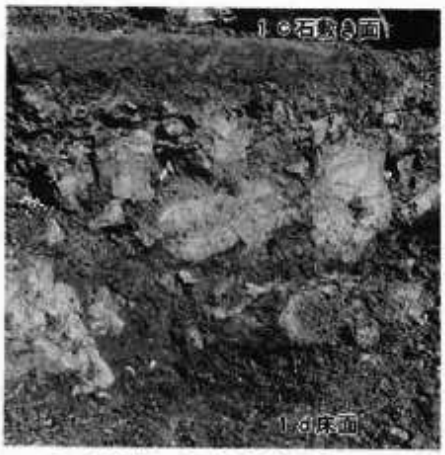
◀E．建物１ｂ南壁裏込め土層断面(東から)

A．建物１ｃ(東から)

B．建物１ｄ(東から)

PL. 6

◀A．建物１ｄ主屋部西辺上
切石乱積状況(南から)




▲B．建物１ｄ覆土土層断面

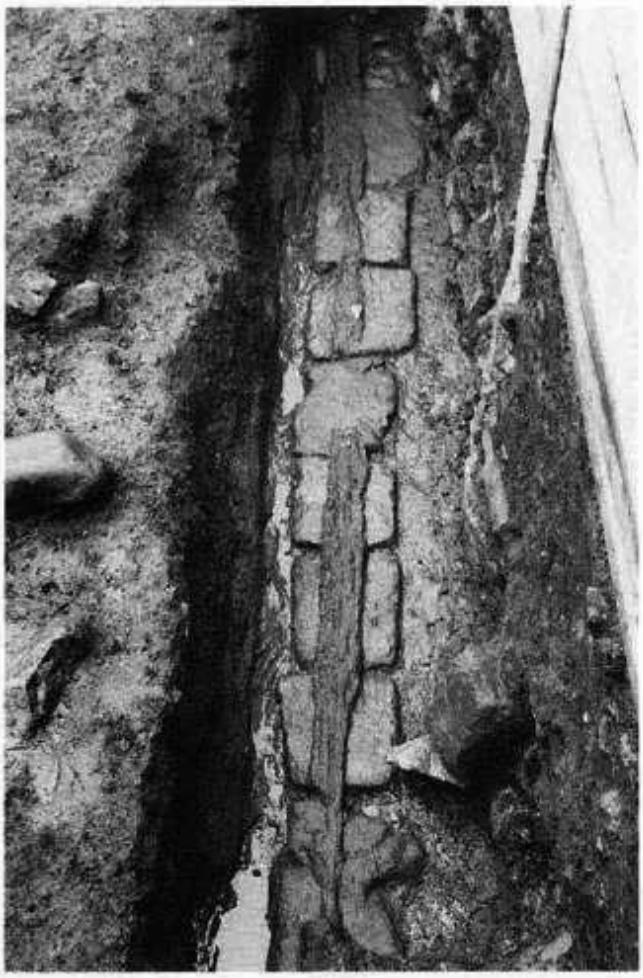
80cmほど土丹塊を投げ込み、その上に建物１ｃの床石を敷く

▲C．建物１ｄ東壁裏込め土層断面

左半の土丹集積が建物内覆土である。

▲D．建物１ｄ錦出土状況

◀E．建物１ｄ樹皮出土状況



◀A. 建物 2（西から）

◀B 建物2覆土土層断面

PL. 8

◀A．建物８ａ(東から)

▶B．建物８ａ西辺地覆石列(南から)

どれも中程付近で折れ、西側部分はやや沈下している。

◀C．建物８ａ下土丹集積状況(東から)

この土丹は建物８ｂの埋土に投げ込まれたものである。

▶A．建物8 b(東から)

▼B．同覆土断面(東から)

殆ど土丹塊で埋め尽くされている。

PL.10

◀A．建物9（北から）

◀B．同南盤羽目板
正面

▼C．同南西隅土台組み状況

▼D．同東辺土台下の礎板

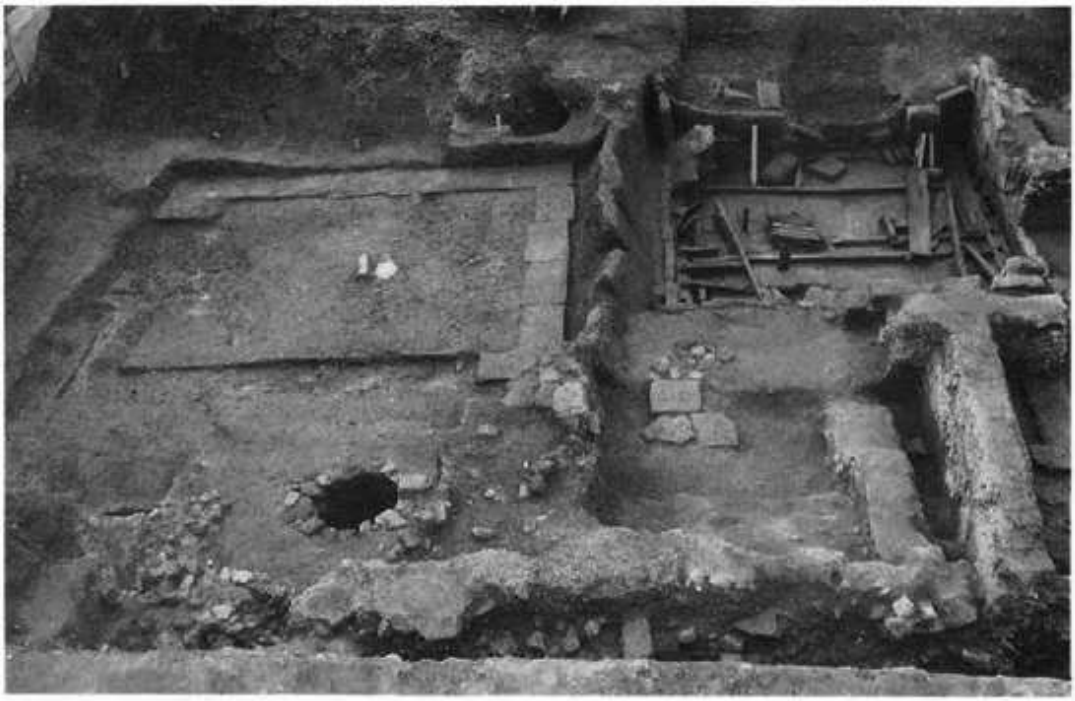
◀A．建物9東辺土台・根太接続状況(北から)
ベタ付けではなく、ほぞを切って組んである。

▲B．同西辺土台・根太接続状況(北から)
同じくほぞ組みである。

▼C．同根太中央部接続状況(西から)

▲D．同床面鋤・雑出土状況

PL.12



A．建物10(右)、21(東から)

B．建物10(西から)

◀A．建物10覆土土層断面
（南から）

土丹層の下には炭化物を主とした層が堆積する。

▶B．同南壁切石倒覆状況(東から)

◀C．同北東隅切石乱積状況
（北西から）

PL.14

◀A．建物10北壁正面(南から)

2段積みの切石が良く残っている。

▲B．同北辺部材検出状況(東から)

▼C．同部分(南東から)

土台には「板じゃくり」が施され、床板がはまり込む。

▶D．同東壁正面部分(西から)

▲A．建物10南西隅部分(北東から)

隅柱の脇に寄り添うように小さな柱状の部材が立つ。

▼B．同西辺土台と根太(南から)

▼C．同南壁部分(南から)

間柱・胴縁が内側に倒れ込んでいる。

◀D．同南東隅土台組み状況(南から)

土台は「相欠き継ぎ」で組まれ、直下には銭が1枚置かれていた。

PL.16

▶A．建物10北西隅掘り方(北東から)

掘り方は幅広く、隅から礎板状の板断片が数個検出された。

◀B．同南壁裏込め土層断面(東から)

▶C．同敷石面検出状況(西から)

中央に方形の柱穴が組まれている。

◀D．同東辺地覆石(南から)

土台を取りはずした状況。荷重により2～4cmほども沈下している。

▶A．建物10中央礎石(東から)

柱穴を組んでいる切石を取り除くと伊豆石の礎石が現れた。

◀B．同張り出し部(南から)

▶C．同土台上かわらけ出土状況(南から)

東辺土台直上に大皿が2個据えられていた。

◀D．同覆土下層遺物出土状況

PL.18

◀A．G３セクションベルト土層断面
（北から）

▶B．建物10敷石断ち割り状況
（西から）

◀C．同敷石下土層断面

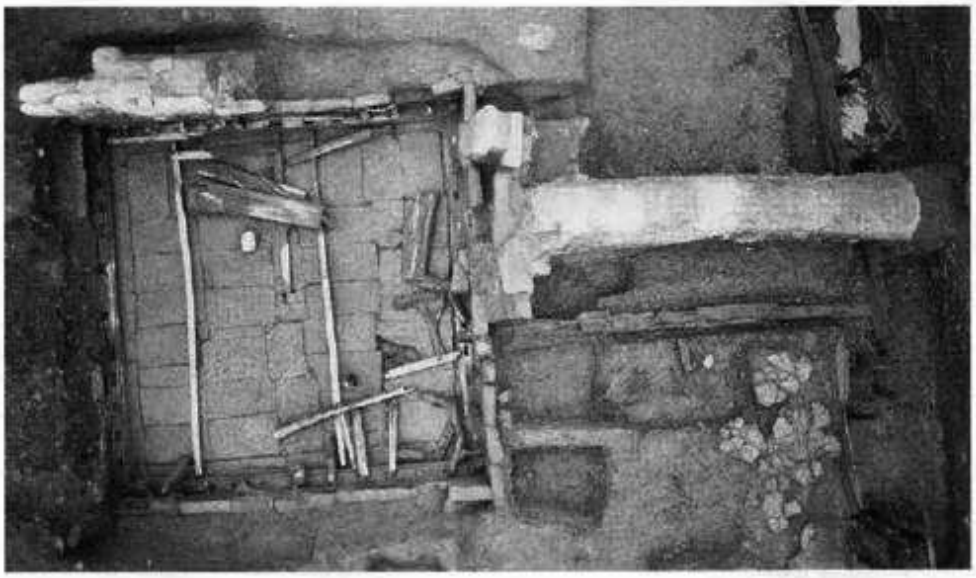
敷石の下には灰白色粗砂が敷かれていた。

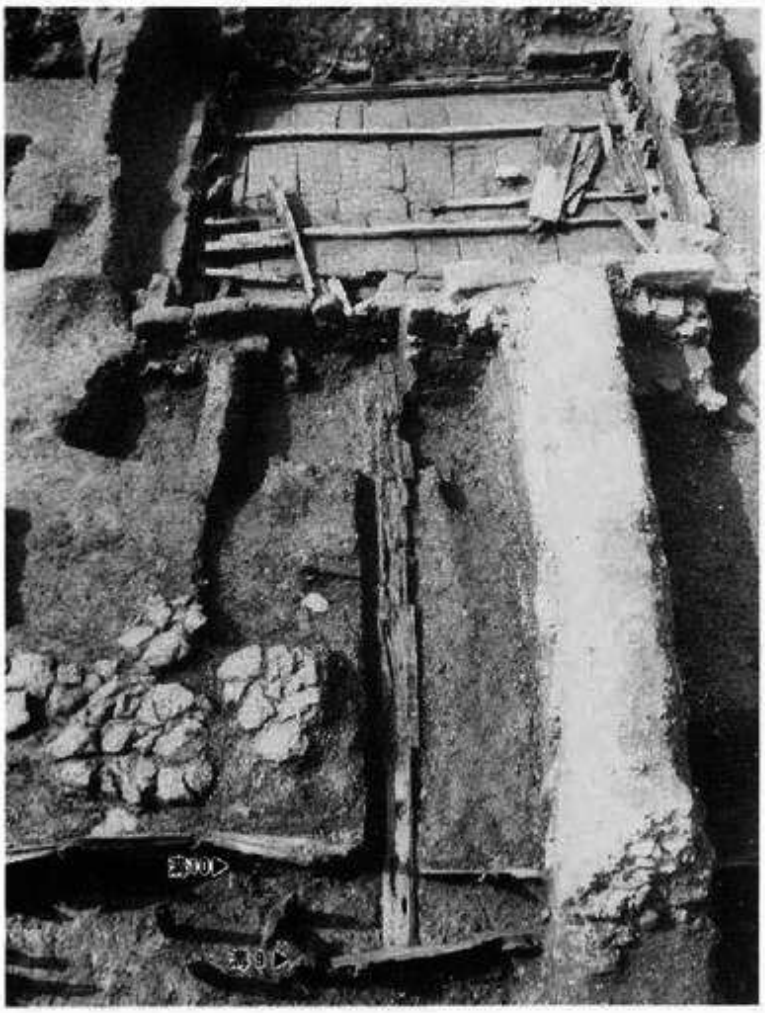
▲D．建物29・30

建物10直下からトレンチで確認。

◀E．建物30

A　建物10と木樋(空撮)





B．同上(東から)

木樋の長さは約4.5mである。

PL.20

▲A．建物10木樋(東から)

蓋を取りはずした状況。

▲B．建物10東壁付近(西から)

木樋取り付き部内側70cm程のところに不正形ピットが穿たれる。

▲C．同木樋出口部分(東から)

▶D．同木樋取り付き部(西から)

木樋直下の土台は方形に粗く削られている。

▶A．建物11(西から)

▼B．同南壁中央部分(北東から)

▼C．同南辺土台と礎石(北から)

◀D．同南西隅土台と礎石(東から)

PL.22

◀A．建物12(南から)

▼B．周羽目板検出状況(東から)

▼C．建物13・14(西から)

▶A．建物17(南から)

◀B．建物18(東から)

▶C．同覆土堆積状況(北から)

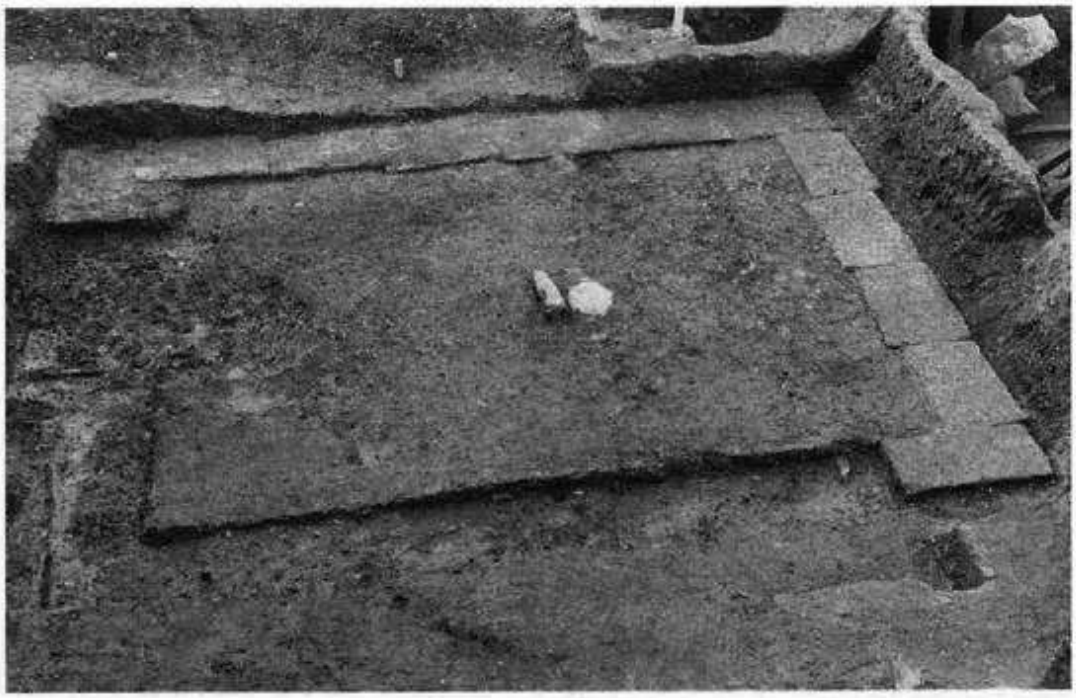
PL.24

▲A．建物20・21(西から)

▶B．建物20北壁切石倒覆状況
(西から)

◀C．周東壁正面(西から)

壁石は40cmほど土盛りした上に据まれている。



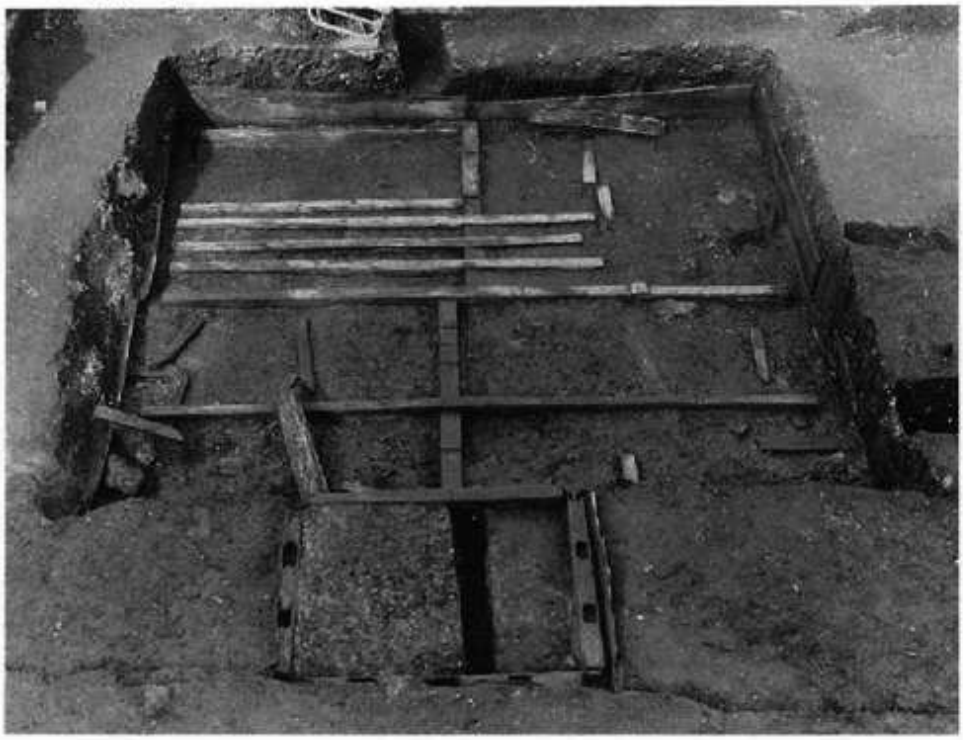
A．建物21(西から)

B．同中央礎石

PL.26

A．建物25ａ(西から)

B．同(南から)



▶A．建物25ａ覆土土層断面(東から)

土丹塊が多く投げ込まれている。

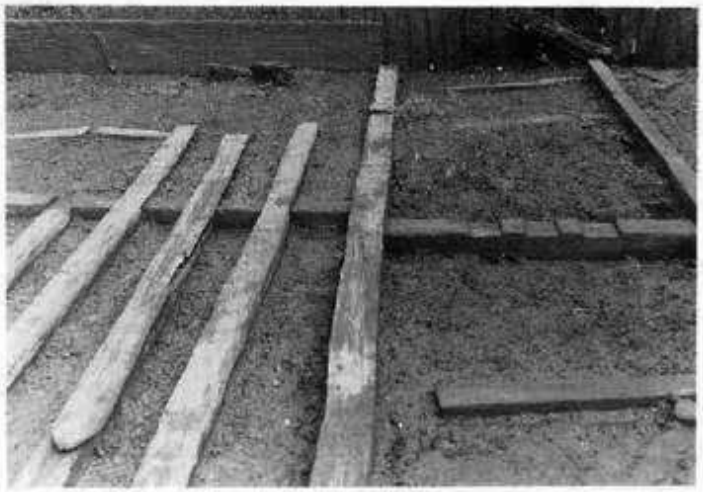
◀B．同部分(東から)

▶C．同南壁(北西から)

張り出し部には框(かまち)が残り、横羽目板は２段積みになっている。

◀D．同北壁(南西から)

PL.28



◀A．建物25ａ根太(西から)

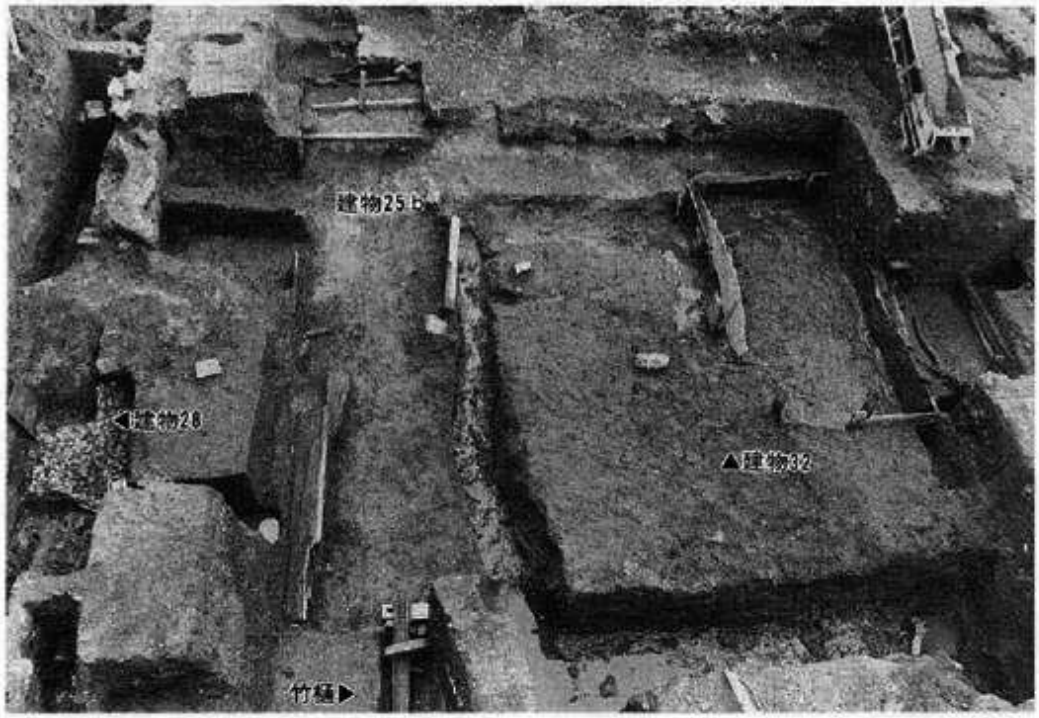
20～30cmほどの間隔で細かく根太が敷かれる。

▲B．同東壁部分(西から)

土台は抜き取られ遺存しない。

▼C．同大引・根太接続部分

▶D．同床面・刀子柄出土状況




A．建物25b・28・32(東から)

B．同上冠水状況(東から)

排水しなければほぼ一晩でこの状況。

PL.30

◀A．建物25ｂ竹樋(西から)

▼B．同入水口正面(西から)

▼C．同(北から)　右方が建物部分。

▶A．道路1上層(東から)

大きな土丹塊が密に敷かれている。

◀B．道路1下層(西から)

残りは悪く、土丹も細かい。

▼C．道路横断土層

PL.32

◀A．東側調査区北壁土層

丁度道路を縦断しており、かさ上げの状況が良くわかる。

▶B．同上全景

◀C．道路東端部分(東から)

道路は小町大路側溝に突き当たり、土留めがなされる。

▲A．切石列1（東から）

◀B．切石列2・土丹列1、2（西から）

▼C．切石列1（南から）

PL.34

◀A．溝5東端(東から)

▼B．同側板部分(北から)

▶C．溝7(北から)

▶A．溝7部分(東から)

北端部は石積みの状況が良好であった。

◀B．同(北から)

石積みの北端面(掘形部分)の状況。

▶C．同覆土断面(南から)

PL.36

◀A．溝9（南から）

肩部は土丹塊で構成される。

▼B．同（北から）

▼C．溝8部材（西から）

◀A．溝10(北から)

▼B．同部分(東から)

▼D．溝8～10(南から)

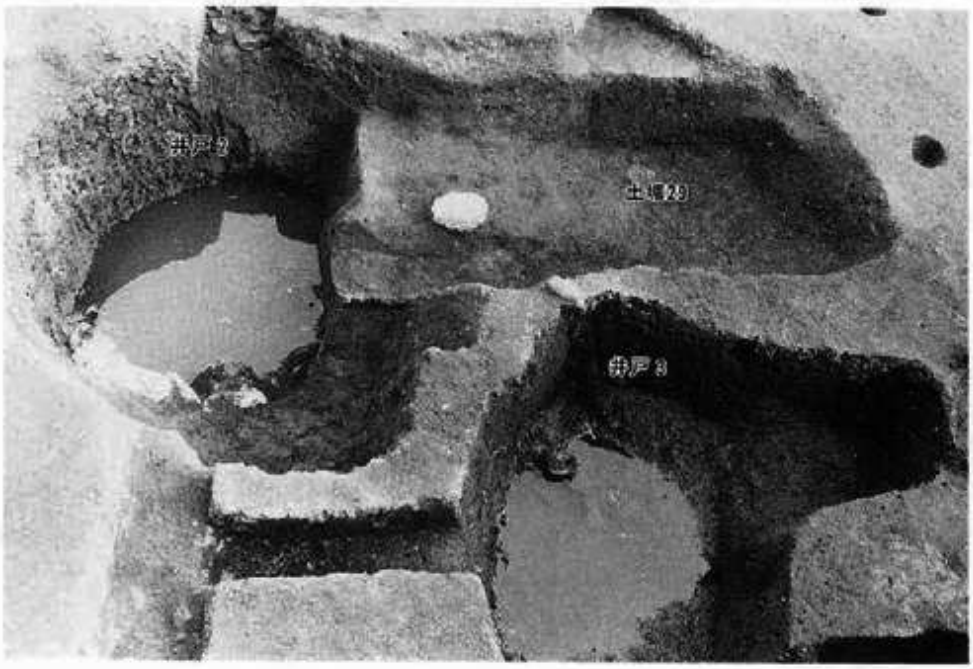
杭が乱立する状況。

▼C．同北端部分(東から)

PL.38

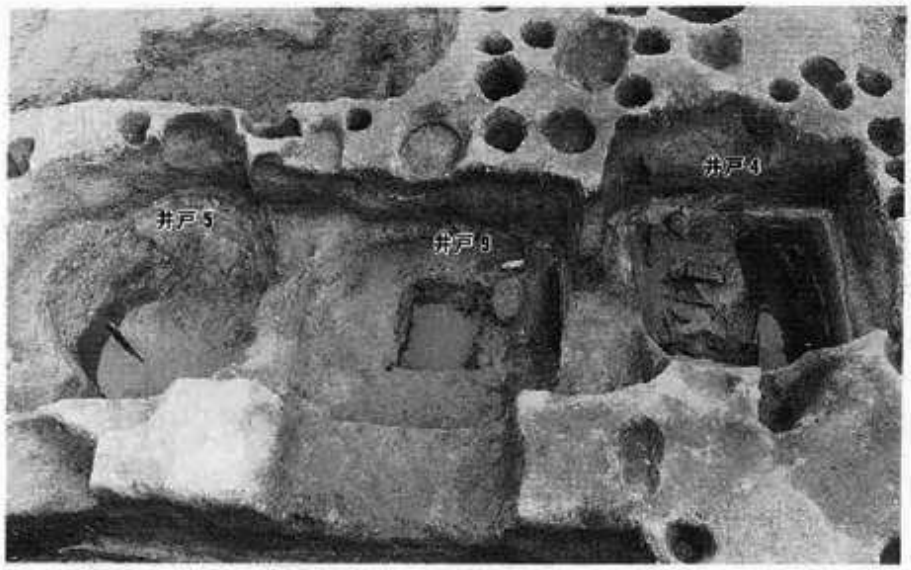
◀A．井戸1(西から)

◀B．同土層断面(東から)




◀C 井戸2・3・土壙29(西から)

▶A 井戸4・9・5(西から)



◀B．井戸7(西から)

▶C．井戸10(南から)

PL.48

◀A．井戸11(北から)

▶B．同部分(西から)

上層は丁寧に整形された
土丹で構成される。

◀C．同部分(西から)

下層は調整していない土丹と伊豆石を
粗く積み上げる。

▶A．土壙3（南から）

◀B．土壙29土層断面（東から）

▶C．土壙53（左）・58（西から）

◀D．埋甕土壙（北から）

PL.42

◀A．かわらけ溜まり1（北から）

▼B．かわらけ溜まり2（北から）

▲C．かわらけ溜まり3（東から）

▶D．同上出土資

◀A．合わせ口かわらけ

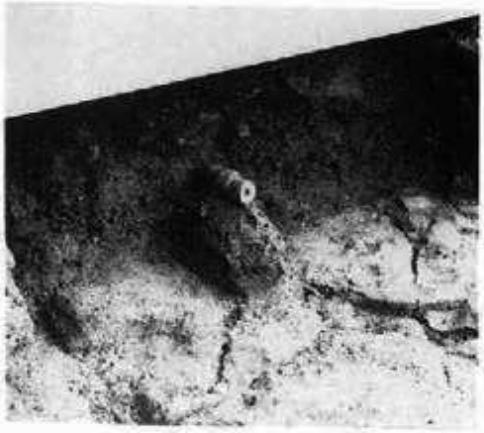
▶B．壺埋納遺構

◀C．同上

PL.44

◀A．G4トレンチ土層堆積（南から）
地山が東へ落ち込み、腐植土が堆積する。

▶B．道路1上層差銭出土状況



▲C．井戸7将棋駒出土状況

▶D．井戸10曲物出土状況

▶A．建物２硯出土状況

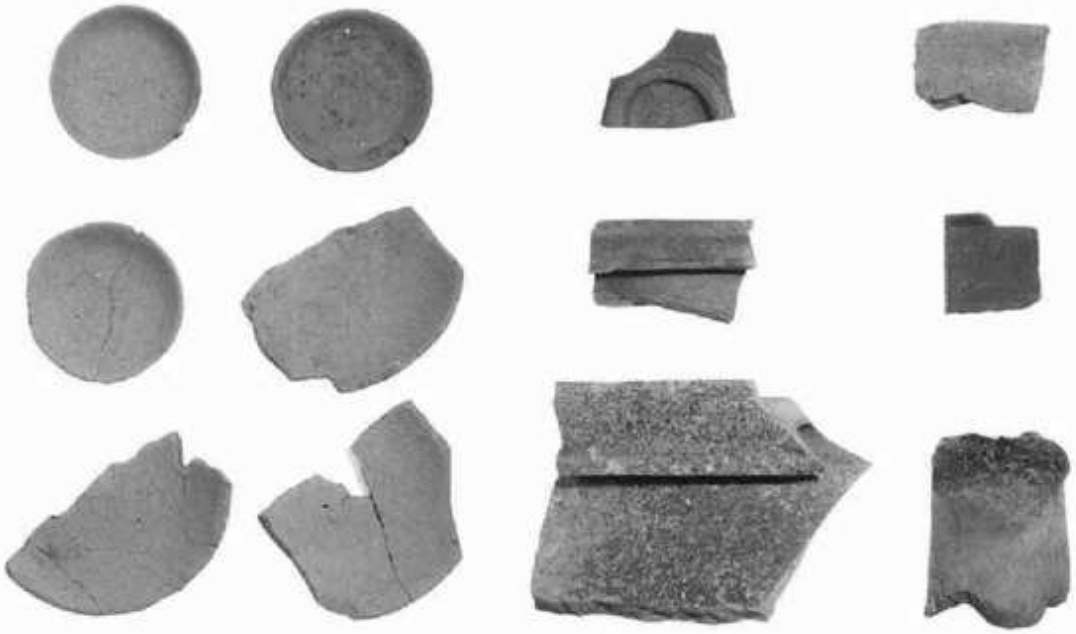
▲B．建物９櫛出土状況

▼C．建物25ｂ漆製品出土状況

▲D．建物25ｂ漆器出土状況

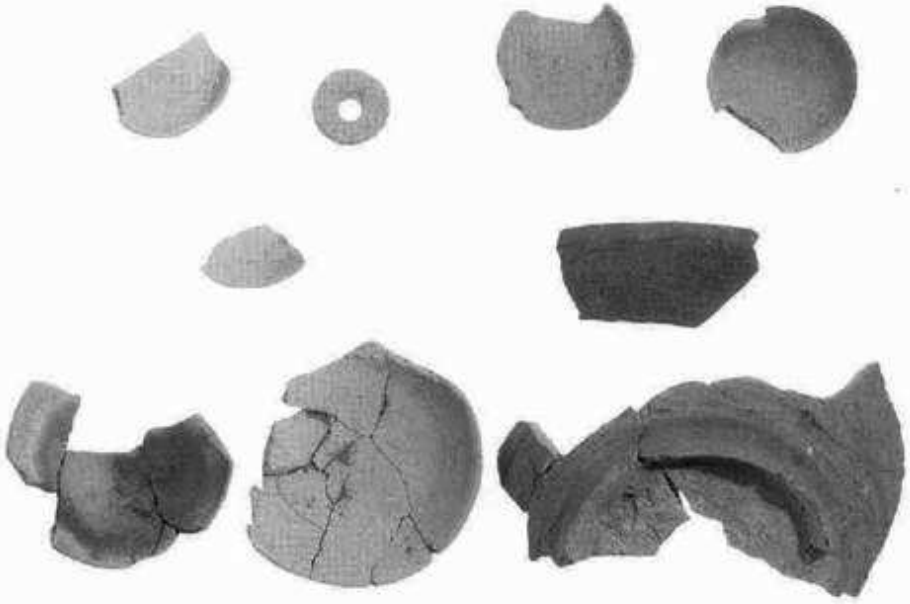
▼E．溝９漆器出土状況

PL.46



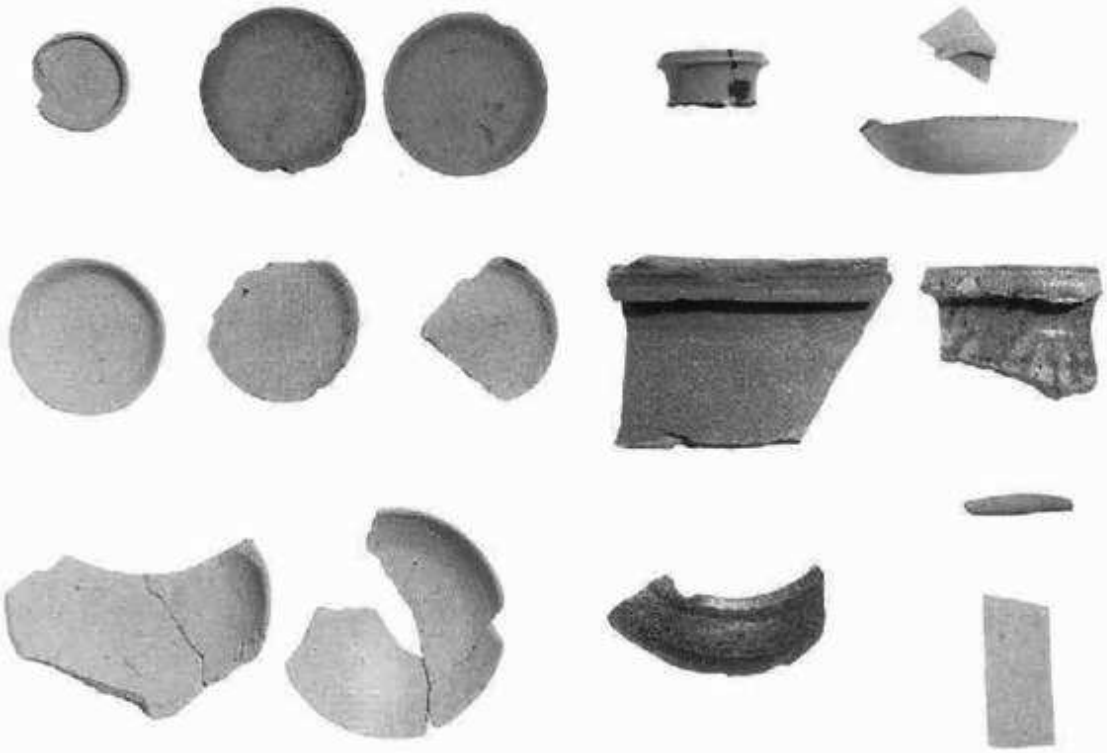
▲建物１ａ

▼建物１ｂ

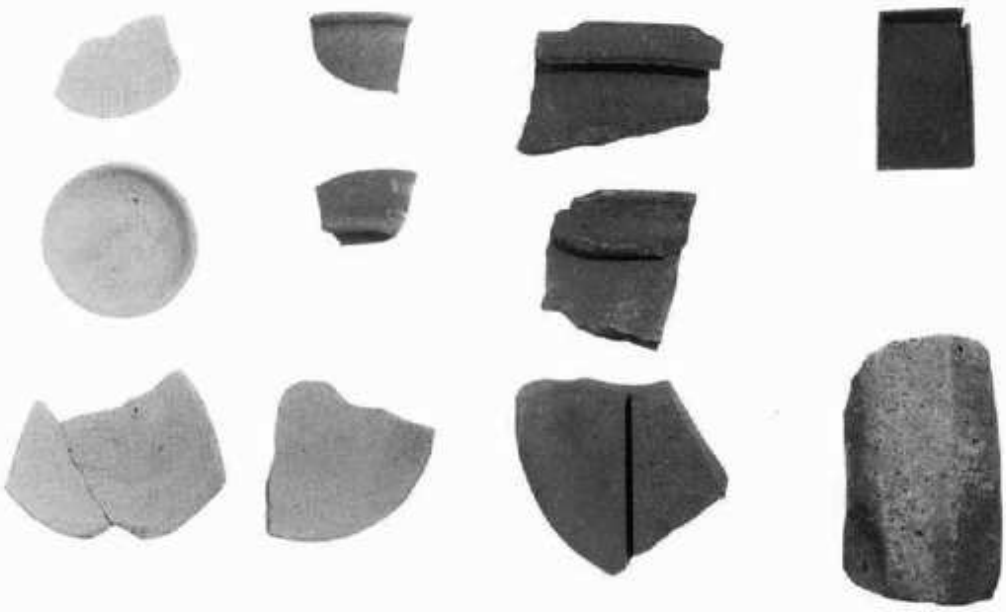


▲建物1 c

▼建物1 d

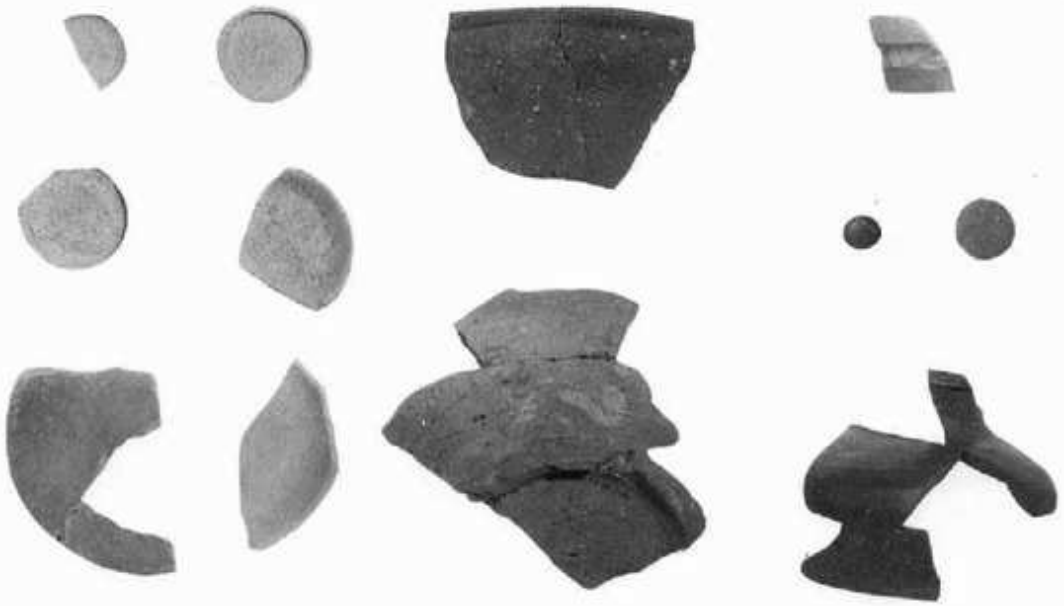


PL.48



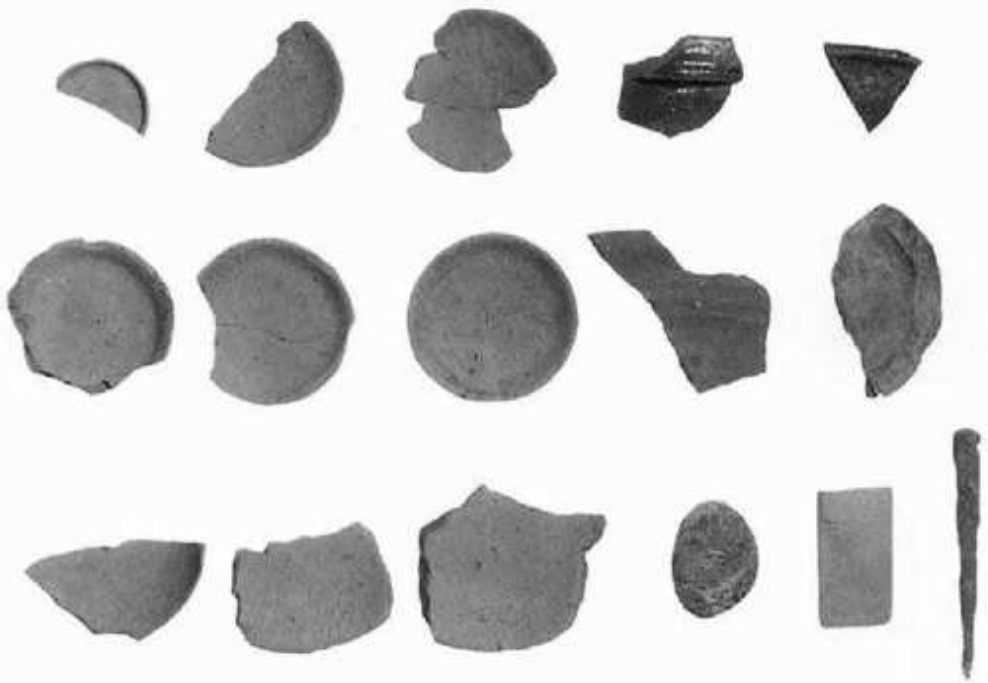
▲建物 2

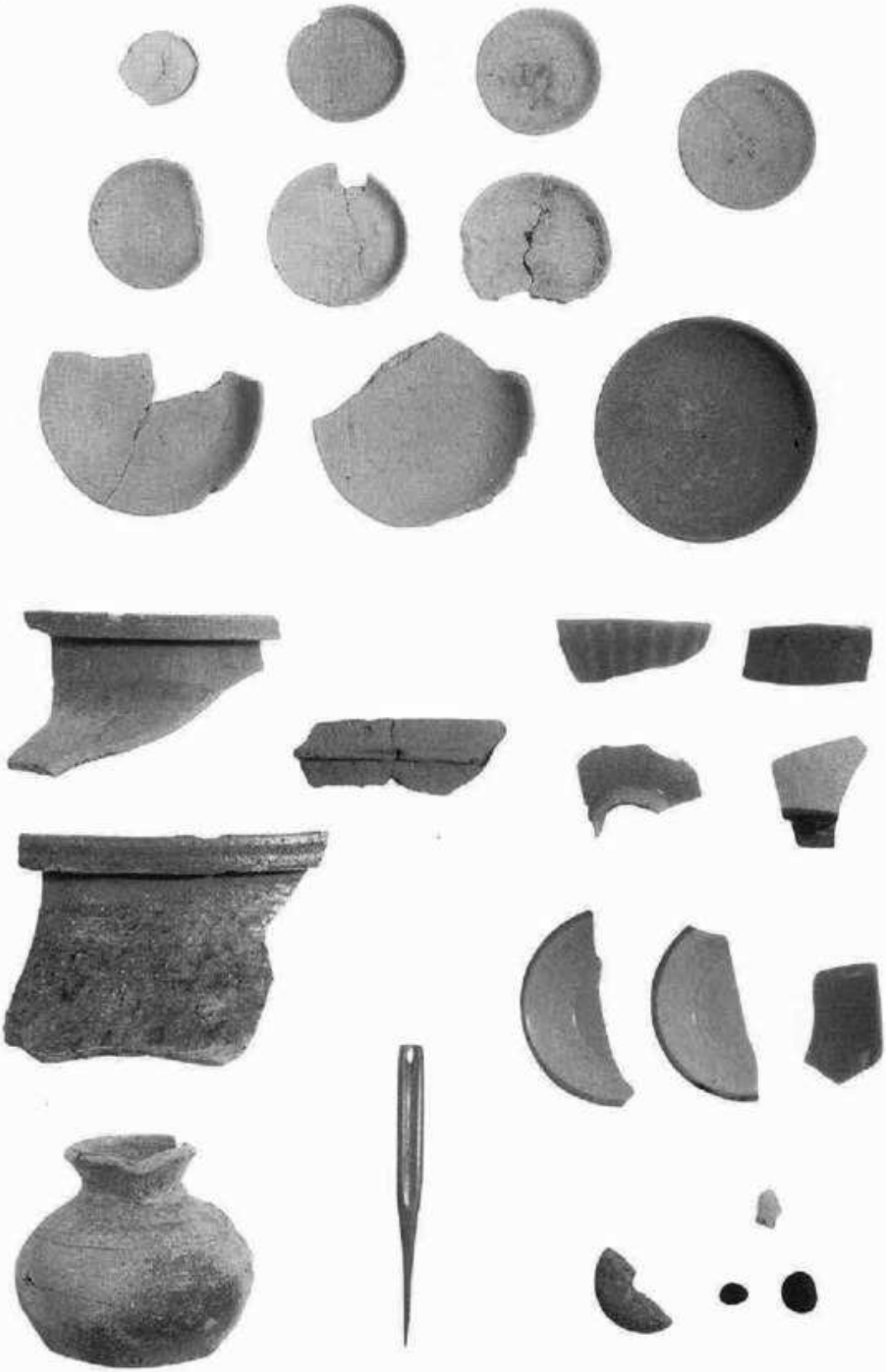
▼建物 5



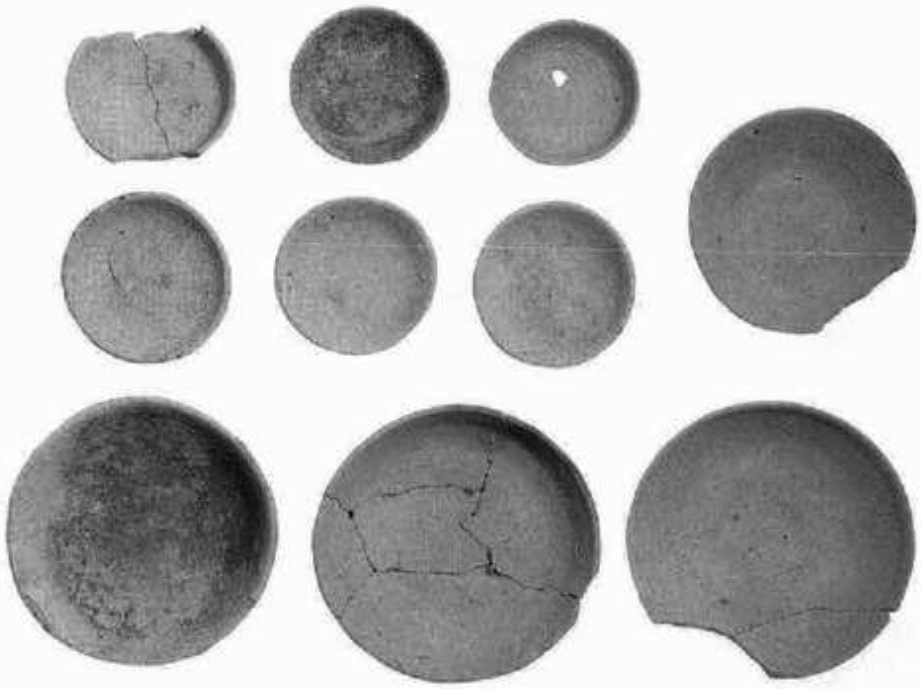
▲建物8 a

▼建物8 b





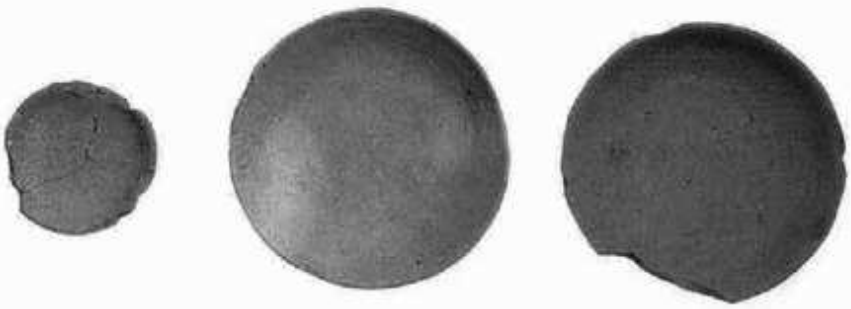
建物 9



▲覆土

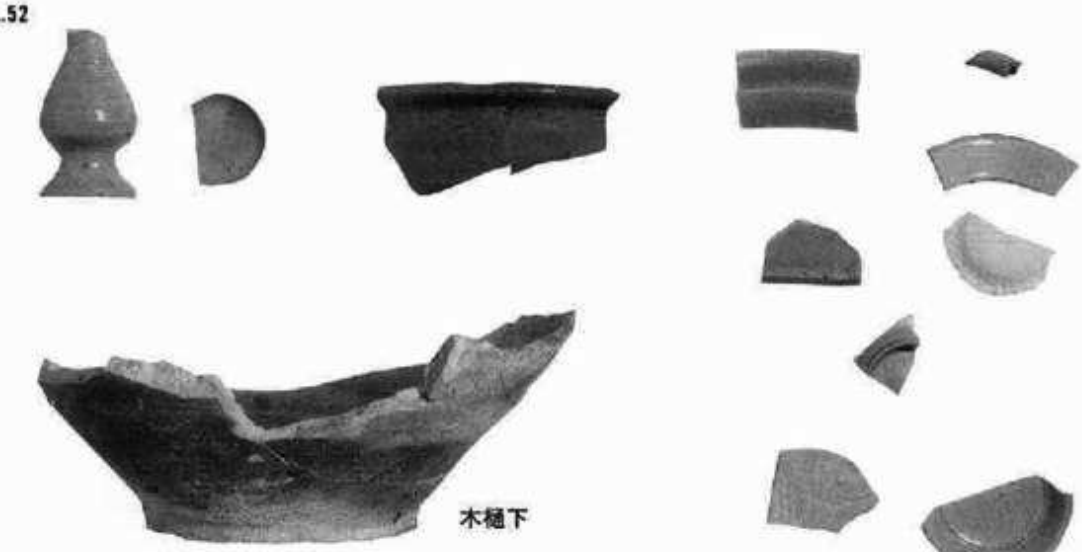
▲石敷面上

▼土台直上



建物10

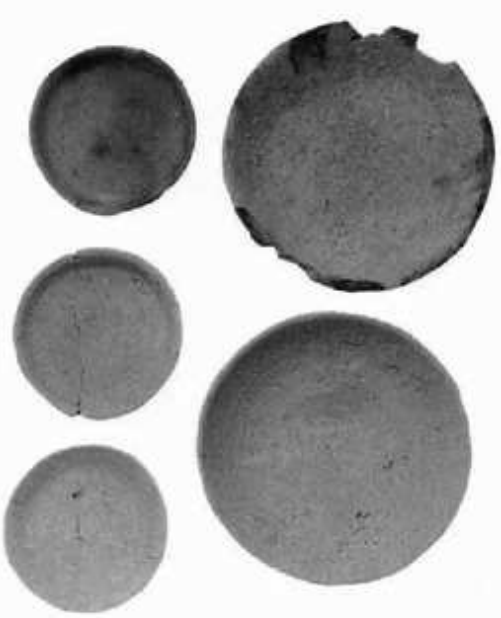
PL.52



木樋下

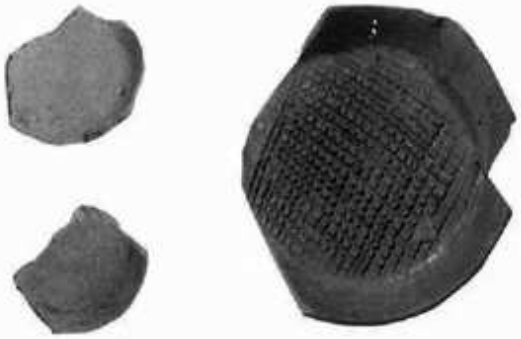
▲建物10

▼建物11



▲建物12

▼建物17



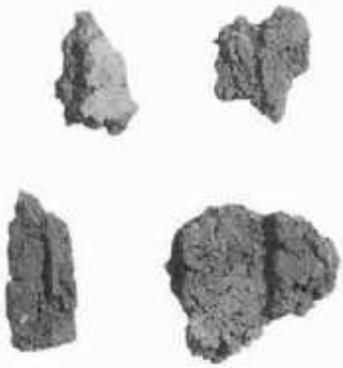
▲建物18

▼建物19

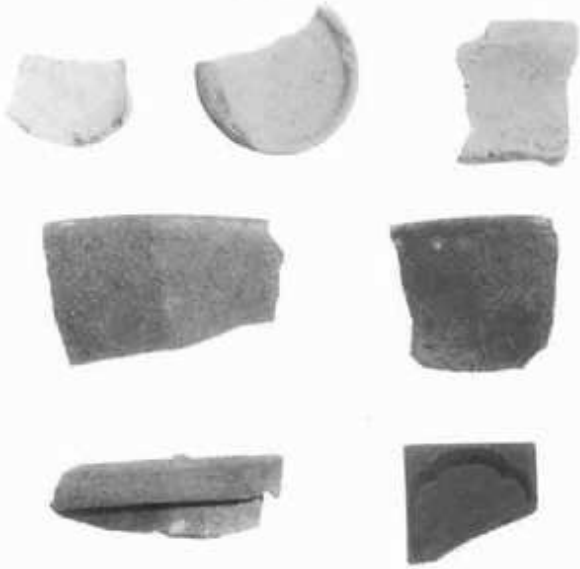
PL.54

建物20▶

▼建物20出土壁土



▼建物21

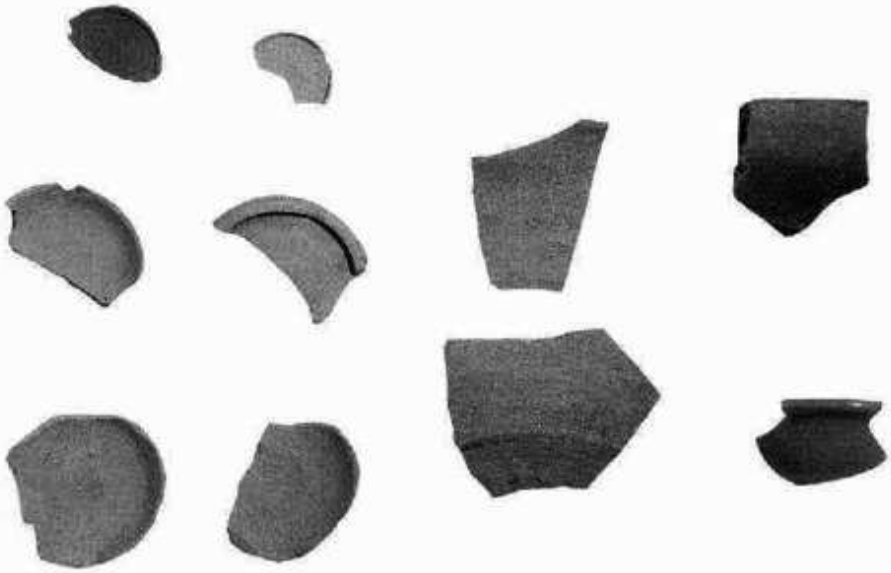


▲建物23

▲建物24

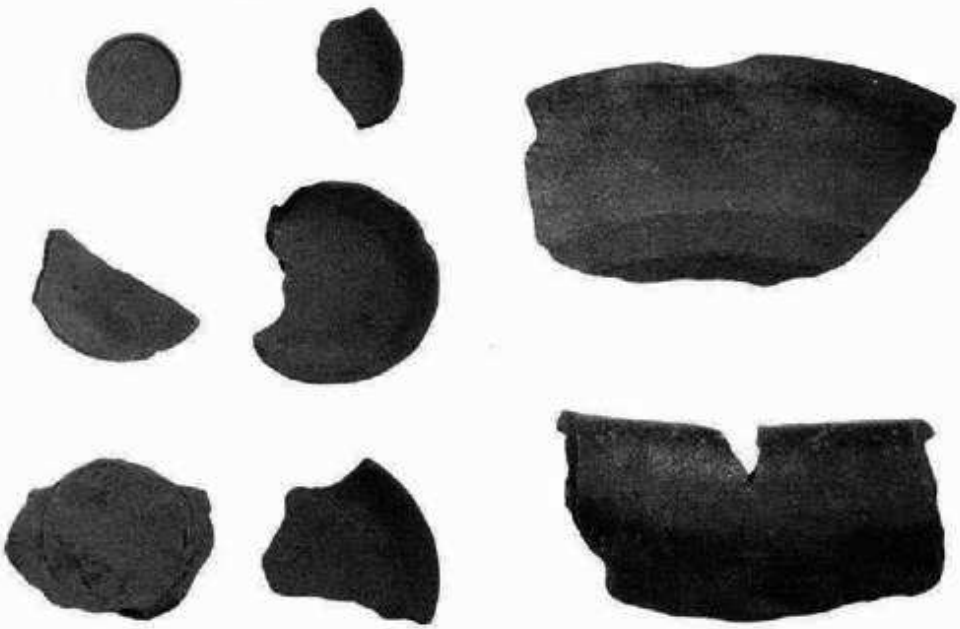
▼建物25 a

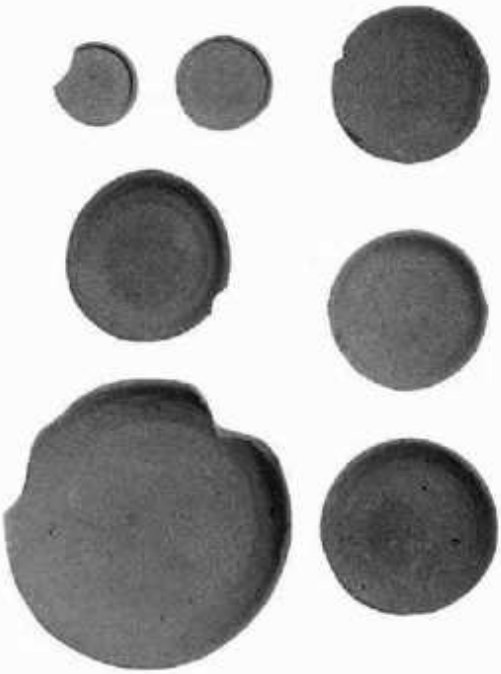
PL.56



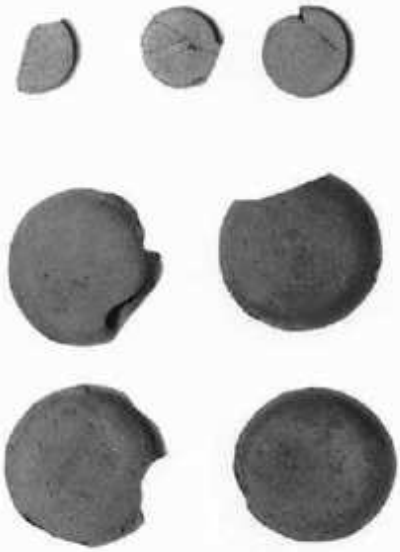
▲建物25 b

▼建物27





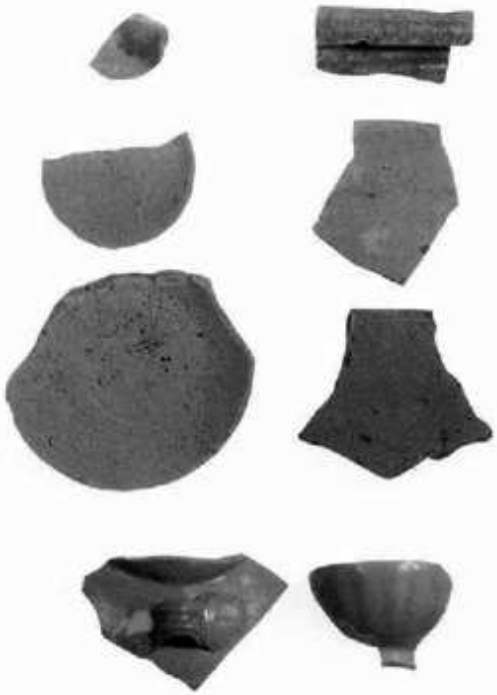
▲建物29



▲建物29・30

▼建物28

▼建物32



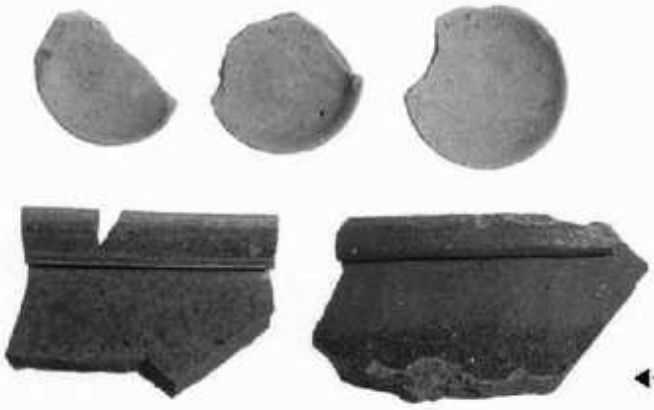
PL.58

▲道路 1 上層

▼側溝 2

▼道路 1 下層 1

▼道路 1 下層 2



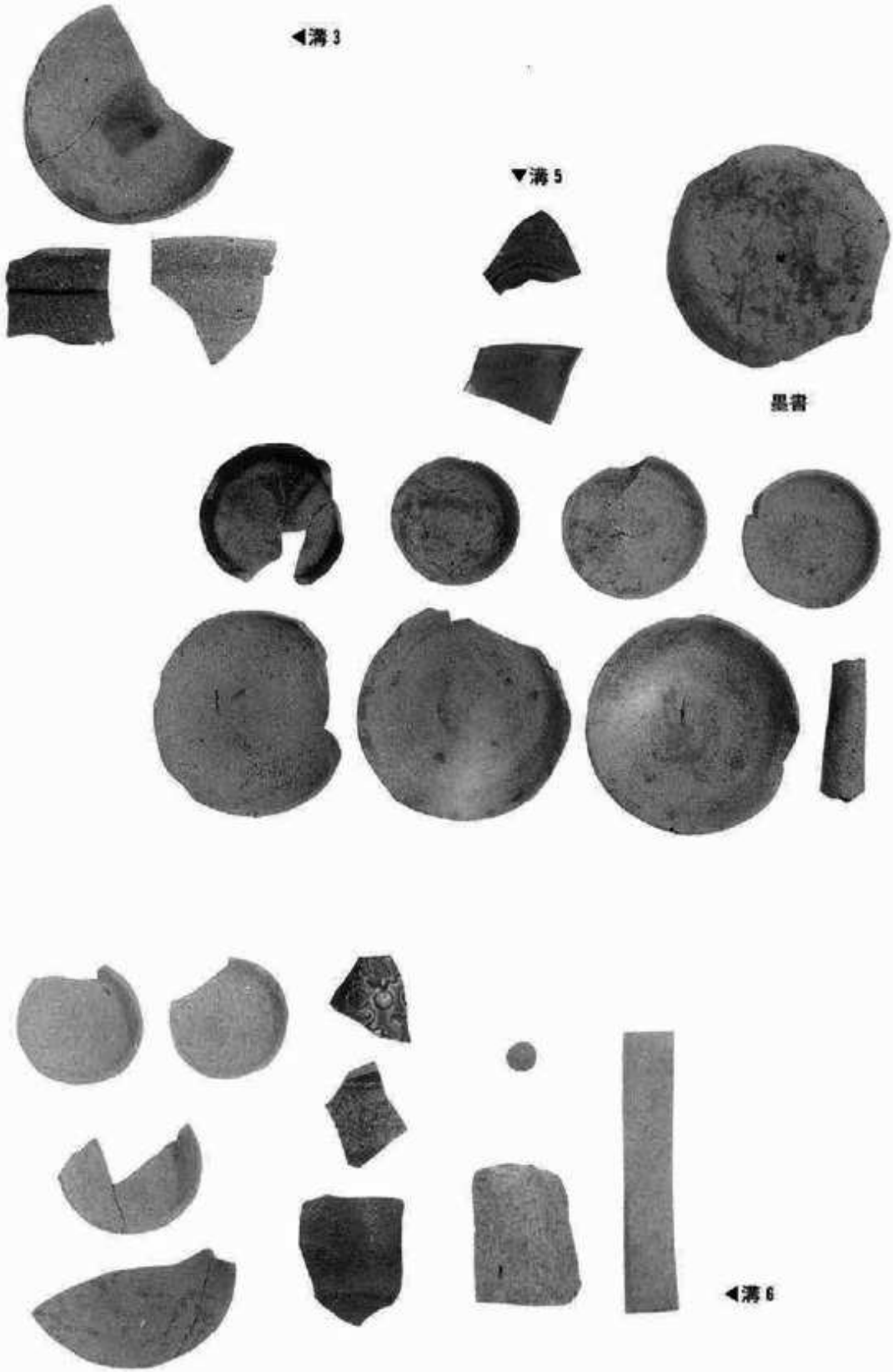
◀切石列 1

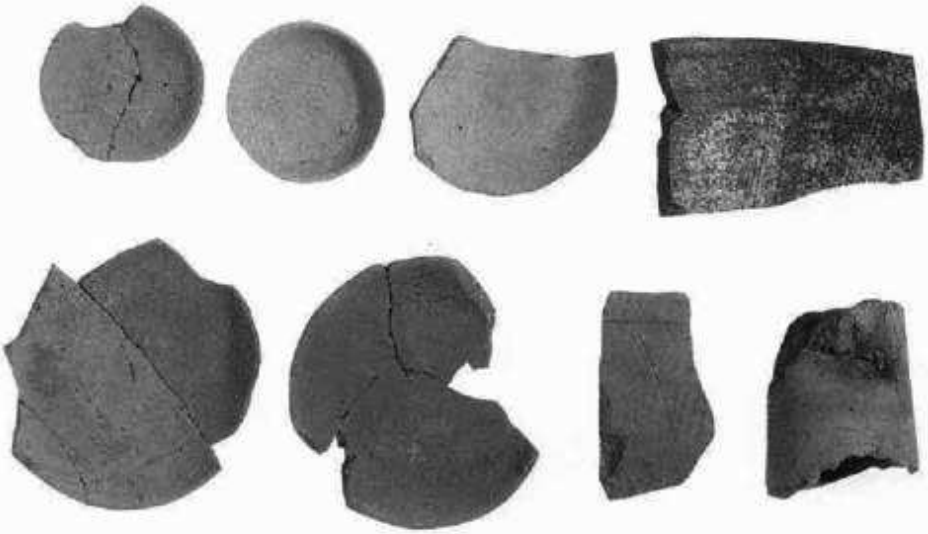
▼切石列 2

▼土丹列 1

▼土丹列 2

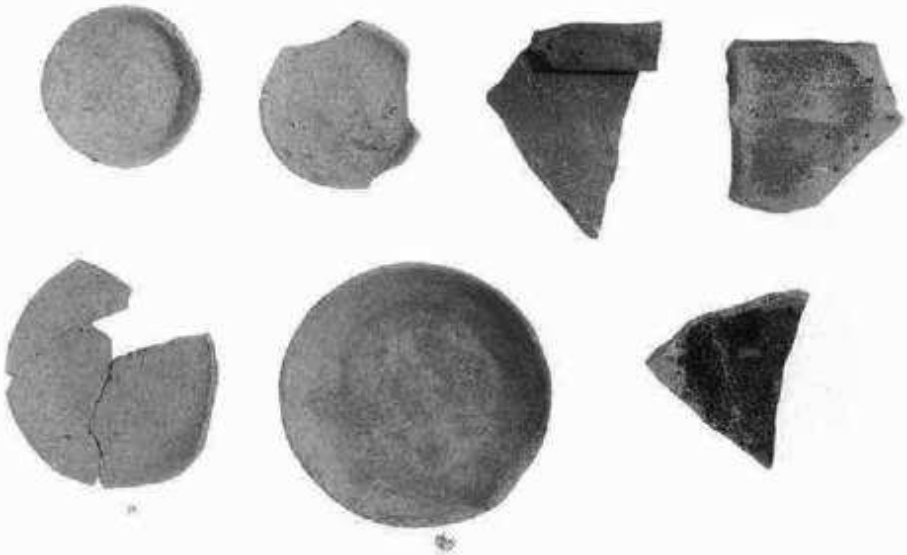
PL.60



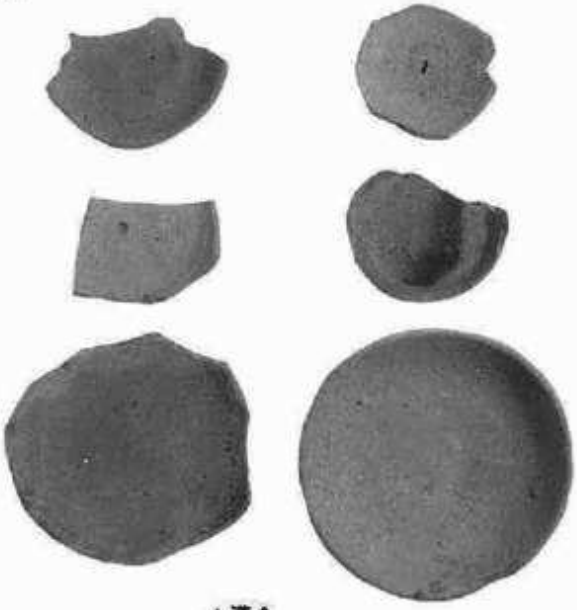


▲溝 7 上層

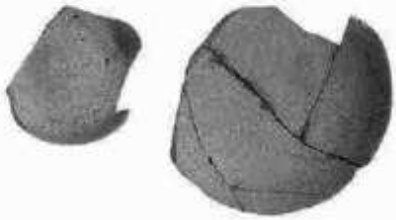
▼同下層



PL.62

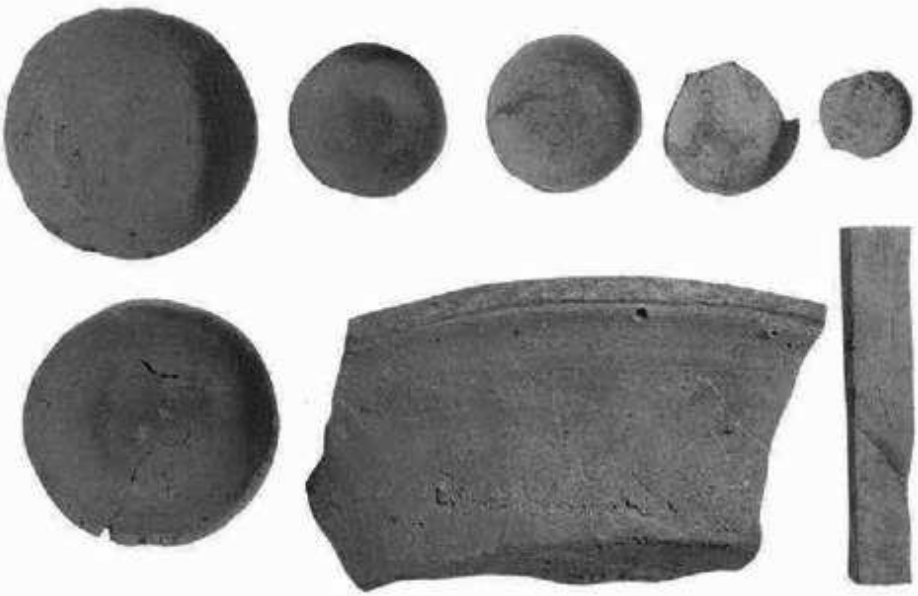


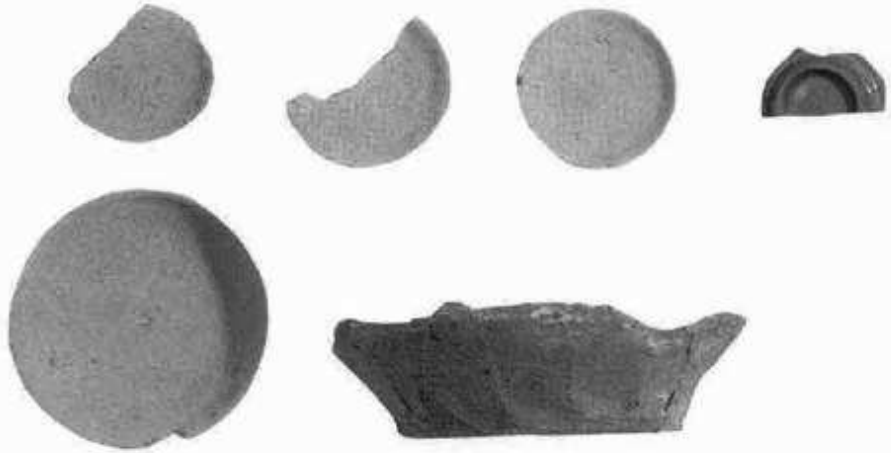
▲溝 9



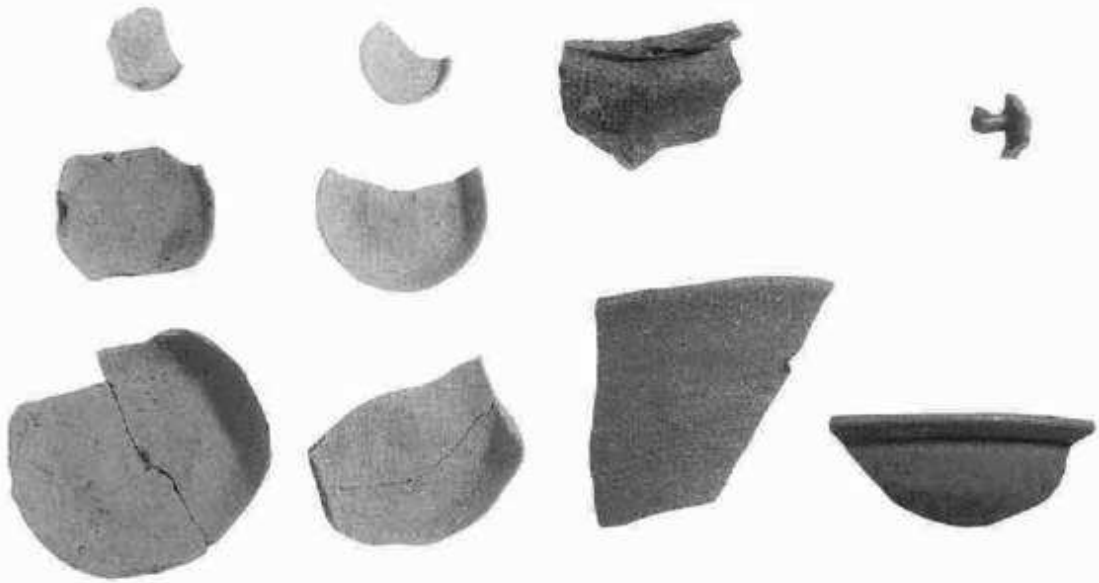
▼溝10

▼溝 8 ～10





▲井戸 1



▲井戸 2

▼井戸 3

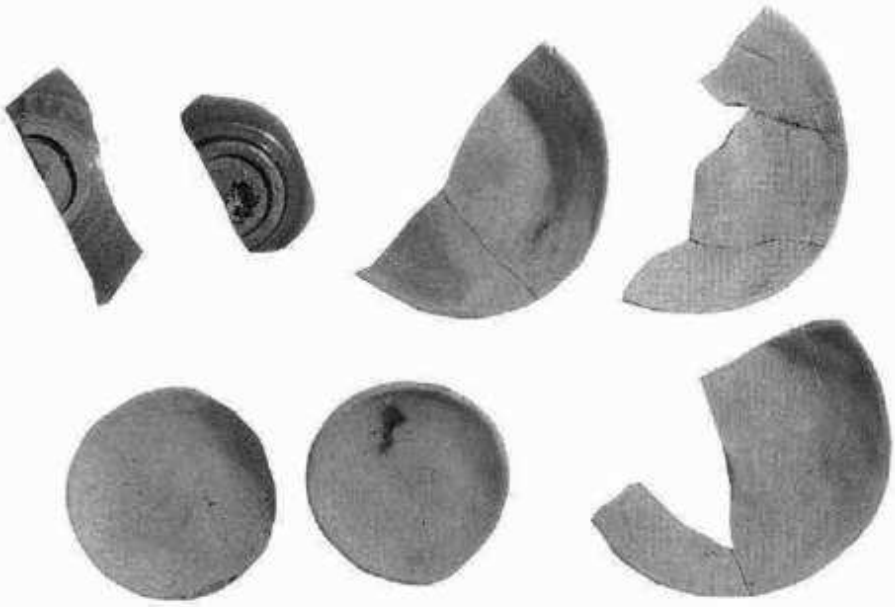
PL.64

▲井戸 4

▲井戸 5

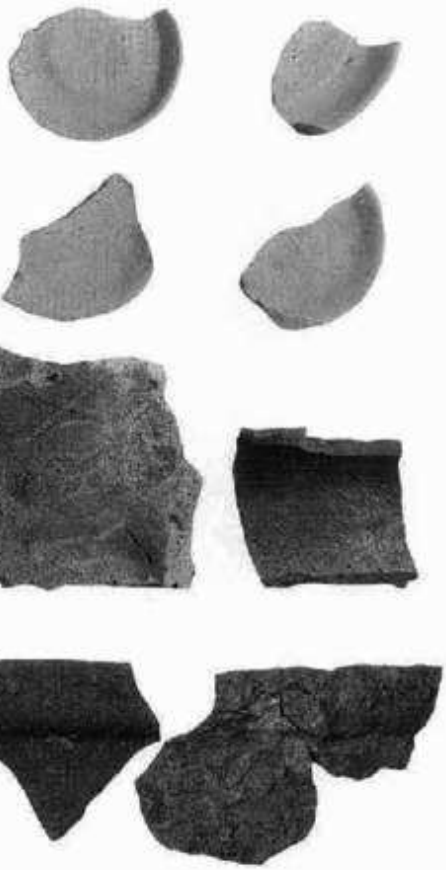
▼井戸 9

▲井戸 7

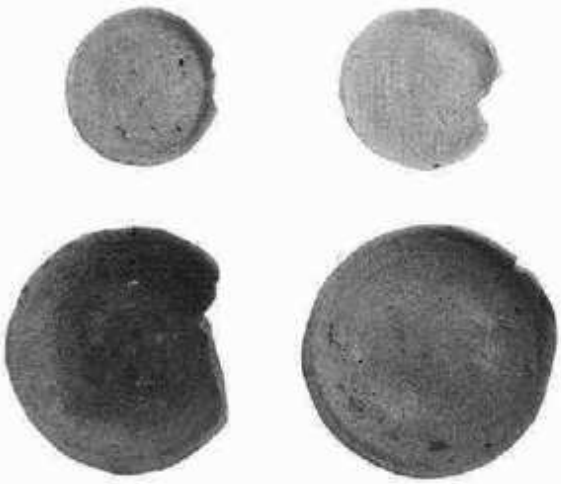


▲井戸 8

▼井戸状遺構

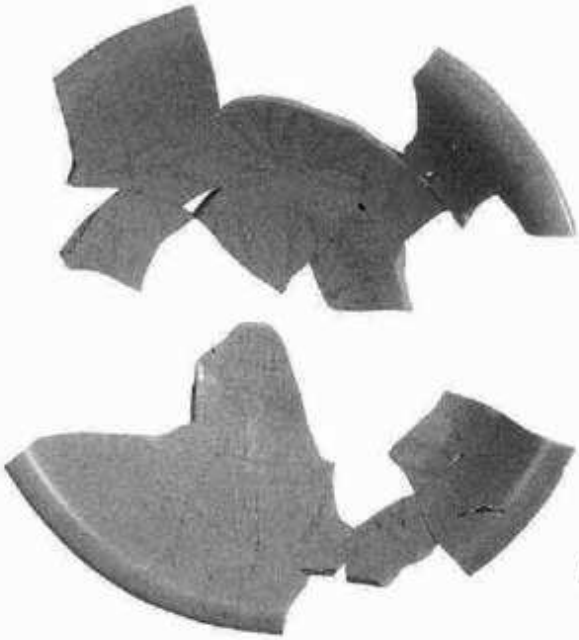


▼井戸10

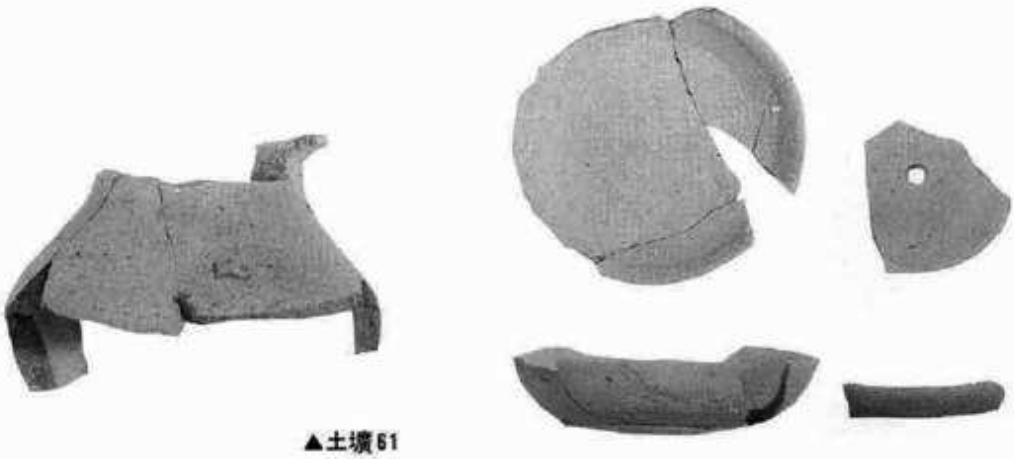


PL.66

井戸11



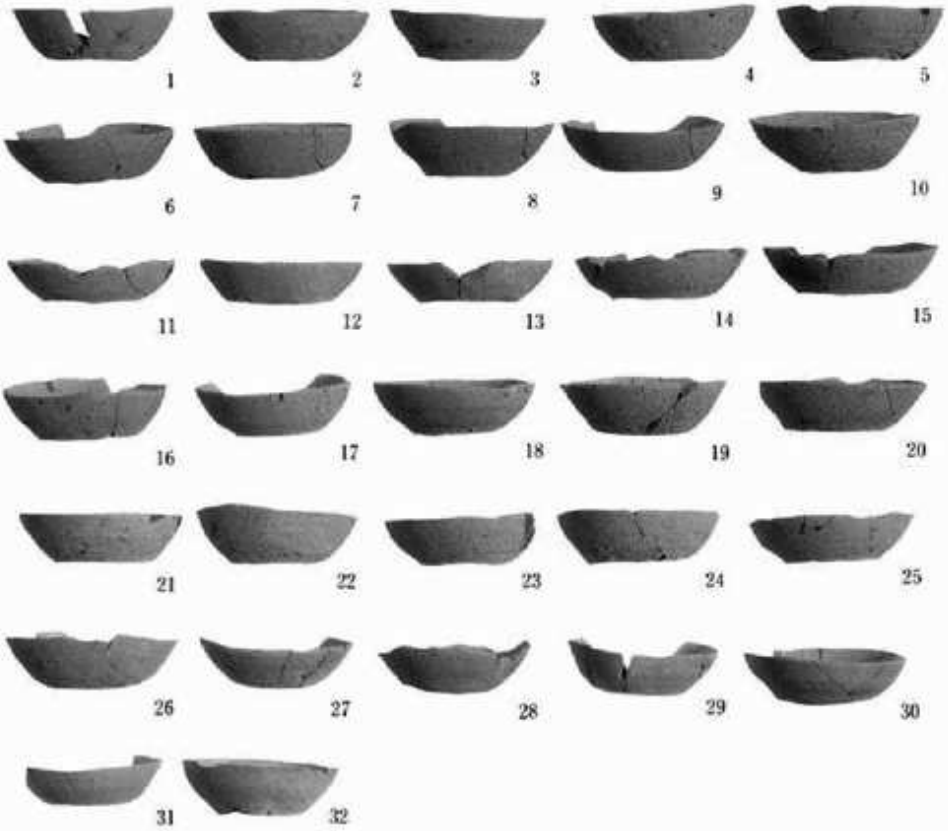
▶土壙1



▲土壙61

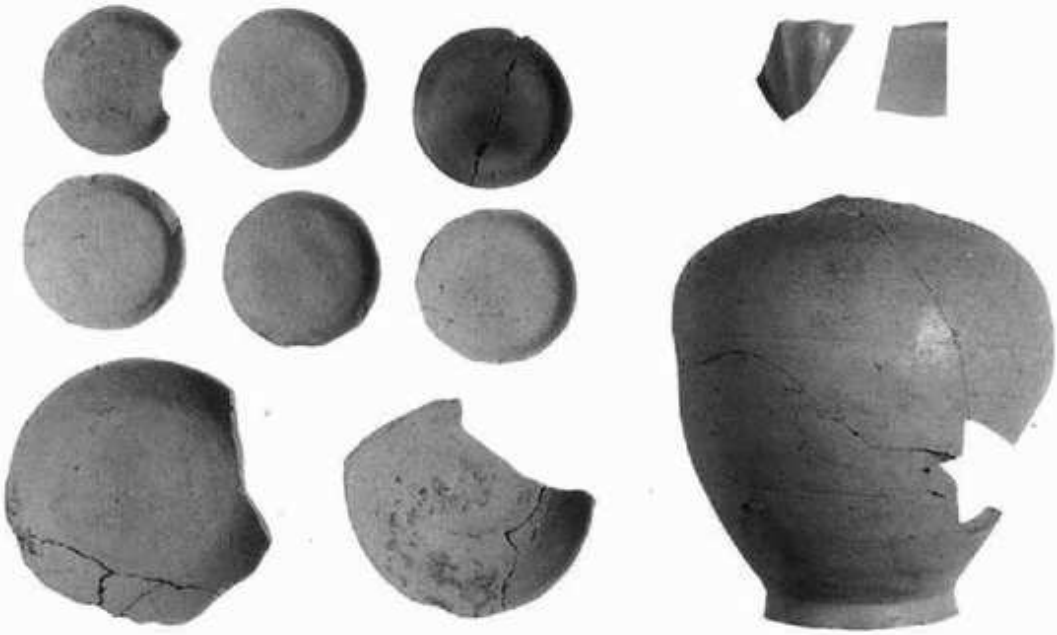
◀埋甕土壙

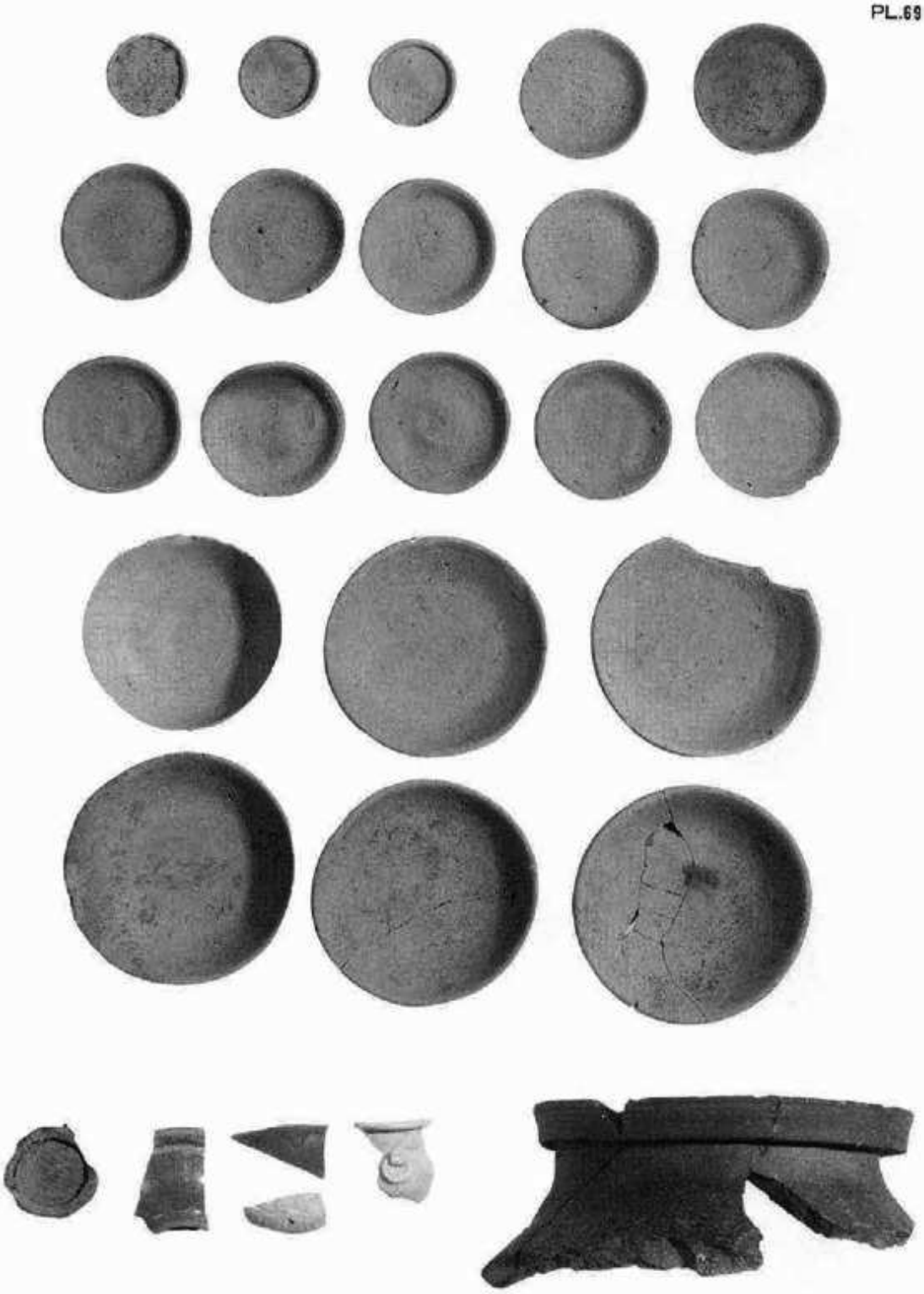
PL.68




▲かわらけ溜まり1

▼かわらけ溜まり2





かわらけ溜まり 3

PL.70

◀壺埋納遺構

▼遺構外出土遺物

▲G4トレンチ下層

▲合わせ口かわらけ

鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書　10
平成５年度　発掘調査報告(第３分冊)
発行日　平成６年３月
編集
発行　鎌倉市教育委員会
印刷　中川印刷株式会社